

フェアリーテイル 月の
歌姫

thikuru

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、月の魔力を持った少女と仲間達の物語…

少女は誓う…

約束を果たす為…命をかけ、彼らの愛した子供を守る事を…

愛した友との約束を果たす為…少女は、動き出す…

(最終的にナツ落ちと致しますのでナツとの絡みが多めです)

目次

番外篇

番外篇 その1 お見舞い | 1

番外篇 その2 バレンタイン

11

序章

プロローグ | 24

オリ主 設定 | 33

第1章 鉄の森篇

1話 帰還と妖精女王からの誘い

37

2話 列車の中で | 46

3話 列車に揺られ火竜は逝く…

59

4話 死神現る | 72

5話 100VS2 | 89

6話 死神、歌姫攫う | 106

7話 歌姫奪還 | 121

8話 悪魔現る 聖なる剣 | 135

9話 ナツVSエルザそして

157

第2章 悪魔の島篇

10話 S級魔導士とSS級魔導士

175

11話 VSデーモン・リバイブ

191

1 2 話 特別依頼 終了 | 205

1 3 話 悪魔の島へ | 225

1 4 話 グレイの決断とシクルの言葉

243

1 5 話 デリオラ復活 グレイの涙

259

1 6 話 島の真実 | 281

第3章 幽鬼の支配者篇

1 7 話 奇襲 怒れる妖精 | 301

1 8 話 妖精VS幽鬼 始まり

318

1 9 話 妖精VS幽鬼 倒れる歌姫

339

2 0 話 妖精VS幽鬼 妖精 反撃開

始 | 357

2 1 話 妖精VS幽鬼 歌姫降臨

374

2 2 話 妖精VS幽鬼 妖精の法律

396

2 3 話 聖十大魔道の称号 | 414

第4章 楽園の塔篇

2 4 話 星霊王とシクル | 434

2 5 話 出発!あかねリゾートへ!

452

2 6 話 嵐の予感 | 468

2 7 話 攫われるエルザ 楽園の塔

45話 星霊を想う心 | 821

46話 闇に染まりし男 | 840

47話 ブレイン 撃破 | 857

48話 ニルヴァーナ、発射 | 872

49話 ニルヴァーナ、崩壊 | 889

50話 別れ | 911

51話 新しい仲間と共に……

930

第7章 日常篇

52話 ようこそ！ 妖精の尻尾へ！

53話 懐かしい再会 | 949

54話 約束の日 | 981

55話 アトスの告白そして……

994

56話 氷の魔法 瞬間氷結《アブソ

リユート・ゼロ》 | 1013

57話 雷竜との再会 | 1026

58話 一人で抱えるなよ？ | 1045

59話 虹の桜 | 1063

60話 俺が……守るからっ!!

1080

第8章 エドラス篇

61話 もう1人の最強、帰還

1101

62話 白き竜との邂逅 | 1121

	6 3 話	1 日限定の修行と予感	
	1139		
	6 4 話	もう一つの世界 エドラスへ	
!	—	—	
	6 5 話	王都到着!	
	6 6 話	作戦前日	
	6 7 話	衝撃的な事実	
	6 8 話	エクスタリアからの逃走	
1238			
	6 9 話	飛べ! 友の元へ!!	
	7 0 話	今……行くから!	
	7 1 話	黒いシクル	
1296			
1283			
1253			
			1221120211811162

番外篇

番外篇 その1 お見舞い

楽園の塔の事件が終わり、シクルが目覚めてから3日……

現在、シクルはルージュと共にスーパーで買い物をしていた。

「えっと……お米と卵と……お塩におだしの素……それからお魚と……あと………何がいいかな？」

カゴの中身を確認し、頭に乗るルージュへと問いかけるシクル。

「果物はどうう？リンゴとか……？」

「果物……そうね、じゃあルージュの言ったリンゴにしよっか」

そう言い、果物売り場へ行くとリンゴを一つカゴに入れる。

「これくらいでいいかな？」

「いいと思うよお？」

再びカゴの中身を確認してから、「よし、じゃあお会計に行こう！」と笑顔でルージュ

に告げ、レジへと向かう。

「合計で1070Jになります」

「はいえつと…あ、はい、これで」

「1070J、丁度ですね。ありがとうございます」

お会計を終え、買ったものを袋に詰めるとスーパーを出て、さあーと…とルージユを見上げる。

「行こっか…寝込んでる彼のところに」

「あい!!」

ルージユの返事に、クスリと微笑みながら「彼」の家へと歩き出す。

街を抜け、森の奥へとやって来たシクル。

森の奥にある開けた土地に立つ少し変わった家の前に立つと、その扉をノックする。

「ハッピー? 私、シクルだよ。開ける?」

シクルの来た場所、ここはナツの家だった。

普段ならば、この家主のナツを呼ぶが今現在、彼が動けないことを知っているシクルはその相棒のハッピーを呼びかけた。

ノックしてから十数秒、扉がガチャと音を出し、開く。

「いらつしやい、シクル!! ルージュ!!」

中からは、満面の笑みを見せるハツピーが出てきた。

「ハツピーこんにちわあ!」

「ハツピー、こんにちわ!…ナツは?」

シクルの問いかけに笑顔を見せていた顔が暗くなる。

「ナツは…まだ寝てるよ」

ハツピーのその様子にまだ調子が良くないのだな…と、そう思い「入るよ?」とハツピーに告げ、家の中へと入る。

買い物袋を台所に置き、奥の寝室へと入る。

コンコンツ

「ナツ? 私、シクルだよ。………入るよ?」

返事は来ないがまあいいか…と中へ入ると…予想と変わらず、やはりナツはベッドの上で、寝込み、小さな呻き声をあげていた。

「ありや…やつぱ、副作用か…大丈夫?」

寝込むナツの横へと腰掛けその顔を覗き込み声を掛けるもナツは呻くだけで目は開かない。

「んー…辛そうだな」

少し汗の滲んでいる額を持っていたハンカチで拭う。

「……………あなたも…大概無茶するね…」

呆れの混じるため息をつきながらナツを見下ろすシクル。

「たまに目が覚めるんだよー」

「今は寝てるねえ」

いつの間にか寝室へと入ってきたハッピーとルージユを少し振り返り、再びナツへと視線を向ける。

「……………ナツ…」

ぼそりとナツの名を呼び、その頭をゆっくりと撫でるシクル。

すると……………

「…ん……………シ…シクル？」

ナツが目を覚ました。

「あ…ごめんね？起こしちゃった？」

頭を撫でていた手を引っ込め、首を傾げ問いかけるシクルに「あ…と口にするナツ。

「大丈夫だ…それより、なんで…ここに？」

今度はナツからの質問がありシクルはクスツと微笑み言う。

「お見舞いだよ。それと、最近寝込んでご飯が食べれてないってハッピーから知らせがあつてね…」

シクルは最後に、ナツの頭を撫でると立ち上がり…

「じゃ……私、ちよつと向こうで色々作ってるから…何かあつたら呼んでね？」

と、ハッピーとルージユに告げた。

シクルのその言葉に「「あーい！」」と、元気な声で返事をする2匹に、元気いなあとシクルは笑みを浮かべながら、台所へと向かった。

「さてと……じゃあ早速やりますか！」

持参したエプロンを着用し、調理開始するシクル。

と言つても、寝込みあまり食事も最近まともに取れていなかったナツとお魚大好きなハッピーに作る料理なのであまり手間のかかるものではないが………と、シクルは考えながら鍋に水を入れる。

シクルが作ったのは卵の入ったフワフワなお粥と、ハッピーには本人（猫）希望で生の魚そのまま。

ただ、何か菌がついてると危ないと思い、しつかり下ごしらえはしてある。

そしてシクルは自宅から持ってきた茶葉とレモンを取り出す。

茶葉の種類は「アールグレイ」だ。

ベルガモット風味のアールグレイにアクセントとして、また疲労した身体を癒す効果もあるレモンを少し入れる。

「よし・あとは……ウサギさんにしよつと」

最後に、ルージュの希望で選んだリングを可愛いウサギの形に切るとお盆に乗せ、寝室へと戻る。

寝室へと入ると出る前は横になっていた身体を起こしているナツがいた。

「あれ？寝てて良かったのに……もしかして、ずっと起きてたの？」

「いあ……さっきまで寝てた……いい匂い、したからよ……」

ナツの答えに「そっか……」と笑みを浮かべ、頷くとベッド横のテーブルにお盆を置くと、そつと腰掛けるシクル。

そして、一緒に持ってきた魚をハッピーに渡し、多めに作っておいた卵粥を少し取り分け、ルージュへと渡すと……

「……………おい？シクル……」

目の前にあるものを見つめ困惑するナツ。

「んー? なあに?」

だが、シクルは気にした様子もなく首を傾げる。そんなシクルを見て、ナツはため息が思わず零れそうになるも堪え、目の前のそれを見つめる。

「シクル……………まさか…」

ナツの目の前に差し出されているもの…それは、卵粥の一部だった…シクルはナツにはいあーん、と卵粥の乗ったスプーンを口元へと持っていていき、「食べて?」と言う。

首を傾げながらそう言うシクルにゴクツと息を呑むナツ。

「い、いあいあ…俺、自分で食べれ…」

「だーめっ! まだ副作用残ってるでしょ? はい、あーん!」

拒否を少し見せるもやはりシクルには勝つことなど出来なく…大人しく、食べさせてもらうことにしたナツ。

そんな2人を見ていた2匹はニヤツと含み笑いを浮かべ…

「…でえきてるう」

と、からかう。

「う、うるせええええ／＼／＼!!」

結局、最後までシクルにより、ウサギのりんごまで全部食べさせてもらったナツは、耳まで真っ赤にし照れていた。

「ぎ……ちそう、さま……」

「はい！お粗末様です！美味しかった？」

シクルの問いかけにココココと頷くナツに満足気な表情を浮かべ、洗い物に行こうとシクルが立ち上がろうとした時だ……

「洗い物はオイラたちがやるよー」

「シクルは休んでてえ？」

ハッピーとルージュが翼を出しそう言った。

「そう？でも悪いよ……」

「いーのいーの！美味しいものも食べさせてもらったし!!」

ハッピーの言葉に「なら……甘えちやおっかな」と笑みを見せ言ったシクルは寢室を出ていく2匹を見つめ、可愛いなあと思っていると……

「…………シクル」

と、ナツの声が聞こえる。

「んー？なあに…………」

呼びかけられ、振り返ると……グイッ！とナツに腕を引っ張られ、一緒にベッドへと倒れ込んだ。

「きゃあ!? ちよ……な、なに……/ /?」

突然の事に顔を赤くし、ナツを見上げるシクル。

「…………シクル…お前もまだ…本調子じゃねえだろ?」

ナツの言葉を聞き目を少し見張るシクル。

ナツの瞳は殆ど確信づいている色を見せ、有無を言わせない雰囲気を持っていた。

「…………うん…まだ少し…だるい、かな?」

シクルの答えにはあ…とため息をつく、その頭に手を回し、抱きしめる。

「…………ナツ?」

「シクル…………もう、ぜってえ…あんなこと、すんなよ…………」

ナツのその言葉にシクルは目を見開き、そして少し悲しげな表情を浮かべる。

「ナツ…………うん、もう…しないよ」

「…………約束だぞ…」

「…………うん、約束…」

結局この後、満足したナツがシクルを抱きしめたまま眠るように意識を手放してしまつたことによりシクルはナツの上から抜け出せなくなつてしまふ。

更には、洗ひ物の終わった2匹が戻つてき、抱きしめられる光景を見られ…………

「でえええきてるうううう!!!」

と、普段の倍は巻舌でからかう2匹にシクルは顔を真っ赤にさせ……

「巻舌風に言うなばかあああああ／／／／!!!」

と、叫んだとさ……

この日は、ファンタジア開催まで残り3日であった……

この時、まだシクルもナツも気づかなかった……ファンタジアで起きる……事件を……

番外篇 その1

END

番外篇 その2 バレンタイン

2月14日ー

この日は多くの男性がソワソワし、多くの女性がドキドキを胸に抱く日……

そう、恋する乙女の一大イベント…今日は、「バレンタインデー」である。

そして、それはここ、妖精の尻尾でも開催していた。

「グレイ様ー!!!こ、これ…!!う、うう…受け取ってください!」

大きなハート型のラッピングを施されたチョコレートを頬を赤らめながらグレイに手渡すジユビア。

グレイは笑みを向け、「おう!サンキューな」と答え、それを見てジユビアはパターンと幸せな表情で気絶する。

「う、うおおい!?どうした、ジユビア!」

「わあー…すつごい幸せそうな顔……………」

空中からその表情を見下ろし、苦笑を浮かべるハッピー。

「そおーね」

ハッピーと共に苦笑を浮かべ、少し離れたところから2人のやりとりを見ていたルーシイ。

「そう言えば、ルーシイは誰かにあげたの？」

ハッピーがルーシイに問いかける。

「私？私はレヴィちゃんとか…ミラさんとか、良くしてもらってる人に今年は配ったわよ？」

「ああ…ルーシイってば、彼氏いないもんね」

ハッピーのその言葉に、「うっさい、ネコ！」と、ルーシイが叫んだ時、ギルド内に大きな音が響く。

「ミラあー…!!!シクルいるかあ!?!」

「ん？」

ギルドの扉を、バーン!!と大きな音を立て開き大声で叫ぶ声に、ルーシイが振り返ると、走りカウンターで仕事しているミラのところを駆け寄ってくるナツの姿があった。

ミラは驚く様子もなく、微笑みながらナツの方を向く。

「あら、今日は早かったわね？ ナツ。そうね、シクルならもう少しで出てくると思うわよ？」

だからもう少し待っててねとミラが言うと「おう!!」と、頷きカウンターのイスに陣取るナツ。

「わー…相変わらず元気が有り余ってるわねえ…てか、そういえば…シクルは？」

ふと、ギルド内にあの長い金髪を揺らす彼女、シクルがいない事に気づいたルーシイは誰に聞くでもなく、1人呟いた。

それを聞き取ったグレイがニツと笑みを浮かべ、ルーシイを振り返る。

「おールーシイは知らなかったっけか？」

「……………何が？」

意味が分からず首を傾げるルーシイの肩にハッピーが乗る。

「今日はね！シクルが皆にバレンタインのお菓子を作ってくれるんだよ!!」

「正確には、こういうイベントの時は、だけどね」

ハッピーといつの間にか目の前にいたミラの言葉にルーシイは大きく反応を見せた。

「え!?!シクルって、料理出来るんですか!?!」

「出来るってレベルじゃないわよ？もうあの腕前なら店を建ててもいいくらい、シクル

の料理の腕は凄いのよ」

ミラの言葉にルーシイは感嘆のため息をつく。

「凄いなあ…シクルつてば、魔導士としても強いし…歌だつて上手で…しかも料理が出来ておまけにスタイル抜群の超可愛い…文句のつけ所が全くないわよねえ…」

「面倒くさがりなのが玉に瑕だけだね」

ハッピーの最もな言葉にルーシイもミラも「確かに…」と、相打ちをついた時――

「おつまたせー!!皆っ!出来たよー!!」

「出来たよお!!」

ギルドの裏方から、大きなお盆を持ったシクルとその頭に乗ったルージユが満面の笑みで、出てくる。

『うおおおおお!!!!待ってましたあああああ!!!』

雄叫びをあげるギルド全体（ほぼ男）

我先にと、群がるメンバー…

「ちよちよちよっ!待って、順番だつてば!!はい、並んでねー」

シクルのその一声で、我先にと動いていたメンバーが一斉に一列に並ぶ。

最初に受け取ったのはミラだった。

「はい、どーぞ、ミラ!」

「ありがとー、シクル! ルージュ! あら、今年はケーキなの?」

貰ったそれを見てミラが問いかけるとシクルは頷く。

「そうだよ! 家で採れたアツサムの茶葉で作ったシフォンケーキにミルクチョコレートをかけてみたの!」

「アツサムの深みのある味とチョコレートのがよく合うよお!」

シクルに続いたルージュの言葉に、ミラはフフフと笑う。

「あらあら、それは楽しみね」

その言葉にシクルは照れくさそうに笑い、「ゆっくり味わってね!」と告げる。

その後は女性から先に手渡されていく。

「うむ! 流石だなシクルは!」

「わあ! 美味しそー!」

「ホントだねえ!」

エルザ、レビィ、カナ:と、受け取った子からワイワイと話し始める。

そして、ルーシィの手にもシクルから「はい!」と、シフォンケーキが渡る。

「わあ!! ありがと、シクル!! ルージュ!! ほんと美味しそー!!」

「お口に合えばいいな」

と、笑いかけるシクルに「絶対美味しいわ!」と即答で答えるルーシイに恥ずかしそうに頬を赤らめるシクル。

女性メンバーが終わると男性メンバーに手渡され始める。

グレイ、エルフマン、マックス、ナブ、ジェット、ドロイ、マカオ、ワカバ…etc
…

「はい!!ナツとハッピーの分!!」

「おお!サンキューな、シクル!ルージュー!」

「わーい!ありがとー、シクルー!!ルージュー!!」

「ゆっくり食べてねえ、ハッピー!」

受け取ったそれを早速頬張るナツにクスクスと笑うシクル。

「…あ、そーだ、ナツ!」

目の前で既に口いっぱい頬張るナツを呼びかけるシクル。

「んア?」

ナツの耳元に近づくように背伸びをするシクル。必然的に顔がグンツと近づき、ドキッ!とするナツ。

「お、おいつ…!」

「今日、後で家に来て?」

「……………ん?」

シクルの言葉を聞き、ポカーンとするナツから少し離れ、ニツコリと微笑むシクル。

「絶対ね?」

「…お、おう……………//」

その笑顔に顔を赤くするナツ。

その後はメンバー全員が綺麗にシフォンケーキを平らげ、多めに作ってあったシフォンケーキの多くはエルザのお腹の中へと消えていった。

そして、その日の夜――

「ん……なんで俺一人なんだ?」

ナツはシクルの家の前で首を傾げ、立っていた。

実はあの後、シクルから「一人で来てよ?絶対ね!」と言いつけられていたのだ。

なので今ハッピーはミラに預けている。

なんで俺だけ……と考え込む。

とりあえず…と、扉を3回ほどノックし、「シクルー!!」と呼びかけると…目の前の扉がガチャッと開く。

「ナツ！いらつしやい、待ってたんだー」

「お、おう!!」

出てきたシクルは普段ポニーテールの髪を少し頭の上の方でお団子にし、チュニツクワンピースの服装は厚手のニット製のロングワンピースに変わっていた。

思わず可愛い…と頬を赤らめるナツ。

「ん？どしたの？顔赤いけど…もしかして、冷えちゃったかな？早く入って入って！温まろ」

ほら早く、と背中を押されナツは「お、押すなよっ…!?」と言いながらシクルの家へと入る。

シクルに案内され、リビングに行くところソファへと座らされる。

「ちよつと此処で待ってて！すぐ来るから」

と言いつ残し、キッチンの方へ消えて行くシクル。

そして、言葉の通り、すぐに戻ってきたシクルの手にあるものから甘い香りがナツの嗅覚を刺激する。

「シクル…それ……………」

「これはガトーショコラ！最近ナツに助けられてばかりだったから…」

お礼で…と、呟くシクル。

「これ………俺、だけ……か？」

目の前に置かれたそれを見て首を傾げながらシクルに問いかけるナツ。

その仕草にトクン…と少し鼓動が早くなる感覚にシクルは内心不思議に思いながら「そうだよ！」と答える。

なんだ……これ……すっげえ………嬉しい…

胸の高鳴りに僅かに困惑しながらもシクルに急かさされるようにガトーショコラを食べ始める。

「っ…うっめえ!!」

1 口口に入れると今まで考えていたことを忘れ、バクバクと頬張り始めるナツ。

「口に合ったみたいで良かったア！」

ホッと一安心するシクルの目の前でガトーショコラを頬張り続けるナツ。

そして、あつという間にそれはナツのお腹の中へと消えていった。

「だー！うまかったア!!」

「お粗末様です！やっぱり作ってよかった！」

シクルの浮かべる笑顔を見つめ再びドキ…と胸が高鳴るナツ。

俺…今なら…

そう感じ、ナツは「お皿片付けちやうね」と、言い立ち上がるうとするシクルの腕をパシツ…と、ナツは咄嗟に掴む。

「ナツ？」

「……………あ、いあ…え、つと……………」

位置的に見下ろす形となっているシクルにナツはドギマギとし…そして、シクルをグイツと引つ張り隣へと座らせる。

「わ…ナ、ナツ？どーしたの…？」

「シ、シクル…！あ、あのよ…」

ナツの言葉を待ち、「なあに？」と首を傾げるシクル。

今度は見上げる形となったシクルを見つめ、徐々に頬が熱くなるのを感じながら…ナツはゴクツと息を呑み……………口を開く。

「シ、シクル…お、俺…さ！」

「うん？」

「シ、シクルのこと……………俺、す…!!」

ピピピピッー

その時、丁度ナツの言葉を遮るように響いたアラーム音。
「あつー！ っけない!! 紅茶作ってたんだ！」

アラーム音を聞き、はっと立ち上がるシクル。

「え、あ…お、おい!?! シクル……………」

キッチンへと駆けてくシクルに手を伸ばすも…「ちよつと待ってねー!」と消えていくその背中に……………

チー……………

呆然とするナツと微妙な形で伸ばされた右手が印象強かった…。

「ここだ!」と告白しようとしたナツだった…が、呆氣に取られたのと虚しさで…シク

ルが紅茶を入れ戻ってきた時は背中にズーザーンと、影を背負って沈んでいた。

「お待たせー！て、あれ？どしたの、ナツ？」

「いあ……………何でもねえ…」

戻ってくるのと沈んでいたナツに首を傾げるシクル。

ナツの隣によつと、と腰掛けナツの顔色を伺うシクル。

「どうしたの…どつか具合悪い？さっきのでお腹壊しちゃったかな……………大丈夫？」

ふつと、心配気な声にシクルを見つめるとやはり、眉が少し下がり、不安そうなシクルの顔がナツの視界に入る。

そんなシクルを見て、ふつ…と、笑みを浮かべ顔を上げるナツ。

そして、ぐしやぐしやと頭を撫でる。

「わっぷ!?!ちよ、ナツ…」

「何でもねえーよ！腹も壊してねえ…心配すんな」

ニカツ！と笑うナツにほつと安心しながらも「髪がー！」と叫ぶシクルにおつと、頭から手を離すナツ。

手が離れた瞬間…ほんの少し寂しさを胸の奥で感じたシクル。

「(あれ…なんで…?) さて…じゃあ、締めの手ティータイムといこつか！」

胸の奥で感じたそれを無視し、ニツとナツに言う。「おう!!」と元気な返事が戻ってくる。

この後、2人でゆつくりと紅茶を味わいながら、結局ナツがそのままシクルの家に泊まる!!と言い出し、最終的にはシクルを抱きしめたまま眠ってしまったナツ。

シクルは「しようがないなあ」と、呟きながらもその暖かな胸に顔を寄せ、一緒に眠った。

2人が想いを告げ、気持ちを通じ合うのはもう少し先のお話……。

序章

プロローグ

暗く、深い森の中……一人の少女がいた……。

はあ……はあ……はあ……

……逃げなきや……早く……離れなきや……

もつと……遠くへ……また……あそこに……

戻りたくないっ…!!

少女の身体は傷だらけで足取りも覚束無い状態だった。
ふと、木の根に足を取られ、よろけ、転んでしまう。

「きゃ……」

ズサアツーーー!!

再び立ち上がろうと身体に力を入れるも、身体は言うことをきかず、立ち上がれない

…

…もう…立つ力もない…私、ここで…もう…

少女は気が遠くなるのを感じ、ほぼ諦めかけていた…その時……

ガサツーーー

「うっひゃー…どこどこだ?道に迷っちゃまった………ん?」

誰かの声が聞こえた…私は僅かに残っていた力で顔を上げると男の子と目が合った。

その男の子は地面に倒れている私に気づき…驚いた様子で駆け寄ってきた。

この子…何処かで………

「お、おい!!お前、どうしたんだよ!?その怪我…大丈夫か!」

男の子は私にそう問いかけてくるが私は既に限界だったようですぐに気を失った。

ーーー

「……………ん………」

次に私が目を覚ました時、最初に目に入ったのは木材質の天上だった。

「……………うん、は？」

私は痛む身体をゆつくりと起き上がらせ、周りを見るとどこかの医務室でベッドの上に寝ていたことは分かった。

「…誰が？」

不思議に思っていると、部屋の扉がゆつくりと開き、そこから入ってきたのは一人の老人だった。

「おお、目が覚めたか…どうじゃ？傷は痛むか？」

「え…あ…はい…傷は、大丈夫…です」

私がそう答えると老人は頷き、部屋の外から誰かを呼んだ。

「おい、ナツ！目を覚ましたぞー」

ドダダダダダツ!!!

老人の一声で大きな音を立て入ってきたのは桜髪の男の子。さっき私を見つけた男の子だった。

「じっちゃん、ほんとか!？」

「ああ、ほんとじゃから少しは落ち着かんかい…びつくりしてしまっじやろ？」

「うおお、そっか…悪い…！ええつと…大丈夫か？」

男の子は老人に指摘され、極力少し小さくした声で私に問いかけてきた。

私は老人に答えた時と同じように頷き、言う。

「はい……大丈夫です……あの、私を助けてくれたのはあなたで……すよね？」

「ん？ ああ！ そうだぜ！ 気を失って倒れてたところを見つけたからここに連れてきたんだ!!」

男の子はそう笑顔で答えた。私はここがどこなのかまだ知らされていなかったことを思い出す。

「あの……ここは、どこですか？」

「ここは、魔導士のギルド。妖精の尻尾フェアリーテイルじゃよ」

私の問いには男の子ではなく、老人の方が答えてきた。

「妖精の……尻尾……魔導士、ギルド？」

「そうじゃ……お主もどうやら魔導士のようなお……」

「そうなのか?! お前、つえーのか?! どんな魔法使うんだ?!」

男の子の勢いに少し戸惑いながら質問に答える。

「つ、強いかは……分からない……魔法は……」

私はそこで少し言うのを躊躇った。

「……どうする? 言っても……いいの?」

「ん? どうした?」

首をかしげてくる男の子…そんな彼を見ていたら何故か…大丈夫な気がした…

「…私の魔法は…月……………」

「…月イ?」

「うん…私は月の滅竜魔法を使う、ドラゴンスレイヤー滅竜魔導士…」

私がそう答えるとしーんと、静まり返ったように静かになる部屋…

……………やっぱり、言わない方が良かったかな…

そう思い、顔を伏せ俯いていると…

「すっげええええ!! お前、滅竜魔法使えんのか!？」

ビクツ! 「う、うん…」

「お、俺もなんだ!! 俺も滅竜魔法使うんだ! 俺は火の滅竜魔導士だぜ!!」

「……………火?……………滅竜……………イグニール?…」

私はふつと、脳裏に過ぎった私の親の親友、火竜のことを思い出していた…すると、彼の名に反応した男の子は…

「つ!?! お前、イグニールの事知ってるのか!?! 今どこにいるんだ!?!」

肩をつかみ、物凄い迫力で聞いてきた。私はびっくりして再び肩を揺らし、答える。

「つ…イ、イグニールのことは知ってる…私の母、セレーネソフィアの親友だった…で

も、どこにいるかまでは知らない……………」

……………うそ…本当は……………彼らがどこにいるのかを知っている…

でも…今はまだ、その時じゃない……………

……………まだ…

「そっか……………」

「……………ごめん、役に立てなくて……………」

私が少し俯き落ち落ち込むと、男の子は慌てた様子で私に声をかける。

「い、いや!!いいんだ!!えっと……………あ!そーだ!お前名前は?俺はナツ!!ナツ・ドラグニルってんだ!」

「……………そっか…ナツ……………私はシクル。シクル・セレーネ」

「なあ!お前、このギルドに入らねえか?すっげえいい所なんだぜ!!」

自己紹介が終わるとナツは私にギルド加入の誘いをしてきた。

私はナツの顔を少し見つめ……………

「…ナツも……………ここにいるの?」

と、聞いた。

「ん？ああ!!俺もここに入ってるんぜ!!」

私の問いかけに笑顔で答えてくれるナツ。

「……………うん、私なんかが入ってもいいなら…入りたい…な」

私がそう答えるとナツはぱあつと笑みを浮かべ、後ろに立っていた老人の方を振り返る。

老人はにつこりと笑みを浮かべると私に言った。

「うむ…シクルと…言ったのお？わしはこのマスター、マカロフじや。オヌシを歓迎するぞー!」

「マスター……………ありがとうございます…」

「よっしゃああ!!これからよろしくな、シクル!!」

私に飛びついてくるナツ…ナツ……………

……………約束…守るからね……………イグニール…

「うん…よろしく、ナツ!」

そして、私がギルドに入ってから5年後……

運命の歯車が……………ゆっくりと…動き始める。

「んー……………あんまり手応えなかったかなあ?」

そう呟き、顔にかかる髪を払いのける私の後ろには…

数百ものモンスターの死骸が転がっていた。

服についたホコリや砂を手ではらっていると、頭に僅かな振動と重みを感じた。

ふと、意識と視線を頭の上にやると……………そこには、今ではほぼ毎日一緒にいる相棒が乗っていた。

「そんなこと言えるのはシクルだけだよおー…アレ全部S級モンスターなんだよお?」

茶毛の猫、ルージュの言葉に肩を竦め、笑う。

「そんな事ないよ…他にも出来そうな人、いるでしょ?」

「んー?……………ああ、確かにい…」

ルージュは脳裏に写った緋色の髪の子を思い出す。

遠い目をしているルージュから目を離し、空を見上げる…

「……………そろそろ帰ろっか…終わったし」

「んー?……………あい!!帰ろお!!今回はどれくらい帰ってないんだっけえ?」

「んー?……………半年…くらいかな?結構長引いちやったね」

荷物をまとめ、背に背負うと、一つ大きく深呼吸をした。

「ふう………さて……じゃあ、帰りますか……妖精の尻尾へ」
「あーい！」

オリ主 設定

シクル・セレーネ SS級魔導士

年齢不詳（見た目は17歳くらい）

月の滅竜魔導士 光の滅竜魔導士

異名 フェアリープリンセス
妖精の姫

月の歌姫

使用する魔法

月の滅竜魔法 光の滅竜魔法 換装

ソングマジック
歌魔法

好きなもの

仲間、家族、甘い物、寝ること、読書、料理

嫌いなもの

仲間や家族を傷つけるもの、睡眠妨害、甘味摂取中の妨害、命や仲間を大切にしない

もの

一人称 私 キレた時あたし or 俺

二人称 君、あなた、お前

性格

優しくド天然鈍感。極度のめんどくさがり。魔力もマスターよりあり、ギルダーツを凌ぐ実力を持っているが本気になるのはほんとはほんとはごく稀。仕事も気が向いた時にしか行かず、ナツ達と行く時もほぼサポートに回る。キレると笑顔で口調が変わる。

仲間の身が第一とし、自分が傷つくのは躊躇わない。それでいつも仲間には説教を食らうがやめるつもりは毛頭ない。

容姿

金髪の膝裏まで伸びたストレートヘアを一つにくくっている。魔力が高まると銀髪等に変化する。

瞳は青く大きなまん丸瞳。身長はナツの肩くらい。黄色い半袖チュニツクの上に白のジャケットを羽織り、黒の短パン、黒いタイツ、膝上のロングブーツを履いている。遠出の際は上から黒のフード付ローブを羽織っている。右耳に水色のピアスを付けており、その中心には月のマークが印されている。

かなりの美人だが本人自覚なし。

ギルドマークはナツと同じ場所に色は白。

備考

月の竜に育てられた。

体内に強大な魔力を秘めており、普段は右に装備しているピアスの効果により制限がかかっているが感情が高まった時、ピアスを外した時魔力が溢れ出し、多すぎると暴走する。

歌魔力で傷や体力、魔力が回復する。

また、防御壁を展開することも可能。歌魔法を長時間行うと疲労がたまり、倒れる。自身を助けてくれたナツに対し特別な感情を持っている。

ギルド加入一年後、S級魔導士、半年後にSS級魔導士となる。

ナツやガジルたちのことは覚えており、イグニールやメタリカーナに魂竜の力で深い眠りについた時子供たちを頼むと託されていた。

相棒 ルージユ

メス 6歳 茶毛のエクシード

傷つき倒れているところを仕事帰りに通りかかったシクルに助けられ、その後シクルに懐き、相棒として一緒に暮らしている。

魔法は翼。他にシクルの魔力が込められた月の弓を持っており、戦闘の時はそれを使い加勢する事もある。ちよつと怖がりさん。

口癖はハッピーを真似て「あい」
がある。

「くだよお」「くねえ」と、言葉の語尾をのばす癖

第1章 鉄の森篇

1話 帰還と妖精女王からの誘い

妖精の尻尾——

「はあ…やつとついたら…疲れた」

「今回は長かったもんねえ…皆心配してるかもよお？特にナツ」

「あはは…そうかも…（でもなんでナツ……？）」

半年ぶりにギルドへと帰還したシクル。

久しぶりに見るギルドに一つため息をつく、扉を開ける。

シクルが扉を開けるより、少し前のこと——

「ナツ!!グレイ!!まずいぞっ!!!」

メガネをかけた、茶髪の男、ここ妖精の尻尾のメンバー「ロキ」が大きな音と共にギルドに駆け込んできた。

「あ？」

ロキに呼ばれた2人の男、桜髪で鱗模様のマフラーを付けた“ナツ”と青髪で上半身肌かの“グレイ”は同時にロキへ顔を向ける。

「エ、エルザが………エルザが帰ってきたぞ!!!」

「あ、あ?!!」

ロキの言葉にはナツやグレイだけでなく、ギルド全体が反応し震えた。

そして、ギルド全体がエルザという人の話でいっぱいになっているとギルドの外からズシン…ズシン…と、重い音が響いてくる。

「な、なに…?」

「あ、か…帰ってきた………」

誰かのその一言の次の瞬間、ギルドの扉がゆっくりと開く。

そして、ギルドに入ってきたのは——

「今、戻った。マスターはおられるか?」

大きな大きな魔物の角を片手に持ち、ギルドに入ってきたのは妖精の尻尾最強の女魔道士、妖精女王の“エルザ”だった。

エルザは持ち帰った物を大きな音を立て、床に置くと、ギルド内を見渡した。

「おかえりエルザ、マスターは今定例会に出てるわよ」

エルザの質問に笑みを浮かべ答えるのは、このギルドの看板娘、*“ミラジエーン”*。
「そうか……」

「あ、あのお……エ、エルザさん？そのバカデカイのは何でしょう……？」

勇敢な1人の魔道士が、エルザの持ち帰った物を指差し、問う。

「ん？これか？これは討伐した魔物の角をお礼と村の者が装飾を施してくれた物でな……綺麗だったので土産にしようと思つてな……迷惑だったか？」

と、首を小さく傾げ問うエルザに「いえいえ、滅相もない!!」と首を大きく横に振り否定する。

「討伐した魔物の角つて……」

「でええ……」

「すげ……」

「ふう……それよりお前達、また問題ばかり起こしているようだな……仕事先で何度も話を聞いたぞ……マスターが許しても私は許さんぞ！」

そう言つて、風紀委員の如くギルドのメンバーにきつい言葉を放つていくエルザ。ギルドのメンバーは徐々に肩身が狭い思いをしていく。

「はあ……全く……今日のところはこれくらいにしておこう……世話が焼けるな……」

「な、何この人……風紀委員か何か……？」

風紀委員よろしく、メンバー達に小言を告げていくエルザを見て口元を引くつかせ、苦笑を浮かべる金髪の少女、*「ルーシー」*。そんなルーシーの隣で肩を竦める青い猫、*「ハッピー」*。

「あい、それがエルザです」

「そういえば、ナツとグレイはいるか？」

「あい、こちらに」

エルザの問いかけに答えるハッピー。

その指差す先には不自然に震え、お互いの肩を組み合うナツとグレイがいた。

「や、やあ…エ、エルザ！今日も俺たち、な、仲良くしてるぜ…!!」

「あい…!!」

「ナツがハッピーみたいになってるう!？」

体と声を震わせているナツとグレイにルーシーは目を見開き驚き、説明を求めハッピーに視線をやるとハッピーは溜息をつきながら答える。

「あい…2人とも昔エルザにボッコボコにされちゃつてねえ…2人ともエルザが怖いんだよ」

「あらま…」

ハッピーの言葉にルーシーは苦笑いを浮かべるしかなかった。

「うむ、仲がいいのは良いことだな…とところで、シクルは帰っているか？」
「…シクル、さん？」

エルザの言葉から出た聞いたことのない名前にルーシイは首を傾げる。
「ううん、まだ戻ってないわよ？多分もう少しで帰ってくるよ……」

ミラがそう答えた時だった……

ギー…… ギルドの扉が開いた。

「ただいま…はぁー疲れた…」

「ただいまあマスターいるう？」

妖精の姫の帰還だ。

「シクル……!!!」

「ふえ？て、きやあ!?!」

シクルに抱きついてきたのはナツだった。

抱きつかれた勢いが殺しきれず、シクルは後頭部をギルドの床に打ち付ける。

「わあ……いたそお……」

鈍い音を出し、床に後頭部をぶつけたシクルをギリギリで床との衝突を回避し、空中で飛んでいるルージュが苦笑を浮かべ見つめる。

「シクル!!!お前今まで何してたんだよ!?心配したんだぞ!」

「いったあ……ナツ……何って仕事に行くって出る前に話したでしょ?てか、いきなり抱きつかないでよ、びっくりするでしょよ……」

そう言いながらも嬉しそうな表情を浮かべるシクル。

「でもお前!!3ヶ月で帰るって言ってたじゃねーかよ!?半年かかってんじゃなか!」

「あー……それはちよつと……仕事先で手間取っちゃってねえ……連絡入れればよかったかな?ごめん、心配かけて」

「べ、別に……!!無事ならいいんだ……怪我、してねえか?」

シクルが頭を撫でてきたことに照れたナツはそっぽを向き、問う。シクルは首を傾げきよとりとすると、くすつと小さく笑みを浮かべる。

「うん、大丈夫。してないよ……ありがとう」

「シクルか、久しぶりだな」

ナツと和んでいるとエルザがシクルに声をかけてきた。シクルはぱつと顔を上げ、エルザと目が合うと更に笑みを深くする。

「エル！久しぶりだね、この前はすれ違いになっちゃったからねえ」

「ああ、そうだったな…シクルも元気そうで何よりだ」

エルザはそう言い、小さく微笑むとすぐに笑みを隠し、真剣な表情を見せた。

「ちようど良かった…ナツ、グレイ…帰ってきて早々悪いがシクル……頼みがあるんだ…力を貸してくれないか？」

「…頼み？」

「…エル？」

「ど、どういうことだ!？」

「あのエルザが…誰かを誘うなんて初めて見たぞ…」

「…何事？」

「…さあ？」

「出発は明日だ。準備しておけ」

「え、あいや…」

「行くななんて言ったかよ!？」

「えー…私今帰ってきたところなのに…めんどくさい…パスしていい?」

「詳しくは明日、話す…よろしく頼む」

エルザは3人の抗議の声を聞かず、話を終わらせると先にギルドを出ていった。

「ちよ、エルー!?私まだ行くなんて言っただけでいいんですけど!?待ってよー!!」

シクルはそう叫ぶとギルドを出ていったエルザの後を追い、ギルドを飛び出していく。

「な…なんだったの…」

一部始終を啞然と見つめることしか出来なかったルーシィ。その横でミラははっと手を口元に当て言う。

「エルザとナツ…グレイとシクル…今まで想像したことなかったけど…これって………ギルド最強チームかも…」

結局この後、シクルがエルザに言葉で負け、一緒に行く事になったのであった…。

「あーもー!!!久しぶりにゆっくり出来ると思ったのにー!!!」

シクルの叫びは虚しく響き、誰も気づくことは無かったー。

2話 列車の中で

マグノリア駅——

昨日エルザから力を貸してほしいと頼まれたナツとグレイはエルザよりも先にマグノリア駅に到着していた。

そして、2人と共にルーシイとハッピーも集まっていた。

「たくよお…なんでエルザみてえなバケモンが俺たちの力を借りてえんだよ？」

「知るかよ…つか、助けなら俺だけで充分なんだよ」

「じゃあお前だけで行けよ!!俺は行きたくねえ!!!」

「なら来んなよ!!後でエルザに殺されちまえ!!」

「あんた達迷惑だからやめなさい!!」

大声で喧嘩を始める2人を止めに入るルーシイ。その横ではやれやれと言った表情のハッピーがいた。

ルーシイが止めると2人は喧嘩をやめ、ルーシイを見つめる。

「な……なによ……」

「いやつか………なんでルーシイがいんだよ?」

ナツが怪訝そうな表情で問う。

「頼まれたのよ!!ミラさんに!!」

「ミラちゃんにだあ?」

「そーよ!!!」

ルーシイの話によると昨日、ミラからナツとグレイの喧嘩を止める仲介役になって欲しい等の事で一緒に行つてとお願いされたとの事だった。

「はあ……なんであたしが………」

「プフフ、頑張れルーシイ」

深いため息をつくルーシイの肩を叩くハッピー。そんなハッピーを見てはつとルー

シイは気づく。

「てか、仲介役ならあんたがいたじゃないハッピー!!」

「オイラは猫なので」

「ただ忘れられてただけでしょ…もー、私が来た意味…」

がつくりと肩を落とすルーシイ。

そこへ、2人の女と1匹の猫が到着する。

「すまない、遅くなったな」

「はあ…私行かないって言ったのに…」

声のした方を3人と1匹が振り返ると

黒いオーラを背後に纏い、ズーン効果音がつくのではないかと言うほどやる気の見え

ないシクルと…

「荷物多っ!?!」

駅の天上につくのではないかと思ってしまうほどの高さまでつまれた荷物を持った

エルザだった。

「ハッピーごめんねえ遅れてえ…エルザの準備がすっごく遅くてさあ」

ハッピーの隣に飛んできたルージュ。

「あい…なんとなくは想像つくよ…これを見たらね」

「ん？君は確か…昨日妖精の尻尾にいた…」

「ふえ…新人さん？」

エルザとシクルがルーシイを見て問う。

ルーシイははつと姿勢を正す。

「あ、はい！新人のルーシイといいます！」

今日は…ミラさんから頼まれて同行することになりました…よろしくお願ひします
！」

丁寧な頭を下げ、挨拶するルーシイ。

「そうか…私はエルザだ。よろしく頼む。ギルドの連中が騒いでいた新人とは君のことか…：…傭兵ゴリラを倒したそうだな、頼もしい限りだな」

「あ、はあ…てかそれナツだし…：…現実と少し違ってる…：…」

エルザの話した内容にがくつと肩を落とすルーシイ。シクルはその様子を見てクスツと小さく笑った。

「ルーシイだっけ？私はシクル。よろしくね」

「あ、はい！よろしくお願ひします、シクルさん！」

ルーシイが敬語で言うのとシクルはきよんとした表情を浮かべてからフフツと笑い、

ルーシイに言う。

「シクルでいいよ、それと敬語はなしね。仲間なんだから」

「は、はい…あ、うん！」

ルーシイとシクルの交流が一段落したところを見て、エルザが話を始めた。

「さて…自己紹介はすんだな。今回は少々危険な橋を渡るかもしれないんだが…その活躍ぶりなら問題なさそうだな」

エルザの一言にビクツと体を揺らすルーシイ。

「き、危険…!？」

「うへえ…なんかめんどくさい事になりそう…」

体を震わせるルーシイの横で深いため息をつくシクル。そんなシクルの頭に乗し、
「まあ頑張つてえ」と言うルージユ。

「エルザ…何の用事かは知らねえが…今回はついて行ってやる…条件付きでな！」
「条件？」

今までエルザの手前、喧嘩をしないようじつと静かにしていたナツが突然、真剣な眼差しでエルザを見据え言う。

「エルザ…帰ったら俺と勝負しろ!!」

「へえ?」

「お、おいバカ!お前何言ってるんだよ!」

シクルが少し興味あり気に笑みを浮かべ、反対にグレイは慌てた様子でナツを止める。

が、既にナツは啖呵をきっている。

「ふむ…そうだな…私はいささか自信はないが…いいだろう。受けて立つ」

「よっしゃあああつ!!燃えてきたア!!あ、それと、シクルも帰ったら俺と勝負しろよな
!」

エルザに承諾を貰えた勢いか、シクルにも決闘を申し込むナツ。が、シクルは面倒くさそうな表情を浮かべる。

「え、やだよ、めんどくさい」

「ぬわにい!」

「まずエルに勝つてからでしょーよ」

多分「まだ」無理だろうけど…と、心の中では思いながらOKを出すシクル。

「じゃあ、エルザに勝ったらやってくれんだな!？」

「あーはいはい、勝ったらね」

「うおおおお!! やってやんよおおおお!!」

シクルの答えにやる気に燃えるナツ。

そして、目的の列車が到着し、乗り込む一行。

その数分後――

「う……うっぷ……ぎもぢわりい……」

「……はあ……大丈夫? ナツ」

乗り物に極端に弱いナツは乗り込み列車が動き出した瞬間に乗り物酔いを起こし、列車までの威勢はどこへやら……あっさりダウンしてしまっていた。

「たくっ! なっさけねえなあ……ナツさんはよお……鬱陶しいから別の席行けよ。つか、列車に乗るな!! 走れ!! んでもって何どさくさに紛れてシクルに膝枕されてんだよ!？」

ナツに怒鳴り、シクルの膝の上で悶えるナツの頭を蹴るグレイ。

「はあ……まあいつもの事だし……てか、走れってちよつと無理があると思うんだけど?」

ナツに怒鳴るグレイを静かに抑えながらナツの髪を撫でるシクル。

……意外と柔らかか……

見た目より柔らかかみのあるナツの髪質を堪能しながらシクルはクスツと微笑む。
ちなみに、現在の席順は……

ナツとシクル その目の前にはルーシイとエルザ

通路を挟み、隣にはグレイとハッピー、ルージュの順で座っている。

ナツの様子に少々呆れている様子のエルザはため息をつき、ナツに言う。

「はあ……まったく、仕方ない……私の隣に來い、ナツ」

「それってあたしにどけて意味かしら……」

エルザの発言に口角を引くつかせ、少しシヨックを受けるルーシイ。

が、当の本人、ナツは酔っている中力を振り絞り、首を横に振る。

「どうした？早く來い」

「い、や……だ……」

エルザの言葉に再度断るナツはシクルの腰に腕を回し、ぎゅうつとシクルに顔を寄せ
る。そんなナツに苦笑いを浮かべるシクル。

「ナツ……私はエルダの言葉に従った方がいいと思うけど……」

「…………シクルって、鈍感？」

「あい、相当のね」

「正直あの鈍感さには尊敬しちゃうよねえ…」

「まあ、そんなところも可愛いんだがな…」

ルーシイ、ハッピー、ルージュとグレイが小さな声で会話をしていると、ルーシイの横から小さな殺気が湧く。

「つべこべ言うな…来いと言っているんだ、ナツ…」

ビククウ!!!

「あ、あ、い!!!」

「(…)わ…」

エルザの殺気にやられ、素早くエルザの隣に座るナツ。必然的にルーシイはシクルの隣へと腰を下ろす。

ナツが隣に来たことを確認すると、エルザは「よし…楽にしている」と言い…

次の瞬間…

ドスツ!!!

「は？は？！」

「「「「「？」」」」」

何の躊躇いもなく、ナツへ腹パンを食らわせ、気絶させた。

シクル達は目の前で起きたことに一瞬唾然とし、次の瞬間、各々顔を逸らし、見て見ぬフリを決め込んだ。

「これで少しは楽になるだろう…」

唯一、エルザだけが事態に気づいていなかった。

この重く沈黙とした空気を変えようとルーシイが話題を引つ張り出す。

「そ、そう言えば私!!ナツ以外の魔法を見たことがないんですけど…エルザさんはどんな魔法を使うんですか?」

「私もエルザでいい…それに敬語も必要ない」

ルーシイの敬語とさん付けに笑みを浮かべ、指摘をするエルザ。

「エルザの魔法は綺麗だよお」

ルーシイの問いにはルージユが答え、更にルージユに続き…

「血がいつぱい出るんだ。相手の」

と、ハッピーが自慢そうに告げた。

「…それって綺麗なの？」

「大したことは無いさ…それより私は、グレイの魔法の方が綺麗だと思うがな」

エルザは素晴らしい、隣に座るグレイを見て言う。

「そうか？」

グレイはエルザの言葉に首を傾げながらも魔力を作り、両手を合わせ

シユウウウン！

氷でできた手のひらサイズの妖精の尻尾マークを作り出した。

「わあ!!」

ルーシイは感嘆の声を上げる。

「氷の魔法さ」

「氷…火…あ！だからあんた達仲が悪いわけね！」

「うっせえよ…！それより、俺はシクルの魔法が一番綺麗だと思うがな」

ルーシイに言われた言葉に少し頬を赤くするグレイは話題を他に移そうとまだ話の上がついていなかったシクルにふった。

「え？私？」

自分に回ってこないと思っていたシクルはきよとんと首を傾げる。そんなシクルに期待の眼差しを向けるルーシイ。

「そーいえば！シクルの魔法ってどんななの？」

「ん？私？私のはナツと同じだよ」

「へえ！ナツと同じなんだあ……って、え？ナツと……同じって……まさか!？」

シクルの何気ない発言に危うくスルーしてしまうところだったルーシイだが……

ニコツと微笑み、シクルはしてやったりとした様子で言った。

「私は月と光の滅竜魔法を使うの……月と光の滅竜魔導士だよ」

「えええええええつ!?!シ、シクルも滅竜魔導士って……ナツ以外にもいたの!?!」

しかも2つの属性を持つてるの!?!と、興奮気味のルーシイをまあまあと落ち着かせるシクル。

「機会があれば見せてあげるね」

「うん!!」

ルーシイの興奮が落ち着いたところで、グレイが本題を切り出す。

「ところで……そろそろ説明してくれねえか？エルザ……一体何事なんだ？お前ほどの奴が人の力を借りたいなんてよお……」

「ああ……そうだったな……話しておこうか……」

エルザの口から告げられることは……

そして、この先に待ち受けているものは…

3話 列車に揺られ火竜は逝く…

エルザの話によると、内容はこうだ…

仕事帰りに偶然立ち寄ったオニバスにある魔導士が集まる酒場で4人組の男達が集まり、封印されていると言われる「ララバイ」という魔法について話していた。

そして、男達の口からは「エリゴール」という人物の名も出ていたという。

「ララバイ………「子守唄」？」

シクルが首を傾げその単語を呟く。

その横ではルーシイが「ララバイ…どこかで聞いたことがあるような…」と呟き、考え込んでいる。

「眠りの魔法か何かか？」

グレイがエルザに問うがエルザは首を横に振り、言う。

「分からない……ララバイ…それも気になるが、私が気にしているのはその「エリゴール」という名の男だ」

「エリゴール……もしかして…」

シクルの脳裏にある人物が浮かび、エルザを見る。その様子を見てエルザは頷く。

「ああ…恐らく、シクルの考えていることで間違いはないだろう…エリゴール…恐らく、
魔導士ギルド アイゼンツァルト 鉄の森のエース… 死神 エリゴール”で間違いはないはずだ…」

「し、死神………!?!」

エルザの出した言葉に震え上がるルーシー。

「鉄の森ってえ…確か、本来は禁止されている暗殺系の依頼をこなして、評議会から追放されたギルドだよねえ？」

自分の記憶が間違っていないか確認をしながらシクルに問うルージユ。

シクルはこくりと頷く。

「うん…本来暗殺系の依頼は評議会の意向で禁止されている…でも彼らはお金を選んだ…」

「そして、死神とはその際、暗殺系の依頼ばかりを遂行していた為につけられた通り名だ」

シクルの言葉に付け加えるように続くエルザ。

「結果、6年前に連盟を追放され……ギルドマスターは評議会に逮捕されたが……」

奴らは闇ギルドとし、今も活動をしている…」

「闇ギルドお!?」

「ひい……!」

エルザの言葉に恐怖するルーシイとルージユは汗をだらだらと流す。
そんな2人、いや…ルーシイを指差しハッピーはからかう。

「ルーシイ、汗いっぱい出てるよ!!」

「汗よ!!!」

「なるほどなあ……」

「不覚だった…あの時、エリゴールの名に気づいていれば…!全員血祭りにしてやれたものを…!!」

「ゴツ!!」

「ぐもっ!」

エルザは悔しそうな表情を浮かべ、拳を握りナツの頭に拳をおろす。
その様子に再び顔をひきつらせるシクル達。

「まあ……確かに、その場にいた連中だけならエルザ一人で何とかなつたかもしれないねえ……が、ギルド一つ相手となると……」

再び訪れた沈黙を終わらせる為、グレイが一つ咳払いをしエルザを見て言う。

「ああ……流石に私一人だと分が悪いのだな」

エルザがグレイの言葉に頷き、同意をした時、丁度列車が目的地に着いたため一行は列車を降りる。

「奴らは『ララバイ』なる魔法を入手し……何かを企んでいる……私は、この事実を看過することは出来ない」と判断したので……」

エルザはそこで言葉を途切らせると、シクル達を振り返り、告げる。

「鉄の森へ乗り込むぞ」

「面白そうだな……!」

エルザの言葉にグレイだけは賛成し、ルーシイとシクルは……

「来るんじゃないかった……」

「はあ……やっぱめんどくさいじゃん……」

2人とも深いため息をつき、肩を落とす。

「汗出しすぎだって」

「だから汗じゃないっての」

「でえ？鉄の森のアジトは知ってるのお？エルザ…」

シクルの頭に乗る、エルザに問うルージユ。

「いや、それをこの街で調べるんだ」

「へえ…」

………たー………けー………え…

「ん？」

…今なにか………

シクルは耳に入った、か細い叫び声を疑問に思いふと、周りを見回す。そして、ある重大な事実気がつく。

「あ……え？………ね、ねえ？」

「[[[[「ん?」]]]]」

シクルの呼びかけに首を傾げる一行。

「私の…見間違いないらいいんだけど…さ?…ナツ、いなくない?」

シクルの言葉に一同は徐々に顔を青ざめさせる。

「……………ナツ、忘れてたね」

「…あい」

シクルの眩きに頷くハッピーとルージユ。

鉄の森へ乗り込む前に重大な問題が発生してしまった一行であった…。

「くそっ!!なんという事だ!!」

話に夢中になるあまり、ナツを列車に、置いてきてしまった!!

あいつは乗り物に弱いというのに!!私の失態だ!!

とりあえず誰か、私を殴ってくれないか?」

「ええ!?ちよ、エルザ!?何いってんの!?!」

エルザの暴走に驚くルーシイ。

「殴ればいいの?じゃ、殴ろっか?」

「ちよ、待て待て待て待て!!!何本気で殴ろうとしてんだよシクル!」

につこりと微笑み、本気で殴ろうと拳を握るシクルを大慌てで止めるグレイ。

「え?だって殴ればいいんじゃないの?本人が言ってるんだし?」

「何でそこで天然発揮するのさ!」

「とうか、いつもの面倒くさがりはどこいったんだろおねえ…」

きよとりと首を傾げるシクルにハッピーは慌て、ルージユはぼうつとその様子を眺める。

「兎に角、急いで列車を追うぞ!!」

グレイが他のメンバーにそう呼びかける。

「あつと…じゃあ私はルージユと一緒に先に列車を追うから…!エル達は後から来て!

ルージユ、お願い!」

「あい!!」

シクルはそう言うのとルージユを連れ先に駅を飛び出し、列車を追う。

「頼んだぞ、シクル!」

飛び去っていくシクルとルージユの後姿にそう叫んだあと、エルザはハッピーと共に

列車の緊急停止レバーを下ろし、列車を止めるといふ行動を起こすのだった…。

そして、時間を列車が止まる少し前まで遡り…

「うう………たす……け……うつぶ………」

1人取り残されたナツはひたすら助けを求め、声をだす…が、生憎と聞き取ってくれぬ仲間は今この場にはおらず………

そんなナツに近づく一つの影………

「お兄さん、………空いてる？」

乗り物酔いで苦しむナツに声をかけた男。

だが生憎ナツは乗り物酔いのせいで返事は出来ず…男はナツの返事を待たず目の前に座る。

荒い息遣いで、苦しげな様子のナツ

「あらら、辛そうだね……大丈夫？」

そんなナツに声をかけてくる男はふと、ナツの右腕のギルドマークに目がいく。

「…へえ……………妖精の尻尾…正規ギルドかあ…羨ましいなあ……………」

そう言つて男は怪しく笑う。

「妖精の尻尾つて言えばさあ…ミラジエーンとか有名だよな？」

乗り物酔いで返事のできないナツを無視し、一方的に話を始める男。

「たまに雑誌とか載つてるし…すごく綺麗だよねえ…なんで現役やめちやつたのかな？
まだ若いのにね…」

あとさあ名前は知らないんだけど、新しく入った女の子が可愛いんだって、君知つてる？」

「…う……………ぷ……………」

男が話し続けている中、尚苦しげな様子のナツ。

そんなナツを見て、男は更に笑みを深める。

「正規ギルドはカワイイ子も多いのかア…」

うらやましいなあ……うちのギルド全く女つ気なくてさあ……ね？少しわけてよ」
そう言ううと男は突然、話していた言葉を切り、ナツへと片足をあげた。

そして

「なーんつつて キーク……ひやは」

ナツの顔面へと足をめり込ませた。

男はニヤニヤと笑う。

「シカトはやだなあ……闇ギルド差別だよ？」

あ、そういえばさあ……妖精の尻尾に『歌姫』 つているよね…… 『月の歌姫』 だっけ？

……俺達が貰っちゃおうかなあ……」

ピクッ……

『歌姫』……その言葉にナツが反応を見せた事に男は怪しげに笑う。

「すつごく可愛いんだよねえ？確か……ああ、『シクル・セレーネ』 だっけ？

鉄の森でもすつごく有名でさあ……そんな有名な人が妖精の尻尾にいるなんて許せない
からさ……」

俺達が貰っちゃってもいいよねえ？」

「あ……………」

男の一言で昇天しそうであったナツの意識が踏みとどまり、小さく声を出す。

「お！やつとしやべってくれた、ヒヤハハ」

「なに……を……………て、め……………シクルを……………なん、だ…？」

「はい？よく聞こえないなあ…」

ナツは苦しそうにしているも男は尚、楽しそうに笑い挑発する。

「妖精の尻尾ついていやあ…随分目立ってるらしいじゃない？正規ギルドだからってハバきかせてる奴って…ムカつくんだよね

「うちら妖精の尻尾の事なんて呼んでるか知ってる？」

妖精（ハエ）だよ妖精（ハエ）…」

男は「ハエたたきー ヒヤハ」と、笑いながらナツの頭にチョップをおとす。

「てめ……………っ！」

「お？やるのかい？」

ナツは力の入らない体に鞭を入れ、立ち上がり手に炎を纏う。が、それも長くは続かずすぐに消えてしまう。更には乗り物酔いの影響で再び列車の床に膝をつくナツ。

そんな彼に男は影を使った魔法で攻撃する。

ドガッ！

「ぐがっ…」

男の攻撃で再び床に転がるナツ。

床を転がるナツに愉快そうな笑いを見せ、再び攻撃をする男。

ナツへ攻撃があたる…と、男が笑みを深めた時だった…

パライイイイイン!!!

「ナツに………何してんのよお！」

ドガンッ!!

「ぐあっ!?!」

列車の窓を蹴破り入ってきた影…

その長い金の髪を揺らす女を見てナツは小さく笑い、女の名を叫ぶ。

「シクルっ!!!」

列車の床で蹴られた痛みに起き上がれない様子の男を見下ろし、睨むシクル。

「誰がハエだつて？調子乗らないでよ、おにーさん？」

シクルの眼に宿るは静かなる怒り…

月の歌姫の怒りに触れた男…

歌姫からの慈悲は…ない…

4話 死神現る

「シクル!!」

「あたしもいるよおー」

「あなた…鉄の森の奴ね?こんな所で何しているの?」

嬉しそうな声を上げるナツを一瞬視界に入れ、ルージユがナツの近くにいることを確認すると、すぐに目の前の男へと顔を向けるシクル。

「ぐっ…お前………歌姫か?」

男はシクルの問いかけに答えることなく、逆に質問を返してくる。

「さあ?それは他の誰かがつけた通り名…私がつけたわけじゃないけど………多分、それで合つてるとは思わよ?」

そう言い、余裕な表情で男を見据えるシクル。

「くっ…ヒヤハ………こりゃあいい…アンタが噂に聞く歌姫なら…俺が貰っちゃおうか…」

男の発言にシクルは嫌そうに眉をしかめる。

「え…何それ、どこからどう取ったらそうなる訳？」

「アンタに拒否権はないよ？じゃあ、一緒に来てもらおうかな？」

シクルの言葉を見無視し、シクルの腕を掴み、連れていこうとする男……すると

「シクルに……」

触んじやねえっ!!!

ドゴオン!!!

「ぐはっ!!!」

シクルの腕を掴んだ男を見た瞬間なかつた力が湧き上がり、男を拳で殴り飛ばすナツ。

そのまま、男から離れたシクルを腕の中に抱き寄せる。

「シクルは俺んだ!!勝手に触ってんじやねえぞ、このやろお!!」

「ナツ……」

ナツの行動と言葉に驚くシクルだが、ふっと柔らかい笑みを浮かべ、ほんの少し、無意識にナツへと擦り寄る。

「……でえきてえるう……」

その光景を後ろから見ていたルージユはハッピーの真似をし、口に手を当てにやける

様な笑みを浮かべ言う。

(シクルとナツには聞こえていない…)

「ぐ、こ、この……………」

男が立ち上がり、ナツを睨みつけた時…

ガタンツ!!

列車が、止まる。

「お?と…止まった?」

「なんで……………止まって……………ん?」

ナツとシクルが突然止まった列車に不思議に思っていると止まった衝撃で男の懐から何かが落ちた。

男の懐から転がったのは三つ目の髑髏の笛だった。

男は笛を慌てて拾い、懐へとしまうとナツとシクルをきつと睨む。

「み、見たなっ…!?!」

「うるせえよっ!さっきはよくもやってくれたなあ…!!」

ナツはシクルから離れ、男を殴るため拳を握り、「お返しだ、このやろお!!」と怒鳴り、殴り飛ばす。

「ぐあ!!ぐ、この………!!!」

ナツが反撃を開始しようとした時だった…

『たいへんお待たせいたしました』

先ほどの警報は誤作動によるものと判明いたしました

まもなく、運転を再開いたします』

運転再開の案内が流れた。

「え? 運転再開?」

「何っ?! また動くのか!」

列車運転再開のアナウンスを聞いたナツは男など既に脳裏には無く、シクルとルージユの側へ駆け寄ると抱える。

「ちょ!?! ナツ!?!」

「わわあ…どーしたのお!?!」

「逃げんだよ!!これ動きだす前に脱出すんぞ!!」

驚くシクルとルージユにそう言い切るナツはシクルが蹴破った窓から脱出を試みる。

そして、丁度窓枠に足をかけようとした時列車が動き出す。

「うぷ……………!!」

「ちよ、ナツ……う……っ!? (あ……酔い止め切れた!?)」

「あいやあー!!シクルう、お薬切れちゃったア?」

列車がゆつくりと動き出すとナツだけでなく、シクルも口元を抑える。

実はシクルも乗り物に極端に弱いのだ……

ナツは足に力を入れ、窓枠から体を乗り出す。

ダッー!!

列車の外へ飛び出したナツ。

だが、飛び出した瞬間……………

ツルツルー!

「ふえ?」

「あっ!」

ナツがシクルを離してしまった。

「ちよおおおっと!?なんで離すのよナツのばかあああああつ!!!」

「だあああああつ!!しまったア!!」

慌ててナツがシクルの手を掴もうとするが…

「おい、くそ炎!!よけっ…!!!」

「あ、!?」

ゴチイイイインツ!!!

「いつてえええええええええつ!!!!」

ナツの救出に來たエルザ達が丁度列車の横に到着した瞬間で、魔導四輪車の上に乗っていたグレイと脱出をしたナツの頭が激突した。

結果、ナツはグレイと共に地面へ落ち、シクルはナツの手から離れたルージユが助けることで事なきを得た。

「ふあああ…し、死ぬかと思った…ありがとう、ルージユ」
「あい！」

「いつてえええ!!てめ、いきなり何しやがる!!」

強打した箇所を抑え、ナツに怒鳴るグレイ。

「今のシヨックで記憶喪失になっちゃまった!!!誰だおめえ、くせえ」

そう言いナツは鼻をつまみ、顔をしかめる。

「んなにい!?!」

「ナツーごめんねー」

ハッピーがナツに駆け寄る。シクルはルーシイの隣に下ろしてもらっている。

「ハッピーにエルザ!ルーシイひでえじゃねえか!!俺置いていくなんてよお!!」

ガルルツ!と声が聞こえそうなほど忘れられたことに怒っているナツにエルザが

「すまない」

と、いいルーシイが

「ごめん」

と謝った。

「おい…随分都合のいい記憶喪失だなあ…」

グレイ以外の名は綺麗に覚えているナツに眉間のシワをピクピクとさせ、苛ついているグレイ。そんな彼の肩を叩き、

「ドンマイ…頑張れグレイ」

と励ましているのか少し微妙なところのシクルの言葉。

「兎に角、無事で何よりだ、良かった」

ガンツ！

「硬……!!」

エルザの手により胸元へ頭を抱き寄せられるナツだが、エルザは生憎と鎧を着ている為、柔らかい感触はなく…鈍い音がナツの頭から響いたのである。

「うわいたそお…」

シクルが哀れみの目でナツを見る。

「いって…無事なんかじゃねえよ!!列車で変なやつに絡まれるしよー!!」

「変なやつ？」

エルザの問いにナツは先ほどの一悶着の中で聞いた言葉を思い出す。

「何つつたつつか………確か…アイゼン………バルン？」

「ナツ、アイゼン “ヴァルト” ね、バルンって何さ…」

「アイゼンヴァルト……はっ!!この、ばかものお!!」

ナツの言ったギルドの名は今、まさにシクル達が追っている闇ギルドの名だった。エルザはその事に気付कि、易々と逃がしてしまったナツへ、怒りの鉄拳を加える。
ドゴオーー!!

「いっ!!」

エルザにより、殴り飛ばされるナツ。

エルザは再び地に沈んだナツの胸倉を掴み起こす。

「貴様!!鉄の森は私達の追っている者だと話しただろう!!」

「はあ!!俺んなこと聞いてねえよ!!」

「何っ!!なぜ聞いていない!!さっき列車の中で話しただろう!!!」

列車での話を聞いていなかったナツを叱るエルザ。だが…

(…ナツが話聞いてなかったのはエルガが気絶させたからだと思うんだけど…

言ったら面倒くさそうだから黙っとこ)

先ほどまでの経緯を脳裏で思い浮かべながら深いため息をつくシクル。

「まったくと…で、そいつに何か特徴はあったか?」

一通り、説教をし終えたのかエルザはナツを離しシクルやルージユを見て問う。

「特徴……………ねえ…あ、確かあいつ三つ目の髑髏をした笛を持ってたと思うよ？」
 「持ってたねえ…ちよつと不気味だったよお」

シクルとルージュの言った笛というものに今まで黙っていた（啞然とし、会話に入れなかった）ルーシイがはつとした表情をし、ぶつぶつと何かを呟く。

「笛……………三つ目の髑髏……………ララバイ……………子守唄？……………呪歌……………死？……………そうか!!」

ルーシイは何かを確信づいた様子でシクル達を見て叫ぶ。

「それだ!!その笛がララバイよ!!」

呪歌……………死の魔法!!」

「なに?…どういう事だ、ルーシイ」

エルザからの質問にルーシイは頷き、自身の記憶に基づいた情報を話し始める。

ララバイ……………

それは大昔にいたと言われている黒魔導士

“ゼレフ”が作り出し魔笛へと進化させた

元は“呪殺”の為の道具の一つ…

笛の音を聴いた者全てを呪殺する道具…

“集団呪殺魔法

ララバイ”

「集団呪殺魔法だど!?!」

「マジかよ!?!」

「なんとということだ…」

ルーシイの話を聞き、グレイ、ナツ、エルザが驚愕の表情を浮かべる。

シクルやルージユ、ハッピーも深刻な表情を浮かべる。

「兎に角、今はあの列車を追おう!」

エルザはそう言うと、魔導四輪車へ乗り込み、「お前達も早く乗れ!!」と、シクル達に喝を入れる。

エルザの言葉に慌てて乗り込むシクル達。

乗り込む前にシクルは酔い止めを飲み込む。

オニバス駅の隣の駅、オシバナ駅へ魔導四輪車を飛ばし、急ぐエルザ達。

ギャギャギャッツ!!!

キイイイイッ!!!

「わあっ!!」

「っ……!ちよ、エル!!」

「エルザ!!飛ばしすぎだ!!」

魔導四輪車は、操縦者の魔力を使い走る物。

今、操縦しているのはエルザであり、先を急いでいるエルザは大量の魔力を消費しながらオシバナ駅へと急いでいた。

「こうでもしなければあの列車には追いつけない!!」

「でもエル!!そんなに魔力を使ったら後でいざと言う時に戦えなくなるよ!」

「しかもSEプラグが膨張してんじゃねえか!!」

「うっぶ……誰、か……おろ……して、くれえ……」

想像だけで酔ってしまえるナツにとって今の現状は地獄のような状況……最早、正常な考えは浮かばない様で、体を魔導四輪車の外へと出し、飛び降りようとする。

「ちよ!!ナツ!!落ちるよ!」

「ナツ!!やめなさいって!!」

慌ててシクルとルーシィで抑える。

「降ろしてえ……うぶ……」

「ね、ねえ！シクル、酔い止め持つてるんでしょ!? ナツに1つあげられないの!?!」
魔導四輪車に乗る前にシクルが薬を飲んでいたことを思い出したルーシイが、シクルに聞くが…

「あー……………あれ、私以外の方が飲むと逆に体調悪くしちゃうっていうか…だから、私しか飲めないんだよね…」

「そ、そう……………」

飲んで効果があるのなら飲ませてあげたかったが、逆に体調を壊してしまうのなら仕方ない…と、ルーシイは諦め、ナツが落ちないよう抑える事に専念する事にした。

そして、約5分後——

目的の、オシバナ駅へと到着。

到着すると駅では入場を規制する線が張られており、聞いてみると駅を闇ギルドに占拠されたとの事だった。

外で入場規制をしていた駅員の1人をつかまえるエルザ。

「君!! 中の様子は!?!」

「な、なんだね!?!君は!」

突然の事で駅員は戸惑う。すると…

ゴスツ!

「ぐは!?!」

「「ええ!?!」」

「おいおい…」

「エル……………」

答えに戸惑っていた駅員に頭突きを食らわせたエルザ。

そのまま、他の駅員に聞き回り、その度に答えられない駅員に頭突きし、気絶させていた。

「あ、あれって……………」

「あい…即答できる人しかいらないうってことかな…」

ルーシイとハツピーがその光景に震え上がりながら話す。

その後、駅員は全員倒れてしまい、結果、エルザ達は規制線を乗り越え、駅構内へ乗り込むこととなった。

乗り込む際、まだ酔いの冷めないナツを誰かが背負うことになるのだが…

「ちよ、ちよつと!?これあたしの役なの!?!」

何故かルーシイがその役に…

他のメンバーは既に乗り込んでいる。

「あーもー!!何であたしなのよお!!」

文句を言いながらも力を振り絞り、ナツを背負いシクル達の後を追う。

そして、シクル達が乗り込んだ先には……………

「なっ…!!」

「これは……………」

「「え…?」」

「……………軍が、全滅してる…」

「ひい!?!何これ…!?!」

「…うぷ……………」

シクル達の目の前には軍隊の小隊が全員傷つき倒れ、呻き声を上げている光景だった。

シクルは小隊の人達に近寄り、傷の具合を見る。

「……………大丈夫、命に関わる程の傷はないみたい……」

そう言ったシクルの言葉に一同はほっと胸を撫で下ろす。

「闇ギルドと言え、魔導士だ…魔法を使わない小隊では、話にならなかつたということだろう……」

エルザの言葉にシクルとグレイは頷き、シクルは腰を上げ、駅の奥を睨む。

「多分……この先にいる……」

「ああ……………行くぞー！」

エルザの声と共に駅のホームへと走る。

そして、ホームには……………

「「……！！」」

「ほう……」

「（こいつら……）」

数十人の闇ギルド、鉄の森の魔導士が集まっていた。

その中央……空中に浮かんでいる一つの影……

「クククツ…やはり来たな…待ってたぜえ…

妖精の尻尾……………」

ニヤリと笑い、シクル達を見下ろす大きな鎌を持った男…

「……………エリゴール」

彼こそ……………今回の騒動の黒幕……………

鉄の森 エース…………… // 死神

エリゴール //

5話 100VS2

シクル達を見てニヤリと笑う男、エリゴール

「ヒヤハ…待ってたぜえ、ハエ共…」

先ほどの列車にいた男…「カゲヤマ」がニタニタと嫌な笑みを浮かべ言う。

「貴様がエリゴールだな…」

何が目的だ？返答次第ではただでは済まさんぞ!!」

エルザが一步前に立ち、エリゴールに声を上げる。

が、エリゴールはその覇気に気圧される事なく、更に高く空中に浮く。

「あいつ…浮いてる…」

「多分風の魔法を使うんだと思うよお…」

「クククツ…：まだ分かんねえのか？…：駅には何かがある…？」

エリゴールはそう言い、駅に設置されたスピーカーを叩く。

「っ!?貴様まさか…：ララバイを放送するつもりか!？」

「何っ!？」

エルザの言葉にグレイはエリゴールへと驚愕の表情を向ける。

「ふはははははっ!!!」

これは肅清なのさ!!!

権利を奪われた者の存在を知らずに……権利を掲げ、生活を保全している愚か者共への

……な

この不公平な世界を知らずに生きるのは罪だ……よって死神が罰を与えに来た

”死”というなの罰をな!!」

「なんて勝手な……元はと言えば自分たちが決まりを破ったからでしょーが……!」

ルーシイがナツを床に寝かせ、エリゴールに怒りをぶつける。

ルーシイの隣ではハッピーも「そーだそーだ!」と声を上げ、ルージュもシクルの横

で頷いている。

「そんなことしたって権利が戻ってくるわけでもないのにねえ……」

「ククツ……ここまで来たら欲しいのは“権利”ではない……“権力”だ!!」

権力があれば全ての過去を流し、未来を支配することさえ出来る!!」

「アンタ……バツカじゃないの!？」

エリゴールの語った話に嫌気がし、声を荒らげるルーシイ。その横でシクルはじつと

エリゴールを見つめ、そしてはあ……とため息をついた。

「めんどくさ……結局ギルドが解散になったのはあなた達が規則に逆らったから……：確かに自業自得じゃない……：それを、評議会のせいにして……逆恨みもいいところだわ」

シクルの言葉にピクツと反応を小さく見せ、顔を歪ませるエリゴール。

「黙れ小娘エ!!」

「残念だったな、ハエ共！」

闇の時代を見ることなく死にまうとは!!」

声を荒らげたエリゴールに代わり、カゲヤマが魔法を繰り出し、ルーシイへと攻撃を向ける。

「きゃっ!?!」

「しまったっ!!」

「ルーシイ!!」

突然の攻撃に反応の遅れたルーシイは顔を腕で覆い、痛みに耐えるため身構える。

その時——

瞬時にシクルがルーシイの目の前へ移動し、右手を構え……横に振るうと……：

スパンツ!!

カゲヤマの攻撃が真つ二つに斬れる。

ぱあつとルーシイの表情に笑みが見られる。

「シクル!!」

シクルの手により攻撃を消されたカゲヤマだが、表情は余裕のまま…

「甘いなあっ!!」

カゲヤマのその声と共に次は左右から影の魔法で作られた大きな手がシクルへと襲いかかる。

「「シクルっ!!」」

ルーシイ、ハッピー、ルージュが慌てて声を上げるがシクルはふつと目を閉じ――

「遅いよ………ナツ」

ボゴオオオオッ!!!

シクルに向けられた影の手をナツの炎が焼き消した。

「ふつかああああつ!!今度は地上戦だな!」

「ナツ!!フン こっちは妖精の尻尾最強チームよ!!覚悟しなさい!」

ナツが復活したことによりルーシーは誇らしげにエリゴールへと声を上げる。

睨み合う両者……少しでも動けばその瞬間衝突が起きる……そんな状況の中、エリゴールが動く。

「後は任せたぞ……俺は笛を吹きに行く……」

そう言い、エリゴールは高い窓ガラスを割り、隣のブロックへと姿を消した。

「あ!待っててめえ!!逃げんのかこらあ!!」

「クソツ!!向こうのブロックか!!」

「くっ……ナツ!!グレイ!!2人で奴を追うんだ!!」

エルザの指示にナツとグレイはお互いに顔を見合わせ「む……」と睨み合う。

「お前達2人が力を合わせればエリゴールにだって負けるはずが無い……」

「むむむ……」

未だに返答のない2人に痺れを切らしたエルザ……

「聞いているのか!?!」

と、怒鳴ると……2人は瞬時に姿勢を正し、敬礼をする。

「あいー!!」

「エリゴールはララバイをこの駅で放送するつもりだ…それだけは何としても阻止しなければならぬ……ここは私達が引き受ける、行け!!!」

「あいさー!!!」

「最強チーム解散ー!!!」

エルザの気迫に負けた2人は即座に返事をし、エリゴールの後を追った。

そんな2人を鉄の森からはカゲヤマともう1人、レイユールという男が追いかけて飛び出していった。

3人いなくなったがまだ数十人はいるであろう鉄の森の魔導士達。

「こいつらを片付けたらすぐに私達も追うぞ!!」

「ちよ…!!この人数をあたし達が相手するのお!!」

「うへー…めんどくさあい…ここエルに任せていいよね? いいよね? ね?」

鉄の森の前にエルザは構え、ルーシイは震え、シクルは端の方へ寄り座る。

「とうか、シクルも戦つてよ!!」

「えー? やーだよ…めんどくさい………」

「めんどくさいで片付けないでくれませんか!」

ルーシイの叫びにも動こうとはしないシクル。

「ルーシイ、諦めろ…いつもの事だ…（それに、いざとなれば何も言わずに動くだろう…）」

「女3人で何が出来るやら…」

「いや、私やらないって…」

「それにしても3人共いい女だなあ…」

「ねえ? 私の話きーてる?」

「殺すには惜しいなあ…」

「とっ捕まえて売っちまおうぜ!」

「いやいや、その前に妖精の脱衣ショーだろ!!」

そう言つてニヤニヤと嫌な表情でエルザ達を見る鉄の森の魔導士達。その様子にエルザ達は顔を歪ませる。

「下劣な…」

「はあ…きもちわる……てか誰も私の話聞いてないよね?」

「可愛すぎるのも困りものね…」

「一人類に手を寄せ、どこか別の世界へ行っているルーシイ。」

「ルーシイ戻ってきてー」

「ルーシイ壊れたあ?」

そんなルーシイの頬を叩き、正気に戻そうとするハッピーとルージユ。

「それ以上、妖精の尻尾を侮辱してみろ…貴様らの明日は約束できんぞ…」

そう言い、鉄の森の奴らを睨みつけるエルザは片手に魔法剣を出現させ、握る。

「剣が出てきた!?!魔法剣か!」

「一人の魔導士が驚きの声を上げるが他の魔導士が喝を入れる。

「怯むな!!珍しくもねえ!」

「そうだ!こつちにだつて魔法剣士はいるんだぜえ!!」

「へへっ!その鎧、ひんむいてやらあ!!」

そう叫び、一斉にエルザへと突つ込む鉄の森の魔導士達。

だがエルザは臆することなく、逆に魔導士達の懐へと走り込む。

「あ、あの人数を相手にエルザー一人じゃあ…!!」

分が悪いと思ったルーシイは加勢しようとするが…それをシクルが止める。

「大丈夫だよ…エルがあれくらいにやられる訳ないよ…見てな」

「……………え？」

シクルの言う通り、エルザの方へと目をやるルーシイ。

その視界に映ったのは……………

緋色の髪を靡かせ、敵を次々と薙ぎ払うエルザの姿。

エルザは敵を薙ぎ払う度に武器を変え、剣から槍、槍から斧…斧から双剣と言った様子で、その速さは異常だった。

「こ、この女……………なんて速さで『換装』するんだア!？」

「…換装?」

「魔法剣は別空間にストックされている武器を呼び出すって原理なんだ。その武器を持ち替えることを『換装』って言うんだよ」

ルーシイの疑問にハッピーが答える。

「へえ…すごいなあ……………」

ルーシイは感嘆の声を上げるがその横で誇らしげにハッピーに続きルージュが説明をする。

「エルザが凄いのはこれからだよお

魔法剣士は通常〃武器〃を換装しながら戦うんだけどお：

エルザは自分の能力を高める〃魔法の鎧〃も換装しながら戦うことが出来るんだよお」

「鎧も…!?!」

「あい！それがエルザの魔法、^{ザ・ナイト}〃騎士〃です！」

ハッピーがそう言った瞬間、エルザは鎧を〃天輪の鎧〃へと換装させる。

「わあ!!」

「舞え、剣たちよ……………」

エルザがそう唱えるとエルザの周りで剣たちが踊るように回り、そして敵を斬り裂き、一掃する。

「天輪!! 〃循環の剣〃^{サークル・ソード}!!!」

「!!!」
「ぎゃあああああああつ!!!」
「!!!」

「おー…流石、エル」

エルザの攻撃により、敵は半分程まで減少した。

そして、エルザは攻撃を止め、シクルへと振り返る。

「…シクル」

「ん？………え？残り私やんの？」

シクルの問いに何も言わずただ見つめるだけのエルザ。

だが、その瞳はやれと言っている…

シクルははあ…と深く溜息をつき、腰を上げる。

「めんどくさいなあ………一瞬で終わらせていーよね？」

「ああ、構わん」

エルザからの許可が下りたシクルは、んーっ！と一度背伸びをしてから、ゆっくりと

深呼吸をする。

「はあ…じゃ、悪いけど一瞬で終わらせてもらおうよ？めんどーだし」

そう言ったシクルの表情はどこか楽しげに笑みを浮かべている。

「…シクル………」

ルーシイが心配そうにシクルを見つめっていると、その肩にルージユが乗り、言う。

「大丈夫だよお、シクルは強いからあ」

「ルージュ……」

「それより、多分本当に一瞬で終わっちゃうと思うからさあ……ちゃんとしつかり見ておいた方がいいよお」

「……え」

ルージュがそう言い、ルーシイはシクルの方を見つめる。その瞬間……

「月竜のお………咆哮オ!!!」

シクルの口から銀色の光が放たれ、敵を本当に一瞬で一掃した。

その威力はナツの何倍か………ルーシイには測りきれず、ただ啞然とその光景に目を奪われた。

「す、す………」

「ひい……こ、この……バケモノお!!」

シクルの魔法から難を逃れていた数人の魔導士がシクルへと魔法を飛ばす。が、シクルはその光景を慌てることなく見つめ、そして………ため息をつく。

「あ………めんどくさい……疲れた………」

シクルはそう呟くとふっと目を閉じる。

そして――

カッ――！！！！

グオオオオオオオオオオオオツ
！！！！

シクルが敵を睨むと放たれた魔法は一つ残らず消え去り、敵の目には耳をつんざく様な鳴き声を轟かせる巨大な銀色に輝く竜が見えた。

「ひ……………」

「あ……………ああ……………」

その光景を目にした瞬間、残っていた敵が全て倒れ、失神した。

「な……なに……………今の？」

今日の前で起きた現象……その光景に何が起きたのかわからない様子のルーシイ。

「今のはシクルの魔法の一つ……………『月竜の眼光』だ」

「月竜の……眼……光？」

訳の分からないルーシイに説明をするエルザ。

「ああ、竜と同じ威圧を全身からオーラののように発し、敵を威嚇、戦意を喪失させる…そして、ほぼ全ての魔法を無効化する」

「す…す…」

そのエルザの言葉にルーシイはシクルを見つめる。

「……………ふう…疲れたあ……………」

長く深い溜息をつき床に座り込むシクル。そんなシクルに近寄り、肩を叩くエルザ。

「お疲れ……………流石だな、シクル」

「んー…へへ、エルの方がすごいと思うけどなあ…」

「ひい!?ま、間違いねえ……………こいつら、あの噂の!!」

倒れていた鉄の森の何人かが意識を取り戻し、エルザとシクルを目に入れると悲鳴を上げる。

「あ、あいつ……………!妖精の尻尾最強の女!!妖精女王のエルザだあ!!!」

「ちよつと待て!!あ、あつちはあの……………第二の妖精の尻尾最強の女!妖精の姫のシクル」

!!!

「ひいひいひい!?!」

エルザとシクルの正体に気付いた彼らは引き腰で逃げ去る。

「あ、逃げた…まだ動けたんだア…鈍ったかな?」

逃去る後ろ姿を見つめ少ししよんぼりとするシクル。その隣でエルザが少し表情を険しくし、呟く。

「もしや、エリゴールの下へ向かうやもしれん…ルーシイ! 追うんだ!!」

「えー!? あたしがあ!?!」

突然指名されたルーシイは非難の声を上げる。が、エルザがギロツと睨みつけ、「頼む…!」と念を押すとルーシイは慌てて逃げた奴らの後を追う。

「…ハッピーとルージュもルーシイについて行って」

ルーシイを心配したシクルがそう言うのとハッピーとルージュは嫌な顔をせず、ルーシイの後を追いかけて、消える。

その瞬間…

ガクッー

「くっ……！」

エルザが膝をつく。

その様子にシクルははあと溜息をつき、肩を貸し、壁へと寄せる。

「まったく……もう魔力がないんでしょう？ エル……」

「だ、大丈夫……だ……それより、早く……外の奴らの避難……」

そう言い、無理に立ち上がろうとするエルザを片手で止めるシクル。

「だーめ、エルはここで少し休んでなさい。避難は私がやっつくから……ね？ 無理しないで大人しく留守番しててよ？」

シクルにそう言われ、むっとした表情をするが、すぐに諦めたのかはあと溜息をつき、エルザはシクルを見上げる。

「すまん………回復したらすぐに向かう……頼めるか？」

エルザの言葉ににっと笑みを浮かべ、頷くシクル。

「任せて!!」

そう言うのと、駅の外へと走り去るシクル。

シクルがいなくなると、エルザは駅の天上を見上げる。

「……………私もまだまだだな……………まったく……………」

6話 死神、歌姫攫う

オシバナ駅 外——

シクルが駅の外へ出るとそこには何が起きたのか気になる様で、野次馬が沢山いた。「うっひやあ…何したらこんなに集まるのかなあ…」

シクルが頭を掻き、野次馬達を見下ろしていると…一人の街人がシクルに気づく。

「あ、お、おい!!誰か出てきてるぞ!!」

「君は…さつき強引に中へ入った人だね?中はどうなっているんだい?状況は!」
街人の声にシクルの存在に気づいた駅員がシクルへ駆け寄る。

シクルはめんどくさい…と言った面持ちで駅員を見てからその手に持っている拡声器を掻つ攫う。

「あ、ちよ君……………」

「ちよつと借りるよ? (エルの感じで…………)」

すう…………お前らあああつ!!命の惜しい奴は今すぐここから逃げろお!!!

「駅は闇ギルドの魔導士達に占拠されている!! 奴らはここにいては全ての人間を殺すだけの強力な魔法を持っている!!」

「早く逃げるんだ!!」

シクルの叫びに恐怖した野次馬達は一目散に散り散りに逃げ去った。

「き、君!!? 何故そんなパニックになるようなことを…!!」

突然、辺りが混乱するような話を叫んだシクルに詰め寄る駅員だが、シクルは真剣な眼差しで駅員を見据える。

「今の話は嘘じゃありません…あなた達も、命が惜しければ早く逃げてください…ここは、私達が何とかしますので…」

シクルの話を聞いて「ひい…」と悲鳴を上げ、駅員達も逃げていく…。

「ふう…（これでこの辺の避難は何とかかなったはず…あとは…）エリゴールがどう動くか…」

「……………でも……………」

「…本当にララバイを放送するのが目的なの…?（駅には他の仲間がいるのに…?他に

目的が………）…んー…なんか面倒くさくなってきた…とりあえず、エルのところに戻ろつと…」

そう呟き、くるつとシクルが駅の方へ振り返った時…

ゴウツと音と共に駅が大きな竜巻に包まれていた。

「なっ………!?風の境界…?なんで………」

まるで…誰も近寄せない様にするみたいに吹く竜巻………否、これは………

「…中の人を外に出ないようにする為?」

そう考え、ある事に気づきかけた時

「シクルっ!!」

竜巻の向こうからエルザの声が聞こえた。

「エル!そこにいるの?休んでてって言ったのに…」

「もう充分休んださ…それで、お前が遅いので少し気になってな…様子を見に来てみたら………これは何だ?一体…」

丁度エルザも外に出ようとした瞬間に駅が竜巻に包まれ、出れなかった…という事の

ようだ。

「エル！兎に角この風には触れないで！恐らくこれを突破するにはこれ自体を解除するかあるいは……………」

そう、シクルが風の結界の突破口をエルザに指示している時だった…シクルの背後に影が現る。

そして――

ガシツ――

「へ？」

「これはこれは……………妖精の姫…月の歌姫様ではありませんか……………何故ここに？ああ…外の野次馬共を逃がしたのは貴様か…」

「っ?! エリゴールっ!!!」

シクルは突然背後に現れたエリゴールの腕により、脇に抱えられる様な状態で持ち上げられる。

「エリゴールだ?! シクル!!」

シクルの声が聞こえたのか、エルザに焦りが見られる。

「クククツこりやあいい……………歌姫の歌声は特別と聞く…いいか、歌姫は俺がもらう…」
「はア!? 何勝手な事言ってるのよ!? 私があなたのものになる訳ないでしょ!」

エリゴールの言葉に抗議するシクルに鎌の刃を向け、睨みつけるエリゴール。

「黙れ小娘……………貴様に拒否権などない…」

いいか、ハエ共……………歌姫は俺が貰う…

貴様らはその魔風壁の中で何も出来ずにただ指をくわえ見ておけ…クククツ」

「っ!! 待て、エリゴールっ!!」

エリゴールの言葉に慌てて魔風壁の外に出ようとしたエルザだが…

バチイイイ!!

「っ!! ぐっ……………」

魔風壁に遮られ、出ることが出来ず魔風壁に当たった腕が傷だらけになった。

「エルっ!!」

「クククツ…鳥籠ならぬ、ハエ籠…か? ああ、にしてはちつとでけえか? まあいい…少々時間も押しているからな…俺はこれで失礼させていただくぜえ……………あばよ、妖精女王

…」

「はーなーしーてええええ!!」

エルザの耳に最後に聞こえたのはエリゴールの高笑いとしクルの大きな叫び声だった。

エリゴールの高笑いが聞こえなくなると完全に魔風壁の外から2人の気配が消えてしまった。

エルザはゴツ!と地面を殴る。

「クソツ!!なんという事だ…シクルがつ!…否、まずはここを抜け出すことを考えるか…しかし、奴らの目的は…狙いはこの駅ではないということか…?…エリゴールの狙いは…一体……」

自身に言い聞かせるように呟き、落ち着きを取り戻したエルザはエリゴールの狙いを考える。

そして、エリゴールの気配が消えていった方を見つめ、ある事実気づく。

「…待て……この先は…クローバーの街……」

奴らは6年前正規ギルドから追放されている…恨むのなら正規ギルドだ……まさか、奴らの狙いは……!」

ギルドマスター……………

「奴らの狙いはマスターかつ!!」

「エルザ!!」

エリゴールの狙いに気付いたエルザの耳にグレイの声が聞こえる。

声のする方を振り返ると傷はないも少しホコリのついた顔を見て戦闘があったのだな、とエルザは思う。

「グレイか……どうやらそちらも無事のようにだな」

「ああ、けどこりやあ一体なんだ？」

グレイはエルザに魔風壁について聞き、エルザはここまでの経緯を説明する。

「はア!? シクルがああの野郎に連れてかれた!?!」

「ああ……私がいながら……情けない! しかも奴はギルドマスターの命を狙っているはずだ……急いでこの結界から抜け出さんと………」

そう言い、グレイを見たエルザはその近くに桜髪がないことに気づく。

「そう言えばグレイ……ナツはどうした？」

「あ? ああ……あいつとは途中ではぐれたんだよ多分あいつも今頃他の誰かと戦ってるかもしれないねえが……」

グレイの言葉に頷くエルザ。

「そうか…恐らくナツの事だ…大丈夫だと思おうが…」

「あ！そう言えば、鉄の森のヤツらの中に解除魔導士デイスベラーがいた筈だ!! 確か名前は…カゲヤマ」とか言ったか？」

カゲヤマ…その名に、ナツを追った敵の1人がエルザの脳裏に過ぎる。

「ララバイを1人で解除したというやつか！

ならば急ぐぞ、ナツと戦闘しているやもしれん!!」

エルザの言葉にグレイは頷き、2人でナツの搜索を始めた。

その背後で2つの影が動いていたことを2人は気づきはしなかった…。

一方、エリゴールに連れてかれたシクルは…

「ねえー…ちよつとー…もちよつとゆつくり飛べないのお…? (てかゆつくり飛んでお願いだから…酔ってきた…うぷ)」

「黙れ…小娘貴様は今や人質と言っても過言ではないんだぞ…」

小脇に抱えられているシクル。

彼女の的には乗り物酔いと同じ症状が徐々に始めているため速度を落としてもらい
たい様子だが…もちろんエリゴールが聞き入れるわけもなく……

がつくりと肩を落とすシクル。

が、その裏ではエリゴールの狙いを考えていた。

「……………（この先は…クローバーの街…確か今日はあの街でマスターたちの定例会が
あったはず……………そうか、エリゴールの狙いは…）」

あなた、マスターの命が狙いね？

オシバナ駅でのあれは私達に悟らせない為のフェイクって事ね…」

シクルの指摘にほうと感心した様子のエリゴール。

「流石…歌姫と言ったところか？ますます魅力的だなあ…」

ゾワワツ

「あ、あなたに気に入られたってなんとも思わないわよ!?(と言うより気持ち悪い!!お
願い早く解放してこいつから今すぐにでも離れた方がいいっ!!)」

エリゴールのニヤリとした笑みを見てシクルの背筋を寒い何かが駆け巡る。

「だが今のお前には何も出来まい…大人しくマスター共がやられるのを見ているがいい

…」

エリゴールはシクルの首に着いている首輪を見てそう言う。

「…はあ」

シクルの首につけられているのは魔法を使えなくする道具。だが、シクルにとつてはこの魔力石を破壊するのは正直容易いものなのだ。

が……………

「…（壊すのめんどくさい……………）」

という理由で破壊せずにいる…。

（ヤバくなったら壊そう…それまではこのままでいいや…）

この言葉を聞いたならこんな時まで面倒くさがるな！と誰かさんに叱られそうだな…
と思いつつも、行動を起こすことはせず、流れに身を任せることにしたシクルであつた…。

オシバナ駅、エルザ達の方へ戻り……

ボガアアン!!!

駅の構内から爆発音が響く。その音を聞きとつたエルザとグレイははつとお互いに顔を見合わせる。

「今の爆発…ナツだな」

グレイの言葉に頷くエルザ。

「ああ、急ぐぞ!!」

エルザの声と共に爆発音のした場所へと走る2人。

そして、爆発音のした場所に着くと…

丁度ナツが解除の魔法が使えるカゲヤマに1発、鉄拳を食らわせる寸前の場面に出くわした。

「待てナツ!!それ以上はもういい!そいつの力が必要なんだ!!」

「んア!?エルザ?グレイ?」

エルザの大声を聞き、拳を止めるナツ。

ナツとカゲヤマの所へ駆け寄る際、グレイよりも速く駆けたエルザがその勢いのままカゲヤマの真横へと剣を壁に突き刺す…。

キーンツ!!

「ひい!?!」

「魔風壁を解除してもらおうぞ…拒否権はないと思え……………」

エルザに凄まれ、震えるカゲヤマだがプライドは捨てきれず…

「へっ…俺はやらねえよ……………」

と、エルザに反抗する。

「……………ほう？」

カゲヤマの反抗を聞き、エルザは更に目を細めると…

ザシユツ—

「え…」

カゲヤマの右頬を少し、剣で傷つけた。

「さあ……………早くしろ…さもなければ、傷が増えるだけだぞ…」

「ひい!?わ、わかった!いう!言うからっ…!!」

先ほどまでの威勢はどこへやら…完全にエルザの気迫に負けたカゲヤマ。

「ひい!こええ!!やっぱエルザはあぶねえ!!」

「今更だろ、んなこたあ…黙ってる、クソ炎」

エルザとカゲヤマのやりとりを見ていたナツとグレイは互いに身体を震わせながらほんの少し、カゲヤマに同情していた。

カゲヤマの返答を聞き、剣を消すエルザ。

そして、カゲヤマが解除方法を話そうとした時だった……

「あの魔風壁を解除すればいいんだろ……やるよ……や………っ!?がはっ!!!」

突如、ドパツ!とカゲヤマの背から真っ赤な血が吹き出した。

「なっ!?!」

「っ!!カゲ!?!」

エルザの叫びに答えることなく、カゲヤマは地に倒れる。

その背後には鉄の森の1人……グレイを追い、グレイにやられたレイユールという男が短剣を持ち、手をカゲヤマの血で染め震えていた。

「な!あいつ!!さっき倒して気絶させた筈の!!」

「あいつっ!!自分の仲間をっ……!!」

「カゲ!!しっかりしろ!!」

レイユールは血で濡れる自身の手を見て震え、仲間に言われた「カゲヤマを殺せ」の指示通り動いてしまい、恐怖していた。

結果、レイユールは自分の仲間を傷つけたことに激怒したナツが殴り倒し、その音で

離れていたルーシイ達も合流。

カゲヤマは早急な応急処置のお陰で何とか命に別状はないと言った状態だった…が
………

「まずい………このままでは魔風壁の解除が…」

壁に寄りかからせ、休ませているカゲヤマを振り返り、エルザは嘆く。

すでにカゲヤマに魔風壁を解除する力は残ってはいない…

「うおおおおおっ!!!」

バギギギギイツ!!!

エルザやグレイ達の横ではナツが必死に魔風壁を抜け出そうと体当たりし、その都度吹っ飛び、傷ついている。

そんなナツを止めるルーシイ。

「止めなさいって!!ナツ!!」

「止めんな、ルーシイ!!早くあのそよ風野郎を追わねえと!!シクルもアイツに捕まってるんだろ!?!助けねえとだろ!!」

「落ち着けナツ!!焦ってもどうにもなんねえだろ!!」

グレイも怒鳴り、ナツを止める。ナツは唇を噛み、やりきれない表情を浮かべる。

「んー…何かこの結界を出れる方法があればなあ…あ、地下とかはどうなのかなあ…？」
ルージュがエルザの肩に座り、何気ない一言を発した時だった……

「ああー……!!!」

「「「「つつつ?!」」」」

ハッピーの叫び声が響く。

「何よ!?こんな時に!!!」

「ル、ル、ルーシイ!!!こ、これ!!これがあつたよ!!!」

ハッピーの頬を抓るルーシイにハッピーから差し出されたのは……

「え…これ………処女宮の鍵!」

これが突破口となるか………

そして、シクルやマスター達の運命は…

次回、風と火の激突、始まる。

7話 歌姫奪還

ハッピーが懐から出したのは以前ナツとハッピー、ルーシイの3人で初めての依頼に行った際に敵が使っていた黄道十二門の鍵 処女宮 バルゴ”のだった。

「これって…バルゴの鍵!?ダメじゃないハッピー!勝手に持つてきちゃあ…!」
「違うよ!!バルゴ本人がルーシイにとって!」

頬を抓られながらもここにバルゴの鍵がある理由を話すハッピーの言葉に「ええ?」と抓る力を弱めるルーシイ。

「バルゴ?…ああ!!あのメイドゴリラか!」

バルゴが誰だったか思い出した様のナツはポンツと手を叩き、「あいつ強かったよな—!」と叫んでいる。

「あの時、エバルーが逮捕されて契約が解除されたんだって。それで今度はルーシイと契約したいってオイラ達の家を尋ねてきたんだ」

そう言い、はいつとルーシイに差し出してくるハッピー

「あ、あれが来たのね……………」

ルーシイとしては脳裏に残る巨体の星霊メイドが黄道十二門の鍵だとしてもあまり嬉しくは思えなかった。

はあ、と溜息をつき、ルーシイはハッピーの差し出してくる鍵を受け取らず、言う。

「ああ…ありがたい申し込みだけど…今はそれどころじゃないでしょ？早くここから出る方法を考えないとっ…！」

ルーシイに断られるとは思っていなかったハッピーは「え…でも…」と食い下がる。

が、ルーシイはむぎゆう!!とハッピーの頬を再び抓り、怒る。

「うるさいわよ猫ちゃん!?今はそれどころじゃないって言ったでしょ?」

「わあ…いたそお…」

むぎゆう!!と引つ張られるハッピーの頬を見て少し同情しているルージユ。

ハッピーはルーシイが離すと地面に倒れ、涙ながらに言った。

「だって…だってバルゴは地面に潜れるし…魔風壁の下を通って外に出られるかなって思ってたんだ…」

ハッピーのその言葉を聞き、突然ハッピーがバルゴの鍵を思い出した理由の合点がい

く。

「あ！そっか!!地面の下からなら抜けられるかもしれないってことね!」

「何!？」

「ほんとうか!？」

ハッピーとルーシイの言葉にエルザとグレイが期待の声を上げる。

「そっかあ!やるじゃないハッピー!!もう、何でそれを早く言わないのよ!」

「ルーシイが遮ったから」

ハッピーを抱き寄せ、先ほどとはまるで違う様子を見せるルーシイ。が、ハッピーはそれで許すことは無く、じとつとした目をルーシイへ向け言う。

「ごめんごめん!!あとでなんか奢るから奢らせていただきますから!!だから今はその鍵を貸してえ!!」

先ほどとは立場が逆転し、仁王立ちのハッピーにルーシイが頭を下げていた。

「あい、お魚でよろしくね」

「オーケー!任せて!!」

ハッピーからのリクエストに答え、鍵を受け取るとルーシイは魔力を込める。

「我、星霊界との道を繋ぐ者

汝、その呼びかけに答え、門をくぐれ！」

呪文を唱えると魔法陣が現れ、金色の輝きを増していく。

「開け!! 処女宮の扉 バルゴ!!」

魔法陣の中心から現れたのはエバルーに仕えていた時のメイドゴリラではなく、淡いピンクの髪が可愛さを増す美少女の姿だった。

「お呼びでしょうか? ご主人様」

「……………え?」

記憶に残っている姿とは明らかに違う容姿の彼女を見て、ルーシイは空いた口が塞がらない状態。

「おー!なんか痩せたな」

「いやいや、痩せたというより別人でしょ!?!」

呑気に「久しぶりだなー」と会話をするナツを他所にルーシイは未だにバルゴの姿に呆然としている。

「私はご主人様の望まれた姿になり、仕えさせて頂くのです」

ルーシイの疑問に答えたバルゴ。その説明でなんとなくだがルーシイも納得した。「へえ…」と、ルーシイがバルゴを観察していると横からナツが…

「でも前の方が強そうだったぞー？」

と、口を出してきた。

すると…

「そうですか？」

と、反応を見せたバルゴが体格を変えようとする。その事態に瞬時に反応したルーシイは慌てて止める。

「待つて待つて待つて!! いい! いい! そのままでいーから!!」

「そうですか? 分かりました、ではこのままで」

「兎に角、今は時間が無いのよ! 契約後回しでもいい!」

「分かりました、ご主人様」

ルーシイの頬みに快く応じるバルゴ。だが、ルーシイは少し頬を赤くし…

「てか、その「ご主人様」って…やめてよ…」

ルーシイにそう言われたバルゴの目に入ったのはルーシイの腰にある鞭…

「では女王様と」

「なんでよっ!？」

女王様も却下されたバルゴはでは、と続き

「では、姫と」

「うん、まあ…そんなところかしら?」

と、納得する。

「……………そんなところなのか?」

「…さあ?」

「…分からないねえ」

「どうでもいいから早くしろよ…」

「では、行きます!」

やや目的がズレていたがやっと本題に戻り、早速バルゴが地面に穴をあけ、地下を掘っていく。そして、数分も経たぬうちに魔風壁の向こう側へ穴が開通。

穴を通り、エルザ達が開通した先に出るとそこは丁度魔風壁の外側だった。

「よし、なんとか脱出には成功したな」

「ああ……ん？」

エルザの言葉に頷いたグレイは横に寝かせていたカゲヤマが意識を取り戻したことに気づく。

「う……こは……？」

「よお、目エ覚めたか？」

グレイに声をかけられ、辺りを見回し状況を理解するとフツと小さく笑う。

「ふん……今更魔風壁から出ても意味がない……」

今から出発してもエリゴールさんには追いつけないさ……僕たちの勝ちだ……」

「うるせえよ兎に角今はクローバーの街に急ぐぞ！」

「て、あれ？ナツは!？」

いざクローバーの街へ向かおうと行動を起こそうとした時、ナツがいないことに気づいたルーシーの声にグレイとエルザは周りを見る。

「ハッピーもいねえぞ！」

「あれえ？ホントだあ」

「あいつら……恐らく、先に行ったのだろう……私達も早く追おう！」

「ああ！」

「うん！」

エルザの指示でカゲヤマも連れ、魔導四輪車に乗り込む一行。

(ふん……どうせ今頃急いで向かったって無駄さ……)

カゲヤマはフツと怪しげな笑みを浮かべていた……。

場面変わり、エリゴールに未だ捕まっているシクルは……

「うー……おにーさあん、ちよつと休もー？」

完全に酔っていた……。

「黙れと言っているだろ、小娘……(それにしても、もう少しで定例会場につくな……) もう少し飛ばすか！」

「ちよつとー!?! 私は休もうって言うてるんですけどー!?! 飛ばすって何!?! 鬼!?! おにーさん鬼ですかあああああつ!?!」

シクルの叫びは虚しく、ギユンツ!と速度の上がるエリゴール。

あ……もうだめだ……と、シクルが思った……

その時……

おおおお………!!!

「っ!!」

声が…聞こえた…。

シクルは抱えられている状態でふっと顔を背後へと向ける。すると…

「待ててめええええ!!これがあ!!」

ハッピーのお…MAXスピードじゃあああああつ!!!」

「あいつさああああああつ!!!」

「なにイ!？」

ドゴオ!!「ぐあつ!!!」

猛スピードでエリゴールに激突する、ナツ。

あまりに突然のことで反応のできなかつたエリゴールはまともにナツの体当たりを喰らい、その拍子にシクルを離してしまう。

「わちよ!?!きやあ!?!」

「シクル！」

ガシッ！

宙に飛ばされたシクルをしつかりと掴まえ、抱き寄せるナツ。

「ナイスキャッチ!! ありがとナツ!!」

「じゃねえよ!! 何捕まってるんだよお前!!? 怪我は!!? 何もされてねえか!?!」

二ヘラと微笑むシクルに物凄い形相で問いただしてくるナツの気迫に少し引き気味になるシクル。

「う、うん…大丈夫だよ…何もされてないし怪我もしてないよ………あ、出来ればこれ壊してほしいかも」

シクルはそう言つて首に付いてる首輪を指差す。

「コレか? よっしや!」

ナツの魔力で首輪は一瞬で粉々に。

「わーありがとー」

ナツに礼を言いながら首元をさするシクルの膝の上にハッピーが落ちてくる。

「お、オイラも…とべな…い」

「ありやりや、ここまでMAXスピードで来てくれたんだもんね…そりゃ魔力切れにもなるか…ありがとね、ハッピー」

膝の上でへろへろになってるハッピーを撫でるシクル。

「き、きさまあ……………!!」

「ん?」

「あ?」

先ほどナツに吹き飛ばされたエリゴールが立ち上がる。

「このくそがきがア…何故ここにいる!?!どうやってあれを抜け出してきた!?!カゲたちはどうしたア!?!」

「んな事気にしなくたっていいだろ…なんせてめえはこれから…俺に負けるんだからよお!」

そう叫び、ナツはエリゴールへと攻撃を繰り返す。
が……………

ヒュンツ

「んなつ!?!」

ナツの炎はエリゴールに当たる前に消える。

「んなあ!?!なんだあ今の!?!」

「クククツ、火が風に勝てるわけねえだろ…」

「んのやろお!!舐めんなあ!!」

そう叫びナツは再びエリゴールへと行動繰り返す。

が、エリゴールはびくともせず…

「ナツ………変わる?」

その光景を見ていたシクルが首をコテンと傾げ、ナツに聞く。が、ナツは………

「いい!!こいつは俺が殴る!!シクルはそこで見てろ!!」

「んー?りよーかい」

どう見ても分が悪く押され気味のナツだが、ナツから見ると言われたシクルは動くことはせず、目の前の戦闘を眺めることにした。

「へへっ…燃えてきたア…!」

ニヤツと楽しげに笑を浮かべるナツ。

「クククツ、火が風に勝てるかよ…貴様は俺に攻撃することなく倒れるのさ…!」

怪しげに笑いながらいうエリゴール。

その周りには風が生きているように動いており、ナツの炎だけを綺麗に消していく。が、ナツは瞬間的に魔力を高めた瞬間……

ボゴオオオオオ!!!

「何?!ぐああ!!!」

ナツの炎が瞬間的に強く燃え上がり、エリゴールの身体を炎が包んだ。

「火は風に勝てねえだア?舐めんな、俺の炎は特別だ!んな、そよ風程度に負けるわきやねえだろ!!!」

「クツクツクツ……どうやら俺は貴様の力を少し見誤っていたようだな……」

そう言ったエリゴールの表情は徐々に歪み、嫌な笑みをしていた。

「小僧………こつからは本気の殺りあいだ……」

手加減しねえぞ、糞ガキ………」

「俺だつてなあ!!シクル連れていきやがつて腹立ってんだよてめえに!!俺がズタボロに

してやらアああ!!!
」

ここに…火竜VS死神の戦いが今…始まる。

8話 悪魔現る 聖なる剣

「クククツ 小僧、貴様はこの身体の俺に近づけるかあ…？ストームメイ暴風衣！」
エリゴールの身体を包むように風が巻きつき、まるでエリゴールが台風の中心のような状態になっている。

「ンだこりやあ!？」

「ありやりや…この風じゃあ余計ナツの炎が弱まっちゃうじゃん（まあ…見てろって言われたし、私は何もやらないけど）」

「クククツ どうだ？ 貴様のご自慢の火もこの風には勝てねえだろ？ 安心しろや…これ
でしめエにしてやる………エメラバラム翠緑迅」

エリゴールは胸の前でクロスさせた両手の指をナツへ向ける。

「翠緑迅だつて!?! そんなのくらつたら身体がバラバラになっちゃうよ!!」
ハッピーは力の入らない身体で飛ぼうとするも翼は出ず。

「ナツーーーーー！ 避けてえ!!」

ナツに叫ぶことしか出来ないハッピー。

そんな中、シクルはじつとナツとエリゴールを見つめるだけだった。

「くらえ!! 翠緑迅ッ!!!」

ズゴオオオオオオオオッ!!!!

エリゴールから放たれた翠緑色の風刃が嵐のようにナツに襲いかかるとそれは容易くナツを巻き込んだ。

そして、風が吹き止み、砂埃の晴れたところから見えてきたのは傷だらけで倒れるナツの姿。

「ナツッ!!!」

ハッピーはナツに駆け寄ろうとするが、シクルが止める。

「シクル…なんで…」

「いいから、よく見てなさい」

シクルの有無を言わせないような瞳に「うん…」と頷くハッピー。

「こりゃ驚いたなあ…この魔法をくらって原型を留めてられるなんてなあ…だが、このガキもこれで終わりだ……………」

エリゴールは倒れるナツを見て、笑いながらそう言う。とシクルの目の前まで飛んでくる。

「すぐにララバイを吹きに行く……」

歌姫は俺が頂く……どけ、猫……」

シクルの腕の中でエリゴールを睨むハッピーを睨みつけるもハッピーは臆することなく首を横に振る。

「どくもんか!!お前なんかシクルは連れていかせないぞ!」

「ほお?ならば貴様もあの小僧のようになりたいんだなあ………?」

ハッピーの反抗に魔力を高め、攻撃をしようとするエリゴールにずっと下を向き、言葉が発さなかったシクルがフツツと笑った。

「あ?何がおかしい……」

「あなた……腕に相当の自信があるようだけど………その程度じゃダメじゃない……ちゃん確認しないと……ね?」

そう言い、顔を上げたシクルはエリゴールを見てはいなかった。

その背後………

揺らめく炎と桜色の影……

「てめえ…………シクルに触んじやねえぞ…糞風野郎!!」

怒号と共にエリゴールを殴り飛ばすナツ。

「何!?ぐはっ!」

殴り飛ばされたエリゴールの立っていた場所にナツが立つ。

「ナツ—!」

立ち上がったナツを見て、嬉しく声を上げるハッピー。

「あそこまでやられて…このまま終わりなんて、良いわけ無いよね? ナツ…全力でぶっ飛ばしてきなさい!」

シクルの喝に「おうっ!!」と答え、エリゴールに再び突っ込むナツ。

「火竜の! 鉄拳!!」

ナツは炎手に纏いエリゴールを殴ろうとする。が…

「さつきは驚いたが…やはり風に火は勝てねえんだよおっ!!」

再び暴風衣を纏ったエリゴールに近づけなくなるナツ。

台風のような風に邪魔され、何度も吹き飛ばされるナツは次第にイライラを募らせ

…………

「だああああつ!!! んで攻撃が当たんねえんだよお!? 納得いかねええええええ!!!」

と叫び、怒り…徐々にその身に纏う炎の威力と熱量が増していく…

「は、魔力の無駄遣いか…（不気味なガキだぜ…感情で魔力が高まっている…こんな魔法…いや、待て？確か古代の魔法にこんな魔法が…否、まさか…）」

炎の威力が強まるナツを見てハッピーとシクルは顔を見合わせる。

「…ハッピー…もしかして…」

「あい…多分…」

2人は頷くとすつと空気を吸い込み、叫ぶ。

「ナツ…!!!」

「あ、あ!？」

「無理 ナツには無理だよ グレイに任せよ」

「あーあ…ナツが負けたら私はあいつのものになっちゃうなあー…」

2人の言葉に一瞬炎が掻き消えるナツ…

が、次の瞬間…

ドツゴオオオオオオオ!!!

「んだとゴラアあああ、あ、あ、あ、!!!」

巨大な炎の柱が天に向かい、吹き荒れる。

「な!?なんだ!？」

その異様な光景にエリゴールは驚愕の声を上げ、驚きが隠せない。

「グレイなんかには負けねえよ!!シクルは渡さねえ!!うおおおおおああ!!」

ナツの怒号と共に更に強く大きくなる炎：

すると…

「な、なんだ？暴風衣が…!?風が奴の方に流れていく…!?」

エリゴールの暴風衣が流されていく光景を見てハッピーとシクルはグッ！と拳を握る。

「よし！思ったとおり!!」

「あい！ナツの超高温な炎が周りの空気を温め、ナツを中心に上昇気流が発生し、低気圧を作り出したんだ!!」

「風は気圧の低い方へ流れる…いくら風が火を消すとしても、自然の理には逆らえなかつたみたいね！」

「うおおおおお!!吹っ飛ばえ!!」

火竜の………剣角—————!!!

炎を全身に纏い、ナツはエリゴールの懐めがけ飛ぶ。

「い、こいつ!?まさか…!?!」

反応の遅れたエリゴールはナツの攻撃をくらい、吹っ飛ぶ…。

…いたのか………本物の………滅竜魔導士………が…

エリゴールが倒れたことにより、声を上げ笑うナツ。

「かーかつかつ!!どうだエリゴールの野郎をぶっ倒したぞー!見たか!!」

「あい!さすがナツです!」

「ナツが負けるわけないもんねー」

エリゴールを倒したナツをハッピーとシクルが褒める。が………ナツははっと思いついた様にハッピーとシクルに詰め寄る。

「てんめ!!さっき俺のことバカにしてなかったかあ!?!」

「あい、猫の記憶力はしよぼいものなので」

「私もー記憶力には自信ないから覚えてないや」

テヘツと笑うハッピーとシクル。

「てめ!! さつき俺じゃ勝てねえからエルザがどうか言つてたじゃねえかあー!!」
「うわあ…猫よりしよばい記憶力…」

「んだとコラア!!」

「まあまあ、いいじゃない? 勝つたんだから! ね? 格好良かったよ、ナツ」
ナツを落ち着かせるため、肩を叩き褒めるシクル。

ナツは一瞬ほけ? つとした表情をするとポツ!! と顔を赤くし逸らす。

「お、おおう…」

「んえ? どしたの?」

顔を赤くしたナツを見てハッピーがニヤツと一言…

「…どうえきてえるう」

「うるせえ!!」

「ナツー! ハッピー! シクルー!!」

ギャーギャーナツが騒いでいると3人の耳にエルザの声が響いてきた。
声のした方を振り返ると…

魔導四輪車に乗ったエルザ、グレイ、ルーシイ、ルージュと他にカゲヤマがいた。

「エルザ！グレイ！」

「ルーシイ！ルージュ！」

ルージュはシクルの姿を見つけると魔導四輪車から飛び出し、飛びつく。

「わああ！シクルうー！！怪我してない！！大丈夫う？！」

「わ！ルージュ！…うん、大丈夫大丈夫何も無いよ…ありがと、ごめんね？心配かけて」

胸の中で泣くルージュをぎゅっと抱きしめ慰めるシクル。

「シクル！良かった、無事だったか！！」

シクルの下にエルザも駆け寄ってくる。

「エル！！て、いったたたたたっ?！」

エルザに抱きしめられるシクルだがエルザの鎧が肋に入る。

「ど、どうした!?どこか怪我でもしたのか?！」

「いったただだ!!強いて言えば今怪我しそううううう!!」

結局この後、シクルの顔色が悪くなってからグレイとルーシイがエルザを止めたこと

で事なきを得た。

「シクルう…大丈夫う?」

「げっほげっほ……こほ……し、死ぬかと思った……」
数分間、わいわいと話していたシクル達。

「とにかくこれで一応一件落着よね？」

ルーシイが嬉しそうにエルザに言い、エルザも頷いた……その時

ギユルツ!!

怪我をしていたはずのカゲヤマが魔導四輪車とハツピーの持っていたララバイを奪い去ると物凄いスピードで魔導四輪車を飛ばす。

「「なっ!?!」」

「「あー!!」」

「あーあ……」

「ハハハッ!!残念だったなあハエ共お!!ララバイは俺が頂いたア!!」

と、叫び声を残しクローバーの街へ走り去っていく魔導四輪車とカゲヤマ……

「しまった!!」

「何よあいつー!!折角助けてあげたのにい!!」

「まずい!急いで追うぞ!!」

エルザの言葉と共にカゲヤマを追いかけるシクル達。

そして、数十分後、定例会場近くにある森の中でカゲヤマとマカロフを見つけた。

エルザ達が急いでカゲヤマをとめにはいろうとすると…

「しつー!今いいところなんだから、黙って見てなさい」

と、止める声が…

声の主を振り返ると…

「あ、あなたは…!」

「ブルーベガサス青い天馬のマスターあー!」

「あれ?ボブじゃん、久しぶりー!」

エルザとルージュがその人に驚き、シクルは呑気に片手をあげ話しかける。

「あらー!久しぶりねえ、エルザちゃんにシクルちゃん!もー!2人ともすごく綺麗になっちゃってー…いいわねえ!」

オカマ口調の人物……

「…誰？この人」

ルーシイがシクルに聞く。

「この人は青い天馬のマスター “ボブ” だよ」

「へえ…」

「どうした？早くせんか」

突然現れた青い天馬のマスターに驚いていた一同だがマカロフの声が聞こえ、目的を思い出す。

「いかん！」

慌ててエルザが止めに入ろうとするが

「黙って見てろって」

と、再び止める声がし振り返ると

「あ！ゴールドマインだあ！お久ー！」

サングラスをかけた男、クワトロケルベロス四つ首の獵犬のマスター、 “ゴールドマイン” だった。

またもや軽い様子で声をかけるシクルに苦笑を浮かべるゴールドマイン。

「はは…おめえは相変わらずだなあ」

よく見るとゴールドマインの後ろにも定例会に出ていたギルドマスターがおり、マカロフの様子を伺っていた。

辺りに少し静けさが戻った時、マカロフの言葉が辺りに響き始める…。

「何も変わらんよ…」

「っ!？」

マカロフの言葉にカゲヤマははつとマカロフを見つめる。

「弱い人間はいつまで経っても弱いまま…」

しかし弱さのすべてが悪ではない…

元々、人間なんて弱い生き物じゃ…一人じゃ不安だからギルドがある…仲間がいる…

強く生きる為、寄り添いあって歩いていく…

不器用な者は人より多くの壁にぶつかるし、遠回りをするやもしれん…

しかし、明日を信じて踏み出せば、自ずと力は湧いてくる。

強く生きようと笑っていける…

そんな笛に頼らなくても……な」

「っ！………参りました」

マカロフの言葉が胸に響いたのか、カゲヤマはすつとララバイを手放し、俯き涙を流した。

事が解決するとエルザ達が一斉にマカロフの下へ駆け寄っていく。

「「「マスター!!!」」」

「じっちゃん!!」

「じーさん!!」

「ぬお!?お主ら、何故ここにい!?!」

突然現れたエルザ達に驚くマカロフ。

「流石です!今の言葉、胸が熱くなりました!!」

ガンっ!

「いたアっ!」

感動のあまりエルザは勢いよくマカロフを抱きしめるがエルザの服装は鎧…鈍い音がマカロフの頭から聞こえる。

「じっちゃんすつげえなあ!」ペチペチ!

ナツはマカロフの頭を叩きながらそう言う。

「すごいと思うのならペチペチせんでくれ!」

「これで一件落着だな！」

「だね！」

「あい!!」

グレイヤルーシイ達がお互いに顔を見合わせ、笑みを浮かべ喜んでいると…

「……………まだだよ」

シクルの声が聞こえる。

「……………え？」

シクルの睨む先には……………地面に転がったララバイが…

すると…

ギロツ!!

ララバイの目が怪しく光ったと思うとー

『カカカツ　どいつもこいつも情けねえ魔導士共だ…もう我慢出来ん…我が自ら、喰らってやろう……………』

貴様らの、魂をなアアアツ!!!』

嫌な声が辺りに響き渡り、ララバイは巨大な怪物へと姿を変えた。

「「「か、怪物うううううっ!」「」」

「これは…!?!」

「…『ゼレフ』書の悪魔……」

「本性を現しやがったな」

ナツたちが叫び、エルザはシクルに視線をやり、シクルは怪物を睨みつけ、ゴールドメインも苦々しい表情を浮かべる。

「一体どうなっているの…?」

ルーシイが戸惑いの声を上げる。

「ララバイとはつまり、あの怪物そのものの事を言うのさ…ララバイ…生きた魔法…それが、ゼレフ書の悪魔さ」

答えたのはゴールドメイン。

「ゼレフだと!?ゼレフって確か大昔の…」

「…ゼレフ………黒魔導士ゼレフ、魔法界の歴史上最も凶悪だった魔導士…」

グレイの言葉に答えを出したシクル。

…そして………きつと今もどこかで生きている…

『さあて……………どいつの魂から頂くこうか…』

決めたぞ…全員まとめて喰ってやる!!』

ララバイの言葉に慌てるギルドマスター達。

だが……………

ニヤツとマカロフが余裕の笑みを浮かべる。

その瞬間…

「行くぞ!!」

「おおっ!!」

エルザ、グレイそしてナツの3人が動き出す。

「換装!!」

その声と共に鎧を変え、武器を手にララバイを斬り裂くエルザ。

「ほまつ! 換装の魔法か!」

「うおりやあ!!」

エルザに続きナツがララバイの体をよじ登るとその顔面を蹴り上げ、後方へと倒す。

「何じゃあの蹴りは!? 魔導士の蹴りなのか!」

鬱陶しく感じたララバイがナツに向け攻撃を出す。ナツは避ける。その後方にはギルドマスターやシクルの姿が…

「ま、まずい！当たるぞ!!」

1人のギルドマスターが叫ぶ。その時――

「アイスメイク……………」
盾^{シールド}!!

グレイが立ちは大だかり、魔法を繰り返す。

「造形魔法!?だが間に合わん!!」

叫び声が響くが、その言葉は当たらず…

ギイイイインツ!!!

グレイの魔法は間に合い、ギルドマスター達の身を守る。

「おお!!一瞬でこれだけの造形魔法を!!」

「造形魔法?」

ルーシイの疑問の声。

「魔力に『形』を与える魔法だよお」

「そして、形を奪う魔法でもある……」

ルージユとハツピーの言葉にゴクツと息を呑むルーシイ。

「アイスメイク……………」 槍騎士《ランス》 “!!”

グレイの魔法がララバイの下半身を吹き飛ばす。

「す、すごい!!!」

「さっすがグレイ!!!」

ルーシイとシクルが感嘆の声を上げる。

すると……………」

「シクル、お前も手伝え」

と、エルザの指示が入る。

「え? ええー…私がア?」

シクルは溜息をつき肩を落とすがエルザからの「やれ」の一言で立ち上がり…

「はいはい…やればいいんでしょ? あーめんどくさ…」

と、呟くと……………」ララバイを睨み上げ……………」

「…召喚 聖なる剣……………」

一本の剣を取り出す。

「え？シクルも換装を!？」

ルーシイはその事実には驚きの声をあげるがその声に答える声はなく…

シクルは目を瞑ると、呪文を唱え始める…

「我　　月の名の元に　　邪なる悪しき力を

滅し……………その力、封印せん」

秘技　　魔滅の月光」

シクルの剣から放たれた巨大な剣光がララバイを斬り刻むとララバイは悲鳴を上げることなく、塵になった…。

「な…なに…今の?？」

シクルの魔法に驚くルーシイ。他のギルドマスター達も同様だった。

「今のはシクルの魔法の一つ、あれは悪魔を滅し、封印する聖なる光だよお

そしてあの剣はシクルの持っている剣の一つ、シクルは聖なる剣って言うてるよお」

「へえ…」

シクルが剣を消したところでマカロフの甲高い笑い声が響く。

「かーかつかつかつ!!どーじゃ!!凄いじゃろー!!」

「すっごーい!!」

「これが…妖精の尻尾最強チーム!!」

マカロフに続きルーシイが声を上げ、後ろで見ていたカゲヤマも驚愕の目でシクルたちを見ていた。

が…

「……………あ」

シクルがなにかに気付く。

「ん?どうしたの?……………てっ」

シクルの視線の先をみんなが振り返るとそこには……………

崩壊した定例会場が……………

結局この後シクル達はシヨツクのあまり気絶したマカロフを連れ、逃げるようにギルドへと帰還する。

帰還中にあることを思い出すシクル。

「あ…（そーいえば私… “あの魔法” 使えば建物直せたじゃん…）まあ、めんどくさかったし…いつか」

シクルは1つ欠伸をしながら、ナツたちと共にギルドへと帰るのであった。

9話 ナツVSエルザ そして

ララバイの一件から一夜明け、翌日…

シクルはルージユに起こされ、ギルドへと向かっていった。

「ンむう…なあにいー？ルージユ…私まだ眠いよお……………」

「シクルもしかして忘れたのお？今日はアレがあるでしょお？」

ルージユの言う「アレ」を脳裏で考えるシクル。

「アレ……………あー…もしかして、決闘の事？」

そう言えば昨日列車に乗る前にナツがエルザに挑んでたなあ…と、昨日の出来事を思い出すシクル。

「…まさかほんとにやるの？」

「みたいだよお？ほら、みんな集まってるよお」

そう言いルージユの差した先には、沢山の人だかりがあつた。

「ほんとだ…はあ、今のナツがエルザに勝つなんて…まだ無理に決まってるのに……………」

「……………いつかは勝てるってことお？」

シクルの言葉を聞きルージユが首を傾げ、聞いてくる。シクルは「え？」とルージユを見る。

「だつてえ、シクル…ナツがエルザに勝つなんて “まだ” 無理に決まつてるってえ…いつかは勝てるって思ってるんだよねえ？」

「あー…うん、そりゃまあ…ナツが強いことは認めてるし…いつかは勝てるって信じてるよ？」

…そう…ナツが真の力に目覚めた時……………

その時は……………きつと……………

「あー！シクル！！ルージユ！！」

「お？」

人だかりの所へ着くと呼びかけられ、声のした方を振り返るとそこにはルーシイと他にグレイとハッピーがいた。

「おおー、みんなお揃いだねえ」

シクルは呑気にニヘラと微笑みながらルーシイたちに近づく。

「そんな呑気なこと言ってる場合じゃないよシクル！！どうしよう、ナツとエルザ本当に

戦うなんて…」

「そんな心配しなくても大丈夫だよ、ルーシイ…やばくなったらどうせマスターが止めに入るだろうし…」

シクルの言葉に「でも…」と尚不安げなルーシイを見て苦笑を浮かべるシクル。

その時、人だからから大きな歓声が聞こえてくる。

シクル達は人だかりを通り中央へと出る。

「ちよ、ちよつと!!本気なの!?2人とも!!」

未だに不安と心配があるのか声を上げるルーシイ。

その横に掛かる、大きな影がひとつ…

「本気も本気!!本気でなければ漢ではない!!」

“漢”が口癖の男、ミラジェーンの弟である彼の名は“エルフマン”。

「エルザは女の子よ」

弟の言葉に苦笑を浮かべるミラ。

「だって、最強チームの2人が激突なんて…」

「最強だア?なんだそりゃ」

ルーシイの言ったことが何のことか理解出来なかったグレイは怪訝そうな表情で聞

いてくる。

「だって！あんたとナツ、エルザとシクルも！妖精の尻尾のトップ4でしょ!？」

ルーシイの言ったことにグレイは呆れた様子を見せる。

「はア？くだんねえ！誰がそんなこと言ったんだよ」

グレイの言葉がその場に響いた次の瞬間、ミラが両手で顔を覆い泣いた。

「あー！ミラちゃんだったんだ!?!ご、ごめん!？」

「あー泣かしたー」

「あーあ…最低だねえ」

「グーレイイイ…:…:」ズゴゴゴオ…

「ま、待てシクル!! 不可抗力なんだ!! だから頼む! その黒いオーラを今すぐ消してくれえっ!!」

シクルの背後に見える黒いものに怯えるグレイ。シクルは「次泣かせたら許さないからね」と言い、ミラの頭を撫で慰める。

「確かにナツやグレイの漢気は認めるが…『最強』と言われると黙っておけねえな…

妖精の尻尾にはまだまだ強者が大勢いるんだ

…俺とかな!」

エルフマンの最後の言葉に誰も反応を見せないまま話が進む。

「女で最強だったらやっばエルザだよね」

ケラケラと笑いながら言うシクル。

「最強の男と言ったらミストガンやラクサスがいるしなあ」

「ギルダーツも外せないよね」

「だねえ」

「へえー…：そうなのね」

ルーシイが意外と言った表情をするとククツと笑いグレイが更に続ける。

「まあ、女最強と言ったらシクルもそれに入るしなあ」

「え？私？」

「確かに、シクルはギルダーツと互角の実力を持つてるもんねえ」

ハッピーの言葉に「そうなの!」と驚きシクルを見るルーシイ。

「ええ？いやあ…：私そんなに強くないよ？ギルダーツにだってまだちゃんと勝てたことないし」

「でも負けたこともねえだろ？充分最強じゃねーか」

グレイの言葉にんんんと苦笑を浮かべると首を横に振りシクルは言う。

「でもやっぱり最強はいいや、うんエルザにあげる…なんかめんどくさそうだし」
「やっぱ最後はそれなんだねえ」

シクルの相変わらずの返答にはははと乾いた笑いをもらすルージユ。

「私はただナツとグレイとエルザが1番相性がいいと思っただけよ?」

シクルに慰められ回復したミラが笑みを見せいう。

「あれ? 仲が悪いのが心配とか言ってますんでした?」

それで昨日はついて行くはめになったのにいと肩を落とすルーシィ。

「まあ、何にせよ今回の決闘は、なかなか面白い戦いになりそうだな」

「そうかア? 俺はエルザの圧勝で終わると思うがな」

グレイはそう言う中央の2人へと視線をやる。それを見てシクル達もナツとエルザへと意識を向ける。

「こうしてお前と魔法をぶつけ合うのは何年ぶりだろうか…」

目の前で構え立つナツを見て嬉しそうに口角をクイツと上げ笑っているエルザ。

「あの時はガキだった…けど今は違うぞ!!」

エルザ！今日こそお前に勝つ！！」

目をギンギンに輝かせ、闘志を燃やすナツ。

「良いだろう…私も本気でやらせてもらおうぞ

久しぶりに自分の力を試したいと思っていたところだしな…」

そう言い、エルザは「炎帝の鎧」に換装する。

「すべてをぶつけて来い！！ナツ！！」

「炎帝の鎧!?耐火能力の鎧だよ！」

「エルザが本気だア！」

「そりゃ本気すぎるぜエルザ!!」

「わぁお、相当本気なんだね、エル…(さあ、どうする?ナツ…:…:炎帝の鎧を纏ったエルザ相手ではあなたの炎の威力は半減してしまう…:どう戦う?)」

面白そうにシクルが2人を眺めている横ではハッピーが賭けをナツからエルザに変えるとカナに言っており、ルーシイがそれに「薄情者!!」とつつこんでいた。

そして遂に2人の決闘が開始される。

まずやはり先制するのはナツだった。

炎を拳に纏いエルザに拳を向ける。

が、エルザもまた避け、隙を見てはナツに刀を向け、またナツも見た目に似つかない柔軟さで向かってくる刀を避ける。

「すごい……！」

「大分いい戦いになってるわねえ」

ルーシイの感嘆の声とミラの嬉しそうな声はその場に響く。

「へへ……やつぱつええなあ……燃えてきたア！」

「流石だな………来い、ナツ!!!」

2人の刀と拳がぶつかり合う。そう誰もが思ったその時――

パアアアンツ!!!

「そこまで」

大きな音と共に現れたのはカエルの姿をした何かだった。
何事だ？と突然現れたカエルにその場の全員が目やる。

「全員その場を動くな。私は評議会の使者である」

「評議会!？」

「なんでそんな奴がここに？」

「さあ？また誰かなんかしたのか……？」

その場がざわざわとざわつく。

評議会からの使者はざわつきに気をとめることはなく、持っていた文書を読み上げ始めた。

「先日の鉄の森のテロ事件において、器物損害罪他11件の罪において……

エルザ・スカーレット並びに、シクル・セレーネの両2人を逮捕する。」

「……え？」

「……え、私？」

「な、なんだとおおおおおっ!？」

評議会の使者により、評議会へ連れていかれたエルザとシクル。ギルド内はしん…と静まり返り、全員が暗い表情をしていた。

そんな中…

「だせえー!!俺をここから出せー!!」

ただ一人、ナツだけが大声をあげ、暴れていた。

姿を小さくされ、コップの中で…

「だー!うっせえなくそ炎!!少しは黙ってられねえのか!？」

グレイがイライラを募らせ怒鳴るも「出せー!!」とナツは叫ぶだけだった。

一方、評議会の方ではー

現在、エルザとシクルは別の牢屋に入れられていた。

シクルは外の光が届かない牢屋の中、天上を見上げぼうつとしている。

「……………はあ…（こういう所は…慣れないなあ…）早く帰りたい…」

…ここは嫌だ…………… “あの頃”を思い出してしまふ……………

シクルはふつと顔を俯き、はあとため息を再びつく。
すると…

「…随分落ち込んでいるようだな？歌姫様？」

「っ!？」

シクルしか居ないはずの空間に男の声が響く。

シクルはぼつと声のした方を向くと…

そこには青髪の顔に不思議な模様の描かれた男が……………

「…ジーク……………」

彼の名は “ジークレイン”

評議員の1人だがシクルは彼の瞳の奥に何か強大な黒いものを感じ取っていた…。

「こんな所まで何のようかしら？」

ジーク…今はエルの裁判をしている最中でしょうか？こんなところにいるいいの？

評議会のお偉いさんのあなたが……」

シクルの言葉にフツと笑みを見せるジークレイン。

「冗談……アレは形式のみの裁判だ罪にはならない……それを分かつて真面目に出席すると思うか？この俺が……」

ジークレインはそう話すと牢の鍵を開け、牢屋の中へと入ってくる。

そして、シクルの長い金の髪を一束掬い、撫でる。

「そんな怖い顔をするな……月の歌姫……」

綺麗な顔が台無しだぞ……？折角面倒な場を抜け出したら来たんだ……もつと楽しい表情をしないか……？」

ジークレインの言葉に更に眉間にシワを寄せるシクル。

「バカ言わないで、あなたにそんな事言われても嬉しくなんかないわ……どうせあなたも本体ではないんでしょ？」

実体を持った分身さん……」

シクルが挑発的にその言葉を言い、ジークレインが更に深い笑みを見せた時――

ドツゴオオオオオオン
!!!!

地上の方から大きな音が地下まで響いてきた。

「…何？」

突然の事に不思議に思い音の発信源の地上を見上げ呟くシクル。

そして、掴んでいた髪を落とし、上をシクル同様見上げるジークレイン。

「……………ほう、火竜が乱入してきたか…」

ジークレインの言葉に驚きの表情を見せるシクル。

「火竜…ナツ？」

「ふん……………どうやら裁判は途中で中止になったようだな…俺もそろそろ戻らねえと爺さん共にバレルるか……………」

ジークレインはそう言うかと最後にシクルの方を振り返るとシクルの顎をグツと掴み無理矢理見つめさせる。

「ちよ…!!」

「いいか……………俺は必ず『アレ』を使い自由を手に入れる…そしてお前も……………」

必ず、手に入れる……………月の歌姫……………」

その力、必ず俺のものにしてやる……………」

ジークレインの言葉にかつと目を見開き、次の瞬間ジークレインの手を払い除ける。「あたしに触るな!!」

あの子には手を出させない! あたしも…

お前のものになんかならない!!」

キツと睨みあげてくるシクルを愉快そうに笑い、「また会おう…」と最後に残し、去っていくジークレイン。

ジークレインが去った後、力が抜けたように地面に腰を落とし、膝を立て間に顔を埋め、ため息をつくシクル。

「……………大丈夫…大丈夫…怖くない…大丈夫…」

数分間、そのままブツブツと何も考えず、一人で呟いているとガシャン!と牢の扉が開く音がし、顔を上げる。

顔を上げた先には、呆れが見られる表情のエルザと少しボロボロのナツがシクルと同じ牢屋に入れられていた。

「エル! ナツ!!」

「シクルか…すまん、こいつがいきなり乱入してきてな……………」

「だア!!シクル!!お前無事だったのか!?

てか、ンだよエルザ!?その言い方…まるで俺が悪いみてえじゃねえか!!」

文句を垂れるナツと疲れた様子 of エルザは共に牢屋の地面に腰を下ろす。

「違いはないだろう…いいかナツ?今回のこれは形式のみの筈だったんだ」

「…形式?」

エルザの言葉に首を傾げるナツに溜息をつき説明を始めるシクル。

「いい?ナツ…つまり、本来ギルドを管理するのは評議会の役目…だけど、今回は私たちが解決しちゃったでしょ?」

でも、それじゃあ面子が立たないから私たちを逮捕して保とう…て事なのよ

つまり今回のことは罪にはならない…分かった?」

「お、おおう……………」

ナツがやっと納得した様子で頷く。

「全く…本来なら今日中に帰れたんだ…」

「あい…ごめんささい」

エルザの呆れた様子での言葉に頭が上がらないナツ。

その様子 of ナツを見てクスツと笑みを見せるシクル。

「でも…私たちを心配して来てくれたんでしょ?ありがとね?ナツ」

「お、おおう……！」

シクルからのお礼とその笑みに顔を赤くしながら頷くナツ。

結局この日は1日牢屋に入れられ、翌日3人は無事釈放となった。
が、最後にシクルのみが評議員の所へと呼び出された。

「はあ………何ですか？ 私エルやナツを待たせてるんですが……」

「何、話はすぐに終わる………」

シクル……貴殿にある依頼を頼みたい」

議長が切り出した話。それを聞き、シクルは数秒議長をただ見つめると再びため息をつく。

「どうせ………私に拒否権なんかないんでしょう？ めんどくさいけど……いいわよ……」
シクルの言葉に「感謝する」と答える議長。

「詳しくは後日直接ギルドへ使いをだす……それまで、ギルドで待機してくれ」

「……承知しました………では、失礼します」

一つ、一礼をし部屋を出ていくシクル。
その背後で評議員の中にいた一人、ジークが嫌な笑みを浮かべていることに薄々感づきながら…

部屋を出ると扉の前ではナツが待っていた。

「ナツ……………いつ終わるか分からないから先に戻っていいって言ったのに」

「ンでだよ、いいだろ…俺が好きで待ってたんだ…それに、シクルだけで帰らせるとなんか…不安だかな」

ナツの最後の言葉にむつとした表情を浮かべるシクル。

「ちよおつとー？不安ってどういう事よ？」

「悪い意味じゃねえぞ?!アレだアレ…あの、心配なんだよ!なんかあつたら……………俺が、困る…」

ナツの不安そうな表情を見てきよんとした表情を浮かべたあとにつこりと微笑み、ナツの手をとる。

「うお!?!シクル!」

「行くよ？ ナツ…家に帰ろ！それと、待っていてくれて…ありがとう」

シクルの笑みを見て数秒ぼうっとするとナツはニカッ！と太陽のような笑みを浮かべ、「おう!!」と返事を返し、シクルの握ってくる手をぎゅつと握り返した。

2人は手を握ったままギルドへと帰還するのであった…。

第2章 悪魔の島篇

10話 S級魔導士とSS級魔導士

牢屋に入れられてから一夜が明け、エルザとナツ、そしてシクルの3人は無事ギルドへと帰ってきた。

「かぁー！ やっぱシャバの空気はうめえ!!」

「自由って素晴らしいー!! フリーダム!!」

そう叫び、ギルド内をドタバタと走り回るナツ。

「やかましいわ!!」

「大人しくしてろよ…」

周りのメンバーはその騒ぎ様に疲れたような表情を浮かべる。

「結局形式だけの逮捕だったなんて…心配して損したア」

そう嘆き、ガクツとテーブルに突っ伏すルーシイ。

「そうか！カエルの使いだけにすぐ“帰る”」

何を思ったのか突然ダジャレを言うグレイ。するとギルド内が一瞬シーンと静まる。

「…さつむ…」

「さ、流石氷の魔導士………ハンパなくさみい」

「そ、それよりナツ！お前、エルザとの漢の勝負はどうなったんだよ？」

「だからエルは女だつてば…」

場の空気を変えようとしたのか、エルフマンの言葉にナツは走り回るのをピタツと止める。

「忘れてた！エルザ、この前の続きだー!!」

「よせ…疲れてるんだ…」

ナツの叫び声を聞くもエルザはカウンターの席に座り、紅茶を飲み続けている。

が、ナツはお構い無しにエルザに走り突っ込む。

「行くぞー！！！！」

その様子を見て、エルザは「はあ…」とため息をつくど…

ゆつくり立ち上がり、右手の拳を握り振り上げ…

ドスッ！

「ぐっ!?!」

ナツの鳩尾へと寸分の狂いもなくエルザの拳が入り、呻き声を上げナツは倒れた。
「…さて、始めるか」

「しゅーりょーりょーりょー!!!」

「エルザの勝ち!!!」

一撃で沈んだナツを見てハッピーとルージユが声を上げる。

「ぎやはははは!!だっせーぞ、ナツ!」

「やっぱエルザはつええ!!」

「ああ…だからまだ無理だっけ言ったのに…」

「うっ…ぐ、くそ!なら…次い!!シクル!俺と勝負だアああっ!!」

何を思ったのか気合を入れ立ち上がったナツは次にシクルへと勝負を持ち込んだ。

「え？私？ええ……やだよめんどくさい」

「おおおっ!!」

シクルの拒否の言葉をナツが聞き入れるわけもなく…

ナツはシクルへと突っ込む。

シクルははあ…と溜息をつく…

「だーかーらー…めんどくさいって言ってるでしょー…よー!」

と、座った状態で右足をナツへ振り上げ言う。

振り上げられた右足はナツの脇腹へと入った。

ドムツ!!

「ぐふっ!?!」

再び床に転がるナツを見てギルド内からは笑い声が響いた。

笑い声の耐えないギルドを見て、シクルはクスツと楽しげな笑みを浮かべる。

「あら？どうしたんですか？マスター」

「ん?」

ふと、隣からミラのマカロフに掛ける声が聞こえ、隣を見ると…

少し眠たげな表情をしたマカロフがいた。

「…マスター？」

「いや……………眠い…」

マカロフがそう呟くとギルド内のメンバーが次々に眠り、倒れる。

パチツーー

自身にも襲ってきた眠気を魔力を高め、解除するシクル。

「これは…ミストガン？」

シクルの呟きと共にギルドの扉が開き、顔を布で覆い、マントを羽織り背にくつつも杖を背負った男が入ってくる。

男はクエストボードの前へ立つと、1枚の依頼書を手にしマカロフへと提示する。

「この仕事を受ける」

「ミストガン…相変わらずだね」

「シクルか……………久しぶりだな…元気か？」

そう言いミストガンはシクルの頭を撫でる。

シクルはこのギルド内では大分小柄な方で、年長者にはよく妹のような扱いを受けることがある。

頭を撫でてくるミストガンを見上げ、むうつと頬を膨らすシクル。

「またそーやって子供扱いするんだから…はあ、私は元気だよ…ミストガンは？」

「俺もだ、相変わらずな」

ミストガンがそう言うのとクスクスと笑い、「そうだね」と言うシクル。

「では、行ってくる」

「いつてらっしゃい」

シクルの言葉を聞き、歩を扉の方へと向けるミストガン。

「これ！眠りの魔法を解かんかつ!!」

マカロフの声が上がる。

伍……………四……………参……………弐……………壹……………零

ミストガンがギルドを出た瞬間、ナツ以外のメンバーが目覚めます。

「今の魔法…ミストガンか!？」

「相変わらずすげえ眠りの魔法だな…」

ミストガンが現れるといつも起こる眠りの現象にギルドが騒めく。

シクルはまだ眠そうにしているルーシィ、ハッピー、ルージュの下へと近寄る。

「んうー…なにに？今の…」

「ミストガンですう……………」

「…ミストガン？」

眠そうに目を擦るルーシイに答えるルージユはまだ弧をえがき、眠りそうな様子。そんなルージユをシクルがひよいつと抱き上げ、ルーシイの疑問に答え始める。

「ミストガン…彼はこのギルドで最強候補の1人だよ」

「そ、そうなの!？」

シクルの言葉に驚き、眠気が消し飛ぶルーシイ。

「でも誰も顔を見たことがないのよ…」

ミラが苦笑を浮かべ、ルーシイに言う。

その時——

「いんや、俺は見たことあるぜ」

突然、ギルドの2階から男の声が響く。

全員が驚き、顔を上げるとそこには金髪へのッドフォンをした男が立っていた。

「ラクサス!？」

「い、いたのか…珍しい…」

「俺やじじいだけじゃねえ…シクルもミストガンを知っている。なあ？シクル…」

そう言いこちらを睨んでくるシクルに不敵な笑みを見せるラクサス。
「ラクサス……………」

いつから……………」

あなたの笑顔は歪んでしまったの？

何があなたをそこまで……………」

「ミストガンに撫でられ、嬉しそうにしてよオ？そんなにミストガンが好きか？シクル……………」

「久しぶりに懐かしの仲間と会ったのよ？そりやあ嬉しいに決まってるでしょ？ラクサス……………」それに、仲間はみんな好きよ？」

シクルの答えにはっ！と嘲笑う様な様子のラクサス。

「は…仲間？誰にも素顔を見せないあいつが？あんな怪しいヤツを仲間だと…言うのか、シクル……………」相変わらずだなあ？」

「ギルドマークを印してる人はみんな仲間だよ…ラクサス」

「ククツ！随分甘ちゃんになったなあ？てめえが最強？…は、俺はてめえを最強だなんて認めねえぞ……………」

ラクサスの言葉に肩をすくめるシクル。

「最強なんて肩書き、欲しいなら譲るわ…私はそんなの興味無いのよ………めんどくさ
うっ」

「へっ…そのめんどくさがり…本当は強くなかねえから言っただけじゃねえのか？な
あ？エセ最強さんよお」

その言葉にピクツと眉を動かすシクル。

につこりと影の差す笑みを浮かべるシクル。

「へエ？そんな事言っただけなの？ラクサス……あたしにまだ一度も勝てたことのない
あなたが………調子にのんなよ反抗期野郎が………」

シクルのその言葉を聞き、黙って言い合いを見ていたグレイとルージユ、ハッピーが
震える。

「や、やべえぞ……」

「え？」

「シ、シクルがキレてる………」

「キレたシクルは怖いですう……」

震える3人を見て訳の分からないルーシィ。

「シクルは…普段余程のことがないと怒りを見せない…その代わり、怒りを露わにした

時、シクルは自分の事を「私」ではなく、「あたし」と呼ぶのだ…」

訳の分からないルーシイに説明を入れたエルザを見てから、ルーシイは再びシクルへと目を向ける。

魔力を徐々に高め合う両者……すると

「これ、よさんか…」

と、マカロフの声が響く。

「全くお主らは…ギルドを壊す気か？」

「へ、いいなあ？一度ぶっ壊して新しく立て直すかあ？」

「そーね…それに、壊れたとしても私の魔法で直せるし…問題ないわよねえ？」

「止めんかバカタレ!!」

全く冗談に聞こえない2人の言葉に怒鳴り声を上げるマカロフ。

「フフツ 冗談よ、マスター…」

笑みを見せ、言うとしクルは高めた魔力を消す。

「全く…お主らの言葉は冗談に聞こえん時がある……心臓に悪いわい…」

マカロフの言葉に苦笑を浮かべるシクルの耳に、突然「ラクサスー…!!!」と、叫ぶ声が届く。

叫び声の発信源は今まで眠りこけてたナツだった。

「ラクサスー！俺と勝負しろやあ!!」

「また……………」

ナツの言葉に呆れを見せるシクル。

「はっ…やりたきやここまで上がってこいよ…なあ？ナツ」

「上等だアア!!行つてやらア!!」

と、ラクサスの挑発にのり2階へ飛び上がるナツ。

「あ…ばか…」

ドゴオン!!

「キュー…」

飛び上がったナツをマカロフの巨大な拳が止める。

「2階に行つてはいかん、まだな」

「ははっ！止められてやんの!!」

「ラクサス！お主も挑発は止めんか!!」

「はっ！いいか……………これだけは言つておくぜ…妖精の尻尾最強候補だがなんだが知らねえが、最強の座は誰にも渡さねえよ……………」

エルザにも、ミストガンにも、あのオヤジにも…… シクル……お前にもな！

俺が最強だ!!」

ラクサスはそう言い、高笑いを響かせ2階の奥へと姿を消す。

ラクサスとの一悶着でざわついていたギルドだが徐々にいつもの様子を取り戻し始めていた。

ふと、先ほどのマカロフの言葉が気になったルーシイはミラに声をかける。

「あの……ミラさん……さっきマスターが2階に行つてはダメだつて……あれは一体？」

「ああ、あれね？」

二階には一階に貼られてある依頼とは比べものにならないくらい難しい依頼書があるのよ

それをS級クエストつて私たちは呼んでいるのだけど……その依頼に行けるのはギルドの中でもマスターに認められた人たちはS級魔導士と呼ばれているのよ?

マスターに認められた人たちはS級魔導士と呼ばれているのよ?

その中にはエルザやミストガン、ラクサスそれにシクルも入つてゐるわ」

「えーそーなんですか……?シクルも……」

そういい、驚いた表情でシクルを見つめるルーシイ。

その視線に気づいたシクルはふつとルーシイへ顔を向け微笑む。

「ああまあ…確かに私も2階に行けるよ…あまり行かないけどね」

「それに私は…」と、シクルが話している時…

シクルの肩に1羽の白い鳩が止まった。

白い鳩の足には1通の文書が付けられていた。

「ありがとね」

シクルは文書を受け取り、鳩を撫でお礼を言うと言ったように飛び去っていく鳩。

シクルは文書を開け、読み進めはあとため息をつくと言を上げる。

「マスター……………行つてくるわ」

「ああ……………気をつけるのじゃぞ…」

マカロフは悲しそうな、心配そうな表情でシクルに言う。

マカロフの表情を見て、フツと安心させるような微笑みを見せると「分かつてる…」

と、答える。

シクルはそのまま小さな荷物を持ちギルドを出ようとする…

「待てよシクル!!」

「……………ナツ」

シクルを呼び止めるナツ。

「それ…アレだろ?俺も行く!!」

ナツの表情は少し険しかったがシクルは首を横に振り断る。

「ダメよ…これは危険なんだから…」

「危険なら尚更!!」

「大丈夫よ…私の実力知ってるでしょ?大丈夫…すぐ帰ってくるから…ルージュをお願
いね?」

諭す様な言葉をかけるシクルに渋々と「おう…」と頷き引き下がるナツにシクルは
困ったような表情をしてから、ナツの頬を撫でる。

「……………ごめんね?行つてきます」

「…おう」

ナツの返事を聞き、シクルはギルドを出て行つた。

「…シクル……………どこに行つたんですか?」

2人の会話を見て聞いていたルーシイは隣で少し悲しそうな表情のミラに問う。

「うん……………シクルはね、S級の更にも上……………SS級魔導士なのよ……」

「え……………SS級魔導士……………」

聞いたこともない単語に疑問が増えるルーシイ。

「そう……………SS級魔導士になると評議会から直接依頼が届くようになるの……………それも、S級クエストでは収まらない危険な依頼……」

「え……………そ、それにシクルは行つたんですか!？」

驚愕を隠せないルーシイの言葉に頷くミラ。

「……………シクルはこういう時あたしを連れていつてはくれないんです……」

ルーシイの隣からはか細いルージュの声が聞こえる。

「……………ルージュ」

「分かってるです……シクルがあたしを心配して連れていかないのはあ……………でもお……………でも……………」

あたしはシクルの相棒なんだ……………もつと頼ってほしいです……」

ルージュの言葉はルーシイの心に深く突き刺さる様な感覚がした。

普段の語尾を伸ばすような声は最後聞こえず……………シクルの出て行った扉を涙を浮かべ

見つめるルージユをルーシイはそつと抱き寄せ、頭を撫でることしか出来なかった…。

「…シクル……………」

「……………今度は、闇ギルド『デーモン・リバイブ』の殲滅と…謎の実験の阻止……………か」
『デーモン・リバイブ』…悪魔の復活をギルド名にするくらいなのだからきつと実験は悪魔復活が狙いなのだろうが……………」

「悪魔……………か」

シクルの脳裏に過ぎるは暗い感情……………

シクルの心を揺らがすものとは…一体……………

11話 VSデーモン・リバイブ

ギルドを出て1時間——

シクルは文書に記されていた場所……

森の奥地にある闇ギルド、デーモン・リバイブ「悪魔の復活」の本拠点前に立っていた。

「ここか……はあ……長かった」

シクルの目の前にはそれなりに立派な建物が立っていた。
が……

「……変な魔力を感じるのは地下から……実験は地下か……」

地面に手をつき魔力を感知する。

そして、建物の中にある魔力体を確認する。

「……………うわあ…200はあるなあ……………」

めんどくさ…と考えながらため息をつき、立ち上がる。

「調査とか潜入なら派手な行動は抑えるけど…今回は殲滅……………やっちゃうか」

シクルはスウと深呼吸をすると、右手に魔力を込める。

「…いくよ……………月竜の…鉄拳つ!!!!」

ドガアアアアアンツ
!!!!!!

シクルの拳が扉を木っ端微塵に吹き飛ばす。

「なんだ!？」

「襲撃だあ!!」

「敵は…女1人!？」

「何者だ!？」

シクルが扉を吹き飛ばすと闇ギルド内はざわつき、煩くなる。

「…デーモン・リバイブ………殲滅始めます」

シクルは静かにそう呟くと魔力を高める。

「月竜の…咆哮おおおおおお!!!」

ズゴオオオオオオオ!!!

シクルのプレスがデーモン・リバイブのメンバー数十人を一気に吹き飛ばす。

「「ぎやああああああっ!!!」」

「なんだあいつ!？」

「構わねえ!!殺つちまうぞお!!」

「「うおおおおおつ!!!」」

「月竜の…翼撃いいいい!!!」

「「ぐぎやあああああ!!!」」

「月竜の…鉤爪えええええ!!!」

「ぐおおおおお!?」

シクルは襲い掛かってくる敵を何度もなぎ払い、吹き飛ばし、倒すが……

「……はあ……もう数だけ多いんだから……めんどくさ」

シクルはまだまだ大量に残る敵を前にため息をつき、目を瞑る。

そして……

「めんどうだ……終わらせるよ?」

ギロツーー!!!

グオオオオオオオオオオオツ
!!!!!!

目を見開いた瞬間、デーモン・リバイブの面々の目には銀色に輝き雄叫びを上げる音が映り、一瞬で戦意は喪失し、倒れる。

「……ふう……疲れる……」

倒れふす面々を見て深い溜息をつきシクルは顔にかかる髪を払い除ける。

「…さて……………地下に続く階段でも探しに……………ッ!?」

そう眩いた瞬間、強い殺気を感じその場を飛び避ける。

シクルが飛んだ瞬間シクルの立っていた場所は砕け散り、大きな窪みが出来ていた。
スタツーーー

「あつぶな……………誰? (月竜の眼光が効かない…手練か…?)」

殺気の方を向くと顔を白いマスクで隠した1人の男が立っていた。

「ほう……………今のを避けるか…さすが……………月の歌姫と言ったところか?」

男の右手には刀身の大きな刀が握られていた。

「あなたは……………」

「俺か?俺はアルビス…」

「アルビス……………血染め刀のアルビス…そう、デーモン・リバイブにいたのね……………」

1人で数百もの人間を殺し、返り血を浴び、血に濡れた刀を持つ姿からその通り名が
広まった…だが、彼の所属ギルドは誰も知らなかった。

「俺のことを知っていたか…光栄だな、月の歌姫……………貴様なら…楽しめるか…な…?」

刀を構えシクルに嫌な笑みを向けるアルビス。

シクルははあとため息をつき、睨む。

「生憎……私は戦いは好きじゃないのよ……めんどろだし……」

そう言うのとシクルは右手を胸の前に掲げ……

唱える。

「換装………【十六夜刀】」

シクルの右手に現れたのは刀身の長い銀色に輝く刀。シクルの愛刀の一つ。

「……ほお………それが、月の歌姫の刀……十六夜刀か……面白い……」

シクルの握る刀を見てニヤリと笑みを浮かべる。

「めんどろだ………一瞬で終わらせませす」

両者、一步も動かずじっとただ相手を見つめ、次の動きを待つ………
数分か………それとも数時間か………

感覚が分からなくなるほどの集中と殺気がその場に流れる。

そして……

ダッ……!!

両者共に動く。

「黒重牙斬刀!!」

「式ノ太刀 三日月」

アルビスの黒く輝く刀がシクルに振り下ろされる瞬間、シクルの刀から光の刃が放たれる。

ザンツ……

ブシュー……

互いに、腹部と左肩から血を吹き出す。

「……………見事」

腹部から血が吹き出したアルビスはその一言を呟いたあと倒れ、気絶する。

シクルは暫し刀を振り切った形で動かず、少しすると深呼吸をして、姿勢を正し、刀を消す。

「はあ…（疲れた…もう帰りたいたい…）…とつとどこれ終わらせて帰りますか…」

「ここまでやってもこのギルドマスターは姿を現さない。」

「相当自信があるのかな…」

シクルは左肩の止血を行ってから地下への道を探した。

建物内の搜索を始めてから数分…

シクルは大きな柵の裏に隠された通路を見つけ、歩いていた。

「だいぶ長いな…どこまで続くんだろ」

随分と歩いてきた通路を眺め、目を細めるシクル。

そして…

目の前に扉が見えてくる。

「…あそこかな？」

シクルは足音を立てないようゆつくりと扉に近づき、仕掛けが無いことを確認し、扉をゆつくりと開ける。

扉の奥では……………

「……………なに…これ？」

いくつものカプセルとその中に入っている人間…否……………

「……………悪魔？」

カプセルの中に入っているものを見て嫌なものを感じ取るシクル。

「（これは…誰がこんなことを？ 目的は…分からない……………）…兎に角、ここを何とかしないと…「これが狙いか…？ 歌姫殿」!?」

突如、耳元から響く声にシクルはぼつと振り返る。

が、振り返ったその瞬間何者かからの魔法がシクルに襲いかかる。

「ぐっ…!!」

扉を壊し吹き飛ぶシクル。

1度手を床につき、体勢を立て直し魔法を飛ばした者を見つめる。

…気配を感じなかった……………

「……………あなたが、マスター…」

「いかにも……我はディア……デーモン・リバイブのマスターだ」

暗闇から現れたのは黒いマントとフードを被った大柄の男。

シクルは瞬時に十六夜刀を換装し、構える。

「ディア……これは何？何が目的なの？」

「目的……私の目的……それは……」

最恐悪魔 イブリスの復活……」

「イブリス……？」

シクルの表情は更に険しくなる。

「そう……イブリス……絶望を与える最恐の悪魔……」

この力を使い、この魔法界を滅ぼす……そう言ったディアを睨みつけ、殺気をぶつけるシクル。

「そんな事、私がさせると思う？……阻止してみせる、絶対」

シクルの言葉を聞き、殺気に当てられながらも笑みを更に深めるディアに怪訝な表情を浮かべるシクル。

「…何がおかしいの?」

「ククク……………いやいや…何故我がこうも容易く真相を話したか…分からぬか? 阻止する?……………貴様が?…ククツ!

貴様には無理だ……………なんせ……………

我に殺されるのだからな…」

ディアがそう告げた瞬間、シクルの視界から消える。

「!?消えっ…!」

「どこを見ている……………?」

シクルが気づいた時…ディアはシクルの真横に立っていた…。

「つーー!」

ディアの右手から黒い光がシクルに放たれる。

それは、シクルを巻き込み、弾けた。

ズドオオオオオオンツ!!!!

「づあああああ。あ。あ。あ。つ!!!」

シクルは吹き飛び、壁に衝突する。

「がっはっ!!げほ……!」

シクルはダメージの強かった腹部を左手で抑え、ディアを睨む。

「ほう………今ので動けるか…流石だな、歌姫殿………」

地に膝をつくシクルにゆっくりと近づくと、ディアを見上げ、立ち上がるシクル。

「っ……はっくう……!! (今の攻撃………あと少しガードが遅れていたらヤバかった……)」

シクルは黒い光が弾ける瞬間、十六夜刀で防御の構えをとり、自身に襲いかかるダメージを抑えていた。

「…ダメージを抑えてコレか……… (めんどくさいなんか言ってられないか……) はあ……仕方ない………ちよつと本気を出すか……」

シクルは痛みを耐え、再び構える。

その姿を見て、ディアは更に笑う……。

「ククク……実に素晴らしい……殺すには惜しい人材だ………なあ? // 生贄のお姫様”

………」

「ッ!?お前………どこでそれをつ!」

“生贄のお姫様” …その一言で動揺を見せたシクルの隙を、ディアは見逃さず……

ズブツーーー!

「……………づ……あ……!」

シクルの腹に剣を突き刺した。

「……………終わりだな……」

剣を引き抜かれ、血を噴き出し倒れるシクルを見下ろし不気味な笑みを作り出すディア。
ア。

ディアは剣を振り上げ……………

「……………死ね、歌姫……」

シクルの心臓目掛け、振り下ろした……………。

ザンツーーー

そして………その場に真つ赤な血が散る………

12話 特別依頼 終了

ザンツーーー

ディアの剣がシクルの身体に突き刺さり、シクルの真つ赤な血が辺りを汚した…。

「ククツ！クハハハハツ!!」

弱い！噂に聞く月の歌姫だからどんなものかと思ったが……この程度か！

所詮ガキか………たった一言で動揺し、隙が生まれる…噂は偽物だったと言う訳か………

ディアは何も出来ず息絶えたシクルを嘲笑い、剣を引き抜いた。

「さて………ともかく歌姫が来たということはここはもうダメだな……上の奴らにバレているだろう……移転するしか………「どこに？」!？」

ディアの耳に息絶えた筈のシクルの声が響く。そして――

「六ノ太刀　　十字斬!!」

ザンツ!!ズバツ!!

ディアの胸に十字の切り傷が出来る。

「ぐおおおおおっ!!?」

な…何故………貴様…?!死んだ筈…!」

傷つけられた胸元を抑え、驚愕の表情で睨み上げてくるディア。

シクルはふうと一息つき、小さく笑みをディアに向ける。

「ああ、アレね?危なかったわあ………ほんとギリギリだった…お陰でお腹の一撃はくらったしね」

そう言ったシクルの腹部は確かに血に濡れており、未だに血は流れていた。

「な…何故………」

「答えはあれ……………」

ディアの疑問にシクルは自身の倒れていた場所を指差した。

ディアがそれにならない、振り返ると…

「…な、に？」

そこには確かに、倒れているシクルの姿が…

ディアの表情には驚愕の色が隠せずにあった。

倒れているシクルを見つめると…

ピシッー

倒れているシクルの身体に小さく亀裂が走る。

そして徐々にそれは広がり……………

パアアアン!!

キラキラと光る結晶のように弾け、消し飛んだ。

「……………八ノ太刀 鏡花水月…」

月の魔力を刀に宿して、有幻覚の自分を作り出し、相手を混乱させたところで攻撃、斬る……………身代わりとして使えるものでもあるからね…

つまり、あなたがやったのは有幻覚の私……残念ね？本物を仕留められなくて……
動揺したその時に……確実に殺せば勝機はあったのに……

「教えてもらおうよ……何故“あの事”を知っている？」

刀をディアの首筋に突き立て、問いただすシクル。

「ふん……誰が言うものか……」

刀を突き立てられるも情報を吐こうとはしないディアを見下ろし目を細めるシクル。

「ふうん……まあいいけど……大体の予想は付くわ……“あの人”でしょ？あの人しかいないわ……（そう……あの……悪魔の様な男……）」

シクルの脳裏には嫌な笑みを浮かべ、手を伸ばしてくる男の姿が――

――さあ……来い……よこせ……

「……いや……いや!! たつ……助けてっ!!」

「つー!!……はあ……さて、なら……悪魔実験について吐いてもらおうかしら……吐きなさい……誰の命令でこんな事を？」

シクルは脳裏に過ぎったものを振り払うように頭を振り、ディアを見下ろし、聞いたです。

「ふ……言うと思うか？ 小娘が……」

ディアはそう叫ぶと一瞬でシクルの背後に回り、剣をシクルに振り下ろす。

「ククツ……（もらった……）」

振り下ろされる剣がシクルの背を切り裂く……

そう、ディアが余裕の笑みを浮かべ思った時……

「ギイイイインツ!!!」

「な……」

ディアの剣を後ろ手でシクルの刀が防いだ。

「な、何……!？」

シクルはディアの驚きに満ちた声を聞き、視線だけ後ろに向ける。

「……………ふう あなたの魔法はもう見切ったわ…私にはもう効かない」

そう言い、後ろ手でディアの剣を押しきり払うと振り向き際にディアの腹部を斬りつける。

「ぐあつ!!な…見切っただと…?」

「ええ、あなたさつき私に黒いものをぶつけた時も…そして今も……………私を見ていなかったでしょう?」

あなたは、見つめたところに時空の裂け目を作り出せる…

そして自分の立っているところにも時空の裂け目を作り出す事が出来…その中を通りあたかも超速度で移動したかのように見せる……………

そりや気配も感じ取れないわけよね……………

なんせ、その場にはいないんですもの…でも、もう私にはその魔法は効かない……………終わりよ?ディア……………」

シクルの余裕な笑みが気に入らなかつたのか、ディアは突っ込んでくる。

もはや、冷静な考えは消え失せているように…

「貴様を殺す!!そして!!」

イブリス様を復活させるのだ!!

我は聞いた!!!イブリス様のお声を!!!

復活させれば本当の力を与えると!!

言ってくれたんだアアアア!!

逆上したディアはそう叫び、シクルに向け剣を振り回すがシクルはその動きを見て下がり、しゃがみ、バク転をし避ける。

「なるほどね……………どうやらなにかに言葉巧みに操られているようね……………可哀想」
シクルの哀れむような眼差しにディアは声を荒らげる。

「その目で我を見るなあああああつ!!!

消えろおおおおおつ!!!」

ディアが叫び、剣を振り上げた時……………

ドスツーーー

「あ……………が……………」

「……………ええ?」

ディアの心臓を白い光が貫いた…。

「もういい……………ディアよ…失せろ」

「な…何故……………ア……………」

ディアはそう眩き、倒れ絶命した…。

シクルは声のした方を見つめる。

そして見えてきたのは、白銀髪の長く、赤い瞳をした男が立っていた。

「あなた誰？何故彼を？」

「ふん……………不要になったものをずつと手元に置くと思うか？こいつはもう用無し…死して当然だろう……………」

その言葉にシクルは殺気を込める。

「あなた……………命をなんだと思っているの？」

用無しな命なんかない……………

死して当然な命なんか…ないわ!!」

叫ぶシクル。その様子に男は笑う。

「ふん…何を怒る？こいつは貴様の敵だった男だ…むしろ、敵がいなくなつて清々する

だろう」

なあ？と呟いた男は右手をシクルに向けると白い焰のような玉を飛ばしてくる。

「つ！四ノ太刀 逆き月!!」

飛んできた玉を咄嗟に刀で打ち返すシクル。

打ち返した玉は男に当たらず、横を通り過ぎ後ろの壁を粉々に砕いた。

「今のを弾くか…なかなか…」

男は不敵な笑みを浮かべ、シクルは頬を汗が伝う。

「…チツ（こいつ相手に刀じゃ通用しないな…）」

シクルは刀をしまった。

「ん？刀を使わねえのか？」

「まあね…あなたには私の魔法を御見舞してあげるわ!!」

そう叫んだ瞬間魔力を瞬時に高める。

「月竜の咆哮!!」

「つ！ほう…滅竜魔法か…面白、少し遊ぶか…」

シクルの咆哮は男の払った右手により、分散される。

が、それは想定内だったシクル。

「月竜の鉄拳!!」

ずどおおおんっ!!!

男の真上から拳を振り下ろすが男は避け、シクルの拳は床に大きなクレーターを作るのみ。

「ほい…」

避け際に左足でシクルを蹴り上げる。

「っーぐっ!!!」

迫ってくる足を咄嗟に顔の目の前で両腕を交差し防御する。が…

「甘い…下がガラ空きだ」

どむっ!!

「ぐふっ!!!」

腹に1発拳をくらい、身体が曲がるシクルだが気力で跳ね上がり、男と距離を取る。

「かっ…はっ!うえ…つつ!!」

殴られた時、変な場所に入ったのか胃液がせり上がって来る。更にディアにつけられ

た傷が痛むシクル。

「くっ……（まずい………血が足りなくなってきた……）」

目が霞むシクル。ふらつきながらも立ち上がり、男を見つめる。

早いところこの男をなんとかして……あのカプセルを、破壊しないと………

「……………よし」

あまり体力も残ってないけど……

あれで終わらせよう……

シクルは魔力を全身に行き渡らせ、立ち上がる。

「ほう……まだ立つか……………」

立ち上がったシクルを見て面白そうに笑う男。

「当たり前……そう簡単に私を倒せると思わないで……………私は……妖精の尻尾の魔導士だ
!!」

シクルはそう啖呵を切るとダツ！と駆け出す。

「は！正面から来るか小娘…甘いなあ！」

突っ込んでくるシクルに男は魔法を放つ。

が、シクルは瞬時に反応。

しやがみ避けると淡い光を纏った右手を床につける。

「……………吉」

魔法を避けると再び駆け出す。次は男の方ではなく、男の右手側に向け、走り出す。
「ん？どこに向かう？血迷ったか？」

男は尚、走るシクルに魔法を次々と放つ。

魔法が飛んでくる度に飛び、しやがみ、バク転、右へ左へと体を動かし避ける。

その際何度か床に手をつきながら……………

「……………式……………参……………四……………伍……………六」

そして、6回目、手を床につき終わるとシクルは再び男との距離を取る。

「よっし…！準備オーケー……………」

あなたが誰かは知らない…でも…

命をなんとも思わないあなたを野放しになんかしらない!!」

そう叫んだシクルは両手を構える。

すると、男を中心に銀色の光が輝く。

「なんだこれは？」

「私が何も考えずに動いていたとでも…？」

あまり舐めないですよ……

【滅竜奥義 六花月光】

その声と共に男を包み込む銀色の柱…

「ぐーこれは……」

「……………昇華」

最後の言葉を唱えた瞬間、柱は弾け飛び、男を巻き込み…カプセルと共に爆発した。爆発する瞬間…一瞬、シクルの髪は金色から銀色へと変化していた……………。

それはシクルですら気づかない一瞬であった…。

一時、辺りは煙に包まれた…。

そして煙が晴れると……………カプセルはすべて碎け散っていたが…そこに男の姿はなかった…。

「…逃げた……………」

シクルは男の立っていた場所を見つめ、次の瞬間座り込む。

「つ…はあー!!!つ、疲れた……………」

シクルは大きく長い深いため息をつき、肩の力を抜くと次の瞬間には激痛が身体に走る。

「つ!!いったあ……………あーあ……………久々に傷作っちゃったなあ…」

……………ディア……………あいつの言葉に一瞬でも動揺した……………

「はあ……………私もまだまだだなあ……………」

もつと……………強くない……………」

「……………約束の日が来る前に……………力を、つけないと……………」

シクルはそう呟き、暫く天上を見上げ再びため息をつくと重い腰を上げ、地下室を出て、建物の外へと向かう。

外に出ると連絡を入れていたお陰か、既に評議会の者達が到着していた。

外に出てきたシクルに気づいた評議会の者達はその姿を見て、一瞬喜び、次の瞬間はその傷ついた姿に驚愕の表情を浮かべた。

「お、やっぱ早いねーお疲れー」

「シ、シクル殿!! そのお怪我は!？」

赤茶色の髪と緑の瞳をした男が呑気に二ヘラと笑うシクルに詰め寄り、問う。

「ん? これ? あー……………ちよつとハマしちやつた」

そう言い、テヘツと笑うシクル。

「あなたは…全く! 治癒の魔法を持っているでしょう!?! ちゃんと治してから行動してください! 血だつて止血もちゃんと出来てないじゃないですか!!」

「おおお……………ちよ、アトス…怖い…その顔怖いから止めて……………」

物凄い迫力で迫ってくる男、部隊の一つの部隊長をしている、*「アトス」*という者。

シクルはその顔を押しつけてから溜息をつき言う。

「しよーがないでしょ…魔力使い切つちやつて、回復する力も残ってなかったんだもん…それに、回復ならそつちでやってくれるんでしょ?」

首を傾げ、言うシクルに溜息をつきたくなるアトス。

だが気を持ち直し、シクルに近寄るとその体を抱える。

「ちよ!?!ちよつと!?!何すんの!?!」

「静かにして下さい…あなたは怪我人なのですよ?怪我人を歩かせると思いませんか?私
が」

「そ、そりゃあ……………思わないけど…ちよつと…この格好は……………恥ずかしい」

そう言ったシクルは少し頬を赤くした。

シクルは、今…アトスに横抱き…所謂、〃お姫様抱っこ〃されていた。

「なにか文句でもありませんか?嫌なら歩いてもらいますか?」

アトスの反論を言わせないと云った雰囲気「…何でもないです」と、シクルが答える。

アトスは満足したかのように少し笑みを見せるとシクルをしっかりと抱き直す。

その後、アトスはその場にいた部下にその場を任せ、シクルを抱え、評議会本部へと戻った。

その間にシクルは疲労が溜まり、眠ってしまった次に目が覚めた時は闇ギルドを潰した次の日になっていた。

さらに目が覚めたその日は1日、事情聴取などがあり、解放されたのは依頼を受けてから3日後の事であった。

「あー…疲れた……………」

肩を落とし、疲労が溜まってますと言った様子のシクルを見てフフと笑うアトス。笑ったアトスをじいっと睨み、むうと頬を膨らませるシクル。

「なにー？なんで笑ったの？今…私今回すつつごい!!頑張ったんですけどー？」

「ああ、すまない…そうですね、お疲れ様です」

アトスはそう言い、シクルの頭を撫でる。

「子供扱いしないでよ!？」

頭を撫でられ少し怒った様子のシクルを見てきよんとした表情をするアトス。

「え？そんなことしてませんよー…私はただ撫でやすい高さにあるなと思います……………」

「それって小さいってことおー!!？」

うがー!と唸るシクルを見てケラケラと笑うアトス。

睨み上げて笑みを絶やすことのないアトスを見てはあと溜息をつくシクル。

「じゃあ…私はそろそろギルドに戻るわ」

「はい…今回もありがとうございました……………その、お体に気をつけてください…」

アトスの言葉に「はーい!」と手を上げ、去っていくシクル。

そんなシクルの後ろ姿を見つめ続けるアトス。

その目は、どこか愛おしげに見えた…。

3日ぶりにギルドへと戻ったシクル。

「はー疲れた……………ただいまアー」

シクルがギルドの扉を開けるとしーんとその場は静まり返っていた…。

「…ん？……………どうしたの？みんな…」

「おお…シクルか……………おかえり、どうじゃった？」

シクルの帰還に気づいたマカロフがそう声をかける。

その声に他のギルドメンバーもシクルの帰還に気付く。

「んー？んー…まあなんとか完遂したよお…めんどくさかったけど」

シクルのその言葉を聞くと「そうか…」と呟き、どこか険しい表情を浮かべるマカロ

フ。

「……………マスター？どーかしたの？」

「う、うむ…実はのお……………」

なにか言うことを渋っているマカロフに眉を顰めるシクル。
ふと……この依頼から帰ってくるいつもは胸に飛び込んでくる小さき相棒がいない
ことに気づく。

「そう言えば……ルージュは？ それによく見たらナツとハッピー……ルーシイにグレイもい
ないみたいだけど？」

その言葉にギクツと肩を揺らすマカロフ。

……あれ？ なんか……嫌な予感が……

シクルの脳裏に嫌な予感が走る。

すると……

ガシツとシクルの肩を掴む手……エルザが真横にいた。

それも……物凄い殺気を纏い……

「ヒツ!? ……どうし……たの? ……エル……? ……」

「シクル………帰って早々悪いが…力を貸してくれないか？」

「な、何？」とシクルがエルザの表情を伺いながら問うとエルザは深い溜息をつき…

「ナツとハッピー、ルーシイとルージユがS級クエストに行った」

と、言った。

「………はああああああああっ
!!??」

その瞬間、マグノリア全体にシクルの叫び声が響くのであった…。

13話 悪魔の島へ

ギルドに帰還した瞬間に衝撃的な事実を告げられたシクルは普段では考えられないほどの大きな声で叫び声を上げていた。

「は？は……………は？……………ナツ……………たちが……………S級クエストに行ったア？……………え？ナツ……………S級魔導士になったの？」

「な訳あるかい!!勝手に行ったのじゃ!!ルーシィとルージユも連れてじゃ!!」
シクルの言葉に怒号を響かせるマカロフ。

「だ、だよね……………わあ……………めんどくさ……………何やっちゃってんのあのバカ……………」

はあと深い溜息をつき額に手を当て、呆れを露わにするシクル。

てか、ルージユも行っちゃってるのか…

「昨日、グレイが連れ戻しに向かったのだがな……………戻って来ないということは一緒にクエストへ行ったのだろうか……………」

「ええ……………グレイもお……………ちなみに無くなった依頼書は？」

マカロフを見て聞くと…

「うむ…なくなつたのは悪魔の島の依頼書じゃ…」

「悪魔の島……ああ、だからルーシイもついて行つたんだ……」

確かあの依頼の報酬に金の鍵があつた筈…黄道十二門……この世で同じものは一つとない、超レアな鍵……にしても……

「馬鹿なの？ほんとに……」

ほんとにあいつは想像の斜め上の行動するんだから…

「これから私もその悪魔の島へ行くんだ…シクル、疲れていると思うが……」

エルザの言葉を聞き、少し考えるシクル。

普段のシクルはこの様な状況でも首を縦には振らず、成り行きを見守るだけに留まるのだが……

シクルは、はあとため息をつくとマカロフへと視線をやつた。

「マスター……その依頼、まだ正式な受理は降りてないんだよね？」

「ん？ああ……そうじゃが……」

「んじゃその依頼、私が正式に受けるよ」

「「ええっ?!」」

誰も想像しなかったシクルからの申し出にギルド内から驚愕の声が響き渡る。

「シクル…良いのか? 普段どんな依頼でもめんどくさがるお主が……」

驚いたのはマカロフも同じ。

驚きを隠さずシクルに再度確認をするマカロフにシクルは苦笑を浮かべ、答える。

「まあ…確かにめんどくさいんだけど……」

でも、ナツたちをほっとく訳にはいかないでしょ?

それに、ルージユもついて行ってるなら尚更めんどくさいなんか言つてられないよ」

シクルの答えに「そうか…」と、眩き少し考えるマカロフ。

「…分かった、いいじゃろ…この件、お主に任せよう……」

マカロフの返答を聞き、「ありがとう、マスター」と笑みを浮かべ言うエルザを見つめるシクル。

「エルも行くよね? 元々エルが行く予定だったんだし」

「ああ、もちろんそのつもりだが…良いのか? 本当に……」

まだ疲れているだろう…と眩くエルザの言葉を聞き二ヘラと笑うシクル。

「だーいじょうぶだつてえーちゃんと休息は取ってきてるから…それより、早く行かな

いとナツたちに何かあったら大変でしょ？」

シクルの言葉とその表情を見て後には引き下がらないな…と感じたエルザは1つため息をつき、シクルの肩に手を置いた。

「分かった…シクルがそう言うなら何も言わない…だが、本当に辛くなったら言うんだぞ？」

………僅かに血の匂いがする…怪我をしているんだろ？」

エルザの確信めいた問いかけに一瞬目を見張るシクル。そして、すぐにふつと表情を戻すと苦笑を浮かべ参ったなあ…と呟くシクル。

「んー…まあ、怪我はしたけど…傷はもう評議会ですら治してもらったから大丈夫！問題なし！」

それよりほら…早く行こ？」

そう言い、シクルはエルザの手を取り1度マカロフを見て「行ってきます」と声をかけ、ギルドを出て行った。

「…頼むぞで」

ハルジオンに着いた2人は早速船を出してもらおうよう船乗りに頼むが…

「…ダメだねえ、みんな怖がつて悪魔の島…ガルナ島まで運んでくれないよ………」
船乗りたちはガルナ島の一言を聞くと怖がり、乗せてはくれなかった。

「エル…どーする………て、エル？」

今後のことをエルザに聞こうとシクルは問いかけるが先ほどまで隣にいたはずのエルザの姿が見えない…。

「あれ？どこ行つたの？」

辺りを見回し、エルザを探す。

そして、エルザの特徴的な緋色の髪はすぐに見つけることが出来た…が

「え、……………」

エルザはなんと港の裏手に定着していた大きな船…海賊船に乗り込み、船員たちをボロボロにしていた。

「……………な、何やってるの…」

「ああ、シクル…心優しい奴らがいてな…交渉をしたら乗せてくれるそうだ」

エルザは近寄ってきたシクルに笑みを見せ、答えるが…そのエルザの手には涙を流しボロボロの恐らく船長だろう者の姿が……………

「う……うん………良かった…ね？（交渉つて…脅しの間違いじゃ………ダメだ言ったらめんどくさそうだからやめとこ）」

結局エルザの交渉（脅し）の末、ガルナ島まで運んでくれる事になった。

「あ、あんたら…一体あの島に何の用なんだ…？あの島はみんな怖がつて誰も近づかねえつてのに！」

舵を切っていた船長は震える声でシクルたちに問いかける。

が、船長に返ってきたのは…

チャキ…

「つべこべ言わず貴様は黙つて船を操縦するんだ………」

首筋に剣先を向けられ、エルザの殺気が船長に返つてきた。

「ヒイ!!わ、分かりましたっ……！」

「エル……やりすぎだつて………」

エルザのあまりの様子にシクルははあとため息をつき、少し暗い表情を浮かべると空を見上げた。

……ルージュ……

暫く船を操縦すると、漸くガルナ島が見えてきた。

「あれか」

「みたいだね……（月が……紫？）」

シクルはガルナ島を照らす月を見上げ不思議に思う。

「紫色の月……何かで見た事が……（……何だっけ？えつと……月の……？）あー、思い出せない……ん？」

ずつと月を見上げていたシクルの目に空飛ぶ何かが映る。

「……ネズミ？」

「シクル……どうした？」

空を見上げネズミと呟いたシクルを不審に思ったのかエルザが問いかけるとシクルは空を指差し言う。

「あそこ……空にネズミが飛んでる」

「何？……わからん、シクルは目がいいから……」

竜は全ての五感が通常の人よりも高く、視力もエルザより良いため、普通の人では見

えない空に浮かぶネズミも見えるのだろう。

「…あ、落ちた」

ずつとネズミの動きを見つめていると突然、なにかが当たったのかネズミが落ちた。

「もしやそのネズミが落ちたところに奴らもいるかもしれないな…行くぞ、シクル」

「おっけー!」

話している間に船はガルナ島に着いており、2人は一気に船体から飛び降り、ネズミが落ちたであろう場所へと走った。

少し走ると森に差し掛かり、森の中も走り抜けていると少し開けた場所が見え、そこに2人見覚えのある金髪の少女と茶毛の猫が大きなネズミに襲われていた。

「っ!!ルーシイ!!ルージュっ!!」

危ない、そう感じたシクルは一気に足を早め、ルーシイとルージュの前に立つ。

「換装 十六夜刀!!」

ギイイイインッ!

ルーシイたちとネズミの間に入り込み、瞬時に右手に握った刀でネズミの爪を受け止めきる。

「え…シクルっ!」

ルーシイとルージュは突然のシクルの登場に驚いたがすぐに表情に笑みが浮かぶ。

「シクル!!来てくれたのね!!」

「まあ…ね…来たのは私だけじゃないけど」

「え…?」

シクルはそう言うのと刀で受け止めていたネズミを力いっぱい押し倒し、そして体勢の崩れたネズミは……

ドガッ!!

回し蹴りを仕掛けてきた鎧の女騎士…妖精女王の攻撃により、戦闘不能となった…。

「エルザっ!!」

シクルが登場した時のように笑みを浮かべるルーシイだが……

ギロツ! 「……………」

「ひい!」

「あ……………」

エルザの物凄い睨みと殺気に当てられ、ルーシイは悲鳴を上げ、ルージュはシクルを

見た。

ルージユを見つめるシクルの表情は凄く悲しそうだった。

「…ルージユ……………」

「シ…シクル……………」

シクルは震えるルージユを暫く見つめてからはあとため息をつくとき、ルージユの頭を一回撫でてからルーシイに声を掛ける。

「ルーシイ…グレイとナツは？一緒じゃないの？」

「あ……………ナツは分からない…グレイは…怪我しちゃって…」

ルーシイの言葉にそっか…と答えると震えるルージユを抱え、立ち上がる。

いつの間にかルーシイたちを追ってきたのか、ハッピーもこの場におり、既にエルザの手に捕まっていた。

ルーシイの言葉を聞きエルザへと視線をやるとエルザもシクルを見つめ、頷く。

「兎に角……………まずグレイのところへ連れて行って…私が見るわ」

「わ…分かった……………」

ルーシイに連れられ、シクルたちが来たのは簡易テントがいくつもある避難用の村

だった。

ルーシイの話では少し前に空飛ぶネズミの落とした謎のゼリーに村を溶かされ、消滅してしまったとのこと。

シクルたちは負傷し、眠っているグレイがいるテントの中に入った。

眠るグレイの側に膝をつき、見下ろすシクル。

そして、悲しそうな表情を浮かべ、グレイの傷つき包帯の巻かれる頭を撫でる。

「…馬鹿ね、ほんと………」

シクルはそう呟き、一度手を離すと後ろで控えていたエルザたちを振り返る。

「少し深いみたいだけど…治せない傷じゃないわ」

「そうか………頼めるか？」

シクルの言葉を聞き、問い返すエルザにっこりと微笑み頷くシクル。

「な、治すって………？」

「ルーシイはまだ見たことなかったよね？」

疑問だらけのルーシイに説明を始めるハッピー。

そんな2人は今も尚エルザの手により、体を縄でグルグル巻きにされていた。

「シクルがなんで月の歌姫って呼ばれてるか…分かる？」

「そういえば…考えたことなかった……………」

確かに以前戦った闇ギルドのメンバー等、時折シクルを「月の歌姫」と呼んでいるのを聞いたことはあつたが気にしたことはなかった。

「シクルの歌は特別でね…歌で仲間の傷を回復したり、仲間の身を守ったり、何かを封印することや呪いみたいなのを解くことも出来るんだよ」

「何それ…………そんな魔法あるの？」

「シクルの魔法ですう…月の滅竜魔法の魔力を歌に込めるとその歌に合わせた効力が発揮されるんですう…」

シクルをずっと見つめ、ハッピーに代わり、説明をするルージュ。

「へえ……………」

ルージュはじつとシクルを見つめる。

「…よし……………」

【我、月の加護の名の下に

愛する者の身を包み　その身、回復させん」

ソングマジック
歌魔法　治癒」

歌を唱え、グレイにシクルが両手を添えるとシクルの手から淡い銀色の光が輝き、次第にその輝きはグレイを包み込む。

そして、銀色の輝きがグレイの身体に染み込むように消えるとそれまで苦しげだったグレイの呼吸や表情は幾分か穏やかになっていった。

「……ふう……うん、とりあえずはこれで大丈夫……流石に流れた血は回復できないけど……傷はもう大丈夫だよ……後は目覚めるのを待つだけ」

そう言い、シクルはエルザたちの方を振り返る。

「わあ！良かった……」

「あい！」

「流石だな……シクル」

エルザたちはシクルの言葉に喜び安堵し、声を上げるがルージュだけが未だに顔を俯き、暗い表情をしていた。

「……ルージュ」

「……」

シクルが呼びかけるもルージュからの返答はない。

シクルははあとため息をつく。エルザを見る。

「エル…悪いけどほんの少しルージュと2人きりにさせて？」

「ん…分かった」

シクルの真意を受け取ったのか、エルザはルーシイとハッピーを連れテントを出ていく。

エルザたちが離れたのを確認し、シクルは深呼吸を一つしてからルージュを見つめる。

「さて…と……………ルージュ、なんでギルドの決まりを破ったの？」

シクルの質問にルージュは答えず、ただ俯く。

「…ルージュ……………私怒ってないよ？怒ってないから…教えて欲しいな…どうして、勝手にS級クエストに来たの？」

言ったよね？S級クエストは常に危険と隣合わせ…ちよつとした判断ミスで死んじゃうこともあるって……………」

「……………だって……」

シクルがルージユの顔を覗き込み、話を続けると不意にルージユの口が開く。

「……なに？」

「だって……………いつも……………あたしは…ギルドに留守番で……………あたしは、シクルの…相棒なのに……………一緒に行けなくて……………シクルにとつてあたしは足でまとい……………？頼りない？」

シクルの力には……………なれないのお…？」

そう言い、顔を上げたルージユの目にはたくさん涙が浮かんでいた。

「ルージユ……………」

「あたしだって……………シクルの相棒だもんっ……」

役に立ちたいのお！シクルを助けたいのお！

でも……………いつもシクルは危ないクエストは一人で引っっちゃって……………いつも、大きなケガをして帰ってきて……………いつか、帰ってこないんじゃないかって……………不安で……………だから、これを無事に完了したら……………シクルもあたしを連れていつてくれるんじゃないかって……………」

そう言い、再び顔を下へ向け、涙を流し始めるルージユを見て悲しそうな表情を浮かべ、だが小さく微笑むとシクルはルージユを抱き上げる。

「……………馬鹿ね…あなたは私の最高の相棒よ…」

足でまといなんかじゃないわ…役に立たないなんて…思ったこと、一度もない……………私は、ルージユの思ってるほどまだ強くない…だからね？もし……………S級クエストにあなたを連れて行って、もし守れなかったら……………

あなたを失ってしまったら…そう思ったら、あなたには安全なギルドで私の帰りを待っていてほしいって…そう、思ったの……………」

「ふえ…シクルウ……………」

「ごめんね？」

ちゃんと伝えておけば良かったね……………

ルージユ……………

私はね？あなたがギルドで帰りを待つてるって考えたら…どんな辛い状況でも乗り越えられる……………あなたが待つているから、何が何でも帰らないとって…そう、思うのよ？

ルージユ……………私の親友……………すっごい、心配したんだから……………ギルドに戻ってみ

たらいなくて……ナツたちとS級クエストに行っただって聞いた時……身体が震えた……

もしルージユに何かあつたら……そう思つたら……怖かつた……ルージユ……

無事で良かった……間に合つて……ほんと、良かった……

そう話したシクルの目にも涙が流れており、ルージユの顔を濡らしていた。

シクルの涙を見て心配を掛けてしまったことにさらに大粒の涙を流し、シクルの胸に抱きつく。

「ご、ごめん……ごめんなさい……!」

「ルージユ……」

2人は十数分間、涙を流し続け、お互いの無事を喜んだ。

そして、再会の喜びを噛み締め、十数分後、涙の落ち着いた2人はエルザたちを呼ぶ。

この島の謎……問題……敵との戦闘が

今………
始まろうとしていた………。

14話 グレイの決断とシクルの言葉

めいっばい泣いたシクルとルージユは、涙を流しきり、落ち着くと互いに見つめ、ク
スツと笑みを浮かべた。

「じゃ、エルたち呼ぼっか」

「あいー！」

ルージユの返事を聞くとシクルは立ち上がり、1度テントの外に出て、エルザたちを
呼ぶ。

「エルーお待たせーもういいよー」

「ん？ああ…もういいのか？シクル」

どこかスツキリした様子のシクルはエルザのその言葉に、「うん！もう大丈夫！」と笑
顔で答える。

エルザもその言葉を聞き、「そうか…」と笑みを浮かべ、ルーシイとハッピーを抱え、
テントへと戻る。

未だ2人は縄に縛られたままだ。

「うー…シクルウ…これ取ってえ…」

ルーシイの涙ながらも訴えがシクルの耳に入る。ハッピーからも「取ってえ…」との嘆きが聞かれるが……

シクルは苦笑を浮かべ首を横に振る。

「流石にそれは…ごめんね」

「そんなああ………」

ガクツと肩を落とし、俯くルーシイとハッピーを見て、「なんか…ほんとごめんね」と申し訳ない気持ちになるシクル。

だが、その背後に立つエルザの黒いオーラがあまりに怖く流石に助けられなかった……

「(てかエル…本気でキレてる……)そ、それより……一体この島で何があつたつていうの？ナツは見当たらないし…グレイもこんな傷…」

エルザのオーラに耐えきれず、シクルは咄嗟にまだ詳しく聞いていなかった今回の依頼の内容をルーシイたちに問いかける。

「あ…うん、実は………」

ルーシイの話では、この島は何年か前から夜になると月が紫になり、月から放たれる紫色の光が島の中心にある遺跡へと落ち始めたという。

その頃から村人達は夜になると姿が悪魔のようになり、外の世界へ行けず苦しんでいくこと。

今回の依頼はその月を破壊し、身体にかかった呪いを解いてもらいたいというものだとと言う。

大まかにルーシイから内容を聞いたシクルとエルザ。

シクルはルーシイの話を聞き終えてから、空を見上げ、島を照らす紫色の月を見つめた。

「……………おかしい……」

「……え？」

「シクルウ……？」

シクルの呟きが聞こえたルーシイとルージュが首を傾げ、シクルを見つめる。

「……月が紫色になるなんて……………普通ありえない……」

「え？でも確かに月は紫色になってるよ？」

シクルの言葉にハッピーは反論を出すが……

「確かに！今見えてる月は紫色だけど……違うの……確か……なにかあったはず……」

シクルはその何かを思い出そうと考えるが一向に思い出せる予兆はなく……

「兎に角、今日はもう遅い……今夜はこの村に一泊し、明日……グレイが目覚め、ナツを見つけ次第私がギルドに連れて帰る」

エルザの言葉に一同は一度解散し、各々村人が用意してくれたテントに入り、一夜を過ぎすことに。

その夜……シクルは隣で眠るルージユを起こさぬ様テントを出ると村を少し離れた所に座り、空を眺める。

相変わらず、空に浮かぶは紫色に光る月……

「……………（何だろう……あの月を見ると……………モヤモヤする）」

この嫌な感じは……………一体……………

「眠れないのか？シクル……」

「っ！エル……」

空を見上げ、思考に浸っていると後ろから聞き覚えのある声が入る。

シクルはふつと後ろを振り返るとはあとため息をつき、再び空を見上げる。

「なんか………気になっちゃって……」

「あの月のことか……」

エルザの言葉に「うん……」と頷くシクル。

「……あ、ねえエル……？」

シクルはふとあることを思い出し空を見上げていた視線を隣に腰掛けたエルザへと向ける。

「なんだ？」

「あのね、お願いがあるんだけど………」

そう言い、シクルが話し始めたお願いの内容にエルザは徐々に目を見張る。

「シクル……だがそれは………」

「ね？多分いい経験にもなると思うんだ……」

ダメかな……………?」

シクルの瞳には何か強い想いがあるようにエルザは見て取った。はあとため息をつき、エルザは苦笑を浮かべ、シクルを見る。

「仕方ない……………いいだろう…だが、初めから私は許可しないからな」
「うん！ありがとう…エル…やっぱり優しいねエルは」

エルザの言葉にっこりと満面の笑みを浮かべるシクル。

「お前の頼みならな…さて、そろそろ休もう…明日に響くぞ」

「あ、うん……………」

立ち上がったエルザに手を引かれ、テントの中へと戻るシクル。

テントへ入る前にふつと空を見上げ、目を細める。

……………紫の月……………まさか…

「…まさか……………ね」

シクルとエルザが島についた、翌朝、

朝日の光でグレイが目を覚ます。

「……………つ…う…は、は…は……………」

「おはよ、グレイ……気分はどう？」

まだ痛む身体をゆっくりと起こしたグレイの視界に気を失う前はいなかったシクルとエルザの姿が目に入った。

「シクル!? それにエルザも……!!」

「……大体の話はルーシィから聞いた……」

全く、お前はナツたちを止める側ではなかったのか……？」

エルザの言葉にぐうの音も出ないグレイは顔を俯く。

「はあ……呆れてものも言えんぞ」

「っ……ナ、ナツは？」

エルザのため息とその一言に一瞬息を呑むグレイは咄嗟にこの場に見えない桜色のことを聞く。

「ナツはここにはいないわ……多分どこかで迷子になってるか或いは……遺跡にいるか……」

グレイの質問に答えたシクルを見て、グレイは「そうか……」と呟く。

「兎に角、ナツを見つけ次第お前達を連れ私はギルドへ戻る」

エルザのその言葉を聞き、グレイはばっ!と顔を上げ、エルザを見て目を見張る。

「な…ギルドに帰るって…お前！この島で何が起きているのかルーシイから聞いたんだらう!?なら…!!」

「ああ、聞いたさ…だがそれがどうした？」

私の目的はギルドの掟を破った者を連れ戻すこと…あとはナツだけだ…ナツを見つければ次第私達は戻る…それ以外の目的などない」

エルザの言葉を聞き、ギロツと睨みつけるグレイ。その表情は険しく、どこか苦しげに見える…。

「この島の人たちの姿を見たんじゃないのかよ!?!」

「見たさ」

「それを放っておけというのか!?!」

「依頼書は各ギルドに発行されているんだ…正式に受理したギルドの魔導士たちに任せるのが筋というものだろうか?」

「どんなにグレイが説得を試みてもエルザの答えはただ、「連れて帰る」それだけだった。」

グレイは我慢ができなくなり、拳を握りふるふると震わせる。

「……………見損なつたぞ、テメエ…」

「…なんだと？」

グレイの言葉を聞き、殺気がブワツ！と吹き荒れるエルザだがそれに怖気付くこと無く俯くグレイ。

「お前まで…ギルドの掟を破るつもりか？

見損なつたのはこちらの方だぞ……………」

確かにギルドのルールを破つたナツやルーシイ、グレイに非があるのは目に見えてい
る。

グレイも心のどこかでそれを分かっている…だが……………

「ただではすまさんぞ」

そう言いいきり、グレイに剣を向けるエルザ。

「ちよ！エルザっ!!」

「それはやりすぎだよ！」

「シ、シクルウ……!」

2人のやりとりを後ろで見ていたルーシイ、ハッピーとルージユはエルザの行動に慌てる。

が、シクルはじつとエルザとグレイを見つめていた。

剣を向けられたグレイは俯く顔を上げ、エルザの剣を握りしめ、押し返す。

「勝手にしやがれ!!これは！俺が選んだ道なんだよ!!やらなきゃならねえ事があるんだ」

そう言い、グレイは剣を握る手を強める。

その手からは血が滴り始め：テントの床を赤い斑点が出来る。

グレイの引き下がらないと言った決意の見える瞳を暫く見つめ、エルザはあと一つため息をつく。

そして、剣を握るグレイの手を軟らかに離させるとルーシイとハッピーを縛っていた

縄を切る。

「…へ？」

「エルザ…？」

エルザはグレイを振り返り、呆れた瞳で言う。

「これでは話にならんからな…まずは仕事を片付けてからだ」

「で、でもお…他のギルドがこの依頼を受けたら…問題になっちゃうんじゃあ？」

先ほどの他のギルドに任せると言ったエルザの言葉を覚えていたルージユは恐る恐ると言った様子でエルザに問う。

すると…

「ああ、それ？大丈夫大丈夫！この依頼、私が受けたから他のギルドが受けることはないよ」

ルージユの隣からヘラリと言った様子で言いきったシクル。

「「ええ!」」

「…………シクル、自分から受けたのお？」

「そーだよ？それより…エルも意地悪だなあ…」

昨日言ったのに…この依頼、ナツたちにも手伝ってもらおうって…」

シクルの困ったような笑みを見て、ふっと笑い、シクルを見返すエルザ。

「言っただろう………始めから許可など出したら反省しないだろう……それに、私はこいつの想いを聞きたかったのにな……少々試させてもらった」

2人の会話を聞き、ルーシイたちはぼかん……とその光景を見つめる。

「え……じ、じゃあ………最初から連れ戻す気はなかったってこと……?」

確認のため問いかけてくるルーシイに何を言っている?と言った様子で見返してくるエルザが口を開く。

「バカを言うな……私は初めからお前達を連れ戻す気でいた……だが、シクルがどうしてもお前らにこの依頼を完遂させ……経験させてやりたいと頼んできたのにな………仕方なくだ」

「とかなんとか言つて……ホントはエルザだつてルーシイたちを連れ戻す気は無かつたんでしょ?」

クスクスと笑いそう言うシクルを見て、少し頬を赤らめそっぽを向くエルザの様子にルーシイとハッピーはほんのりと笑みがこぼれ、ルージユも嬉しそうにシクルを見上げる。

「お前ら……………」

2人の様子にグレイもしてやられたと様子を隠さず、嬉しそうに笑みを浮かべた。不意に、シクルはグレイの方を振り返る。

「さて……………グレイ？手見せて」

「あ、ああ……………」

シクルはグレイの傷ついた手を握ると、*“歌魔法 治癒”*でその傷を治す。

そして、回復させるとほんの少し、ギユツとその手を握る…。

「……………シ、シクル？」

シクルの様子に戸惑い、首を傾げるグレイ。

「……………グレイ……………」

「お……………おう？」

「……………お願い……………これだけは覚えておいて……………」

グレイが今……………何を思い、何を悩んで……………何に苦しんでいるのか……………私にははつき

りとは分からない……でもね？

あなたには仲間がいる……家族がいる……

グレイ……それを、忘れないで…？

周りをよく見て……お願い……

そう言い、顔を上げたシクルの表情はどこか、切なく悲しげだった。

グレイはじつとその顔を見つめ…

「……………分かった」

と、頷いた。

その答えにシクルは微笑み、「絶対だよ…」と、眩くとグレイの手を離し、エルザを振り返る。

「さて……エル……じゃあ、私たちはあのバカを探しに行きますか……」

「ああ……そうだな……」

シクルのニヤツとした笑みを見てエルザも同じくフツと笑みを浮かべる。

「…行くぞー!」

「「「「おぉー!!!」」」」

エルザの掛け声と共に、シクルたちは叫び、テントを飛び出し、問題の遺跡へと駆け出していく。

次回…敵の狙いが明らかに……

「…あ、そうそう!これ終わったらルーシイたちにはすつごく素敵な罰があるからね!!」

「「ぬわにいいいい!!」」

「え!?なに!?何なの!?!」

「ふ…………腕がなるな……………」

シクルの爆弾投下にグレイ、ハッピー、ルージュは叫び、悲鳴をあげる。

その様子にルーシイは戸惑い、焦り、エルザはどこか楽しげに微笑むのだった……………。

「楽しみだなあー!」

15話 デリオラ復活 グレイの涙

村を出たシクルたちは遺跡に向かう途中、グレイから敵の情報と目的を聞いていた。

「なるほど……つまりその零帝……否、リオンは

嘗てお前の師匠でもあったウルが命をかけ封印した怪物、デリオラの封印を解き……自身の手でそれを破壊……

そして、師を超えることを望んでいるのか……」

「ああ」

エルザの言葉に頷くと、グレイは足を止めることなく遺跡を睨みつける。

「確かに……ウルは俺達の前からいなくなつた……けど、ウルはまだ生きてるんだ……」

「生きてる……（グレイの師匠ということは氷の魔導士……恐らく「絶対氷結」アイズドシエル）」

グレイの話を聞き、シクルたちは自然を走る足を速める。

そして、ふと遺跡を見つめると、少し傾いていることに気づく。

「遺跡が傾いてる……？」

「恐らくナツだろう…」

ムーンドリツツ

「なるほど…あれなら月の雫はデリオラのいる地下まで届かないってわけね…（こういう時ほんと頭の回転早いわよね…）」

その回転の速さをなんで普段にいかせないのかしら…と、心の奥深くでシクルは愚痴りながらも足を進めると、目の前を仮面をつけた民族の集団がシクルたちの道を塞いだ。

「つー…くそ…こっちは急いでるつつうのに!!」

目の前に立ち塞がった集団に愚痴を零すグレイ。

その横で、シクルも小さく舌打ちをし、強行突破に入ろうと腰を低くした時…

目の前に緋色が揺らいだ。

「…エル?」

「行け…ここは任せろ…グレイ」

お前はそのリオンとやらと決着をつけてこい」

小さく背後を振り返ったエルザの瞳は、信頼に満ち溢れ、グレイが負けることをミミりも疑ってはいなかった。

「っ!!サンキュー!エルザ!!」

エルザに礼を言うとその横を通り、遺跡へと走るグレイ。

その後ろ姿を見送り、エルザはシクルの方を振り返る。

「シクル…お前もグレイを追え

恐らく、遺跡にはナツもいるはずだ…頼む」

シクルはその言葉にニツ!と笑みを見せる。

「りよーかいつ!!行くよ!ルージユ!」

「あい!!」

シクルの掛け声にルージユは翼を出し、シクルの背を掴むと飛び上がり、上空から遺跡へと向かった。

上空から遺跡へと向かったシクルとルージュはグレイが到着する前に遺跡へと辿り着いた。

「…ありや？グレイより早く着いちゃったね」

「ほんとだあ…」

「んー…まいつか！早く行こ！ナツ見つけなきゃ!!」

シクルの言葉に「あい！」と頷くとルージュはシクルの頭に乗り、シクルは走り出した。

遺跡の中へと入り、暫く地下への道を走っていくシクル。

「んー……………大分ナツの匂いが近づいてはいるんだけど…（てかこの匂い…香水？）」

竜同等の嗅覚でナツの居場所を探すシクルだが別に香る、香水の匂いが搜索を邪魔していた。

「シクルウ…ナツの居場所分らないのお？」

「んー……………この辺だと思っただけど…」

シクルが辺りを見回すと…

「ほっほっほっ!!」

「待てやコラあああああっ!!!」

シクルの後ろから聞いたことのある叫び声が聞こえた。

シクルとルージュは一斉に振り返り…

「ナツ!!!」

漸く、探し人の桜色、ナツを見つけた。

「んお!?シクル!?何でここにいんだア!?」

「あんたが勝手にS級クエストなんかに来ちゃったからでしょお!?私だけじゃないわ、エルザも来てるわよ!!」

シクルの怒声にビクッ!と肩を震わせるナツ。

「んなにイ!?エ、エルザも来てるのか…」

「来てるわよ!すつつつごい!!!怒ってるわよお…」

「っ……………!!そ、それよりシクル!!」

そいつ捕まえんぞ!!!」

「…そいつ?」

ナツの指差す先を見ると変な仮面を被った小さな老人の姿が……………

「…この匂い…(香水の匂いはここいつから…でもこの匂いは……………)」

微かに香ったその匂いに覚えがあるシクル

「追うぞ!!」

「シクル、ナツ見失っちゃうよお!」

「んえ?あ、うん!!」

ナツとルージュの声に我に返ったシクルはナツと共に仮面の老人を追う。

……………一体……………何が目的?

老人を追う中、シクルはナツに追いつき隣を走る。

「ナツ…アレ誰？」

「俺が知るかよ!!けど、あいつの魔法で折角傾けた遺跡を元に戻しやがったんだ！」

「遺跡を…!？」

「直しちゃったってことお？」

それは… // ロストマジック 失われた魔法 // ……

時空の魔法…… // 時のアーク // !?

「やっぱり……」

「んあ？シクル、どーした？」

シクルの小さく呟く声が聞こえたナツが問いかける。

シクルは「ううん、何でもない…」と答えると何も話さなくなる為、ナツは不思議に思いながらもさらに問いかけることは無かった。

………時のアークを使えるのは………

私の知る限り……あの人だけ……

「ほっほっほっ」

「っ!?!」

2人が依然、仮面の老人を追っていると突然目の前から姿が消える。

「消えたア!?!」

「どこ行ったのおっ!?!」

「恐らくデリオラのいるところよ!」

シクルの言葉通り、仮面の老人は地下深くに隠されていたデリオラの所にいた。

「いよいよか……」

「見つけた!!」

「うひゃあ!?!お、おつきいよお……!?!」

「とりあえず燃えとけえ!!」

氷に覆われた怪物、デリオラを見上げニヤニヤと笑っている仮面の老人の真上に飛び上がり、火を纏った拳を振り下ろすナツ。

「火竜の鉄拳っ!!!」

ナツの拳をひよいつと軽い様子で避ける仮面の老人。

「避けられちゃったよお!」

「ほっほー愉快な言葉ですな…しかし、何故ここがお分かりに?」

「けっ!俺達は鼻がいいんだよ!」

「ましてや、女の香水の匂いがあるんだから…尚更、あとを追うのは容易かつたわよ?

…あなた、一体何者?」

シクルの探りを入れるような鋭い眼差しに怖気付くこと無く、笑みを絶やさないう仮面の老人。

「ほっほっほっ…私はね、どうしてもデリオラを復活させねばなりませんのよ…」

「へっ!やめとけやめとけ!もう無理だ」

笑う仮面の老人にニヤツと笑みを見せ言い切るナツ。

「ほお?何故無理と?」

ナツの言葉に興味を示した仮面の老人はそう問いかける。

すると…

ビシツ!!と仮面の老人に指を差し、ナツは高らかに言いきる。

「グレイがあいつをぶっ飛ばす!!」

俺がお前をぶっ殺す!!百万回な!

それで終わりだ!この野郎!!」

「お?それなら私の出番はない訳だ?やったね!」

「シクル…こんな時にめんどくさがらないでよお…」

ここにきてめんどくさがりが発動したシクルにため息をつくるルージユ。

「ほっほっほっそう上手くいきますかな?」

仮面の老人がそう言い、背後を振り返った時…

デリオラの氷に紫の光…“月の雫”が降り注いでいた。

「「え!?!」」

「なにイ!? 上で儀式やってる奴がいるのか!？」

ナツは月の雫が降り注ぐ天上を見上げ、睨みシクルは愉快そうに笑っている仮面の老人を睨みつける。

「ほっほっほっ……たった1人では月の雫の効果は弱いのですが……既に十分な月の光が集まっておりま……」

あとはきつかけさえ与えてしまえば……」

仮面の老人がそう呟いた時——

ピシツ!!

「っ!」

「氷に亀裂があ……!!」

「くそ! 頂上にいる奴を何とかしねえと!!」

そう叫び、何とか頂上へ行こうと来た道を戻ろうとするナツだが……

その道を仮面の老人が天上の岩を落とすことにより、塞ぐ。

「ん なっ！」

「逃がしませんぞ…私を追ってきたのはミスでしたね…火竜君に月の歌姫よ………」

「このやろ……！」

「ナツ!!」

仮面の老人に突っ込もうとしたナツをシクルが咄嗟に呼び止める。

「んぐ!なんだよ!」

「そいつは任せるよ……私は………上のヤツを何とかしてくる!!」

「っ!? 出来んのか!」

ナツの問いかけにニツ!と微笑み、「もちろんっ!!」と答えたシクル。

「ほっほっほっ! 行かせるわけないでしょう!!」

仮面の老人はそう言い、手を構えるとシクルの立つ真上の天上を崩す。

「っ! シクル!!」

ナツが慌てて声を上げる。

が…シクルはニヤツと笑みを浮かべ…

「忘れてない……？」

私は2つの属性を持つ滅竜魔導士……

月と光の滅竜魔導士だつてことを……

「っ!!」

そう呟いたシクルの体は一瞬で金色の光に包まれる。

そして……

「はああっ!!光竜の……剣角!!」

シクルは光の速さで天上を突き破り、遺跡の外、上空へと飛び上がった。

ドドドドゴオオオオン
!!!!

光の速さで動くシクルは仮面の老人やナツの目ですら追えず、崩れ落ちる岩を避け、
天上を突き破っていく。

そして……

ドオオオオオンッ!!!

満月の輝く上空に飛び上がるシクルの姿……

「……!!ルージュ!!!」

「あいつ!!」

シクルの掛け声と共に、ルージュはシクルの作り出した弓、月光弓を構える。

「行くよお!ムーンライト・アロー!!」

ルージュの放った光の矢は寸分狂わず、儀式を行っている人物に刺さる。

「ノオオオオオオオッ!?!」

奇妙な雄叫びを上げ、倒れる儀式を行っていた人影……その人物が倒れると儀式の光は消え、月の雫も消える。

シクルとルージュは顔を見合わせ安堵する。

が……………

グオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ
!!!!!!

地鳴りのような雄叫びが響く…。

「ひいやあ!?!」

「つ!?!今のは……! (まさか……!)」

雄叫びが聞こえたのは地下深く、デリオラのいる場所から…シクルは再び光を身体に纏い、超速度で地下へと降り立つ。

すると……………

「…う、そ……………!?!」

「ふ…復活してるう…!?!」

シクルとルージユの目に映るは大きな雄叫びをあげ氷が完全に解けたデリオラの

姿——

「シクル!!」

「っ！ナツ!!」

デリオラの下方からナツのシクルを呼ぶ声が響く。

「行くぞ!!まだ終わってねえ!!こいつぶつ飛ばすぞ!!」

「ナツ…おっけー!!」

ナツの言葉に大きく頷き、構えるシクル。

だが……

「待て!!お前らでどうにか叶う相手じゃねえ!!」

2人を止める声…グレイの声がその場に響いた…。

声のした方を振り返ると腹に傷を作ったグレイが立っており、その足元には恐らくグレイの言っていた“リオン”だろう男が倒れていた。

不意に…グレイがある構えをとる……

それを見たシクルは目を見張り、驚愕する。

「な…グレイ!?まさか……………やめなさい!!!」

その構えは……………

「絶対氷結!!!」
アイスドシエル

その呪文と共に、グレイの周りに膨大な魔力が集まる…

その光景を見たリオンは堪らず叫ぶ。

「よ、よせグレイ!!!あの氷を溶かすのにどれだけの時間がかかったと思ってるんだ!?

同じことの繰り返しだぞ…いずれ氷は溶け、再びこの俺が挑む!!!」

「これしかねえんだ!!」

今やつを止められるのは…これしかねえ!!」

リオンに怒鳴り、更に魔力を高め、標準をデリオラへと合わせるグレイの前に立ち塞がるようにナツが立つ。

そして、魔法陣を展開するグレイへとシクルもゆつくりと…だが、確実に近づき…

ついにグレイの目の前へと辿り着く。

「お、おいシクル…!?それ以上入ってくるな！お前まで凍っちま……………」

パアアアアンツ！！！！

「っ……………!?」

グレイの怒鳴りを遮り、響く乾いた音…

シクルが思いつきり、グレイへと平手打ちしたのだ…。

グレイの頬を平手打ちしたシクルの手は氷始め、徐々に体全身が氷を纏い始める。が、シクルはその状態を構うことなく……………

「……………で……………ふざけないで!!!」

言っただしよう!?あなたは1人じゃないって!!!周りを見なさいって!!!

あなたは1人で戦ってるんじゃない!!!

みんながいる!!仲間がいる!!家族がいるのよ!?どうして……………どうして……………

私たちを……頼つてよ……

1人で抱え込まないでっ!!! グレイ!!!

「シクル……」

ポロポロと涙を流すシクルを見て、グレイは目を見開き啞然とする。

「……………あの時、死んで欲しくねえから止めたのに……俺の声は届かなかったのか……………
？」

「っ!?!……ナツ……………」

デリオラを見上げるナツの隣にいつの間にかシクルも並び立つ……そして……………

「大丈夫……グレイの苦しみは……………痛みは……………」

仲間が……家族が、癒してくれる……………」

そう言い、ふっと小さくグレイを振り返る、シクルの姿がグレイの目には嘗ての師匠、ウルと重なった。

「俺は最後まで……諦めねえ!!」

「!!だめだ……避けるおおおおっ!!」

ナツとグレイの叫び声が響く……

ナツとデリオラの拳が交わる……そう、誰もが思った。

その時……

ピシ!!ピシピシ!!ガラガラガラッ!!

「っ?!んだア!」

突然、亀裂が入り、拳から全身が崩れ落ちるデリオラ……

そう……デリオラは既に死んでいたのだ……

ウルの水の中で……既にその命を終わらせていた……

「すっげえ……すっげえな!!お前の師匠!!」

崩れ落ちたデリオラの残骸を見つめ、ニツ！と背後で俯いていたグレイを振り返り、満面の笑みを見せるナツ。

シクルもナツにならない、近寄ってきたルージュを抱き上げるとグレイの方を振り返る。

グレイは俯き、目元を手で覆っていた…

「ありがと……………ごさいます…師匠……………」

これで…グレイの暗い闇は消え去った…

海に溶けて帰っていくウルの氷と共に流されるかのように…グレイを苦しめていた長年の闇が消えていく……………

「……………良かったね…グレイ……………」

涙を流すグレイを見つめ、柔らかに微笑むシクル。

次回……………悪魔の島……………完結……………

島の人々の呪いは…如何に……………？

16話 島の真実

デリオラが崩壊し、シクルたちは遺跡から出てくる。
遺跡の外ではルーシイやエルザが待っていた。

「みんな！無事だったのね！」

別れた時よりボロボロのグレイの姿などあるがそれでも歩いて出てきたシクルたちを見て、ぱあつと笑みをこぼすルーシイ。

「ルーシイ！エル！ハッピー！そっちも無事だったんだね！」

「ああ」

「みんなー！おかえりー！！」

やっと合流を果たしたシクルたち。

「いあー！！終わった終わったー！！」

合流し、立ち話をしているとナツが両手を空に掲げ、満面の笑みで叫ぶ。

「これで俺達もS級クエスト達成だー!!」

「だー!!」

ナツの叫ぶ姿を真似て、ハッピーも飛び上がり、一緒に喜ぶ。

「もしかしてあたし達2階に行けちゃうのかな?」

ルーシイもルーシイでクエスト達成に喜びの声を上げているが……………

「ちよいちよい……んな訳ないでしょ?」

てか、みんな後ろに鬼がいるの気づいてね?」

呆れた様子のシクルが差す先には……背後に修羅を背負った緋色の女、エルザがナツたちを睨んでいた。

それはもう……恐ろしい程に……………

「ひい!」

「そ、そうだあ……お仕置きが待ってたんだ……」

「……………その前に、やるべき事があるだろう?」

エルザはナツたちを叱ることはなく、まだクエストは達成していないことを言ってきた。

「……え？」

「今回の依頼は……悪魔にされた村人を救うこと……それが内容でしょ？」

「で、でも……デリオラは死んじやったし……村の呪いもこれで……」

「いや、あの呪いとか言う現象はデリオラの影響ではない……」

月の雫の膨大な魔力が人々に害を及ぼしたのだ……つまり、デリオラが崩壊したからと言つて事態は改善しない」

ルーシイの疑問にエルザが答える。

エルザの答えに、「そんなあ……」と肩を落とすルーシイ。

ふと、月の雫の儀式をしていた張本人、リオンならば何か知っているのでは？と考え、グレイがふつとリオンを見やるが……

リオンは目を細め、グレイから顔を背けると

「俺は知らんぞ」

と、言いきつた。

「なんだとお!？」

何も知らないと言つたりオンを睨みつけるナツ。

リオンはナツに視線をやり、ため息をつくと話し出す。

「……3年前……この島に俺達が来た時、俺達は村が存在するのは知っていたが……村の

人たちには干渉しなかった：

彼らから逆に会いに来ることもなかったしな」

リオンの言葉にシクルがピクツと眉を寄せる。

「…3年間、1度も？」

シクルの問いかけに一瞬シクルに視線をやり、目をそらすリオン。

「…この3年間、ずっとこの島にいたのよね？」

「…何が言いたい？」

「…シクル？」

「…そうか……………」

シクルの言葉にはとやかに気づくエルザ。

「貴様ら…何故、3年間、あの光を浴びながら…悪魔の姿になっていないんだ…？」

「「「「つ!?!」」」」

「…なにが？」

エルザの言葉にナツ以外のメンバーが気づいた様子を見せ、リオンを見張る。

「……………気をつけろ、奴らは何かを隠している」

リオンはいくつかグレイと会話をすると仲間と共に去っていった。
そして、シクルたちが村に戻ると……………

「…直ってる?」

リオンたちにより消された村が元通りに戻っていた。

「ど、どーなってんだ…?」

ナツたちはその光景に目を見張り、驚愕する。

そんな中、シクルの脳裏には髪の毛の長い女が過ぎる。

……………まさか?」

ふと、シクルの嗅覚にあの香水の香りが香る。

「つー……………エル、ちよつとここを離れるね」

「ん? あ、ああ…すぐ戻るんだぞ?」

エルザのその言葉に「はい!」と答え、シクルは香水の匂いを辿る。

そして……………

「どーいう心境の変化なのかしら？

……………ウルティア」

森の奥深くで誰か…おそらくあの男と通信をしていた仮面の老人を見つける。

「ほっほっほっ…よくここがお分かりに…」

「下手な芝居はやめなさい…竜の五感を舐めない事ね…匂いで丸分かり…それに、魔力の質でもあなただということが分かったわ…」

シクルがそう言うと、一層仮面の老人は笑い、次第に姿が歪む…

そして、歪みが消えると現れたのは仮面の老人ではなく髪の毛の長い女…評議会に席を入れている「ウルティア」だった。

「へえ……さすが、妖精の尻尾最強女魔導士……月の歌姫つてところかしら？
で？私に何の用？」

ウルティアの言葉を聞き、十六夜刀を召喚し、刃先を向け睨むシクル。

「言いなさい………今回の件、何が目的でリオンと手を組んだの？」

「ふふ……そうね、強いていえばちよつとした暇つぶしと評議会としての調査………」
ウルティアがシクルの質問にそう答えると……

ドオツ!!!

言葉の途中でシクルは刀を地面に突き刺し、剣気でウルティアの真横を切り裂く。

「……それで？………騙せると思う？私を……」

「……ふっ やあね、短気な子は………モテないわよ？」

「御生憎様……私は別に誰かにモテたいとか………そう言う思考は持っていないのよ」

殺気が飛び交う両者……

不意に、ウルティアが殺気を弱め、肩を竦めると口を開きだす。

「そうね…強いて言えば、あの方のため…」

「……………あの方？」

「ええ？そうよ…デリオラを支配下に置き、操りその力を使おうとしたんだけど……………見事にあいつの氷の中でその命を無くしちゃったからね……………」

嘲笑うように言うウルティア。

その瞳を見てシクルはほんの少し悲しそうな表情になり…

「ウルティア……………ウルの涙……………あの方は…」

と呟く。

その瞬間…

ゴオ!!!

と言う、殺気と共にシクルへと水晶が超速度で飛んでくる。

ドッ！ゴッ！

「っ!!ぐっ!!うあー！」

飛んできた水晶に1度は反応し、避けるもその後続いた攻撃に身体が動かず、当たってしまい膝をつくシクル。

「黙りなさい……私の前で……あの女の名を出すな……」

膝をつくシクルを見下ろし、睨むウルティアにシクルはふっと笑みを見せると……

「……悲しい人ね……あなたはほんと……」

と、ウルティアを見上げ、言った。

「……!!お前……!!」

シクルの言葉にカツとなり、手を振り上げるウルティア。

だが……

「おーい!!シクルー!どこだア!」

遠くから、シクルを探すナツの声が響く……

シクルの嗅覚は確実にナツが近づいてくることを感じ取っている。

「……………どうする？このまま私をやってもいいけど……………そうしたら、彼が…彼らが、黙ってはいないわよ？」

例え、評議員だとしてもね…

そう、シクルが言うとうルティアは少し忌々しい表情を浮かべ、手を下ろし、シクルに背を向ける。

「ふ…まあいいわ……………次…次会った時、覚悟しておきなさい……………」

そう言い残し、足を進めるウルティア。

ふいに…足を止め、シクルを振り返り……………

「次やる時は……………お互い、万全の状態で行きましょう…」

「っ!!」

そう言い、含み笑いを見せ消えたウルティアをじつと見つめ、シクルは長いいため息をつく、

「はあああ……………（バレてた…か）」

つつ……………あー…もお……………傷開いちやった」

そう愚痴り、腰を下ろすと服を捲り腹部に出来た傷を見る。

これは、以前の依頼の時闇ギルドマスター、*「ディア」*につけられたものだ。評議会にてあらかた治してもらっていたが、今のウルティアからの攻撃をくらい、傷が少し開いてしまった。

「あー…戻るのめんどくさいなあ…」

そうぼやき、空に浮かぶ紫の月を見上げる。

「んー？月の雫……………そっか…村の人がおかしくなったのって……………もしかして……………」

ずっと脳裏で引っかかっていたこと……………

それが何となく、解けた気がする……………。

「…さて……………どうやって戻ろう？」

歩いて戻るのは流石に疲れたしなあ…と再びため息をつきそうになった時……………

ガサツーーー！

「シクル!!!見つけたっ!!!」

桜色の男、ナツが現れた。

「ナツ!! いーとこに来たア!!!」

「お願い!!! 私をおぶって?」

「バツ! と茂みから現れたナツを見て両手をめいっばい広げ、笑顔でおんぶの催促をするシクル。」

「は、ハア!? ンでだよ?」

「だってー…疲れたし、歩いて戻るのめんどくさいし……何より、身体痛い!! ね? お願い!」

「いーでしょ? と尚催促してくるシクルにはあとため息をつき、困ったような表情を見せたナツ。」

すると、ふいに鼻をかすめる鉄臭い匂いに顔を顰める。

「つ!! おいシクル…お前どつか怪我してんのか?」

「ふえ? ああ……ちよつと前の依頼で出来た傷が開いちゃったくらいだよ?」

「他は何ともないよーと二ヘラと答えるシクルにナツは呆れた様子でため息をつくと

……

「そーいう事は早く……言えつての!」

ひよいー!

「え!? ひや!? ちよー! おぶつてとは言ったけどこれは…!!」

ナツはシクルの肩と膝裏を抱え、抱いている…横抱き、 // お姫様抱っこだ。

「うっせ! 黙ってこうされてろ…この方が、お前の顔、よく見えるから…:…:頼む」

そう言ったナツはどこか、真剣な表情を浮かべ、シクルはそれ以上反論出来ず、ナツに身を委ねることにした。

しばらく、村への道をナツは無言で歩く…すると、

「……………怪我、大丈夫か?」

シクルに聞いてくる。

シクルは初め、きよとん? と首を傾げ…

「ん? ……ああ、うん…大丈夫だよ?」

と、答える。

「…悪い……………勝手に俺がS級クエストになんか来ちまったから…シクルが連れ戻しに来たんだよな…怪我、してんのに…」

「うん……まあ……………（てか、エルも連れ戻しに来たんだけど……というか、私よりやる気だったし……）」

ナツは歩く足を止め、立ち止まる。

「……ナツ？」

「……………ごめん……俺……………早く……認められたくて……………シクルに……俺が強いんだって……認められたくて……………一緒に行っても、足でまといにならないって……………シクルに……分かって、欲しかったんだ……………」

ナツの表情は苦しげに歪み、悲しみと悔しさが滲み出ていた。

「……ナツ……………」

「ただ……………シクルに認めて欲しかった……」

俺は強いつて……信じて欲しかった……

それだけなんだ……………なのにシクルに無理させて……

さいてえだな……俺……………ごめん……」

ナツの泣きそうな顔を見て悲しげな表情をするシクル。

そして、フツと小さく微笑みを見せるとナツの額に自分の額を寄せコツン…とぶつける。

「バカね……………ナツが強いつてことくらい…ちゃんと分かってるよ……………」

信じてる…ちゃんと……………だからこそ、私のいない間……………ルージユを…ギルドを…皆を…家族を…あなたに任せて行ける……………」

ナツ……………もう、こんな事しないでね…？

ルージユがS級クエストに行つたつて聞いたのと同じくらい……………ナツがS級クエストに行つてしまったと聞いて……………怖かった……………」

ナツ……………何もなくてよかった…」

シクルの言葉にほんのり、1粒の涙を流し、

「おう…ごめんな、ほんと…」とナツは言った。

そして、気持ちが落ち着いたのかナツは顔を上げると、「んじゃ行くか！」とシクルを見やい、ニカッ！と笑う。

シクルも「うん!!」とニコツ!と笑みを見せ領く。

その後、2人で村に戻るとエルザからの「遅い!!」の声が響き、2人揃い、「ごめんなさい…」と謝る。

「はあ……とにかく……ナツ、少し力を貸してくれないか?」

「んア?なんで?」

ナツの疑問にエルザは1度深呼吸をすると…

「月を………破壊する」

と、答えた。

エルザの言葉に、ルーシイとグレイ、ハッピーとルージユは驚いていたがナツはやる気を出し、シクルも「おー頑張れー」とやる気のない声だが応援していた。

「て、シクル!?あなた、月を破壊出来ると思ってるの!?!」

ルーシイの驚愕の声にコテリと首を傾げ、あははと笑い、シクルは…

「何言ってるのー?月を破壊なんて出来るわけないでしょ」

と、言った。

シクルの言葉にルーシイたちはほっと安堵するが……

エルザとナツは依然、やる気に満ちておりそして……

「今だ！ ナツ!!!」

「うおおおおつ!!! 火竜の…鉄拳!!!」

エルザの持つ武器の一つ、破邪の槍をエルザが投げるその瞬間、タイミングを合わせ
ナツの拳が当たり、その槍は真つ直ぐ月へと飛び、そして……

ビシィツ!!!

「うそおおおおお!!」

月にヒビが入る…。

「あいやあー!?!」

が、結局エルザの槍が壊したのは島の上空を覆っていた月の雫の光によりできた呪いの膜だった。

それは、村人達の脳や記憶を狂わせてしまう効力があり、そのせいで村人達は長年苦

しんでいたのだ。

それを見事解説したシクルやエルザたちは、その夜村での宴に参加した…。

そして、翌日……

「そんな…それではこの報酬は受け取れぬと………？」

村長が依頼の報酬をシクルに差し出すが…

「はい…今回のことに、私はあまり手を出していませんし…最初は不当により、受けてしまった依頼です………なので、報酬金は頂けません」

これは村の復興などに当ててください…

そう言い、報酬金の受け取りを断るシクル。

結局、最後まで諦めなかった村長の押しに負け、おまけの報酬、金の鍵のみ受け取ることにし、一行はエルザとシクルが行きに使った海賊船でマグノリアへと帰還するのであった……。

これにて……………悪魔の島篇 終わり…

next story

幽鬼の支配者篇

開幕

く予告く

皆は私が……………守ってみせるっ!!!

いや……………いや……………来ないで……………来ないで……………

来るなあああああつ
!!!!

私はお前を……許さないっ!!!

お前はあたしを……怒らせたんだ……

未来はないと思え……

第3章 幽鬼の支配者篇

17話 奇襲 怒れる妖精

海賊船に乗り、マグノリアの港へと帰還したシクルたち。

いつも通り、乗り物酔いを起こしたナツに苦笑を浮かべながらギルドへと歩き、帰る途中だった。

「そう言えばルーシイ？その報酬の鍵って何のやつなの？」

報酬の鍵を受け取ってからずっと手放さないルーシイを見てシクルが問いかける。

「これ？これはね、人馬宮のサジタリウスよ！」

「人馬だど!？」

ルーシイの言葉に反応を見せたナツの脳裏に過ぎるは…

馬の被り物被った人間……

「いやいや……こうじゃない?」

そしてそんなナツの隣で自身も脳裏で人馬の姿を想像するハッピーは…

見ただ目普通のケンタロス……

「……………?」

グレイはあまりパツとしたイメージは思いつかず…。

「んー……どんなのだろお…シクル、なんか思いつくう?」

シクルの頭の上で悶々と想像するもこちらもいいイメージは思いつかないルージユ

…

「さあ…?あんまり良く分からないけど………というか、話ふつたの私だけどき?

………いいの?そんな呑気にしてて…」

「え?」

シクルは「帰ったらアレが…」とナツたちに呟きながら前を歩くエルザへ視線を向ける。

「…ギルドへ戻ったら、お前達の処分を決定する」

エルザは普段と変わらず、途轍もない量の荷物を引きながら、ナツたちを振り返ると無表情で、そう告げた。

その言葉を聞いた瞬間、ナツたちは震える。

「ま、判断を下すのはマスターだけどねー…覚悟はしといた方がいいよ?」

ニシシツと面白げに笑うシクルを見てゾワツと背筋に嫌な寒気が走るグレイとハツピー、ルーシイ。

「ま、まさか…アレをやらされるんじや!?!」

「アレって?」

「アレはいやだよおおお!!!」

「だからアレって何!?!」

「アレはアレだよお…この世の終わりだよお…」

シクルウ……」

「ご、ごめんルージュ……流石に今回は助けられない……」

グレイやハッピーが恐怖に震え、

それを見てルーシイも恐怖する……

が何のことかわからず叫び、ルージュはシクルに助けを求めるが

シクルは首を横に振り……無理だと言う。

「へーだーいじょうぶだって!!きつとじつちゃんなら、よくやったって褒めてくれるさ!!」

唯一、気落ちせず、ポジティブに考えていたナツ。

「あんた……どんだけポジティブなのよ……」

その様子にルーシイが呆れた目で見つめ、シクルも苦笑を浮かべ、ナツを見る。

が……

「いや……アレは確実だろう」

と、エルザの無慈悲な声が響く。

すると、笑顔だったナツの顔から次第に滝のような汗が流れ、恐怖で顔が歪む…。

「嫌だああああああああっ!!!」

アレだけはあっ!!!アレだけはっ!!!

嫌だああああああああああああああっ!!!」

「だからアレって…何なのよおおおおお!!?」

ナツとルーシイが絶叫し、逃げ出そうとするナツをエルザが首根っこ掴み、逃がさず

…

引きずられるようにし、ギルドへと歩を進める。

「あっはは…自業自得だよ…ナツ」

流星に助けられないよ…と苦笑を浮かべ、エルザとのやり取りを見ていたシクルはふと、周囲からの視線がおかしいことに気づく。

「…ねえ?なんか…見られてない?」

「ん?ああ…確かにな…」

シクルの言葉にエルザも頷き、ナツたちも周囲へと意識を回す。

「んだア？」

「なんか…嫌な感じね？」

ナツとルーシイが怪訝そうな表情で言い、グレイやハッピーもそれに頷く。

「またギルドのみんなが何かしちやったのかな？」

「しちやったとしたらあたしたちだと思っただけだなあ…」

周囲の目を気にしながら、ギルドへと真っ直ぐ帰ると…次第にその姿が見えてきた…
そして……………ギルドは普段の様子とは少し違っていた。

「んな…!？」

「んだこりやあ!？」

「ひ、ひどい…」

「何これ!？」

「ギルドが…ボロボロだあ…」

「これは…!？」

「この…魔力…（まさか……………）」

シクルたちの目の前には何本もの鉄の柱が壁に突き刺さり、ボロボロのギルドだった。

ナツやグレイは額に青筋を立て、エルザも拳を握って震わせている。

「何があつたというのだ…」

「…フアントム」

シクルたちの背後から、弱々しくも、聞き覚えのある声が聞こえた。

シクルたちは振り返ると…

悲しく、悔しげな表情を浮かべたミラが俯き、立っていた。

「フアントム…だと？」

「悔しいけど…やられちゃったの…」

その名を聞き、ナツは更に表情を歪ませ、シクルは笑顔のないミラの頭を撫で、慰める。

そして、ミラに案内され、ギルドの地下、仮酒場にやってくる。

部屋ではギルドメンバーが神妙な面持ちで集まっており、しーんと、普段では考えら

れないほど静まり返っていた。

すると、シクルたちの帰還に気づいたマカロフが酒を片手に手を上げる。

「よっ！おかえり！」

「マスター……！」

マカロフの呼びかけにシクルたちはすぐにその傍へと駆け寄る。

「ただいま……戻りました」

「じつちゃん!!酒なんか飲んでる場合じゃねえだろ!？」

ナツの怒声が響く。が、マカロフは一瞬真剣な表情になり……

「おお……そうじゃった……お前たち!!勝手にS級クエスト何ぞに行きおつてからに

!!」

ギルド建物のことではなく、ナツたちが勝手にS級クエストへ行ってしまったことへ

の怒りが落ちた。

「え!?!」

「はア!?!」

マカロフの言葉に、驚きの声を上げるルーシイとグレイ。

「罰じゃ!!今からお前達に罰を与える!!覚悟せいっ!!」

マカロフからの「罰」の言葉に、ナツたちはビク!と震え、身構える。

が、結局ルーシイを除いた者は頭に1発チョップをくらい、ルーシイはお尻を叩かれるという所謂、「セクハラ」で終わった。

そんなマカロフの様子にエルザは唾然とし、ほんの僅かに怒りを覚えたのか、テーブルをバンツ!!と叩き、マカロフへ鋭い目を向ける。

「マスター!!今がどんな事態か分かっているのですか!?!」

「ギルドを壊されたんだぞ?!?じつちゃん!」

エルザとナツの怒声を聞くも、マカロフは平然としており…

「ふん…まあまあ落ち着きなさいな…騒ぐほどのことでもなからうに…フロントムだア? 誰もいないギルドを狙って何が嬉しいのやら…」

「…誰もいない?」

マカロフの言葉にシクルが首を傾げ、ミラを見やる。

ミラはシクルの視線を感じ、頷く。

「ええ…幸いにも、やられたのは夜中で…誰もいなかったから怪我人はいないのよ」

「へえ…(夜中に…?何が目的…?)」

「不意打ちしかできんような奴らに目くじら立てる必要はねえ……放っておけえ！」

マカロフはその言葉と共に、この話は終わりじゃ！と叫び、その後ナツたちからの抗議の声も一切聞かず、酒を飲み続けた。

そして、その夜……

ギルドにはマカロフとシクルのみが残っていた。

「マスター……どういうおつもりで？」

「なんじゃ……さっき言ったじゃろ？別にガキどもは誰も傷ついておらん……建物は、みなで力を合わせればまた作り直せる……騒ぐほどのことじゃあねえ……そうじゃろ？」

「そうですけど……でも、今回の……普段と様子が違う気がするんです……」

シクルのその言葉にマカロフはピクツと眉を動かし、シクルを見つめる。

「………下手な詮索はよせ……これ以上、向こうが何もしてこねえなら何も言うことはねえじゃろ……」

何を言っても言葉を変えないマカロフにはあとため息をつき、腰を上げるシクル。

「分かりました……そうですね。ギルド間での争いは禁じられている……それがマスターのお心なら、私はそれに従いますよ」

シクルはそう言うのと、マカロフに背を向け、部屋の扉へと歩く。

そして、扉を開け出ていく間際…

「…でも……………もし、誰かの血が流れるようなことがあれば……………その時は規則に関わらず…やるつもりです…」

そう呟き、では…と、出ていくシクル。

去っていったその後を見つめ、マカロフは長いため息をつくのだった…。

ギルドを出たシクルはその足でルーシイの家へと向かった。

暫くは一人でいるのは危ないということで全員誰かと一緒に過ごしている。

シクルもまた、ナツやエルザに誘われていた為、ルーシイの家へと向かっているのだ。

コンコンツ

「ルーシイ、来たよー」

バタバタバタツ!!

ガチャー

「シクル!!いらつしやい!!はあ!良かった!!シクルは常識人でほんつと!良かった!!」

シクルの扉をノックする音と声に、走り、扉を開けてきたルーシイ。

それに目を点しながらおおう…と少し引いているシクル。

「さー中に入って入って!」

ルーシイに押されるがままに部屋の中へと入っていくシクル。
ルーシイの部屋の中では…ナツが未だに唸っていた。

「くっそー！じっちゃんもミラもみんな！ビビってんだよ!!」

「だから、ちげえだろ…」

「マスターも我慢しているんだ…ギルドを壊され、一番悔しいのはマスターだろう」
騒ぎ暴れるナツをグレイとエルザが止めている。

その様子を見つめ、ハッピーとルージユははあとため息をついており、ルーシイと今しがた来たシクルも苦笑を浮かべた。

「それにしても…フアントムって酷いことするのね…前にもこんなことあったの？」
話を变えようとルーシイはシクルたちに問いかける。

「んー？いや…確かに今まで小さな小競り合いはあったけど…」

「こーいうのは無かったよねえ」

シクルとルージユの言葉に「そうなんだ…」と頷くルーシイ。

「んがー！やっぱ納得いかねえ!!じっちゃんもビビってないでやり返せばいいだろ!!」

先に手出されたのはこっちゃんんだぞ!？」

「だーから！そういう問題じゃないでしょ!?!それに、マスターもビビってる訳じゃない

わよ……」

再び叫び声をあげるナツを宥めるシクル。

「シクルの言う通りだろ……かりにもじーさんは聖十大魔導の1人なんだぞ」

「……聖十大魔導？グレイ、聖十大魔導って？」

グレイの言ったその単語に聞き覚えのないルーシイは首を傾げ、問いかける。

「聖十大魔導と言うのは魔法評議会議長が定めた、大陸で最も優れた魔導士10人につけられる称号のことだ」

「ちなみにファントムのマスター、ジヨゼもその1人よ」

ルーシイの問いかけに答えたエルザとシクルの言葉に、へえと興味を示すルーシイ。

「ちなみに、シクルはその聖十大魔導筆頭候補の1人なんだよお」

「え!? そうなの!？」

ハッピーの隣でゴロゴロしていたルージユからの突然の告白にルーシイは驚きの目でシクルを見つめる。

「ちよーそれは言わなくていいでしょお!？」

あ、あー……んまあ………確かに何度か声は掛けられてるんだけど………ほら、色々集まりとかあつてさ? め、めんどくさいじゃん?」

なはは…と笑うシクル。

「め、めんどくさいで最強の称号断るのって絶対シクルだけよ……………」

「むう…だつて最強なんて…興味無いもん！」

そう言ったシクルにはあとため息をつき、「やっぱそれなのね…」と呟くルーシイに苦笑を浮かべながらも窓の外を見上げ、月のない空を見上げるシクル。

「……………はあ…（新月……………月の光がない暗闇の夜……………」

……………胸騒ぎがする……………嫌な感じ……………お願いだから……………

「何も起こらないでよ…」

そう、そつと呟くシクル。

だが、その呟きは……………願いは、翌日……………破られることとなる……………。

マグノリア広場にて——

「通してくれ、ギルドの者だ」

人だかりが集まる中をエルザが先導し、かき分ける。

そして……

「つ!!レビイちゃん……!」

「ジエツト……ドロイ……!」

「フアントム………!!」

シクルたちの目の前には、鉄の杭で腕を固定され、傷だらけの状態の木に括りつけられているレビイ、ジエツト、ドロイの姿だった。

「ひ、ひど……」

「こんなやつてえ………」

3人の姿にハッピーとルージユの目には涙が浮かぶ。

そして、静かに3人へと近づくシクル……。

その手にはいつ換装をしたのか、十六夜刀が握られていた。

シクルは無言で刀を振るう……すると、レビイたちを捕まえていた鉄の杭が容易く壊れる。

レビイたちを順に支え、木に寄りかからせるとシクルは魔法陣を展開する。

「我、月の加護の名の下に

愛する者の身を包み その身、回復させん」

ソングマジック
ヒーリング
歌魔法 治癒」

治癒魔法で粗方の傷を治すシクル。

そして……

「……………マスター……………これでも、手を出さないと…?」

音もなく、静かにその場にやってきたマカロフを振り返ることなく告げるシクル。

その表情は……………普段では考えられないほどの怒りが満ち溢れていた……………。

そしてマカロフも……………

「ボロ酒場までなら許せたんじゃないかな……………

ガキの血を見て黙ってる親はいねえんだよ…」

怒りに震え、持っていた杖をボキッ！と折ると…

「戦争じゃ…」

と、宣言する。

妖精の怒りが、幽鬼に襲いかかる…

18話 妖精VS幽鬼 始まり

フィオーレ王国にある、オークの街…

そこに、かのギルド…ファントムロード幽鬼の支配者があつた。

そこでは、現在妖精の尻尾についての話題で持ちきりだった。

「だつはー！サイッコーだぜ!!」

「妖精のケツの奴らはボロボロだつてよお！」

「その上ガジルのやつア、3人もやってきただつてよお」

「ヒュウー!!流石だぜ！」

酒を飲み、大騒ぎの男達。

「そーいやあ…マスターの言つた“奴”つて誰だ？」

「さあ？知らねーな」

「手を出すなとか言つてたよな」

「ふん、どうでもいいさ！惨めな妖精に乾杯だぜ！」

「おおーよ!!」

酒を更に注ぎ、大笑いする幽鬼の魔導士たち……

「あー！いけね、もうこんな時間だ」

と、1人の魔導士が立ち上がり、荷物を手に扉へと歩き出す。

「お？なんだよ、女か？」

それを見た1人の魔導士がからかう。

「まあな。まあまあいい女だぜ？依頼人だけどな……脅したら報酬を2倍にしてくれるつてよお」

ニヒヒと嫌な笑みを見せ言う。

「がっはは！俺なら3倍は行けるぜえ」

「けっ！言つてろタコ」

「そーいやあ……妖精にも1人超いい女いたよなあ……」

「ああ何だっけか？たしか……」

誰かが、そう呟いた時だった――

ドツゴオオオオオオオオオオオンッ
!!!!!!

大きな爆発音を立て、幽鬼のギルドの扉が爆破、吹っ飛び扉を殴った拳は今まさにギルドを出ようとしていた魔導士の顔面にクリーンヒット。

「妖精の尻尾じゃああああああっ!!!!」

殴り込んできたのは怒りに揺れる妖精…

マスター・マカロフのその怒声と共に一斉に妖精の魔導士たちが幽鬼の魔導士たちを攻撃していく。

「誰でもいい!!かかってこいやゴラアあああああ!!」

ドオオオオオン!!!

「ぎゃああああああっ!!!」

「ここ、こいつ!! 妖精の尻尾の火竜だあ!」

ナツに続き他のメンバーも次々と襲撃していく。

「ここ、こいつ!!! 氷の造形魔導士のグレイだあ!」

「こつちはビーストアームのエルフマン!」

「あ、あれが妖精女王、エルザっ…!!」

皆が幽鬼の魔導士たちに容赦のない攻撃をし、圧倒していく。

そして…シクルもまた……

「あんたら……誰に手を出したかわかってんの？」

タダで済むと思うな…（月竜の眼光っ!!）」

ギンツ!!と幽鬼の魔導士たちを睨むとたちまち、魔法陣は消え去り、その恐怖に気絶していく…。

だが、シクルの怒りは収まらない…。

「換装 十六夜刀……伍ノ太刀 鳴雷月!!」

シクルの刀が光り、それを横に薙ぎ払うとそこから月の雷が発生…相手を攻撃する。

「「ぎやあああああつ!!!」」

「こ、こいつ……妖精の姫……シクル・セレーネ!?」

「んのやろおおおおお!!!」

シクルの背後から襲いかかる影……が

ダンツーーー!

「月竜の鉤爪!!」

シクルはバク転をし、その際足に魔力を集め、影の人物を蹴り上げる。

「ぐがっ!」

「ちい!!マスターだ!!マスターを狙ええ!!」

やけを起こした数人が突っ立っているマカロフに魔法を展開するも……

「……カアーーーーー!!!」

一瞬で巨人化するマカロフ。その拳で幽鬼のヤツらを殴り潰す。

「ひ、ひい!?!ば……化け物……」

「貴様らはそのバケモンのガキに手エだしたんだ……人間の法律で自分を守れるなど……

夢々思うなよ……ああ?」

「ひ……ひびっ……」

マカロフの威圧に幽鬼の魔導士たちは腰を抜かす。

「つ……つええ……」

「兵隊共もハンパじゃねえぞ!!」

「こいつらメチャクチャだろ……!?!」

圧倒していく妖精に幽鬼の奴らも徐々に引き下がっていく。

「ジヨゼえー!!出てこんかあつ!!」

「どこだ!?!ガジルとエレメント4はどこにいるうつ!!」

マカロフとエルザの叫び声が響く。

それを、上の方で鑑賞している影が1つ……

「けっ……あれがマスターマカロフに妖精女王のエルザに……月の歌姫シクルか………凄まじいな………どの兵隊よりも頭1つ2つ抜けてんなあ……」

ギヒツと不思議な笑い方をする黒髪の男

「ギルダーツにラクサス……ミストガンは参戦せず……か……舐めやがって」

男は腰を上げ、立ち上がり更に笑みを深める。

「ギヒツ……しかし、これほどまでマスタージョゼの計画通りに事が進むとはなあ……せいぜい暴れ回れや……クズどもが……」

シクルたちが幽鬼を襲撃している頃……

1人、置いていかれたルーシイはレビイたちの見舞い品を買い、3人の眠る病室に戻るところだった。

「もお……皆、あたしを置いて行っちゃうんだから……」

あたしってそんな弱く見えるかなあ？と1人ぶつぶつ呟きながら裏道を歩いていると……

ぽつり、とルーシイの頬に水が落ちる。

そして、ザアと数分で雨が降り始めた。

「ん？何？……通り雨？」

「……………しんしんと」

雨空を見上げるルーシイの耳に誰かの声が届く。

「え……？」

ルーシイの目の前に傘をさした女が歩いてくる。そして、ルーシイと目が合うとその女は足を止め、瞬き一つせず、見つめる。

「な……なに？」

「……………それでは、ご機嫌よう……しんしんと」

「はあ!?!(な……なんなのこの人)」

訳の分からないことを言い、隣を通り過ぎていく女。ルーシイは呆然とその様子を見つめる。

すると……

「ノンノンノン。ノンノンノン。ノンノンノンノンノンノンノンノンノン。3・3・7のNOでボンジュール？」

次は女の後ろ、地面から帽子とメガネを掛けた男が現れる。

「ま、また変なのが出た!!」

「ジュビア様……ダメですなあ仕事放棄は……」

「……………ムツシュ・ソル」

女は「ジュビア」…男は「ソル」という名のようだ。

「私の眼鏡がささやいておりますぞお…」

そのマドモアゼルこそが愛しのシブルだとねええ…」

「え……………（シブル…標的……………？）」

「あら……………この娘だったの？」

「え……………」

ルーシイには2人が何を言ってるのかわからなかった。

「申し遅れました…私の名はソル。ムツシユ・ソルとお呼びください。」

偉大なる幽鬼の支配者より…お呼びにあがりました」

「ジュビアはエレメント4の1人にして…雨女」

「ファントム!? あ……………あんたたちがレビイちゃんたちを!!」

目の前の2人がファントムの魔導士だと知ると身構えるルーシイ。

「ノンノンノン。3つのNOで誤解を解きたい…ギルドを壊したのも…レビイ様を襲つたのも…全てはガジル様」

ソルがそう言い、目を細めた瞬間…ルーシイは突然現れた水に包まれ、その拍子に鍵を落としてしまった。

「…しまっ…!!」

「まあ、我々のギルドの総意である事にはかわりありませんがね」

水はルーシイを包み、遂には水の球の中に閉じ込められてしまうルーシイ。

「んっ!?ふ…ふ、はっ! な……な、に……これっ!? (息がっ…い)」

ルーシイはどうかして水面から顔を出すが水は意志を持ったかのように動き、ルーシイを逃さない。

「ジュビアの『水流拘束』ウオーターロックは決して破れない」

ジュビアが手を動かすと水球は大きさを増し、ルーシイを拘束……

そして、ついにルーシイは息が出来ず、気絶し…フアントムに囚われてしまった…

「大丈夫……ジュビアはあなたを殺さない…」

あなたを連れて帰る事がジュビアの任務だから……ルーシイ・ハートフィリア様」

場面を戻し、シクルたちの方では……

「エルザア!!シクルウ!!」

「ここはお前達に任せる…わしは、ジョゼの息の根を止めてくる…!!」
マカロフが戦闘を続けるエルザとシクルに叫ぶ。

「マスター…！お気をつけて…」

「……………（また…嫌な予感が…）」

ジョゼがいるであろう最上階へ消えていくマカロフのその背を見て、シクルは顔を歪める。

「……………気をつけて…マスター…」

そして、マカロフがいなくなったのを見て、動く1つの影……………

「ギヒッ！厄介なのがようやくいなくなった…こつから暴れるぜえ……………」

そう呟くと、乱闘する場へ飛び降りる男……………

「ギツヒイ!!来いや!クズどもお!!」

「あ?」

「あいつは…!黒鉄のガジル!!」

その男、幽鬼の支配者に所属する鉄の滅竜魔導士… “ガジル” その者だった。

「鉄竜棍!!」

ガジルの狙いは完全に背を向けていたシクルだった。

が…

シクルはフツ!と後ろ手で飛び上がり、ガジルの攻撃を避け振り返ると息をすう!と吸う。

「月竜の………咆哮!!」

シクルの放つ咆哮はガジルに向かうがガジルもそれを避け、嫌な笑みをシクルに向ける。

「ギヒヒツ!いいなあ…月の歌姫…殺りあおうや…」

「黒鉄のガジル………お前が、ギルドを………レビイたちを………」

「ブワツ!と吹き荒れる殺気を浴び、涼しい顔をするガジル。

「ギヒヒ!だからどおした?俺とやってくれんのかあ?最強さんよお…」

シクルを挑発するガジル。

シクルはギツと睨む。が…不意に、ふっと笑みを浮かべると…………

「確かにお前は許せない……………でも、残念…あなたの相手は私じゃないわ」

「ガジルウウウウウウウウウウ!!!」

!!!」

「へ!!火竜がやるってかあ!?!」

シクルの背後から飛び上がったナツの拳を拳で受け止めるガジル。

そこから幾度か2人の攻防が続くと……………

ゴゴゴゴゴオ!!

ギルドが揺れた。

「な、なんだ!?!地震か!?!」

「やべえな、こりやあ…」

「これはマスターの…マスターマカロフの怒りだよ!」

「マスターがいる限りお前達に勝ち目はない!!!」

妖精の魔導士たちは誇らしげに、らんらんと瞳が輝きその振動と魔力に士気が上がり、逆に幽鬼の魔導士たちは恐怖に震え始める。

妖精の総攻撃が再び開始される…誰もがそう思った時――

「っ……………!! (何か…降ってくる!?)」

シクルの五感が異変を察知……………上を見上げたその瞬間……………

ズツドオオオオン!!!

何かが…落ちてきた…。

煙が巻き上がり、晴れると……………

魔力が全く無くなってしまうたマカロフが倒れていた…。

「っ!!! マスターっ!!!」

シクルが駆け寄り、その身体を抱え上げる。

「わ、わしの…魔力が……………」

「マスター!!」

「じっちゃん!!」

「おいおい…何が起きたんだ!? ジーさんから魔力を全然感じねえぞ?」

「マスター!! しっかりして!!」

必死にシクルが呼びかけるがその声は聞こえていないのか、苦しげに呻く事しか出来ないマカロフ。

マカロフがやられたことにより、妖精の士気は下がり始め……

「ちえ…お楽しみはもう終わりか………」

優勢に攻めていた妖精が劣勢になり始める…。

「(このままではまずい…!) 撤退だー!!」

全員、ギルドへ戻れー!!!」

エルザの号令にグレイやエルフマンたちが反論する。

「何?! 俺はまだやれるぞー!」

「(…)で逃げてちや漢じゃねえ!!」

「ギヒツ！もう終わりか…つまんねえなあ…」

撤退する姿を再び上から見下ろすガジル。

その背後に現れる巨体の男がー

「…アリアか……………」

「全てはマスタージョゼの計画通り…素晴らしい!!」

そう叫び泣き始める男… “アリア”。

「いちいち泣くんじゃねえよ…うぜえな…で?……………ルーシイとやらは捕まえたのか
?」

「っ!?!」

ガジルのその一言を聞き取ったシクルとナツ。

「計画通り…今は本部に幽閉している…」

「なん…だと!?!」

「…ルーシィ…が？」

シクルとナツの声がか聞こえたのか、ガジルは2人を見下ろし、ニヤツと笑う。

「ガツ…ガジル!!! どういうことだア!？」

「待ちなさいっ!!! ルーシィを…ルーシィをどこにつ!？」

2人の止める声に聞くことなく、ガジルはアリアと共に姿が消える。

「くそ!! ルーシィが捕まっちゃまった…?」

「…ナツ、ルーシィの方任せていい？」

「あ? あ、ああ……………」

ナツの頷く姿を見て、シクルはニツと微笑み、「頼むよ…」と、呟くと……………

撤退する妖精の魔導士たちを攻めようと魔法陣を展開する幽鬼の前に立ち塞がる。

「つ!? シクル!! 何を…!」

「ルーシィはナツに任せる!! 私は……………」

「みんなの逃げる時間を稼ぐ!!」

シクルの言葉にエルザはその足を止める。

「よせ!!無茶だ、シクル!!!」

「シクル……!」

隣にいたナツも不安げにシクルを見つめる。

「大丈夫!!皆が行ったら私も行くから!!」

ナツも……早く行って!」

「……おう!!」

シクルの声でナツは1人の魔導士を引っ捕まえ、ルーシイを助けるため出ていく。

そして、エルザも苦々しい表情を浮かべ、シクルに背を向ける。

「……すまん、シクル………」

「………さて………と………」

エルザも走り去っていく姿を確認し、シクルは幽鬼の魔導士を前にニヤツと笑う。

そして……

「調子乗るなよ……三下共……」

「滅竜奥義……月華炎乱舞!!」

シクルの構えた両手から月の魔力を纏った蒼銀色の炎が乱れ、舞い……幽鬼の者を包み込んでいく。

「「ぎやああああああ!!」」

「何だこりやあああ?!き、消えねえぞおおお!」

「ぐあああああつ!!!」

悲鳴を上げる幽鬼の魔導士たち。

その炎から逃れた者はシクルに走り、突っ込む。

「てめえええええ!!!」

「調子乗るなよアマあああああ!!!」

「私にあんたたちの魔法は効かない……」

飛んでくる魔法を睨み、殺気で消し飛ばすシクル。

そして……

「さて………ほんとは暴れ足りないけど……」

みんなも行ったし………そろそろあとを追わないとエルに怒られちゃうから………」

ここまでね？

シクルはそう言うと、両手を合わせ光を集める。

「………次は必ず……私があんたたちの悪を……滅してやる………」

光竜の閃光

!!!

カッ—————!!!

シクルの身体から放たれる眩い光に幽鬼の魔導士は目を潰され、その間にシクルの姿は消えた………

そして、シクルが幽鬼のギルドを去り、妖精の尻尾ギルドへ帰還中…

ナツもまた、ルーシイの救出に成功した…。

始まりの戦争は一時、妖精の撤退により休戦……………

が……………これは始まり……………

まだ……………序盤に過ぎなかった……………。

19話 妖精VS幽鬼 倒れる歌姫

幽鬼のギルドから戻り、数時間……

妖精の尻尾では怪我をした者の治療や次の戦いに向け作戦や魔法具の補充をする者

…

全員が次に向け動き回っていた……

そんな中、1人ギルドの中で椅子に座り、暗い表情をしているルーシイがいた。

「…どーした？まだ不安か？」

俯き暗い表情をするルーシイに声をかけるグレイ。

グレイの言葉に首を横に振るルーシイ。

「ううん…そうじゃないんだ…なんか、ごめん…」

そう謝り、1度は顔を上げたルーシイだが再び俯いてしまう。

「しっかしまさか……ルーシイがお嬢様だったとはなあ……」

「オイラもびつくりしたよ……どうして隠してたの？」

ナツとハッピーの言葉にルーシイは苦しげな表情で笑う。

「隠してたわけじゃないんだ……けど、家出中だし……言う気になれなくて……ごめん……迷惑かけて……ほんと、ごめんね……」

ルーシイはナツに助けられ、ギルドに戻ってからずっと謝り続けていた……。

「ルーシイ……」

「あたしが……家に戻れば済む話なんだよね……」

そうすれば皆にも迷惑かけな……」

ルーシイが自責の念にかられ、自身を責めていると……ギユツとルーシイを包む腕があった。

「っ……シ……クル……」

「……それは違うよ？ルーシイ……」

誰も、あなたが悪いなんて思っていない……

誰も、ルーシイのせいで迷惑かけられてるなんて……思っていないよ？ルーシイ……

そんなに自分を責めないで？」

ね？とルーシイを見つめるシクルの瞳を見てルーシイは涙を溜める。

「シクルウ……」

「ルーシイ……この汚ねえ酒場で笑ってさ……騒ぎながら冒険してる方が感じだしな！」
「ナツ……」

シクルに続き、言葉をかけてくるナツを見つめるルーシイ。

ナツはルーシイの頭を撫で、ニカツと笑い言う。

「ここにいてえんだろ？ルーシイ……」

戻りたくない場所に戻って何があんだよ？

お前は…… // 妖精の尻尾 // のルーシイだろ？」

「……………ルーシイ……ルーシイの心はなんて言ってる……？帰りたい……？」

シクルの問いかけにルーシイはふるふると弱く首を横に振る。

「ううん………帰りたいくない……ここに………いたいよお………」

ルーシイの答えを聞きシクルはふつと柔らかに微笑みを浮かべる。

「ルーシイ……なら、迷惑なんて思わないで？」

私は………ううん、私たちは………全力でルーシイを守る………家族を、守るよ……

いたくないところにいたって………笑えないよ……」

そう言うのと再びルーシイをギュツと抱き締める。

守るんだ……………絶対……………ルーシイも……………

みんなも……………絶対……………

「……………守るよ」

シクルがそっと胸の内て誓い、ルーシイが泣き止み、ギルド内の重い空気が少し和らいだ時……………

ズン……………ズウン……………ズウウン…!!

「……………何っ……………!?!」

「何の音だ……………!?!」

ギルド内がざわつく。

その時……………

「外だー!!!」

ギルドの仲間、*“アルザック”*の聲が響き全員がギルドの外へ出る。

すると……………

外には海を大きなロボットのようなお城のような建造物が歩いて、ギルドに近づいてきた。

「な…んだありやああああああ?」

「でつかああああああ?」

「あいやああああああ?」

ナツやハッピー、ルージユが叫ぶ。

「フアントムかっ!」

「こんな方法で攻めてくるなんて…ど、どうする!?」

「つつ… (こんな…想定してなかった…こんな方法で来るなんてっ!)」

ギルドに迫ってくるソレを見上げ、痛いくらい拳を握るシクル。

すると…突然、幽鬼のギルドはその動きを止め、建物の中心にある砲の先端に大量の魔力を集め始める…

「なっ…まさか…:…あれは!？」

「あれは…魔法集束砲か!？」

「な!?!ギルドごと吹っ飛ばす気かあ!？」

「全員伏せろおおお!!！」

その場に、エルザの声が響く…

「!!エル!？」

エルザは全員の前に立ち塞がる。

「ギルドはやらせん!!！」

「まさか…エルザ!?!あれを受け止める気か!？」

「よせエルザ!!いくらお前でも…!！」

全員が止める中…:エルザは魔法鎧を換装させようとする。

その時…:…

ガシッー

「っ!？」

エルザの肩を掴む者が……

「……………ダメだよ……………あなたがここで倒れちゃ……………あなたは、倒れちゃいけない……………」

あれは……………私が止める!!」

そう言いエルザを後ろへ押し倒す……………」

金の髪を靡かせる少女……………」

「っ……………!?!シクルっ!!」

「まさか……………シクル!!!」

やめろおおおおおおお
!!!!!!!!」

ナツの声が響く…

「皆は私が………守ってみせるっ!!」

シクルは両手を構え、魔力を高める。

「月竜の絶対防御!!」

エターナルシールド

シクルの前に大きな丸い、満月の様な壁が創られる。
その中心には銀色に輝く竜が描かれている…

「あれって…シクルの防御魔法…!」

「まさかシクル…あれを受け止めるの!?!」

「そんなことしたら!シクルが死んじゃうよお!!」

ルージユの悲痛な声が響く。

エルザもシクルを止めようと…動くが…

【我、月の守護の名の下に

愛する者の身を包み　その身を守らん】

ソングマジック
歌魔法 防御

「ハ、これは!?!」

シクルは後ろにいる仲間たちを守る球体の防御壁　“歌魔法”の“防御”を展開。

これでシクルと一定の距離、仲間たちは離されることになる。

もし、“絶対防御”の壁を魔法集束砲が貫いても後ろの仲間を守るようにと創り出

す…。

「シクルっ…!」

近づけないと分かってても、駆け寄ろうと動くナツ。

「ナツ!!今はシクルを信じるしかねええ!」

ナツを止めるグレイ…

「うあ…」

なんで…届かねえんだ…俺は、守りたいのに…

ナツの手が空を掴む……………

そして……………

「くっ…伏せろお!!!」

エルザの声が響く。その瞬間……………

魔法集束砲が発射される。

ドツ…ゴオオオオオオオン
!!!!

防御壁と当たる。

「ぐううううっ!!!
!!!」

初めは耐えるシクル…だが……………

ミシ…ミシミシッ……………!

亀裂が1つ…走ると、そこから徐々に亀裂が広がる。

「つつ……!!ま、けて………たまるかあ!!」

瞬間的に魔力を上げ、防御壁が修復される。

が、それも一瞬………

再び亀裂が走り、それは全体へと及ぶ………

そして………

ミシミシツ!!

ドオオオオオオオオオオオオオ
!!!!!!

「うああああああつ!!」

「シクルー………!!!」

大きな爆発と共に、シクルの防御壁は崩壊。

シクルの身体が爆発により吹っ飛ぶ。

「あ……………ま、もれ…た？」

ルーシイが視界に入ったその時、につこりと笑ったシクルを見てルーシイは止まっていた涙が溢れ出す。

こんな…こんなになってまで…守ってくれるなんて……………なんで……………

『…………マスターマカロフ…そして、シクルも戦闘不能』

幽鬼のギルドから、スピーカー音でジヨゼの声が響く。

「っ…やろお……………!!」

『もう貴様らに…凱歌は上がらん…』

ルーシイ・ハートフィリアを渡せ…今すぐだ』

「誰が渡すかつ!!」

「仲間を差し出すギルドがどこにある!？」

「っ……………!」

ジョゼの言葉に反論する妖精の尻尾たちの言葉にルーシイは涙が溢れ、止まらない。

さつきは帰りたくない…そう言ったが……

やはり自分が家に戻ることと解決するのなら…いつそ……

自分は家に帰った方がいいんじゃないか……

そう、思っていると……

ギユツ…

「……シクル……」

シクルがルーシイの手を握る。

「……だい……じょーぶ……ルー、シイは……

わた……さない……か、ら……ね？」

苦しげに呼吸をしながらも笑い、ルーシイにそう言うシクル。

「でも…でもっ！あたし……………」

「仲間を売るくらいなら…死んだ方がマシだア!!」

「っ!!」

ルーシイの言葉を遮るようにエルザの声が響いた。

「そーだそーだ!!」

「ルーシイは仲間だ!!渡すもんか!!」

「みんな……………」

エルザの言葉に続き、叫ぶ仲間達を見てルーシイは何も言えなくなる。

『チイ…ならば、特大の魔法集束砲をくらわせてやる!!発動までの15分…恐怖の中であがけ!』

ジョゼの怒り狂う声が響くと、幽鬼のギルドから浮遊する無数の兵が飛んでくる。

『地獄を見る…妖精の尻尾…』

貴様らに残された選択肢は2つだ……

我が兵に殺されるか、魔法集束砲で死ぬかだ!』

その後、ジョゼの声が響くことはなく……

「ど、どーすんだよ!?魔法集束砲をどうにかしないと……!」

「シクルですらあんな状態になっちまうんだぞ!」

「おまけに幽鬼の兵なんざ……ヤバイだろ!」

どうすればいいか……仲間内で混乱が広がる……

そんな中、辛うじて意識を保っていたシクルがグツとナツの手を握る。

「っ……シクル?」

「は……はあ………ナ、ツ……行って……」

私は……大丈夫……だから………ナツ、は……あれを………止め、て………」

「シクル………ああ、分かった………俺が止めてくる!!」

ナツのニカツとした笑みを見てシクルもつられ、ニカツと笑う。

「ナツ………頼、んだ……よ………」

そう言うとシクルはふっとその瞳を瞼の裏に隠し、気を失ってしまう。

「っ！……ルーシイ、シクルを頼む……………」

ナツは気を失ったシクルを心配するが息をしていることを確認するとルーシイにシクルを預けた。

「あ…ナツ……………」

「シクルとの約束だ…俺はあれを止める!!」

「ナツ…私達も後から追う…先に行ってくれ」

エルザの言葉に「おう！」と頷くナツ。

「ハッピー行くぞ!!」

「あいさー!!」

そして、ハッピーに飛んでもらい、魔法集束砲の砲台へと飛んだ。

「頼むぞ……………ナツ」

その後ろ姿をエルザは見つめ眩くと…

「シクルや負傷者を中へ運ぶぞ！」

その他の戦闘のできるものは応戦だ!!

行くぞお！」

『おお!!』

エルザの号令に動き出す妖精たち：

今、妖精と幽鬼の……………本当の全面戦争が：

始まる……………。

20話 妖精VS幽鬼 妖精 反撃開始

ギルドの中に運び込まれたシクルはすぐに治療が始まった。

「酷い……全身傷だらけ……（この胸の青痣……肋骨にヒビが入ってるのかもしれない……）」

「シクルウ……」

シクルの傷の具合を見て顔を歪ませるミラ。

ミラの言葉と目覚めないシクルを見下ろし、涙が溢れるルージュ。

「シクル……ごめんね……」

シクルを見下ろし、涙を流し、謝るルーシイ。

「ルーシイのせいじゃない……シクルも言っただろう？誰も、お前を責めたりはしない」

エルザの言葉にルーシイは頷き、涙を堪える。

「ふう……ミラ、シクルやルーシイを頼む……」

エルザはルーシイの涙が止まると立ち上がり、ミラを見つめる。

「エルザ……分かった……………」

ミラが頷くとエルザはギルドを飛び出し、戦場へと出て行った。

出て行ったエルザを見つめ、ルーシイはぐつと拳を握る。

「……ミラさん……私も戦います……！」

ルーシイのその言葉にミラは驚愕の目を向ける。

「何を言ってるの、ルーシイ!? ルーシイが出て行ってはダメよ! そんなことより、ルーシイはどこかに隠れないと……………」

「でもっ……みんなが戦ってるのに!! 私だけ隠れるなんて出来ません!!」

ミラの言葉に大きな声で反論するルーシイ。

「それに……レヴィちゃんやマスター……シクルも傷ついて……………みんな……全部私のせいなのに……私が……」

「ルーシイ! それは違うわっ……」

ふるふると震え、言うルーシイの肩を掴み、ルーシイの言葉を止めるミラ。

「ミラさ……」

「シクルも…エルザも言っただでしよう？」

これはあなたのせいじゃない…誰もそんなこと、思っただけ…やられた仲間のため…ギルドのため…そして、あなたを守るためにみんな誇りを持つて戦っているのよ…そんな悲しいこと…言わないで？ね…ルーシー…」

ミラはルーシーにそう言うのと片手をルーシーの顔の前にかざす。

「ごめんなさい…ルーシー…あなたを守るための…」

だから…言うことを聞いてね…ルーシー…」

「あ…」

ミラの手から放たれる光に包まれたルーシーは強い眠気が襲い、耐えきれず倒れ、眠ってしまう。

倒れたルーシーの身体をミラが支える。

「リーダス、ルーシーを連れて隠れ家へ行つて！」

「ウイ！」

ミラの言葉に、絵で描いた馬車を作り出し、ルーシーをそれに乗せるとギルドの隠れ家へと運ぶ。

そして、去っていく馬車を見送るとミラは戦闘の続く戦場へと出て行く。

「ミラ…どこに行くのお……………」

「ルージュはシクルの傍にいてあげてね…私はルーシィの代わりに行くわ」

ミラにそう言われ、ルージュは領きシクルを見下ろし、ルージュが領くとミラはギルドの外へと出て行つた。

その頃、外では魔法集束砲の発射阻止には見事成功したが次にジヨゼは煉獄^{アビスブレイク}砕破を展開。

巨大な魔法陣が上空に描かれていた。

「あれは…!!」

丁度、外に出て来たミラはその魔法陣を見た時、背筋に嫌な汗が伝う。

「ミラ!? あんた何で出てきて…!」

ミラが外にいるのを見つけ、驚くカナ。

「あれはまさか…!! あんな大きな撃たれたらギルドだけじゃないわ…カルディア大聖堂辺りまで消し飛んでしまうっ…!!」

「何ですって!?!」

「おいおい…冗談だろ!?!」

全員が驚愕と、絶望の表情でその大きな魔法陣を見つめる。

「ミラ…あの魔法は、あとどれくらいで完成するの…?」

驚異的な力に絶望しないよう、瞳に光を宿し、ミラに聞いてくるカナ。

「恐らく約10分つてとところかしら…」

「なら、入ったエルザたちに任せるしか……………」

幽鬼のギルドに侵入したのはナツとハッピー、エルザの他にグレイとエルフマンもいた。

「エルフマン……………」

ミラは幽鬼のギルドを不安そうに見つめる。

「(あの子も前に進もうとしている…なら…)」

私も前に……………」

ミラの瞳は強く輝いており、なけなしの魔力を集めると変身魔法を発動。

「ミラ…何を!？」

その光にカナが驚きの目で見つめると、光から出てきたミラの姿は……………正しく、
ルーシイの姿になっていた。

「すう…………もうやめて!!あなた達の狙いは私でしょ!!これ以上みんなに手を出さないで!!」

ミラがルーシイになりきり、ジョゼや幽鬼の奴らを騙そうとした。
が…………

『…………去れ、偽者が…』

ミラの変装はいとも容易くジョゼにバレてしまい、ミラの作戦は失敗してしまう。
「そんな…」

力無い自身に悔しく、惨めな気持ちがミラの胸の内に広がる…。

ジョゼにミラの変装がバレていた頃…ギルド内では…………

—————

シクルはどこか分からない空間で目が覚める。

……………ここは……………?」

辺りを見回し、首を傾げるシクル。

確か…ギルドに幽鬼の奴らが攻めてきて…

魔法集束砲を撃とうとしたから……

私が受け止めて…？それから……

“………ソレは私のモノだ……”

…っ!?

今まで起きたことを頭の中で整理していたシクルの耳に声が響く…

それは、2度と聞きたくない男の声……

シクルにとって悪魔のような男……

黒い光がシクルの目の前に指すと何者かのシルエットが見えるようになる。

傍目だとよく分からない霞んだシルエット……だが、シクルには一目で分かった……
あいつだ………と……

“お前は今日から私の道具だ………その力………

私に寄越せ………その力を私に……!”

怪しげな魔法具を持つ男シルエットがシクルの目の前に現れる。

“いや………いや………来ないで………来ないで………

来るなあああああつ!!!”

叫び声も虚しく、シクルの身体色々なコードや機械が取り付けられる。

“あああああ” ああああ” ああ” あつ!!!”

なんで……なんで……私は……もう……

助けて……私……こんなところ……いたくないっ!!

誰か……誰か……助けてっ……!

悲鳴を上げるシクル……その目には涙が溢れ、頬を濡らす……。

……次第にシクルの悲鳴は小さくなっていき、瞳からは光が霞み始めていた……その時

光が差す……。

……あ……

シクル……!!!!

それは……大切な相棒の声……

……ルー、ジュ……泣いてる…？

ああ……泣いてる……待ってて……

今……いくよ……相棒……

そして、シクルは光射す場所へ、手を伸ばし……夢から覚める。

「シクル……シクルっ!!」

「……ルー、ジュ……」

目を覚ましたシクルの視界には顔を涙で濡らし、必死に自身の名を呼び叫ぶルージュの姿が映った。

ルージュは目を覚ましたシクルに嬉しさのあまり飛びつく。

「わああ!!シクルウ!!良かったア!良かったよお!」

「ルージュ……なんで泣いてんの?」

シクルは痛む身体に気付かぬフリをし、体を起こしルージュの頭を撫で、問いかける。

「なんで……て……シクルの呻き声……聞こえたから……」

「……私の？」

「うん……助けて……言……言……たよお……？」

ルージュのその言葉を聞き、ああ……てシクルは納得した。

「ごめんね、心配かけて……ちよつと、夢見の悪いの見ちやつて……もう、大丈夫だよ……」
シクルはルージュにそう言い、一層ルージュの頭を撫でる。

そして、ルージュを傍に下ろすと、傍らに置いてあつた白いジャケットに腕を通し、立ち上がる。

「ちよ!?! シ、シクル!?! 何やつてるのお!?!」

「何……何……私……私……皆……皆……のところ……ところ……に行……行……こうかなと……」

あつげらんかんと言うシクルはそのまま足を進め、ギルドの外へ出ようとする。

その足取りはどこか覚束無い様子で、慌ててルージュが引き止める。

「ダ、ダメだよシクルウ!! 身体中傷だらけで……肋骨にもヒビが入ってる……て……!」

「ああ……だからちよつと胸が痛かつたんだ……どおりで……そりや痛いわけね」

シクルは自身の身体のことなのに何でもないかのように呟くとルージュを見つめ、小

さく微笑みを見せる。

「ルージユ……心配してくれてるのは分かるよ……でも……私行かないと……みんなが戦つてゐるのに……私だけ、休んでる訳にはいかない……」

「で、でも……」

「……それに……私にはやらなきゃいけない事があるんだ……」

シクルはそう言うとう目を伏せ、脳裏に黒髪のを思い浮かべる。

……約束……したんだ……守るって……

約束の日まで……守るって……みんなと、約束……したんだ……

目を伏せるシクルを見つめ、何かを感じとるルージユ。

「……分かった……でも、危なくなったら止めるからね……?」

「うん……ごめんね……ありがとう」

ルージユからの許可が下りるとシクルはギルドの外へと出る。

そして、その瞬間――

「きゃああつ!!!」

「ミラっ!!!」

ミラの悲鳴とカナの叫びが、シクルの耳に響いた…

「っ！ミラっ!?!」

シクルの視界に入ったのは幽鬼のギルドに生えた大きな拳に握られ、連れ去られるミラの姿。

シクルは痛みなど忘れ、その場を駆け出す。

「ミラぁー!!!」

「っ……シクル……!!!」

シクルの声を聞き、その手が伸ばされていることに気づき、ミラも手を伸ばす。が……シクルの手はほんの僅かに、ミラには届かず……

ミラは、連れ去られてしまった。

「っ……!!!ルージュ!!!」

シクルはギツ！と幽鬼のギルドを睨みつけ、ルージュを呼び、飛んで幽鬼のギルドへ

行こうとした。

そこを、カナが気づき引き止める。

「待って、シクル!! あんた…そんな身体で行く気!？」

「カナ…うん、分かっているでしょ? 私に何言っても引かないってこと…それに、少し休んだから体力も魔力も回復してるよ! 大丈夫!!」

ニツ!と笑い、言うシクルを見つめ、カナは深いため息をつく。

「はあ…分かったよ…でも、ほんとに…無茶だけはしないでね…絶対、帰ってくるんだよ?」

「……………うん、約束ね!」

カナの最後の言葉に力強く頷くシクル。

そして、飛び立とうとした時……………

「あーと…その前にやらないといけない事あるじゃん?」

ルージュちよつと待ってねーと言い、シクルは魔力を高める。

その様子に妖精の仲間達は首を傾げ、疑問に思う。

そして……………

「光竜の息吹!!!」

コオオオオオオオオオオオツ!!!!

シクルの口から出た透明度のある金色の光は幽鬼の兵を襲い、包み込み…そして、光が消えた時、幽鬼の兵は消えていた…。

『……………え?』

「ふうー…これで暫くはこつちも大丈夫だよね?」

シクルは一瞬、後ろに立つ仲間を振り返ると、今度こそ、幽鬼のギルドへと向かい、飛び立った。

ちなみに “光竜の息吹” とは……………

闇から出来た物質を分解し、浄化する魔法。

ただし、人間には効かない。又、幽霊やこの世の者でない力を浄化（成仏）させることも出来る。

これを浴びた幽鬼の兵は……………一体残らず消えていた。

それでも、一瞬しか消せなかったようで、再び幽鬼の兵が集まる。

が、それらを目の前に妖精達も怖気付いてはいなかった。

むしろ……最強の女が復活したことにより、仲間内での士気は格段に上がっていた……。

「シクルが頑張ってるんだ!! ナツやエルザも……エルフマンやグレイもあつちで頑張ってる……私達も私たちの家を守るよっ!!!」

カナの喝と共に、幽鬼の兵を迎え撃つ妖精たち……

「っ……シクル………（ミラを……頼むよ……）」

幽鬼の兵との戦闘が再開された頃……

シクルは……

「……………今、行くから……みんな………もう少しだけ……耐えてね……………」

戦いの中にいるナツたちを思い、拳を強く握り、戦場へと赴いていた……。

いざ……戦いの渦へと……月の歌姫 参らん……

そして、その力の片鱗が……

解放される時は近し……

封印されし力の片鱗に触れた時……

闇は崩れる……。

「……月の名の下に……私が、悪を滅する……」

21話 妖精VS幽鬼 歌姫降臨

シクルが幽鬼のギルドへと向かっている頃…

エレメント4の1人と対峙していたグレイは丁度、相手を倒す事に成功していた。

戦いが終わり、足を伸ばし座り込むグレイの横では戦いに負けたエレメント4の
“ジユビア”という女が倒れていた。

雨の降る中戦い、水に濡れた前髪を少し鬱陶しそうにかきあげ、空を見上げると…
次第に雨は止み、雲が消え、空が晴れた。

「おーやっとな晴れたか!!」

太陽の光を見つめ、眩しそうに目を細めながらニツ！と笑みを浮かべるグレイ。
その隣でジユビアは太陽の眩しさに涙を溜めていた…。

「これが…青空………初めて、見た…」

「初めてだア…? ……ヘッ、いいモンだろ? 青空つてのは」

感動で涙を流すジュビアにグレイは先程まで戦っていた相手の筈なのに優しく微笑みを見せる。

「で…まだやんのかい?」

グレイのその笑みを見た瞬間……

「ジュビーン!!!」

ジュビアは胸のトキメキと共にパタリと意識を手放した。

「て、おい!?! どうした!?!」

グレイが慌てて声を掛けるがジュビアが目覚めることは無かった。

「んー……まあ、いいか……てか、ンでこんな幸せそうなんだ……こいつ……」

気絶するジュビアのその満足気な表情にグレイは苦笑を浮かべ、乾いた笑い声を弱く出していると……

「グレイイ!!」

「んア? おお! エルフマンか! て、ミラちゃん!? 何でここにいんだ!」

自身と共に、このギルドへ侵入したエルフマンの他に戦闘要員ではないはずのミラがおり、グレイは目を見開き驚く。

「ちよつとね……それより、グレイもエレメント4の1人を倒したのね!」

ミラはグレイの横に倒れているジユビアを見つめ、言う。

そして、グツと拳を握ると強い輝きを持つ瞳でグレイとエルフマンを見つめ、告げる。

「あと1人! エレメント4 残りの1人: アリアを倒せばこの『煉獄砕破』は解除されるわ!」

「何?! 本当なのか、ミラちゃん!」

「ええ……この魔法はエレメント4の力を原動力に動いている……この巨人もそうよ

つまり、残りの1人: アリアを倒せば、これは止まるわ!」

「おおし! 行くぞお!」

ミラの話の聞き、グレイの掛け声と共に3人はアリアを探し、走り出す。

そして、上へと登る通路を見つけ、走っている時…

ズドオオオオン!!!

大きな音を立て、幽鬼のギルドが揺れる。

「うお!?!」

「きやつ!?!」

「んだア!?!」

咄嗟の揺れで3人は僅かに床へと、膝をつく。

「何だ今の揺れ…」

不思議に、グレイが辺りを見渡していると…

「2人共、見て!!」

ミラが外を指差す。

その先には――

描かれていた筈の魔法陣が消滅し、幽鬼のギルドも動きを止めていた。

「これは…まさかつ!」

「多分…誰かがアリアを倒したんだわ!!」

これで危機は去った…そう、グレイ達の表情に安堵が浮かぶ。

その時——

『ピンポンパンポーン……妖精の尻尾の皆さアん……我々は、ルーシィ・ハートファイリアを捕獲しました』

幽鬼のギルド内、そして外で戦う妖精達の耳にジヨゼの声が響いた。

「何っ!？」

「ルーシィを…捕獲しただと!？」

「まさか…そんなっ…隠れ家がバレたの!？」

3人もジヨゼの話す内容に呆然としている。

そして、そんな3人、妖精達の耳に甲高い悲痛な悲鳴が響き始める。

『きゃああああああっ!!!』

「っ!!ルーシィっ!!」

「いや……やめてっ!!!」

『我々に残された目的はあと一つ……貴様らの皆殺しだ……糞ガキ共が………』

その一言を最後にジョゼやルーシイの声は聞こえなくなる。

「くそ……急がねえと……ルーシイが!」

「ええ……急ぎましょ!」

「おう!!」

3人が再び走り出し、進むと広い部屋へと出る。

そこにいたのは………

「っ!!エルザ!」

傷を負い、壁に寄りかかり休む、エルザの姿があった。

「ああ……お前達か………」

「その怪我……戦っていたのか?」

「はっ…もしかして、アリアはあなたが…?」

ミラの言葉に頷くと、エルザは俯き弱々しい笑みを浮かべる。

「お前達にこんな情けない姿を見られるとはな……私もまだまだということだな…」
傷を負ってはいるが命に別状の無さそうなエルザを見つめ、ミラもほっと安心し介抱するため、エルザに駆け寄る。

その時——

ゾクツツツツ
!!!!

4人の身体を冷たく、邪悪な何かが襲う。

それは、とてつもなく強大で…凶悪な力を持った魔力の波動……4人の背に嫌な汗が伝い、震えが止まらない…。

「な…何だよ、この感じは?!」

「ぬ、ぬおお…漢にあるまじき寒気がっ!!」

「な、に……………これ…!？」

「これはっ……………!？」

得体の知れない波動に恐怖していると…ゆつくりと、パチパチと手を叩く音が小さく響き始める。

「いやいや…見事でしたよお…皆さん?？」

嫌な寒気を纏い、近づいてくるそれは…

「クククツ…まさか、ここまで楽しませてくれるとは正直…思っていませんでしたよ…」
幽鬼の支配者のギルドマスター…『ジヨゼ』だった。

実際にジヨゼが目の前へ立つとエルザ達の震えは強くなった。

「っ…(こいつが……………)」

「(ファントムのマスター……………)ぐっ…」

「うっ…(なんて邪悪な魔力なのっ…!?向かい合っているだけで吐き気がしてくるっ

!!」

震えるエルザ達を見つめ、ニタアと嫌な笑みを浮かべると、ジヨゼはゆつくりと手をかざす。

「さて…楽しんでくれたお礼をしませんとなア…………たつぷりとね…」

ゾッ！ 「避けるおおお!!」

嫌な感じを察し、エルザは後ろに構えていたグレイとエルフマンを振り返り、叫ぶ。
が、その声は虚しく2人はジヨゼの魔法に当たってしまう。

「がはっ!!!」

「ぬああっ!?!」

後方へと吹っ飛び、倒れる2人。

「エルフマンっ!!グレイっ!!」

倒れた2人に駆け寄ろうとするミラの目の前に瞬時に現れるジヨゼ…

「ひ!?!」

「…フンッ！」

その波動にミラの身体も飛び、壁へと叩きつけられる。

「あああッ!!」

「ミラッ!!く!!貴様ア!!」

仲間をやられ、痛む体に鞭を打ち立ち上がり、魔法剣を換装するとジョゼに斬り掛かる。

何度か剣を振るも、傷ついた体では本来の速度は出ず、簡単に攻撃は避けられ、幾度目かの攻撃の際、一瞬隙を見せたエルザを見逃さず、その足首を掴み投げ飛ばす。

「ぐっ…くっ……」

空中で体勢を立て直し、床に着地するエルザはジョゼを睨む。

「貴様…アリアとの戦闘で魔力を消費しているはず…なぜ動ける?」

「仲間が…私の心を強くするんだ…愛するもの達のためならばこの体など…いらぬわ」

ジョゼの問いかけに迷いなく、真っ直ぐとした瞳で答えるエルザを見て、ジョゼは笑みを深める。

その額には僅かに青筋が立っていた……………。

「クククツ！なんて…気丈で美しい……なんて、殺しがいのある小娘でしょう…」
ジヨゼはそう呟くとエルザに手を構え…そして…

次の瞬間…エルザの身体をとてつもない激痛が襲う……

その頃…最上階でガジルと戦っていたナツは…劣勢に追い込まれ、倒れ伏していた。

「うっ…ぐ…」

倒れるナツを見て笑い声を上げるガジル。

「ギツヒヒヒツ！見ろよ！テメエらが守ろうとしたもんをよオ」

ガジルの言葉を聞き、力の入らない顔を必死に上げ、見つめるナツ。
その先には……

「つーー！！ギル、ド…が…」

妖精のギルドが幽鬼の兵により、壊され、崩落していく光景…

ナツは目を見開き、その光景に呆然とする。

そして、ある光景が脳裏に蘇る…

——おい!!お前…なんで…そんな…暗い顔してんだよ?

——…?なに…わからない…暗いつて?

——だ、だから…!!なんで…笑わねえんだ?

——……笑う?…何か、あるの?

——えつと!!ええつと……そう!

お前が笑うと俺が嬉しい!!お前が暗いと…

俺は、悲しい……だから笑え!!

……て、何言つてんだ俺!

意味わつかんねえ!!

——……クスツ 分かった…

——!!笑…つた…

——私が笑うだけで嬉しいのはどういう意味かわからないけど…分かったよ…ナ

ツ………

そう言つて、綺麗な笑顔を見せた幼き頃のシクル：

思えば……ナツが初めて見た本当の笑顔は……その時だったかもしれない………

たくさんのおい出が残る……ギルド……その無残な姿にナツは憤怒し、再び立ち上がる。が、それでも力が戻ったわけではなく、再びガジルに吹き飛ばされる。

「炎さえ食べれば……ナツが負けたりしないんだア!!!」

ハッピーの叫び声が響くと……

「なるほど！少々誤解がありましたようで……もしもし！」

「へ？」

ルーシイの呼び出した星霊、〃人馬宮のサジタリウス〃が弓を構え、告げる。

「ルーシイ様は先程、某に〃あんた火出せる？〃と仰いましたので某は〃いいえ〃と答えました……

が、今重要なのは火を出す事ではなく〃火〃そのもの……ということでありませぬなあ、もしもし！」

そう告げ、サジタリウスが弓を放つと、機材に刺さり、そこから爆破が起き炎が巻き上がった。

そして、それを食らったナツは…

魔力の回復が完了し…

「レビィー！ジェット！ドロイ！じつちゃん！！シクル！！そしてこれは…ぶつ壊されたギルドの分だ！！おらあああああつ！！！」

ナツの拳撃が見事、ガジルを下す。

その音は、下で戦闘していたエルザの下にも響いていた…。

「…ふん…：…よく暴れる竜だ…」

「はあ…はあつ…ふつ…：…ナツの戦闘力を計算できていなかったようだな…：…

あいつは…私と同等か…：…それ以上の力を持っている…」

剣を構え、激痛に耐えながら、ジヨゼを睨むエルザ。

「謙遜はよしたまえ…：妖精女王よ…：君の魔力は素晴らしいものだ…：現に、この私と戦い…：…ここまで持ち堪えた魔導士は貴様が初めてだ…：アリアとの戦闘のダメージがな

ければ……もう少しいい勝負となっていたでしょう……」

「くっ……」

「……そんな、強大な魔導士がねえ……」

ジョゼはそこで一度言葉を区切ると……

邪悪な魔力を解放し、エルザへと向ける。

「マカロフのギルドにいることが気に食わんですよっ!!!」

「ぐっああああああっ!!!」

ジョゼの右手から発せられた強力な力に吹き飛ばされ、壁と激突するエルザ。

「何故私が……マカロフにトドメをささなかつたか……お分かりですか？」

「……なに？」

ジョゼはクククツツと笑い、エルザに語り始める。

「絶望………絶望を与えるためですよ」

「どういう事だ……!?!」

「目が覚めた時……………」

愛するギルドと仲間が全滅していたらどうでしょうか？クククツ悲しむでしょうねえ…………あの男には絶望と悲しみを与えてから殺すのです！ただでは殺さんよお…………苦しんで苦しんで…………苦しませてから殺すのだから！！！！」

「貴様…………下劣な…………！！」

ジョゼの語る言葉を聞き、嫌気がさす、エルザ。

「幽鬼の支配者はずっと一番だった…………この国で一番の魔力…………一番の人材…………一番の金があつた。

…………だが、ここ数年で妖精の尻尾は急激に力をつけてきた。エルザにラクサス…………ミストガン…………更にはシクル……………」

その名は我が町にまで届き、火竜の噂は国中に広がった。いつしか「幽鬼の支配者」と「妖精の尻尾」はこの国を代表する2つのギルドとなった……………」

気に入らんのだよ…………元々クソみてえに弱っちいギルドだったくせにイ！！」

「貴様…………この戦争はその下らん妬みが引き起こしたということなのか？！」

「妬みだと？違うなあ…………我々はものの優劣をハッキリさせたいのだよ……………」

ジョゼの言葉を聞き、更に顔を歪めるエルザ。

「そんな…そんな下らん理由で……!!」

ズアアアアツ!!!

不意に、ジョゼの魔法がエルザを縛り付け、拘束…

「うっあ!!!」

「前々から気にくわんギルドだったが…この戦争の引き金は些細な事だった……」

ハートフィリア財閥のお嬢様を連れ戻してくれという依頼さ」

ジョゼの口から出た言葉に目を見開くエルザ。

「うーくア…（ルーシィを!?)」

「この国有数の資産家の娘が妖精の尻尾にいるだど!? 貴様らはどこまで大きくなれば気が済むんだア!!」

「ぐっ……あああ……!!」

「ハートフィリアの金を貴様らが自由に使えたとしたら間違いなく我々よりも巨大な力を手に入れる!!」

それだけは許してはおけんのだア!!!」

「があああああ ああ!!!」

ジョゼが叫び、怒声を上げ力を入れると更に拘束が強くなり、エルザを苦しめる。

だが、エルザはふっ…と小さく笑う。

「ふっ…どつちが上だ下だ…と騒いでいること自体が嘆かわしい…だが、貴様らの情報収集力のなさにも呆れるな…それでよく一番のギルドなどと言えたものだ…」

「……………なんだと?」

「ぐ…ルーシイは…家出、してきたんだ…家の金など…使えるものか……………」

エルザの告げる事実にはジョゼは目を見開いていく。

「家賃7万の家に住み…私たちと共に行動して…共に戦い、共に笑い、共に泣く…同じギルドの仲間だ!」

戦争の引き金だと…?ハートファイリア家の娘…?花が咲く場所を選ばないように…子だつて親を選べないんだ…貴様に……………」

貴様に涙を流すルーシイの何が分かる!!」

エルザはそう叫ぶと力を入れ、拘束を引きちぎろうとする。

「……………ふん…これから知っていくさ」

そんなエルザを見て、ジョゼは不敵な笑みを浮かべる。

「私が…ただで父親に引き渡すと思うか?」

金が無くなるまで飼いつけてやるさ…

ハートフィリアの財産全ては私の手に渡るのだ!!」

「っ…貴様あ!!」

ジョゼの告げる目的にエルザは憤怒、身体に力を込め拘束から抜けだそうとする。「力まん方がいいぞ…余計に苦しむ…」

ジョゼは怪しげに笑い、更に力を入れてエルザを苦しめた。

「ぐっ…あ…あああああ あ ああ!!!」

エルザの悲鳴が響く…その時……………

ズガアアアアアン!!!

「エルを…離せえ!!!光竜の鉤爪!!!」

壁を突き破り、入ってきた者の魔法がジョゼの顔面に入る。

「ぐはっ!?!」

そのまま、不意打ちを食らったジョゼは吹っ飛び壁と激突。

ジョゼが吹っ飛び、瓦礫に埋もれた衝撃でエルザを拘束していた魔法が解ける。

そして、力の入らない身体が地へと落ちるエルザ…

その身体が床とぶつかる前に抱き上げる腕が…

「……………ごめん、遅くなって……………」

その聞き覚えのある声にエルザは目を見開き、見つめる…

普段は髪を1つに結び、纏まっている髪が解かれ、風に揺らめく長い金色……………

透き通るような青い丸い瞳は明らかな敵意を向け……………倒れるジヨゼの方を睨んでいる…

「お…前……………何故…」

「……………私が、大人しく休んでるとでも？」

ニツとエルザを見下ろし笑みを見せるその者……………

「……………シクル……………」

月の歌姫……………戦場に降臨…

「あとは……任せて……」

シクルはそう言い、エルザを隅へと運び壁に寄りかからせる。

そして……

「クツハハハハッ!!待っていていましたぞ……歌姫っ!!貴様を……貴様を殺し……妖精を地獄へと落としてやるっ!!」

魔力を荒らげ、叫ぶジョゼをゆっくりと振り返り……視界に入れるシクル……

「……よくも……よくもみんなを……」

シクルは拳を強く握り、震わせ……そして、ギロツとジョゼを睨むと……

「許さない……絶対……」

私はお前を……許さないっ!!!」

怒れる歌姫……さあ……

「月の名の下に……お前を……滅する」

戦いが……始まる……

22話 妖精VS幽鬼 妖精の法律

「私はあなたを……許さない!!!」

「クククツ……待ってましたぞ……歌姫……」

互いに睨み合う両者……そして……

「喰らえ! デッドウエイブ!!」

シクルへ向け、ジヨゼが魔法を放つ。

そしてシクルも瞬時に魔力を練り、高めると

「光竜の息吹!!!」

光竜の息吹でジヨゼの魔法はかき消される。

「ふむ……やはり、聖十大魔道 筆頭候補のだけある……素晴らしい力だ………だが、私には勝てんよ……」

ニヤツと笑うジヨゼを見て、シクルは更に険しい表情を浮かべる。

「あなた…私に魔法消されてる癖に何でそんな強気になれるのよ？」

「クハハハッ！それはもう…まだ私の本気を出していないからに決まってるでしょう…小娘が………」

「っ！」
ジョゼが手をかざすとシクルの足元が怪しく光り出す。

「っ！」
「吹き飛ば…歌姫！」

「ドオオオオン!!!」

「シクル!!!」

大きな音と共に、シクルの姿が煙で見えなくなり、エルザが叫び、立ち上がろうとする。

「エルザ待ってえ！」

「っ！ルージュ!!?お前もここに…」

立ち上がろうとしたエルザを止めたのはシクルの相棒、ルージュだった。

「ここはシクルを信じてえ！お願い！」
ルージユの顔を暫くみつめてみると…

「…で？これで終わり？」

シクルの声が聞こえる…。

「なに…!？」

エルザがはつとシクルの声の方を向くと…

煙の中から現れたシクルは無傷…：ジヨゼは目を見張る。

「貴様何故…!？」

「当たってないからに決まってるでしょ？」

「……………さて…それじゃあ……………」

反撃……………開始ね？

ニツと笑みを浮かべるとシュツとジヨゼの目の前から消えるシクル。

「なつどい…!？」

ジヨゼがシクルの姿を見失う…

シクルは……………

フツーーー

ジヨゼの背後に現れ…

「月竜の…鉄拳!!!」

ドゴオオオ!!

その背に拳を入れる。

「ぐはあああつ!?!」

悲鳴を上げるジヨゼに更に攻撃を仕掛けるシクル。

身体を翻し、足に魔力を集める。

「月竜の鉤爪!」

ズドツ!!

「ぐふつ!!」

蹴りあげた勢いにのり、空中に1度飛び上がると口に魔力を集め…

「月竜の…咆哮つ!!!」

ジヨゼに向かい咆哮を放つ。

吹き飛び、壁に叩きつけられるジヨゼ。

地に着地し、吹き飛んだジョゼを睨むシクル。

その光景にエルザは驚く。

「シクル……………（こんなにな…強かったの、か？）」

「…シクルウ」

エルザを止めたルージュだが、ルージュも本当はシクルを止めたかった…だが、約束してしまった為、破る訳にはいかないと自身に言い聞かせていた。

「ぐ…ぐぐ…グクハハハ……………やはり強いなあ…歌姫……………」

立ち上がり、シクルを睨むジョゼ…

「クククツ…後悔せよ、歌姫……………私に力を使わせることになるとは…ネエ!!!」

ゴオオオ!!!

「っ!」

ジョゼの身体から魔力が爆発的に高まる。

その風圧はエルザやルージュの方まで届く。

「ぐっ!この魔力は…!」

「ひい…!?」

「…地獄ヲ見ルガイイ…歌姫!」

ドオオオオ!

邪悪なエネルギーが再びシクルに放たれる。

「光竜の…息吹!!!」

シクルの魔法がジョゼの魔法を消し飛ばす。

が……………

ガシツ!!

シクルの右腕をジョゼが掴む。

「つ!!!しまっ…(攻撃の後に近づいて…!)」

「シネエ…小娘エ!!!」

バチバチバチツ!!!

シクルの身体を高圧な電流が流れるような激痛が走る。

「づああああああああつ!!!」

「シクル!!」

絶叫を上げながら、ジョゼをギツ…!と睨み、左手に十六夜刀を換装させる。

「ぐ……………あ……………こんのつ…!!」

ブンツ!と刀を振り上げ、右腕を掴むその手を離させると一気に跳躍し、ジョゼとの距離を取る。

だが、距離を取り、床に足をついた時、膝から崩れ落ちてしまい、息が上がるシクル。
ガクツ

「くつ……………はっ!はあ……………はあ……………」

「シクルつ!!」

エルザの心配する声に「大丈夫つ!!」と、答えるとゆっくりと立ち上がり…

「まだ…やれるよ……………」

と、ニツと笑い言った。

「そうか…貴様は…魔法集束砲を止めたのだつたなあ…クククツ…まだそのダメージが残っていると見た……………」

息の上がるシクルを見て、ニヤニヤと不気味な笑みを浮かべるジョゼにシクルは怪訝

な表情で睨む。

「……………何かおかしい?」

刀を向けられるもジョゼは再び余裕の笑みを浮かべる。

「その様子では…もう満足に動けまい小娘…」

手をシクルへとかざすジョゼ…身構えるシクル…

「その身体で……………仲間を守れるかア!?!」

「っ!!」

ジョゼはその叫びと共に…シクルへ向けていた手をエルザとルージユへと向けた…

「なっ!」

「え……………」

ジョゼの手からは邪悪な波動の刃が放たれる

「!エル!!ルージユ!!」

ルージユは恐怖で目を瞑り、エルザは咄嗟にルージユを抱え、庇う。

エルザは衝撃に備え、身構える…

「……………？」

どんなに待っても痛みは襲っては来ない…
エルザが不思議に思い顔を上げると……………

「ぐ……………う……………」

右肩を抑え、膝をつき、真つ赤な血を流すシクルがいた…

「っ…………シクルっ！！！！」

「あ…………!？」

「っ…………エ、ル…………ルージュ……………無事、だね…………良かった……………」

怪我のない2人を振り返り、柔らかく微笑むシクル。

その顔には大量の汗が溢れ、激痛に耐えてる様子が見えた。

その様子にジョゼは拍手を始め…

「これはこれは…………流石は…………仲間を大切にする歌姫様だ……………だが、これでもう終わりです
すね？」

そう告げた瞬間…………シクルの目の前に現れ…

ガッ！とその首を掴みあげる。

「うあつ！ぐっ…かつ…は！」

「シクルウ！！」

「貴様っ！！」

ジョゼに斬りかかろうとするエルザ…だが、その身体はジョゼから発せられる波動により吹き飛び、柱へと叩きつけられ、再び地に伏せる。

「がは！！ぐっ！」

「エ…ルっ…！」

咳き込むエルザを悲痛な面持ちで見つめ、首にあるジョゼの手を強く握り、離れようと暴れるシクル。

だが…

グツ…バチツバチチチチチイ!!!

「あああああああああああつ!!!」

首から体内へジョゼの魔力が流れ始めるとシクルの悲鳴が響く。

「やめろおおおおお!!!」

「だめええええええええ!!!!」

エルザとルージユの叫びが響くがジヨゼはその手を緩めず…

「ふ……そこで歌姫の最後を見ていろ………」

更に魔力を高める。

「うぐ……あ……あああああああゝ あゝ あゝ あゝ あゝ
!!!!!!」

シクルの絶叫を聞き、ジヨゼは高笑い、愉快そうに苦しむ姿を眺める…。

「ぐううううっ!!あっ!があ……! (こ……んの!)」

そして、シクルは激痛の走る中、必死に体を動かし………

「お前はあたしを………怒らせたんだ………」

未来はないと思え………」

右耳に触れる………そして………

パチツーーー

右耳に着けられたピアスを…外した…。

その瞬間――

ドツゴオオオオオオオオオオン!!!!

シクルを中心に魔力による物凄い風が吹き荒れる…

それはジョゼの手をも振り払い…

「っ!?な、なんだ…!?!」

ジョゼは驚愕し、目を見開く。

吹き荒れる魔力の中………立っているシクルの姿が………

「……………ふう……まさか……これを外すことになるなんて……………」

「シクル……まさか……………制御装置外しちゃったのお!?!」

シクルの眩きにルージュは慌てて、声を上げ立ち上がるが…シクルは安心させるように微笑みをルージュへと向ける。

「大丈夫…ほんのちよつと…使っただけだよ…」

シクルはそう言うとジヨゼに視線をやる…

「貴様…その姿は………」

今、ジヨゼの目の前に立つシクルは…それは、金の長い髪ではなく……銀色に輝く長い髪を揺らしていた…。

「………ジヨゼ…一つ警告してあげる」

シクルはそう言い、人差し指を立てると…

「この姿を見て…立っていたものは、いないよ?」

と、言い放つ。

「小娘が…調子に乗るなよオ!!!」

シクルの言葉を挑発と取ったのか、ジヨゼも魔力を高め、ぶつかり合う。

が…シクルは冷静に両手を胸の前で構えた。

「……………ジヨゼ…あなたに、3つ数えるまでの猶予を与えましょう……………」
「はア？」

「…3つ…数えきる前に……………ひれ伏しなさい」
シクルの言葉を聞き、尚ジヨゼは高笑った。

「ククククツ!!!いきなり何を言い出すかと思えば…!」

「…一つ」

「私にお前達へひれ伏せと!？」

「…二つ」

「ふざけるな!貴様になど負けぬぞお!!」

「…三つ」

「ひれ伏すのは貴様の方だあ!歌姫え!!」

ジヨゼの魔法がシクルに放たれる…その時…

シクルの魔法も解放される…

「そこまで……………」
//フェアリーロウ
妖精の法律

発動”

シクルから放たれる光はジョゼやエルザ、ルージュ…そして幽鬼のギルドや妖精の尻尾の仲間達も包み込んだ…。

「これは…!!シクル…この魔法が使えて…! (だがこれは相当の魔力を…シクルっ!)」
光が目が開けられず、瞑っている中魔法の発動者であるシクルを心配するエルザ…

そして、光が消え、エルザが目を開けると…

真っ白になったジョゼと肩で息をしているシクルの姿があった…。

「ゼッ……は……はア……はっ…」

「シクルっ!」

「やった…やったよお!シクル!!」

倒れ、白目を向くジョゼを前にエルザとルージュは嬉しさのあまりシクルへと駆け寄る。

シクルは既に膝をつき、限界が来ていた…

その髪は既に金髪へと戻っている。

すると……シクルの目の前が揺らぐ……

その姿をエルザが捉えた時……背筋に嫌な寒気が再び走る……

「つ!!!シクルーーー!!!」

シクルの目の前に現れたのは倒したはずのエレメント4の1人、アリア……

シクルは既に動けず、虚ろな目でアリアを弱々しく睨む……

「悲しいなあ……マスターマカロフに続き……月の歌姫まで私の手によって……!!」

涙を流し、シクルへ魔法を放つアリア……

シクルにアリアの魔法があたる……そう、思った……が……

ドゴオオオオ!!!

「ぐばあっ!?!」

アリアを巨大な手が殴り飛ばした。

「……………もう終わったんじや、ギルド同士のケジメはつけた。これ以上を望むのなら……………貴様らを跡形も無く消すぞ

ジヨゼを連れて去れ……………」

シクルたちにとって懐かしく感じる親の声…

「マスター!!」

「マスター! おかえりい!」

「…マ…ス、ター…?」

朦朧とする意識の中、シクルはマカロフの魔力を感じ取る。

そして、フワツと頭を撫でられる感覚がシクルを包み込む。

「……………よく、やったの……………シクル…お疲れ様じゃ」

優しく温かい…その言葉を最後にシクルの意識は途絶えた…。

次回
――

幽鬼の支配者篇

完結

23話 聖十大魔道の称号

シクルがジョゼを倒した後、そのままシクルは病院へ運ばれ、他の者は崩壊したギルドを前に神妙な表情を各々、浮かべていた。

「こりやまた……派手にやられたのお」

崩壊したギルドを前に深いため息をつき、呟くマカロフ。

その背後にゆつくりと…顔を俯き近づいてくる一つの影が…

「あ、あのう……マスター……」

暗い表情で人混みの中から現れたのはルーシイだった。

ルーシイは今回の件をやはり自分がいたせいで迷惑をかけてしまった…と考え、謝罪しようとマカロフの前に出た。

が、マカロフは…後ろを振り返り、ルーシイを視界に入れると……

「んー……おお……ルーシイ、お前さんも随分大変な目にあつたのお……」

「……え」

ルーシイの視界に映るマカロフの表情はとても優しく、決してルーシイのせいとは

思っていないかった…

「でも……………それはあたしが…」

その表情を見ても暗い感情は消えず、拳をギュツと握り、俯くと……………

「そんな顔しないの、ルーちゃん！」

「っ！」

ルーシイの後ろから声が響き、振り返ると…

まだ傷が残っており、服の合間から見える白い包帯が痛々しいがルーシイに笑みを見せるレビイとジエツト、ドロイそしてリーダスの4人が立っていた。

「みんなで力を合わせた大勝利なんだよ！」

「ギルドは壊れちゃったけどな…」

「ンなもん、また立て直せばいいんだよ！」

「レビイちゃん……………ジエツト…ドロイ…」

その温かい言葉にルーシイは涙を流す。

涙を流すルーシイに駆け寄りその涙を拭い優しく微笑むレビイ。

「ルーちゃん……心配かけてごめんね？」

「違つ……それは、あたしの……！」

ルーシイはレビイの言葉を聞き慌てて、反論しようとするも……

「ウイ……オレ、役に立てなくて……あの……ゴメン」

リーダスが謝ることでもルーシイの言葉を遮った。

リーダスの言葉を聞きルーシイは更に涙を溢れさせ、首を横にフルフルと振る。

そんなルーシイを見つめ、マカロフは再びギルドへと視線をやり……優しく語り始める

……

「ルーシイ……楽しい事も……悲しい事も……全て……とまではいかないがある程度までは共有できる……それが、ギルドじゃ……」

一人の幸せは皆の幸せ……一人の怒りは皆の怒り……そして、一人の涙は……皆の、涙……ルーシイ……自責の念にかられる必要は無い……君には……皆の心が、届いている筈じゃ……」

マカロフの言葉を聞き次第に堪えていた嗚咽が出始めるルーシイ。

「顔を上げなさい……ルーシイ……」

君は妖精の尻尾の一員なのだから………」

その言葉を聞き、ルーシイは泣き崩れ大声で泣き叫んだ。

この後、結局評議会の者が押し寄せ、数日間妖精の尻尾のメンバーは事情聴取を受けることとなった………」

そして、幽鬼との戦闘から1週間後……やっと普段の生活がスタートし始めていた。

現在崩壊したギルドの跡地では新しいギルドの建設の為、全員が一丸となって動いていた。

「うおおおらあああ!!!っーっーがつ!!」

角材を約10本程持ち、運ぼうとしたナツがその重さに耐えれず、後方へと倒れる。

「ゴキッ!と嫌な音をさせ……」

「わあ、痛そオ……」

「ちよつとー……大丈夫ー? ナツー」

気の抜けたルージュとシクルの声がナツに届く。

「おおう……大丈夫だア」

痛みに耐えながらも答えるナツに苦笑を浮かべるシクル。

「1度にそんなに持つからだバーカ」

ナツの様子を見ていたグレイから喧嘩口調で挑発されると：

「んだとコラア!?!誰が馬鹿だこのやろお!」

早速挑発に乗っってしまうナツ。

「んだやんのか、ああ!?!」

「チマチマ運んでんじゃねーよクソ氷が!」

普段と変わらない喧嘩を始めた2人を見つめ、ルージュとシクルはため息をつく。

「あーあ…そんな事してると……………」

「そこおっ!!!」

「グゲツ!?!」

喧嘩を始めた2人にエルザからの怒声が響く。

「貴様ら、口より身体を動かせ!!一刻も早く妖精の尻尾を再建させるんだ!!」

「あい……………」

予想を裏切らない光景を見せる3人にため息をつくシクル。

「あー…だから言ったのに…んー…やっぱり私もなにか手伝おうか?」

「…ダメだ!!!」

「え、」

3人の様子を現場の端の方に用意されていた椅子に座り眺めながら、そう言うとなつ、グレイ、エルザそして隣にいるルージュから反対の声が上がった。

「な…何で」

「何でってシクルウ…忘れたのお？しばらくは絶対安静だつてポーリユシカさんに言われたでしょお？」

そう、シクルはあの幽鬼との戦闘後……

実は4日間ほど意識不明が続いており、目が覚めた現在も妖精の尻尾の専属医者「ポーリユシカ」により、絶対安静が言いつけられていた。

「とにかく、シクルは動かさずそこにいるんだぞ…全く、本当なら寝てなければいけないところなんだがな…それと、お前達は現場に戻れ！」

「あいさー!!」

エルザの喝により一瞬で解散し、各々の仕事に取り掛かるナツとグレイ。

そしてエルザも持ち場に戻る。その姿は…

「エルつてば…やる気満々だねえ」

完全に工事現場にいる人の格好をしていた。

「あの服気に入ってるのかな……」

「さあ……」

遠目から見ていたジェットとドロイの小さい会話がシクルの耳にも届く。

ふと、2人を振り返り、シクルはある方向を指差す。

「マスターもやる気満々だよ？」

シクルの差した方ではこちらも工事現場の服装をしたマカロフがいた。

「ノリノリじゃねえか!？」

ぐもお!と効果音が聞こえそうな程顎が外れている2人にルージュと共に笑うシクル。

「監督!この角材はどちらに?」

「んー?おう、あっちじゃ!」

「なんだよ監督って!？」

「あつはははははっ!!」

ツツコミを入れるジェットとドロイだがやはり何か物足りない…と感じるシクル。

「あ……（そっか、ルーシイいないからか……）」

ルーシイ………ちやんと出来てるかなあ

というか、よく良く考えたらあの時ガジルとちやんと話せてないじゃん私………

「……ま、いつか………」

また次会えるもんね……

「頼むよ、マスター………」

マカロフを見つめ、ふうと小さくため息をつき、黒髪の男を脳裏に思い浮かべている
といつの間にか近くに来ていたのか、グレイとナツの声が再び聞こえた。

「つかよ?」

「なんか……でかすぎねえか?」

グレイとナツの言葉を聞きつけたのか、飛んでくるように現れるミラ。

「ウフフ!折角だからね……改築するのよ!で、これが完成予想図!」

そう言つてミラが出した図をみんなで囲い、見てみるが………

「……これ（描いたのミラだね……絶対）」

何でもできそうなミラだが画力だけはどうしてもか恵まれなかったようで……まるで小さい子の落書きのような図だった。

「なん……これ……よくわかんねえ？」

必死に解読しようとするナツ。

「んだこれ？にしてもヘツタクソな絵だなあ……どこのバカが描いたんだよ？」

解読に諦めたグレイが悪態つく。

すると……

「えーん」

ミラが泣いた。

「あーあつ!? ミ、ミラちゃんだったんだね、ご、ごめんね!？」

慌てて謝るグレイ。

「「また泣かせた」」

グレイを冷たい目で睨む男達。そして……

「あーああ……私知らないよお？」

「グーレイー……」 ゴゴゴゴゴッ

殺気立つシクル……

「ヒイイイ!? シ、シクル!! 待て!! 話せば分かる!!」

「2度目はないって…言ったよね？あたし」

ニッコオオオオ…と黒い笑みを見せるシクルにグレイは頭が上げられず、「あい…」と頷く。

そして、数秒後、グレイの悲鳴が響くのであった…。

この後、復活したグレイの膝に見た目不気味な“キヤラ弁”なるモノがいつの間にか置かれていたり、それをナツとエルザを初めに、全員でつまみ食べたりとほのぼのとした時間が続いた。

そんな時…

「やあ…これ、ルーシイに渡しといてくれないか…？」

と、声をかけてきたのは暫く姿を見せなかったロキだった。

ロキの手にあるのはルーシイの鍵…

「お前!? 暫く見ねえと思ったら!!」

「ずっとそれを探してたのか!?!」

ロキは弱々しく笑みを作り、「まあね…」と答えた。

「っ…(…ロキ…(…))」

ナツやグレイからは自分で返せよと言われたが星霊魔導士が苦手を理由に断り、ロキは去っていった…。

その後ろ姿をシクルは見つめる…。

……あなたに残された時間は…あとどれ位なの…ロキ……

結局この後ナツたちがルーシイの家へ赴き、鍵を返すことにしたがシクルは一緒に行かなかった。

まだ、身体が本調子でないのも理由だが、ルーシイが今一時帰郷している事を知っていた為、いないことは分かっていた。

そして又、ルージユもシクルを心配し、ルーシイの家には行かなかった。

それから数時間後、ルーシイを連れてナツやハッピーたちが戻ってきた。

「聞いてくれよシクル!!ルーシイの奴紛らわしいんだぞお!!」

飛びかかってきたナツを抑え、話を聞くと…

ルーシイの家を訪ねたら机の上に“家に帰る”と書き置きのみ残し、ルーシイの姿がなかったから慌ててルーシイを連れ帰りにルーシイの実家へと向かったが結局はナツ

たちの早とちりであった…との、事だった。

その話を聞いて苦笑を浮かべ、ルーシイを見つめるシクル。

「ルーシイ…それは確かに勘違いもするわよ…」

「だ、だよね……………ごめん」

こちらも苦笑を浮かべ、謝るルーシイ。

その後、ギャーギャーとナツの愚痴が続くも、結局戻ってきたんだからいいでしょ？のシクルの言葉で落ち着き、この日は全員解散となった。

そして、シクルの絶対安静の指示も解けた数日後……………シクルは評議会に呼ばれていた。た。

「はあ…なんかいい気がしない…何だろ…」

一緒にマカロフも評議会へ来ていたが彼は今裁判の方へ出ており、一緒にはいなかった。

シクルは指定された部屋に入ると…そこには既に体の大きな男がいた。

「あれ……………？もしかして…ジュラ？」

シクルはその姿に見覚えがあり、首を傾げ声をかけるとあちらもシクルに気づき、振

り返りパツと笑みを浮かべた。

「おお！シクル殿！久方ぶりですな…」

「やつぱジユラだったんだ…久しぶりだね、元気してた？」

ニツコリと声をかけてくるシクルに一瞬ドキツとしながらもジユラは平然と受け答え、「ああ」と答えた。

「で？なんで私今日ここに呼ばれたの？」

「何？もしや何も聞かされておらぬのですか？」

ジユラの言葉に首を傾げるとシクルの頭にポンツと大きな手が乗った。

「わっぷー！」

「ええ、まだ何も伝えていませんでしたからね…」

「んな…アトス!!?何でここにいるの!?!」

シクルの頭に手を置いてきたのはアトスだった。

彼はシクルを見下ろし悪戯のような笑みを見せると…

「また小さくなりましたか？」

と言った。

「なつてませんー！！！！失礼なっ！」

ふう!!と怒るシクルにケラケラと笑うアトス。

「はははつ、すまない…ほんの少しからかいたくなってしまうてな」

「もお!!」

ふいつとそっぽを向くシクルに眉を下げ、ほんの少し反省をするとアトスは表情を引き締め、シクルを呼んだ。

「それでは…シクル様、議長がお呼びです…」

「…議長が?」

コクリとアトスは頷くとジユラへと視線を向け、「ジユラ様もご一緒に…ご案内いたします」と、告げ2人を共に議長室へと向かった。

議長室では既に議長と数人の議員が揃っていた。

そして…ジークレインの姿も……………

「つ…」

シクルは一瞬ジークレインを睨むもすぐに視線を変え、議長へと向ける。

「あの…今日はどのようなお話で…?」

また特別依頼か……でも流石に今回はきついなあ……身体が……と、考えていると……

「……シクル・セレーネ殿……此度のそなたの活躍の数々は……我々の耳にも届いている」
活躍……？ 活躍……？ ……ああ？ ジョゼを倒しちゃったことか “妖精の法律” 使っちゃったことかな？

「あの……もしかして、まずいことしちゃいました？ 私……」
シクルは恐る恐る議長に問いかける。

も、議長はきよとん？ とした様子でシクルを見つめるとはっはっはと笑い始める。

「……ん？」

「はっは……何か勘違いしているようだが……シクル殿……今日は罰や説教のために呼んだ訳では無い……そなたに、これを授けようと、満場一致で決定したのじゃ」

そうやって議長がシクルに差し出したもの……

それは……

“聖十大魔道の称号” だった。

驚くシクルを流れて押しやり、結果、シクルは聖十の称号を受け取ることとなった。

「うっわあ………なんで？なんで聖十の称号なんて…（あ、ジョゼ倒しちゃったからか…）」

うわあ、めんどくさあ…と深いため息をつき、長い廊下を歩いていると…その先にマカロフと議員の一人、〃ヤジマ〃を見つけた。

「あ、マスター」

「ん？おお、シクルか…どうじゃ？何を話しておったのじゃ？」

マカロフからの問いかけにシクルはげんなりと肩を落とすと………聖十の称号を見せる。

「んなにいいい!!シクル!!これはっ…」

「あー…なんか流れて押し付けられた………」

心底めんどくさい…と呟くシクルを他所にマカロフはその荣誉に喜び、その隣ではヤジマもほおと感心していた。

その後、ヤジマと幾つか会話をし、ジュラやアトスとも別れの挨拶をし、ギルド建設地へ戻ると……何やら一悶着あったようで……少し騒がしかった……。

「ラクサスつ!!!」

ミラの怒声が響く。

「ん? (…ラクサス…) マスター……………」

隣を歩いていたマカロフもはあため息をついている。

何となくの予想はつく…

「この際だ!!オレがギルドを継いだら弱エ奴は全て削除する!!そして齒向かう奴も全てだ!!」

最強のギルドを作る!誰にも舐められねエ史上最強のギルドをだ!!!」

そう高らかに言い、高笑いを響かせナツたちの前から去っていくラクサス。

そして、建設地を出ると…丁度帰還したシクルとマカロフと遭遇した。

「シクル…ふん、お前にも負けねえぞ…俺がマスターになってやるのさ!」

「……今のあなたじゃあマスターなんて…なれないよ？いくらマスターの孫でもね…」

シクルのその言葉にラクサスはカツとなり、その胸ぐらを掴みあげる。

「ラクサスっ!!」

「てめえ…ふざけたこと抜かすなよアマ！」

「ふざけてなんかないわ…今のあなたには、誰もついてなんか来ない…マスターに
すらなれないわよ？そんなあなたが、私に勝つ？」

「……寝言は寝ていえ糞ガキ……」

シクルの殺気にラクサスは舌打ちをすると、その手を離し去っていく。

「……ラクサス…」

「……一人で最強になったって…それは本当の強さじゃないよ……ラクサス…」

そう呟き、一つため息をつくとき、シクルはマカロフと共にナツたちの元へと帰ってきた。

そして、シクルが聖十の称号を受け取ったことを聞くとお祭り騒ぎになり、建設も
そつちのけで酒を飲み、大騒ぎとなった。

幽鬼の支配者篇

完結

next story

楽園の塔篇

開幕

予告

星霊王を呼ぶんだよね？力、貸してあげる

あかねリゾート？へえ…楽しそお!!

エルを助けなきや…絶対、守るんだ…

黙れ!!その名で…その名前で…私を呼ぶなっ!!

…っ!!
!!ジエラアアアアアルウウウウウツ
!!!!!!

ごめん……………こんな私を…許してね……………

ナツ……………

やめろ…やめろっ!!!

シクルウウウウウウウウウウウウ
!!!!!!

第4章 樂園の塔篇

24話 星霊王とシクル

シクルが聖十の称号を受け取ってから数週間：妖精の尻尾では依頼の受注が再開されてきた。

「皆ー!! 今日から仕事の受注再開よー!!」

仮設のカウンターだけど：ガンガン仕事やろー!!」

ミラの掛け声と共に、「おー!!」と声を上げ、早速依頼書を受注し出ていく仲間達。「何あれ：いつもはお酒飲んでしてるだけの癖に：」

やる気に満ちる面々を眺め、仮設のカウンターでジュースを飲み呷くルーシィ。

その隣でシクルもジュースを飲んで寛いでいる。

そして、仲間内を見渡し、ルーシィはふと首を傾げ、シクルに問いかける。

「そーういえば：ロキが見当たらないけど：シクル、知ってる？」

ルーシィの問いかけにシクルはピクツと反応を一瞬見せ、すぐに平常心を取り戻し、首を横に振る。

「さあ？私も最近見てないけど……どうして？」

「うん……この前のフアントムとの戦闘の時、あたし鍵落としちゃって……ロキが拾ってくれたって話を聞いたからお礼言いたかったんだけど……」

そっかあいなんだあと眩くルーシイを見つめ、ふと疑問を持つシクル。

「ねえ？ルーシイはいいの？」

「ふえ？」

考え事をしていたルーシイは首を傾げ、シクルを見つめる。

「今月……もうお金ないんじゃない？家賃……」

シクルがそう言うのとルーシイははっ！と我に返り立ち上がる。

「そーだったあ!!あたし今月ピンチだったんだ!!ナーツ……!!!」

ルーシイはそう叫び、ナツを探し飛び出していく。

その後ろ姿を見つめ、はあとため息をつくシクルは立ち上がり、ミラに「ご馳走様」と言うと出掛ける。

ちなみにルージュは寝ていた為、ミラに預けた。

起きた時帰りが遅かったら先に家で待っていて、と伝言を伝え……

シクルは暫くマグノリアの外れにある森の中を歩いていた。

そして、奥の方まで歩き、進むと……

見知った男の弱々しい背中が見えてくる。

「……………ロキ」

「つーああ…シクルか…よく、ここが分かったね？」

シクルが声を掛けたのはルーシーの探していたロキ本人だった。

振り返ったロキの顔色の悪さを見て、シクルは顔を少し歪め、ゆつくりとロキの隣に歩み寄る。

そして、ロキの視線に合わせしやがみ込むとその前髪を掻き分け、その瞳を見つめる。

「な…何だい？」

「ロキ……………後、どれくらいなの？」

シクルの問いかけに「え…」と驚愕の表情を浮かべる。

それに構わず、シクルは再び問いかける。

次は、更に明確に……………

「…その身体…もう、限界なんですよ？」

あと……………何日持つの？ロキ……………

ううん……………レオ……」

久方ぶりに呼ばれたその名にロキはふっと弱く笑みを浮かべる。

「驚いたな……知ってたんだ？……………いつから？」

「初めはなんとなく……確信はなかったけど……他とは違う気はしてた……………確信を持てたのはルーシイの星霊を見てから……同じ気配、匂いがした……………」

シクルの答えを聞き、ロキは乾いた笑い声を出し、そして……………諦めた瞳をシクルへと向ける。

「ごめん……でも、このことは誰にも言わないでくれないか？僕が……星霊だということは……………」

頼む……と、言うロキを見つめ、シクルは「……分かった」と頷いた……

「ありがとう……シクル……………じゃあ、僕は行くよ」

そう言い、ロキはふらつきながらシクルの眼の前から去っていく。

その後ろ姿を見つめ、シクルはふう……と小さくため息をつくとき、空を見上げる。空には少し欠けた月が昇っていた……

「……なんで諦めてんのさ……………ロキ」

私は絶対……………仲間を無闇に消えさせたりなんか……させない。

ロキと別れ、暫く空を見上げるとルージュが待っているだろうと思い、ゆっくりと自宅へと戻る為足を運ぶ。

その時、視界に金の髪が揺らめき、知った匂いが通ったことに気づく。

「…ルーシイ？」

シクルの声にはっと気づいた様子のルーシイは、振り返ったその頬を涙で少し濡らしていた…。

「シクル…」

「どうしたの？なんで…泣いてるの？ルーシイ」

シクルは小さく微笑みながら、地面に腰掛けるルーシイの隣に座った。

ルーシイは俯き、嗚咽を耐えるとゆっくりと小さな声でシクルに語り始めた。

少し前にロキと会ったこと……

そこで、ロキの命があと少しだということ…

でも、結局それはロキの冗談でからかわれてたこと……

それが悲しくて、悔しくて、ロキの頬を平手打ちし、走つて今、ここに至るといふ…。

ルーシイの話を聞いてシクルは深く、呆れたため息をつく。

「あーもお…（あのバカ…何やってんのよ）」

シクルは涙を流し、落ち込むルーシイを見て、その頭を撫でる。

「…シクル？」

「あー…まあ、あのね？あんまりロキを責めないであげて？彼も…ほんとは苦しいんだよ…」

シクルの言葉の真意がいまいち良く分からないルーシイは首を傾げ、シクルを見つめる。

「んー…まあ、なんて言うか…彼のほんとの心を…聞いてあげて？ルーシイなら…きつと…彼の声が聞こえる筈だから…」

「え……………あ、う…ん？」

この時、ルーシイはその言葉の意味を考えるも結局分からなかった。

この後……………まさか、ロキが妖精の尻尾を抜けてしまうなんて…

翌日…

ギルドでやや不機嫌なオーラをだし、過ごしていたルーシイの下に慌てた様子でグレイが走ってきた。

「ルーシイ！大変だ！！ロキが…ロキが妖精の尻尾を出て行っちゃった！！」
「え…ええ!?…なんぞっ!？」

グレイから告げられたロキの脱退にルーシイは立ち上がり、驚く。

「俺だつて知らねえよ!!けど！皆で今必死に探してんだ!!ルーシイ！なんか心当たりねえか!？」

あいつこここの所様子おかしかつたからな…

と、呟くグレイを他所にロキのことを考える。

確かに…最近のロキはどこかおかしかつた…昨日なんて尚更…

そう言えば……………

自身の持つ鍵の一つ、〃南十字座のクルツクス〃に昨夜頼んでいたロキと星霊魔導士についての情報とシクルの言った言葉を思い出す。

そして……………一つの真実に辿り着く…。

「まさか……………まさかっ!？」

ルーシイは思い当たる場所へと、ギルドを飛び出し走り出す。

ルーシイが向かった場所…そこは、ロキと関係のある星霊魔導士の墓…〃カレン・リ

リカ」と言う女性のお墓の前だった。

そこには、弱々しい背中が今にも消えてしまいそうな状態で立っていた…。

「ロキっ…やっぱり…ここだったんだ」

「…ルーシイかい？どうして…ここへ？」

ロキは振り返ることなく、ルーシイに問いかける。

ルーシイは自身の推測を語り始める。

「ロキは星霊…本当の名を『獅子宮のレオ』であり、以前は今は亡き『カレン・リリカ』の星霊であつたこと…」

それを聞いた時、ロキは乾いた笑みを浮かべ、初めてルーシイを振り返つた。

「そうだね…僕は確かにカレンの星霊だった…そしてカレンが死んでから3年間…僕は星霊界に帰れずにいる…」

「3年!?まさか…1年でも有り得ないのにつ!」

その事実にもルーシイが驚愕し、目を見張っていると…ロキの身体から光が始める。

「ロキっ…それっ!」

「ああ…もう…限界なんだ…力が、出ない…」

ロキの諦めたような声…いや、もう、全てを諦めているロキの様子にルーシイはその

肩をつかみ、必死に呼びかける。

「あたし!!助けてあげられるかもしれない…!教えて…帰れなくなった理由ってなんなの!?!あたしが門を開けてみせる!!」

「無理だよ…僕はもう…星霊界へは戻れない…」

ロキは星霊としての掟を破ってしまい、門が開かなくなってしまったことを告げた。

だが、それでもルーシイは諦めず…

「いやっ…あたし、諦めない!!絶対助けるから!!」

「よせ…もう止めてくれ!!ルーシイ!」

ロキが止めるその声を聞かず、ルーシイはロキに抱き着く。

そして、ルーシイの身体はロキと同化し始めていた…。

「もういいんだ!!このままじゃ…君まで消えてしまう!!」

これ以上僕に…罪を与えないでくれええええ!!」

ロキのその悲痛な叫びにルーシイの瞳から涙が流れる…。

「何が罪よ!?!そんなのが星霊界のルールなら…あたしが変えてやる!!」

その瞬間、ルーシイの身体から膨大な魔力が溢れ出る。

だが、それでも…星霊界を繋げる力はなくルーシイの身体から力が抜けていく…

そして、ルーシイの意識が途絶えかけた…その時………

「星霊界…ううん………」

星霊王を呼ぶんだよね？力、貸してあげる」

透き通るような綺麗な声が響く…。

それは、ルーシイもロキも聞き覚えのある声…

「っ…シクルっ!？」

「やつほー！やつぱ気になって来ちゃったわ」

テヘツと笑みを見せると、シクルはルーシイとロキの肩に手を添え…呪文を唱え始める。

「我、星霊王の門を開きし者

我が名 月の歌姫の名の下に その姿を現さん」

星霊王 召喚」

呪文を唱えている時、シクルの髪色が銀色へと変化…そして……

ズドオオオオオオオオオオオン
!!!!!!

大きな音と共に……星霊王…降臨…

「ま…まさ、か………」

「これって………」

「……………ニツ」

現れた巨体を前に見上げ、ニツコリと笑みを浮かべるシクルの横では呆然と目の前の光景に目を見開くロキとルーシイがいた。

「星霊王っ!?!」

《……久方ぶりだな……月の歌姫……》

「久しぶり、星霊王……まあ、今日用があるのは私じゃないんだけどね」

シクルはそう言い、横にいるルーシィへと視線をやる。

ルーシィは未だに呆然とし、目の前の光景が信じられずにいた。

「な……なんで……シクルが……星霊王を呼べるのっ!?!」

「んー? あー……それはまた後でね? 今は……」

もつとやるべき事があるでしょ?」

シクルのその言葉にはっと、ルーシィは我に返りロキを見る。

ロキは先ほどのように身体から光を放ち消えかかつてはいるが、数分前から体の消滅が進んでいないように見えた……。

「レオのことは任せて……ルーシィはきつさと要件言っちゃいな?」

シクルの言葉に強く頷くと星霊王を見上げる。

そんなルーシイを見つめ、再び拒絶の声を上げるロキ…

「もういいルーシイ!!僕は誰かに許してもらいたくないんじゃないっ…罪を償いたいんだ!!
このまま消えたいんだ…!!」

ロキの言葉を聞いた時、ルーシイは目を見開き叫ぶ…。

「そんなの…だめええええええええええっ!!」

ルーシイが立ち上がり叫んだ瞬間、ルーシイの背後に星霊たちが現れる。

それは一瞬のことだったが契約している全星霊を呼んだことにより、魔力が一気に持っていかれるルーシイ。

「罪なんかじゃないわ!!仲間を思う気持ちは…罪になんかならない!!」

星霊たちは消え、ルーシイは前のめりに倒れそうになるが、その身体をシクルが受け止める。

「あたしの『友達』も…皆同じ気持ちよ…」

あんたも星霊なら…:…ロキやアリエスの気持ちが、分かるでしょう!?

怒声を上げるルーシイに慌て、声を上げるロキ。

「なんて無茶なことを!!一瞬とはいえ…死ぬ可能性だってあるんだぞ?!!」

「ま、確かにルーシイの魔力じゃ身体が耐えられなかったかもしれないけど……私が死なせる訳ないでしょ?」

ロキの言葉を聞き、ふっと笑みを見せたシクルはフツと星霊王を見上げる。

「どう? 星霊王……もういいんじゃない? 獅子宮のレオは十二分に罪を償った……
そしてここには、こんなにも優秀な星霊魔導士がいる……彼女の思いを……無下にす
るなんて、出来ないわよね?」

シクルの言葉にうむと星霊王は頷くと……

ルーシイとロキを見て言った。

《古き友にそこまで言われては……間違っているのは、
“法” やもしれぬな……》

「っ!!」

「……なら」

《うむ……同胞アリエスの為に罪を犯したレオ……そのレオを救おうとする古き友……その美
しき絆に免じ、この件を“例外”とし、レオ……貴様に、星霊界への帰還を許可スル》

星霊王のその言葉にルーシイはニツ！と笑顔を浮かべ、ロキは首を横に振っている。

「いいところあるじゃない！髭オヤジ！」

ぐつとルーシイが親指を立てると星霊王もまた、ニヒツと笑みを浮かべた。

《冤罪だ…星の導きに感謝せよ》

そう言い、星霊王は徐々にその姿を消していく…。

「ま、待つてください…僕は…僕は！」

消えていく星霊王にロキが必死で声を上げる。

が、星霊王はロキに視線をやると…ルーシイを指し、言う。

《…それでも、罪を償いたいと願うならば…

その友の力となり、生きていくことを命ずる…

それだけの価値がある友であろう…？

命をかけて、守るがよい》

星霊王はそう言うと最後にシクルへと視線をやり…

《そして、歌姫よ………》

「んー?なあに?」

《…また、いつか…そなたの歌を、聴かせてくれ…そなたの声は…実に、落ち着く…》
星霊王にそう言われるとニッコリと笑みを浮かべ、「りよーかい」と答える。

その答えに満足を見せた星霊王は完全に消え、星霊界へと帰っていった。

こうして、ロキことレオは無事星霊界へと帰ることを許され、又、ルーシイの星霊として契約を交わし、力の回復の為星霊界へと戻った。

最後に、綺麗な笑みを浮かべ…

「でっ!?シクル!!あなた、どーして星霊王を呼べるのツ!?そんな魔法聞いたことないわよ!?」

ギルドへ戻るとルーシイに問い詰められるシクル。

だが……

「ん?んー…ルーシイ…な…い…し…よ♡」

口の前で人差し指を立てウインクし、そう言った。

そして、シクルはルージュを連れ、ギルドを出て行く。

「なっ！ちよつと!?教えなさいよおおおおおおお!!!」

その後ろ姿へ向け、ルーシイの叫び声が響くのであった…。

やっと訪れた平穏…だが、その時は……

刻一刻と迫っているのであった……

「……………エルザ……………シクル……………さあ……………」

楽しいゲームの始まりだ……………」

余談——

シクルがギルドを出ていった後、ギルド内では暫く男共が使い物にならなかったとい
う…

一部のもの曰く、あんな顔みたら誰でもノックアウトだちくしょう!!このことであつ

た…はて、張本人は気づいているのやら…

25話 出発！あかねりゾートへ！

ロキがルーシイの星霊として契約をした数日後、ロキは妖精の尻尾の面々に挨拶と、ちよつとした用事のため人間界に来ていた。

「星霊だあ？」

「ロキが!？」

ナツとグレイの驚きの声がギルドに響く。

「うん…まあ…そういうこと」

ルーシイに迫りより声を上げる2人に少し引きながらも頷くルーシイ。

すると、はつとナツは後方のカウンターでミラ特製パフェを堪能していたシクルを振り返り、突然詰め寄った。

「シクルー!!お前!!知ってただろ!？」

「ふえ?」

いきなり駆け寄ってきたナツに目を点にし、ぱちくりと瞬きをしながら首を傾げる。

「ロキの事だ!!知ってたろ!？」

ナツのその言葉でああ、と納得するシクル。

「あー星霊だったってこと? うん、知ってたよ?」

「ンで言わねえんだよ!」

「だって口止めされてたし?」

シクルはそう言つてルーシー達の傍にいるロキへ顔を向け、ね?と合図を送る。

「の割には…ルーシーに話してみたいんだけど…」

苦笑を浮かべ、誰にも言わないつて約束だったのに…とぶつぶつと呟くロキにやははと笑いながらシクルは言う。

「んー? だって私、確かにロキが『星霊』だってことは黙っておくとは言つたけど………」

別にロキが危ないことを誰にも話さないとは言つてないもんねー…はい、別に約束は破つてません!」

シクルはそう言うのと再びパフェを食べることに集中し始めた。

「あーなあシクル! ちよつとくれよーそれ」

ふと、シクルが美味しそうに頬張っているパフェが気になったのか、目をキラキラと輝かせ催促してくるナツ。

シクルはえー…と少し膨れっ面になり………

目を輝かせ、まるで餌を待つ犬の様なナツを見て、プフツと笑うと…………

「しよーがないなあ…一口だけだよ?」

シクルの言葉によっしや!と喜びを見せるナツ。

が…………

「…………シ、シクル?これ…は?」

「んえ?だつて食べたいんでしょ?はい

あーん」

ナツの目の前には首を傾げ、アイスの乗ったスプーンを自身の口へ向け、差し出してくるシクル…………恐らくシクルは無自覚だろう…

だが…………

「つ…………//!!? (つかそれ…間接キ…ス…!!)」

ナツは思い至った事実には元々赤かった顔を更に赤くさせる。

「ねー早く!腕疲れてきちゃった」

むうと頬を膨らませるシクルにナツはほとんど、ヤケクソだ!と自身に言い聞かせ…

「あ、あーん…………////」

食べた。

「ど?美味し?美味し?ミラ特製だよ!」

無邪気に笑い、感想を聞いてくるシクルに限界まで顔を赤くしながら、鼻を抑え、小さくコクコクと頷くナツ。

その様子を見ていたルーシー達は……………

「なにあの甘い空気…」

「てか、ただ鈍感なんだ…シクルのやつ」

「あんな笑顔でされたら…そりゃ誰でもあーなるよねえ」

「あいい…」

「ま、そこも彼女のいいところではあるけどね」

上から、ルーシー、グレイ、ハッピー、ルージュと続き、最後にロキが笑いながら、そう続いた。

ふと、グレイはロキに視線をやり、

「そっぴやお前…もう体調は大丈夫なのか?」

と、問いかけた。

「んー…まあ、まだ完全じゃないんだけど…」

みんなに挨拶したくてね……それに……」

と、言葉が続くとルーシイの腰を掴むロキ。

「ルーシイの顔も、早く見たかったしね」

「んなっ……／＼／＼！」

ルーシイは一瞬で顔を赤くし、慌てる。

そんな様子を見て……

「でえきてるう」

と、ハッピーとルージュがお馴染みの言葉を発する。

「うるさいっ!!巻き舌風に言うな!」

「じゃ、そーいうわけで今後のことを2人きりで話し合おう!」

どーいう訳なのか、ロキはそう言うのとルーシイを横抱きにし、抱える。

「ちよちよちよっ!?!もう!」

ルーシイは恥ずかしさのあまり耳まで真っ赤にしながらもロキの頬に触れ言う。

「あんたもう帰りなさい……?まだ体調も……完全じゃないんでしょ?」

眉を少し下げ、心配そうに言うルーシイを見つめ、ロキは小さく苦笑を浮かべるとルーシイを下ろし、ポケットへ手を入れる。

「分かった…でもその前に…はい、ルーシー」

「ん?何これ?」

「あかねリゾートのチケットだよ」

もう僕には必要なくなつたからね…あげるよ

君たちには色々とお世話になつたし…」

ロキがそう説明すると話を聞きつけたのか、パフェを食べ終えたシクルが飛んでくる。

「あかねリゾート?へえ…楽しそお!!」

「シクルの分もちゃんとあるよ」

エルザにも、さつき渡しておいたから…皆で楽しんでおいで」

ロキからチケットを貰つたシクルは喜んだ。

「やったー!一度行つてみたかつたんだー!」

シクルを中心にナツたちもリゾートの話で盛り上がっていると……

「貴様ら、何をモタモタしている?置いていかれるのか?」

既に準備万端のエルザがいた。

「「氣い早えよ!」」

「また凄い荷物だねえエル…それと今日は時間的に行けないから明日の早朝出発にしよ?」

シクルの言葉にエルザは「そうか…」と頷き、納得したようで結果、チケットを受け取った次の日、早朝にマグノリア駅に集合となった。

そして、翌日……集合時間きっかりに全員集合し、あかねりゾートへと出発。

いつも通り、シクルは特性の酔い止め薬を飲み、ナツは乗り物酔いに苦しみ、シクルの膝で目的地につくまで眠っていた。

当たり前のようにナツへ膝枕をしているシクルを見て、ルーシイはふと疑問に思う事があった。

「ねえ、シクル…シクルっていつから乗り物乗る時ナツに膝枕してたの?」

「ふえ? んー…いつだろ? ……気づいたらこれが定着してたかな? ああ、でも始まりはナツが大怪我した時かも?」

「ナツが?」

ルーシイのオウム返しにシクルは頷き、ナツを見下ろし語り出す。

「昔ね……まだ私が妖精の尻尾に入ったばかりの時、当時私はまだ魔力を上手く制御できなくて……ちよつとした事で感情が高まって魔力の暴走が起きてしまったの………」

その時、ナツがね……私を止めてくれたただけ………」

暴走する魔力の中に入ってきちゃったから身体中ボロボロになっちゃって……傷は治したけど、暫く気絶しちやつたから……傷つけちゃったお詫びと助けてくれたお礼も兼ねて……」

「が初めてだったかな?」

「へえ……そうだったんだ………」

ナツらしいな……と呟くルーシーに微笑みながらシクルはナツの髪を研ぐ。

暫く列車が走ると目的地、あかねリゾートへと到着。

まだフラフラとしているナツを介抱しながらホテルへ一度行き、荷物を置いてから海へと向かうシクル達。

その間にナツも復活。皆で東の間の休息を楽しむ。

ナツとグレイはどちらが早く泳げるか競ったり、ハッピーとルージュはシンプルに水のかけっこをして遊んだり、シクルはルーシーとエルザと共に日光浴等を楽しんだ。

(ちなみに、シクルの水着姿を見てナツやグレイは顔を赤くしたとかなんとか……)

海水浴を始めてから暫く経った頃、エルザの「少し休憩にしよう」の言葉に全員集まり、日陰で休んでいた。

「はー！こんなに遊んだの久しぶりだなあ！」

んー！と、背伸びをしながら言うルーシイ。

「最近ギルドの再建とかで慌ただしかったしな」

ルーシイの言葉に頷き、続くグレイ。

「んー…ねえ、シクルウ…喉乾いたア」

「ルージユ？」

かいた汗をタオルで拭っていると隣で寝転んでいたルージユのボソリとした呟きを聞き取り、首を傾げるシクル。

「何か買ってこよつか？」

シクルの問いかけに「あいい…」と頷くルージユを見て、クスツと笑うと立ち上がる。

「ナツたちもなんか買ってこよつか？」

「んア？あー…売店行くなら俺も行くぞ？」

シクル一人だと心配だ…と、小さく呟くナツの声はシクルに届かず、シクルはフツツと笑うと手を振り、断る。

「大丈夫だって!飲み物買っただけだもん!1人でいいよ!じゃ、行ってきまーす!!」
そう言い、売店へと走っていくシクルの後ろ姿をナツたちは見送るが……………

「て!!シクル!!何か羽織っていかんか!」

エルザの叫びが響くがシクルには届かず…

「だア!たくつ、俺ちよつと行つてくる!」

「お願いね、ナツ!」

「シクルのやつ…ちよつとは自覚しろつての…」

「しようがないよ…」

「シクルだもんねえ…」

シクルの後をナツが追い、ルーシィやグレイは苦笑を浮かべた。

売店で目当ての飲み物を人数分買えたシクルは、袋に飲み物を入れてもらいナツたちの下へと戻る途中だった。

「ふうー…こんなゆつくりするの久しぶりだなあ……………」

最近ではフロントムとのゴタゴタとか…色々あったからなあ…

こんな日もたまにはいいな…と、心の中で呟きをしていると、シクルの目の前に影が差した。

「よオ、嬢ちゃん…1人か？」

「…？」

知らない男の声に、疑問を持ちながらも前を見ると…

いかにも、ナンパです！と言った様子の男が5・6人シクルの目の前にいた。

「(うっわ…めんどくさ…) いえ…連れがいるんで」

シクルは男達を見ると嫌そうな表情をし、断り、すぐに立ち去ろうとする。

が………

ガシツーーー

「っ！」

シクルの腕をリーダー格であろう男が掴んだ。

「まあ待つてよ…俺たち暇なんだよ…遊んでくんね？」

「私は暇じゃないんで…離してくれませんか？」

てか触らないでよ…

心中、毒づきながら柔らかかに断りを入れるも…他の男が次はシクルの肩を掴んだ。

「そう言うなつてーなあ? どうせ暇でしょ? 遊ぼーよ」

「だからっ…(一般人だから大人しくしてんのに…ぶっ飛ばしてやろうかクソ共…)」

シクルのイライラが次第に募っていき、それに気づかず、シクルの肩や腰にも男達の手が回り、逃げ道が見た目無くなってしまったシクルはあ…とため息をつき……

魔力を右手に集め、威嚇のために地面を殴ろうとした…その時――

「おい、てめえら……俺のシクルに何してんだ…? あア?」

シクルにとって…聞き覚えのありすぎる声が届く。

「あ? 誰だテメエ…」

リーダー格が動いた拍子に見えたその桜色の頭……

「…ナツ」

シクルは無意識にその顔を見た時、ほんわりと笑みが表情に浮かんだ。

ナツはシクルに群がる男達の手を険悪な表情で睨むと…

「シクルに触ってんじゃねえよ…シクルは俺んだ…さっさとどっか行けや」
「ちよ…／＼／＼（いつ私がナツのものになったのよ!）」

ナツの言葉に頬を赤くしながらも俯き、恥ずかしさが取り除けないシクルが、男達はナツのその言葉に逆上し、ナツへといきなり殴り掛かる。

その拍子にシクルは解放され…男達から離れたのをナツは確認すると、ものの数秒で男達をのした。

「へっ…俺に勝とうなんざ、1000年早えんだよ」

ナツは地面に倒れ伏し、目を回す男達にそう吐き捨てると、シクルに持ってきたパーカーをかける。

「んえ？ナツ…？」

「たく…自覚なさすぎんだよ、シクルは…」

1人でシなどこ歩いてりや声かけられんに決まってんだろ…ましてや水着姿でなんか…」

ナツの言葉に意味がわからないと首を傾げるシクルにナツははあとため息をつき、「分かんねえならもういいや」と言った。

ナツの言った真意は分からない……が……

「ナツ!」

「んア?」

シクルは振り返ったナツに満面の笑みを見せ……

「ありがとう!」

と言った。

ナツは暫く放心し、そしてボンツ!!!と大きな音を立て、耳まで顔を真っ赤にして、「おお……おう……」と壊れたロボットののように頷いた。

ナツは気を紛らわすように、シクルの持つ飲み物が入った袋をシクルの手から奪うと、代わりに持ち始める。

「え? ナツ?」

「俺が持つ」

「え? いいよ……そんなに重くないし、持てるよ? 私」

シクルがそう言うも、ナツは袋をシクルに渡すことはなく……

「いいだろ……俺が持ちてえんだ」

「ふうん……まあいつか……ありがとうね!」

なんで持ちたいんだかは分からないけど、と言った様子でナツの隣を着いて歩くシクル。

ふっとナツは気づかれぬように隣を歩くシクルをちらつと見る。

そして、ふいつと目を逸らすと頬を赤くする。

「つ……（しゃーねえだろ……シクルだって女なんだから……持たせる訳にもいかねえだろ……）」

んな事言ったらキレられそうだから言わねえけど……と、心中でぶつぶつと呟きながらもエルザ達の下へと戻るナツとシクルであった。

そして、結局エルザ達の下へと戻った時、エルザからの逆鱗をくらい、シクルは暫く正座で説教を受けた。

エルザ曰く、自覚が無さすぎる!!との事だった……

「そんなにかないかなあ?」

青い青い空を見上げ、呟くシクル。

あの、説教のあと、休憩も終わり、ホテルに戻るまで海でめいっぱい遊んだシクル達

……

そして、この後……まさか、あんな大事件に巻き込まれるなど……

この時、シクル達は思いもしなかった……

「時は来た……エルザ……君を……迎えに行くよ……」

ククク……と、暗闇に響く怪しげな笑い声……

「そして……月の歌姫……その魔力、必ずや……」

26話 嵐の予感

その日の夜――

シクルは1人、夜の海で空を眺めていた。

「……こんなゆっくりした日を過ごすのは……ほんと、久しぶりだなあ……」

ふうと息をつき、満月を見て、目を瞑る。

脳裏に浮かぶは今日、ナツやルーシー達と沢山遊んだ記憶……

ナツとグレイが喧嘩をして……

エルザがそれをやりすぎの力で止めて……

ルーシーやハッピーはその光景を見て震え、

シクルとルージュは笑って……

「…楽しかったなあ」

フフツと笑うシクル。

不意に——

“お前に幸せ等ないんだよ？なあ…愛しの……”

「つー!!!」

急に蘇るその声にビクツと肩を揺らし、呼吸を荒らげる。

「つ…は………はあ…ふう………」

呼吸を落ち着かせ、再び空を見上げると…満月が雲に隠れ、見えなくなっていた…

「………やだなあ…(嫌な風………)」

これが起きると………あまりいいことは起きない………いつもそう…

「…お願いだから…当たらないでよ………」

そう呟き、ふつと顔を俯き、暫くぼうっとしていると…

「シクル———!!!」

「ん?」

聞き覚えのある声に、シクルは顔を上げ、後ろを振り返る。

すると、そこには予想と違わずルーシイが走っていた。

ルーシイはシクルの前まで来るとシクルの手を握り、少し興奮気味に笑顔を浮かべ言う。

「今ね！ホテルの地下で皆とカジノで遊んでるんだ!!シクルも行かない?」

「カジノ?へえ…エルも行ってるの?」

シクルが問いかけると「うんっ!」と頷くルーシイ。

きつとナツやエルザにシクルを探して連れて来るように等、言われたのだろう…

「分かった、私もカジノ少し興味あったから…行ってみようかな」

シクルはそう言うのと、立ち上がり、ルーシイに引かれ、カジノルームへと向かった。

カジノに着くとシクルは目を輝かせた。

「すっごーい!!楽しそうだね!!」

「でしょ!!ね、シクルも遊ぼう!」

ルーシイの言葉に「うん!」とシクルも頷くとシクルはどのゲームで遊ぶか台を見回し、考える。

すると………

「おぉー!!!」

「ん?」

大きな歓声が響く。

シクルは不思議に思い、そちらへ行くと……

「エル?……うわ」

歓声の大元は仲間のエルザだった。

そして、エルザは今ポーカーゲームを行っているようで、その手元を見ると……

「ロイヤルストレートフラッシュ……えぐ」

しかもエルザの勝敗履歴を見ると……

20連勝はしているだろうその成績に……

「………新たな才能の開花……?」

と、苦笑を浮かべ、眩く。

シクルに続き、エルザの成績を見たルーシイも……驚いた表情を浮かべ、声を上げる。

「すごいエルザ!!」

「ふふん、今日はついでな」

「とんでもなくね…」

エルザの言葉にシクルも賛同し、楽しんでいるエルザを見てほんわりと笑みを浮かべる。

「ディーラーチェンジだ」

不意に、エルザの対戦相手が褐色の肌をした若い男に変わった。

「良かろう。今なら誰が相手でも負ける気はせんぞ」

得意気に言うエルザにシクルとルーシイもクスクスと笑い、「だね」と答える。

「だったら…特別なゲームを楽しまないか？」

賭けるのもコインじゃない」

エルザの言葉を聞き、目の前の褐色肌の若い男がニヤツと含み笑いを浮かべながらそう言い、5枚のカードをエルザの前に投げ出す。

そこには数字やマークではなくアルファベットでD・E・A・T・Hと示されていた。「…これは（死？なんで…）」

シクルが脳裏でその単語の意味を考えていると…エルザの様子がほんの少しおかし

いことに気づく。

相手を見て……少しだけ、震えていた……………。

「命……かけて遊ぼう…………… “エルザ姉さん”」

目の前の若い男にそう呼ばれるとビクツと肩を揺らすエルザ。

「まさか…………… ショウウ？」

「…………… え？」

2人のやりとりに何を話しているのか分からない様子のルーシイと、何となく何かを察し、そしてほんの僅かに警戒を強めるシクル。

「久しぶりだね…………… 姉さん」

「無事…………… だったの、か？ ショウウ……………」

未だに目の前の若い男を見つめ、呆然としているエルザ。

…………… まで動揺しているエルザなんて……………

「…………… (初めて見た……………)」

「無事？」

目の前の若い男の目つきがほんの少し変わり、その瞬間エルザが再び肩を揺らし、顔を俯く。

エルザの様子に只事ではないとシクルは思い、「エル……」と声をかけ、肩に手を置こうとした……その時……

会場内の電気がすべて突然消え、暗闇が訪れた。

「え!?!何!?!暗っ!?!」

「な!何が起きた!?!」

エルザとルーシイの声が響く。

シクルもまた、警戒を強め、辺りに注意を回す。

すると……

パアンツ!!

「っ!! (銃声!?!どこから……)」

突然響いた銃声音に驚きが隠しきれないシクルの耳に次に入ったのは……

「きゃあ!?!」

ルーシイの悲鳴だった。

「ルーシイ!?!」

エルザとシクルの声が被る。

シクルが悲鳴の聞こえた所へ駆け寄ろうとした時だ……………

ゾワッー

背筋を何かが走る。

「っ!! (この感じ…魔法!?)」

背筋を走る何かを感じたものが魔法であると気づいたシクルはその瞬間、向けられる魔法を解除する。

そして、ルーシイの悲鳴が聞こえた後、徐々に暗闇はボンヤリと明るくなっていく…。
「ルーシイ!どこだ!?!」

明かりがつき始めると近くにいたはずのルーシイの姿が見えず…シクルとエルザはその姿を探す。

目の前にいたシヨウという男の姿もなかった…。

2人でルーシイの名を呼び叫んでいると…………

《エルザ!!シクル!!》

ルーシイの声が足元から響く…。

2人が足元を向くと…ルーシイがカードの中に閉じ込められていた。

「ルーシイ!?!どうなっているんだ!?!シヨウはどこに…!!」

「なんでカード…?」

エルザは既に混乱で頭が回らない様子が見られ、シクルはルーシイのその姿に苦笑を浮かべていた。

「こつちだよ、姉さん」

エルザとシクルから少し離れたところからシヨウの声が聞こえる。

2人が振り返ると……そこに、シヨウが立つておりその足元には……

床一面にカードが落ちており、その中に人が閉じ込められている光景が広がっていた……

「なっ?!?カードの中に人が!」

「これ…(さっきのあの感じはこれか…)」

心中で、気づくの遅れたら危なかった…と他人事のように考えるシクル。

「不思議?俺も魔法…使えるようになったんだよ」

驚愕が抜けないエルザにシヨウが語りかける。

シヨウの「魔法」という言葉にはっと、シヨウを見つめる。

「魔法…?お前、一体………」

エルザの問いかけに答えず、シヨウは怪しげに笑っているだけ…すると、
「みやあ」

シヨウの隣に、いつの間にか猫のような少女がテーブルに座っていた。

「みやあ…元気最強？」

その少女を見た瞬間、再びエルザが肩を揺らし、驚く。

「まさか…ミリアーナ!？」

ミリアーナと呼ばれた少女。その手に抱かれているそれを見た時、シクルも驚愕に目を見開く。

「え…ハッピー…ルージュ!？」

その手には眠っているのだろうか？抵抗もせず青毛と茶毛の猫が抱かれていた。

そしてその身体にはチューブのようなものが巻かれていた。

その姿を見た時、エルザは声を荒らげる。

「何をしている!?! ルーシィも…ハッピーとルージュも!! 私の間だ!!」

「みやあ…仲間？」

エルザの叫びに目の前の2人が反応を見せる。

「俺たちだって…仲間だったでしょ？」

「つ…う…あ…」

シヨウのその言葉に数歩下がり、顔を青くしていくエルザ。
「姉さんが俺たちを裏切るまではね」

シヨウのその言葉に…エルザは、俯き黙ってしまふ。

そこに……………

「そういじめてやるな…シヨウ。ダンディな男は感情を隠すものだけ…すっかり、色っぽくなっちまってヨ」

新たな声が届く。こちららも、エルザは知っているようで……………

「そ…その、声は…ウオーリー…?」

「気付かねえのも無理はねえ…狂犬ウオーリーと呼ばれていたあの頃に比べ、俺も丸くなった方だ」

「お前も魔法を……………」

「そう驚くこととは無い」

またまた聞こえてくる新たな人物の声に…

「(てか…どんだけ出てくんのさ……………)」

シリアスな場面なのにため息をつきたくなるシクルであった。

「コツさえ掴めば、誰にでも魔法は使える…なあ？エルザ」
「お前は…シモン!？」

《エルザっ!!こいつらなんなの!？」

姉さんって一体…どういうこと!？」

カードの中に閉じ込められているルーシイの叫びが響く。

その声にエルザはシヨウたちを見つめ、話し出す。

「…本当の弟ではない…かつての仲間たちだ」

エルザのその言葉にルーシイは目を見張る。

「仲間って…どういうこと!？エルザは幼い頃から妖精の尻尾にいたんでしょ!？」

「それ以前…ということだ。お前達がなぜここに…とにかく、ルーシイやハツピー、ルーシユを解放してくれ…」

エルザのその言葉に…シヨウたちは嫌な笑みを浮かべ口を開く。

「あんたを連れ戻しにサ」

「みやあ」

「帰ろう…姉さん」

「まあ、言うこと聞いてくれねえとよお……」
ウオーリーはそう眩き、ルーシイに銃を向けた……

《ひいいいつ!?!》

ルーシイの悲鳴が響く。

「よ、よせ!!頼む!!やめてくれっ!!」

エルザの叫びが響き……そして……

ウオーリーの、ルーシイに構えていた右手がその体から消え、離れ……
ニヤツと笑うウオーリー……

その、見つめる先はエルザの背後……

そして……

パアンツ……

銃声が響いた……。

「っ!?!」

《えっ》

「「っ!」」

「何!」

シヨウやウオーリーたちの狙いはエルザの背後から銃弾… “睡眠薬” を撃ち込むことだった…

そしてそれは、成功した…そう、思った…
が……………

エルザの背中が、守られていた……………

「…………ふう…私を無視して、やらせると思う?」

シクルの刀で銃弾は防がれていた……………。

「シ、シクル…」

「エル、下がって…私の傍から離れないでね?」

唾然とするエルザにニッコリと優しく微笑み、そう言うエルザを庇うようにシヨウたちと向き合う。

「…ほう…お前が、かの有名な…月の歌姫か？」

作戦を邪魔され、ほんの少しイラついている様子のウォーリーがシクルにそう問いかける。

シクルは刀を向け、睨み警戒を解かない。

「……………エルをどうするつもり？」

シヨウたちにそう問いたです。

が、そう簡単に答えるわけもなく…

「ふっ…言うわけ…ないだろ!!」

「みやあ!!」

「ダンディーに…だぜ!」

「…大人しくしてもらおう」

4人からの一斉攻撃がシクルに向かう。

「シクルっ!!」

《危ないっ!!》

エルザとルーシイの声がシクルに響くも…

シクルは冷静にその動きを見つめ…

シユツ

ヒユツ

フツ

サツ

ダンツ

正確に、動きを見極め最小限の動きで避ける。

それが数分…続いた……………。

「ちっ…鬱陶しいな…」

「みやあー…当たらないよおー!」

「流石に手間取るな…」

「…」

4人の方に疲労が見られ始める…

「…さあ……………エルのごとは諦めて…目的を言う気にはなったかしら?」

シクルは息も上がらず、まだまだ余裕があった。

4対1の攻防を繰り返すシクルを見つめ、不安そうなエルザ…

「…シクルっ」

シクルはエルザとの立ち位置を考えながらシヨウたちを相手していた。離れすぎず、いつでも助けに回れるように…

このままいけば、向こうが折れ、諦めてくれる…そう、シクルは思いシヨウたちも僅かに諦めが出始めた…その時だった…

「クククッ…やめとけやめとけ…そいつの相手はお前らじゃ無理だ」

「「っ!」」

「誰だ…?」

「……………(新手?)」

一箇所、暗闇から一つの影が現れる…

それは、右眼を眼帯で覆っている赤眼の男…その腰には2本の刀が備えてある…。

その姿を見た時…シクルは嫌な汗が流れ、息を呑む…。

……こいつ……強い……とてつもなく……

「そいつの相手は……おいちゃんがやってやろうじゃん？ ナア？ 歌姫ヨオ……」

シクルの目の前に現れた男――

男は、シクルを見つめ、怪しく嗤うと……

刀を一本手に持つ……そして、ほんの少し、振り抜いた……その瞬間――

ブシューッーッー!!!

「っ!?!っつ!!」

突然、シクルの左肩と右脚から血が吹き出した。

「!?!シクル!!!」

《なっ……何がっ!?!》

エルザとルーシイは目の前で起きた光景が理解出来ず……シクルも、左肩を抑え、右膝を床につき痛みに耐えながら、目の前の男を睨み上げる……

「つつ………（動きが……見えなかつたっ！）」

シクルは目の前で笑い、刀についた血を舐めとる男を見つめ、冷や汗が溢れる。

やばい………こいつ………ほんとに………

強いっ!!!

ゴクツ……と、息を呑む音がその場に静かに響く………

27話 攫われるエルザ 楽園の塔へ

目の前の男…相手を睨み、冷や汗が頬を伝うシクル。

「っ…（やばい…こいつ相手に、2人を庇ってじゃあ………分が悪すぎるー）」

だがエルザと離れすぎるともしもまた狙われた時…助けに行けない可能性がある。

「クククッ…やっぱ思った通りだなア…あんたの血、最高にうめえなあ…」

狂気に狂ったかのような笑みを浮かべシクルに告げる男を見つめ、背筋が震える感覚のするシクル。

「…血に、美味しいもまずいもある訳？理解出来ない…」

シクルはそう言いながら、右足を庇いつつ立ち上がり、刀を構える。

「ほう？立つのか…」

「当たり前でしょ…私の後ろには…守らなきゃならない人がいるんだから」

「シ…クル」

シクルを見つめ、蒼白い顔がほんの少し回復しつつあるエルザ。

そして、その足元には心配の表情を浮かべたルーシイが。

「ククツ！ 守るべきものねえ…じゃあ、もうちよつとおいちゃんと遊ぼうか？」

男は笑いながらそう言いシクルへ、刀を向ける。

「おい、そろそろ時間が…」

男を見て、声を上げたのはシモンだった。

男は横目でシモンを見て、言う。

「わあってるって…もうちよい楽しませてくれヤア…久々に…楽しめそうなん………だ
！」

語尾を荒らげると一気にシクルへと攻撃を仕掛けてくる男。

「！（来たっ…！）くっ！」 ガキインツッ！！

一発目を防いでから、何度も刃が混じり合い、激しい刀が混じり合う音が10分ほど続いた。

その攻防の中、シクルは徐々に刀傷が増えていき、又男も少しずつ身体に傷を負っていた。

「ハア…ハア…ハア…」

「……………ククツ…おいちゃんどここまでやり合えるやつは初めて見たなあ……………」
楽しんで不気味な笑みを浮かべる男。

「おい！もうほんとに時間ねえぞ！」

「うっせえなあ…わあつてつての…あーたく…楽しかったのになあ…まあ、外野がうるせえし…これで終わりにするかア……………」

シヨウの言葉にため息をつきながらもシクルを見つめ、再び刀を構えた時……………

「……………、だろ？」

「っ!？」

シクルにのみ聞こえる声で…男がそう囁いた…その瞬間、明らかに隙が生まれたシクル……………

ザンツーーー

「あ……………」

シクルは左肩から右胸にかけ、男の刀により斬り裂かれ……………真っ赤な血が飛沫を上げた……………

「つ……………シクルー……!!!」

エルザの悲痛な叫びが響き、カードの中、ルーシイからもシクルを呼ぶ叫び声が響く。

パァンツ!!

「あ……」

シクルが倒れ、完全に油断していたエルザはウオーリーに背後から睡眠弾を撃たれ、倒れてしまう。

《エルザっ!!シクルっ!!》

ちよつとあんた達!!エルザを離しなさいよ!!》

エルザを大柄な男が抱えるのを見てルーシイは怒声を上げるも、シヨウたちは笑みを浮かべるのみ。

「やめとけやめとけ……カードの中じゃ、何も出来ないだろ?」

男がそう言い、そして倒れるシクルにふいつと目を向ける。

男は何を思ったのか……倒れるシクルに近寄り、その耳元に顔を寄せると……………

「……あなたに誰かを守るなんて……出来ねえよ」

その言葉にシクルは悔しさと惨めさで唇を噛み締める。

「姉さん…やっと、帰ってきてくれるんだね……………」

シヨウは抱かれているエルザを愛おしげに…だがどこか憎らしげに見つめ、そう呟く。

「『楽園の塔』へ…やっと……………きつと、ジエラールも喜ぶよ」

シヨウの言葉を聞き、朦朧とする意識の中、驚愕に揺れるエルザ。

「つ…（『楽園の塔』だ?!?か…完成…して、いたのか…）」

心中で、そう呟いた後、すぐに意識を手放してしまったエルザ。

そのまま、消えていく姿をシクルは必死に身体に力を入れ、動こうとするが……………

「つ…（痺れ…?まさかさっきの刀…毒でも仕込まれてたか……………!）」

身体が痺れに襲われ、力が入らなかった。

《シクル!!シクル!しっかりして!!》

後方から、ルーシイの声が聞こえる。

…ルーシイ……………

「大、丈夫…（解毒は得意じゃないけど…この程度なら…）」
 シクルは自身の身体中に魔力を巡らせると…

「…ソングマジック歌魔法 ヒーラー治療」

自身に治療魔法をかけ、身体の傷を治し、粗方治し終え、毒も抜けた頃立ち上がり、ルーシイの閉じ込められているカードの元へと歩み寄る。

「待っててねルーシイ…今、出すから」

シクルのその言葉にルーシイは小さく頷き、シクルもその頷きに小さく頷くとカードに片手を添え…

「（多分これは結界か何かの一種…：なら…）」

「我、聖なる月の名の下に」

その身に宿りし 邪なる力 光へと解放せん

ソングマジック歌魔法 デイスベル解除

シクルが歌を唱え終わった時…カードが光だし、ルーシイが解放される。

「やったー!!出られたっ!!」

解放された瞬間ルーシイは喜び、シクルに笑みを浮かべた。

「良かった…これが通じて…」

ほっと一息つくと、シクルは真剣な表情を浮かべる。

「とにかく、今はグレイやナツを探そう!」

「うん!!」

シクルのその言葉にルーシイも頷き、残りの2人を探し始める。

ちなみに、この時解放されたのはルーシイのみ。

シクル曰く…「この場の全員に歌魔法をかけたら魔力がごっそり持ってかれちゃう

!!」

との事で、ことが収まり次第解除するとの事だった……………。

そして、すぐにグレイを見つけるも…

「そ、そんな…グレイ……………」

2人の目の前にいるのは気を失い倒れるグレイだった。

ルーシイは慌ててグレイに駆け寄り、声をかける。が、シクルは目の前のグレイに違

和感を覚え…

「…あれ?もしかして……………」

ある結論にシクルが思い立つ…その瞬間…

ボキツと嫌な音を立て、グレイの腕が取れた。

「ぎゃあああああつ?!」

その後はルーシイのおかしいくらいの悲鳴と叫びが続き、グレイの取れた腕をくつつけようとするのにまた別のところをもぎ取ってしまい、終いには関節のつき方がおかしいグレイが出来上がり、ルーシイは泣き叫ぶ…

「……………プフツ……………アハハハハハハ!!」

必死に笑いを堪えていたが、ルーシイの様子に耐えきれず、笑い出すシクル。

「ふえ……?」

「クククツ……!!ル、ルーシイ…そ、それ…グレイじゃないよ………ププツ」

「え!?!」

シクルに指摘され、ぱつとグレイを振り返ると…

「え……え!!溶け……これ氷!?!」

グレイの体は徐々に溶け始め、そこでやつと目の前のグレイは氷で作られた造形魔法であると気づくルーシイ。

「え……あれ?じゃあ、本物のグレイはどこに!?!」

そう叫び、再びグレイの姿を探そうとするルーシイの後ろから、「ここです…」と言う、

女の声が聞こえる。

「え……」

「ん？」

声のした方を振り返ると……

「え!? あなた……ファントムの!?!」

元ファントムのエレメント4、*“ジユビア”*がいた。

その腕にはグレイも抱えられ……

ジユビアの話によると、先ほどの襲撃の際危険に陥ったグレイを自身の水の中に隠し、守ったとのことだった。

何故かこの時ルーシィとシクルに対し敵対心剥き出しであったようだ……。

「とにかく……次はナツを見つけないと……」

シクルが敵対心剥き出しのジユビアを置いておき、まだ見つけていないナツを探そう……そう言った時だった……

少し離れた場所から大きな火柱が上がり……

「いつてええええええええええええ!!!!」

ナツの叫びが轟いた……

「ナツっ!!」

シクルとルーシイがナツの元へと駆け寄る。

ナツは2人に気づくとうがー!と唸りながら叫び続ける。

「普通口の中に鉛玉なんかぶち込むかよ!?! あア、!?! 痛えだろ!?! ヘタすりや大怪我だぞっ!?!」

「普通の人ならアウトだつて…」

「流石ナツ……………」

「俺…段々こいつがバケモンになるんじゃないかねえかと最近思うんだが……………」

ルーシイ、シクル、グレイと続くがナツはそれらを華麗に無視し、うおおお!と唸ると

「あんの四角やろおお!! ハッピーとルージユ攫いやがつてえ!!!」

逃がすかゴリア!!と叫びながら、走り出すナツ。

「あ! ちよ、ナツ!! 待ってってば!!!」

「今はあいつを追うぞ!」

「え!?! ナツに任せて大丈夫なの!?!」

ルーシイの驚く声に、ナツを追い走りながらグレイは「あいつは鼻はいいからな」と

言い、納得させる。

そして、エルザの搜索をナツに任せて数時間後……

現在、シクルたちは舟に乗り、まさに海のご真ん中に佇んでいた…。

「……………おい……………(こ)こだよッ!？」

グレイの絶叫が虚しく海に反射し、響く…

「ジュ、ジュビアたち…迷ってしまったのでしょうか？」

グレイの隣でオロオロとするジュビア。

「ね、ねえ…ちよつとナツ……………ほんとにこつちで合ってるの…?」

ルーシイは隣に座っているナツに声をかけるも…

「お…おお……………お…う…ぷ」

舟に乗り込んだ直後から乗り物酔いを起こしていた。

そして……………

「う…つ…ぷ……………気持ち悪い…」

薬のなかったシクルも乗り物酔いを起こしていた。

「てか何でシクルも酔ってるの!？」

「いや…酔い止め薬…………部屋に置いてきちゃって…うぷ」

ルーシィに説明をしながらも吐き気を堪えるシクルにルーシィははあとため息をつきながらその背をさする。

「だアっ!!しつかりしろよこのクソ炎!!」

テメエの鼻を頼りに来たんだぞ!？」

ナツに怒鳴りながらその身体を揺するグレイ。

「うぷ…ゆ、らすなあ…………酔ううう……………」

「グレイ様の期待を裏切るなんて信じられませぬね」

情けないナツの姿にジユビアは呆れる様子。

「クソ!!俺達がのされてる間に…エルザが連れてかれちまうなんて…しかも、ハッピーやルージユまで!」

グレイの悲痛な声を聞き、ふと、乗り物酔いを忘れシクルは先程戦った男のことを考える…。

…あいつなんで……………//アレ〃を知っていたの？

アレは……あの時……捨てた筈……

シクルは首を横に振り、嫌な考えを消し去る。

「ホントですね……まさかエルザさんほどの人がやられてしまうなんて……」

シクルの脳裏から男が消えた時、ジュビアのぽつりとした呟きが流れる……

その時……苛立っていたグレイの冷たい殺気がジュビアに襲う。

「やられてねえよ……エルザの事よく知らねえくせに勝手な事言ってるじゃねえ」

「ご……ごめんなさい……」

グレイの睨みにビクツと肩を揺らし、怯えが見えるジュビア。

「ちよつとちよつと!!グレイ!!落ち着いてよ!」

「ジュビアに当たっても何ともならないでしょーよ……」

ルーシィとシクルが止め、「わ、わりい……」と、グレイが小さく謝る。

「い、いえ……」

「でも……何だかんだ私達もエルザのこと……ちゃんとよく知らない……」

ぽつん……と、ルーシィの悲しい呟きが響く……

「あいつら……エルザの昔の仲間だって……言ってた……ねえ?私達だって……エルザのこ

と、全然わかってなかったよ……………」

ルーシイの辛そうな表情に乗り物酔いを忘れ、シクルがルーシイの頭とジユビアの頭に手を乗せ、撫でる。

「2人とも…そんな顔しないで？」

大丈夫……………これから知っていこう？

エルやハツピー…ルージュを助けて…

また残りの時間、リゾートで遊ぼう？それで、いっぱい楽しんで思い出作って……………
ゆつくり…今までのこと…知っていい？」

シクルのその言葉にルーシイとジユビアはコクと小さく頷き、うつすらと笑みを浮かべた。

ルーシイとジユビアが頷き、グレイも落ち着きを見せた頃……………
海のと真ん中に大きな大きな…塔が見えた……………

「…塔？」

「あれが…『楽園の塔』か」

「随分大きいですね…」

「見た目不気味だね……………（塔自体が凄い魔力を……………）」
「うぷ……………？」

シクルたちは、塔を目の前に見上げる。

「…行くぞ、エルザを助けに！」

「ハッピーとルージユもね！」

「はい！」

「…うぷ」

「エル……………」

シクルは別れる前のエルザを思い出す…

凄く……………怯えていた……………

目を瞑り、シクルはぎゅつと拳を握る…

“…あんたに誰かを守るなんて…出来ねえよ”

違う………守る……絶対………守ってみせる………

「エルを助けなきゃ………絶対、守るんだ……」

あの子に涙は似合わない………

もう、私の前で………

「涙は流させない………」

28話 突入開始

楽園の塔を見つけ、近場の岩肌を上陸し、塔入口の様子を伺うシクルたち。

「…結構見張りのやつが多いな…」

入口付近を巡回し、見張りをしている敵陣を見つめ、ため息混じりに告げるグレイにシクルたちも頷き、同意する。

「だね…流石に多いね」

「どうする…?」

ルーシイが首を傾げ、問いかけるとシクルが口を開きかける…そこに

「気にするこたアねエ!!突撃だっ!!」

ナツの大声が響く。

「却下だ」

即座にグレイの反対する声上がる。

「ンだどっ!」

「当たり前でしょーが!そんな作戦もなしに突撃なんかしたらまずいでしょー!」

グレイに反発するナツをルーシイが全力で引き止め、シクルもため息をつきながらナツを見つめ、言う。

「それに、突撃なんかして、エルやハッピー、ルージュの身に危険が及んだらどうするの？」

「うぐ……」

シクルの指摘にナツは口を閉ざし、気まずそうに顔を俯く。

「まあ、多分そろそろジュビアが……」

シクルがナツから視線をそらし海の底を見つめた時、ザバツ！という音と共に海面からジュビアが現れる。

「お、おかえりジュビア。どうだった？」

突然の登場にナツやルーシイは驚きを見せるがシクルは普通に対応し、何かを質問していた。

「はい……シクルさんの言う通りでした……」

水中に、塔の地下への抜け道を見つけました」

「マジでか!?!でかした!」

「よし!思った通り……ありがとう、ジュビア」

ジュビアはグレイとシクルに褒められると少し照れ臭そうに頬を赤らめてからルー

シイを振り返り、何故か敵対心剥き出しで自慢をしていた。

「それですね、水中を約10分ほど潜って進むのですが…大丈夫ですか？」

「10分くれえ、問題ねえよ大丈夫だ」

「だな」

ジュビアの問いかけにナツとグレイは大丈夫と頷く。

「ちよつと！普通無理に決まってんでしょ!？」

10分息を止められるなんてどんだけよ！と叫び、同意を求めシクルを振り返るも

……

「ごめんルーシイ…私も…」

めんどくさいからやらないけど…と気まずそうに苦笑を浮かべ告げた。

「シクルもっ!?!何、私が変なの!？」

ルーシイの叫びにそんなことないと思うけどなあと、小さく呟きをするシクルの耳に、「では…」と、ジュビアの声が届き、そちらを振り返り向く。

「皆さん、これを被ってください」

そう言い、ジュビアの手にあるのは人の頭を覆えるくらいの水球だった。

「…これは？」

シクルが問いかける。

「これは水の中に酸素を閉じ込め作ったものです。これを被れば、水中の中でも呼吸が出来ます」

ジュビアの説明におお！と全員が感心し、早速頭に装着。

被り、準備が出来るるとジュビアを先頭に地下の抜け道へと向かった。

約10分後、地下の抜け道へと問題なく侵入に成功。

地下の陸地に足をつき、一息つくシクルたち。

「どうやらここが地下入口みてえだな」

グレイは辺りを見回しながら注意を高める。

「ルーシイさんのだけ少し酸素を少なめにしたのに…よく息が持ちましたね？」

ジュビアのまさかのカミングアウトにルーシイは冷や汗が背を伝う。

「ちよつと!?!足りなくなったらどうするつもりだったのよ!?!」

「あつはは…(ハ、こわ…)」

「とにかく、ここが塔の地下ならとつと乗り込んじまおうぜ」

ジュビアとルーシイの会話を気にする事はなく、先へ進もうとするグレイ。

「ここどこかに…エルザやハッピー…ルージュが…」

ルーシイのその眩きにぐつと拳を握るシクル。

「エル…ルージュ、ハッピー…(待っててね…)」

全員がいぎ、突入…と言う、その時——

「誰だ貴様らは—!!」

塔の兵士達に見つかってしまった。

「やばっ!?!」

ルーシイの慌てる声が響く。

が、ナツやグレイは早速戦闘態勢へなり、構える。

「ここまで来たら…やるしかねえだろ!」

「はい!」

グレイに並び、ジュビアも構える。

「あーあ…これ全部やんの? (流石にこれはめんどくさい…)」

うじゃうじゃと出てくる兵士を冷めた目で見つめ、ため息をつくシクル。

「誰だ貴様らはだア？ケツ！上等くれた相手の名も知らねえのかよテメエら!!」
怒声と共に、地下の柱を炎の纏った拳で粉砕するナツ。

そして、その勢いのまま敵陣に突っ込み：

「妖精の尻尾だ、このやろお!!」

爆発音をきっかけに、戦闘が始まる。

ルーシイに攻撃を仕掛ける兵士：ルーシイの頭上目掛け、刀が振り下ろされるもルーシイはほんの少し慌てながらしっかりと刀を回避。

「っ！開け!!巨蟹宮の扉！キャンサー!!」

「久しぶりエビ!!」

両手にハサミを持った星霊が召喚され、そのハサミで兵士達を攻撃、斬り裂いていく……（その頭の髪を）

ジュビアにも攻撃を仕掛け、その体に鋭い槍を突き刺す兵士達……だが………
「なんだこの女!?!攻撃が効かねえぞ?!」

ジュビアの身体に傷はつかず……

「ジュビアの身体は水で出来ている……

ウォータースライサー
「くらいなさい！水流斬破!!」

水の刃で兵士達を倒す。

「アイスメイク ハシンマー 大槌兵[〃]！」

グレイは氷で作った大きなハンマーで敵を叩き、潰していく。

全員が好調な戦闘を見せる中、シクルもまた…動き出す。

「はあ…普段の私なら面倒くさがってみんなに任せるんだけど……」

シクルは十六夜刀を手にし、構え…鋭い目つきで相手を睨む。

「今私イラついてんのよ…道を塞がないでくれる？下っ端が………伍の太刀 鳴雷月」

シクルの薙ぎ払った刀から発せられる雷に敵陣はほとんど一掃、吹き飛ばされた。

シクルの攻撃や他のメンバーの攻撃甲斐あって、数分でその場は片付き、いざ先へ進もう…そう、動こうとした時だ…

頭上からハシゴが現れ、その先の岩でできた扉が開く。

「これは…来いってことか？」

ハシゴを見つめ怪訝そうにいうグレイ。

「みたいね…」

「行くぞ!!」

ナツの掛け声と共に、ハシゴを登り、扉の奥へと入っていくシクルたち。

「四角ウー……!!!何処だア!!」

全員が登り終えた瞬間声を荒らげるナツに慌ててルーシイがその口を塞ぐ。

「こんのばかつ!!」「んむつ!」「ここは敵陣なのよ!?そんな大声出したら見つかつちやうでしよ!?!」

「下であれだけ暴れたんだ…もう敵さんも気づいてんだろーよ」

「それに、今の扉とハシゴ…私たちを誘導するかのようでしたし…」

「多分挑発ね…舐めたことしてくれるわね」

会話をしながら慎重に足を進めるシクルたち。

ふと、ルーシイを見てグレイが違和感に気づく。

「そーいやルーシイ…お前いつの間に着替えたんだ?」

地下に来る前と服装が違うことに気づいた。

ルーシイはああ、これ?とグレイを振り返る。

「星霊界の服よ!キャンサーに持ってきてもらったの!濡れた服を着続けるのは気持ち

悪いし……」

ルーシイはそう言うのとあんた達よく着てられるわね……とツツコミを入れる。

「こうすりやすく乾く」

ルーシイの質問にグレイはナツへと服をかざし、その瞬間ナツの身体から出る炎で濡れた服を乾かし始めた。

「人間乾燥機っ!?!」

そんな手が!と声を上げながら納得するルーシイ。

そんな、シクルたちを映像魔水晶を通じて眺めている青髪の男……今回の黒幕、
「ジェラルル」と言う男が含み笑いを浮かべていた。

楽しい表情を浮かべるジェラルルの背後にはシクルに傷を負わせた男が立っている。

「いいのかい? そんなに呑気にしてて……あいつはお前のこと知ってるんだろ?」

男の指摘にああ……と笑いながら答え、魔水晶を見続けるジェラルル。

「問題ない……」

俺が情報を流さないかわりにあいつも俺のことは他言しない契約だからな……」

その見つめる先は……………

「なア？シクル……………」

敵を前に存分に暴れるシクルが映っていた。

「…さて、お前もそろそろ行くんだな…歌姫とやり合えるのは貴様だけだろう…神速のラディティ」

ジェラルルの指摘にやる気のない声で返事をしながら、部屋を出ていく男、ラディティ。

「……………最後に、警告だ…ラディティ」

ジェラルルのその言葉に足を止めるラディティ。

「……………シクルを、甘く見るな…」

「…どういう意味だい？」

ジェラルルを振り返り問いかけるラディティ。

「そのままの意味だ…奴の能力は未知数……………」

油断していれば…貴様もやられるぞ？」

ジェラルルの警告にラディティはふん…と鼻で笑う。

「冗談………あいつは1度おいちゃんに負けてる……あんなすぐに隙を見せるような女………」

おいちゃんの敵じゃねえや」

じゃあな、と出ていくラディティ……その去った後を横目で眺め、ニヤリと笑みを浮かべるジェラール……

「………警告はしたからな……」

場面をシクルたちに戻し……現在、シクルたちは再び塔の兵士達に周りを囲まれていた。

「だあ!!めんどくせえ!!どんだけ出てくんだよウザってえなあ!!」

「るっせえよ、クソ炎!!口じゃなくて手を動かせ!」

「ちよつと多すぎなんだけど!?!」

「流石にこの人数は堪えますね……」

「あーもうっ!早くエルたちを見つけないきゃなのに……!!(さつき感じた魔力……間違いない、あいつが……)………」

シクルたちが順調に兵士達を薙ぎ払っていると……ほんの少し疲労で気を抜いたルーシイの背後から1人の兵士が刀を振り上げる……

「あ……！」

「つールーシイっ!!」

ルーシイが斬られる……そう思った時……

ドオツ!!

ルーシイを襲った奴が飛ばされる。

兵士を蹴り飛ばした者……それは、シクルたちの探す鎧の女……

「「エルザっ!!!」」

「エル……！」

「っ?!お前達!何故ここに……」

シクルたちがいることに驚くエルザ。

「何故もクソもねえ!!舐められたまま引つ込んでたら妖精の尻尾の名折れだろオが!!!」

あんの四角だけは許しておけねエ!!!」

うおー!!と叫び怒声を上げるナツ。

そんな時、エルザの様子がおかしいことに気づくシクル。

「…エル？（なにを…考えてるの？）」

エルザはジュビアがいることに気づき、見つめ、ジュビアはエルザの視線に気まづく
なり俯く…。

「あ、あの…ジュビア…その…」

ジュビアが何かを話そうとした時……

エルザの目つきが鋭くなり…

「帰れ…」

と、告げた。

「「っ!？」」

「…エル？」

エルザからの言葉にナツたちは目を見開き、シクルは不思議に首を傾げる。

「ここは…おまえたちの来る場所ではない」

「で、でもね、エルザ……」

エルザに困惑した表情で話しかけるルーシイ。そんな、ルーシイの言葉を遮り、ナツ
の声が響く。

「ハッピーまで捕まってるんだぞ?!このまま戻る訳にはいかねーんだよ」
「ついでにルージュもよ?」

「ハッピーとルージュ…ミリアーナか…」

エルザの呟きを聞き取ったナツがその肩を掴み問いただす。

「そいつはどこだ!!!」

ナツの迫力に少し引きながらも、分からないと答えるエルザ。

「そうか…分かった!!」

だがナツはあまり気にした様子はなく、頷く。

「何が分かったのよ!」

ルーシイのツツコミにナツは真剣な表情を見せ…

「ハッピーが俺を待つてるってことがだ」

と、告げた。

そして、ナツはまるで突風のように走り、「ハッピーイイイイイツ!!!」と雄叫びをあげ消えていった…。

「ちよ…ナツ…!?!」

シクルの叫び声に止まることもなく…

「あのバカまた勝手に!!」

「追いましようー！」

グレイとルーシイもナツを追おうとするが…

「だめだ…帰れ」

と、エルザの静かな声が響く。

「エル……………！」

「ミリアーナは無類の愛猫家だ…ハッピーやルージュに危害を加えるとは思えん……………」

ナツとハッピー、ルージュは私が責任を持って連れ帰る……………お前たちは、すぐにこ

こを離れろ」

「そんなの…出来るわけない!!エルザも一緒じゃなきやイヤよ!!」

ルーシイがほんのりと涙を浮かべながら叫ぶ。そんなルーシイを横目に見ながら、グ

レイもエルザに告げる。

「もう十分巻き込まれてんだよ…今のナツだって…見ただろ?」

「エルザ……………この塔は何?ジエラールって誰なの?」

ルーシイの問いにエルザは答えず、黙ったままである。

「エル……………あなた……………」

シクルが何かを話そうと口を開くも、それをグレイの言葉が遮る…

「らしくねーな、エルザさんよオ……………?」

いつもみてーに四の五の言わずついて来いって言えばいーじゃんか…

誰が敵だろうと俺たちは力を貸す…エルザにだって怖いと思う時があってもいいじゃねえか？」

グレイの言葉を聞くと…、エルザは目に涙を浮かべながら振り返り……………

「この戦い……………勝とうが負けようが、私は表の世界から姿を消す事になる……………」
涙を拭いながらエルザは話す。

「え!?!」

「ど、どういうことだ!?!?」

「エル…それは…」

シクルたちの驚きの声を聞きながら、エルザは目を瞑り……………

「これは抗う事のできない未来…」

だから私が存在しているうちに全てを話しておこう」

覚悟を胸に、語り出す……………

エルザと楽園の塔……………その繋がりと、秘密…

エルザの過去を……………

今、
明かされる

29話 語られるエルザの過去

エルザは目を瞑り、語り始めた――。

「ここ……この塔の名は、楽園の塔……別名、〃Rシステム〃と呼ばれている……今から10年程前だ……黒魔術を信仰する魔法教団が、死者を蘇らす魔法〃の塔を建設しようとしていた……」

「死者を……蘇らせる!?!」

ルーシイの驚愕する声に頷き、エルザは話を進める。

「この塔は……政府も魔法評議会も非公認の建設だった為に……各地より、攫ってきた人々を奴隷とし、この塔の建設にあたらせたのだ……」

そして、幼かった私も……かつて、ここで働かされた奴隷の1人だった……」

「え……」

「何っ!?!」

「エルザ……さん、もっ?」

エルザから語られる話にルーシィやグレイ、ジュビアは目を見張り、声上がる。

その隣でシクルは静かに目を瞑り…エルザの話聞いていた。

「…(エル……)」

「ジェラールと私はその時に出会った…奴隷だった私を、ジェラールは助けてくれた…」
そう話すエルザの表情は悲しげに影を指している…

その後語られたのは、脱走を図ったエルザたちの動向が教団の奴らにバレ、エルザはその首謀者として上げられ、長時間懲罰房へ入れられ、拷問を受けたこと…

それを助けに来てくれたのがジェラールであり、その際にエルザと入れ替わりで拷問を受けることになってしまったジェラールのこと…

そして、捕まったジェラールを助ける為、エルザを筆頭に奴隷として過ごしていた全員が反乱を起こし、多くの犠牲を払うもエルザはジェラールの元へと辿り着き、一緒に逃げられる…そう、思った幼き頃のエルザだったが……

「ジェラールは…その日を境に変わってしまった……まるで別人のように…もしも、人を悪と呼べるのなら…私は、ジェラールをそう呼ぶだろうな……」

反乱に成功し、遂にジェラルルの元に辿り着いたエルザだったが……救出に成功した時、すでにジェラルルは以前のような面影はなく……

狂気な笑みでエルザに告げる……。

“もう逃げることはないんだ……エルザ……”

本当の自由は……ここにある”

そう告げたジェラルルの目は狂い、ゼレフの亡霊に取り憑かれてしまっていた。

ジェラルルは「“ゼレフ”を蘇らせる」と言い、自分たちを支配していた魔法教団を壊滅させたのだ。

当然エルザはジェラルルに反発するも、敵うことはなく……その身を、塔の外へと放り出されてしまった。

もし楽園の塔の事が政府や魔法評議会にバレたり、エルザ自身がこの塔に近づけば……
……
奴隷仲間のショウたちを殺すと脅され……

“それが……お前の自由だ！”

仲間の命を背負って生きろ……………

エルザアアアアア!!!”

涙を流し、塔を離れた…

その後、エルザは妖精の尻尾に加入し、今の生活をし始め、8年の月日が経ち……………
今日、偶然にもこの塔へ…再び戻ってきたエルザは覚悟と決意を決め…告げる。

「私は…シエラールと戦う……………そして、この手で……………」

拳を握るエルザの左眼からは…涙が零れていた。

「エルザっ……………」

エルザの涙につられ、ルーシイの瞳にも涙が溜まる。

そこに……………

「ちよ、ちよつと待て……………」

と、グレイの震える声が聞こえる。

「エルザ……………今の話の中に出てきた…“ゼレフ”って…まさか」

「…ああ……………魔法界の歴史上、最凶最悪と呼ばれた伝説の黒魔導士…」

グレイの言葉に頷き告げたエルザの口から出たその単語に、ルーシイも目を見開く。

「ちよ、まさかそれって…確か、呪歌から出てきた怪物も…『ゼレフ書の悪魔』って…
言つてたわよね？」

その言葉に頷き…エルザは更に告げる。

「そうだ…そして恐らく…あのデリオラも…『ゼレフ書の悪魔』の1体だろ
う」

「っ!!!」

『デリオラ』の一言に険しい表情を浮かべるグレイ。

「では、そのジェラルドという男は…そのゼレフを復活させようとしているということ
ですか？」

ジュビアの問いかけに頷くエルザ。

「ああ…動機までは分からんがな…シヨウ…かつての仲間の話では、ゼレフ復活の
暁には、『楽園』にて、支配者になれるとか………」

エルザから語られたゼレフの話……それを聞き、シクルはほんの少し瞼を上げ、目を細める。

「ゼレフ……（ゼレフを復活……蘇らせる……不可能だわ……だって彼は……）」

まだこの世を生き、さ迷い続けている……

そして……

「亡霊……（確かに彼なら誰かを操ることも出来ることは出来るだろうけど……）」

もし誰かを操っているのなら……その独特の魔力が感知されてもおかしくない

シクルはため息をつき、俯くエルザに視線を向ける。

「そういえば、あのかつての仲間たちの事って……あたし、どうしても腑に落ちないんだけど……」

ルーシイが怪訝そうな表情を浮かべる

「あいつ等はエルザを裏切り者って言ってたけど……今話を聞く限り、裏切ったのはジェラールの方じゃないの？」

「……多分、エルが楽園の塔を追い出された後……ジェラールに何かを吹き込まれたつてところかしらね？……憶測だけど」

「そんな……」

シクルのその言葉にルーシイは辛そうな表情を浮かべる。

「……しかしそれでも、私は8年もの間……彼等を放置したんだ……裏切った事にかわりはない」

「でも、それはジエラールに仲間の命を脅されてたから近づけなかったんじゃない!! それなのにあいっら……!」

ルーシイの叫びが木霊する。

「もういいんだ、ルーシイ……私がジエラールを倒せば全てが終わる」

エルザは悲しげに微笑みを浮かべながらそう言う。

だがこの時……エルザの言葉を聞き、グレイとシクルは別のことに考えが及んでいた。

「(エルザ……本当にそう思っているのか……!?)」

「(エル……あなた……何をするつもりなのか……?)」

“この戦い……勝とうが負けようが、私は表の世界から姿を消す事になる……”

グレイとシクルはこの言葉が脳裏から離れなかった……。

2人がじつと、エルザを見つめていると……

「ね、姉さん……それ、なんだよ……どういふことだよ?」

暗闇の奥から困惑した様子のシヨウが現れた。

「っ！シヨウ……」

エルザの顔を見た時、シヨウはカッととなり、声を荒らげ始める。

「そ、そんな与太話で仲間の同情を引くつもりかっ!? ふざけるな……真実は全然違う!!」

そう叫び、シヨウの口から告げられたのはシヨウたちを置いて、エルザが1人楽園の塔から逃げ去ったこと……逃亡用の舟に爆弾を仕掛け、シヨウたちが逃げられないようにして……

「ジェラールは俺たちに言ったんだ!!」

これが……『魔法』を正しい形で習得できなかった者の末路だ……と！姉さんは魔法の力に酔ってしまい、俺たちのような過去を全て捨て去ろうとしてるんだと!!

そう言ったんだ!!」

シヨウの言葉にピクツと反応を見せる一同。

「ジェラールが……言った……だア?」

「あなたの知るエルザは……本当にそんなことをする人だったのかな……? エルザを信じなかったの?」

グレイとルーシイの言葉にシヨウは悔しげに、顔を歪め叫ぶ。

「お前らに俺達の何がわかるってんだ!?俺たちの事何も知らねえくせに!!」
シヨウのその言葉を聞いた時：ガッ!とシクルがその胸倉を掴みあげる。

「ぐ……」

「……………あんたこそ…エルがこの8年間…」

どんな思いでいたのか……わかってんの?どんなに…どんなに、あなた達を思っていたか…分かる!」

シクルのその言葉を聞き、言葉に詰まるシヨウだったが、再びエルザたちに向かって叫ぶ。

「俺には…俺には…ジエラルルの言葉だけが救いだっただから…8年もかけてこの塔を完成させた!!ジエラルルの為に!!」

その全てがウソだって…?正しいのは姉さんで……………間違っているのはジエラルルだと言うのか!」

シヨウがそう叫び、エルザが顔を俯いた…その時……………

「そうだ…」

静かに響いた第三者の声…

それはカジノでグレイとジュピアが相手をした、シモンという男だった。

「シ、シモン!？」

「な……てめえ……!!」

シモンに気づいたグレイがシモンへと突っかかろうとするも、ジュビアにより止められる。

「待って下さい!!この方はあの時……グレイ様が氷の人形と知ってて攻撃したんです!

暗闇の術者が周りを見えない訳ありません」

「さすがは噂に名高いファントムのエレメント4だな」

シモンの言葉に全員がシモンを見つめる。

「俺は……誰も殺す気はなかった

シヨウたちの目を欺くため……気絶させようと思ったが、氷ならもつとハデに死体を演出できると思ったんだ」

悪かったなど、苦笑を浮かべグレイに告げるシモン。

そんなシモンの言葉にシヨウは混乱が高まる。

「お……俺たちの目を欺く為だ?!」

「ああ……お前も、ウォーリーやミリアーナも……皆、ジェラルルに騙されているんだ……

機が熟すまで俺も騙されているフリをしていたんだ」

「シモン……お前……!」

シモンのその言葉にエルザは目を見開く。

シモンはエルザと向き合うと……

「俺は初めからエルザを信じていた……この8年間、ずっとな」

赤らめた頬を搔き、微笑みながら言う。

そんなシモンの姿が、エルザの目には8年前のような優しい笑顔に見え、エルザはそんなシモンの姿に、歡喜の笑みを浮かべた。

「エルザ……会えて嬉しいよ、心から……」

「シモン……私もだ」

そう呟き、2人は抱き合い共に再会を喜び合う。

そんな光景を見て次第にシヨウの目に涙が溜まる。

「なんで……なんで、みんな……そこまで姉さんを信じられるんだよ……?」

何で俺は……姉さんを信じられなかったんだ」

そして、シヨウはその場に泣き崩れた。

「くそおお!!うああああああ!!」

何が真実なんだ!?俺は……俺は何を信じればいいんだ!」

そう泣き叫ぶシヨウを見て、そつとエルザが近づき、しゃがみシヨウと目線を合わせる。

「今すぐに全てを受け入れるのは難しいだろう…だが、これだけは言わせてくれないか？」

シヨウ……………

私はこの8年間……………お前たちの事を忘れた事は一度もない」

そこで一度言葉を途切らせるとシヨウを抱きしめるエルザ。

「何も…できなかつた……………私は…とても、弱くて……………すまなかつた……………ほんとうに」

「……………だが今ならできる……………そうだろ？」

後ろから聞こえたシモンの言葉に振り向き、エルザは静かに頷く。

「ずつと……………この時を待っていたんだ……………」

強大な魔導士がここに集う……………この時を」

「…強大な魔導士？」

シモンの言葉にルーシィは首を傾げる。

「ジェラールと…戦うんだ」

俺たちの……力を合わせて」

そういったシモンの声には強い決意が込められており、瞳にも……強い覚悟が宿っていた。

その後、シモンとシヨウも一緒にエルザたちはナツを探し、塔の中を走っていた。

「くっそー！ウオーリーもミリアーナも……通信を遮断してやがる……これじゃどこにいるのかわからねえ！」

「落ち着いて、シモン……とにかく今は冷静に」

多分ナツは今そのミリアーナって子のところに行っている可能性が高いわ」

焦りの見えるシモンの隣をシクルが走りながら声をかける。

シクルの言葉に、「ああ……すまない」と少し落ち着いたのか、微笑みを浮かべ言うシモンに微笑みで返すシクル。

「シヨウ……大丈夫か？」

ふと、後ろからエルザの声が聞こえ、全員が振り返ると少し離れたところを顔を俯き、走るシヨウがいた。

「うん……姉さんがいてくれるから……」

弱々しく声をかけてきたエルザに笑みを浮かべるシヨウにエルザはほっと笑みを浮

かべるも…その様子を見たシクルはほんの少し険しい表情を浮かべる。

(まだ少し…魔力の流れに乱れがある………やっぱり心のどこかでまだ動揺と混乱が収まりきってないんだ………)

注意しないと………

シクルは僅かにシヨウウへの警戒を強める。

「…なあアイツ………本当に信用していいのか？ 確かに…俺たちを殺そうとしなかったのは認めるが、あの時ナツとルーシーは死んでもおかしくねえ状況だったんだぞ？」

シモンを疑惑の目で見つめていたグレイは隣にいるジュビアに話しかける。それに、ジュビアが答える前に前を走るシモンが振り返る。

「言い訳をするつもりはない…だが、あの程度で死んでしまうような魔導士ならば、到底ジェラールとは戦えないと思った」

「うっ…聞いてやがったのか」

「それには俺には確信があった………」

ナツは死なない」

グレイの気まずそうな顔を見ながら少し笑みを浮かべ告げるシモン。

「お前たちはあいつの本当の力に気付いてない」

「…本当の力？」

シモンの言葉にルーシイは首を傾げ、シモンは頷く。

「そうだ………ナツに真のドラゴンの力が宿る時…邪悪は滅びゆく…」
シモンの言葉にシクルは目を細める。

真の力……… “ドラゴン・フォース” の事か…

心当たりはあるシクルだが…

…本来あの力は………

ある条件をクリアして得られる力………

到底今のままのナツでは………

どうしたものか…と、シクルが考えている時だ………

突然、辺りの壁や天上に不気味な口が幾つも浮き上がった。

「ひい!?!何気持ち悪い!!」

ルーシイは思わず叫び、シクルに抱きつく。

「これは………」

全員が驚き、足を止めていると……

『ようこそみなさん……楽園の塔へ』

たくさんの口から響く、その声……それは、この塔のボス……“ジエラール”の声だった。

「し、しゃべりましたよ!?!」

「ひいー!!尚気持ち悪い!!」

「この声は……!!」

「ああ……ジエラールだ……」

塔全体に聞こえるように話している

シクルたちは気味の悪さを感じるが、ジエラールのその声に耳を傾ける。

『俺はジエラール……この塔の支配者だ。』

互いの駒はそろった……そろそろ始めようじゃないか……

『楽園ゲームを』

愉快そうに告げるジエラルルの声だけが…塔全体に響き渡った……。

30話 ラディティの刀

『俺はジェラール……この塔の支配者だ』

互いの駒はそろった……そろそろ始めようじゃないか……楽園ゲームを』
そう告げたジェラールはクククと愉快そうに笑うと……ゲームの内容を語り始めた。

『ルールは簡単……俺はエルザを生贄としゼレフを復活の儀を行いたい……』

すなわち楽園への扉が開けば俺の勝ち……』

もしお前たちが阻止できればそちらの勝ち』

ジェラルルの言うゲームという者に一同は険しい表情を浮かべる。

「ふざけやがって」

「ジェラール……」

『ただ……それだけでは面白くないのでな……』

「こちらは4人の戦士を配置する』

「4人の戦士……? (俺たち以外にも戦える奴がいたのか……?)」

シモンは「4人の戦士」という単語に眉を寄せ、疑問に思うもすぐにジェラルルの言

葉が続き、そちらに集中する。

『そこを突破できなければ俺には辿り着けん……つまりは4対9のバトルロワイヤル』

「バトルロワイヤル……ですって?」

『最後に一つ特別ルールの説明をしておこう

評議院が、サテライトスクエア衛星魔法陣でここを攻撃してくる可能性がある……

全てを消滅させる究極の破壊魔法……

“エーテリオン”だ』

「エーテリオン!?!」

ジェラルルの言葉にシクル達は驚愕し、目を見開く。

『残り時間は不明……しかし、エーテリオンが落ちる時……それは全員の死……

勝者なき“ゲームオーバー”を意味する』

そして、ジェラルルは楽しそうに笑い声を上げながら告げる。

『さあ……楽しもう』

それを最後に辺り一面の口が消えた。

「そ、そんな……何考えてんのよジェラールって奴……自分まで死ぬかもしれない中でゲームなんて……」

「エーテリオンだど!? 評議院が? あ、ありえん!! だって……」

ジェラールの言葉に驚くエルザを心配気に見つめるシクル。

その視界に……一つの動く影を捉える。

「つ!! エルつ!!」

シクルの声にエルザは反応を示すが少し遅れ、エルザはシヨウがの掛けた魔法により、カードの中へと閉じ込めてしまった。

「エルザ!!」

「シヨウ!? お前何を……!」

シヨウは大切そうにエルザの入ったカードを両手で持つと……

「姉さんは誰にも指一本触れさせない……」

ジェラールはこの俺が倒す!!」

そう言い、シヨウは塔の最上階目指し、走り去ってしまう。エルザを連れ……

「よせ! シヨウ……一人じゃ無理だ!!」

そして、シモンも走り去っていくシヨウを追いかけて行ってしまふ。

「だー！どいつもコイツも!!」

「3人は私が追う！グレイたちはナツを見つけると他の奴らをお願いっ!!」

グレイたちにそう告げ、シクルがシヨウやシモンたちのあとを追った。

「な！おい、シクル！」

「ちよ、シクルー!?!」

グレイとルーシイが声を上げるもすでにシクルの姿はなく……

「とにかく、私達はナツさんの搜索と他の敵を何とかしましょう！」

ジュビアの掛け声に2人は頷き、行動を始める。

シヨウとシモンを追っているシクルは、長い廊下を走っていた。

「まったく……（どこまで行っただって言うのよ?!）」

注意していたはずなのに……阻止できなかつた……情けない……!!!

カードの中に吸い込まれるエルザを見た時、悔しさが湧き上がった。

「っ……!」

唇を噛みすぎ、端の方がプチッと切れ血が流れる。

その時——

「ぐあああああつー！」

「つ!!この声……」

道の先から響いた叫び声。それはシヨウの声だった。

シクルは走る足を早める。

そして、先にあつた曲がり角を曲がった瞬間、目に飛び込んできたのは……：

倒れるシヨウと地面に落ちているエルザの入ったカード……そして、そのカードを真つ二つに切り裂こうとしている桜髪の女の姿……

「つーーー!!!!エルーーーー!!!!」

まずい、と感じ走り出すシクルだが距離的に確実に間に合わない……そう感じたシクルはすぐに身体全身を光で纏い……

「光竜の剣角ツ!!!」

光の速さでエルザたちの元へ突つ込む。

そしてその勢いのまま桜髪の女の懐に体当たりをする。

「ぐっ!?!何……!」

《な…シクルっ!?》

桜髪の女はその勢いを受け止めきれず、後方へと吹っ飛ぶ。

「エルっ!!」

エルザの入ったカードへとすぐに手をかざすと魔力を込め……

「ソングマジック 歌魔法 デイスベル 解除」

歌魔法でカードの結界を解き、エルザを解放する。

「シクルっ！助かったっ!!」

「どー致しましてっ！」

笑顔でお礼を言うエルザに笑顔で返すシクル。そして、シクルがエルザにここは任せ……と言葉を発しようとした時だ……

「っ!!十六夜刀!!」

キイイイインツ!!!

突然背後から感じた殺気に急いで刀を換装、交えるとかかねりゾートで戦った刀の男がいた。

「やあつと見つけたア……」

「またあなたなの……!」

シクルはチツ！と舌打ちをし、力任せに押しきり、チャキ…と刀を構える。

シクルの背中には背中合わせで立つようにエルザも並び……………

「ごめんエル…先行つてもらおうとしたんだけど…あの女の方任せていい?」

「無論だ…シクルも…そっちは任せたぞ?」

2人はお互いにそう言うのとニツと笑い合い、そして背をつけ互いの敵と対峙する。

その姿を痛みに耐えながら見つめていたシヨウは……………

「つ…(なんだ…この2人……………まるで疑いのない…信頼しきつている雰囲気か…)」

完全に背を任せ、目の前の敵に集中している2人……………まるで互いが負けることを疑っていないかのような…そんな姿に……………

……………かつこいい

何故そう思ったのかはシヨウにも分からない。

エルザが桜髪の女、髑髏会の「斑鳩」と戦闘を開始した時、シクルと男にも動きが見られた。

「あの時は中途半端に終わっちゃったからねえい…今度はおいちゃんと最後まで殺りあおうや?」

「私はめんどくさいし…遠慮したいんだけど?」

シクルは丁重にお断りと、呟く。
だが、男はニヤツと笑うと……………

「お断りなんてそんな…堅工事いわねえでくれよい…ああ、そう言えばまだおいちゃん自己紹介まだだったねい？」

「知らなくて結構…興味無いわ」

「そう言わずに…おいちゃんは神速のラディティだよ！よろしくね、歌姫殿……………んじゃ…」

始めるか」

ラディティはそう呟いた瞬間、シクルに攻撃を仕掛ける。

「っ!!」

シクルも冷静にその動きを見て、一撃一撃正確に流していく。

「神速 〃迅〃」

「六ノ太刀 十字斬！」

ギィィィン！

「へえ……あの時よりはやるねえ?」

刀を交えながら冷静にシクルを観察する。

シクルもまた、ラディティの動きを冷静に対処し、受け流す。

「甘く見ないで……これでも妖精の尻尾の1人よ? 2度も同じ相手に……負ける訳ないってのっ!!」

その言葉とともにシクルは刀に魔力を集め、

「弐ノ太刀 三日月!!」

ラディティに刀を振り切る。

「うおっ!?!」

刀から放たれる光の刃に反応が遅れ、ほんの少し吹っ飛ぶラディティ。

ドガア!と音を立て、壁に衝突。

「てえー!いやあ……今のはちよつとおいちゃんもびつくりしたよお」

服についた埃を払うラディティ。

ゆつくりと歩き、ラディティに近寄るシクル……………

「ククク……まあ、もうおいちゃんに攻撃は当たらない……………」

ラディティがシクルに視線をやると

カッターと目の前が真っ白に光る。

「っー!!」

「七ノ太刀 月光斬り!!!」

目が眩んだ瞬間、目の前にはシクルがおり、その刀がラディティを捉える。

ザンツーー

「っーへえ…おいちゃんに2度も遅れを取らせるなんてねえ…」

おいちゃん、怒っちゃうよ?

ラディティはそう呟くと刀に無数の風の刃を纏わせる。

「劍技 鎌鼬!!!」

ラディティが刀を振り切った瞬間、無数の風の刃がシクル目掛け飛ぶ。

だが、シクルは……すつと目を細めると、冷静に刀を構え、次の瞬間…全ての風の刃を斬り裂いた。

「……………ほお?」

ラディティは興味深げに目を細め、口笛を吹く。

「言っただはずよ? 妖精の尻尾の魔導士として…2度も同じ相手に負ける訳ないってね」

それに……………

「背中を任せられる仲間が後ろにいるんだ…」

私が負けることを疑わず…勝つことだけを信じてくれている…仲間がいるんだ

……………

その思いを感じている私が、負ける訳ないでしょ?」

「……………仲間」

「仲間」その言葉を聞いた時、ラディティがピクツと反応を見せた…。

「……………ククク…」

「っ……………」

突然笑い始めるラディティを見つめ…怪訝そうな表情を見せるシクル。

「仲間かあ……………なあ……………?あんだ…そんなもん信じてんのかア?」

「……………何?」

クククと笑い続けるラディティ。その雰囲気は次第に黒く…モヤがかかるように歪んでいくようにシクルの目には見えた。

「っ……………(何この魔力?…これは……………)」

「あーああ……ほんとにはやるつもり無かったんだけどなあ……ねえ？おいちゃん……ちよつと癩に障つちやつたからさあ……」

そう言い、ラディティは右眼の眼帯に手を伸ばした……

「丁度今のままじゃ決着もつけれないと思つてたしい……？見せてあげるよ……おいちゃん……本気を………ねい？」

そう告げ、眼帯を外した……その瞬間……

ズツドオオオオオオオオオオン！！！！

魔力の風が吹き荒れる。

「つっ!?わっ!!」

その強い風にシクルは態勢を崩す。

そして……

「神風 〃乱〃」

「っ……!!!」

ヒュ……ドオオオオオオオオオオン！！！！

シクルの体が魔力の風圧により吹き飛ばす。

「シクルっ！！！！」

シクルのいる方から聞こえた音に驚き、咄嗟にシクルの元へ行こうとするエルザ……だが

「あんさんの相手は私どす！」

キイイーン!!

「ぐっ!!」

斑鳩に道を塞がれ、舌打ちをしながらエルザは斑鳩の相手をする。

一方、魔力の風圧により、吹き飛ばされたシクルは幾つもの壁を突き破り、ある部屋に入ったところで漸く止まった。

「っーっーっーいったああああ……あーもう……何今の………（魔力の風圧だけでこれって
どんだけよ）」

ガラガラ、と瓦礫から這い上がり体についた汚れを落としたため息をつくシクル。

「あんさんとやりあえつて？はあ……じょーだんやめてよ………」

めんどくさい……と、眩き再び大きなため息をつくシクル。

ふと……背後に何かを感じる。

「……んっ？」

背後に感じたものを……シクルは不思議に思い、振り返る……そこには……
「……………魔水晶？」

巨大な魔水晶がデカデカと壁に融合するように目の前にあった。
シクルは魔水晶に触れる。

「これ……（こんな魔力の塊……何でここに？）」

ふと、シクルはジェラルルの言った言葉の意味を考える。

エーテリオンの発射……そんな事したらこの

長年かけて作った筈の塔を無駄にするような

ものなのに……どうして？

「あいつにとつて……………エーテリオンの投下は……………計画の内……………？」

そう、シクルの考えが至った時だった……

「へえーえ？意外と頭の回転早いんだねえ……」

「……やっぱ来たか」

シクルの背後には、シクルの開けた大穴から入ってくるラディティの姿が。

ゆっくりと振り返るシクルの視界に入るその姿は黒いオーラを放ち、狂気じみてい

る。

「で？それはなに……」

「ククク……言うと思うかい？」

面白可笑しそうに笑うラディティを見つめ、ふうと一息つくど首を小さく横に振りふつと笑みを見せるシクル。

「思わないわね……まあ、おおよその予測はついてるわ……（恐らく私のこのピアスと同じ……魔力の制御装備か何かなんでしようね……）」

軽口を叩き合う両者……だが、その間に流れる空気は重く、とても緊張感が溢れ、力無き魔導士がこの場にいれば即、失神するレベルの威圧が漂っていた。

互いに睨み合う……相手の隙が生まれる瞬間を伺う両者……

不意に……ラディティが笑い声を出し始める……

「……………う？なに……（今笑いの要素あった……？）」

「いやいや……わりいわりい……大体の奴はこの魔力で怖気付いて腰抜かしちまうからよお……」

やっぱアンタおもしれえなあ……これを真正面から受けて戦意消失しない奴なん

「ざ初めてだぜい？」

だから……………

「おいちゃんを楽しませろよ？歌姫」

ヒュッ……

「っ!!!（刀身が伸びてっ!）」

ラディティが刀を振った瞬間、刀身が黒い魔力を纏い、刃となりシクルに神速の速さで伸びる。

シクルは咄嗟に刀で刃を受け止めるも…

ヒュンツ…

「え……………」

ザンツ!!

ラディティの刀を押し戻し、その勢いで空中に飛翔し、距離を離すシクル。そしてその顔には……………一筋の赤い刀傷が出来ていた…

「……………今……………刀が…曲がった？」

シクルがラディティの刀を受け止めた時、その刃はまるで飴細工のようにしなやかに曲がり、弧を描き一瞬反応の遅れたシクルの頬を傷つけた。

シクルの血がついた刃を舐め取りながら、ラディティは語る。

「この刀は特別でなア…おいちゃんの魔力で伸びたり縮んだり…曲がったり出来るんだあい…」

しかも、魔力を纏えていれば何でもできるんだア…」

こんな風に……………

ニヤリと笑みを浮かべるラディティ…その瞬間……………

グサツ!!

「つーー!!!なっ…!?!」

シクルの右足を床下から伸びる刃が貫いた。

刀を引き抜かれ、激痛にガクツと膝をつくシクル。

「なん…で…今…（あいつの持っている刀は何も動かされていない…なのに、なんで……………）」

ラディティの持つ刀は確かにその刀身が伸びることはなく、シクルを貫いたであろう時の血も付着していない：

疑問に揺れるシクル：そんなシクルの視界にラディティの背が映り、ソレを見つめる。

「ま……さか………」

シクルの見つめる先にはラディティが装備するもう一对の刀——
さつき……あいつはなんて言った………？

“魔力を纏えていれば何でもできる”

「魔力……纏う……まさか、その刀で………？」

「ククク……ククツ………クハハハハッ！」

最短記録だよ、歌姫………これに気づくなんてなあ……でも、気づいたところで事態は解決しない……さあ歌姫……おいちやんの刀の贄となれ……

そして、その真つ赤な血をもつともつと見させろやあ!!!」

その大声と共に、猛攻撃が、シクルへと繰り出される。

伸びてくる刀を避け、対応するもラディティの魔力により、変幻自在に曲がり、それ

は確実にシクルを狙ってくる。

避けきれないものは刀で弾き、軌道修正で対抗するが…

「ぐっ！くっ…!!」

ギンツ！キンツ！ザシユ…ブシユツ！

軌道修正した刃が再びシクル目掛け曲がる…

そんな一方的な攻防戦が暫く続く……………。

「っー…（このっ…軌道が出鱈目すぎて予測ができないっ!!）」

どうすれば…そう、悩み、一瞬もう片方の刀を忘れてしまうシクル……………

ガツ！

「っ!!」

小さな隙を見せたシクルは対応しきれず…

ズシユツ！

腕を斬り付けられた…。

「っ……………こんのっ…やってくれるじゃん？」

シクルは血の滴る腕を抑え、苦々しく、笑みを浮かべ冷や汗を背に伝わせながらラ
ディティを見つめた……………

そして…はあ…と、ため息をついたシクルは十六夜刀をしまつてしまふ…
それを不審に思うラディティ。

「ん？なんだい…降参か？なら早くおいちやんに殺され……………「降参？…誰が？」……………な
ん？」

ラディティの言葉を遮り、声を発したシクル…

その顔は伏せられ、伺えない……………

だが、ラディティは感じていた……………

「…（なんだ？この異様な感じは……………なにか…違う？）」

ラディティはシクルの変化…魔力の質の変化を感じ取った……………

「……………換装　　// 龍鱗刀」

シクルが換装した刀……それは、十六夜刀とは違い………
柄の部分に銀色に輝く装飾が付けられており、刀身はどこことなく……何かの鱗に、ラ
ディティは見えた……

「……………これを持った時……私は、負けない……

ラディティ………覚悟しなさい？」

そう告げ、睨むシクルの髪が一瞬金から銀へと変わる……

それを見たラディティは………ニヤア……と、笑を浮かべると………

「おもしれえ……やろうじゃん………命の……ゲームをなあ!!!」

シクルとラディティ……ラストバトルが今……始まる………。

31話 エーテリオン投下

十六夜刀をしまい、第二の刀、〃龍鱗刀〃を換装したシクル。

風に揺らめくその髪が時折、銀色に変化するのをラディティは面白そうに笑みを浮かべ、眺めている。

「刀を変えたところで…おいちゃんの刀には勝てねえよ!」

そう叫び、シクル目掛け、刀身を伸ばすラディティ。

それは軌道変わらず、シクルの喉元目掛け伸びる…だが、シクルは目を瞑っている。そして…ふつとゆっくりと目を開き……

「〃龍鱗 龍牙〃」

静かに振り上げたシクルの刀は…ラディティの刀身を砕き割った。

「…なんっ…ちっ!」

砕かれた刀の破片を見つめ、目を見開き、舌打ちをすると背にある刀身を操る。

そして…

ニツ……

シクルの背後から心の臓を狙い、床から突き出る刀…

「『龍鱗 龍風迅』」

背後に向け、刀を振ると刀身から風の刃が飛び、再びラデイティの刀を叩き折った。

「なんだそれ…何なんだその力は!?!」

二対の刀を壊されたラデイティは憤怒する。

「これは滅竜魔導士…それも、刀に選ばれたものが扱える妖刀……『龍鱗刀』」

『龍鱗刀』……それは、竜の魔水晶が柄の部分に装飾され、尚且つ刀身部分に龍の鱗粉が練り込まれた妖刀……それ故……

竜の力を持つ、滅竜魔導士にのみ持つことが可能で持ち主を刀自体が選ぶと言われており、持った者の能力値を底上げする。

選ばれし者以外が持つと罰が下るといふ説もある。

「言っただでしょう?この刀を持った時、私は負けないって……さあ…もう、終わりよ……」

そう告げ、腰を低くし、刀を構えるシクル。

「ふぎ……ふぎけるな!!おいちちゃんは負けねえぞ!」

ラディテイも迎え撃とうと、構えをとる…

が……

「…な………うご……け、ない?」

ラディテイは体を動かすことは愚か、指一本、動かせなかった。

「んだコレ!?どうなってんだい!」

「… // 龍鱗 龍縛針」

………龍の力を込めた針を相手に飛ばし、その力で針に刺されたものの動きを封じる

………

「極細の針だから、刺されたことにすら気づかない……最初の時に、既に仕込ませてもらったわ」

解説が終わると……シクルからは膨大な魔力が溢れる。

「……あなたは私と遊びたかつたみたいだけど………生憎と、時間が無いみたいだから……残念だけど………これで、終わりよ……」

「龍鱗 龍翔牙」ッ！＋ 「龍鱗 龍炎風」ッ！」

シクルの振り下ろした刀からは銀色に輝く竜の気が放たれ、それは寸分狂わず、ラデイティを襲い左腕が龍に噛みちぎられたかのように吹っ飛ぶ。

その後、激痛に呻くラデイティに炎を纏った龍が襲いかかり……

ドガアアアアアンツ!!!

大きな爆発が起き、煙が晴れた時……そこにラデイティの姿はなかった……。

数秒……呼吸が止まったかのような感覚がシクルを襲う。

「……………っ……はあ……………うー……もう疲れた……（早く終わらせて休もう……それで甘いデザート食べるんだ……………）」

ラデイティの気配がなくなり、一気に気の抜けたシクルはその場に座り込み息をつく。

「あーもう……また傷作っちゃった……（あまり魔力は消費したくないけど……まだあいつと……）」

ソングマジック
歌魔法 治癒^{ヒール}

傷を歌魔法で治すシクル。そして、治し終わるとよし……と気合を入れ直し、立ち上が

る。

「…てゆうか…結局、この魔水晶は何だったんだろ……………」

うーんと、目の前の魔水晶について、考え込むシクル。

数秒考え込み、「んー…分からない…」と一人呟くとぐつと拳を握り…

「あいつに聞くか…手っ取り早いし」

と、意気込んだ。

「誰に聞くんだ？歌姫」

突然耳元で聞こえる男の声…

「っ!?ジエ…!!」

髪を撫で、背後に立っていたのは笑顔を絶やさないジェラルルだった。

シクルは慌てて飛び退く。

「ククク…やはり神速では歌姫には勝てないか……………」

笑いながらそう呟き、ゆっくりとシクルに近づく。

「それ以上近づくなっ!」

シクルはジェラルルの表情とその瞳に宿る何かを見た時、僅かに恐怖が背筋を通る感覚に陥っていた。

なに……何を考えているの………怖い……

恐怖？私が………そう………これは恐怖………

あの目を………私は………知っている………

あの男と同じ目………やめて………その目で………

私を見ないで………私は………

シクルの震えが、強くなった時………

塔の外………遙か上空に膨大な魔力の塊を感知………シクルははっと上を見上げる。

「この……魔力………まさか………エーテリオン!？」

(馬鹿な………ここまで膨大な魔力の塊………今まで気づかなかった!?)

シクルの意識が、完全にジェラールから離れた………その時………

カチン——

「つ——!!!」

意識を逸らしたその瞬間、ジェラールが目の前へ現れ、シクルのその首に魔水晶の埋め込まれた首輪を装着した。

その瞬間——

ドクンツ…

「ぐ……!!?!あ……あぁっ!!!」

シクルは体内の魔力が急速に無くなっていく現象に襲われ、胸と首輪を抑え、膝をつき……倒れ込む。

倒れ込み、苦しむシクルを見下ろし、愉快そうな笑みを深めるジェラール。

「ククク……どうだ、歌姫……それはお前専用の特注品だ……壊せまい？魔力吸収も備わっている………苦しいか？」

「ぐっ……は……あ、いか……わらず……しゅ、みの……わるい………やつ、ねっ!」

苦しさと痛みに耐えながらジェラールを睨み上げるシクル。

「ほお……まだそんな目を向けるか……」

歌姫……いや……………「生贄のお姫様」…か」

「っ!!!だ…まれ……………!!」

「生贄のお姫様」…その言葉を聞いた瞬間、シクルの身体から膨大な魔力と殺気が滲み出る。だが、それらはすぐに消えてしまう…。

ドグンツ!!!

「うぐあ!!あああ…が!」

「魔力抽出力を強めた…もう諦めろ……………」

貴様は…貴様のその魔力は……………この、楽園の塔の魔力へと変換されるのだ…月の歌姫……………」

生贄のお姫様…シクル・ウイ…「黙れ!!」…」

ジェラルルの言葉を遮り響く…シクルの怒声……………」

ジェラルルを睨みつけるその瞳は…強い怒りと殺意、そして……………恐怖に揺れていた。

「黙れ…!!その名で…その名前で……………私を呼ぶなっ!!」

バキンツ!!!

シクルの魔力が大量に噴出した瞬間、首輪が壊れる音が響き、カラン…と床に転がった。

「ほお……………それを壊すか…」

首輪が壊れたことにジェラールは目を見張り驚き、シクルはゆつくりと身体に力を入れ、立ち上がりジェラールを睨みつける。

「はあ…はあっ…わ、たしの…魔力…だ！」

勝手に……………奪って、利用されて……………たまるもんかつ!!!」

ギツ…と、睨むシクルの瞳は強い輝きを放っている。

「ククク…！そうだな…そうじゃないとつまらないもんな……………だがな？歌姫よ…

少々遅かったな……………GAME OVER…だ」

「……………え…」

ジェラールがそう告げたその瞬間……………

シクルの視界が眩い光に包まれた…

「っ!!!（これは…エーテリオンっ!?!）」

ほんとに……落とすなんて……

これじゃあ……みんなが……

意識の遠のく中、そう脳裏で考え……そして、最後に見えたジェラルルの顔……
その顔に浮かぶ笑みを見てシクルは思う。

これは始まりであり……まだ終わりではない……と……
それを最後にシクルの意識は完全に途絶えてしまった。

エーテリオンが投下された直後……

ジェラルルと共に死を選んだエルザだが、それらは全てジェラルルの芝居であり、嘘偽りであったこと……

……
そして、ジェラルルと評議会のジークレインは同一人物であることが発覚した直後……

「貴様は……貴様は一体！どれだけの者を欺けば気が済むんだっ!？」

評議会さえも欺いていたジェラルルに怒りを覚え、声を荒らげるエルザ。

そんなエルザを見て、笑みを深めるジェラルル…。

「力が…魔力が戻ってきたぞ！」

そして……

「だが…流石にこれほどまでの魔力を一箇所に留めるのは確かにリスクが高い……だからこそ……」

そう言い、ジェラルルは銀色に輝く光の球を召喚し、手に持つ。

「これを使う……」

「そ、それは…一体……」

その球を見て、エルザは何かを感じ取る…

よく知っている気にするそれを…

「これは魔力……歌姫の魔力を凝縮したもの…」

「なんだとっ!？」

ジェラルルの告白に驚愕するエルザ。

「これを使えば……この塔全体の魔力も安定する……」

ジェラルルはそう言い、エルザが動き出す前にその球を楽園の塔の壁に埋め込んだ。

その瞬間、辺りを荒々しい魔力により吹いていた突風がやんだ…。

「フハハハハッ!!これでやつと…遂に…ゼレフを復活できる…!!」

ジェラルルの嬉しそうなその奇怪な笑いを見て…エルザの中でぶちつと理性の線が切れる……………。

「つ…!!!!ジェラアアアアルツ!!!」

そして再び…2人の因縁の戦いがスタートする…。

最初で最後の……………その、戦いが……………

……………
エーテリオンが、投下され…エルザとジェラルルの戦闘が再開されてから約十数分後

……………
「……………つ…ん……………」

シクルはゆつくりと意識を取り戻す。

まだぼうつとする意識の中、体をゆつくりと起こし、頭を抑え辺りを見回す。

「……………え…これ…て……………う？」

その視界に映ったのは……………壁一面に…否、

塔全体が魔水晶となった楽園の塔の姿であった。

「なにこれ……まさかこれが……楽園の塔の真の姿……？」

シクルは魔水晶の一部に触れる。

「…そうか…これが狙いで…（だからあの時……エーテリオン投下の瞬間…笑って…）」

唇を噛み、その真の狙いにすぐに気づけなかったことを悔やむシクル。

だが、悔やむ間もなく…シクルの魔力感知があることに気づく。

「え……これ……（この魔水晶から感じる…魔力……）わ…たし、の？」

ふと、意識が消える少し前、魔力をジェラルルに奪われていたことを思い出す…。

ジェラルルが何をしたいのか…正確には分からない……でも……

「こんな膨大な魔力…一箇所に留めるなんて危険すぎる…早く…早く何とかしないと…!!」

膨大な魔力の発信源は塔の上…恐らく最上階から流れている…。

「行かなきゃ…（きつとそこにジェラルルもいる……多分、エルも…）」

シクルはぐっと、力の入らない足に喝を入れ、前にと進む。

お願いだから……間に合って……………!!
エル……………無事でいてっ!

走り始めてから、暫くたった頃……

漸く塔最上階のほんの少し下までやって来たシクル。

息は上がり、体はふらつき……魔力もほんの僅かにしかない状態だが……………

「あと……少し……………エル……ナツ……………」

シクルは途中、最上階にジエラールとエルザの他に、ナツがいることにも気がついていた……

そんな時……………

ゾワツ!!

「なに……………この、魔力……（これは……この……嫌な魔力は……知っている……………）」

そうこれは……アルテアリス暗黒の楽園!!

まずい……………!!

咄嗟にシクルは震える足を無視し、走る速度を上げる。

お願い…間に合って!!!お願いっ!!!

そして……………最上階……………

ついた先で見たものは……………

「……………え…」

倒れるナツと……………暗黒の楽園を放ったであろうジエラル……………そして……………

「イヤアアアアアアッ!!!」

傷だらけ…血まみれで、エルザの腕に抱かれ…息を引き取ったシモンとその姿を見て、涙を流し声を上げる…エルザの姿……………

「…っ!!!ジエラアアアアアルウウウウウッ!!!」

シクルの怒声が辺りに響き渡った…。

32話 ごめんね…

「ジエラアアアアルウウウウウツ!!!」

「っ……シ、クル………」

大きな…大きな叫び声と共に、ダンツ!と地を蹴り、ジエラールへと突っ込むシクル。
そんなシクルを見て、驚きを隠せないエルザと、ニヤツと笑うジエラール。

「月竜の…鉄拳!!!」

ジエラール目掛け、拳を振るうシクル。

だが、その1発はジエラールの右手により、受け止められ止まる。

「どうした?そんなもんか…」

「っ!!」

クク…と笑い、シクルを見下ろすジエラール。

「魔力が無ければ満足な力を出せないか…」

ジエラールはそう呟くと、光の玉でシクルを吹き飛ばす。

「っ!!!」 ズサアッ……!!!

地を滑り、後退するシクルだが、足に踏ん張りを効かせ、止まる。

「許さない…ジエラール……あんたは絶対…許さないっ!!! エルの大切な人を…エルの仲間を…あんたは殺した……そして……」

エルを泣かせたあなたを……あたしは……許さないっ!!!」

そう叫び、顔を上げたシクルの憤怒する表情にジエラールは高笑いを見せる。

「もう遅いのだよ、歌姫!!」

俺はエルザを生贄にし、ゼレフを復活させるのだ!!! そしてそこに倒れる愚かな男は…そんなつまらん女の為に命を落としたんだ…

笑えるだろう?」

「……………な……」

シクルは拳を強く握り、震える。握り拳からは少しずつ赤いものが流れる。

その様子に、ジエラールは不審に感じ半歩ほど…後ずさる。

「なんだ…?」

「ふざけんな……エルを使って…ゼレフを復活? シモンが…愚かな男? ……あんたなんか……あんたなんかっ!」

シモンを馬鹿にする権利なんかあるわけないっ!! エルの!! エルの命もその身体も… エルのものだ!!

あんたの夢のためになんか…使わせるもんか!! あんたは絶対…許さない!!」

シクルは大声で、叫び、少し呼吸を荒くしながらジエラールを睨みつけ、そしてふつと後ろへと視線と意識を向け…

「ね? あなたも許せないよね…あなたは誰よりも…仲間を愛する人だもん…そんな所で、寝ていていいの? ……立ちなさい、ナツ」

そう、告げた。その瞬間…

シクルの真横を何かがものすごい速さで通り過ぎる。

「黙れエツ!!!」

ドゴオツ!!!

「がっ!?!」

シクルの真横を通り過ぎたのはナツだった。

ナツは憤怒に燃える重い重い拳をそのジエラールの顔へと叩きつける。

そして、バキッ! と何かを口に入れる…。

「なっ…貴様、まさかっ…!」

ナツの食べているものを見て、ジェラールとエルザは驚愕する。

「こいつ……………！エーテリオンを…食ってやがる」

予想もつかない行動をしたナツに驚きが増すジェラールだが、すぐに首元を抑え、苦しみの声を上げ、地面を転がるナツを見て、愉快そうに再び笑い出す…。

「がっ!! ああっ!」

「なんて馬鹿なことを！このエーテルナノには火以外の属性も融合されているんだぞ!!」

「その短絡的な考えが自らを自滅へと追い込んでいるんだよお!!」

2人の声とナツの呻き声を聞きながら、シクルは冷静に考え…そして…………ふっと、空を…空に浮かぶ月を見上げる。

「……………少しは回復できたかな…」

ぼそつと呟くとナツへと手をかざし…

「……………【我、月の守護の名の元に

汝、我が友の身を守りたまえ そして

その身に宿りし真なる力 解き放たん】

ソングマジック リベレーション
歌魔法 解放

ナツの身体へと歌魔法をかける。

その瞬間、徐々に反発を起こしていたナツの魔力と身体とエーテリオンの膨大な魔力が融合を始め、馴染み始める。

「受け皿は作ったわ……（あとは……あなた次第よ、ナツ……）」

エーテリオンを取り込んだナツ……そしてその顔には……竜のような鱗が浮き出していた。

「まさか……それは……ドラゴン・フォース!？」

ジェラルルの驚きの声を聞かず、ナツはジェラルルへ、猛攻撃を仕掛ける。

それを見届けた瞬間、シクルは力尽きたように膝をつき、倒れる。

「っ!!シクルっ!」

倒れるシクルの元へ、エルザが駆け寄ってくる。

「エ……ル……」

シクルの身体を抱き起こすエルザはシクルの身体にあるはずの膨大な魔力がほんの僅かにしか残っていないことに気づく。

「お前……！魔法がっ!!」

「ああ……さつき、油断……しちやって……あいつに、ほとんど……持つてかれて……月の力、吸収してた……ん、だけど……やっぱ歌魔法やるにはちよつと無理しすぎちゃったかな」

てへつと笑うシクル。

この場に来てから、月の光を喰らい、魔力へと変換していたシクル……だが、歌魔法は本来膨大な魔力を使用する魔法故、枯渇していた魔力を少し回復するのみでは足りなかったようだ。

「馬鹿者……何故お前は……そんなに無茶を……」

魔力が無い状態での歌魔法は身体に負荷がかかる……それはお前が一番よく知っている筈だろう……シクル」

弱い呼吸をするシクルを見下ろし、目が潤み始めるエルザ。

「ちよ……やめてよ……私、エルの涙は……もう、見ないって……決めてんだから……大丈夫……私は、死なない……ジエラールは、ナツが……なんとか、する……よ」

につこりと微笑むとナツが暴れているであろう方向を向き、見つめる。

それに習い、エルザもナツとジエラールの戦いに目を向ける。

そこでは……

大穴空いた地面から「流星」ミューティアを纏ったジェラールが猛スピードで飛翔し、

「この速さでは追いつけない!!!」

と、ナツに叫ぶ。だが……

グンツ!!! ダンツ!!!

両腕と両足、そして身体全体を使い、ジェラルルの元へと超速度で飛翔するナツ。

その速度は流星を纏うジェラール以上。

「何っ!?!」

その光景に驚き、ナツへと強力な魔法を放つも、ナツは器用に空中で躲し、ジェラールへと突っ込む。

「お前は自由になんかなれねえ!!! 自分を解放しろっ!!! ジェラアアアアルウウウウウウウウウウ!!!」

そして……そのサツの怒声と共に……ナツの拳はジェラルルを襲う。

「があああああああああ!!!」

「うおおおおおおおっ!!!」

ジェラールはそのまま、楽園の塔の床を何枚も突き破り、倒れる。

そして、ジェラールに勝利したナツはダアンツ！と音を立て、シクルたちの前へと降り立つ…。

「ナツ……………（あのジェラールを倒した……………これで……………これで……………私に8年に及ぶ戦いは終わったんだ……………）」

やつとみんなに……………自由が……………

ナツの逞しい後ろ姿を潤む目で誇り高そうに見つめるエルザ。そして、シクルもまた…身体をゆつくりと起こし、ナツを見つめ微笑む。

やつぱり……………あなたは、強い……………

心も……………力も……………ナツ……………

やつぱり……………あなたに似てるよ……………イグニール

ナツの後ろ姿を見つめ、何処か懐かしい姿がダブって見えたシクル。

ふっとシクルたちを振り返る、ナツ。そして、小さく笑みを浮かべると、ガクツと膝から崩れ落ち……………

「っ!!ナツ!!」

前のめりに倒れるその身体を、咄嗟にエルザが走り、受け止めた。

エルザはナツの頭に手を回し、胸へと抱き寄せる。

「お前はすごいやつだ………本当に」

ありがとう………そう、エルザの眩きが聞こえたシクルはクスツと笑い、やっと終わったことに安堵する。

だが………

ゴゴゴゴツ!!!

突然、楽園の塔全体が大きく揺れ始める。

「なっなんだ!?!」

「これは………」

エルザとシクルは塔全体を見回し、目を見張る。

「塔が……暴走を始めているっ!?!」

「くっ……元々こんな膨大な魔力を一箇所に留めるなんて不可能なんだ………!このままじゃ……塔が爆発する!!!」

シクルの告げたその言葉に、エルザは一瞬間を揺らし、そして…ナツを抱え、シクルの元へと歩み寄る。

「……………エル？」

「シクル……………すまない…ナツを……………頼む」

不思議そうに見上げるシクルに、ナツの身体を預けると、塔の壁へと近づく。

その行動を目にし、シクルははつとエルザが何をしようとしているか…理解する。

「ま…待って……………だめ、エルっ!!!だめだ……………そんなことっ!!!」

「シクル……………これしか、方法がないんだ…だから……………ここは私に任せろ…」

エルザは…その身を使い、塔と融合し、魔力の暴走を止めようと考えていたのだ。

だが、そんなことをすればエルザの死は確実……………だから、シクルは声を荒らげ、止めるよう訴える…。

しかし、エルザは笑みを浮かべ、シクルを振り返り…任せた…と、告げる。

「やめて……………そんな!他に方法があるはずだよ!!!エルっ!!!」

「…ん……………シ、クル？」

シクルの叫び声に、意識が戻るナツ。

そして、シクルの見つめる方をゆっくりと見つめ、ナツも驚愕の表情となり、身体を起こしエルザを見つめる。

「おい……まさか、エルザ………お前っ！」

「目が覚めたか………ナツ、お前も……シクルと共に早く逃げろ……ここは、私が何とかする………」

徐々に塔の壁へと近づくと、エルザを見つめ、ナツとシクルは止めるような声を上げるもエルザの足は止まらない。

「エルっ!! (そんな……そんなこと………!!)」

「やっ……やっ……自由になれたんだ!!! エルは………」
死なせる訳にはいかないっ!!

「換装 龍鱗刀! 龍鱗 龍縛針」

シクルは即座に龍鱗刀を召喚するとエルザに向け、龍縛針を打つ。

「っ!」

龍縛針を打たれたエルザは体が動かなくなる。

「っ……シクル……なんの、真似だ!？」

「ごめん………エル……でも、やっぱりあなたが死ぬなんて………そんなこと、私が許せないんだ………」

シクルはそう告げると……右耳に装着している制御装置を外し、魔力を解放する。

ブワア！と吹き荒れるシクルの魔力。

「っ!!」

「うおっ!?!」

すでにシクルの髪は銀色へと変化している。

シクルはすう…と目を閉じると…

「エルの命をこんな塔に…くれてやるくらいなら……………」

「ま…まさか…………シクル、お前!」

「お、おい…?」

シクルの足元に魔法陣が展開される。

「私が…………この塔を止める!!」

その言葉と共に、魔法陣は銀色の眩い光を放つ。

「待てシクルっ!!ダメだ…それでは私の罪がっ!」

「エルに罪なんてないよ…………エルは、もう十分…苦しんだ…………これからは、ナツやグレイ…ルーシイ、ハッピー…………ギルドの皆と、幸せに暮らすんだよ…こんな塔に縛られずに……………ね?」

シクルとエルザの会話に、シクルがその身を呈し、この塔を止めようとしていること

に気がつくナツ。

「お、おい、シクルっ!!! やめろって…そんな…お前がいなくなったら!!! ルージュは どうすんだよ!?!」

ナツのその一言にシクルはピクツと肩を揺らす。

だが、シクルは…ふつと笑みを浮かべると…

「ナツ……………ルージュのこと…お願い……………」

大丈夫……………あの子は賢いから…分かってくれる」

「んな…おい…シクルっ!!!」

シクルを止めようとナツも動こうとするが、その瞬間塔の揺れが大きくなり、元々力の入らない足はすぐに崩れ落ち、倒れてしまう。

「ナツ……………もう、時間だよ……………」

シクルはそう告げるとナツとエルザの足元にも魔法陣を展開。

そして……………

「ばいばい……………ナツ…エル……………ごめんね…

ごめん……………こんな私を…許してね……………

ナツ……………

最後にナツが見たのは…笑みを浮かべながらも、涙が頬を伝うシクルの顔……………
自身の身体を包み込む光に逆らおうとナツはシクルに手を伸ばし…
「やめろ…やめろっ!!!」

シクルウウウウウウウウウウウウウウウウ!!!」

ナツも涙を流し、声を上げる…だが、ナツの伸ばした手はシクルには届かず……………
シクルの展開した魔法陣により、エルザとナツは塔の外へと転送される。

「……………これで、大丈夫…」

シクルはぼつりと眩くと、頬を伝う涙を拭い…

足元の魔法陣を更に大きくする。

「ふう……………」

【我、聖なる月の名の下に

邪なる力を封じ 悪しきなる力 封印せん」

ソングマジック
歌魔法 封印！」

塔全体に“歌魔法 封印”を展開。

この塔自体にそれほど悪の力や邪なる力は秘められてはいないものの、色々と応用の利く魔法である。

さらに…

「我、月の守護の名の下に

愛する者の身を包み その身を守らん」

ソングマジック
歌魔法 防御！」

いくら、封印の魔法を展開しても流石にこの膨大な魔力が外に漏れない保証はない…
保険のために、シクルは防御魔法を展開する。

そして…

「我、月の加護の名の元に

月の道を創り 天へと汝を導かん」

ソングマジック
歌魔法 ムーンロード
月の道！」

最後に、この塔にある魔力を空へと向けて流すための道を“歌魔法 月の道”で作る。

シクルが1人塔に残った理由…それは、これ…“月の道”発動の為である。

この魔法は術者が発動したい場所から動かずに魔法陣を展開することにより使用可能となる…その為シクルはこの場から動くことは出来なかった…。

塔全体が暴走した魔力の封印しきれなかったものと月の道による輝きで一層光りだす。

シクルは目を瞑り、最後に――

「……………ごめんね」

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオン
!!!!!!

楽園の塔……………消滅――。

33話 暗闇の中で掴んだ光

楽園の塔消滅の、数分前——

シクルの魔法により、塔の外へと転送されたナツとエルザは偶然にも、転送先がグレイやルーシイたちの元だった。

シュン——

「うお!? ナツ?!」

「エルザっ!! 無事だったのね!!」

突然現れた2人に驚くグレイとルーシイ。

「っ!! ここは……! シクルは!?!」

「シクルっ!! シクルがっ!!!」

グレイとルーシイの声が聞こえないのか、ナツとエルザは少し慌てていた。

「おいちよ……落ち着けて……」

「シクルがどうしたの……?」

グレイとルーシイが2人を宥めながらどうしたのか問いかける。

「シクルがまだあの塔の中にいるのだ！」

エルザの告げた言葉に、グレイたちは目を見張り、驚き塔を見上げる。

「はあ!？」

「シクルがまだあの中になって！」

「そんな…それじゃあシクルは………」

「シクルウ…どうなつちやうのお……う？」

グレイ、ルーシイ、ハッピー、ルージュと続き、言葉を発する。

ルージュの涙声を聞き、ナツが口を開こうとした時……

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

!!!!!!

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

少し離れた位置に建っていた楽園の塔が…大きな爆発音と共に、光の柱となり…天へと登っていった…。

「楽園の塔が……！」

グレイは驚き、光の柱を見上げる。

「そんな…シクルはっ!？」

大きな爆発を起こしたソレを見て、ルーシイは悲痛な声を上げる。

「うそ……だよ、ね……え？」

涙をたくさん流し、光の柱を見上げるルージュ。

そんなルージュと同じく涙を流し、顔を両手で覆っているハッピーを抱きしめ、自身も涙を流すルーシイ。

「くそ……くそ………クソオオオオオオッ!!!」

雄叫びを上げ、涙で頬を濡らし、悔しさと悲しみにくれるナツ…

エルザやグレイも涙を流し、シヨウやミアーナ、ウォーリーも目の前で涙を流す。ナツたちを見つめ、悲痛な表情で俯く。

その場の全員が顔を俯き、悲しみにくれている時……

「……………あれ、なんです…か？」

ジュビアの一声が静かに響いた。

全員がジュビアを見るとある一点を見上げ、目を見開いていた。

ジュビアの見つめる方を見上げると……

「……なんだ、あれ……」

その先にあったもの……それは…

「光……………」

塔の魔力が天へと登る光の柱が消えた、その上空…………

「いや……あれは…………魔法陣……？」

円形の光が創り出されていた……それは、月の下に現れた謎の魔法陣…………

「なんで……いきなり……？」

その魔法陣を見上げ、全員が驚きと戸惑いに揺れている時…………

「……………シクル？」

ピクツと、ナツの嗅覚…………いや、五感が反応を見せた…。

「え？」

「間違いねえ…………あそこからシクルの匂いがするつ!!!」

ナツはそう叫ぶと、バツ！と立ち上がり、ルージュに視線をやる。

「行くぞ!!ルージュ!!!」

「え……ええ？どこにつ？」

話についていけず困惑中のルージュを抱え、ナツは飛翔し、ルージュに翼を出させる。
「決まってるだろ!!!シクルを連れ戻しにだ!!!」

ルージュの見たナツの瞳は諦めを知らない、ギンギンに輝く光を持っていた…

「シクルを……あいつ！行くよお、ナツ!!」

連れ戻す、その言葉を聞きルージュも飛ぶ速度を上げ、遙か上空へと飛び上がる。

なんで、シクルの匂いがするの……ナツには分からなかった……。

だが、今ナツの脳裏を占めている思いはただ一つ……。

「ぜってえ……死なせねえぞ!!シクル!!!」

………ん………こ、こは………?

誰かに呼ばれた感覚がし、目が覚めるシクル。

目が覚めると少し暗い空間にぼつんと一人、漂っていた。

………そっか………私、魔力の暴走を止める為に………じゃあ、ここは天国?

……否、地獄かな……

皆との約束、守れなかったんだもんね……

魔力の暴走を止める為とはいえナツたちを置いて死んでしまったことに今更ながら、少しの後悔が襲いかかってくるシクル。

……でも、エルザや皆が死んじやうよりは……良かった……よね？

あの時、確かに守ることに成功したと……それだけは感じ取っていたシクル。

そう思い至ると、満足気に目を瞑り、意識を手放そうとするシクル。

そんな時——

《バカね……この娘は……》

つつ……え？

!!!

シクルの脳裏に響いた女の声……その声を聞いた瞬間、シクルは目を見開く。

……え……ま、さか……うそ……

《やだわ……まさか、私の声を忘れた訳じゃあないでしょう？……シクル》

……セ……レー、ネ？

シクルの言葉に、クスツと笑う、その声の主

《なんだ…分かるじゃない……そうよ》

ほんと……？セ、セレーネ……どこ……どこにいるのっ!?私……お母さんに会いたくて……

その声……シクルの探し人（竜）……“セレーネソファイア”のものであった。

《だめよ……分かっていてしょう？その時が来るまで……私たちは会えない

……

今回は特別なの……あなた、今自分がどんな状況だか分かってる?》

…どんな…状況って…私、死んだんじや…?

シクルの答えにセレーネはいいえ…と答え

《あなたはまだ…死んでなんかいないわ……

まあ、ほぼ仮死状態に近いのだけどね……》

………仮死……?

セレーネの言葉に首を傾げ、疑問を持った時だ…シクルは背後から少しずつ照らされる光に気づき振り返る。

そして……

うつ………!? な、に……?

眩い光が辺りを照らし…光から映し出された光景は……

雨の降る中……ギルドの皆が……ルーシィやハッピー……グレイやルージユ……そして、マスターやエルザも……一つの墓の前で泣いている光景だった…。

墓には「シクル・セレーネ」と名が彫られており、これは自分の葬式なのだ……理解するシクル。

……どうして……どうして、皆……泣いてるの？ どうして……笑ってないの？
笑っていて欲しいと願ったギルドの仲間……家族全員が涙を流し、悲しみにくれていた……

そんな時、よく見知った桜髪の男……ナツが葬式に現れ、暴れ始めた……。

『シクルは死んでねえ!!! 死んでなんかいいえんだア!!!』

そう怒声をあげ、墓に備えられている花を蹴散らすナツを取り押さえる家族たち……

『やめろナツ!!!』

『離せえ!!! シクルは死んでねえ!!! 俺は諦めてねえぞ!!! シクルウウ!!!』

『もう……やめて、ナツ……！現実を見なさいよおおつ!!!』
『うああああつ……シクルウ……会いたいよお……会いたいよおおおおつ!!!』

皆の涙する姿とシクルの死を悲しむ声……
シクルは耐えきれず、ホロホロと涙を流す。

どうして……私はただ……みんなに……!!

《……ほんと、バカな娘ね……》

家族が死んで笑える人がいるかしら？

……さあ……シクル……決めなさい

あなたはそのまま……死を選ぶの？

それとも……みんなの元へ帰りたいたい？》

セレーネの声が響く……シクルは涙を流し、顔を俯き……今見た光景を思い出す。

そして……

嫌だ……死にたくない……あんな……

あんな、悲しみにくれる皆を私は……見たくないっ!!! 私は……皆の笑った顔が……大好きなんだ……!!! 帰りた……帰りた……!!!

シクルの切なる願いが暗闇に木霊する。

その時……

シクルウウウウウウウウツ

!!!!!!

っ
!!!!!!

シクルの耳に届いたその声に……はっと目を見開き、顔を上げるシクル。

その視界の先に……暖かい光が見える……。

その光を見た時……シクルは迷うことなく、その手を伸ばした……ゆつくりと……だが、確実に……

ああ……………その暖かい光……………私は、知っている…

そして、シクルの手が光に届こうとした時…

シクルは伸ばした手を何かにしつかりと、握られる感覚がし、引つ張られ…抱き寄せられる感覚を覚えた。

それは、よく知る熱……………

心休まる、暖かな熱……………

気合で瞼を上げると、視界に広がるのは涙に濡れる桜髪によく見知った彼と自身の大切な小さき相棒……………その姿を見た時、シクルは小さく微笑みを浮かべる。

「……………ナツ……………ありがとう…」

「シクル……………もう、こんな事…2度と、するなっ……………!」

涙声で告げるその言葉にシクルはああ…悲しませてしまった…と、後悔が湧き上がる。

「ナ、ツ……………ごめ、ん…ね…ただいま……………」

「……………おう…おかえり……………」

それを最後に、ここでのシクルの意識は完全に途絶えた……………。

「……………ん……………」

ゆつくり…ゆつくりと、意識が浮上する感覚が訪れ、シクルはゆつくりと瞼を上げる。そして、やや眩しい光に一瞬目を細め、ゆつくりと確実に眼をあけると…目の前に広がるのは木材で出来た天上だった……………。

「……………ん…んは？」

だるい身体を起こし、辺りを見るとそこはどこかの一室のベッドの上だった。シクルは自身の手を見下ろす。

「私……………生きてる？…セレーネ……………」

私を……………助けて、くれた？

あの暗闇の中…響いた懐かしき母の声に今でも胸が熱くなる感覚がし、ぎゅつと胸を抑える。

ふと、足元にほんの僅かに感じる重みに目を向けると……………

「……………ナツ…ルージュ…」

ベッドに寄りかかるように眠っているナツがいた。その反対側にはルージュもいた。

ナツとルージユを見つめていると、部屋の扉がキイと音を立て、開かれる。

「あ……………」

「おや…起きてたのかい、あんた」

部屋に入ってきたのは、ポーリユシカだった。そこでやつと、ここがポーリユシカの自宅であることに気づく。

「全く……………また無茶をしたんだってね…お前さんは」

しかめつ面でシクルにグチグチと説教が始まるポーリユシカの言葉に、シクルは肩をすぼめ、俯く。

「ズ……………ごめんなさい」

「……………はあ…全く……………今回、あんたは5日間は眠っていたんだよ…」
ポーリユシカの告白に、「そんなにっ!？」と驚くシクル。

その声に、ナツとルージユが…と声を上げ、目を開ける……………。

「あ……………」

身体を起こし、シクルと目が合ったナツとルージユ……………

「あーつと…お、おはよ? ナツ…ルージユ…」

「つ……………シクルー……………!!!」

「わああああ!!! シクルだああああ!!!」

叫び声を上げ、シクルに飛びつく1人と1匹。

「きやあ!?ちよ……ちよつと………」

「シクルっ!良かった…目が、覚めて………」

まだ身体が痛むシクルはナツとルージユに抗議の声を上げようとするが、ナツのその言葉と、回される腕が震えていることに気がつくのと、ナツとルージユにシクルも腕を回し、抱きしめた。

「……………ありがとう……ごめんね……もう、しないよ……………」

「……………おう」

「あいい……………」

その後、診察をしたポーリユシカから、帰宅の許可の出たシクルをナツがおぶり、ギルドへと戻った。

そして、その日はギルドに戻るとお祭り騒ぎ…（いつもお祭り騒ぎよろしく賑やかなギルドだが……………）

エルザやグレイからはお叱りを受け、ルーシイやハッピーからは泣きながら抱きつかれ、「心配かけてごめん……ありがとっ!」と笑みを浮かべ、告げるシクル。

こうして…シクルたちと楽園の塔を中心にした事件は幕を閉じた……………。

………全く………ほんと、誰に似たのかしらね……

………ふん………そんなの、貴様に似たに決まっているだろう……

あらやだ………失礼しちゃうわ………そういうあなたの子こそ………あんな無茶して………
一体、誰に似たのかしらね………クスクス

むう………黙らんか………結局のところ、お互い様ということだろう………なあ………セレー
ネ………

フフフ………ええ………そうね………イグニール………

まだ………その時ではない………だが、その時が来た時は………

……必ず、真実を……

楽園の塔篇 完結

next story 収穫祭 B・O・F篇 開幕

予告

収穫祭だー!!!
ファンタジアだあああ!!!

えええええ!!!
シクルもでるのぉー!?!
や、家賃があ……

エバーグリーン……皆を元に戻してっ
!!!!

バトル・オブ・フェアリーテイル《B・O・F》…開幕だ!!!

ラクサス……私があなたの目を覚まさせる!!!

ルール変更……? 神鳴殿って……ふざけんなよ…糞ガキ…

出来るかじゃねえぞ! お前らの……無事をだ!! ぜってえ…死ぬなよ!!

ラクサス………
“俺”を……怒らすなよ……

ラクサス………またね………

第5章 収穫祭 B・O・F 篇

34話 収穫祭へ向けて

楽園の塔での戦いが終わり、シクルの意識が戻ってから5日後……

ギルド内では現在、明日に迫った収穫祭 “ファンタジア” へ向け、準備の真つ最中だった。

「はあー疲れたア……ちよつと休憩」

こちらにも収穫祭へ向け、準備を進めていたシクルだが、流石に疲労感が増したのか、端つこのテーブル席へ座り、突つ伏していた。

ふと、顔を上げギルド内を見渡すシクル。

「ふう……にしても、ギルドがこんなに大きくなってたのはびつくりだなあ……」

シクル達があかねりゾートへ行き、尚且つ楽園の塔でジェラールとの死闘を繰り広げている間にギルドは前の建物から姿を変え、大きな大きなまるでお城のようなギルドへと変わっていた。

そして、変わったのは建物だけでなく……

「マスター……約束守ってくれたんだ」

シクルの見つめる先、そこには一人ギルド内でポツンと座り、鉄を頬張る黒髪の彼が……

ふっと、シクルは立ち上がり彼の元へと向かう。足音を立てずに……

そして——

「っ……わあっ!!」

「うおおおおおうっ!? な、んだてめ!?!」

大きな声を出すと気づいていなかったのか……目を見開き、驚く彼“ガジル”にシクルはお腹を抑え笑う。

「あつはははははは!! 匂いでバレてたかと思ったのに……気づいてなかったの?」
「るっせえ!! 笑ってんじやねえぞ、このクソチビアマ……」

ガジルがそう、シクルに暴言を吐いた瞬間、グワシツ!!! とその頭を片手で握り締め、グギギギギ……と力を加えるシクル。

「誰がチビですって? あたしのことかな? ガジルちゃん?」

「いっでででででっ!!! 行ってえよクソが!!!」

ガバツ! と力任せにシクルの手を払いのけ、握り締められてた頭をさするガジル。
「たくっ! なんつー馬鹿力だつての……」

「お口の悪いガジルちゃんがいけませんー」

「ガジルちゃん言うなっ!!!」

グルルルウ!! と威嚇よろしく、唸るガジルにケラケラと笑うシクル。
そして、ふうと笑いが治ると……シクルはふつと、ガジルを見つめる。

「な……なんだよ」

「……………やっぱ、子は親に似るのかな?」

シクルの言葉にガジルは意味が分からないと首を傾げ、それをみてシクルはクスリと
微笑むと……

「メタリカーナ……やっぱり、似てるね」

と、告げた。

その瞬間、ガタツ! とガジルは反応を見せ、シクルの肩を掴む。

「お前つ……あいつのこと、知ってるのか!？」

「あーごめんね? 知り合いではあるけど……居場所は知らないんだ」

シクルの答えを聞くと、「そうか……」と呟き、腰を落とすガジル。

「にしても、ナツと反応そっくりだったね」

「んだあ!? 火竜なんかと一緒にすんじやねえ!」

再びガルウ! と吠えるガジルに「あーはいはい」と面倒くさそうに払いながらふうと息をつき、小さく笑みを見せる。

「でも……ちよつと安心した」

「……んだよ」

「やっぱり……ガジルでも、育ての竜を気にしてるんだなあつて……思つてね」

シクルのクスクスと笑う声にそっぽを向くガジル。

「けっ……誰があんなやつ……それより、あのジジイから聞いたぞ……」

ガジルのその言葉に首を傾げ、「何が?」と問うシクル。

「なんで俺を……ギルドに加入させるように言つたんだよ?」

ガジルのその言葉であとと合点のいったシクル。

「そのこと? なんてつて……同じ滅竜魔導士だし……気になっちゃつてね」

ダメだった? と聞いてくるシクル。

「……別に」

と、そっけないが嫌ではなさそうなガジルに微笑み、「そっか……」と嬉しそうに頷くシクル。

この後、シクルはミラに呼ばれ、ガジルと別れた。
去っていくシクルの後ろ姿を見つめガジルは……

「……変な奴」

と、1人、呟いた。

ミラに呼ばれたシクル。ミラから頼まれたのは足りなくなった食材の買い出しだった。
た。

ちょうど手の空いたルージユも共に買い出しに出かけ、現在はギルドへと戻る途中だった。

「ふうー！ 今年は普段よりも新人も多かったもんねー……」

「あい…材料足りなくなっちゃったんだねえ」

ルージユに少し荷物を持ってもらいながら並んでギルドへと戻っていると……
少し荒い魔力の流れを感じとる。

「ん？ この感じ……（誰か喧嘩してるのかな？）」

気になり、魔力の感じる場所へとルージユと共に向かうと……

「あれえ？ あれって……シャドーギアの皆？」

ルージユの言葉にコクリと頷くシクル。

「みたいね、それと……」

シクルの見つめる先には、ボロボロになったガジルがいた。

傷のないジェットとドロイとボロボロなガジル、そして不安げに3人を見つめるレ
ビイを見てふうん……とシクルは目を細める。

「なんだかんだ……認められたいのかな？ ガジル……」

こういう方法は想像つかなかったけど……と心中で呟いていると……

3人の元に新たな魔力……それも、凄く……攻撃的な魔力の持ち主が現れる。

「シ、シクル!! あれってえ……!」

「っ! ラクサス……!!」

ラクサスの眼を見た時、シクルはゾワツと嫌な予感が脳裏をよぎる感覚に陥る。

そして、その予感はずぐに的中し……

ガジルを一方的に攻撃していたラクサスにジェットとドロイが止めるように声を上
げた時……

「うるせえ!!!」

ジェットとドロイ……そして、レビイめがけて強力な雷を放った。

「え……」

レビイが目を見開き、驚きと恐怖に身体が動かず、ジェットとドロイも咄嗟のことに身体が動かない……。

「ちっ！」

そんな3人を庇うように前に出るガジル。痛みに耐えるように、身構える。

そして、ラクサスの雷が目前に迫った……

その瞬間——

ガジルの視界に金色がいつぱいに広がった……。

バチイイイイイイツ
!!!!

「おっ……と!!」

ガジルの目の前に現れたその人物にガジルやレビイたちは驚き、目を見開いた。

「なっ、お前……!?!」

「シクル!？」

「いつから……というか今……」

「ガジルを……庇った？」

シクルにラクサスも気づき、鋭くシクルを睨みつける。

「てめえ……」

「いやあ……ちよつと威力上がったんじゃない？　でもま、まだまだだけどね」

ラクサスの雷を右手一つで受け止めたシクル。ニツとラクサスに笑みを見せ、右手をヒラヒラと振るシクル。

「なんだと？」

「言葉の意味そのままよ？　その程度じゃ、まだ私には勝てないよ……ラクサス」

シクルはそう言うと一度目を閉じ……、次の瞬間、ギロツとラクサスを睨みつける。

「仲間に手エ上げんなよ……ラクサス」

シクルから発せられるその怒気は殺気に近い威圧を纏い、背後にいたガジルやレビイ達も震える。

「シクル……」

レビイが不安げな声を上げると……その隣に茶毛の猫が飛んで来る。

「大丈夫だったあ？　レビイ」

「ルージュー！ うん……大丈夫」

レビイの方を少し振り返り、再びラクサスに鋭い目つきを向けるシクル。

「……レビイは仲間なんだよ？ ジェットやドロイも……ガジルだって、私たちの仲間

……傷つけちゃダメだろ？ ラクサス……」

シクルの言葉に舌打ちをし、去っていくラクサス……

そんなラクサスの去っていく後ろ姿を、シクルは切なそうに見つめる。

「待ってガジルっ！」

ラクサスが去った後、後ろからレビイの少し大きな声が響き、振り返る。

ガジルは傷ついた身体を庇いながら「仕事があるんだ……」と言い、歩いて行く。

その後ろ姿をレビイは瞳を揺るがしながら見つめ、そんなレビイの頭にポンツと手を置き、撫で始めるシクル。

「わっ……シクル……」

「そんな顔しないの！ 可愛い顔が台無しだよ？ それに、大丈夫……ガジルは頑丈だから……あれくらいで倒れたりしないよ」

ね？ と言うシクルに「うん……」と頷くレビイ。

シクルはふと、空を見上げたため息をつく。

ラクサス……いつからあなたは……

「……独りは、寂しいだけだよ……ラクサス」

シクルの思いと呟きは静かにその場に流れ、その思いを聞き取れた者はいなかった……。

「シクルウ？ どうかしたの？」

ぼうつと空を見上げるシクルを心配し、頭に乗っかってくるルージュを見てシクルはクスツと微笑むと、首を横に振った。

「ううん……なんでもないよ。大丈夫……」

そう言うのとシクルは荷物を持ち直し、「早く戻ろっ」とルージュに声をかける。最後に、去り際……シクルはジェットとドロイの方を振り返り……

「ガジルのしたことは許されない……でも、変わろうとしている彼を……見放さないであげて？」

と、告げた。

シクルのその一言にジェットとドロイは考え、悩みこみレビイも……恐怖してしまっていた自身を思い返し、次会う時はお礼を言おう！と決意するのであった。

その日の夜……

「ふうー、あーあ……やっぱり曲がりなりにも竜の力を使うだけはあるかあ……」

シクルはお風呂から上がり、昼時にラクサスの雷を受け止めた右手を見る。

シクルの右手はほんの僅かに赤みを帯びており、痛みはないが痺れが未だ残っていた。

「……ラクサスも強いからなあ……（めんどくさがって手エ抜いてたら……こつちがやられちゃうかな？）否、流星にやだな……うん」

まだ負けるわけにはいかない……と呟きながら冷蔵庫から牛乳を取り出し、コップ一杯一気に飲みきるシクル。

「ふうー……さて、私も寝ようかな」

ルージュは既に明日に備え寝室で眠っていた為、シクルも早めに寝よう……とそう呟き、コップを洗い振り返った時だ……

「よっー」

「……………」

リビングの窓から顔を覗かせる桜髪を揺らす彼……ナツがいた。
シクルはジトオ……と半目でナツを睨み……

次の瞬間、ヘッドロックを決めるシクル。

「うおおお!!? グエツ!! し、締まる! 締まってるってシクル!! くるしいっ!!」
首に回るシクルの腕をバシバシ叩き、抗議するナツ……

「なんであなたは不法侵入決めてんのよ……私が服着てなかったらどーするつもりだったの?」

ナツの首から腕を離し、ため息混じりにそう告げるシクル。

ナツはゴホツゴホツと咳き込み……

「いーだろ? 別に……それに! もしシクルが服着てなかったらラッキー! て思う
気がするぞ!」

悪びれもなくそう言い切ったナツ……シクルはプチツと脳裏で何かの糸が切れる感
覚がするも気にせず……ナツを振り返る。

「……………あ」

「へえ……? そう……ナツ、あなた……」

振り返ったシクルを見た時……ナツは震えた。

「ひ、ひいつ!!」

シクルは怯えるナツに構うことなく指を鳴らし……

「そんなにあたしに殺られたい?」

ニッコオリと笑みを浮かべるシクル……

「い、いあいあ!! じよ、冗談だつて冗談!! 悪かった!! 謝るから!! ゆ、許し……」そんなんで許したら警察いらないんじゃないアホオとおおお!!」ぎゃああああああああああ!!」

シクルからの鉄拳を食らったナツが回復するまで十数分……

結局シクルはナツに紅茶を入れ、出迎えた。

「全く……明日もあるんだから、これ飲んだら帰つて寝るのよ?」

呆れ紛れに言うシクルに「分かつてるよ……」と不貞腐れながらもシクルの淹れた紅茶を飲むナツ。

不貞腐れるナツを見ながらフツと笑みを小さく浮かべるシクル。

「で? 何か用があつてきたんじゃないの?」

シクルからの問いかけに、あつと今思い出したというような反応を見せ、懐を探り始めるナツ。

「んつと……確かこの辺につ！ お、あつたあつた！ これ!!」

ナツが懐から出したのは一枚のチラシだった。

「ん？ これ……ああ、ミスコン？」

ナツが見せたのは、収穫祭の際に開催される “ミスフェアリーコンテスト” のチラシだった。

「おう！ じっちゃんかな、シクルにそれ、出て欲しいってずっと言ってるよお」

「マスターが？ ええ……でもこれ皆の前で何かやるんだったよね？ ……めんどくさい」

シクルはため息をつき言った。

「めんどくせえ言うなよ！ 賞金50万Jなんだぞ!!」

「私お金困ってないし」

「じっちゃんの頼みだぞ!!」

「別にマスターの頼みでも断る時はあるし」

「出るだろ!!」

「だからめんどくさいって」

「出る!」

「いや」

「出ろって!!」

「いやだってば」

その後数分間、出ろ、いや、の言い合いが続き……

「なんだよ……俺だってステージに上がったシクル見てえのに……」

テーブルに突っ伏し、そう呟くナツ。そんな彼を、シクルはチラリと横目で見つめ、そして少し考え込み……はあ、とため息をつく……

「……出るよ」

と、言った。小さく呟いたがナツの耳にはしつかりと届き……ガバツ！と勢いよく顔を上げ、キラキラとした眼をシクルへ向けた。

「ほんとか!？」

「ほんと、出るよ（てか眩しい……ほんと、犬みたいだなあ）」

シクルの返事に満足したのか、ナツはカップに入っていた残りの紅茶を飲み干すと立ち上がり、窓から外へ身を出す。

「ちよつと、玄関から帰りなさいっての……」

何度言っても治らない為、強くは言わないが一応文句を言うシクル。

だがやはり、気にしないナツはくるりとシクルの方を振り返り、ニカツ！ と太陽の

ような笑みを浮かべる。

「また明日な、シクル!!」

そう言い、ナツは窓から飛び降り、帰って行く。

シクルはナツの出て行った窓をしばらく見つめ……1人、「また明日ね……」と呟くと窓を閉め、電気を消し、寝室へと入っていった。

そして、翌日――

ついに、収穫祭 “ファンタジア” 当日。

「収穫祭だー!!! ファンタジアだあああ!!!」

『おおおおおおおつ
!!!!!!』

妖精の尻尾を中心に、歓声がマグノリア全体に轟くのであった……。

これよりーーー収穫祭

“ファンタジア”

開催

35話 バトル・オブ・フェアリーテイル 開幕!!!

収穫祭……ルーシイにとっては初めての大きいイベントであり、飾りの施されたマグノリア全体を見つめ、わあ！と感嘆の声を上げていた。

「わあ、すごい!! こんなに人が集まるのねえ……」

「まあ、この祭りはマグノリアきつての大きな祭りだからねえ……そりや人も集まるよお」

ルーシイに言葉を返すルージュは、街中に並ぶ出店の食べ物を片っ端から買い占め、食べ続けていた。

「へえー……」

ルーシイは興味津々に、辺りを見渡す。

そんな中……

「ちよ……もー！ しっかり歩いてよ、ナツってば……やっぱ家でゆっくりしてたら？」

「……………いあ……………大丈夫……………だ、あ」

「そう言いながら体重こっちにかけてこないでつてばっ!!」

ルーシィやルージユの歩く後ろの方から聞こえてくる会話……………

ルーシィとルージユは一度顔を見合わせながら、遙か後方を歩く2人と1匹を振り返る。

そこでは、ナツがフラツフラな状態でシクルに支えられながら街中を歩くものの、ほとんど全体重をシクルに預け、シクルが若干押しつぶされそうになりながら文句を叫ぶ姿……………

「……………あれ、大丈夫なの?」

「……………さあ?」

苦笑を浮かべるルーシィとルージユ。

「てかなんであんなことになってんの? ナツは……………」

ルーシィが首を傾げルージユに問いかけると、はあとため息をつきながら話し始める。

「実はねえ……………昨日の夜ナツつてばあたしたちの家に来てねえ、すぐ帰ったみたいなんだけどお……………その後も寝ないで修行だつて……………朝までやってたみたいなんだあ」

で、あれはその修行が祟って、魔力切れと寝不足からきてるみたいだよお？　と言っ
た。

「……バカね」

ルーシイはポツリと一言、そう呟いた。

「あ、そういえばルーシイ？　もう少しでコンテスト始まるんじゃないっけえ？」

ルージュの言葉にはっ！　とルーシイは時計を見て……

「あああああああつ!!!　そーだったあ!!　私の家賃うーうー!!!」

と叫び、コンテスト会場であるギルドへ走り去っていった。

走り去るルーシイを見つめ、シクルも時計を見て、ああと頷く。

「あ、そっかもうそんな時間か……ハッピー交代交代、私もコンテスト出るからさー」

シクルは素晴らしい、フラフラなナツをハッピーへと預け、「じゃ、行つてきまーす！」

と、ギルドへと先に戻っていった。

「わあ……カナやジュビア……ミラにレビイにビスカも出るの？　エルもやる気満々だ

ねえ……こりゃ手強いなあ」

コンテスト会場の控え室に行くとき既にエントリーする子が集まっていた。

「えええええ!!!　シクルもでるのぉー!?　や、家賃があ……」

シクルも出場すると知ったルーシイはがくつと膝をついた。

「はっはっは何言ってるのさールーシイだつて有力候補だよー」

ルーシイの肩を叩き、まあ頑張ろうと励ますシクルにルーシイは涙を流しながら抱き着く。

「シクルウー……!!!」 お願ひ、優勝させて!! 家賃うー!!」

「ごめんルーシイ、それは無理」

テヘツと効果音がつくのではないかというほどな笑顔を見せ、告げるシクルを見て、がくつと沈むルーシイであつた……。

そして、ついに、コンテストが開始される。

まず最初の演技はカナであつた。

カードで身体を隠し、カードが晴れた頃には水着姿となり、その美しさを存分にアピールしていた。

次のエントリーは、ジュビア。

こちら水を使い身体を隠し、飛沫をあげ水が散つた時には青が基調の可愛らしい水着姿となり、ほんのりと赤らむ頬が可愛さをアップしていた。

お次は優勝有力候補の1人、ミラージェーン。

だが彼女は何故かここでその天然さを発揮し、顔だけハッピーという奇怪な姿になり、優勝候補から外れた。

そして、エルザ、レビイにビスカと続き……

「いやあー……皆やつぱレベル高いねえ……ミラはまあ、うん……あれだったけど」

ここまで、すべてを見てきた中でのほほんとした立ち振る舞いで感想を述べるシクル。

そんな中……

『続いて、エントリーNo. 7!! 誰もが魅了されるその歌声! 我らが歌姫!! シクル・セレーネっ!!!』

「あ、私だ」

司会者の紹介が聞こえ、シクルはステージへと向かう。

そして……ついに、シクルのアップールタイムスタート!

「………光竜の閃光!」

ステージへと出る瞬間に魔法で1度、観客の目を眩ませる。そして、光が治ると――

『おおおおおおっ!!!』

姿を現したのは白い胸元が少し開いた、ドレスに金髪を下ろしたシクルの姿……
シクルの手には竖琴が握られており、すうつと目を閉じると、弦に指を添え……音を奏で始める。

またいつか 会える日まで

この歌を 覚えていて

再会の時を 待つてる

離れても 忘れはしない

この歌が あなたへと

この愛が あなたへと

もう一度 会える日まで

この歌を 覚えていて

ありがとう 浮かぶ言葉

ありがとう ありがとう それだけ……

シクルの歌声に誰もが魅了されていた。ナツも同様に……

「……シクル（すげえ……切ねえけど……あつたけえ歌だ……）」

ナツは、シクルのその姿に魅入り、その間にシクルのアピールタイムは終わっていた。「ふう……ありがとうございました！」

最後に一礼をし、舞台裏へと戻っていくシクル。その後ろ姿には、多くの拍手と歓声が上がった。

ステージを降り、舞台裏に入った瞬間シクルは、はあああつととても深いため息をつき、肩の力を抜いた。

「や……やつと終わった……」

やっぱ人前は緊張するなあとかいっていると、前にルーシイを見つけた。

「あ、ルーシイ！ そっか、次ルーシイだもんね」

「シクル！ うん、そうよ！ ……でも、あんなすごい歌声の次なんて……自信なくし

「ちやう」

ズーンと始まる前から既に諦めの色が見えるルーシイ。

「そんなこと言わないの! ルーシイ、自信持つてルーシイの出来ること、いいところいっぱいアピールしてくればいいんだよ!」

諦めかけているルーシイにそう、元気つけるシクルにルーシイはぼかんつと呆けた表情で見つめ、プツと笑う。

「そうだね! やる前から諦めちゃダメだよね!」

そう言い、ルーシイは再びやる気に満ち、「ありがとー!」とシクルに手を振り、ステージへと出て行った。

その後ろ姿を眺め、シクルはフフツと微笑む。

「可愛いなあ……やつぱりルーシイには笑顔が似合うよね」

1人シクルはそう呟き、観客の歓声を聞き取ると、控え室へと戻っていく。

「にしても、さっきのミラのはびっくりだったなあ……あれは流星に見てる方も引いちやうよね」

あはは……と乾いた笑いを出しながら、控室前へと到着し、カナたちがいるであろう部屋の扉をノックしてから開ける。

そして、中へと入った時、シクルの視界に入ったのは……

「っ！ カナ……ジュビア、ミラー！ エル……う？ レビイ、ビスカっ!!」
控え室にいた仲間が全員、石像にされ、動かなくなってしまうていた。
声をかけるも彼女たちからの返事はなく……

「これはっ……（まさか……）」

この魔法に覚えのあるシクル。かの集団が脳裏をよぎった時……

ざわっ……

「っ!!!」

空中から飛んでくる何かに気づき、咄嗟に飛翔。ソレを避けると、シクルが元々立っていたところに行くつもりの穴が空いていた。

足を床につき、魔法の飛んできたであろう方向を見つめると……

「やっぱり……」

そこには、予想通り……緑の服を着た背中に妖精のような羽根を付けた女……
「エバークグリーン」が怪しげな笑みをたたえ、立っていた。

「あらまあ……偽の妖精姫さんじゃない……まさか、貴女もコレに参加してるなんて
ねえ？ 面倒くさがりはどうしたのかしら？」

挑発的な口調のエバークグリーンにシクルは鋭い目つきで睨みつけるも、エバークリー
ンに気にした様子はない。

「まあ……参加してる理由はほとんど強制だったんだけど……それより、これはどうい
うこと？」

そう言い、シクルはカナたちを視界に入れる。

「こんなことして……マスターや皆……私が、黙っているとかわらないですよ？」
シクルはそう警告すると十六夜刀を、手にしエバークグリーンへ向ける。

「エバークグリーン……皆を元に戻してっ!!!」

「あらあら……そんな事でこの私が本当に戻すとも思ううー？ 戻すわけないでしょ、
偽の妖精姫さん」

エバークグリーンはシクルの殺気に当てられても怖気付くことはなく、反対に挑発的な
笑みを深めた。

「それに……知ってるでしょ？ 私は遠隔で石像にした物を砂に変えることが出来るのよお？ 砂になっちゃったら……どうなるかしらね？」

「っ!! やめてっ！ そんなこと……絶対させない!!」

シクルの叫びに愉快そうに笑い声を上げるエバーグリーン。

「やらせないねえ……なら！ まずはその刀を下ろしてもらいましょうか？」

「くっ……」

下さなければ砂に変える……そう脅され、シクルは渋々と、刀を下ろす。

そして、無抵抗となり完全に無防備な格好となる。

その瞬間——

「じゃ……あんたもあいつらと同じ、お仲間になりなさい、妖精姫さん」

エバーグリーンが眼鏡を外し、シクルと目が合う。

「っ——!!!」(ナ………ツ………)

最後にシクルの脳裏を過ぎったのはあの笑顔と時折見せる逞しい後ろ姿……それを最後に、シクルの意識はぷつりと途切れた。

「ん? ……シクル?」

コンテストを観客席から見ていたナツはふと、シクルの声が聞こえた気がし、辺りを見渡す。

だが、見渡してもシクルの姿があるわけでもなく、すぐにルーシイの紹介が始まったため「気のせいか……」と深く考えるのはやめた。

「その輝きは星霊の導きか!」

ルーシイ・ハー……。「だあー!! ラストネームはいっちゃだめえー!!!」

司会者にラストネームが呼ばれる前にステージへと飛び出たルーシイ。

観客から笑いが出ると、ルーシイは恥ずかしがりながらも星霊と踊ると言った。

そして、ルーシイのアピールタイムが始まろうとした……その時——

「エントリーNo. 9 ……」

ルーシイの番を無視し、女の声が会場に響く。

「ちよ! まだあたしのアピールタイムが……!」

「妖精とは私の事、美とは私の事……そう、全ては私の事……優勝はこのエバークリーンでけつてーい♡ ハイ、くだらないコンテストは終了でーすつ♡」

ステージに現れたのはエバーグリーンだった。

「エバーグリーンっ!？」

「帰ってたのか!？」

ギルドのメンツから驚きの声上がる。

「ちよつと！ 邪魔しないでよ!! これにはあたしの、生活がかかってんだからね!!」

突然登場したエバーグリーンに大声で文句を言いよるルーシイ。だが……

「ルーシイ!! そいつの目を見るなっ!!」

グレイの声が響く。

「え?」

しかし、ルーシイはグレイの忠告に逆らい、エバーグリーンの目を見てしまう。そして、その瞬間エバーグリーンの魔法により身体が石像へと変えられてしまった。

「ルーシイっ!!!」

ナツとグレイの声が響く。

「何をすするエバーグリーン!?! 祭りを台無しにする気か!!」

マカロフの怒鳴り声が響く。だが、それにもエバーグリーンは気にせず……ステージの幕を取り払う。

「お祭りには余興がつきものでしょ？」

取り払われた幕の裏には石像となったシクルたちがいた。

「なっ、控え室にいた奴等が全員石につ!？」

「エルザやシクルまでっ!？」

「シクルウ!!!」

「バカタレが!! 今すぐ元に戻さんかっ!」

マカロフの声が響いた時、ステージに雷が落ちる。

「よお……妖精の尻尾の野郎共……祭りはこれからだぜ?」

雷が止むと、ステージにはラクサスと残りの雷神衆が立っていた。

「ラクサス!!」

「フリードにビックスローもいるのか!？」

「遊ぼうぜ……じじい」

「バカな事はよさんか、ラクサス!! こっちはファンタジアの準備も残つとるんじや

……今すぐ皆を元に戻せ」

マカロフのドスの利いた声にも臆さず……クククと笑うラクサス。

「ファンタジアは夜だよなあ? さあて……一体、何人生き残れるかねえ……」

その言葉と共に、ルーシイの真上へと雷が落ちる。

「ばっ！ ラクサス!! よせえ!!」

落とされた雷は、寸前でルーシイから逸れてステージを破壊する。

「この女たちは人質に頂く……ルールを破れば一人ずつ砕いていくぞ？ 言つたる……これは余興だと」

ラクサスはそう告げると石像となったシクルに手を置き、その額に唇を落とす。

「ラクサス!! てめえ!!!」

「最強と言われるこいつですらこれだ……てめえらに勝ち目はあるかあ?」

「冗談ですむ遊びとそうはいかぬものがあるぞ、ラクサス……」

マカロフの警告にも耳を貸さないラクサス。

「勿論俺は本気だ……じじい」

「ここらで妖精の尻尾最強は誰なのか……、ハッキリさせようじゃないか……つう、遊びだよ」

そう告げるとシクルから離れ身体を雷電が纏う。

「ルールは簡単だ。最後に残った者が勝者……」

その言葉にマカロフが声を荒げようとした、その時……突然、テーブルが吹っ飛ぶ。吹っ飛んだ場所にいたのはナツだった。

「いいんじゃないの? 分かりやすくして、燃えてきたぞ!」

「ナツ!？」

「ナツ……俺はお前のそういうノリのいいところは嫌いじゃねえ……」

ニヤリと笑うラクサス。

「ナツ……」

「祭りだろ?じつちゃん……行くぞ!!」

ナツは一直線に、ラクサスへと飛び込む。

「だが……そういう芸の無いところは好きじゃねえ、落ち着けよ? ナツ……」

「ぴぎやあああああああつ!!!」

が一瞬で雷の餌食となり、返り討ちにされる。

ぷすぷすと焦げるナツを気にせず、エバグリーンが告げる。

「制限時間は三時間ね? それまでに私達を倒せないところの子達……砂になっちゃうから」

「ラクサス……」

「バトルフィールドはマグノリア全体……俺たちを見つけたらバトル開始だ」

そして……

「バトル・オブ・フェアリーテイル B・O・F……」

開幕だ!!!」

ラクサスは閃光を放ち姿を消し……闘いの火蓋が落とされた。

36話 共通点

ラクサスの去った後、ギルドメンバーは我先にと、ラクサスと雷神衆を討つべく、ギルドを飛び出して行った。

「むむむっ……ワシが……ワシが止めてやるわ！ 糞ガキがアツ!!」

他のメンバー同様、マカロフもまた同じ……ラクサスを討つべく、ギルドを飛び出そうとしていた。だが……

ゴチーーンツ!!!!

「っ!!!」

マカロフはギルドを飛び出そうとした瞬間、見えない壁にぶつかり、外へは出られなかった。

「おい、何やってんだよじーさん!？」

最後に出て行ったグレイがマカロフに気づき戻ってくる。

「何じゃこれは!! 進めん! 見えない壁じゃっ!!」

マカロフの言ったことが理解できなかったグレイははあ? と言った呆れた表情でマカロフを見下ろす。

「こんな時にどーしちまつたんだよ、ジーさん……見えねえ壁なんてどこにもねえーだろ?」

そう言い、グレイはマカロフを抱え引つ張る。だが、マカロフの身体が外へ出ることはなく、確かに見えない壁に邪魔されているかのような感覚がする。

すると、マカロフとグレイを挟むかのように、空中に文字が浮かび上がる。

「これは……まさか、フリードの術式か!」

「フリード」 とは、雷神衆の1人、文字や術式を使った魔法を得意とする男だ。

「術式?」

マカロフの言葉に怪訝そうな表情を浮かべるグレイ。

「結界の一種のようなものじゃ。術式に踏み込んだものにはルールが与えられる……それを守らねば出ることは出来ん……見よ」

そう語り、マカロフの指差した先に書いてあった文字は……

ールール：80歳を越える者と石像の出入りを禁ずるー

と、書いてあった。

「何だよこれ……この言ったもん勝ち見てえな魔法はっ!？」

「術式を書くには時間がかかる……故に、クイツクな魔法には向いとらんが、畏としては……絶大な威力を発揮する……」

マカロフは苦々しい表情を浮かべ、語る。

「こんな魔法のせい……じーさんだけ出られねえってか？ くそ、じーさんでも壊せねえのかよ!？」

「術式の決まりは絶対じゃ!! しかも、*“年齢制限”* と *“物質制限”* の二重術式とは……フリードめ、いつの間にかこんな強力な魔法を……」

マカロフの言うところつまり、どう足掻いてもマカロフがギルドの外へ出て闘いに自ら参加することは出来ない、という事だ。

その言葉を聞き、グレイはマカロフに背を向ける。

「初めからじーさんを参加させる気はねえって事か……用意周到だな、たく。こうなった以上、俺たちがやるしかねえな……」

グレイの言葉を聞き、ほんの少しマカロフの目が見開く。

「グレイ……!？」

「あんたの孫だろうが容赦はしねえ……俺はラクサスをやるっ!!」
グレイはそう言い残し、街中へと走り去って行った。

その後ろ姿を見つめ、深いため息をつくマカロフは背後でガタツと何かが動く音に気づき、振り返った。

振り返った先にいたのはリーダーダスだった。

「ぐ、ぐめ……オレ、ラクサス……怖くて」

申し訳なさそうに俯き謝るリーダーダスを見て、マカロフはほんの少し険しかった表情を穏やかにし、リーダーダスに話しかける。

「よいよい……それより、東の森に住むポーリュシカの場所は分かるな?」

マカロフからの問いかけにコクンと頷くリーダーダス。

「あ奴ならもしかすると石化を治す薬を持つてるやもしれん……行って来れるか?」

マカロフの頼みに力強く頷いてみせるリーダーダス。

「うい! そーいう仕事なら!!」

そう言い残し、ポーリュシカの家へと走り出て行くその後ろ姿を見つめるマカロフ。

「頼むぞ……」

ほそりと、マカロフの呟きがギルドに静かに響いた時――

「ぐあああああつ!!!」

背後から爆発音と共に大きな叫び声が聞こえた。マカロフは何事かと振り返ると、先ほどラクサスにより気絶させられたナツが起きていた。

「ナツ!! 起きたー!」

「あいい!!」

ハツピーとルージュの声が響く。

「あれっ!?! ラクサスどこ行つた!?!」

つか誰もいねえーし!! どーなつてんだじつちやん!?!」

騒ぐナツを見つめ、こ奴ならもしや……と考えついたマカロフ。

「祭りは始まつておる!! ラクサスはこの街のどこかにいる……早く探し出し倒してこい!!」

マカロフの言葉を聞き、燃え上がるナツ。

「おっしやああああつ!!! 待つてろラクサスううううつ!!!」

ラクサスを追い、ギルドを飛び出そうとするナツ。

だが……

ゴチー……ンツ
!!!!!!

「おっ!?」

「え……」

「「ええええええええっ!」」

何故かマカロフ同様、見えない壁に阻まれたナツにマカロフ、ハッピー、ルージュは目を見開き驚愕する。

ナツは決して石化しているわけでも、80歳を越えている訳でもないのに……

「どーなってんじやああああっ!? ナツ!

お前80歳かつ!? 石像かつ!」

マカロフのツツコミが炸裂するもナツはうがー!と見えない壁に体当たりしながら吠える。

「知るかあ!!! うおおお!!

何で出れねえんだよ、くそおおお!!!」

どんなに頑張ってもギルドの外へ出られないナツ。すると……

「あれえ? 何……?」

見えない壁を見上げていたルージュが何かに気づき、一同がそちらを見上げると……

「何じゃ……バトル・オブ・フェアリーテイル 途中経過速報?」

見えない壁に浮かび上がった文字を怪訝そうに見つめると、さらに文字は増え……

「なっ…… 【ジェットVSDロイVSアルザック 戦闘開始】 じゃと!!」

「なんで?! なんであの3人が戦ってるの!?!」

「あ、また増えたあ……えっとお 【勝者・アルザック】 【ジェット&ドロイ 戦闘不能】

ど……どうなってるのお……?」

その速報の内容にマカロフたちは困惑していた。

「どうして皆が戦ってるの!?! 敵はラクサスでしょ!?!」

ハッピーの辛そうな声に拳を握りしめ、マカロフは憶測を語る。

「恐らく、フリードの術式にはまったのじゃろ……クソ、彼奴らめっ!」

悔しそうにそして、苦しそうに顔を歪めるマカロフ。

愛する我が子同然の子等が争うなど……マカロフにとっては耐え難い苦痛なのだろ

う……

そこに、新たな情報が流れる。

「何…… 【リーダーダス 戦闘不能】 っ!?!」

「そんなあ! これじゃあシクルたちの石化がっ!」

そうこうしている間にも妖精の尻尾のメンバーたちは、次々と戦闘を開始し、その人数を減らしていった。

「よせっ!! やめんか、ガキども!!」

マカロフの叫びがメンバーに届く事はなく……

「街中に術式の罠がはってあるんだあ……それにかかった皆が戦いを強制されて……」

「これがラクサスの言っていた……バトル・オブ・フェアリーテイル」

ルージユとハッピーの悲しみの混じった声がマカロフの表情をさらに曇らせる。

そんな中……

「くうううっ!! 俺も混ぜりてえっ! 何なんだよこの見えねえ壁はよお!!」

的外れな発言をするナツの頭にマカロフのチョップが落ちる。

「混ぜたってどうする気じゃ馬鹿たれが!」

「最強決定トーナメントだろ? これ!!」

俺も出るんだ!! と意気込むナツに呆れた視線を向けるマカロフ。

「ど」がトーナメントじゃ……仲間同士で潰し合うなど……」

そんなマカロフの言葉を聞き、きよとんと首を傾げるナツ。

「ただのケンカだろ？　いつもの事じゃねーかよ」

ナツの言葉に呆気にとられるマカロフ。

「これのどこがいつも通りじゃ……仲間の命がかかっておる！　皆必死じゃ!!　正常な思考で事態を把握出来ておらん!!」

「このままでは……石にされた者たちが砂になってしまい、二度と元には戻らんやもしれん……」

「いくらラクサスでもそんな事しねーよ!!ムカツク奴だけど、同じギルドの仲間だ……ハツタリに決まってんだろ？」

ラクサスのことを微塵も疑わず、こんな騒動になっても尚、
「仲間」　だというナツ。

「ナツ……」

「これはただのケンカ祭り……つーか、結局何で出れねえんだよ!!」

思い出したのか、再び見えない壁にぶつかり、吹っ飛ぶナツ。

「オイラはフツーに通れるよー!」

「あたしもおー!」

ナツの頭上をクルクルと飛び回るハッピーとルージユ。
そんな2匹を見て、ズーンと背中に影を落とすナツ。

「80歳超えてたのか……俺」

明らかに落ち込むナツに苦笑を浮かべるハッピーとルージユ。

「そんな訳ないと思うけど……」

「あたしも……そお思うけどなあ」

「ナツ……（お前はあのラクサスを……仲間だと言うのか？　そこまではやらないと

……そう、信じられるのか……？　ワシは……）」

ナツを見つめ、心の中でそう呟き、拳を握り締めるマカロフ。

そんな彼の視界に、再び現在の戦いの状況が表示される。

【残り時間　2：18】

【残り人数：42人】

「なっ……（42人!?　仲間同士の潰し合いで……もう人数が半分以上に……）」

「くっそー！　やるなあ、ラクサスもフリードたちも！　俺も混ざりてえ!!」

「そんな呑気なこと言ってる場合じゃないんだよ!?!　リーダーダスがやられちゃったからシク

ルたちの石化を解く方法もなくなっちゃって！」

ハッピーがナツにそう告げるが……

「治す事ねえよ……どうせハツタリだからさ」

と、笑みを見せ言った。すると……

「ハツタリだと思ってるのか？ ナツ」

「「「つ！！」」」

「ラクサス!!!」

声が出た方を振り返ると、そこにはラクサスが立っていた。

「アレ思念体だよお！」

ラクサスの姿を見て一目で思念体だと気付いたルージユ。

ラクサスはギルドに残るナツを見つめ、怪訝そうな表情を浮かべる。

「つーか、何でおめえがここにいんだよ？」

ナツ」

「うっせえ!! 出られねえんだよっ!!」

ガルウウウ!! と唸るようにラクサスを睨みつけるナツ。

「ラクサス……貴様……」

マカロフが眩きながら、ラクサスを睨みつけるが、ラクサスは余裕の笑みを浮かべている。

「仲間……いや、アンタはガキって言い方してたよな? ガキ同士の潰し合いを見るに堪えられんだろ? あーあ……ナツやエルザ……おまけにシクルも参加できねえんじゃ……雷神衆に勝てる兵はもう残ってねえよなあ?」

ラクサスのその言葉に黙ってしまふマカロフ。その姿に、ニヤツと笑うラクサス。

「降参するか?」

「く……」

ラクサスの言葉にマカロフは小さく唸る。

すると、ハッピーが口を開く。

「まだグレイがいる!! ナツと同じくらい強いんだ! 雷神衆になんかに負けるもんか!」

「オレと同じだあ!?! アイツがか?」

ハッピーの言葉に反論するナツ。

「だってそうじゃん?」

「グレイだあ? ククツ、あんな小僧に期待してんのかヨ」

ラクサスの面白おかしそうなその声に目つきを険しくするマカロフ。

「グレイをみくびるなよ? ……ラクサス」

ラクサスを睨みつけながらそう断言するマカロフ。

しかし……

【グレイVSビックスロー】

【勝者：ビックスロー】

【グレイ：戦闘不能】

【残り27人】

「えっ……グレイが……」

目の前に表示されたその情報は、余りに酷な知らせであった。

「ふははははっ!!! だーから言ったじゃねーか……なア?」

「う、嘘だっ!! 絶対何か汚い手を使ったんだよっ!!」

「そーだそーだあ! じゃなきや、グレイが負ける訳ないんだあ!!」

ハッピーとルージュの言葉を、高笑いで無視するラクサス。

マカロフの表情は次第に険しい目つきから諦めがちらつき始める。

「あとは誰が雷神衆に勝てるってんだ? ククク……」

「ガジルがいる!!」

「ガジルも強いんだぞオ!!」

「残念っ!! 奴は参加してねえみてえーだぜえ? 元々、ギルドに対して何とも思つてねえ奴だしなア……」

「俺がいるだろーが!! 無視してんじゃねえ!!」

存在を忘れられたのが悔しかったのか、叫ぶナツ。だが……

「ここから出れねーんじや、どうしようもねーだろオよ? ナツ」

ラクサスのその言葉にぐぬぬと反論出来ず。その間、マカロフは考え……そして……

「……わかった、もうよい……降参じや。」

もう……やめてくれ、ラクサス……」

弱々しく、降参を宣言した。

「じっちゃん!?!」

ナツは頭を下げるマカロフに目を見開く。

頭を下げるマカロフを見下ろすラクサス……

その表情は無表情から、不気味な笑みを浮かべ……

「ダメだなア……？　天下の妖精の尻尾のマスターともあろう者が……こんな事で負けを認めちやあなあ？」

どうしても投了したければ、妖精の尻尾の　「マスター」　の座を俺に渡してからに
してもらおうか」

ラクサスはマカロフへと、そう要求してきた。

「汚ねえぞラクサス!!　俺とやんのが怖えのか!?!　ああ!?!」

ギャンギャン吠えるナツ。

「貴様……初めからそれが狙いか……」

ギツとラクサスを睨むマカロフ。

「石像が崩れるまであと約1時間半……」

リタイアしたければ、ギルドの拡声器を使って街中に聞こえるように宣言しろ。妖精
の尻尾の　「マスター」　の座をラクサスに譲るとな

よおく考えろよ?　自分の地位が大事か……仲間の命が大事か……な」

そう言い残して、ラクサスの思念体は消えていった。

「くそっ!!! 俺と勝負もしねえで、何が最強だ!? マスターの座だ!」

うがー!!と地団駄を踏むナツ。だが……

「マスターの座など、正直どうでもよい」

と、マカロフの言葉を聞き、ぐもお! とずっこける。

「いいのかよ!? じっちゃん!!!」

「だが……ラクサスに、妖精の尻尾を託す訳にはいかん。この席に座するにはあまりにも軽い……信念と心が浮いておる」

「でもこのままじゃ……みんなが砂になっちゃうよ?」

マカロフの言葉を聞きながらも、耳を垂れ下げションボリするハッピー。

そして、ルージュも……石像となってしまったシクルに寄り添う。

「シクルウ……」

泣きそうなルージュを見て、ぐぐぐつと拳を握り締めるマカロフ。

「えーい!! 誰かラクサスを倒せる奴はおらんのか!？」

「俺だよ俺!! 俺がいんだろ!？」

「ここから出れんのじゃぞ? どうしようもなからう……」

ナツとマカロフがそんな口論をしていると……

ガサゴソ……ガタツ……

「誰だ!？」

突然バーカウンターの方から物音が聞こえ、全員が視線をそちらに向ける。

そして、振り返った先には……

「ガジガジ……」

鉄製の食器を食べているガジルの姿があった。

「ガジルううう?!」

「食器食べんなよ?!」

「も……もしや……行つてくれるのか?」

マカロフの言葉に、ギヒツと不思議な笑い声を出し……

「あの野郎には借りもある。まあ、任せな」

と、言うのと腰をあげる。

「おおっ!!」

そして、ラクサスを倒すため、出口へと向かうガジルであつたが……

ゴチィー……ンツ

!!!!!!

ナツと同じく、術式の壁に阻まれた。

「「お前もかああああっ!!」」

「えええつ……」

ナツ、マカロフ、ハッピーの叫びと、ルージュの呆気にとられた声が響く。

「な……何だこれはああああっ!!」

「ど……どうなってんだ？　ここから出られないのは、80歳以上と石像だけだろ？」

「ガジル……お、おじいちゃん？」

ルージュの言葉にガウツ!!と吠えるガジル。

「んなわけねえだろ!!　しばくぞクソ猫!!!」

何故、ナツやガジルが外に出ることが出来ないのか訳が分からない一同。

考えるも検討のつかない一同……そして、その間もバトル・オブ・フェアリーテイルは続き……

ついに……

【残り2人】

となった。

「残り2人だけじゃと!？」

「何でお前まで出れねーんだよ! マネすんじゃねえよ!!」
「知るか」

ナツの怒声をそっぽを向き、無視するガジル。

「ハラ減つてきたじゃねーかコノヤロウ!!」

「それは本当に知らんわ!!!」

思わず振り返り、ギヤーギヤー言い合いを始める2人。

ふと、マカロフはそんな2人を振り返る。

「……2人?」

そして、はたと気づく……残りの2人——

「こいつ等だけじゃとおおおお!!」

「オイラは頭数にすら入ってなかったのかあああつ!？」

「あたしも入ってなかったああつ!! ちよつと安心」

残っているのがここにいるナツとガジルだけだと言う事実には、マカロフは驚愕する。

又、自分たちが頭数に入っていないことにハッピーは軽いショックを受け、ルージユはほんのりとほつとしてゐる。

「くっ……（同士討ちや雷神衆の手により妖精の尻尾の魔導士が全滅したというのか……なんという事だ……シクルやエルザも石像となつてしまつてゐる……もう……ここまでなのか……）」

マカロフが諦めかけ、俯いた。

その時――

「出られないのは多分、*“滅竜魔導士”*だからじゃない？」
ナツたちにとって聞き覚えのありすぎる声が静かにギルド内で響いた。

「……え？」

「今の……声は……」

「ま、さかつ？」

「で、でもまだ石像に……」

「なんだ……？」

その声にナツたちはお互いを見合い、ステージ上の石像の一人を見やる。

「……………シクル？」

そう……誰かが彼女の名を呼んだ時——

ピキッ——

シクルの石像の顔に亀裂が入る。

そして、それは徐々に体全身へと回り、ついには……

パキイイイインツ!!!

完全に砕け、石は砕けきった。

そして……

「ふう………やっと出来た」

金の髪を揺らし、ニツと笑う女、シクルの復活だ。

「シクルっ!!」

「お前……」

マカロフ、ハッピー、ガジルはシクルを見上げる。

そして……

「シクルウラウラウラ!!!」

「戻ったあああああっ!!!」

ナツとルージュはシクルに飛び付く。

シクルは静かにルージュを抱きとめ……ヒョイツと体を横へ向け、ナツを避けた。

「んで避けんだよおおおっ!? どわっ!」

「いやいや、流石にあの勢いで来られたら怪我するっつの」

胸に飛び込んできたルージュの頭を撫でながら、床を転がったナツを見下ろし苦笑を浮かべる。

そして、胸に飛び込んできたルージュは涙を流し、更にシクルに抱きついてきた。

「シクルウ……」

「ルージュ……心配かけてごめんね?」

もう大丈夫だよ……とシクルが言うとコクコク、と頷くルージユ。

「何故……石化を……」

マカロフの問いかけにシクルはにっこりと微笑み、答える。

「ソングマジック ディスベル
歌魔法 解除

を石化する瞬間にかけたの。ただ、どうも石化を解くのに時間がかつちやつて……」
シクルのその言葉にニツと笑みを浮かべるマカロフ。

「てか、さっきの 『滅竜魔導士』 だからって……どーいうことだよ?」

シクルとマカロフの会話が終わったところを見て、ナツがシクルに問いかける。

「ああ、あれ? あれはね……」

シクルはそう言うのと、自身もギルドの外へ出ようと出口へ向かい……片手を前に出す。

すると……シクルの手も見えない壁により、阻まれ外へは出られなかった。

「シクルもかつ!?!」

「なんと……」

ナツとマカロフは目を見開き、ガジルも驚愕の表情を浮かべる。

「石化を解除する間に調べてただけど……どうも私たち、滅竜魔導士はこの術式の何かに当てはまって出られないみたいなの」

シクルの言った通りならば……ナツとガジルが出られなかった理由も話がつくとマカロフは頷く。

「滅竜魔導士……それが、共通点じゃったか……」

「じゃあ、どうやって出んだよ!？」

俺もやりてえ!!と叫ぶナツ。

ガジルもなんだかんだラクサスとやりたい様子……すると……

「エバーを倒せばいいんだよね？」

マカロフを見つめ、そう問いかけるシクル。

「ぬ? あ、ああ……そうじゃが……」

マカロフの答えを聞くと、パンツ!と手を叩き、ニツ!と笑顔になるシクル。

「ならー私が行くよ……エバーを討つ」

「「「なにい!」」」

「え……でも、シクル……ここから出られないんじやあ……?」

ルージュの戸惑いを纏う声に振り返り、クスリと微笑むシクル。

「大丈夫!! 私には秘策があるから! とっておきの……奥の手がね!」

ついに動き出す歌姫……

彼女の言うその奥の手とは? 一体……

37話 月の歌姫VS自称妖精

「奥の手……?」

「それって……一体?」

「鏡花水月じゃないんだよね……?」

ルージュの問いかけに頷くシクル。

「確かに、あれなら術式の外にも作れるけど……一定の距離、本体と離れると消えちゃうから……今回は違う方法だよ」

「じゃあ、ちよつと準備するから離れててね?」

シクルはそう告げると身近にあつた短刀を手にし、床を中心に周りの壁やテーブルに何かの魔法陣を記していった。

「……何やってんだ?」

ナツが途中シクルに問いかけるもシクルは魔法陣を記すことに集中し、ナツの声は聞こえていないようだった。

そして……

「よし！ 出来たつと……さて、いい？ ナツ、ガジル……これからやるのは滅竜魔法の言わば応用編のような魔法」

「……応用編？」

「んだそりや……」

ナツとガジルが首を傾げ、ハッピーやルージュも分からないと言った様子だ。

「そう、応用編よ。応用編……滅竜魔法を扱いし者なら誰でも発動可能な魔法だよ。ただし、術者は大量の魔力を消費するわ」

故に、圧倒的魔力が無いと発動できないというシクル。

「下手したら死ぬよ？」

「死……!?!」

「はあ!? 死ぬって……お前」

なんでもないような表情でいうシクルにナツたちは驚愕な表情を見せる。

ナツたちの表情を見て、ああと苦笑を浮かべ

「今回、あまり長い時間これを発動する気は無いから……死ぬ事は無いよ？（まあ、魔力の消費は抑えられないだろうけど……）」

と、言った。

その言葉にほっとするナツたちを見て、シクルはけらけらと笑い、ふうと深呼吸をする。

「じゃ……始めるよ。確認だけど、私はエバーを本気で討ちに行く……いいよね？ マスター」

そう問いかけ、シクルがマカロフを見やるとマカロフは仕方が無いと言った様子で頷いた。

「ああ……やむを得ん……頼むぞ、シクル」

マカロフの言葉を受け、ニツと微笑むと魔法陣の中心に立つ。

「あ、ルージュはここで待っててね」

「え……」

シクルのその言葉に目を見開くルージュ。

シクルは振り返りルージュを見つめる。

「ルージュはここで……私を守ってて？」

シクルのその言葉に、真意を受け取ったルージュは力強く頷いた。それを見たシクルも満足気に笑うと、座禅を組み、魔法を唱える。

「……………【光の道 龍の道 神の道

汝 絶望の道を閉ざし 希望の道を創らん

我が盟約にて 汝 我が魂を捧げ 我を導かん」

滅竜奥義 《光の魂》 「ルミエール・ソウル」

魔法を唱えた瞬間、魔法陣が輝き出し、シクルを包み込んだ。

次にシクルが目を開けるとそこはギルドの外だった。

「ラクサス……………私があなただの目を覚まさせる!!」

そう叫び、シクルは最初の目的であるエバーグリーンを探し、走り出した。

走り去るそのシクルを見つめる一同。その姿が見えなくなると、次に目の前で座禅を組むシクルに視線を向ける。

「……………頼むぞ」

目を瞑り、光に包まれるシクルに思いを託すマカロフ。その瞳の奥では複雑な感情が揺らめいていた。

街中を走り、エバーグリーンを探し求め数分……………

「ああああっ!! もう!! どこにいんのよあいつはっ!!」

未だにエバーグリーンが見つからず、イライラしているシクル。

正直言つて、少々無謀だったかもしれない……ここ、マグノリアの街は規模が広く、今回の搜索範囲はその街全体に及ぶ……尚且つ、今は収穫祭の真つ只中……たくさんの匂いが混じり、エバーグリーンの匂いを特定出来ずにいる。

「はあ……てかホントあの人どこいんのさ……匂い覚えとけば……いや、それは流石に嫌だな……」

あの人香水臭いし……

はあと、再びため息をつくシクル。

「あんまり時間無駄にしたくないんだけどなあ……」

そうシクルが1人呟いた時……上空からの殺気に気づく。

「っ!!」

殺気に気づき、避けるように飛び上がるとシクルの立っていたところに光の玉が飛んでいき、地面を壊していく。

「あちゃ……また壊しちゃった……てか、これ直すの私だよな? 絶対……」

あいつら……人の苦勞も知らずに……

でも……

「でもま……大元をまずは叩かないと……ねえ？」

シクルは地面に着地すると上を見上げる。

「あらあら……どうしてこんな所にいるのかしら？ まあいいけど……さつきぶりねえ？ 妖精姫ちゃん？」

不敵な笑みを浮かべるエバグリーンが上空を飛んでいた……。

シクルはその姿を見た瞬間、ニヤツと笑い……拳に魔力を集める。

「やっと見つけた……あんた達のその腐った性根……私が、滅してやる……」

2人が対峙するとすぐに始まった戦い。

エバグリーンが魔法を飛ばし、シクルはそれを避け、時には魔法で打ち消すなど……エバグリーンからの一方的な攻撃が続いていた。

「あーも……うざったい！ 月竜の翼撃!!」

回転しながら魔法を打ち消すシクル。

「ほらほらどーしたのお？ そんなんじや、あたし達は滅せれないわよお？ エセ妖精姫ちゃん？」

「うっさい!!! 黙って私に倒されなさいよ!!!」

「やあねえ……そんなんだから、背も伸びずにチビだお子ちゃまだ言われるのよ……エセ妖精姫ちゃん？」

エバーグリーンのその言葉を聞いた瞬間……ブチッと理性の線が切れる。

「……へーえ？ そんなに……そんなに、あたしに殺されたいか？ エバーグリーン……」
ドツと、魔力が高まるシクル……それを感じ、今まで余裕の笑みを称えていたエバーグリーンの表情が曇る。

「な、なに……この、魔力……」

そうしている間も更にシクルの魔力は上昇し……次にエバーグリーンをその視界に入れた瞬間……

「お望み通り殺つてやるよ……自称妖精が」

ゾクッ！ とエバーグリーンに恐怖が襲う。

「ひっ……な、なに……今の」

訳の分からない震えに襲われるエバーグリーンにゆっくりと近づくシクルを見て、エバーグリーンは焦り、混乱する。

「ひっ！ く、来るなっ!!!」

エバーグリーンは叫びながら無我夢中となり、魔法を飛ばす。

だがその短調となった魔法の玉をシクルが避けられないわけもなく……

冷静に、小さな動きでそれらを交わしていき……遂には、エバーグリーンからおよそ50mの距離まで来ていた。

「な、なによ……何よ何よ!! お子ちゃまの癖に……生意気なのよお!!! レブラホーン!!!」

シクルへと再び魔法を飛ばすエバーグリーン。だが、シクルはフツと笑みを浮かべ……

「そうそう……攻撃を避けている時に気づいたんだけど……それ、少し光が混じってるよねえ?」

そう呟くと……左手をかざし……、エバーグリーンの魔法をわし掴んだ。

「これは……光……即ち、あたしには効かない……あたしの食は……月と光……」

そう言い、シクルはエバーグリーンの魔法を食べた。

ゴクツと音を立て飲み込んだシクルを見つめ、驚愕を隠せないエバーグリーン。

「な……なんっ!? 何よそれえ!」

エバーグリーンは声を荒らげる。

「ふうー……さあ……懺悔の時間よ……」

ニヤリと笑みを浮かべるシクルを見て、エバーグリーンは察する……勝てない……と。

そして、瞬きを1度した……次の瞬間

「……へ?」

目の前にシクルの拳が振り上げられていた。

「……月竜の鉄拳っ!!」

ゴッーッーッー!!!

シクルの拳はエバーグリーンの真横を通り、地面を砕き割った。そして、その風圧でエバーグリーンは後方へと吹っ飛び、壁へと激突する。

「きゃあ!」

壁とぶつかり、痛みに呻くエバーグリーン。

そこに……

チャキーン

「っ！」

「……さあ……石像にした皆を元に戻しなさい？ さもないと……切るぞ？」

首筋に当てられる剣先とシクルから放たれる殺気にゴクツと息を呑む。

だが、ここで怖気付いては雷神衆の名が廃る……と、そう考えたエバグリーンはフツと強気な表情を見せる。

「ふ、ふん……やれるもんならやってみなさいよ……まあ、あんたが動けば、あたしが石像達を砂に変えちゃうわよ？」

「……は？」

不敵な笑みを浮かべるエバグリーン。

「知ってるでしょ？ あたしは遠隔操作で石像を砂に変えることが出来る……砂になったら2度と元には戻せない……」

本当に砂にする気はなかったエバグリーン。このハツタリでシクルが諦め、油断した瞬間にシクルを叩くつもりであった。

……だが、エバグリーンの目論見はここで大きく崩れることとなる……。

「……へえ？ そう……じゃあ、やれば？」

「……へ？ え……」

予想外の返答が戻ってきた、エバーグリーンはシクルを見上げた。
その目に入ったのは……

「ひ……っ!?」

背後に竜の姿が揺らめくシクルの姿……否、エバーグリーンの目には既にシクル自身が竜そのものに見えた。

「ほら……出来るんでしょ？ やりなさいよ……その前に、あたしがあなたの息の根を止めてあげるから」

そう言い、振り上げられる刀……

「ひっ!? い、いや……た、助けっ!

きやああああああああっ!!!」

ギイイイインツ
!!!!

振り上げられた刀が貫いたのはエバークリーンの顔、真横の壁だった。

「……脅しつてのはこーやんの。分かった？」

「は……はひっ……」

そこでエバークリーンの意識は完全に途絶え、気を失った。

ふうと一息つき、十六夜刀をしまい顔にかかる髪を払い除け……不意に振り返ったシクルの視線の先には……

「既に倒していたか……流石だな、シクル」

鎧の女騎士 “エルザ” がいた。

「とーぜん……私がエバーにやられる訳ないでしょ？ それより……やつぱり、エルは先に石化が解けたみたいだね」

につこりと微笑むシクルにああ、と頷いてみせるエルザ。

「この右眼のお陰でな……」

そう、エルザは言い自分の右眼を抑えた。

エルザの右眼は義眼となっており、その影響で石化の魔法が半減されていたのだ。

「さて……エバーグリーンもやったところだし、私は一度魔法を解いて元の体に戻るよ」
流石にこれ以上魔法の持続はきついし……

そう告げ、シクルは魔法を解除しようとするがその前にエルザを見つめると

「多分、ラクサスの事だからこれで終わらないと思う……だから、エルは先にラクサスを探して抑えておいて……後から私も追いつくから……絶対」

「ああ……任せておけ、シクル……お前も、無理をするなよ」

エルザの警告にコクリと頷き、魔法を解除し、本体へと戻った。

シクルがエバーグリーンを倒し、エルザと合流するほんのわずか前の事……ナツやマカロフの残るギルドでは――

「ねえマスター……ほんとにシクルは外で戦ってるの？」

シクルが魔法を発動してから数分……

ハッピーは魔法陣の中で座禅を組み、光に包まれるシクルの身体を見つめマカロフに問いかける。

「ああ……間違いない……よいか？この魔法発動中は絶対、術者に触れてはならん……
そして、あの魔法陣の中に入り込むのも許されん……入れば最後、魔力を奪われるぞ」
マカロフの言葉にゴクリと息を呑む音がギルドに響き、シクルを一同が見つめる。

「それに、いざとなればエルザも復活しておる……何とかなるじやろ」
シクルが出ていった直後、エルザもまた石化から解放されていた。

「………一ついいか？」

「あ？ ンだよ………」

ナツたちから少し離れたところで腰を下ろし、胡座をかいていたガジルがナツたちに話しかけてくる。

「あいつは……あのシクルとかいう奴は、ほんとにそんなにつえーのか？ 以前戦った時は……そんな感じはしなかったぞ………」

以前手を合わせた時の印象だと、ガジルにとってシクルは隙だらけで注意力も散漫なとても妖精の尻尾最強には思えなかった。

「何言ってるんだ、お前……シクルはめちやくちやつえーよ!!」

何言ってるんだこいつ?と言った表情を浮かべるナツ。

「シクルが本気になることはほとんど無いからねえ……めんどくさがりだし……」
苦笑を浮かべ、マカロフの周りを浮遊しているルージユ。

「前にシクルとラクサスがギルドで戦ったことも何度もあるんだよ?」

ハッピーの言葉に少し興味を持つガジル。

「……そんな時は?」

「あの時は凄かったなあ……ギルドも危うく吹っ飛ぶ所だったもんな!」

ナツの楽しげな表情にマカロフは呆れたため息をつく。

「笑い事ではないわい……危うく本当にギルドが消し飛ぶところだったんじゃぞ……」
「マスターが止めたんだもんねえ」

「……そんな時、決着は?」

「んー? 引き分けだったと思うよ? あ、でもあの後数日はラクサスが寝込んでたみたいだからシクルの勝ちなのかな?」

ハッピーの思い出したような発言にガジルは内心シクルへの興味を高めていた。

弱いと思っていた奴の本気を見てみたい……何故か、そう思ったガジル。

そんな時……

……ピキッ……

ステージの上から何かがひび割れる音が聞こえ、一同が振り返ると……

石像になってしまった者達のそれにヒビが入っており……やがてそれは全身へと増えていき……

石化が解除された。

「ルーシイいいいい!!」

「元に戻ったあつ!!」

「……え? え、なにっ!?!」

元に戻ったルーシイの胸元に飛び込むハッピーとルージュ。

他の女性達も石化から元に戻ったのを確認し、マカロフはニヤツと笑みを浮かべ、見

えない壁に表示された内容にグツと拳を握る。

【シクルVSエバーグリーン 戦闘開始】

【勝者・シクル エバーグリーン 戦闘不能】

それは、どこかにいるラクサスの元にも流れ……

「っ……………!!」

忌々しげに表情を歪め、握りしめた拳からは血が滲み出ていた……。

そして、ふと、ニヤリと浮かべたその笑みは……暗く、黒い何かを纏っていた……。

これで終わると思うなよ……

本当のバトル・オブ・フェアリーテイルは……これからだ……

38話 神鳴殿

シクルの勝利を知ったナツたち。

「勝った!! シクルが勝ったんだあ!!」

ハッピーが飛び上がり、喜ぶ。その隣でルージユも喜び、ルーシイに二パツ!と笑顔を向ける。

初めは訳の分からなかったルーシイや他のメンバーもマカロフやハッピーから説明を聞き、現状を理解する。

その時、シクルを包み込んでいた光が消え、魔法陣も解除される。

そして、ゆつくりとシクルは目を開き、数回瞬きをすると額を抑え呻く。

「つ……あークラクラするう……あ、良かった皆元に戻ったんだね」

「シクル!! シクルが助けてくれたんだよね? ありがとう!!」

笑顔でシクルにお礼を言うルーシイに続きミラやレビイ、ビスカとジユビアもお礼を言う。

これであとはラクサスを皆で探し、何とかすれば全てが終わる……そう、シクル以外のメンバーが思った時だった。

『よお、聞こえるか？　じじいにギルドの奴ら……』

シクルたちや街で未だに戦っていたメンバーの目の前に魔水晶映像に映るラクサスがデカデカと現れた。

「っ！　ラクサス……」

『ルールが1つ消えちまったからなあ……今から新たなルールを1つ、追加する』
ラクサスはそこで一度言葉切る。

『ククク……この、バトル・オブ・フェアリーテイルを続行するため……俺は　//　神鳴殿
//　を起動させた』

「神鳴殿じゃとおっ!?!」

ラクサスからの宣言を聞いた時、マカロフはプルプルと震え、青筋を立ててラクサスを睨む。

そして、シクルも……

「……ルール変更……？　神鳴殿って……ふざけんなよ、糞ガキ……」

怒りを募らせていた。

ラクサスの映った映像が消えた瞬間、マカロフの怒声がギルドに響く。

「何を考えておるんじやラクサスウ!! 関係の無い街の人たちまで巻き込むつもりかあ
!?!」

大声をあげた……その時——

ドグンツ!!

胸が痛み出すマカロフ。

「うぐっ……!?!」

胸を抑え、倒れるマカロフ。

「マスター!?!」

「じっちゃん!!」

「大変……いつものお薬……!?!」

突然倒れたマカロフに慌てふためくナツたちと奥の部屋へ、発作時のお薬を取りに戻るミラ。

シクルもマカロフの元へ駆け寄ろうとするが……立ち上がった瞬間、目眩に襲われ

「マスターっ……う（あ、倒れ……）」

「っ!! おっ……と!?! 大丈夫か?」

倒れかけたシクルに気づき、支えたナツ。シクルは顔を上げ、弱く微笑みながら頷く。「大丈夫大丈夫……ちよつとふらついたただけだから……ありがとう、ナツ」

「あんまし無理すんなよ？じつちゃんは大丈夫だからさ」

ニツ！と笑い、安心させるようにシクルにそう言うナツを見つめ、不安だった心が晴れる。

マカロフはルーシイたちが現在、介抱していた。すると、奥へ薬を取りに行ったミラがどこか慌てた様子で戻ってきた。

「皆大変!! 空に何か……!」

「「空……?」」

ミラに続き、ナツとシクル以外のメンバーがギルド2階のバルコニーから空を見上げると……

「……何、あれ……」

マグノリア全体を囲うように空中に浮かぶ球体の何か……魔水晶のようなそれ……

近くには説明文のようなものが書かれており、それによると制限時間になると街を魔水晶から発せられる雷が襲うというものだった。

「そんなことさせないっ！ スナイパーライフル換装!!」

ビスカが銃を換装し、魔水晶へ向け2発の弾を射つ。

その時、丁度ナツに支えられシクルがバルコニーへやって来……

「ビスカだめ!! それを壊したらっ!!」

と、大きな声で叫んだ。

「え……」

だが、時既に遅く……ビスカの撃った弾は魔水晶を破壊していた。そして、破壊から数秒、時間が開き……ビスカの身体を強い衝撃が襲う。

「ああああああああっ!!」

「『ビスカっ!!』」

「何、今のっ……!!」

ビスカの身体を強力な雷が襲い、その瞬間、ビスカは倒れてしまう。

「あれを壊しちゃダメ! あれには生体リンク魔法が掛けられている……壊したらこっちがかみなりにやられちゃうのっ!」

「んじゃどーすんだよ!?!」

ナツに支えられながら、シクルはレイイが抱えるビスカの元へと歩み寄り、その隣に腰を下ろす。

「シクル……」

シクルを見上げるレヴィイの瞳は涙で少し濡れていた。

「大丈夫……ビスカは、死なないよ……死なせない」

不安げなレヴィイを安心させるようにそう呟くとビスカに手をかざす。

「歌魔法 ソングマジック 治癒 ヒール」

ビスカに治癒の魔法をかけるとかけ終えた瞬間、ガクツと体から力が抜けるシクル。

「お、おい！ シクル……」

「ごめ……ちよつと休憩しないと……動けないや」

ははつと乾いた笑いを出し、ふうと息をつくシクルはルーシイたちを見やう。

「きつと今街中でエルが先に走り回ってラクサスを探していると思うの……」

皆も、ラクサスと残りの雷神衆を探して……それから、レヴィイは少しここに残って

……フリードの残した術式を解除してほしいの……

出来る？」

シクルの言葉に全員が頷く。

「任せて！」

「ありがとう、シクル！」

「シクルは少し休んでな！」

「シクルさんが回復している間に何とかします！」

「私は術式を書き換えればいいんだよね？ 任せて!!」

全員が頷く姿を見て、シクルはフツと微笑み、「お願い……」と呟いた。

その言葉を聞き、ルーシー達はギルドを飛び出す。

「ハッピー！ ハッピーも先に行け！ あとから俺も行く!!」

「あいさー!!」

ナツの指示に従い、ギルドを飛び出すハッピー。

ビスカはルージュが抱え、医務室へと運び、マカロフの眠る隣のベッドに寝かせた。

そして、シクルとナツ、ルージュがギルドの広間に戻ると既にレビイが術式の解除に

専念していた。

その様子をマジマジと見つめるガジル。

「……ナツ」

「あ？ どーした？」

レビイが順調に術式解除の公式を作り出しているのを見た瞬間、シクルは段々と眠くなる感覚に陥る。

「ごめん……ちよつと、眠くなっちゃった……少し、休む……ね」

途切れ途切れにそう告げたシクルを見下ろし、小さく笑みを作るナツ。

「ああ！　ありがとな、シクル！」

今は休んでろ……その言葉を最後に、シクルの意識は途絶えた。

次にシクルが目を覚ました時……既に術式はレビイが解除しており、ナツとガジルはいなかった。

「あれ？　起こしてくれなかったのか……」

「あ！　シクル!!　目が覚めた？　もう大丈夫？」

医務室から出てきたレビイはシクルが目覚めている事に気づき、駆け寄ってくる。

その表情は少し悲しげに見えた……。

「うん、ちよつと寝てすつきりしたよ。ナツとガジルはもう行ったんだね……」

それより、レビイ……どうしたの？　なんか……浮かない顔してるよ?」

シクルのその言葉を聞いた瞬間、レビイは瞳を潤わせ……静かに、告げる。

「マスターが……危篤だって……」

「……え」

レビイの話を聞いた直後、シクルはギルドを飛び出した。

ラクサス……何処にいるの!?

お願い……もう、もうこんな事やめて……

おじいちゃんの所に行ってあげよう……? ?

待ってるよ……待ってるんだよ……

ラクサスつ!!!

街中を走り回り、ラクサスを探すシクル。

そんな彼女は突然大地が震えるような魔力のぶつかり合いを感じとる。

「この感じ……まさか、ミストガン? (帰ってきたの……?)」

シクルは魔力の発信地を振り返る。

その先は……

カルデア大聖堂——

「…………やつと…………見つけた…………ラクサス!!」

大聖堂へ向けて足を早めていると次第にその全貌が見えてきた。

「ちよいちよいちよい…………何やってんのあいつら…………（何でそんなにぶつ壊してんのさあ!?! それ後で直すの私なんだっての! ふざけんなよつ!!!）」

大聖堂の窓ガラスはヒビ割れ、所々崩れ落ちており、壁も一部崩れていた。

これ全部終わったらちよつとお仕置きだ…………と、1人決意し、頷き、大聖堂へと入ると…鎧の女騎士の宣言が耳に入る。

「神鳴殿…………全て、私が破壊するつ!!」

「なつ!?! エルザ…………!!」

「つ!?! テメエ、ゲームのルールを壊す気かつ!?! それにもう発動まで時間もねえ…………1個ずつでは間に合うはずもねえ!!」

ラクサスの怒声が響き渡る。

「全て同時に破壊する…………街も救われる」

冷静に言葉を告げるエルザ。その言葉を鼻で笑うラクサス。

「はっ！ 無理だな……！ つ壊すだけでも下手すりゃ死ぬ程の高圧電流が流れるんだ……全部一人でやればためえは死ぬぜ」

「……なら、2人でやれば半々……死ぬ確率は低くなるよね？」

「「っ!？」」

シクルの到着に気づいていなかった、ナツ、エルザ、ラクサスは驚き、声のするほうを振り返る。

3人の視線を受けるとシクルはニツと微笑み、エルザの隣に立つ。

「一人で無理でも……仲間とならなんだって出来る!! ……ね? エル」

笑みを見せるシクルを見て、エルザも自然と自信に満ちた笑みを浮かべる。

「ああ……そうだな」

2人の会話を聞き、顔を歪めるラクサス。

「ふざけるなあ! やらせるかつ!!」

エルザとシクルを止めようと魔法を飛ばすラクサス。

だが、それは2人に当たる前にナツが弾き飛ばした。

「やらせねえよ!! シクルたちの邪魔はさせねえぞ、ラクサス!!」

「ナツ……」

前に立つナツを見つめるシクル。

そして、ナツは1度シクルとエルザを振り返ると、再びラクサスへと向き合い……口を開く。

「……信じていいんだよな？」

「……え？」

「信じてるぞ……シクル！ エルザ!!」

「ナツ……」

「お前……」

「出来るかじゃねえぞ！ お前らの……無事をだ!! ぜってえ……死ぬなよ!!」

ナツのその言葉を聞き取り、シクルとエルザはフツと笑みを浮かべ……

「もちろん!!」

「任せておけ……」

と、告げるとエルザが先に大聖堂を出ていき、シクルはじつとラクサスを見つめた。

「……ラクサス」

「あ？」

「すぐ戻ってくる……だから、待ってなさい……あなたには、伝えなきやいけないことがあるんだ……でも、それは街を救ってから……」

シクルは一度目を閉じ、言葉を途切ると……次の瞬間、ふっと目を開け、ラクサスを睨む。

「それまで……首洗って待ってろ!!」

そう叫び、シクルはエルザを追い去っていった。

シクルは少し離れた所、街の広場でエルザを見つけた。

エルザは既に剣を幾つも召喚し、破壊の準備をしていた。

「エルっ!!!」

「シクルか……悪いが半分、頼めるか？」

エルザの頼みにつこりと微笑み、頷く。

「任せて!! じゃあ私が300壊すから残りの300……よろしくね!」

東をエルザが、西をシクルが担当することになりシクルは魔力を高め、撃つその時を待つ。

隣では200まで剣を出しきるも魔力が足らなくなり、膝をつくエルザ。

「エル!! 大丈夫!?!」

シクルが心配し、声をかけるがエルザは気合で立ち上がる。

「大丈夫だ! 問題ない……だが、このペースでは発動前に300破壊が……」

エルザに少し焦りが見え始めた時……

脳裏に声が響く。

《おい! 皆聞こえるか!? 一大事だ……空を見る!!》

「この声……ウオーレン?」

「念話か……!」

《聞け! 空に浮かんでる物をありつただけの魔力で破壊するんだ! 一つ残らずだ!!

あれはこの街を襲うラクサスの魔法だ!

時間がねえ! 全員でやるんだ!》

ウォーレンの言葉にエルザはほんの少し目を見開き驚く。

「なぜウォーレンが、神鳴殿を……………」

《その声はエルザか!? 無事だったのか!?》

グレイの声が響く。

《石から戻ったのか!?》

「グレイ!? そうかお前が!!」

エルザの納得した言葉にグレイは頷く。

《とにかく時間がねえ!! いっせーのーせであれを壊すぞ!!》

ウォーレンの声が響いた瞬間…………「ちよつと待て!!」と声が響く。

《ウォーレン! てめえ!! 俺にしたこと、忘れたわけじゃねえだろおな?》

怒鳴り声を上げたのはマックスだった。

彼は先程、ウォーレンと共にフリードの術式にハマり、ウォーレンに倒されていたのだ。

その時の怒りが抑えきれないマックスはウォーレンに言い放つ。
ぐつと息を呑むウォーレン。

《マックス……わ、悪かった……》

謝るウォーレンだがそれに耳を傾けない様子のマックス。

そして、マックスに続きぎやあぎやあと念話で喧嘩を始めた一同……。

「ちよ、ちよつとちよつと……喧嘩してる場合じゃ……て、だから……話を……おい
……」

喧嘩をするメンバーに声をかけるも全く聞く様子がなく……シクルの額に青筋が浮かび上がり……次第にそれは増え……、そして……

「うるつさあああああああああああいつ
!!!!!!!」

《っ!?!》

突然響いたシクルの怒鳴り声に一同は動きを止める。

「ちよつとは黙れないのあなた達!!!」

今は喧嘩してる場合じゃないでしょーが!?

街を守りたいんじゃないの!? 喧嘩ならいつでも出来んでしょーがアホ共おつ!!!」

シクルの怒声を聞き、一同は目が覚めた。

このままでは行けない……と

《で、でもシクルっ!あれには生体リンク魔法がかけてられて……》

「そんなん気にしてたら間に合わないでしょーが!! 大丈夫っ!! みんなでやれば何とかなる!!!」

そう告げ、シクルはパンツ!!と両手を叩く。

「北東の200個はエルが!北西の300個は私が!残りの南側……100個、皆でお願い!!」

そして……シクルの掛け声と共に、一斉にギルドメンバー全員の魔法が上空に向かって放たれる。

「月竜の……咆哮うううううううううううううううううううううううう!!!」

神鳴殿、600個の同時破壊に成功する。

神鳴殿がひとつ残らず、崩壊していくのを見つめ、祠げに微笑む一同……そして……
生体リンク魔法が襲いかかる……。

「うぎやあああああつ!!!」

「きやあああああつ!!!」

「あああああああつ!!!」

「ぐうつ?!」

「つつつ!!!」

神鳴殿破壊から数分、念話を通じお互いに心配し合う声が響く……。

それらを聞き、シクルはホツと息をつき、微笑む。そして……

「エル……大丈夫?」

「ああ……大丈夫だ……シクル、行くのか?」

エルザの問いかけにコクリと頷く。

「……まだ、ラクサスに伝えなきゃいけないこと……伝えられてないから」
そう言い、シクルは重い身体を起こし、立ち上がる。

「……無理するな、シクル……」

心配気なエルザを見下ろし、ニッコリと微笑むと「大丈夫！」と言いきる。
「向こうにはナツもいるし……それに、多分彼もいる……私が行かない訳にはいかないから……行つてきます!!」

そして、大聖堂へ向け再び走り去るシクルを見つめる。
「……頼んだ」

39話 黒髪のシクル

神鳴殿の破壊に成功し、痛む身体を無視し大聖堂へと走るシクル。

途中、眩い光に包まれ、目の前が霞み足を止めたがすぐに光は収まり、再び走り始めた。

そして、大聖堂についた時……目の前ではラクサスに隠された本当の力、
“ を使いナツと共闘していたガジルに向け強力な魔法を放つところだった。 ” 竜の力

「消し飛ばえ!! レイジングボルトオ!!」

もうほぼ発動しかけており、2人を抱え完全に避けるのは無理だと瞬時に判断したシクルはナツとガジルの前に立ち、庇った。

「くっ!!」

「シクルっ!?!」

「てめえ……なんでっ!？」

ガクツと膝をつくリクル。流石に魔力の減っていた身体でそう何度も魔法を受ければ少量でもダメージは重なっていく。

「つ……（痛みはないけど……痺れがっ）」

麻痺により体が動かかせないリクルだが顔を上げ、震える足に力を込め、立ち上がりラクサスを見据える。

「ラクサス……お願い、話を聞いてっ!」

「黙れ……」

「ラクサスっ!!」

「黙れええええっ!!」

再びリクルを襲うラクサスの雷。

「つうー!! お、願……い! 私……話、を……聞いてっ! ラクサスっ!!」

「てめえの話になんか興味はねえ!! 黙れ、リクルっ!!」

ラクサスのその言葉と表情、瞳を見てリクルは悲しくなる。

「なん、で……どうして……あな、たは……仲間を想う……優しい、人……だったツ!!」

あの日から……貴方が……苦しんだのは……よく、分かる……そのせいで、誰の、言葉も……想いも、届かなくなっていた……でもっ！

今だけは……私、の……話を、聞いて！

ラクサスっ!!」

「黙れ!! 俺は……俺は誰にも指図は受けねえ!! てめえも……じじいも!! ギルドのやつの声も!!! 俺には関係ねえ!!!」

シクルに叫び、ラクサスは再び魔力を高め、シクルへと標準を合わせる……。

「ラクサスっ! やめろオ!!」

「っ……」

シクルはギュツと目を瞑る……雷に耐える為ではない……ラクサスの……その眼を見るのがシクルは怖かった……。

ラクサス……お願い……話を……

貴方の……おじいちゃんが……ラクサス……

「やめてえっ!!! ラクサス!!!」

「「っ!?!」」

「……レ、ビィ」

大聖堂の入口で呼吸を乱し、ラクサスを見つめるレビィの姿……その瞳は、涙で濡れていた。

「ラクサス……お願い……シクルの話を! 聞いてあげてっ!! じゃないと……きつと後悔することになっっちゃうよ! ラクサス……」

そうラクサスに叫び、足を進めるレビィ……

「よせっ! 馬鹿、来んじゃねえ!!!」

ガジルの声が響く。それでもレビィは足を止めない。

「ラクサス……あんたの……あんたのおじいちゃん……マスターが!! 危篤なの……」

「「っ!?!」」

「……おじいちゃんが?」

レビィの言葉にナツとガジルは目を見開き、言葉を無くしラクサスも驚愕の表情を浮

かべる。

その表情に、一度は気持ち揺らめいたか……マカロフに会ってくれるのではないか？ そう考えたシクルだが……

「ククク……そうか……遂にくたばるのか……これで妖精の尻尾は俺のもんになるんだなあ……!!」

……ラクサス……どうして……

その言葉が耳から脳へ、そして感情へと流れた時……どこかでピシツと音が小さく鳴った。

「ラクサス……どうしてっ！ どうしてそんな事言うの!? ラクサスっ!!!」

「黙れ、レビイイイイイッ!!!」

怒りに狂うラクサスはシクルからレビイへと標準を変え、高圧な雷を放った……。

「っ!! レビイっ!!!」

「あぶねえっ!!」

ナツとガジルの声が静かに響く……レビイは身構え、身体が固まり、目を瞑る。

だが……

「ぐっ！ あああっ!!!」

「つーー!!? シ、シクル!!?」

レビイを庇い、雷に撃たれたシクル。

両手を地面につき、肩で息をするシクルにはつと声を上げるレビイ。

「だ、大丈夫……ちよつと、痺れた、ただだよ……」

不安げなレビイを安心させるため、振り返りにつこりとみを浮かべるシクル。

しかし……

「つー シクル、あぶねえ!!」

「あ……」

ナツの叫びにはつと前を向くと……その瞬間、頭を殴られ、地面に叩きつけられる。

ドゴオツ!!

「がっ……!!」

頭を殴られた衝撃も伴い、目の前が揺れ、意識が朦朧とするシクル。

「シクルっ!!」

「やめろラクサス!!」

レヴィとナツの声が響く中、立ち上がれないシクルの頭をわし掴むラクサス。

「くっ……」

「ジジイなんて関係ねえ……俺は……俺は、力あるギルドを作るためなら!!! 他はどうなっても構わねえ!!」

そう叫ぶと同時にシクルの腹を殴り飛ばす。

「かつはーうつ……ラク、サス……」

殴られた時……再び、ピシ……ということがシクルの脳裏で響き、それは次第に多く、強くなる。

「やめろって……言っただろ、ラクサスウ!!!」

シクルの呻き声に、ナツがキレ、ラクサスに攻撃を仕掛ける。だが……

「うるせえ、ナツううう!!!」

「ぐあっ!!!」

ナツは真正面から雷にあたり、吹っ飛ばす。

そして、ラクサスはシクルの首をぐつと掴みあげ……

「今日こそ死に晒してやる……シクル」

バチバチバチッ
!!!!

放電するラクサス。それは確実にシクルの身体を傷つける。

「うあ!! あああああああああつ!!!」

ピシ……ピシッ

「やめ、ろお! ラクサスー!!!」

「シクルが死んじやうよ!! ラクサス!!」

ナツとレビイの静止の声が響くが、ラクサスが聞き入れることなく……更に放電を強める。

流石に直接身体に流し込まればそれはダメージとなり、シクルの身体を蝕んでいった。

「ああああああああああつ!!!」

ピシピシッ……

「じじいなんて知るか……死んで精々するぜ……死んだら俺がマスターだ!!」

マスターになったら手始めにためえら全員壊してやるよお……!」

「う、ああ! あああああああああつ!!!」

ピシ……ピ……ピキピキツ

ラクサスの言葉が朦朧とする意識の中何故かクリアに脳裏に響く……そして、その言葉を聞く度にシクルは身体の異変を感じる。

……ンツ……トクンツ……ドクンツ……

「あああああつ……!!! (な、ん……む、ねが……痛い……魔力が……)」

「全部壊してやる!! ギルドも!! てめえらの絆も!!」

全部まっさらにして新たに最強なギルドを作るんだよお!!」

抑えられない……

バキツ……!!

鎖が……解き放たれる……。

ドグンツ……!!!

「あああああゝあゝアゝあゝあゝアゝアアアゝアゝつ!!!」

新クルの悲鳴の雰囲気が変わった……その瞬間、新クルを中心に物凄い光と爆発が起きる。

「きゃああ!？」

「ンだア!？」

「なんっ!!」

突然のそれにナツたちは目を瞑る。

そして、目を開け、視界に映ったのは……

「……………やっと……………お出ましか……………」

愉快げに表情を歪め、嗤うラクサス……

そして……

「……………シ、クル?」

「なん、だ……………ありやあ……………」

「あ、れは……………!？」

ナツたちの見つめる先には……普段は眩いほど綺麗な金の髪を揺らすシクル……だが、今日の前に立つのは……

真つ黒に染まった長い髪を揺らし、ラクサスを殺さんと睨む……感情のない瞳で見つめる……シクルの姿であった……。

「……ラクサス………
//俺//を……怒らすなよ………」

………殺ス

誰の声か……わからない……

だが、確かに……その声はシクルから発せられた……

その後はナツたちの想像を絶していた……

お互いに本気でやり合い……やられればやり返し、またやり返す……その繰り返し

……

そこに、手加減の様子はない……

「シ、クル……」

シクルから発せられる魔力の威圧によりレビイは耐えきれず、身体から力が抜け気を失う。

倒れるレビイを咄嗟に支え、ガジルもじっとラクサスへと視線を向ける。

「んだよありやア!? 尋常じゃねえぞ!」

様子が一変したシクルに驚愕の表情が隠せないガジル。その横でナツが動く。

「……止めねえと」

「止めるって……火竜、まさかアレをか!? 無茶言うなつての! あんな戦いの中に

入ったらためえが死ぬぞ!」

「うるせえ!! あんなのシクルは望んじやいねえんだ!! 止めねえと……正気に戻った

時、シクルが壊れちまう……」

ナツはそう言い、止めるガジルを無視し、シクルの元へと走り出す。

知ってるんだ……

シクルが自分のことを “私” じゃなく、 “俺” って呼んでる時は……

周りが見えないくらい魔力が暴走している時……あの時も……

「シクル！ やめろ!! ……シクルっ!!」

雷と光の飛び交う戦場を掻い潜り、シクルの元へと駆け寄るナツ。

その身体は時折、避け切れずに魔法が当たり、傷が少しずつ増えていつていた。

それでも、ナツの見据える先はただ一人……

「シクル……目エ覚ませ!! シクル!!」

シクルとの距離がやっと……あとほんの少いで手が届く……そう思った、その時——

チャキキ——

「っ——!!」

首筋に十六夜刀の剣先が当たり、僅かに首筋の皮膚が切れ、血が流れる。

「……シクル」

ナツを見つめるその瞳は暗く、濁っている

「……それ以上俺に近づくな……近づくのならば……貴様も殺ス」

シクルのその言葉に一瞬目を見張り驚くナツ。

だが、ナツはすぐにじつとシクルを見つめると……

グッー

「っ!? なに、を……」

ナツは躊躇いもなく十六夜刀を握り、押し返した。握った手からは血が流れ、刀身を伝い、ナツの血がシクルの手元へと流れる。

そして、それはシクルの手を赤く汚し始める。

「……………あ……………」

ナツの血だ、と認識するとシクルの眼は徐々に見開かれる。

「……………シクル」

眼を見開き、次第に震え始めるシクルを見下ろし、優しく声をかけるナツ。その声にゆつくりと顔を上げるシクル。

「……………ナ……………ツ……………？ お……………わた、し」

「やっと俺の名前、呼んだな！ シクル……………あとは俺に任せろ……………な？」

シクルは休んでろ……………そう言い、シクルの身体を抱きしめるナツ。すでに十六夜刀は下ろされ、力なく刀身は地面に向いていた。

ナツの温もりを感じ、次第に荒れ狂っていた魔力が収まり始めるシクル。

「……………あ……………」

魔力の暴走はゆっくりと収まっていくが、その反動にシクルは強制的に眠気に襲われ、瞳が閉じていく。

最後に見たのは優しく微笑むナツの姿だった。

夢の中……………

……………ハ……………ハ……………は……………

シクルが目を開けると広がるのは黒い黒い空間だった。
ただ無限に広がるその黒い空間にシクルはほんの僅かな恐怖とどこか懐かしさを感じていた。

ここ……懐かしい……

……なんで？なんで……懐かしく感じるんだろう……

分からない……そう、思っていると……

《シクルよ……》

っ!!

背後から聞こえる声に驚き、振り返る。

だが、そこに誰かの姿はない……

それでも、再びシクルの脳裏には誰かの声が響き始める。

《シクル……》

……我らが再び目覚める時まで……

奴らを……頼んだぞ《

ああ……そうだ……約束、したんだ……

声の主に心当たりがついたシクル。

その瞬間黒い空間が白く塗り替えられていく。

約束……したんだ……皆の代わりに……

子供たちを……守るんだって……ね？

約束……したもんね？……イグニール

そう声をかけた時……シクルの意識は浮上する。

パチー……

目を覚ましたシクル。

身体を起こすとまだ魔力の反動が残るのか重く痛みもある。

だが無理を承知で立ち上がると一息をつき、足を動かし、大聖堂の外へ出る。

そして……

「ソングマジック歌魔法 シールド防御!!!」

傷つき倒れるナツを狙ったラクサスの雷を避雷針となり、身代わりになろうとしたガ
ジルの周りに防御体を作り出し守った。

「シクルっ!?!」

「お前……!」

「っ！ シクル、お前っ!!」

歌魔法は本来膨大な魔力を消費し発動する魔法……魔力の暴走で多くの魔力を消費した後での歌魔法の使用は……

グラッ——

「っ……！ 行け……ナツっ!!!!」

倒れる中で叫んだシクル……その声を確かに聞き取ったナツ……

「う……おおおおおおおおおっ!!!!!!」

大きな雄叫びをあげ、ラクサスへと突っ込む。そして……

ナツは、火竜の剣角、鉄拳、碎牙、翼撃、咆哮、鉤爪と魔法を繰り出し……

「おおおおおおおっ!!!!!!」

滅竜奥義 紅蓮爆炎刃!!!!!!

ドゴオオオオオオツツツンツ
!!!!!!

ナツの滅竜奥義を食らい、ラクサスは倒れた……。

その光景を見届け、シクルは意識が遠のくのを感じる。

……ああ………最近私ってば………こんなん、ばっか………だ、なあ………

そう最後に心でぼそりと呟き、心配そうに駆け寄ってくるレビイを視界の隅に映して、シクルは完全に意識を飛ばした。

これにて、バトル・オブ・フェアリーテイル

終幕………

次回、収穫祭【ファンタジア】

完結

40話 ファンタジア

バトル・オブ・フェアリーテイルから一夜明けた次の日……

ギルド内は落ち着きを取り戻し、街も多大なる被害はあったものの今は落ち着き、普段と変わりなく過ごし、先延ばしとなったファンタジアへ向け、準備が進められていた。

そして、街の中心……今回のバトルで1番被害の大きかったカルディア大聖堂前に1人……シクルが、ぼつんと立っていた。

両手を合わせ、目を瞑り集中し……

「我、聖なる月の名の下に

聖なる光に照らされ その姿

正なる形に戻さん」

ソングマジック
歌魔法 リバイブ
再生

シクルを中心に淡い銀色の光が輝くとそれは街の壊れた建物を徐々に包み込み光が消えた頃には壊れた街中は元の姿に戻っていた。

「……………ふう」

街が元に戻ると魔法を解き、目を開け、空を見上げるシクル。

「……また……やっちゃったなあ……」

脳裏に思い浮かぶは……確実な殺意の感情を持った自身と……後少しで仲間を……ナツを殺そうとしていた自分自身……

そつと右耳につけているピアスに触れる。

「……ダメだなあ、私ってば……」

まだ、コントロール出来ないなんて……

「……こんなんじや……守れないよ」

だから……

「……もつと、強くないと……」

空に登る月を見上げ、ふうと最後にもう一度ため息をつくときルドを見つめる。

「……帰ろ（帰ったら……謝らないとね）」

未だに宴を繰り返しているだろうギルドへと足を向けた。

ギルドに戻ると予想した通り、やはりお祭り騒ぎのメンバーにクスリと苦笑を浮かべる。

「今年は全員参加だからなあ」

「ええ!? そ、それじゃあジュビアも参加なんですか……?」

「待って!? それじゃああたしも参加なの!? うそっ!」

グレイの言葉にジュビアとルーシイは声を上げ驚きを見せるがその表情はどこか嬉しげ。

そんな2人にグレイは苦笑を浮かべ、クイツと後ろを指差す。

「まあ、あんなファンタジアに参加できねえからなあ」

グレイの差す方には包帯でグルグル巻きにされた超重傷のガジルと同じく包帯グルグルの口まで包帯で覆われているナツの姿だった。

「あんなのって言うなよ……」

「ふおへあはんがふんがつ!!」

唇を尖らせ拗ねたように文句を言うガジルと何を言ってるのか全く分からないナツ。誰も聞き取れない中ガジルだけはその言葉を理解し……

「無理だね。参加できるわけねえだろ」

と会話をする。

「ふおあえばふうがふうがばお!!」

「それはかんけえねえだろ!?! 子供かてめえは!!」

「なんで分かるんだろ……」

「きつと似たもの同士だからだよ……」

「だねえ……」

ガジルとナツの会話に苦笑を浮かべ、乾いた笑いをするルーシイ、ハッピーとルーシユ。

他にも怪我をしているのに騒ぎ回るせいで傷が開き痛みに呻くものやそれを見てワタワタするもの、笑い転げるもの……

その様子をギルドの入口から眺めていたシクルはつい、プフツと笑った。

そして、その笑い声に騒がしい中、全員がシクルの帰りに気づいた。

一斉にこちらへ向かれる視線にビクツと肩を揺らすシクル。

「あ! シクル!! お帰りなさい!!」

「お! やつと戻ってきたなあ!」

「街直してくれてありがとなっ!!」

「シクルも飲もーぜ!!」

「おかえりい！ シクルウ!!」

シクルの暴走の件は昨日、あの戦いのあと目を覚まして直ぐ、ギルド内全員に伝わった。

仲間を本気で殺そうとした……その話は既に皆聞いているはずなのに……誰一人として、シクルを恐怖の目では見ていない。

その光景を見つめ、目を見開きながらも拒絶のないことに驚き、また嬉しさを感じていた。

そして、一際強い視線を向けるものが一人……

ナツだった。

その視線に気づき、ゆっくりとそちらを向くと……

「っ……」

痛々しいほどの包帯を巻かれた身体……その中で、左手の傷は刀を握った時の傷だ……その姿を見た時ズキツと胸が痛んだ。

「……ナツ」

じつと見つめるナツから目を離せないシクル。だが、ナツが意を決して近づこうと動くときとビック！ と、肩を揺らし一歩下がる。

「……ごめん、私今日は……」

「え!?　ちよ、シクル!!」

「もう帰んのかよ!?!」

「待って!!」

そう言い、引き止める仲間達の声を聞こえないふりをし、ギルドを去ろうとする。

その時——

ドンツ——

扉の前で何かとぶつかるシクル。

「っ!　ったあ〜……」

何かにぶつめた鼻を抑えながら前を向くと……

「……ラクサス」

シクルを見下ろすラクサス。その身体はナツやガジルよりは少ないものの包帯が巻かれていた。

ラクサスはほんの少しシクルを見下ろすとその横をスツと通り過ぎて行く。

「……シクル、————」

「っ!!」

横を通り過ぎる時……シクルの耳元で囁かれたラクサスのその言葉にシクルは目を

見張り、振り返る。

振り返った先では、ラクサスにギルド内から文句の声が上がっていた。

「よさないか、お前達!!……行け」

声を荒らげるメンバー達はエルザの一喝で静まり返る。そして、ラクサス再び足を医務室で休んでいるマカロフの元に進めると……

「ふあぐあぐー!!!」

ナツがその前を立ち塞がった。

「……ナツ」

ラクサスを前にプルプルと身体を痛みに震わせながら、息を荒くし、立ち塞がるナツ。

「ふあぐが!! ふあがふあんがふおんぐがうがぼうが!!」

全くなんといっているか分からない言葉を発するナツに一同がポカーンと嘩然とする。

「……通訳よろしく」

ルーシイの一声で、はあ……とため息をつくガジル。

「2対1でこんなんじゃ話にならねえ 次こそはぜってえ負けねえ……いつかまた

勝負しろラクサス!! “ ……だとよ」

「え……でも、戦いには勝ったんでしょ?」

ルーシイの問いかけに首を横に振るガジル。

「俺もあれを勝ちとは言いたくねえ……」

あいつはバケモンだ……あの怪我也、ほとんどあの女との戦いで作った傷だ……もし、フアントム戦にあいつがいたならと考えたら……ゾツとするぜ」

そして、そのバケモノに傷を負わせたあいつも……

ガジルはそつと、気づかれないように入口で突っ立っているシクルに視線を向ける。

一方、ナツにその言葉を告げられた張本人、ラクサスは……暫くナツを見つめると何も言わず、その横を通り過ぎる。

「つ……!! ふあぐあぐー!!!」

無視されたことに腹を立てたナツが振り返り、声を荒らげると……

ラクサスは静かに右手をあげた。

「っ!!!」

それをみたナツは一瞬驚きに目を見開き、パア!! と笑みを浮かべた。

それに驚いたのはずっと見つめていたシクルも同じだった。

「……ラクサス」

シクルは医務室へと入っていくラクサスを見つめ、静かにシクルもギルドを後にした。

ギルドを後にしたシクルはマグノリアを一望できる丘の上にそびえ立つ、大きな大きな樹木の上に寝転がっていた。

空を見上げ、はあと沈んだ様子を見せるシクル。

「……お別れ、か」

流星にあんな事をしたのだ……きつと、マカロフはラクサスを破門にするだろう。

それは分かっているのだが……

「……やっぱり、寂しい……な」

仲間がいなくなるのは……どんな人でも寂しく感じる。

「……きつとナツは認めないだろうなあ」

その様子を容易く想像出来るな、と思いシクルはクスクスと笑みを浮かべる。だが、その笑みはすぐに消え……再び悲しい表情を浮かべた。

「……やっぱり……合わせる顔、ないよ……」

あんな……あんなことしちやつた後なのに……会える訳ない……

魔力が暴走していた時の記憶は、ほとんどシクルには残っていない……だが、確かに……ナツに刀を向けたのは覚えていた。

「……殺そうとした……嫌われてたら、どうしよつか……」

あの笑顔が……もう、私に向けられることがなかったら？

そう、考えた時……ゾクツと背筋が震えた。

「あ……なんで？ どうして……こんなに……こんなにも……怖い、の？ なん、で……」

どうして……こんなにも恐怖を感じるんだろう……どうして……？

こんなにも……嫌われることに恐怖を……抱くのだろう……。

その事だけがシクルの脳裏を埋め尽くしていた……。

そして、それは次第に表情にも現れ、涙が溢れ始めた。

「……………怖い……………怖いよ……………ナツっ」

嫌いに……………ならないで……………あなたに嫌われたら……………

嫌……………嫌われたくない……………怖い……………苦しい……………

苦しいよ……………ナツ……………

シクルは涙を拭うことも無く、顔を伏せ嗚咽を堪えていた。
すると……………

フワツーーー

シクルの頭に大きく、暖かな手が乗せられた。

「つーーー！ え……………？」

頭に乗せられたそれにハツとし、顔を上げると……………

「……………ナ、ツ……………」

目の前には包帯でグルグル巻きでギルドで絶対安静が言い渡されていたはずの、ナツ

がいた。

シクルの涙に濡れる瞳を見ると目を大きく見開くナツ。

だが、すぐになつと微笑み、その涙を左手で拭う。

……暖かい

ナツの体温の高さを心地よく感じていたシクル。

だが、そのナツの血の匂いに気づくと……

「っ!! だ、ダメっ!」

ドンツとナツを押し返す。シクルのその行動に驚き、手を離してしまうナツ。

「ご、ごめ……わ、わた、し……」

身体を震わせ、怯えた表情を浮かべるシクル……そんな彼女を見つめ、ナツはじつと
している……

ギョッ……

「……あ」

固定のされていない左手でシクルの背中に手を回し、抱きしめた。

そして、安心させるかのようにその背をぼんぼんと叩くナツ。

そつ……と、ナツの顔を見上げると、ナツはニカツといつもと変わらない笑顔でシクルに向けた。

「つー、ナ、ツ……ナツう……ごめ、ごめんね……怪我、させて……ごめんっ」

堪えていた嗚咽を出しながらナツに抱きつき泣き喚くシクル。

この夜は、シクルの背をずつと落ち着かせるかのようにぼんぼんと叩き、シクルが泣き止むまでずつとそうしていた。

そして、ラクサスが破門を言い渡された次の日、ファンタジア当日……

街中はパレードで大賑わいだった。

ルーシィやレビィ、ビスカ達によるダンスやグレイとジュビアの共演、エルザの剣による舞、重傷の身体を無視しながらパレードに参加したナツは演出の途中でむせ込み、辺りから笑いがこみ上げる。

そして、一際輝く光が照らされると……光の中から淡いピンク色のドレスを着たシクルが現れ、豎琴の音を静かに響かせながらその周りを沢山の光の玉が舞い踊る。

そんなパレードの最後は、マスターマカロフのファンシーな踊りだ。見物客からは多くの笑いと歓声が響く。

そんな影でじつとパレードを見つめる大男……ラクサスの姿があった。

ラクサスは奇妙なダンスを踊るマカロフを見つめるとフツと微笑み……その場を去ろうとする。

だが……

「っ!？」

視界の隅で映った光景に目を疑い、パレードを振り返る。すると……

ギルドメンバー全員が、右手を上げ、人差し指を天高く、掲げていた。それは、昔幼い頃にラクサスがマカロフにしたある合図……

「例え……姿が見えずとも……

どんな遠くにしようとも……

ずつとお前のことを……見守っている”

言葉にせずとも、マカロフからのそのメッセージが心に届いたラクサスは、目に涙を浮かべ……

「じーじ……」

と、幼い頃に呼んでいたその愛称を口にした。

ラクサスはそれを最後に、パレードを振り返ることはなく……立ち去っていった……。

その後ろ姿を横目で見つめ……ふう、とため息をつくシクル。

「……ラクサス」

シクルの脳裏に蘇るは、昨日のラクサスの一言……

“シクル……悪かったな……”

シクルは小さく微笑むと……空に輝く満月を見上げ……

「……ラクサス……またね……」

と、ひとりでに眩いた。

こうして、2日延びたファンタジアは大成功に終えた。

その後、ナツからの大抗議を受けるマカロフや、責任を取りマスターを辞めると大騒ぎになった妖精の尻尾だが、フリードの丸刈り坊主という古い反省の意の示し方に、その場は収束した。

やっと落ち着き、いつも通り、ギルド内で喧嘩を繰り広げるナツを見つめ……ふと、シクルは考える……。

「……(なんで……どうして、あの時私は……あんなにも、恐怖を覚えたの……?私……ナツの笑顔を見て……凄く、凄く安心した……)」

そして……

「……ドキドキ、した」

未だに思い出すとどこか恥ずかしく、でも嬉しくてドキドキが溢れるこの想い……

「……ま、さか……ね？」

「? どーしたのお? シクルウ？」

小さな呟きを聞き取ったルージュが横からシクルに問いかける。

「う、ううん! 何でもないよルージュ! さて……たまには仕事でも行こっか?」

誤魔化すようにそう言うシクルにルージュは目を見開く。

「あ、あの面倒くさがりのシクルが……自ら仕事にい!? 熱でもあるのお!? 大丈夫?!」

「あのね……私だって行く時は行くわよ」

私をなんだと思ってるのさ……と小さくため息をつき、さあ仕事だーと振り返ったシクルの目の前に……

「仕事行くのか!? なら一緒に行こーぜ!! シクルっ!!」

ナツの顔がドアップで突然現れた。

「っ!? き、きゃあああああ／／／／!?」

ドゴオ!!!

「ぐもお?!」

突然の事に、顔を真っ赤にしナツをぶん殴ったシクル。

吹っ飛ぶナツを見てはっ！ と我に返るシクル。

「あ………！ ぐ、ごめ！ ナツ!? 大丈夫!？」

吹っ飛んだナツにわたわたと慌てた様子で駆け寄るシクル。その姿を見て……

「あらあら………」

「……もしかしてこれって」

「………そうかもお？」

「へえー？ あのシクルがねえ………ニヤニヤ」

ミラ、ハッピー、ルージュ、ルーシイの2人と2匹の小声での会話………それを聞き取ったシクルはカア!! と耳まで赤く染め………

「う、うるさああああああい／／／／／!!!」

と、叫んだのであった………。

収穫祭 B・O・F篇 完結

next story ニルヴァーナ篇 開幕

く予告く

なんで私まで討伐メンバーに入ってるのよ……めんどくさいなあ

ウエンディ……もしかして……？

なんで……なんで、ジェラルルがつ!?

あんたなんか……星霊の鍵を持つ資格なんかない!!

な……あなた……なんで、ここに!?

ナツを離しなさい……離さないのなら……あたしの光が、あなたを滅する

何やってんのよ……早く、起きなさいよ……皆……ナツっ
!!!!

……おいで………私たちのところに……

第6章 ニルヴァーナ篇 4 1 話 連合軍 結成!

ファンタジアから1か月……

ギルドの者達はいつも通り、依頼をこなし、ギルドではバカ騒ぎをし過ぎしていた。

そして、今しがた来たばかりのシクルはその光景に苦笑を浮かべ、ルージユは楽しそうに笑っていた。

「はあ……変わらないねえ皆」

「変わらず元気なのはいい事だよお」

ニコニコと微笑みながら言うルージユに「そうだけどねえ……」と返した。

「ん?」

ふと、シクルはギルドのカウンター前が異様にザワザワとぎわつており、人が集まっていることに気づいた。

そこにはナツやルーシイたちもいた。

「……なんだろう」

「さあ？」

シクルとルージユは顔を見合わせ、首を傾げ集まっている輪の中に入っていた。集まるメンバーの中央では空中に光筆で描いた闇ギルドの組織図が描かれていた。

「お？ よー！ シクル!!」

「おはよ、ナツ……今、何やってるの？」

「あ、シクル！ これからね、ミラさんが闇ギルドについて教えてくれるのよ」

シクルの問いかけに答えたルーシイのその言葉にシクルとルージユはへえーと空中に描かれるその図を見上げる。

そして……

「あ、ミラ。そことそこ……あとあそことあれとあっち……あーあ、あとその列全部……もう無いよ、私が潰したから」

「「はあああああああつ!!」」

「あらあら、そうなの？ じゃあ書き換えないとね」

シクルの言った発言にルーシイとハッピー、グレイは声を上げ驚愕し、ミラは何でもないかのようにシクルの指していったギルドを消していった。

「て、ちよつと待つて!? それまさか全部一人でやったの!？」

「んー? あーまあ大体は? 評議会からの依頼だったから……基本は一人で行ったよ
時折エルの力を借りたりはしたけど……」

ルーシイの問いかけにのほほんと笑みを浮かべ、そう語るシクル。

そんなシクルに「そ、そう……」と苦笑を浮かべ、返すしかできなかったルーシイ。

「そ、それより!! その組織図の3つにくぎられた大きな枠組みは何なんですか?」

話題を変えるようにルーシイは組織図を指差し問う。

「ああ、それはね……」

「闇ギルド最大勢力バラム同盟……でしょ?」

ミラの言葉を遮り言ったシクルに視線が集まる。

「そうそう。バラム同盟は、3つのギルドから

構成されている闇ギルドの最大勢力でね?

それぞれが直属のギルドを持っていて、闇世界を動かしているのよ」

シクルの言葉に領き詳細を説明するミラに、へえ……と興味あり気に組織図を眺める
ルーシイ。その視界にあるギルドが目に入る。

「あ……! 鉄の森って……!？」

「ああ……以前ララバイの力を悪用しようとしたギルドだな……六魔將軍オラシオンセイイスの傘下だったのか」

「気にするこたアねエき、噂じゃこいつら……たった6人しかいねえらしーしな」

グレイの言葉に1度は納得するメンバーもいたが……

「あのねえ……ようはその、たった6人でこの闇ギルドの最大勢力の一角を担ってるってことでしょーが」

と、シクルがミラから光筆を受け取り、組織図を訂正しながら言った。

「それに……噂だところの6人は全員、たった1人で一つのギルドを潰せる力を持つてるって話よ？ 多分相手にするなら……一筋縄では行かない」

シクルのその言葉にゴクツと誰かが息を呑む。

全員が、緊張した表情でその場に突っ立っていると……キィ、と重い音を立て、ギルドの扉が開き……

「……その、六魔將軍じゃがな……我等が討つこととなった」

と、今戻ったマカロフが神妙な表情で告げた。

「「「は……はあああああああつ?!」「」」」

「あら、マスターお帰りなさい」

「つええやつと戦うのか!?!」

「ちよ、ミラ? 今それどころじゃない言葉が出たと思うんですけど? あとナツは嬉しげらない」

「マスター……それは一体? どういう事ですか?」

エルザからの投げかけに、はあとため息をつき、顔を上げるマカロフ。

「今言った通りじゃ……先日の定例会で、六魔将軍が何やら動きを見せていると報告があつてのお……六魔将軍を討つことになつたのじゃ」

「jeeさん……あんた、ピンボーくじ引いたな……」

グレイからの指摘にうむ……と俯くマカロフ。

「ま、まさか……私たちだけで?」

そんなの怖すぎるう!! と悲鳴を上げるルーシィ。だが、マカロフは首を横に振り告げる。

「いや……今回は相手があのバラム同盟、最大勢力の一角じゃ……一つのギルドで戦つて勝利したとしてもその後、闇ギルドの連中から逆恨みを受けないとも限らん……」

その為……我々は、連合を組むこととなつた」

「連合……? 複数のギルドが結成して討つてこと?」

シクルの疑問に頷くマカロフ。

「連合軍は、我等妖精の尻尾フエアリーテイルと青い天馬ブルーベガサス、蛇姫の鱗ラミアスケイル、そして……化猫の宿ケットシエルダー、この4つのギ

ルドで各々精鋭を数名だし、力を合わせ討つのじゃ！」

マカロフからの衝撃告白から一夜明け……

妖精の尻尾からは最強チームが選出され、現在馬車で指定の場所に向かっているところだった。

「なんで私まで討伐メンバーに入ってるのよ……めんどくさいなあ」

「……シクルはいいじゃない……強いんだし……それよりも、なんであたしがこの作戦に参加するわけー!？」

シクルのため息とルーシイのいやああつ!! という悲鳴が響く。

それを聞き鬱陶しそうに眉を歪めるグレイ。

「うっせえなあ……俺だつてめんどくせえんだ、ぶーぶーいうなつての」

「マスターの人選なのだ。私たちは、その期待に応えるべきではないか？」

エルザのご最もな言葉に再びはあ、とため息をつきながら膝の上に頭を乗せ既にグロッキーなナツを見下ろす。

「……う、うぶ……き、もち……わ、りい」

「はいはい……もーちよつとで着くから……お願いだからキラキラ出さないでよ」

そう言い、小さく微笑みナツの髪を撫でるシクル。その様子を見つめ、ふとルーシイは首を傾げる。

「……ねえ、シクル?」

「んー? なあに?」

ルーシイからの投げかけに返事は返すもナツを見下ろしたままのシクル。

「……なんか、変わった?」

「え?」

その言葉にやっとルーシイを見つめるシクル。

「何が?」

「いや……なんか、前に比べてナツを見る目が……暖かくなったなあって思ってた……」

ルーシイの言葉が脳裏でリピートされる。

ナツを……見る、目……

その意味を次第に理解すると……顔を赤らめていくシクル。

「ん、なっ!?! 何、言ってる!?! んなわけないでしょ!?!」

そう叫び、ナツの頭を勢いで落としてしまう。そんな様子にニヤニヤと笑いながらからかい続けるルーシイ。

「やっぱり、あのファンタジアの日に何かあったんじゃないのー?」

「あーもう／＼／＼／＼!! そ、そんなことよりっ……ほら、目的地見えてきたよ!!」
無理やり話題を逸らし、外を見つめるシクル。その脳裏では……

ないない! 絶対……認めないからっ!

だって……これは彼等との約束を守る為……そして仲間を失わない為……
それ以外の気持ちなんて……

「……ない……と、思うんだけどなあ」

ぼうつと外を見つめると馬車は止まり、目的地へと到着したようだ。
今回の集まりの場は青い天馬が持つ別荘の一つであったが……

「……おい、ほんとにここで合ってるのか?」

「あ、ああ……ここで間違いはないと……思うが」

「け、結構……個性的な、建物……ね(てかこれはないわ)」

その建物はピンクの大きなハートが外見につけられたどこか乙女チックだが……あまり中へは入りたくないと思えない外見だった。

「う、ぷ……まだ……つかねえ……の、か？」

「ナツ、もう馬車じゃないよ」

「ナツ？ もう着いたよお？」

シクルに支えられ吐き気を堪えるナツにハッピーとルージユが頬を叩きながら声かける。

「大丈夫よ……そのうち治るから」

ナツの様子にため息をつきながらも、建物の中へと入っていくグレイたちを追い、シクルも中へと入る。

すると、出迎えたのは……

「ようこそ、妖精の尻尾の皆さん。お待ちしております」

「我ら、青い天馬より選出されしトライメンズ」

3人のスーツを着た男が出迎えた。

「……げ」

彼らを見て、シクルはあからさまに嫌な表情を浮かべる。

そんなシクルに気づく様子もなく……

「百夜のヒビキ」

「聖夜のイブ」

「空夜のレン」

シクルの周りに3人の男は集まると……シクルに寄りかかるナツを放り投げ、シクルをいつ用意したのかわからないソファへと座らせる。

「いつ見ても変わらぬ美しさと可愛らしさ……」

「さ、歌姫さん……こちらへ」

「ほ、惚れ直してなんか……ねえからな」

「……はあ」

シクルの周りでは青い天馬の面々がすでに囲み、お茶やお菓子やらをだしもてなししていた……

「な、何……こいつら」

「トライメンズ……それなりに実力のある面々だ」

ルーシイとエルザにも目がいき、結局トライメンズの3人はシクル、ルーシイ、エルザをソファへと座らせ、同時にもてなす。

「あーもう……だから来たくなかったんだ」

「こいつらホント苦手なんだって……」

と、まだ戦いも始まっていないのにすでに5割ほど疲れを感じているシクル。
すると……

「君達、その辺にしておきたまえ」

また新たな声が入つ……その瞬間

ゾクウツ!!

「ヒツ!?、ハ、この……ハ、声、は……」

「まさか……」

シクルとエルザが震え上がる。

その視線の先には……

マカロフと同じくらいの身長のとでもイケメンとは思えない……男が1人……
彼にトライメンズの面々は膝をつき、頭を下げる。

「「一夜様」」

「……一夜?」

その名を聞いたことのないルーシィや、グレイ、ハッピーは首を傾げるが……
「あわわわわ……ハ、ハッピー!! シ、シクルこちに連れ戻さないとっ!!」

とてつもなく慌てた様子のルージユ。

「え？ どうして？」

その様子に疑問を持つハッピーだが……それはすぐに分かることとなる。

「ま、さか……あ、あんたも……こ、こ……この、作戦……に？」

拳を握り、ブルブルと震えるシクル。

「やあ、久しぶりだね……シクルさん。会いたかったよ」

キラーンとキメ顔で告げる一夜だが……

「出来れば私は一生会いたくなどなかったです!!」

ルーシイの影に隠れ、声を荒らげるシクル。

「ちよ、どーしたの!?! シクル……」

「ご、ごめ……あ、あいつだけはどーしてもっ!」

「すまん……ルーシイ、シクル……私もあいつだけは……」

シクルに標準がいつている間に、エルザは静かに後ろへ下がっていく……

「エル!?! 私置いてくの!?!」

「すまんっ!!」

エルザを止めようとルーシイから離れ、手を伸ばすシクル……その時……

「会いたかったよ……! マイハニー!!」

と、言いながらシクルに向かい走ってくる一夜の姿が……

そして、その手がシクルの腕に触れた……その瞬間……

プチッー

「あたしに……触るなアツ!!!」

ゴォ!!

勢いあまり、殴り飛ばすシクルであつた……。

「マイハニー!?!」

「なんと……一夜様の彼女でしたか!」

「これはご無礼を!!」

吹っ飛ばす一夜に気にもせず言葉を告げるトライメンズの面々。

「断じて拒否するわ!!! 絶対ないから!!」

「ビシイ!」 と指差し否定するシクル。

そして飛ばされた一夜の先には……逃げようとしたエルザの姿……

「む!? この香りは……ああ! 貴女は……愛しのエルザさん!!」

一夜はシクルから一転、エルザへと意識を向けた。

「ヒイ!!? こつちに来るなあ!!!」

ボガア!!

「い、ふうっ!!」

飛んでくる一夜に即座に反応、回し蹴りを決めるエルザ。

そして、蹴り飛ばされた一夜は扉の方へと飛び、丁度建物に入ってきた何者かがその頭をわし掴んだ。

「こりやあ……随分ご丁寧な挨拶だな」

「……あ」

扉から入ってきた人物を見て、シクルはへえと興味を示す。

その人物は……

「貴様らは、蛇姫の鱗に上等か?」

「り、リオンっ!?!」

まさか連合軍のメンバーに兄弟子が来るとは思わなかったグレイは目を見開き驚く。

そして、相手も弟弟子のグレイがいるとは思わず、「グレイ!?!」と声を上げる。

「……ギルド、入ったんだね」

フフツと微笑みながら言うシクルにこちらも小さく笑みを浮かべああ、と答えるリオン。

「やり直すためにな……」

「そっか……」

前に進めているようでよかった……

どこか晴れ晴れとした表情のリオンを見て、ほっと安心するシクル。

「つかうちの大将に何しやがるっ!!」

レンの言葉でやつと一夜がリオンの魔法により、凍らされているのに気づく。

「ありや（ナイス、リオン!）」

凍った一夜を見て心の中でガッツポーズをするシクル。

「酷いや!!」

「男は全員帰ってくれないかな?」

作戦前から雲行きの怪しい空気がその場に流れる。そこに……

「あら? 女性もいますのよ?」

新たな声が……

「え?」

声の方を振り返ると……

「人形劇 カーペットドール!!」

「て、うそ?! ちょ、きやあつ?!」

ルーシイに向けて魔法が襲いかかる。
それも、いつか見たことのある魔法……

「……この魔法って……まさか？」

ルーシイはふるふる震えながら振り返る……。

振り返った先にいたのは……

「あ……シエリー!!」

「……ふん、お久しぶりですわ」

「なんで!？」

シエリーのルーシイを見る目は少し険しく、睨みつけている。

そしてリオンとグレイは変わらず睨み合いを続け、トライメンズの3人もリオンを険しい目で睨んでいた。

そんな一同を見つめ、はあとため息をつく1人と2匹……

「……どーすんのお？シクルウ」

「これいつ終わるの？」

「はあ……仕方ない………スウ　あんたたちいい加減……」

「やめえい!!!」

シクルウが怒声を上げ、止めようとした瞬間、先に大きな声はその場に響く。

その声に、一同はピタリと動きを止める。

「あ……」

建物に入ってきたのは……聖十の称号を持つ1人……

「ワシらは連合を組み、六魔將軍を倒すのだ……仲間割れしている場合か？」

「ジュラ!!」

建物に入ってきたジュラを見つめ、ピアと笑顔が輝くシクル。

「久方ぶりだの、シクル殿……元氣であつたか？」

ジュラの問いかけに間を開けることなく頷くシクル。

「もっちゃん!! いつでも私は元氣よー」

ニシシ! と微笑むシクルにそうか、と満足気に微笑むジュラ。

そして……

「さて……これで、3つのギルドが揃った……後は、化猫の宿の連中のみだ」

冷静にメンバーを見回しそう言うジュラに氷漬けから開放された一夜が口を開く。

「連中というか……化猫の宿は1人と、聞いているが……」

「「なっ!?!」」

「1人!? こんな危険な作戦に!」

「ちよつとちよつと!! どんだけヤバい奴が来んのよー!?」

「怖い!!! と声を荒らげるルーシイに苦笑を浮かべるシクル。
すると……

「きゃうつ!!」 ビタンツ!!

……………え?

扉を通り過ぎた瞬間、何も無いところで躓き、転ぶ音と悲鳴。

一同が振り返ると……

「いったた……えつと……お、遅れてごめんなさい!! け、化猫の宿から来ました……
ウエンディです! よろしくお願いします!」

青く長い髪を揺らす少女が照れくさそうに自己紹介をしていた。

「こ、ども……!」

「お、女!」

グレイとリオオンが驚きの声をあげ、その他のメンバーも驚きを隠せずにいる。

「……………ウエンディ?」

その少女を見つめ、ナツとシクルの小さな小さな呟きが静かに流れ、響いた……。

42話 作戦開始！そして……

「ウエンデイ……？」

ウエンデイを見て、驚愕する一同。そんな中……

「……これで全てのギルドが揃った」

と、話を進めるジユラ。

「話進めんのかよ!？」

「それにしても……、この大がかりな作戦にこんなか弱そうな女の子一人をよこすなんて……化猫の宿はどういうおつもりですか?」

ウエンデイを見て、怪訝そうに表情を歪め言うシエリーにウエンデイはビクツと体を揺らす。

「え、えつと……あ、あの……!」

「あら、一人じゃないわよ? ケバいお姉さん」

ウエンデイの声を遮り聞こえた声に、一同が扉の方を見つめると……そこには、白い

猫が立っていた。

「シャ、シャルル!? 着いてきてたの!？」

猫の名前は “シャルル” といい、その姿を見た時ウエンディは驚き、目を見開く。

「当たり前じゃない。あなただけじゃあ不安でしょうがないもの」

ほんの少し口調のキツめなシャルルを見て、苦笑を浮かべるシクル。

「(多分……ハッピーとルージュたちと同じだとは思うけど……それより) ウエンディ……もしかして……?」

うーん?と脳裏に浮かぶ子と目の前のウエンディを見比べる。

「あ……あの、私……戦闘は全然出来ませんけど……皆さんの役に立つサポートの魔法なら、いっぱい使えます……だから、仲間はずれにしないでください……!」

ウエンディはやや涙声でその声を上げた。

「そんな弱気だから貴女は舐められるのよ!」

辛口な言葉を発するシャルルに「だって……」と俯くウエンディ。

「すまん……少々驚いたがそんなつもりは毛頭ない。よろしく頼む」

フツと微笑みながら、ウエンディの頭を撫でるエルザを見上げ、ウエンディは頬を赤らめる。

そして、シャルルを腕に抱き上げ

「わあ！ 見て、シャルル！！ 本物のエルザさんだよっ！！カッコイイなあ」と、感激の声を上げる。

「ふうん……思ってたよりいい女ね」

ウエンデイの腕の中に抱かれているシャルルも頷きながらエルザを見つめている。

そんな様子を見つめ、シクルは「エルは人気者だなあ……」と、ひとりでに呟いてぼうつと眺めていると……

「お、オイラのことも知ってる……？ オイラ、ネコマンダーのハッピーー！」

頬を赤らめながらシャルルに自己紹介を始めたハッピーの姿が目に入る。

見上げてくるハッピーを見下ろし、暫くじつと見つめるも……

「ふんっ！」

と、顔を逸らすシャルル。

そんなシャルルの反応を見て……

「照れてる!! かわいいー」

と、前向きな考えのハッピーであった。

「……なにあれ」

「何かねえ？ 一目惚れしちゃったみたいだよお？ ハッピー……」

シクルの頭に乗る、苦笑を浮かべハッピーを見つめそう言ったルージユにへえ……と

シクルはハッピーとシャルル、そしてウエンデイを見つめる。

「うーん? ……ウエンデイ……ウエンデイ?」

シクルが立っている後方で、やっと乗り物酔いから覚めたナツの「んー?」という声
が聞こえ、振り返る。

「どうしたの? ナツ」

シクルが問いかけると……「いあ……」と言葉を濁し、

「……ウエンデイ……どこかで聞いたこと……あるようなないようなあ……」

と、言いながら再び考え込む。

「うーん! 分かんねえ! シクル、思い出してくれ」

結果、思い出せずシクルに投げやるナツ。

「無理だよっ!」

流石に無理だつてと言いながらはあとため息をつくシクル。

この間にウエンデイとシャルルはトライメンズに連れてかれ、もてなされていた。

シャルルは群がるトライメンズに怪訝そうな表情を浮かべ、ウエンデイもオロオロと戸惑い……そんな中、ナツとシクルの姿を見つけたウエンデイ。

ウエンデイは2人を見つけるとニコツと微笑んだ。

「ん？」

微笑まれたナツとシクルははて？と首を傾げ、少しの疑問を抱く。が……

「お前達!! 遊びに来た訳では無いんだぞ! 早く片付ける!!」

と、疑問が解かれる前に一夜の声が響き、思考は止まった。

「はい! お師匠様!!」

一夜の怒声にすぐさま用意していたソファや飲み物、茶菓子を片付ける。

片付け終わると天上のライトが消え……一夜にのみ、スポットライトが当てられた。

「さて……全員揃ったようなので、私の方から今回の作戦を説明しよう」

メエーン! と決めポーズを取りながら話を始める一夜。

「そのポーズって必要なのかしら……」

もうツツコミ疲れた……と言った様子のルーシイ。

「必要ないわね、あんなの」

相手をするのも疲れた様子のシクル。

「まず、六魔將軍の奴らが集結している場所だが………と、その前にトイレの香り（パルファム）を!」

「そこにパルファムつけるな!!」

ルーシイとシクルからのツツコミをスルーし、一夜は奥の部屋へと一度消えていく。そして一夜が戻ってくると作戦の説明が再開された。

「さて……まず、集結の場所だが……ここから北に行くと “ワース樹海” が広がっている。古代人たちはその樹海にある、協力的な魔法を封印した。その名も、 “ニルヴァーナ”」

一夜の言葉から発せられたその魔法というものに一同はざわつく。

「ニルヴァーナ……?」

「聞かぬ魔法だな」

「ジユラ様は?」

「……いや、わしも知らんな」

「ニルヴァーナ……」

「なんか知ってるのか? シクル……」

「……ううん、私も聞いたことないよ」

「なんか知ってるー? てか、お魚いる?」

「結構よ!」

「懲りないねえ……ハッピーてば」

一夜やトライメンズの3人も眉をしかめ、語る。

「僕たちも、古代人たちが封印するほどの破壊魔法……ということまでは把握しているんだが」

「どんな魔法かまでは分かっていないんだ」

「でもきつと、六魔将軍が樹海に集結したのはきつとこの　　“ニルヴァーナ”　　を手に入れるためなんだ」

「そして我々は、それを阻止するため……」

「“六魔将軍を討つ!!”」

キラーン！　と青い天馬の全員で決めポーズをし、告げた。

「やっぱりポーズ……」

「俺はもうツツコまねえぞ」

「私は初めから諦めてた」

ルーシイ、グレイ、シクルが諦めたため息をつく。

次に説明が始まったのはその六魔将軍のメンバーについてだった。

「こっちは13人敵は6人」

「だけどあなどつちやいけないよ」

「この6人がまたとんでもなく強い」

そして、ヒビキの魔法、
アーカイブ古文書” で六魔將軍のメンバーについての説明が始まる。

毒蛇を使う魔導士 “コブラ” ……

名前からして恐らくスピード系の魔法を使うと思われる “レーザー” ……

大金を積みめば一人でも軍の一部隊を全滅させると言われる天眼の “ホットアイ”

……

心を覗けるという女 “エンジェル” ……

情報は少ないが彼らからは “ミッドナイト” と呼ばれる男……

そして彼らの司令塔 “ブレイン” ……

「彼らはたった一人でギルドの1つくらいは潰せるほどの魔力を持つ。そこで、我々は数的有利を利用するんだ」

今回の作戦の大まかな部分が説明されると……そろおりとルーシイが手を上げる。

「あ、あのお……あたしは頭数に入れないで欲しいんですけど……」

「何言ってるの？ ルーシイも大事な戦力よ」

ニコニコと笑いながら言うシクルに「絶対楽しんでるよね!？」と涙目で叫ぶルーシイ。

「わ、私も……! 戦うのは苦手なんです」

「ウエンデイ!! 弱音吐かないの!」

ウエンデイも涙声で素晴らしい、シャルルに叱られる。

「安心したまえ……我々の作戦は戦闘だけにあらず！ 奴らの拠点を見つけてくれればいい」

一夜が震えるルーシイとウエンデイに決めポーズをしながら告げる。

「拠点……？」

「ああ、そうだ……今はまだ奴等を補足していないが……恐らく、樹海には奴らの仮説拠点があると推測される」

「そこで、君たちには出来ればその仮説拠点に奴らを全員集めてほしい」

「どうやって？」

「殴つてに決まってるだろ!!」

「殴るだけじゃダメでしょ……でも結局戦闘は避けられないみたいね」
「集めてどうするのだ？」

一斉に質問を受けるが慌てる様子はなく冷静に説明を進めるトライメンズの3人と一夜。

「我がギルドが大陸に誇る天馬……その名も “クリステイナー” で拠点もろとも葬り去るのだ!!」

キラーン!とポーズを取り、宣言する一夜。

「それって…… // 魔導爆撃艇” の事?」

首を傾げ、問いかけるシクルに頷く一夜。

「てか、人間相手にそこまでやる?」

ルーシイが大げさな……と呟きながらそう言う……ゴオ! と音を立てジユラから気が溢れる。

「そういう相手なのだ!!」

「ひっ!」

「あー……ジユラ? あんまりうちの新人怖がらせないでね?」

ジユラの気に竦むルーシイを見て、はあとため息をつきながらジユラに一言言うとジユラもそれに気づき、「すまん……」と素直に謝る。

「だが……よいか? 戦闘になっても決して1人で戦ってはいかん。敵1人に対して必ず2人以上でやるのだ」

強めの言葉で忠告するジユラにシクルたちは、コクリと頷く。

そして……

「おっしやあー!! 燃えてきたア!!」

雄叫びを上げ、建物の壁を壊し飛び出していくナツ。

「6人まとめて俺が相手してやらあ!!」

「あ、ちょ!? ナツ!!」

「全く……あいつは」

「てかあいつ話聞いてねーだろ!？」

「それがナツです」

飛び出していったナツを追い、妖精の尻尾のメンバーを中心に建物を飛び出していく面々。

最後に残ったのは……ジュラと一夜、そしてシクルとルージュだった。

「……はあ全く（ほんと……後先考えないんだから）」

「シクルウ、あたしたちも早く行こお？」

シクルの頭に乗りながら額を叩きそう言うルージュ。

「あ、うん。……いや、その前に……」

シクルはそう言葉を発し、1歩前に進めた足を戻すと……後方にいた一夜を振り返る。

「一夜……」

「ん? なんだい? マイハニー!」

キラーン!と決めポーズをする一夜……普段なら勢いに任せ、殴り飛ばすが……シク

ルは冷静に一夜を見つめ……いや、睨みつけると……

フツーー

「……それで、変装したつもり?」

「っ!?!」

「な!?! シクル殿?!? なにを……」

シクルが一夜の背後を取り、その頭をわし掴んだ。

その行動にルージュとジュラは目を見開き、驚くが……一夜は別段驚く様子もなく

……

「……やっぱり、君にはバレちゃうか?」

と、一夜の姿で、一夜の声じゃないものが響いた。

「なに?」

「あれ……この声」

はあとため息をシクルはつき……

「当たり前でしょ……私を誰だと思ってるの?……ジエミニ」

「……………歌姫……………そして、星霊姫の証を持つもの」

そう、*“ジェミニ”* と呼ばれた一夜が眩くと……………シクルはその頭を掴む手から光を出す。そして……………

「正解……………双子宮の扉 強制閉門」

一夜は身体が光り、消えた。そして、その姿が消えるとシクルは両手に魔力を纏い、サツと振り返り……………

「月竜の翼撃っ!!」

魔法を放つ。

「おっと……………これはびつくりだゾ。まさか気づかれるなんてナ……………歌姫さん」

攻撃を避けられるが、シクルはもとより当てる気は無かったため動揺はしていない。

「貴様は……………」

「……………六魔将軍の1人……………エンジェルね?」

ニヤツと笑うエンジェル。

「そうだゾ! まあ、今頃気づいても遅いんだゾ。今頃お前達のお仲間さんは……………」
「黙れ……………」
「っ!」

笑顔から一変、エンジェルの目の前にシクルが突然現れ……………刃が襲いかかる。

ブシューー!!

エンジエルの肩から血が吹き出る。

「くっ!!」

「掠っただけ……か」

肩を抑えるエンジエルの冷たく見つめるシクル。

「ちっ……舐めんじやないヨ、ザゴが……」

「お前に私達は倒せないゾ!」

エンジエルはそう吐き捨て、姿を消した。

「まさか紛れ込んでいたとは……!!」

「ど、どーするのシクルう?!」

「くっ……ジユラは一夜を見つけて! きつとどこかで眠らされてるか縛られてるか

……この建物からは出てないはず!!」

シクルの言葉に「承知した」と言い、奥へと消えていくジユラ。

「皆……!!」

シクルはルージュにしっかりと掴まっている様に言うと、身体に光を纏い光の速さで、
ナツたちの元へと急ぐ……。

「ごめん……遅れて……後は、任せて」

そう、につこりと微笑み呟くと……

ギロツと目の前の敵……六魔將軍を睨み、殺気が湧き上がる。

「月の歌姫……か……面白いっ」

六魔將軍もニヤニヤと不敵な笑みを見せ、余裕を崩さない……

……ここに……月の歌姫VS六魔將軍の戦いが……始まろうとしていた。

「お前達は……あたしが……あたしの光が、滅する!!」

43話 天空の巫女 ウエンデイ

「ルージュ、ナツたちのところに行つて」

「あいー」

シクルの指示に、ルージュはナツの隣に降り立ち、避難する。それを見届け、シクルは戦闘態勢を構える。

構えるシクルを見つめ、ニヤリと笑うブレイン。

「まさか……標的の方から捕まりに来るとはな……」

「はア？ 標的……どういう事？」

その言葉に疑問を抱くシクル。だが、ブレインは……

「フン……レーサー、行け」

レーサーに指示を出す。

指示を受け、レーサーはシクルへと飛び出す。

「シクル……っ！」

ナツが思わず体を起こし、声を上げる。

だが、シクルは目を瞑り、深呼吸を一つする。

そして……

「……大丈夫」

と眩き目を見開くと……反撃開始。

光の魔力を体に纏い、レーザーの動きを横に飛び避けると口に魔力を込める。

「光竜の咆哮!!」

「!? (早い……!) ぐっ!!」

威力より速さを取った魔法はレーザーを襲う。吹っ飛ぶレーザーそして、砂埃が舞い散る中……

「後ろがガラ空き……デスネ!!」

シクルの背後、地面がうねり動き、ホットアイの指の動きに合わせ、背後から襲いかかるそれを、シクルはぐっと両手に魔力を込め、振り返りざまに

「月竜の翼撃つ!!」

身体を捻り、魔力の翼で地面を薙ぎ払う。

そして、次に上空からコブラからの拳と毒蛇の猛攻が降り注ぐそれを、シクルは2、3回バク転をし避け、グイッ!と足に魔力を纏いコブラに蹴りあげる。

「月竜の鉤爪!!」

「フンッ」

だがそれは難なく避けられる。

「月竜の碎牙っ!!」

再び身体を捻り、バク転をしながら指先に魔力を込め、振り上げるが……

「っ……当たらない?」

「聞こえるぞ……お前の声……心の声が」

ニヤツと笑い、言うコブラの言葉を脳裏で反復し、考える。

「声……心の、声……心……」

「っ!? てめえ……」

シクルは意図的に何も考えることをやめる。それにより、コブラはシクルの心の声が聞こえなくなる。

「心の声が聞こえなきや……不安?」

ニツと笑うシクル。

「くそ……舐めんじゃねえ!!」

シクルの笑みを挑発と受け取ったコブラはシクルに猛攻をかける。その動きに合わせて、大蛇も毒牙を剥き出し、襲いかかってくる。

だが、その動きはどこか余裕が無く、隙のある動き……

「そんな動きじゃ……」

2. 3歩後ろに下がり、距離をあげ……一気に腰を屈めコブラの懐に入り込む。

「つーー!!」

「あたしは……倒せない! 月竜の鉄拳!!」

ドゴオ!!

「ぐはっ!!」

腹に拳をくらい、吹き飛ぶコブラに変わり、シクルの目の前に飛び込むは……

「エル!? いや……またジエミニか」

「行くぞオ!!」

エルザに変身したジエミニの剣技がシクルに襲いかかる。

「天輪 繚乱の剣（ブルーメンブラット）!!」

「換装 十六夜刀!!」

刀を握ると魔力を込めながら、飛び交う剣たちを薙ぎ払い、走る。

そして……

「ごめんね!! 九ノ太刀 不殺の刃!!」

逆刃でジエミニを斬り、星霊界へ還す。

「ダークカプリチオ!!」

「っ!!」

視界の隅から向かってくるレーザーに気づき身体を逸らすが一瞬遅れ、脇腹を掠る。

「シクル……………!!」

「ちっ……………光竜の咆哮!!」

咆哮を使い、後方へ跳び、一度距離を取るが……

「貫った!!」

「かかったなあ!」

飛んだ先にレーザーとコブラが立ち、魔法を放つ寸前——

「……………! 月竜の剛拳!!」

鉄拳よりも威力の強い拳を地面目掛け振り下ろす。

ズドオオオオオン!!

「ぐあああ?」

音を立て地面が割れ、盛り上がりレーザーとコブラを吹き飛ばす。

シクル1人で六魔將軍を相手に奮闘する姿を見つめ……

「す、すごい……………」

「1人で……………」

「六魔將軍を……圧倒している……」

「で、でも……!」

全員が目を見張る中、ルーシィは静かにシクルを見つめ、不安そうに表情を歪める。

「っ……はあ……はあ……」

「ふ……流石の貴様も、この人数を1人で相手は消耗が激しいか?」

息の上がるシクルに不敵な笑みを浮かべるブレイン。それに返す様に不敵に笑い返すシクル。

「まさか……まだ、準備運動にもならないっての……」

ぐっと拳を握るシクル……その頬を一筋の汗が伝う。

その時……

「きゃあっ!」

「「「「「「っ!?!」」」」」」

離れた岩陰に隠れていたウェンディの突然の悲鳴。

全員が振り返ると……

「！ ウエンデイっ!!!」

ブレインの魔法に絡まれ、捕まっているウエンデイの姿。咄嗟にシクルを始め、少し動ける様になった者が助けに、動き出すが……

「油断したなあっ!!!」

ガブツ！

「っ……!! くっ……!!」

大蛇に首筋を噛まれるシクル。

「シクルっ!!!」

シクルの身体を即効性の毒が回る……

あ……か、らだが……痺れっ……!?

ドサツと倒れるシクル。その身体をコブラが抱き上げる。

「てめっ……シクルをどーすんだ!?!」

ナツの怒声が響くが……コブラはニヤツと笑い……

「さあな？」

とだけ言い、空間の裂け目に消える……。

「シクルウー!!!」

そして……

「ウェンディっ!!」

「シャルルー!!」

ウェンディもブレインの魔法により、連れ去られる……。声を上げ、シャルルがその手を掴もうと飛ぶ。

ウェンディも手を伸ばすが……

パシツとウェンディが掴んだのはハッピーの手だった。

「え…!?!」

「ちよ、ちよつとあんた!?!」

ハッピーと共に、ウェンディも空間の裂け目に消えていき……

「ハッピー!!シクル!!!」

「ウェンディ!!!」

ナツとシャルル、グレイとルーシイも裂け目へと走り、追おうとするが……

「ふん……月の歌姫と天空の巫女は頂くぞ！」

うぬらにもう用は無い！　ダークロンド！！
ブレインの魔法がナツたちに襲いかかる……。

「岩鉄壁！！！」

ドオオオオオオオオオオオ
！！！！

「……………っ！」

ものすごい爆風と音に、目を瞑っていた一同……爆風が止み、目を開けると……

「……………間、一髪っ」

「ジュラ様っ！！」

ジュラが岩の壁を作り、ナツたちを守っていた。

砂埃が晴れ、ジュラにお礼を言いながらも辺りを見回す一同。

「いねえ……あいつらも……シクルたちもいねえ！！」

「ウエンデイっ……………！」

戸惑い、慌てる一同だがジュラの言葉で、一度落ち着き、一夜の魔法で傷を癒す。

そして、あらかた傷もなくなり、痛みもなくなると……

「っ……………くっそお！！！」

シクルたちを探そうと、飛び出そうとするナツ。

「待ちなさいっ!!」

そんなナツをマフラーを引つ張り止めたシャルル。

「ぐえっ!? ンだよ!？」

「まずは落ち着きなさいって言ってるでしょ! それに……」

そう言い、シャルルが振り返った先には……

ただ一人、一夜の魔法が効かずに大蛇の毒に侵され、苦しむエルザの姿が……

「「エルザっ……!!」」

流石の一夜の痛み止めの魔法でも、毒は癒せないようで……エルザは力の入らない身体に鞭を打ち、身体を起こすと……

「すまない……ベルトを借りるぞ、ルーシー」

と、ルーシーの腰に巻かれたベルトを取り外す。その瞬間スカートが落ちる。

「きゃあああああっ／＼／＼!？」

「「おぉー!!」」

「見るなあ!!!」

鼻の下を伸ばし、魅入るトライメンズの3人に顔を真っ赤にしながら声を荒らげる

ルーシー。

エルザはルーシーから取ったベルトで肩口をきつく縛り……

「な、何してるの……エルザ!？」

「すまん……このままでは戦えん……」

切り落とせ」

エルザの言ったその言葉に一同は驚愕し、目を見開く。

「な、バカなこと言ってるじゃねえよ!!」

「頼む……誰か……」

顔を更に悪くさせながら言うエルザに……

「分かった……俺がやろう」

と、剣を構え、リオンが前に出る。

「な……リオン!?! やめろ!!」

エルザとリオンの間に入り、リオンを止めるグレイ。だが、リオンは冷たくグレイを

見据え……

「どけ、グレイ……今その女を失う訳には行かない……」

「だが……他にも方法があるはずだろ!？」

「早く……やれえ!!」

エルザの叫びにグレイを押しつけ、剣を振り上げるリオン……そして――

「やめてえ!!」

「おい!？」

キイイイン!!!

「……どういうつもりだ、グレイ」

リオンの振り下ろした剣は、グレイの作り出した氷の剣に遮られ、エルザに当たるところは無かった。

「言つたら……他にも方法があるはずだと……」

「リオンとグレイの間で冷たい空気が流れる……」

「そこに……」

「ぐっ……あ」

「ドサツ……」

エルザが耐えきれず、倒れてしまった。

「「エルザっ!!!」」

既に気絶しており、ナツたちの声に目が覚めることはなく……

「ま、まずいわよ……このままじゃ毒が全身に回って……!!」

「……ウエンディなら、助けられるわよ」

「「「!?」」」

冷静にナツたちを見つめていたシャルルからの言葉に全員が振り返る……。

「それって……ウエンディなら……解毒が出来るの……?」

ルーシイが戸惑いながら、問いかける。

「解毒だけじゃないわ……解熱や痛み止め……傷の治癒も出来るわ」

「そ、それならシクルも……っ!」

「でもあいつは解毒は出来ねえだろ?」

「……ううん、出来るよ……シクルも」

グレイの言葉を静かに否定した声……ルージュの声。

「え……そーなの?」

「うん……でも、あまり使わないのは確かだよお……」

ルージュの言葉にへえと声を上げるルーシイたち。

「でも……治癒魔法は失われた魔法のはずでは……?」

シエリーからの問いにシャルルははあとため息をつき……

「ウェンディ……あの子は天空の滅竜魔導士……天竜のウェンディよ」

「滅竜魔導士……!?!」

「あの子が……!?!」

「マジか……!?!」

「とにかく……今私たちに必要なのはウェンディよ……」「シクルもだつ!!」……はあ、
ウェンディとオスネコ……それからシクルつても助けに行くわよ!」

「!!!」おおー!!!」」」

ナツたちがシクル、ウェンディ、ハッピーの救出に動き出した頃……

六魔将軍、仮説拠点にて——

「きゃあ!」

「っ……うー!」

「うわ! お、女の子には優しくするんだぞ!」

シクルたちは、仮説拠点に着いた途端、放り投げられる。

「う……………！」

「つ……………シクルさん！」

「シクルっ！ つ……………安心して、シクルもウエンデイもオイラが守るよ！ 絶対……………ここから逃がしてあげるからね!!」

毒に侵され始め、苦しむシクルを抱き上げるウエンデイとその2人を守るように前に立つハッピー。

「ブレイン……………此奴等は何なのだ？」

「ニルヴァーナに関係あるのか？」

レーサーとコブラからの問いかけにブレインはシクルとウエンデイを見つめ……………

「此奴は天空魔法……………治癒の魔法を使う

そしてこの女は……………彼の歌魔法を使う姫だ……………」

と言った。その言葉にコブラたちは目を見開き驚く。

「治癒魔法っ!?! この娘が!?!」

「この女が歌姫なのは知ってたが……………」

「これは、金の匂いがしますね……………」

「もしかしてこいつらに……………」

コブラたちの視線を受け、ブレインは頷く。

「ああ……奴を復活させる」

「っ……や、っ……？」

「奴って誰だ!？」

「よく分かりませんが……私、悪い人たちになんか……手は貸しません!!」

シクルを抱え、身体を少し震えさせながらブレインを睨みあげるウェンディ。

だが、そんな睨みに怯む訳もなく……ブレインはニヤツと笑う。

「貸すさ……必ず。うぬは必ず手を貸す……そして、奴を復活させる……」

その笑みに恐怖を抱くウェンディ。

「ひ……いっ」

身体の震えが強くなる……その時……

「怖がらないで……ウェンディ」

「え……」

腕に抱いていたシクルが目を開き、にっこりとウェンディに笑みを浮かべていた。

「シクル……さ、ん」

「大丈夫……貴女は私が……守る」

ぐっと、身体を起こし、ブレインを睨みつけるシクル……

「てめえ……キュベリオスの毒にやられた……」

「私を甘く見ないで……あれくらい、私にだって……解毒出来るっての」

ニツと微笑むシクル。

そこに……

大きな棺桶を運んできたレーサーが帰ってくる……。

「「っ!」」

「参ったぜ……思ったより時間かかっちゃまった……こんなに重けりや、スピードも出せねえよ」

汗だくになり、眩くレーサーの肩を叩くブレイン。

「何を言うか……主より速い男など存在せぬよ」

「……あ、れは」

その棺桶を見つめ……シクルは嫌なものを感じ取る。

「寒気……（この禍々しい魔力……普通じゃない）」

警戒を高めるシクル。

「ウエンデイ……そして、シクル

貴様らにはこの男を治してもらおう」

「男……………？（中身をわかっている……………）やるわけないでしょ」

「わ、私も……………！絶対、やりません!!」

その2人の言葉に……………クククと笑うブレイン。

「いや……………お主は必ず治す……………治さねばならぬのだ」

そう言い、ブレインが魔力を棺桶に送ると……………その蓋が溶けていく……………。

「……………え？」

「……………な」

「な……………に？」

棺桶の中から出てきたのは……………

「……………ジ、ジェラー……………ル？」

眠りにつく、ジェラーその者だった……………。

44話 解き放たれる ニルヴァーナ

棺桶の蓋が溶け、現れたのは……死んでいるかのように眠っている、ジェラールだった……。

「この男はジェラール……かつて、評議院に潜入していた。つまり……ニルヴァーナの場所を知る者」

一方的に語るブレインだが、ウエンディやシクル、ハッピーにその声はしっかりと届いておらず……今はただ……、目の前の光景を目を見張っていた。

「ジェ……ラー、ル」

「なんで……なんで、ジェラールがつ!？」

「こ、こいつが……ジェラール……? え?」

でも……ジェラールって……生きてたの!？」

「エーテルナノを大量に浴びてこのような姿になってしまったのだ……そこで、此奴を元に戻せるのはうぬだけだ。恩人……なのだろう?」

ブレインの言葉にぐっと唇を噛み、俯くウエンディ。

「ジエラール……て、あのジエラール？」

「ハッピー……知ってるの？」

ウエンデイの問いかけにハッピーはジエラールから目を離すことなく、口を開く。

「知ってるも何も……こいつは、エルザを殺そうとした奴で……評議会を使ってエーテリオンを落とした張本人なんだ！」

「そう……みたい、だね」

でも……とウエンデイはジエラールを見つめる。そんなウエンデイを見つめ、シクルは眉を顰める。

「ウエンデイ……（なにか……訳ありみたいだけど）」

「この男は亡霊に取り憑かれた亡霊……哀れな理想論者。しかし、うぬにとっては恩人だ……そうだろうか？」

「っ……」

「恩人……？」

「ウエンデイ……どういう事？ 恩人って」

「そ、それ……は」

シクルの問いかけに言葉を濁しながら、答えようとするウエンデイ。

だが、その言葉を遮るように響くブレインの声。

「さあ、この男を復活させろ……」

「ダメだよ！　こんな奴、復活させちやダメだ!!」

顔を俯き、震えるウエンデイに力を貸すなど声を荒らげるハッピー。そんな彼を……

「黙れ……」　ドカー……!

ブレインが蹴り飛ばし、岩肌へとハッピーの小さな身体をぶつける。

「うぎゃっ?」

「ハッピー!!!」

痛みに呻き、倒れるハッピーに駆け寄ろうとするシクルとウエンデイ。そこに……

「天空の巫女よ……この男を復活させぬというのなら……」

ブレインがそう言い、まだ動きの鈍っていたシクルを捕らえ、首筋にナイフを突き立てた。

「っ!!」

「っ!!」

「この女を殺すぞ」

「え……」

「シ、シクル……!!」

「さあ……どうした?　うぬなら治すことくらい……簡単だろう?」

ニヤリと笑うブレイン。

「ウ、ウエンディ！ ダメだよ！ ジェラールは復活させちゃ……！」

ハッピーがウエンディの手を掴み、言うもウエンディはジェラールとシクルを交互に見つめ落ち着きがなくなり始めていた。

「で、でも……それじゃあ、ジェラールも……シクルさんもっ」

「私の事はいいから!! ジェラールは復活させちゃダメっ！」

「黙ってろと言っただろう？」

体を動かし、抜け出そうとするシクルの首筋にクイツと刃先がくい込む。

「何が目的かは知らないけど……私はあんた達の標的何でしょう？ 殺したら……価値がないんじゃないの？」

シクルの睨みを受け尚、笑みを崩さないブレイン。

「ふん……貴様の身体は死しても高い価値がある……これは脅しじゃあないぞ」

「っ……このっ」

ブレインの言葉に嘘偽りがないと悟ったシクル。そして……

「ま、待ってください!!! お、願います……少し、時間を……下さい」

震えるウエンディの声が響いた……。

「ウエンディ……!!」

「……良かろう、5分だ」

「くっ……（どうしよう……どうしたら!? このままじゃあ……）」

シクルの背を冷たい汗が伝う……その時

「シクル!! ハッピー!! ウエンディ!!」

「っ!! この声……」

「ナツだっ!!」

洞窟の中にナツの声が響き始める。

ナツ……お願い………ナツっ
!!!!

「……レーザー、近付かせるな」

ブレインの指示に、「OK」と答え、足止めに向かうレーザー。

「……さあ、そろそろ時間だぞ?」

「っ……」

ブレインの言葉に目を瞑るウエンディ。

「ダメだよ!! ウエンディっ!」

ハッピーが声を荒らげ、止めるが……

「煩わしい……沈め」

ハッピーに、ブレインの魔法が飛ぶ。

「ハッピーっ!!」

「ぬっ!」

ハッピーに魔法が飛んだ瞬間、ブレインの腕を振り切り、拘束から抜け出すシクル。
ドオン!!

そして、ハッピーを庇い、ブレインの魔法をくろうシクル。

「うあっ!!」

「シ、シクルっ!!」

シクルは身体に襲い来る衝撃に耐えながら、ハッピーに微笑むと……

「大丈夫だから……ナツを、呼んできてつ」と告げた。

ハッピーは涙を堪え、領き翼を作り出す。

「すぐに連れてくるから!! 待っててね!」

そう叫び、ナツを呼びに飛び立った。

「貴様っ……!」

ブレインは反抗された事に苛つき、シクルを地面へとドゴオ! と音を立て、殴り倒す。

「うぐっ！」

「シクルさんっ!!」

ブレインはシクルの髪を乱暴に掴み、引つ張り上げる。

「いつ……!!」

「さあ！ 失われた魔法……治療魔法を、今使わずしていつ使うのだ？」

「シ、クル……さんっ……ジエラ、ール……」

「ウエンデイ……だ、め」

シクルが止めるように訴えるも……ウエンデイは首を小さく横にふると……立ち上がり、ジエラールへと歩き出す。

ああ……ごめん……ナツ……私、止められなかった……

ごめん……みんな

ゆつくりとジエラールに手を伸ばすウエンデイを見つめ……シクルは苦々しく唇を噛みしめる。

そして……

眠りについていた男が……目覚める。

ジエラールの眠りが解け、目を開けるのを確認すると、ブレインはもう必要の無いかのようにシクルをその場に落とす。

「わっ」

シクルは突然解放されたことにより、地面に手をつくすが、目の前でガクリと膝をつくウエンデイが目に入ると、ウエンデイへと駆け寄る。

「ウエンデイ!! ウエンデイ? 大丈夫? しつかりして!!」

シクルが声をかけるもウエンデイは反応せず……

「ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……!!」

ただじつと……それだけを呟いていた。

「ウエンデイ……」

シクルは悲しくなり、表情を歪める。そして……

ギユツとウエンデイを抱きしめた。

「大丈夫……大丈夫だから……ね? 落ち着いて、ウエンデイ……」

震え、涙を流すウエンデイの背を撫でる。そこへ……

「シクル!! ウエンデイ!!」

ナツが到着した……。

「ナツ……」

ナツは額から血を流すシクルを見て、目を見開き……そして、静かに立っているジェラルールを見て、更に驚愕の表情を浮かべる。

「な……ジェラルール!? てめえ……!!」

驚愕の表情から怒りの表情に変わり、ジェラルールへと突っ込むナツ。

だが、ジェラルールは静かにナツを、魔法で弾き飛ばした。

その様子を見て、シクルは何か違和感を感じる。

「……ジェラルール? (この感じ……何? なにか……違う)」

ジェラルールはブレインも魔法で吹き飛ばすと静かに歩き始め、消えて行った……。

ジェラルールと入れ違いに現れ、シクルの胸に飛び込んでくる小さな影があった。

「シクルウー!! 大丈夫だったあ!? 心配したよお!」

胸に飛び込んだのはルージュだった。

「ルージュ! うん、大丈夫……大丈夫だよ」

につこりと微笑むシクルを見て、安心するルージュ。そこに、ゴォ!! と音を立てナツが立ち上がる。

「いつてえ……くそ、あんにやろお!!」

ジェラルールを追いかけようとするが……

「待ちなさいよ!!」

グイツ! とシャルルにマフラーを引つ張られるナツ。

「うぐえ!? ンだよ!」

「今はあいつよりもやらなきゃいけない事があるでしょう!」

シャルルからの言葉にう……と言葉が詰まり、ぷいっと顔を逸らすナツ。

「わあつてるよ……」

そう言うとなツはふつと気絶してしまったウエンディを抱え、立ち上がるシクルを見つめる。

「よっし……大体は分かったから、早くエルのところ行こつ! ……て、どしたの?」

現状をルージユから説明してもらったシクルは早くウエンディを連れてエルザの元に戻ろうと言うがナツが動かない。

ウエンディをシャルルに預け、ナツの前に駆け寄る。

「ナーツ? どうしたの……早く行かないと……」

シクルの言葉は最後まで続かなかった……

ナツがシクルの額を優しく撫で始めたのだ。

「……え? な、何……ナツ?」

突然の行動に困惑し、次第に頬が赤くなるのを感じるシクル……すると

「……わりい、俺……間に合わなくて……シクルに怪我、させちまった……さつきも……俺、守られて……」

悔しそうにシクルに触れていない手をぐつと握る。

「ナツ……」

「ごめん……痛かったろ？」

シクルの額の傷を優しく撫で、心配するナツを見上げ……

クスリと微笑むシクル。そして……ナツの、強く握りすぎて血が流れ出していた手を優しく包み込み、握るシクル。

「大丈夫……信じてたから、来てくれるって……それにまだ、終わってないよ？ 今はエールを助けて……そして、ジェラルと六魔將軍を止めよう？ ね！」

シクルの言葉にナツは目を見開き始め……そして、次に瞬きをすると普段の眩しい笑顔が戻る。

「ああ!! そーだな！」

「よし! じゃあ行こう! ハッピーやルージュ、シャルルたちを待たせちゃってるよ」
ハッピーたちは先に洞窟の外に行っていたのだ。追いかけるように2人が外に出ると……

「遅いわよ! あんたたち!!」

「ご、ごめんねシャルル……」

「まあまあ……再会の愛の抱擁でもしてたんだよお、きつと」

「してないわよ!? 何言ってるのルージユ!?」

「でえきてるう」

「出来てないから!! 巻き舌風に言うな!」

「おい、早くエルザんとこ行くんだろ? 行こーぜ」

ナツの指摘にはあとシクルはため息をつきながら、「行こう……」と言い、ナツをハッピーがシクルをルージユが、そしてウエンデイがシャルルに抱えられエルザの元へと急ぐ。

途中レーサーの妨害があったがグレイが現れ、先に行かせてくれた。

その時……グレイは殆どの魔力を使い切ってしまった……

「グレイっ!? 私も一緒に戦うよ……!?!」

とシクルが言ったが……グレイは氷の鉄壁の向こうでフツと笑うと……

「心配すんな……ここは俺に任せて、シクルは……早く、エルザの所行つてやれ! エルザも……シクルのこと心配してたからなあ」

と言った。

「……ごめん、グレイ……死なないで」

シクルはそう最後に眩き、レーサーの攻撃で気絶してしまったルージユを抱え、先に走り出したナツを追い、走り出す。

「……死なねえよ」

最後に、グレイはそう眩き……

「さあ……ここは通さねえぞ!!!」

グレイとレーサーの戦いが、始まる。

エルザの元へは途中、ヒビキの古文書的能力で脳に直接地図が送られ、迷わず戻れた。

エルザの近くにはヒビキの他にルーシイも待機していた。

「シクルっ!! 無事だったんだ! よかった……」

「ルーシイっ!! ごめん、心配かけて」

シクルを見て安堵するルーシイにつこりと微笑むシクル。

エルザは毒が広がっており、苦しそうに呻いていた。

「エル……!」

「ウエンディ!! 起きてくれえー!!」

気絶するウエンディをガクガクと振り、起こそうとするナツ。

すると、ウエンディはゆっくりと意識を覚醒していく……。

「ん……っ！ ひゃっ!? あ……っ、ごめ……ごめんさい！ わた、し……私！」

完全に意識が戻ると気絶する前の事が蘇り……涙を流しながら震え、謝り続けた。

だが、そんなウエンディに……

「頼むっ!! 今はそんなのどうでもいい!! エルザが毒にやられたんだ!! 力を貸してくれ……!!」

頭をゴツ！と地面に叩きつけ、下げながら頼み込むナツを見つめ……

「……毒？」

エルザを振り返るウエンディ。その先には確かに毒に苦しむエルザの姿が……。

「あ、わ……分かりましたっ！」

「ウエンディ、貴女は解毒に集中して？ 他の傷は私が治すわ」

エルザの隣に膝をついたウエンディの隣に腰を下ろし、エルザに手をかざすシクル。

「はいっ！」

ウエンディの力強い頷きにつこりと微笑むと……

「【我、月の加護の名の下に

愛する者の身を包み その身、回復させん】

ソングマジック
歌魔法治癒（ヒール）

エルザの身体を光が包み込む……そして、毒以外の傷を全て回復することに成功。

その後、ウエンデイの魔法でエルザの毒は完全に無くなった。

「ふう……これでもう大丈夫です……」

「もう少ししたら、目が覚めると思うわ」

「おお!!」

「良かった……」

ウエンデイとシクルの言葉に安堵する一同。

「よし! ハイタッチだ!!」

ナツの言葉でその場にいる一同が順番にハイタッチをしていき、ウエンデイも……ナツに声を掛けられ、照れながらハイタッチをした。

「良い事? 見ての通り天空魔法は魔力の消耗が激しいの……だから、これ以上ウエンデイに魔法を使わせないで頂戴……」

シャルルの言葉に、「大丈夫!!」と声を上げるウエンデイだが確かにその表情には疲労が見られ、魔力も消費している様子が伺えた。

「大丈夫! 回復なら私も使えるから……ウエンデイはここぞっていう時以外はしっか

り休んで！ ね？」

シクルからの言葉に「あ…はい！」と頷いたウエンディ。

「おっしやー!! エルザが目覚めたら反撃開始だア!!」

ナツがそう叫び、ハッピーもそれにつられ

「ニルヴァーナは渡さないぞー!!」

と、声を上げる。

が……

次の瞬間、天高く伸びる黒い光の柱が辺りを照らす……。

「……遅かったみたい」

その光を見つめ、静かに……シクルの声が響いた……。

「え……？」

「何……あの、光……黒い」

「なんか……嫌な感じが、するよお……」

ハッピーとルージュが震えながらその光を見上げる。

「あれが……ニルヴァーナ……」

静かに告げたシクルの言葉に驚くナツたち。

「まさか……まさか、六魔将軍に先を越されちゃったの!?!」

ルーシイが慌てて、立ち上がり、その光を見上げる。

「は……あの光……あの光のところに、ジェラルールがいるっ!!!」

「「っ!」」

「あ……私の、せい……だ!」

「会わせるわけにはいかねえ!! エルザには……あいつは、俺が潰す!!」

そう言うとなツは「うおおおおお!!」と雄叫びを上げ、光の元へと走り出す……。

「ちょ!? ナツー!!! (あのバカっ!! また突っ走って……)」

シクルが手を伸ばすも、それはナツに届かず……

そして、問題はナツだけではなかった……。

「あ、あれ!? ちょっと……エルザがない!!」

ルーシイの言葉に全員がエルザが寝ていたはずのところに、視線をやる。

だが、確かにそこにエルザの姿はなかった……。

「あ……ああ」

「っ! ウエンデイ……!」

頭を抱え、ふらつくウエンデイを支えるシクル。

「何なのよ、あの女!! ウエンデイにお礼も言わず……!」

「まさか……エルザ、ジェラルールって言葉を聞いて……」

「あんな身体で!? 無茶しすぎよ……」

「どうしよう……私の、せいだ……私が、ジエラールを……治したせいで……ニルヴァーナが見つかったら……エルザさんや……ナツさんが……」

頭を抱え、自責の念に苛まれるウエンデイ……その姿を見て、シクルはまずい……と感じ、ウエンデイに駆け寄ると……

ギユツ……と、抱き締めた。

「ウエンデイ……落ち着いて……」

大丈夫、大丈夫……貴女は、悪くない……

貴女は、恩人のジエラールを助けたかっただけなんだよ……ね? なら……いいじゃない

それで……貴女は、悪いことなんか何もしてない……

人を助けたんだよ? 目覚めぬ眠りについていた人を……貴女は貴女の恩人を助けた……

凄いいじゃない……ね? だから……

自分を責めないで、ウエンデイ……」

シクルの言葉に涙を流しながら次第に落ち着くウエンデイ。

そして、ウエンデイは「シクル……さん」と呟き、気を失ってしまった。

「ウエンデイ!!」

「大丈夫……ちよつと疲れて、気を失っちゃったただだよ」

心配するシャルルににっこりと微笑み告げたシクルの言葉にシャルルは、「そう……」と安堵する。

「シクルちゃん……君、アレのことを……」

シクルを驚きの目で見つめるヒビキ。

「それは……移動しながら説明するわ」

今はナツを……と、シクルの言葉で一同は頷きウエンデイをシクルが背負い、走り出した。

その道中、ニルヴァーナについて語るシクルとヒビキ。

「じゃあ怒りは!? 怒りはどうなの……」

ルーシイの脳裏には怒りに走り去ったナツが過ぎる。

「多分あれは大丈夫だと思う……誰かを思う怒りなら、それは闇とは言えないと思うから……」

安心して、というシクルの言葉に不安が消えるルーシイ。

「それにしても……僕はマスターから聞いてそのことを知っていたけど……シクルちゃ

んはどこで?」

ヒビキの言葉にシクルは、ふっとヒビキに一度視線をやり……再び前を向くと
「昔……ちよつとね、本で読んだことがあつてね」

とだけ言い、その後口を開こうとはしなかった。

もう少して光の元へと到着する……そう、一同が思つた時……

た……すけ……うぶ

何かに酔う声が聞こえる。

「……ナツ?」

「え?」

道を外れ、小さな崖を下つていくシクルを追い、ルーシイたちもそちらへ行く……

「つ!? ナツ!!」

筏の上で酔っているナツと……

「グレイ……何を!」

ナツにトドメを刺そうとしているグレイの姿があつた……。

「あばよ……」

振り上げられる氷の剣……それは、ナツへと振り下ろされ……

「やめてえー……!!!」

「ナツ……!!!」

ルーシイとハッピーの叫びが響く。

そして……

ザンツ!!

「…………やらせると思う?」

グレイの振り下ろした剣は、間に割り込んだシクルが刀で受け止め、止めた。

グレイを睨むシクルの目は静かに怒りに燃えていた……。

「邪魔をするのか? ……シクル」

「何度だって、邪魔してやるわ……ジエミニ」

シクルの言葉にグレイ……否、ジエミニは表情を少し、歪ませた……。

45話 星霊を想う心

剣と刀を交え、睨み合う両者……

すると、シクルの視界の端から白い光が飛んでくる。

「っー」

シクルは剣を押し返すとそのまま飛翔し、それを避ける。

そんな彼女に向け……

「ごめん、シクル……アイスメイク 〃槍騎士〃 (ランス)!!」

グレイに変化したジエミニの魔法が向かってくる。

飛んでくる氷の槍を見つめ、シクルは微動だにしない。そして……

「サジタリウス、お願いっ!!」

ルーシイの声が響くと、氷の槍は飛んできた矢により壊される。

シクルはそれを見つめ、フツと微笑み、ルーシイたちの隣に着地する。

「さっすが……信じてたよ、ルーシイー」

「もうっ!! 避けようとしなからヒヤツとしたわよ……」

頬を膨らませ、怒るルーシイに「ごめんごめん」と笑いながら軽く謝るシクル。

「もお……それより、ちよつとグレイ! 仲間に攻撃するなんて酷いんじゃないの!?!」

ルーシイはシクルから視線を外し、グレイへと向けた。

「……グレイから見たルーシイ。」

新人魔導士、ルツクスはかなり好み、少し気がある」

「な、何よ……!」

グレイがルーシイに集中している間にハッピーがナツを助け出そうとするが……

ピキーン!!

「ぎゃっ!?!」

グレイの魔法により、氷漬けにされ、地面に落ちるハッピー。

「ハッピー!!」

「見た目によらず純情……そして、星霊魔導士……へえ? 星霊魔導士ねえ……おもしろえ!!」

グレイがルーシイに向け、魔法を放つ。

「っー!!?」

ルーシイは思わず、身構え目を瞑る……。

そこに、深いため息が聞こえる……。

「だから……やらせないって言ってるでしょ？」

その言葉と共に……シクルから物凄い威圧が放たれると……

パキーン……

グレイの放った魔法は粉々に砕かれ、散る。

「シクル……！」

「これは……（威圧だけで……魔法を、消した……）」

ルーシイはシクルに笑顔を向け、ヒビキはその目の前で起きた現象に目を見開き、シクルを見つめた。

「いい加減にしなさい……ジエミニ」

「ジエ、ミニ？」

シクルの呼んだその名に、ルーシイははっとグレイを見つめる。

その視線の先のグレイは……ニヤツと笑うと

「……ごめんねえ……いくらシクルの言葉でも……」

と、話し身体が光り出し、煙が上がる。

「……聞けないんだ」

光が消え、煙が晴れると……目の前にはルーシイが立っていた。

「わ、私い!?!」

「君、馬鹿なのかい?今ここでルーシイちゃんに変化しても……騙されるわけがないだろ?」

ヒビキが睨みながらそう言うが……

「ほんとにそう思う?」

と、ルーシイになったジエミニが言う……

際どいところまでシャツを捲ったり、太ももを晒したりとポーズをとった。

それを見たヒビキは……

「おおおおおつ!!!」

鼻の下を伸ばし、釘付けだった。

「やあめてえええええええつ／／／／／!!!」

ルーシイの絶叫が響く。

「星霊情報収集完了……へえ? 星霊いっぱい持つてるんだ……」

ニヤツと笑うジエミニに見て……はつとシクルはその何かに察し、動く。

「お願いね？ サジタリウス」

ジェミニの命令により、ヒビキに向け、サジタリウスの矢が放たれた。

「「え？」」

「な……!？」

目の前に迫るその矢……それは、瞬時にわって入ったシクルの刀により斬り捨てられる。

「シ、シクルちゃん……!」

「ルーシイ!! サジタリウスを強制閉門して!」

シクルの言葉にはっと我に返り、頷くルーシイ。

「サジタリウス!! 強制閉門!!」

「申し訳ないですからして……もしもし」

ルーシイの命令で、サジタリウスは星霊界へと戻される。

だが……

「ふ……開け、人馬宮の扉 サジタリウス」

「お呼びでありますか、もしもし……て、え? ……あれ?」

ジェミニの方にサジタリウスが召喚される。

「ええー!？」

「やっぱり呼べちゃうか……」

クスツ 「当たり前よ だって、その子の魔法をコピーしたんだもの……使えて当然でしょう？」

ルーシイに変化したジエミニはそう言い、笑うと……未だ気絶しているウエンディを抱え、上空に避難していたシャルルを指差し……

「サジタリウス、あの飛んでる猫……殺して！」

と、命令する。

命令されたサジタリウスは抵抗しようとするが、弓を構え……

「っ！ サジタリウス、強制閉門!!」

本物のルーシイが声を上げるも今のサジタリウスを呼び出したのはジエミニのルーシイ……こちらが閉門出来るはずがなく……

遂に、抵抗が難しくなり……サジタリウスの矢が放たれる……その、瞬間……

「サジタリウス 強制閉門!!」

「「え……」」

ルーシイではない……シクルの声が響き、次の瞬間、サジタリウスは星霊界へと帰る。

そして……

「我、月の歌姫の命により

人馬宮の門 閉鎖 命ずる」

人馬宮の扉 強制閉鎖」

シクルの足元に魔法陣が現れ……そこから光の玉が発射されるとルーシイの懐にある人馬宮の鍵に当たり、鎖が巻かれる。

「な!? 何これ……」

ルーシイは困惑し、シクルを見つめ問いかける。

「また呼ばれたらめんどうだから……暫く、呼べないようにした……大丈夫、すぐ解除するから」

今だけ、ごめんね?と、申し訳なさそうにルーシイに謝るシクル。

「ううん……! またあつちに呼ばれたら大変だもん……解除出来るんだもんね? 大丈夫!」

ルーシイがそう言うのとシクルは安心したように微笑む。

そこに……

「ふうん……星霊の鍵なしで星霊魔法が使えるって……本当だったんだナ?」

「……エンジェル」

六魔將軍、 “エンジェル” が現れた。

エンジェルが現れるとジェミニは変身を解き、エンジェルの隣につく。

エンジェルはシクルを見つめ、ニヤリと笑う。……が、シクルは少しエンジェルを見つめると……

「はあ……私疲れちゃったから……あとお願いね？ ルーシイ」

と、言い、刀をしまうと……腰を落として戦闘から外れた。

「ええええええ!!」 ちよ、一緒に戦ってくれないの!？」

ルーシイが驚愕し声を荒らげるも……

「だあって……私結構戦ったし動いたよ？ ちよっと休憩しないとこの後動けないってえ」

と言い、まったく動く気のないシクルに……ため息をつき、ルーシイは泣く泣く……

「ううー……分かったわよお」

と呟きジェミニと向かい合う。

そして……鍵を構える。

「開け！ 宝瓶宮の扉 アクエリアス!!!」

召喚されたアクエリアスはルーシイを見ると一気に表情を険しくし、舌打ちをする。

「ちよつとー!!? 呼んだ瞬間に舌打ちはやめてくれない!？」

「うるさい小娘だ……」

「あ、アクエリアスだア？ 久々だね」

自身を呼ぶ声に振り返り……その先にアクエリアスはシクルがいることに気づくと

……

「な!? シクルじゃねえーか!! 最近全然呼んでくれねえなあ?」

「ごめんごめん……呼ぶ暇なくてね」

「んな事言つて……めんどくさがつてただけだろお、まったく!」

アクエリアスはニツコリと笑みを作り、シクルを抱きしめる。

「え、ええええええ!? シ、シクルつて……アクエリアスとも知り合いなの!?!」

「小娘が……嫌い」

「だーめ、主なんでしょ? ルーシイは……もつと優しくならないと……今後呼んであげないよ?」

ルーシイに再び舌打ちをするアクエリアスを咎めるシクル。

アクエリアスは不貞腐れた表情を浮かべながらも……「分かったよ……」と言った。

相変わらずな様子のアクエリアスに苦笑を浮かべるシクル。そして、ため息をつき

……ルーシイを見やう。

「ルーシイ……残念だけど多分、アクエリアスはダメだよ」

「……ええ?」

ルーシイはシクルの言ったその言葉の意味が分からなかった……が、エンジェルが召喚した星霊を見てその意味に気づく。

「ふん……開け！ 蠍宮の扉 スコーピオン！」

「え……二体同時開門!?!」

エンジェルの召喚した星霊、スコーピオンが現れると……

「っ！ スコーピオン！」

「アクエリアス!!」

アクエリアスはシクルを離し、スコーピオンへと抱きつき……スコーピオンもアクエリアスを抱きとめた。

「え、ええええええ!?!」

「スコープオンとアクエリアスは恋人同士なのよ？ それも相当なバカツプル」

シクルの言った通り、2人は熱い抱擁を交わすと……

デートに行くといい星霊界へと帰ってしまった。

「く……こうなったら！」

開け！ 獅子宮の扉 ロキ!!」

「王子様登場！ やっほー、ルーシイ！ それにシクルも！」

ルーシイは、ニツ！と微笑み、ロキも笑みをこぼすが……シクルはあまりいい顔はし

ていない。

「クス……星霊の相関図は知っておかないと……ダメだゾ？」

開け、白羊宮の扉 アリエス!!」

「え？」

「っ!!」

「……アリエス」

ルーシイとロキは現れた星霊に驚き……、シクルは苦々しく、拳を握りしめる。

「ごめんなさい……レオ」

顔を俯き、暗い表情のアリエスを見つめ、ロキは目を見開いている。

「ア、アリエス……」

「そんな……こ、これじゃあロキまで……戦えないじゃない……というより……なんで？　なんであんたがアリエスの鍵を持つてるのよ!?　それはカレンの……」

ルーシイが疑問をエンジェルにぶつけると……

「なんで？　はん……そんなの、アタシが殺したんだもの……これはその時の戦利品だゾ」

エンジェルはそう言い、アリエスの頭を叩く。

まるで仲間と思っていない様子のエンジェル……

そんなエンジェルを見つめ、ほんの僅かに表情を歪めるシクル。

「カ、カレンを……あんたがやったの!？」

ルーシイはその事実には驚き、そしてロキとアリエスを戦わせられないと考える。

「ロキ……閉じて、アリエスとは戦わせられな……」「見くびらないでくれ、ルーシイ……」「っ!!」

ルーシイはロキの門を閉じようとする……が、ロキはそれを止めた。

そして……

「例えかつての友だとしても……所有者が違えば敵同士。主のため、戦うのが星霊だよ」
「例え恩ある相手だとしても……主の為ならば敵を、討つ」

ロキとアリエスはゆっくり構える。

「それが僕達の……」「それが私達の……」

「誇りだっ!!」「誇りなのっ!!」

そうお互いに叫ぶと、一気に殴り合いの戦いが始まる。

戦闘タイプのロキと後方支援が強めのアリエス……だがその思いは強く、お互い引けを取らない戦いをしていた……。

しかし……

「あつれえ? やるんだ……? まあ、これもこれで面白いからいいゾ。」

でも……流石に戦闘用のレオ相手じゃ、分が悪いか……開け 彫刻座の扉 カエルム
!!」

エンジェルが押され始めたアリエスを見つめ、なんと3体目の星霊を召喚した。

「な……カエルムっ!? (あいつ……まさか!)」

「やれ……」

エンジェルの命令でカエルムの目が光る。

それを見て、シクルはバツ!と立ち上がり叫ぶ。

「ロキ!! アリエス!! 強制閉門!!」

「っ!?」

シクルの叫びと共に、ロキとアリエスを魔法陣が包み、星霊界へと強制的に戻した。

そして、2人が消えると……同時にカエルムから光線が放たれた。

それは、あと少し遅ければロキとアリエスを確実に貫いていたであろう……。

「!! あ、あんた……今、自分の仲間をつ……!!」

「ありや? 強制閉門されちゃったかあ……まあ、いいゾ! まだ次があ……」あると思

う?」っ!」

エンジェルの言葉を遮り……その場に冷たい声が響いた……。

「え……シクル？」

「ルーシィ……少し、下がって……」

「で、でも……」

シクルの言葉に少し躊躇うルーシィ。だが……

隣に歩いてきたシクルの顔を見た時……

「ひっ!？」

恐怖し、震えた……。

「……大丈夫、トドメはルーシィに渡すよ……ちよつとだけ、お仕置きしたいだけだから……ね？」

だから……あいつ、あたしにちよーだい？

黒い笑みを浮かべ、そう言ったシクルに逆らえるはずもなく……ルーシィは首が壊れるのではないかというほど振り、後ろへと下がった。

「さて……エンジェル……」

「な、なんだゾ……?」

シクルのその静かな殺気にほんの少し震えるエンジェル。だが、まだ正気が狂うほどではない……と、そう感じたエンジェル。

それが……間違いであった……。

ズオア……

「ひ……いつ!？」

シクルの身体から黒い黒い殺気が溢れ出す。

「お前は……あたしの目の前で……大切な友達を傷つけようとした……それが、どうい
うことか……分かるか？」

黒い笑顔で、真つ黒な殺気を溢れさせるシクルにエンジェルは震えが止まらない。

「そ、それがどーした……ど、どうせつ……星霊は死なないんだゾ!? 心配したって意味
なんか……」

「星霊だって、痛みを感じんだよ？」

星霊だって……生きてるんだよ？

それが分からないのならば……

あんたなんか……星霊の鍵を持つ資格なんかない!!」

ゴォー!!

エンジェルの足元に魔法陣が浮かぶ。

「な、なんだゾ!？」

「我が命により 汝の星霊契約を解除

星霊の鍵の保有を剥奪します」

そう唱え、手をかざすと……エンジェルの持つ鍵が光り、シクルの手へと飛んでいった。

「な?! 貴様、何をした!?!」

シクルは掌に飛んできた鍵を見つめ……ギユツと大切そうに握りしめると、エンジェルを睨む。

契約を剥奪した事により、既にジエミニとカエルムは星霊界へと戻っている。

「あなたから、星霊魔導士の証を剥奪した……それだけよ」

「き、貴様なんか!! そんなことが出来るわけ……」

「それが出来るのよ……私は、その権利を与えられている……星霊王にね」

シクルはそう言うと、ルーシイを振り返り……

「さ……あとは、あなたがやりなさい……ルーシイ」

「え……」

シクルの言葉に目を見開いていると……首筋に誰かの手が添えられる。

「つー!? え……ヒ、ビキ?」

ルーシイの首を掴んだのはヒビキだった。

ルーシイはヒビキが闇に落ちたのか?と、そう一瞬頭に過ぎるが……

「じつとして……? 古文書が君に一度だけ、超魔法の知識を与える……」

ヒビキがそう呟くと、ルーシイの脳裏に呪文が流れ込んでくる。

そして……

「天を計り天を開き あまねく全ての星々 その輝きをもつて

我に姿を示

せ……

アトラビブロスよ・我は星々の支配者

アスペクトは完全なり荒ぶる門を開放せよ」

エンジエルの周りを光が覆う。

「な、なによこれえ!?!」

「全天88星………光る!!」

“ウラノ・メトリア” !!!」

「ちよ……!?!き、きやあああああああつ!!!」

ルーシイの放った超魔法は成功、エンジエルを撃破した。

「よし………流石ね」

「………ん………え? ……え!?! な、何今の!?!」

シクルは微笑み、ルーシイは今起きた事が脳裏で追いつかない様子。

「あはは、まあまあ落ち着いて……」

「これが落ち着いていられると思う?」

ルーシイに迫られ、ほんの少し引いてしまうシクルだが、古文書の知識をルーシイに一度だけ力を貸したと再度説明をするとルーシイは納得し、落ち着いた。

ヒビキも知識を移す時に魔力を消費したが、少し休めば大丈夫だそうだ。

シャルルも少し離れたところだが、微笑み、勝利したシクルたちを見つめていた。

そして、ハッピーはルージユに助けられ、こちらも安堵し安心しきっていた。

「(だいぶ魔力を使っちゃったな……少し休まないよ、私も戦えないや……) はあ……
とにかく、早くナツを助けて……」

シクルがそう言い、立ち上がった時だ……

「邪黒斬」

「っ!!」

シクルに向け、黒い波が放たれた。

「「シクルっ!!!」」

シクルは咄嗟に飛翔し、避けるが着地した瞬間……

「うっ……………」

腕を掠った様で抑え、膝をつく。

「……………まさか、また貴様と会えるとはなあ……………」

暗い影から姿を現したその人物を見て…………

「…………え」

シクルは目を見開いた。

「な……………あなた……………なんで、ここに!？」

シクルたちの目の前に現れたのは…………

右眼を眼帯で覆う赤い瞳の男——

「ラ、ラディ……………ティ!？」

ニヤツと笑うその男…………

「今度こそ……………貴様の命、消してやろうやないか……………」

楽園の塔にて戦闘した男………… “ラディティ” が、再び…………

シクルの前に立ち塞がるのだった…………。

46話 闇に染まりし男

「ラディティ……なんで」

「なぜ、おいちゃんガここに……かイ？そんなの……貴様を殺ス為に決まってるだ口オ……なア？」

ニヤツと笑い、シクルを見つめるラディティにブルリと震えが起きる。

そして、シクルは十六夜刀を構え、ルーシィやヒビキたちの位置を確認する。

「く……（どうする……？ ルーシィやヒビキはもう魔力もない……戦えない）」

流石にこの人数を……しかもこの足場の悪いところで庇いながら目の前の敵と戦うのは無理だ……と、考える。

「（それに……）あなた……その魔力、何？ 前はそこまで黒くなかった……何をした？」

ラディティから発せられる魔力の質が……以前対等した時と明らかに違うことに気づいていた。

シクルからの問いかけに……ラディティが答える事はなく……

「……デッド・ブレイク」

「っ!？」

ラディティの振り下ろした剣から、黒い波動が地面を伝い超速度でシクルに襲いかかる。

足に力を入れ、空中へと飛び上がり回避する……が

「……デッド・ウィング」

「んな……うつ!」

黒い剣尖がシクルに襲いかかる。上空の為、うまく避けれず幾つか身体を掠る。

「「シクルっ!!」」

「っ……貴方、そんなに邪悪な魔力……だったかしら?」

斬れた箇所を抑え、ラディティを見つめるシクル。

その視界に……黒く光るものが入る。

「それ……魔水晶?」

ラディティの手首にはめられている腕輪……それは黒く、邪悪なオーラを放っていた。

そして……

この感じ………何処かで、感じたことが……

何処で? とにかく……いい感じはしないわね

グツと睨むシクルに慄く事はなく、逆に笑みを深めるラディテイ。

「才前は……目の前の俺ニ集中しすぎた」

「……え」

「「きゃあああああつ!!!」」

「「うわあああああつ!!!」」

「っ!? みんな!!!」

背後から聞こえたルーシイたちの悲鳴に振り返ると……黒炎の柱がルーシイたちを襲っていた。

「伍ノ太刀 鳴雷月!!」

シクルの刀から発せられた雷は黒炎を打ち消した。衝突の衝撃で、煙が巻き上がる。

視界の悪い中、シクルの目には……

「っ! ナツ……!!」

ロープが切れ、川に流されるナツの乗った筏が見えた。

シクルは咄嗟に……

ガシッ!

「へ？」

近くにいたルーシイの手を掴むと……

「ルーシイ……ナツを、お願いっねえ!!」

ルーシイをナツのところへとぶん投げた。

「へ!?! きゃああああああつ!?! いきなりすぎよおおおお!!!!」

濁流に巻き込まれた筏は物凄いスピードで川を下っていたが、ルーシイを投げたシクルの腕は寸分の狂いもなく、ナツの上へとルーシイを投げ飛ばすことに成功。

そして……

「あまり魔力も残ってないから……出来れば見逃して欲しかったんだけど……あなたそれ、普通じゃないものね……」

と、呟き……シクルは魔力を解放する。

「ニルヴァーナの件もあるし……あまり長い時間は取らせせないわよ」

「フン……今ノおいちヤンは前とは違ウぞ……」

貴様ハ、死するノミ……ころ、す……」

「それは……実際にやってから言いなさいってえのっ!!」

ラディティとシクルが同時に飛び出す。

そして、ラディティは闇を、シクルは光を纏いぶつかり合う。

その衝撃の余波は離れたところにいたヒビキやルージュたちのところにも来ていた。

「くっ！　大地が揺れる……魔力のぶつかり合いでここまで……」

「シクル……!!」

「ね、ねえ……ここにいたらオイラたちまで巻き添えくらうんじゃ……」

ハッピーはそう言い、不安そうにシクルの方を見つめるが……シクルも何も考えていないわけではなかった。

ガッ！

「ん？」

シクルはラディティとのぶつかり合いの中、隙の出来た腕を瞬時に掴み……

「ここじゃやりにくいからね……場所移すつよお!!」

投げた。

「「ええええええつ!?!」」

シクルは驚愕するヒビキたちを振り返り……

「あれは私が何とか抑えるから！　ハッピーはナツを！　ヒビキたちは回復次第二ルヴァーナをなんとかする方法を探して！　ルージュはウエンディを守ってね！」

早口でそれを伝えると光の魔力を再び纏い、投げ飛ばしたラディティの元へと飛んだ。

トツ……と、静かに音を立て地面に足を着くと目の前の光景を睨む。

そして、十六夜刀から龍鱗刀へと刀を変える。

「少し思い出したんだけど……あなた、それ……いったい何処で手に入れたの？」
刀を向けられるラディティだが先程と何処か様子がおかしく……

「う……ア、アア……お、い……やんは、……こ、ロス……」

「これは……（侵食されかけて……いや……）」

シクルの目の前にいるラディティは……既に一人一人が止めておけるほどの魔力を優に超える量をその身に宿し……暴走していた。

これは……もう……

シクルが悲しく表情を歪め、顔を俯き苦しそうに唸るラディティから少し目を、離している……

バリツ!! という音が鳴った……。

「……へ？」

その音に呆気にとられ、ラディティを見やると……

「……なに、それ」

「ううウゝ……!!」 がアアゝ!!」

シクルの目に映ったのは……

ラディティの背中を突き破り飛び出る……悪魔のような翼……そして

「竜の……手?」

ラディティの腕は竜のような鱗が浮き出て、爪も鋭く尖り、まるで竜の手のような見た目に変化していた。

「ちよいちよい……これは想定外だつてば……」

口元を引くつかせ、苦笑を浮かべるシクル……そして……

バリバリツ!! バキイ!!

「グウ!! ガアアアアアアゝ アアゝアゝ!!!」

ラディティは人の姿から……怪物のような姿へと変わってしまった……。

息を荒くさせながら徐々にシクルへと視線を向ける。そして、右腕を天高く振り上げる。

シクルはあとため息をつき……天高く上げられる腕を見上げる。

黒いオーラを纏った鋭い爪がシクルの長い髪をほんの少し掠る。

「ちいっ!!」

体を低く屈め、ラディティの懐に入ると……

「龍鱗 龍炎斬!!」

その身体に刀をひと振り、斬りつけ真つ二つに斬り捨てる……が

ボゴボゴボゴッ……

「はあ!? ちょ……ほんとチート過ぎるって!」

斬りつけたその瞬間から、傷が塞がっていく。そして……

「がアっ!!」

口を大きく開き……

「っ!?(咆哮っ……!!)」

ズギャゴオオオオオオオオオツ!!!!

真つ黒な咆哮が……シクルを呑み込んだ。

「グルル……」

煙が晴れ……シクルの立っていた場所は地面がえぐれ焦げ、遠くの方まで木々は塵になり、森が言葉の如く消えていた……。

そんな光景の中……ラディティから遠く離れた場所の一箇所に、焼け焦げていない土があった……。

ゴツ……ガツ……ボコツ!!

「つ……ゴホツゴホツ……ハッ……ゲホツ」

土の下から手が現れ、そこから、這い上がる様に出てきたのは傷を負ったシクルだった。

「はっ……はあ……プツ！」

口に溜まった血を吐き出し、呼吸を整えながら目の前を見据える。

「な、ん……あつぶな……いつて、の」

あと少し遅れてたら身体消し飛んでた……

咆哮に包まれる一瞬前にシクルは光の力ではるか後方へ飛び退き、それでも避けきれないと判断し、地面に穴を空け、そこに潜った。

そしてその瞬間、大きな爆発と共に咆哮が放たれたのだ……。

ザツ——

「っ!!」

呼吸が整い始めたシクルの目の前に更に身体が怪物へと変化したラディティが現れる。

その姿を見つめ、目を細めるシクル……。

「はあ……なんでそれに手を出したかなあ……ねえ？　それは……人が扱っちゃいけないものなんだよ……それは……」

命を、殺す……悪魔の道具……

はあと再びため息をつき……

「残りの魔力はもう殆どない……回数で言うとな滅竜魔法が2、3回……奥義なら1回と……歌魔法が1回……か）なら、回復は捨てなきゃね……」

よし……！　と手を叩き、立ち上がると目を瞑り……深呼吸をする。

「スウ……ハア……………行きます」

ブワッ！　とシクルの周りに突風が舞う。

「ッ!?　グウ………」

突風はラディティの視界を遮る。

目を瞑った、その瞬間……

「光竜の剛拳・連撃!!」

剛拳を連続で繰り出し、ラディティの身体に重い衝撃とダメージを少しずつ増やしていく。そして……

グッ! と足に力を入れ直すと

「月竜……双撃鉄!!」

ゴッ!! と両手でラディティの身体を遠くへ殴り飛ばす。

「ゴアアアアア!」

吹っ飛ぶラディティを追い……シクルは高く飛翔し……

「滅竜奥義……月華炎乱舞っ!!」

振り下ろした手の先から、蒼い炎の月華がラディティの身体を襲い……包み込んだ。

炎がラディティの身体を攻撃し……それが消えると……

全身火傷の傷を負った気絶しているラディティが倒れていた。

そこから少し離れたところにシクルは足をつき……そのままガクリと膝をつく。

「はっ……はあ……ま、だ……」

全身から汗が伝い、身体が震える……それでもシクルは、立ち上がりラディティの元へと歩み寄る……。

そして……その横に膝をつく。

赤く光る瞳は弱々しく、シクルを見つめていた……。

その瞳はシクルにとって、どこか……助けを求めているように感じた。

「……大丈夫……絶対、助けるから……ね？」

そう言い、微笑むと……ラディティの身体に手をかざす。

「我、聖なる月の名の下に

その身に宿りし 邪なる力

光へと解放せん」

ソングマジック
歌魔法解除（デイスペル）」

シクルの手から放たれた光は……ラディティのその怪物となってしまうた身体を包み込んだ……

そして……光が完全にラディティの身体を包み、その身体に溶け込むように消えていくと……

「……う……………つ」

怪物の姿から……ラディティは人の姿へと、戻った。

「……は……………あ……………」

その姿を確認し、呼吸をしている事を確認すると……シクルは糸が切れたように地面に崩れ落ち……意識を、手放した……。

……………ル……………シ……………ル……………ク……………

……ん……………? ……こ、え……………この、声……………

「ル……………シクルつ!!!」

自身を呼ぶ声に目が覚める。

目をゆっくりと開け、見えたのは……

「……………ルー、ジュ」

涙を流し、身体を揺する大切な相棒の姿。

「シクルつ!! 良かった……気がついた……! 良かったあああああつ!!!」

シクルが目を覚まし、小さく微笑むと涙が滝のように流れ、号泣し、シクルに抱きつ

くルージュ。

「ちよ……ルージュ……痛いって……はあ」

ギューツと抱きついてくるルージュを見下ろし……ふうと一息つき、その頭を撫でる。

「ごめん……また、心配させちゃったね？」

シクルがそう謝るとルージュは首を小さく横に振ると、涙を拭いながらシクルを見上げると……ニパツと笑顔を見せ、

「大丈夫だよお！ あたし、シクルは絶対……あたしを置いていかないって、信じてるからア！」

と、言った。

「ルージュ……うん、私は……ルージュをひとりにはしないよ」

シクルもそう言い、にっこりと微笑むとゆっくりと身体を起こし始める。

「え、シクル……もう起きて大丈夫なお……？」

ルージュが心配そうに問いかけるも

「うん！ 大丈夫……ちよつと休んだから」

と、笑みを絶やさずそう言ったシクル。

そして、視線を上の方へと向け……

「アレが……ニルヴァーナね？」

視線の先には、生き物のように伸びる大きな6本の足を動かし、移動する大きな要塞のような物体があつた。

「あい……」

と、頷くルージュを横目に、よしつと意気込むと……

「ルージュ！ あの上に行くよ！」

と、告げた。

「え、ええ！？ そんな！ 無茶だよお……だつてシクル……少し休んだつて言つてもまだ怪我が……」

ルージュはそう言い、シクルを止めるが……

「大丈夫だつて！ それに……皆の匂いもあの上からするんだ……ね？ 私だけここで休んでるわけには……いけないでしょ？」

お願い……と、言うシクルを見つめ……ルージュはやれやれとため息をつく。

「はあ……ほんと、シクルは頑固だよねえそういうところお……分かったよお、でも……危なくなつたら迷わず安全なところに避難させるからねえ？」

それだけは譲らない、とそう宣言したルージュは「分かった……」と頷くシクルに満足気に微笑むと、その背を掴むと、空高く飛び始める。

「じゃあ、行くよお!!!」
「うん!!!」

47話 ブレイン 撃破

ルージュにお願いしてニルヴァーナへと向かい始めて数分……

「ねえ？ 本当にこれがニルヴァーナのお……う？」

ルージュからの問いかけに1度ルージュに視線を向け、ニルヴァーナを見つめるシクル。

「多分……そうだと思う。実際に見たことはないけど……ニルヴァーナがこういうものだつていうのを、昔何かでみた気がするから……」

シクルがそう言う。「そっかあ」とルージュは頷いた。

「あ……（そういえば……ラディティ、いなかったなあ……大丈夫……だったの、かな？ ……後遺症とかなければいいけど……）」

目が覚めた時には既にいなかった敵のラディティを少し心配するが、丈夫そうだし大丈夫だろうと自身に言い聞かせることで無理やり納得した。

その後、ニルヴァーナの上空に到着し、一応酔い止めの薬を飲んでからニルヴァーナ

の地に足をついた。

「皆の居場所は分かりそお……？」

「んー……匂いが充満してる……特定は難しいか……」

竜の嗅覚を使ってもすぐに特定は無理……そう、思った時だ……

グオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ
!!!!!!

「っ?! うっさ……!!」

「ひゃあ!? な、なにになににい!？」

まるで竜が吼えるかのような叫び……ルージュは完全に怯え、シクルに抱きつき震える。

その叫びは1分ほど続き……

抱きついてくるルージュを撫で、慰めながら叫びの聞こえた方を見つめるシクル。

「今の……（叫び……ナツ?）」

震えるルージュを慰めながら声のした方へ足を進める。すると次第に何人か知っている人の匂いに気づく。

流れてくる匂いを辿り、進むと……

グレイとルーシイ、ジュラもおり、そして地面に倒れるハッピーと何故か敵の司令塔であるブレインに引きずられるナツの姿があった。

「グレイ!! ルーシイ!!」

「シクルっ……!?!」

「おお! シクル殿! ご無事だったか……!」

「シクル! 無事だったのね!! てか、さっきのは本当に死ぬかと思ったんだからね!」

「あ、あれはごめんね。急遽だったからつい……」

苦笑を浮かべながら、怒るルーシイを受け流し……目の前のブレインへと視線をやった。

「ど? ……これは、どういう状況かしら?」

なんでナツがあいつに捕まってんのさ……

「どうやら、ナツの力をあいつが気に入ったみたいだよ……新たな六魔將軍を作るとかなんとかで……ナツをその一人にするってよ」

「へえ……つまり、闇ギルドに勧誘されたってこと?」

シクルの問いかけに苦笑を浮かべながら、グレイとルーシイは頷く。

「でも、それにしちやあ……ナツってば大人しすぎない？ いつもなら……」

抵抗もせずただ引きずられるナツを見つめ、不思議そうな表情をするシクル。

「ほら……これ、動くから……」

「ああ……なるほど」

ルーシイからの説明で大体は把握出来た……と、呟くと……ルージュをルーシイに預け、ブレインを見据え微笑んだ。

「さて……と、悪いんだけど……ナツを返してくれないかな？ 彼、私たちの仲間だから

……さ？ 連れてかれちゃ困るんだよ……」

「それは出来ん話だな……この男は、ニルヴァーナの力を使い闇に染めるのだ……そして、私の手足となるのだ」

ブレインがそう、笑いながら言う……

「なるかツ!!」

ガブツ!! と勢いをつけナツがブレインの腕に噛み付いた。

「っ！ 貴様、まだそれだけの力が!!」

だが、抵抗虚しくナツはブレインの殴りで地面に叩きつけられ、力なくぐったりする。

「ぐはっ！ ぐほ……う、うぶ……」

「あれは本当に……大丈夫なのか？」

ナツの悲惨な様子にジユラがシクルたちに問いかけるが……シクルたちは苦笑を浮かべ……

「あいつは極端に乗り物に弱いんだ」

「ついでにシクルもね」

「ちよ、それは今関係なくない!? まさか、さっきのまだ根に持つてるの? ルーシイ
てへつと微笑むルーシイにはあとシクルはため息をつく。

「は、早く……こいつ、倒……し、て……コレ、止めて、く……れ、うぷ……」

吐き気を堪えながら告げるナツに視線を向け、ため息をつきながらグレイが告げる。

「お前のためじゃねーけどな! しゃーねえ、止めてやんよ!」

そんなグレイの言葉を聞き、ブレインははっ!と笑い出す。

「止める? ニルヴァーナを? ふん、出来るものか……この都市は間もなく第一の目的地
的

化猫の宿へと到着する」

ブレインのその言葉にシクルたちは驚き、目を見開く。

「ウエンデイとシャルルのギルドだ……」

「な、何でえ……?」

ハッピーとルージュの言葉にブレインはただ笑うだけ。

「貴様……目的を言え。何故、ウエンデイ殿とシャルル殿のギルドを狙う?」

殺気を当てながらブレインに問いただすジユラ。だが、ブレインは気にした風もなく、ニヤリと笑い……

「超反転魔法だ……一瞬にして、光のギルドを闇に染める……楽しみだなア、地獄が見れるぞ?」

と、ブレインが語った時……

強い魔力の波動を感じ、グレイやルーシーたちはゾクツ! と背筋を凍らせた。

「聞こえなかったか……? 目的を言えと言ったのだ」

魔力の発信源はジユラだ。彼は、体内に宿る魔力を放出し、ブレインへ威圧を放つていた。

だが、その威圧にも慄く様子はなく……

「ウヌのような雑魚に興味はない!! 闇の審判なり……ひれ伏せえ!!」
と、叫んだ。

それに、ジユラは溜息をつく。

「困った男だ……まともに会話も出来んとはな……」

ジュラはそう告げ、ブレインへと手をかざし、指を差した……その時
「待って……ジュラ」

ジュラを止める声が響いた。ブレインへとかざすジュラの手に重なる手……
「む？」

ジュラを止めたのはシクルだった。

「どういうつもりだ？ シクル殿」

「別に深い意味は無いよ？ ただ……こんな三下にジュラが手を煩わせることもないと思ってる……」

にっこりと微笑み、ジュラを見つめ告げるシクルを見て、ジュラは何かを感じ取る……。

「……うむ、そうか……ではここはシクル殿に任せよう」

ジュラはそう言うのと後ろへと下り、それを見てシクルも「ありがとう」と笑い言った。
ジュラから目を離すとふうと一つ息を大きく吐き出し……すうっと、ブレインへと視線を向けた。

「……一つ、質問するわ」

「……なんだ」

「あなた言ったわね？ 地獄を見るのが楽しみだ……と」

「ああ、そうだ……楽しみだろう？ 苦しむ人間を見るのは……なあ？」

そう語り、ニヤリと笑うブレインにグレイやルーシー、ルージユも怒りを募らせていた。

そんな中……問いかけた張本人であるシクルはというと……

彼女は顔を俯き、その表情はグレイたちにも見えなかった……。

俯き言葉を発さなくなるシクルにブレインの笑みが深まる……。

すると……

「……るな」

「ああ？」

シクルの口が小さく動く……そして、それを怪訝そうに少し表情を歪め、見つめるブレイン。

「ふざけるなって言ってるのよっ……！」

そう叫んだその瞬間……

シクルから放たれる殺気……それは、凄まじいもので味方のグレイヤルーシイですら足がすくんだ。

「地獄を見るのが楽しみ？ 苦しむ人を見るのが楽しみ？ そんな奴に……この世界を闇になんか染めさせやしないっ!!」

ズドオオオンツ!! と、音を立て大地がシクルの殺気の威力により揺れる……。

「んなっ!!」

「ひいひい!!? これまさかシクルがやってんのお!？」

「魔力なしでこの威圧……流石じやの」

「シクルウ……」

「……それと……その手……ナツを掴んでるその手……離してくれないかしら？」

そう言い、シクルはナツを掴むブレインの手を指す。

「離せだど？ この男は新たな六魔將軍の仲間となるのだ……離すわけがないだろう!!」

シクルの言葉に高笑いをしながらそう告げるブレイン。

その言葉を聞いた瞬間……怒りの表情を浮かべていたシクルが……ふっと、表情を消した……。そして……

「聞こえなかった……？」

ナツを離しなさい……離さないのなら……

あたしの光が、あなたを滅する」

「……出来るものなら、な」

ニヤツと笑うブレインの前に、殺気を高めていくシクル……。

大地を揺らし、小石が浮かび、砕ける……そんな現象が起き始めていた……

すると、不意に……ふっとシクルから殺気が消える。

そして、不気味な程に静かな静寂が流れる……。ブレインも怪訝そうに、警戒を強めながらシクルを見つめる。

ゆっくりと……シクルが、顔を上げる……

その瞳が、ブレインを捉え……目が合う……

その瞬間……

ブレインの目の前からシクルの姿が消え……驚愕した次の瞬間にはブレインは、シクルの拳により、吹き飛ばされた。

ゴッー!!! ズゴオオオオンッ!!!

「っ!? ぐはああっ!!!」

吹き飛び、壁をいくつも突き破るブレイン。

「……………え……………い、今……………何が?」

目を見開くルーシイ。

「……………動きが、見えなかった……………」

グレイも目の前で起きたことが目で追えず、呆然としている。

「ほお……………(このワシですら……………初動が見えなかった……………)」

感心するようにシクルを見つめるジユラ。

「っ……………シクルっ!」

大怪我を負っていたとは思わせない動きにルージユはほんの少しの誇らしき、嬉しさの他に僅かな不安を抱きながら、身体が動かないように必死に堪えていた。

そんな、仲間の視線を受けながら……………シクルは目の前のブレインを見据え……………その左手には……………

「……………確かに、返してもらったわよ……………」

「う、うぶ……………は、やく……………これ、とめ……………て、くっれ……………」

若干乗り物酔いを悪化させたナツを掴んでいた。

「ぐっ……き、貴様アっ!!」

崩れた瓦礫の中からシクルへと飛び出してくるブレイン。

だが、シクルは身動き一つとろうとはしない……その理由は……

「岩鉄壁!!!」

「む!？」

シクルとブレインの間にジユラの魔法が割り込んだ。

「先程はああ言ったが……此奴からはわし個人として聞き出したいこともある……譲っていただけるか？」

背後にいるシクルにちらりと視線を向けるジユラ。

シクルはふつと小さく笑みを浮かべ、

「どうぞ……ナツは取り返したし……私の目的は果たしたわ」
任せたと口をつたしたシクルに、頷きジユラはブレインと戦った。

そして、最後は……

ブレインの魔法により1度は砕かれた岩壁の破片に魔力を込め……

「霸王岩砕!!」

「うぐああああああああつ!!!」

ブレインを圧迫し、倒した。

倒れたブレインを見つめ、目を見開くグレイとルーシイ。

「や、やりやがった……!……!こいつ、六魔將軍のボスだろ!」

「うそ! 私たち勝っちゃったの!」

「すごい!!」

「流石ね……」

ジユラは倒れたブレインに迫り……

「さあ、吐け。ウエンディ殿のギルドを狙う理由をいえ」と告げた。

だか、ブレインがその質問に答えることはなく……

「ま、まさか……この、私がやられる……と、は……ミッドナイトよ、後は頼む……六魔は決して倒れてはならぬ……」

もし、六つの祈りが消える時……あの、方が……」

ブレインはそこで意識を手放し、倒れた。

「……あの方？」

「……誰のことだろお？」

シクルとルージュは顔を見合わせ、首を傾げる。

「つか今こいつの顔……模様が一つ、消えてなかったか？」

グレイがそう言うのとブルツ！と体を震わせるルーシイ。

「ぶ、不気味な事言わないでよお!？」

「はあ……グレイ、ルーシイを脅かすのやめて」

慰めるの私なんだから……と、愚痴りながらナツの隣に膝をつき、歌魔法であらかたの傷を回復する。

それでもナツの身体は動かず、辛そうな表情を浮かべている。そんなナツを見つめ、少し心配そうにシクルが見つめていると……

「……ん？」

覚えのある匂いが近づいてくることに気づく。

「みなさあーん!!!」

匂いのするほうを振り返ると、そこには……青く長い髪を揺らす少女……

「ウエンデイっ!!!」

ウエンデイが現れた……

天竜、合流——

しかしまだ……

この時は想像もしていなかった……

暗黒の鎖が……解かれるのも、あと僅かだという事を……

その時、シクルは……一体……

ナツたちの運命は……? ?

48話 ニルヴァーナ、発射

ブレインを倒したシクルたちの元へ駆け寄ってくるウエンデイとシャルル。

「みなさーん!! 大変なんです!」

「やっぱり、この騒ぎはあんた達だったのね」

不安そうな表情で走ってくるウエンデイとため息をつきながら呆れた表情を浮かべ、ウエンデイの隣を飛んでいるシャルル。

「ウエンデイ! どうしたの?」

駆け寄ってくるウエンデイに首を傾げ、問いかけるシクル。

ウエンデイはシクルの前に立つと上がった呼吸を整えながら……

「た、大変なんです……! この都市……私たちのギルドに向かっているかもしれないんですッ!」

泣きそうな表情をするウエンデイはそう告げた。

「らしいが、もう大丈夫だ」

ウエンデイの言葉にグレイが微笑みながら言葉を返し、グレイはウエンデイから視線

を外し後方を見つめる。

「へ……………」

グレイの見つめる先を見て、ウエンデイもやつとその意味に気づく。

「ひやつ!? こ、この人…………六魔将軍の?」

ウエンデイはビクツ! と身体を震わせながら倒れるブレインをシクルの影から見
つめる。

「それに、向こうには蛇使いも倒れてるしな」

そう、グレイの指す方にはナツにより倒されたコブラが倒れていた。

「それじゃあ…………」

六魔将軍のメンバーを順調に撃破していることを理解するとウエンデイの表情には
笑みが浮かぶ。

「恐らく、ニルヴァーナを操ってたのはこのブレインよ。それが倒れたって事は、この都
市も止まるって事でしょ? ね、シクル?」

「え? あ、うん…………そうだね」

ルーシイからの投げかけに頷くシクル。

だが、その裏では…………疑問を感じていた。

……本当に？ 本当にこれで終わりなの？

…… “六魔は倒れてはならない” そりやあ……味方が全員倒れたらその時は私たちの勝ち……六魔將軍の負けとなるけど……

それだけ？ あの言葉の裏に……何かある気がする

それに……

消えた顔の模様の意味は……？

「シクル……？ どうしたのお？」

考え事をするシクルが気になり、声をかけたルージュに、シクルは微笑みながら「何でもないよつ」と返した。

「でも、気に食わないわね……結局化猫の宿が狙われる理由は分からないの？」
怪訝そうな表情を浮かべ、呟くシヤルル。

「さあ？ まあ、あまり深い意味はねえんじやねえーか？」

気にしすぎだろと告げるグレイ。

「多少気になることもあるが……とにかく、これで終わるのだな」

「お、終わっ、て……ねえ、よ……早、くこれ……止め……」

ジユラの言葉に吐き気を堪えながら声を発するナツに……

「きゃ!? ナツさん! まさか毒に!」

「オスネコもじゃない!! 全く、だらしないわね!」

シャルルの辛口に「あい……」と、弱々しく答えるハッピー。

「ごめんね? ウエンデイ……傷はほとんど治したんだけど……毒が抜けなくて……頼めるかな?」

シクルの言葉に強い表情で、しっかりと頷くウエンデイ。

「はい! 任せてください!」

「ごめんね……本当なら毒抜きも出来ないことはないんだけど……まだ魔力が回復しきってないんだ」

苦笑を浮かべ、語るシクルに首を横に振り否定するウエンデイ。

「大丈夫ですよ! 私は戦っていないので……まだ、魔力にも余裕があります! シクルさんはしつかりと休んでください!」

笑顔でそう言うのと、ウエンデイはナツとハッピーに解毒の魔法をかけた。

そして、ナツたちの解毒が終わると、シクルたちはニルヴァーナの力により闇から光に変わった六魔將軍のホットアイ、本名 “リチャード” から聞いた王の間という場所へと向かった。

「どうなってやがる……」

「何……これ」

「むう……」

「……ここが、王の間？」

王の間についてシクルたちの目の前に広がるのは何かが壊されたような跡しか残ってはいなかった。

無論、この都市を制御できそうな装置は見当たらず……

「ど、どうやって止めればいいの……？」

「ぬう……」

「クソツ……！ ブレインを倒せば止められると思ったが……」

「甘かったわ……止め方が分からないなんて……」

ルーシイたちが王の間を探索し、操縦出来そうなものはないか、探している中……

「はあ……」

王の間、壁際に壁に寄りかかり、座り込むシクル。その表情に浮かぶのは疲労の様子……

「シクルウ……大丈夫？」

心配になり、ルージユが声をかけるも……シクルは二ヘラと微笑み

「大丈夫、ちよつと疲れただけだよ」

と言った。

すると……

「ど、どうしよう……」

オロオロと狼狽えるウエンデイの声が……

「どうしたの？ ウエンデイ」

「あ、あの……解毒の魔法をかけたはずなのに、ナツさんの体調が治らなくて……」

そう言い、ウエンデイの見つめる先には地面にへばり倒れ、呻くナツの姿……

その姿を見て、シクルはため息をつきながら

「ウエンデイ、ナツに “トロイア” ……お願いしてもいい？」

と、告げた。

「え……トロイア、ですか？」

「そう。ナツのそれは毒じゃなくて乗り物酔いなんだ」

シクルがそう告げると「分かりました！」と、拳を握り領き、早速トロイアの魔法を

ナツに掛けた。

そして、トロイアの魔法をかけ終わると……

「うおおお!! 平気だ!! 平気だぞお!」

と、叫び、飛び跳ねるナツがいた。

そんなナツを見て、にっこりと微笑むウエンデイ。

「良かったです、効き目があつて」

「すっげえーな! ウエンデイ!! その魔法、俺にも教えてくれよ!」

興奮が冷めず、ウエンデイにお願いをするナツだが……

「無理だよ、ナツ。ウエンデイのは天空魔法の一つなんだから……ナツが天空の滅竜魔導士にならない限り使えないよ」

と、ケラケラと笑いながらシクルが否定した。

シクルの言葉ががつくしと肩を落とすナツ。

「ところで……ここって本当に制御する装置が置いてある部屋なの?」

肩を落とすナツを宥めながら辺りを見渡し呟くシクル。

「そもそもよお……その情報って正しいのか?」

怪訝そうに問いかけるグレイ。

「うむ……だが、あのリチャード殿が嘘をつくとは思えん……」

一同が制御装置のことに意識が向いている中……

「ちよつと……」

と、声が響く。

「あなた達、止めるとか制御とか言う前に……もつと不自然なことに誰も気づかない訳？」

「どういふことお？」

シャルルの言葉に首を傾げ、問いかけるルージュ。だが、その言葉に答えたのはシャルルではなく、ルージュの隣に座っていたシクルだった。

「操縦装置や制御装置は見当たらない……さらには、ブレインは倒したはずなのにニルヴァーナは動き続けている……」

「おいちよつと待て……まさかニルヴァーナは自動で動いてるつてののか!？」

「既にニルヴァーナ発射までセットされてるつてことお……?？」

グレイとルージュの言葉に頷くシクル。

「恐らくね……こんなに探しても何も見つからないし……何より、リーダーであるブレイン倒してもこれは止まらなかった……それを考えると……その可能性が高いわ」

シクルの確信ついた憶測を聞き、ウエンデイは目に涙を溜める。

「そ、そんな……私たちの……ギルドが」

「ウエンデイ……」

「大丈夫っ!!」

震えるウエンディを心配げに見つめるシクルと……その肩を掴み、まだ光り輝いている瞳でウエンディを見つめるナツ。

「ぜってえ、ウエンディとシャルルのギルドはやらせねえ!! 守ってみせる! だから、泣くなよ」

ニカッ!と笑顔を見せるナツを見て、次第に笑みが浮かんでくるウエンディ。

そして、そんなナツを見て、シクルもまた……

「……そうだね、まだ……終わってないもんね、諦めず頑張ろう!」
と呟き、ウエンディを見つめ頷いた。

「でも、止めるって言ったってどうやって……?」

「止め方も分からないもんねえ」

「壊すとか!」

ルーシィとルージュの言葉に即答でそう答えるナツ。

「またそーゆー考え!?!」

「こんなでけーもんどーやって壊すんだっての!」

「……壊せなくはないと思うけど」

「やめて、シクルが言うとは本当に出来そうで怖いから」

シクルの言葉にため息をつきながら呟いたルーシイの言葉。それに、

「それどういう意味っ!？」と問いたただすシクルだがルーシイには相手にされず……。

「やっぱり、ブレインの野郎に聞いた方が早そうじゃねえか?」

「だが素直に話すだろうか……?」

「……もしかして、ジエラールなら」

「え?」

グレイやジュラたちがニルヴァーナの止め方について、どうしようか話し合っている
と、ウエンデイがぼそりと何かを呟いた。

それが聞こえたシクルはウエンデイに声をかけようとする。

が……

「わ、私! 少し心当たりがあるので行ってみます!」

と、告げると走り出し……

「ちよ!! 待ちなさい、ウエンデイ!」

シャルルもその後を追ひ、飛び去ってしまった。

「え!?! ちよ、ウエンデイ!!」

「お、おい!! ……どうしたんだ?」

ルーシィとグレイが走り去るウエンデイに声を掛けるがウエンデイは既に走り去っており……

「……なんだア？」

「……（今……確かに、ジェラルルって……）私、少し心配だから追いかけるね、行くよルージユ！」

「あ、あい！」

「こっちはお願い、とナツたちに告げるとウエンデイを追いかけるシクル。」

「気をつけろよお！」

「分かっているー！」

ナツの掛け声到最后に返ったシクルの言葉を聞くとナツたちも他になにかないか、探索を再開するのだった。

ウエンデイを追い掛けるシクルとルージユだが……

「あーもう……あの子意外と足速いんだなあ……見失っちゃった」

「匂いで追えないのお？」

「んー……多分近づいてるとは思うけど」

ルージユの言葉にそう返したシクルが歩きながら横をスツと振り向いた時……

「あ……」

その先で、緋色の髪が揺れたのに気づく。

それはよく知る人物……

「エル!!」

「っ! シクルか!!」

シクルの声に気づき、振り返ったエルザ。

そして、エルザの隣には探していたウエンデイとシャルル……そして……

「っ!! ジェラール……」

その姿がシクルの視界に入った時……すうつと感情が冷える感覚がシクルを包む。

そして……

「っ!」

一瞬でジェラルルの目の前に現れると……刀をジェラルルに向けた。

「どうしてあなたがエルと行動を共にしているの? 答え次第では容赦しないわ……」

ギロツと睨むシクルにごくつと息を呑むジェラール。

「シ、シクル!! 待て!」

シクルの刀を持つ手を握り、止めるエルザ。

「こいつは今記憶が混乱して、以前の記憶が無いんだ!!」

今ここで争つても意味は無い! そう叫ぶエルザを横目で見つめると……1度ジェラルドに視線を戻し、ため息をつく……刀を下ろした。

「仕方ない……ここはエルに免じて見逃すわ……でも、いつか絶対、思い出しなさい……エルのことを……そして、今まで何をしてきたか……忘れたままなんて、許さないから」

そう告げたシクルに、ジェラルドはしつかりと頷き、「分かった」と答えた。

ジェラルドがそう答えるとシクルから威圧は消える。

「ふ、ふええ……」

シクルの威圧が消えるとウエンディやシャルルは緊張が解け、座り込んでしまった。

「あ!、ごめんね!? 怖かったかな……大丈夫?」

座り込んだウエンディを心配し、肩に手を添え声をかけたシクルにウエンディは弱々しく微笑み、

「大丈夫です……」

と、答えた。

「あなた……ちよつとは周りも見なさいよ」

「ほ、ほんとごめんね？ ……と、そう言えば……結局一番重要なのはこれを止める事なんだけど……その方法は分かるの？」

ウエンディとシャルルを支えながら、ジェラルルに視線をやるシクル。

シャルルの隣にはルージュも座り、心配している。

だが、ジェラルルは申し訳なさそうに顔を俯くと……

「……すまない、もはや自律破壊魔法陣も効かない……これ以上打つ手がないんだ」「え!!」

「そ、そんな……それじゃあ私たちのギルドはどうなるのよ!? もうすぐ……、すぐそこにあるのよ!!」

シャルルが体を乗り出し、ジェラルルに声を荒らげる。

その時……

ゴゴゴゴゴツ……

突然、地鳴りが響く。

「な、何っ!!」

「これは……?」

「この魔力は……なんだ?」

「これ……まさかつ!？」

ルージユやウエンデイたちがその地鳴りに戸惑い、辺りを見渡していると一人、その正体に気づいたシクルが都市の進行方向を見つめ……目を見開く。

「まさか……ニルヴァーナの発射!？」

「ええっ!？」

「なんだと!？」

「そ、そんな……っ!？」

「く……っ!？」

シクルたちの見つめる方向には化猫の宿のギルドと……ギルドを狙い光る怪しい光が見える……。

「や、やめてええええええええええっ!!!」

ウエンデイの悲痛な叫びが辺りに小玉する……。

「くっ……!! (ダメ……防御が間に合わないっ!)」

発射寸前のそれを見て、唇を噛み締め、表情を歪めるシクル。

誰もが、もう間に合わない……そう、思った。
その時……

ズドオオオオオオツ!!!

大きな音を立て何か上空から降り、都市を支える足の一本に直撃。
それにより、発射したニルヴァーナは化猫の宿を逸れた。

「「きゃああ!」」

「ぐっ!」

「な……」

「い、今のは……」

揺れが治まり、一同が上空を見上げると……そこには……

「っ!!」

『魔導爆撃艇クリスティーナ!!!』

六魔将軍により、爆破され墜落したはずの天馬のクリスティーナが上空を飛んでいたのだった……。

クリステイナーナから発射された弾がニルヴァーナの狙いを逸らしたのだった……。
彼らの希望はまだ……。途絶えてはいなかった。
そして……。その影で蠢く一つの邪悪な力が……。姿を現そうとしていた……。

「ククク……。さア、始めるかア……」

男の声が静寂に響く……。

ザッー

立ち去った男の背後では……。倒れる3人と1匹の姿が……

「……………シ……………クル」

49話 ニルヴァーナ、崩壊

「魔導爆撃艇……クリステイーナ……」

「あれ……壊れたんじゃないっけえ？」

皆がクリステイーナを見上げ、目を見開き驚いていると……

《聞こえるかい？ 誰か……無事なら返事をしてくれっ！》

シクルたちの脳裏に念話が届く。

「……ヒビキか？」

「わあ！」

《その声は……エルザさんにウエンディちゃん！ 良かった、無事だったんだね》

「ルージュや私たちも無事よ」

《シクルちゃん!! 良かった……あのあと姿が見えなかったから心配していたんだ

……》

シクルの声もヒビキに届き、ほっとため息をつく。

「まあ、なんとかね……それより、どうしてクリステイーナが……？」

「一番最初に壊されたよねえ？」

シクルとルージュがヒビキに問いかける。

《それは……壊れた翼をリオンくんの造形魔法で補い、シエリーさんの人形劇とレンの空気魔法で浮かしているんだよ》

だが、クリステイーナを浮かしている3人は既に限界が近づいているようで聞こえる声は弱々しい……。

「じゃあ、さっきのニルヴァーナを防いだ魔法は……」

《あれはイヴの魔法さ》

「あんなたち……」

ヒビキやイヴたちの思いに目が潤むシヤルル。

《クリステイーナが本来持つてる魔導弾と融合させたんだよ……だけど、足の一本すら壊せないや……ごめんね

……それに、今ので……もう魔力が……》

そこでプツリと途絶えるイヴの声。

「っ！ イヴ……」

シクルの呼びかけにも返事はなく……

《くっ……聞いての通り、僕達は既に限界だ……もう船からの攻撃は出来ない》

ヒビキがそう告げた瞬間、ガクン！ とクリスティーナの高度が下がり、徐々に飛行を低くしていく……。

「クリスティーナが……」

《僕達のことはいいい……それより、最後に……これだけ聞いてくれ！ 時間はかかったけど……漸く古文書の中からこのニルヴァーナを止める方法を……見つけたんだ！》

「えっ！」

「ほんとうか!？」

「その方法は？」

《うん……このニルヴァーナに、6本の足のようなものがあるだろう？ その足……実は、大地から魔力を吸収しているパイプのような物なんだ

その魔力供給を制御する魔水晶が各足の付け根付近にある

そして、ニルヴァーナの中心……奥深くにもう一つ、他の魔水晶よりも大きなものがある……

それも含めた7つの魔水晶を同時に破壊する事で、ニルヴァーナの全機能を停止することが出来る……

これは、一つずつではダメなんだ……他の魔水晶が破損部分を修復してしまう》

ヒビキの説明を聞き、眉を寄せるシクル。

「同時について……一体どうやって?」

《僕がタイミングを図ってあげたいけど……もう、念話も持ちそうにないんだ……だから、君たちの頭にタイミングをアップロードした……君たちならきつとできる! 信じてるよ……》

そして、ヒビキから送られたタイミングまでの時間は……

「20分!」

《次のニルヴァーナが装填完了する直前だよ》

頼む……と、ヒビキが呟いた時……

《フン……無駄なことを》

味方ではない声が念話に入り込んでくる。

「「っ!」」

「誰だ!」

「この声は……」

「ブレインの声だ……!」

《僕の念話をジャックしたのか!》

ヒビキの驚愕した声に笑いを堪えながら、ブレインは口を開く。

《オレはゼロ……六魔将軍のマスターだ》

《マスターだと……!?!》

《まずは褒めてやろう……まさか、ブレインと同じ古文書を使える奴がいたとはな……》
「ブレイン……ゼロ……（もしかして……）」

ゼロの言葉を聞きながらある事に気づき始めるシクル。

《聞くがいい!! 光の魔導士共!!》

オレはこれより全てのものを破壊する!!

手始めに仲間の3人破壊した…… 滅竜魔導士” に 氷の造形魔導士”

“星霊魔導士” ああ、それと猫もか》

「なんだと!?!」

「ナツたちが……?」

「そんな……ウソだ!」

ゼロの言葉を聞き、エルザとシクルは拳を握り、震わせ、ウエンデイも悲痛な表情を浮かべる。

《てめえらは魔水晶を同時に破壊するとか言ったなア? オレは今、その7つの魔水晶のどれか一つの前にいる!!》

ワハハハハ!!

オレがいる限り、同時に壊す事は不可能だ！　そして……もう1人、強力な奴を配置している……終わりだな、お前達は……》

最後に高笑いをし、ゼロとの念話は切れた。

《ゼロとの念話が切れた…

ゼロと当たる確率1/7……しかも敵はもう1人いるという……》

苦々しい声音のヒビキ。そこに待ったをかける声が響く。

「ちよつと待って！　7人もいない！　魔水晶を壊せる魔導士が7人もいないわ!!」

「わ、私……攻撃の魔法使えませんか……ごめんなさい」

ウエンデイの申し訳なさそうな声が念話に響く……。

「こつちは2人だ!!」

エルザがジェラールを見つめながら叫び、ジェラールもエルザを見つめ頷く。

「私も行けるよ」

シクルも名乗りを上げ……残り4人。

《あと4人……誰か!》

《私がいるではないか……!》

ヒビキの声に答えるように念話に応じたのは……

「この声……一夜ね」

《一夜さん！》

「残り3人！」

《ま、まずい……もう、僕の魔力も……念話が、切……れ》

ヒビキの声が途絶え始め……もう、切れる

そう、誰もが思った。その時……

「私が支える……早く残りの3人を！」

《っ！ シクル……ちゃん》

途切れかけていた念話がシクルの魔力により持ち直し始めた。

「早く……私も魔力はそう無いし……今だって無理に繋げてるんだ……いつ切れるか分からないよ！」

《あと3人だ!! 頼む、誰か返事をしてくれ!》

《……グレイ、立ち上がれ……

お前は誇り高きウルの弟子だ。こんな奴らに負けるんじゃない》

《私……ルーシイなんて大嫌い……ちよつと可愛いからつて調子に乗っちゃってさ……
バカでドジで弱っちいくせに……

いつも……いつも一生懸命になっちゃって……

死んだら、嫌いになれませんか……

後味悪いから返事しなさいよ》

グレイとルーシイを呼ぶリオンとシエリーの声……そして……

「ナツさん……」

「オスネコ……」

「ナツ……」

《僕達の声が……》

「聞こえてるでしょ……私たちの声……何やってんのよ……早く、起きなさいよ……皆

……

ナツつ!!!」

シクルの叫びが響く。その時……

ドゴオ!!

《聞こえてるつ!!!》

地面を殴る音と荒い息遣い……そして、ナツの声が響いた。

「ナツ……!!」

《聞こえてるぞ……》

《7つの魔水晶を……同時に、壊す……》

《運が良ければ……ついでにゼロともう1人を殴れる……でしょ?》

《あと18分……急がなきゃっ! シャルルとウエンデイのギルドを守るんだ!》

ナツに続き、グレイとルーシイ、そしてハツピーの声も聞こえた。

その声にはつと安堵し、息を吐くとシクルは念話を通じて語りかける。

「もうすぐ念話も切れる……ヒビキが送ってくれた地図を元に誰が何番の魔水晶へ行くか決めるよ」

《1だ!》

《2に行く》

《3! ゼロと強い奴がいまませんよーに!》

《私は4へ行こう! ここから1番近いとパルファムが教えている!!》

《教えているのは地図だ》

一夜の言葉にマジで返すエルザの言葉にガーンと落ち込む一夜。

「私は5へ行く」

《エルザっ! 元気になったのか!》

エルザの声に嬉しそうに声を上げるナツ。

「では俺は……「お前は6だ」っ！」

念話で声を出そうとしたジェラールをエルザが止め、代わりに答える。

「ナツはまだお前の事情を知らん……敵だと思っている、声を出すな」

《誰か他にいんのか!?!》

「味方だよ、ナツ。私が7に行く」

最後にシクルがそう告げると……

プツリ、と音を立て念話が切れる。

「ごめん切れちゃった……もう限界だったから……」

申し訳なさそうにいうシクルの肩にほんと手をおき、微笑むエルザ。

「問題ないさ……ナツたちとも会話ができた……ありがとう、シクル」

「エル……」

ニヘラと微笑むシクル。

「恐らくゼロは1番にいる」

シクルから目を離し、ウエンディたちを見据えるとそう告げたエルザ。

「1番って……ナツさんのところだ！」

「どうして分かるのよ？」

「あいつは鼻が利くからな……分かってて一番を選んだはずだ」

エルザの言葉を聞くとウエンデイはグツと拳を握り

「だったら加勢に行こうよ!! みんなで戦えば……」

と、叫ぶ。そんなウエンデイを見つめ……

「大丈夫、ナツは強いから。目の前にいる奴が強ければ強いほど……ナツは、強くなる」
と、につこりと微笑み、不安げなウエンデイに自信を持ちそう言いきったシクル。

「……ナ……ッ」

「？」

ふと、背後から聞こえたその眩きに振り返ると……

「どうした、ジェラール？」

ジェラールが頭を抑え何かをぶつぶつと呟いていた。そんなジェラールに声をかけるエルザだが「何でもない……」と、だけ言い黙り込むジェラール。

「まさか……」

シクルの脳裏にある予感が浮かぶが、シクルがジェラールに声をかける前にエルザの指示でここでは解散し、各々役割のある魔水晶へと向かう。

シクルも例外なく、目的の魔水晶へと向かうが……

「ルージュ」

と、隣を飛ぶ相棒に声をかけた。

「ん？ なあに？」

「お願いがあるんだ……コレ、ルーシイに届けてくれない？」

そう言い、シクルがルージュに何かを手渡す。

「これ……」

「頼める？」

シクルが首を傾げ、問いかけると……ルージュは力強く頷く。

「任せて!!」

ルージュはそう言うと、ルーシイが向かった3番魔水晶の部屋へと飛び去った。

「……頼んだよ」

飛び去るルージュの後ろ姿を見つめ、シクルは次にある匂いを辿り歩く。

少し歩くと目的の人物を見つけた。

「思い出したんだ。ナツという男の底知れぬ力……希望の力をな

君は俺の代わりに6番魔水晶を破壊してくれ」

「でも私……」

不安気に表情を歪めるウエンディ……そこへ

「やっぱり……記憶が少し戻ったんだね」

「っ！ シクル……」

シクルの登場に目を見開くジェラルルに苦笑を浮かべると、シクルはウエンディの頭に手を置いた。

「シ、シクルさん……」

「ウエンディ……貴女なら出来るよ。本来滅竜魔法は竜迎撃用の魔法……攻撃に特化した魔法……貴女のお母さん、*“グランディーネ”*も使えたんだから……その子の貴女にも必ず使えるよ」

シクルの言葉を聞き、目を見開くウエンディ。

「グ、グランディーネを知ってるんですか!? な、なら、どこにいるか教え……!」

「その話はまた後で……今はこれを止めよう? これを止めて、解決出来たら……話し
てあげる」

シクルにそう告げられるとウエンディは力強く頷き

「わかりました……私、ジェラルルの代わりに頑張ります!!」

と言った。

「うん……あ、そうだ。ウエンディ、もし不安だったらこれを握って？」

そう言い、シクルがウエンディに握らせたのは……

「……玉？」

「それには私の魔力が入ってる……いざという時、きつと力になってくれる……」

それを聞くと、「ありがとうございます！」と、告げウエンディは6番魔水晶へと走った。

「……さて、ジエラール」

「なんだ？」

ウエンディとシャルルの姿が見えなくなるとジエラールを振り返り……ジエラールの手にも何かを持たせたシクル。

「これは？」

ジエラールが受け取ったのは札のようなもの。

「ナツに渡して……きつと、ピンチの時に助けてくれるからって」

「……分かった」

ジエラールはそう頷くと、ナツのいる1番魔水晶へと歩き出し、その後ろ姿を見送ると……

「さて……………あと15分……………私も行かなきゃ」

光を纏い、任された魔水晶へと急ぐ。

7番魔水晶前——

「ふう……………まさかこんなに離れてるなんて思わなかった……………」

光を纏つて5分もかかるなんて…………

シクルは目の前の巨大な魔水晶を見上げ……………深呼吸をし、辺りを見回す。

「さて……………ここには誰か……………」

そう、シクルが呟いた時…………

ビュッ！ とシクルに向け、光線が飛んでくる。

「へえ？」

シクルは慌てる様子もなく、冷静に回避すると、光線の飛んできた方を見つめる。そ

こには…………

「……………杖？」

魔水晶の影から現れたのはひとりでに浮かび動く、髑髏のついた杖だった。

「グフフフ……………待っていたぞ」

「おお、話すんだ……………（てか、よく見たらブレインが持ってた杖じゃん）」

「ようこそ……私はクロドア、7人目の六魔將軍でございます」
自身を　　「クロドア」　と名乗った杖。

「そんなの誰も聞いてないけど……て、7人目の六魔將軍？」

「おんや？　貴様は知らないようだな……冥途の土産として特別に教えてやろう、六魔將軍の司令塔、ブレインにはもう1人の人格がいる事を……」

自慢げに語り出すクロドアだが……

「ああ……それなら検討がついてるわ。どうせ、あのゼロって奴を6人の生態リンクか何かで封印してたんでしょ？」

それが、6人すべて倒されてしまったことにより復活……でしょ？」

シクルのその語りにほうとクロドアは関心を持つ。

「ほう……意外に頭が回るようですね……」

だが、それだけではダメですねえ……

力無きものは私に勝てない！　なぜなら私はゼロ様の次に強い男！

私に勝てる者などこの世には……「長いつ!!　光竜の鉄拳っ!!」ごばああつ!!」

ペラペラと、自身の自慢話を続けていたクロドアだが、その話が長く……痺れを切らしたシクルは我慢出来ず殴り飛ばした。

「な！ ななななっ!? 何をするか!?

貴様……人の話は最後まで!」

「長つたらしいのよ!! そんな長いの聞いている暇ないの! めんどくさい!!」

それに……

ぼそりと呟くと右手に銀色の光を……左手に金色の光を纏うシクル……

「……へ?」

ゴオオオオ……と、魔力が上昇するシクル。

「あなたを倒せばいいのよね? ウエンデイのギルドを狙って……あんな良い子を泣かせて……あんな達は……」

ぶつぶつと呟きながら……先の攻撃で、壁に埋まっているクロドアに近づく……。

その姿を見て、クロドアは……

「え、え? え……いやいやいや!! ちょまつ!」

慌てる。目の前の女……その姿は……まさに

「ド、ドラ……ゴン」

「絶対……許さない……くらいなさい

滅竜奥義！ 月光 龍閃撃!!!」

シクルの放った拳から放たれた、2つの光はクロドアの前で混ざり合い……閃光のよ
うに破裂し、クロドアを吹き飛ばした。

ドゴオオオオオオオン!!!

「にぎやああああああつ!!!」

そして、その余波で魔水晶も崩壊する。

少し時を遡り……各魔水晶部屋では……

《2番魔水晶》

「そろそろ時間か……みんな、頼むぜ！」

アイスメイク “氷雪砲” (アイスキヤノン) ！」

グレイの放った魔法で見事、魔水晶を破壊する。

《3番魔水晶》

「どうしよう……魔力もないのに、見栄張っちゃって……」

「ルーシィ……」

ルーシィは既に複数の、黄道十二門を召喚した影響で魔力は0に近かった……当然、
星霊を呼ぶ力なんて残っておらず……

「でもやるんだ……やらなきゃ！ この身が砕けようと……ウエンディたちのギルドを

「守らなきゃ！」

「そう、ルーシイが声を上げた時……」

「時にはその思いが、力をくれるんだよ」

「え!?!」

ルーシイとハッピーの背後から現れたのは……

「え……ジ、ジェミニ!?!」

「どうしてここに?」

「シクルから頼まれてねえ! あたしが連れてきたの!!」

「そう元気な声で告げたのは……」

「ルージュ!」

「につこりと笑う、ルージュ。」

「僕たちも君の本当の声を聞いたからね!」

「あの戦いの中、君はずっと星霊のことを考えてくれていた……」

「そんな君に力を貸したいんだ!」

ジェミニはそう言うと、ルーシイに変身。そして、見事タウロスを召喚し、魔水晶を

破壊した。

続いて4番魔水晶と5番魔水晶も破壊された。

《6番魔水晶》

「出来るの？ ウエンディ……」

心配そうにウエンディを見上げるシャルル。

「うん……やらなきや。みんなも頑張ってるんだ……私も……ジエラール……グラン
ディーネ……ナツさん……シクルさん！」

私に力を貸して……!!」

ウエンディは大きく深呼吸をし……空気を吸い込む……そして、シクルから預かった
魔力の玉をギュツと握り締める。

その時、玉は淡い光を放ち……ウエンディを包み込み……

……大丈夫……自分を信じて……ウエンディ

「(はいっ!) 天竜の……咆哮っ!!!」

6番魔水晶、破壊。

《1番魔水晶》

ジエラルの咎の炎を食らい、ドラゴンフォースを解放したナツ。

ゼロとの決着の時が……

「くらえ! ジエネシス・ゼロ!

開け……鬼哭の門！ 無の旅人よ！ その者の魂を！ 記憶を！ 存在を食い尽くせ！

消えろ!! ゼロの名の下に!!」

ゼロから放たれた魔法に包まれ、消えていくナツ……

「ぐああああああ……」

暗黒の中で……

力が……身体が……動かねえ……くそ……

意識が遠のくナツ……その時……

ジェラールから咎の炎を貰った時に一緒に渡された札が……光り……

ナツ……ナツ……! こんな事で諦めてどうする……?

ナツ……お前は滅竜魔導士だ……その誇りを忘れるな……!

お前にはイグニールが……この私がついている!!

イグ……ニー、ル

ナツ……信じてる……信じてるよ……

だから負けないで……諦めないで……

ナツっ!!

っ……シクル!!

心の中にイグニールとシクルの音が響き、魔力が解放され……ゼロの魔法を焼き付くし、

そして……

「全魔力解放……滅竜奥義！ 不知火型……紅蓮 鳳凰劍!!」
ゼロを巻き込み、魔水晶を破壊する。

7つの魔水晶全てを同時に破壊することに……成功した。

そして、ニルヴァーナは動きを止め……

崩れ落ちていく……。

50話 別れ

7つの魔水晶の破壊に成功すると……次第に、ニルヴァーナは魔力の供給が途絶え、崩れ始めた。

《7番魔水晶》

「やっば……早く逃げないと………うっ！」

崩れ落ちる瓦礫を避けながら、出口へと走るシクル。その時、ドグンツと、動悸が襲い、体から力が抜け倒れるシクル。

「うっ………はっ（まずい……意識が……）」

魔力をほぼ休みなしに使い過ぎた影響か、シクルは倒れた身体を動かせず、次第に意識が遠のいていった。

まだ……こんな所で、終わ………れ、ない………

「うおおおおおお!!!!」

ズサア!! と音を立て、命からがらニルヴァーナから脱出したグレイ。地面を転がりながら、崩落するニルヴァーナを振り返り、不安気に見つめる。

「おいおい……皆無事だろうな!」

そこに……

「グレイ!!」

と、声を上げ走ってくるエルザが現れる。

「エルザ! 無事だったか……と?」

エルザの方を振り返るグレイの視界に、もう一つ影が見える。

それは、グレイとエルザの方へと走り寄っており……

「エルザさん! 無事でよかったです!」

「げえええつ!」

ムキムキマツチヨな男が現れる。

思わずエルザは槍を構え、グレイも魔力を練り上げ、構える。

「何者だ!」

「敵か!? ……そしてキモいつ!!」

「落ち着いてください、2人とも……」

今は力のパルファムにて姿形は違えども、中身はいつもと寸分違わぬこの私……あな

たのための、一夜でえす」

その言葉に目が点になるエルザとグレイ。

「……おめえもえらいもんに好かれたな」

グレイの哀れみの瞳に顔を逸らし、ため息をつきながら沈むエルザ。

「あ、ああ……頼もしい、奴では……あるんだが」

そこに……突然上から時計のようなものが降ってくる。

「な、なんだ!?!」

「ん? これは……」

空から降ってきたのはルーシイの星霊、ホロロギウムだった。

中からはルーシイとハッピー、そしてルージユが出てくる。

「ルーシイ!! ハッピーにルージユも!」

「助かったよ!」

「ありがとねえ!!」

「ありがとね、ホロロギウム! てか、あたしってあんたをいつの間に呼んだっけ?」

魔力も0に近かった中、呼んだ記憶のないルーシイは首を傾げる。

「いえ……私が勝手にゲートを通って参りました」

「へえ……ロキやバルゴもよくやるわよね」

ルーシイの言葉に頷くホロロギウム。

「ルーシイ様の魔力が以前より高まった事により、可能になりました」

ホロロギウムからの説明を受け、へえと息をつくルーシイ。

そして、ホロロギウムが星霊界へ戻ると……

「みなさん!!」

「皆、無事だったか!」

「ついでにオスネコとメスネコも」

ウエンデイとジュラ、シャルルも無事に合流を果たす。

「あれ? ナツさんは? ジェラルルやシクルさんは……」

集まったメンバーを見て、首を傾げるウエンデイ。

「そういえば、見当たらん」

「ちよつと待て、まさかまだ中に……!?!」

「そ、そんなっ!」

全員が辺りを見渡すも、やはりその姿は見えない……。

「ナツ……シクル……」

「あのクソ炎……何してやがるっ」

ルーシイとグレイがか細い声で呟く。

「ナツさーん!! シクルさーん!!」

ウエンディも大声を上げ、呼びかけるが返ってくる声はなく……

「ナツ……シクル、ジェラル……（何をしているんだ……）」

嫌な予感が絶えず胸の中を渦巻き、グツと拳を握るエルザ。

「シクルウー!!!」

「ナツウー!!! う、わあ!？」

ルージュとハッピーも、声を上げ相棒を呼んでいると……ハッピーの立っている足元の地面がボコツと盛り上がり、ハッピーは転がる。

そして、盛り上がった地面の下から現れたのは……

「愛は仲間を救う……デスネー!」

「……んア?」

リチャードと、その両脇に抱えられるナツとジェラルが現れた。

「ナツさん!!」

その姿にウエンディは笑みを零し、グレイたちもほつと息をつくが……

「待て……シクル殿は?」

ジュラの言葉にシクルを探し、辺りを見渡す……。

「おいおい……シクルの奴、どこにいったよ!？」

「シクルさん……」

「シクル……まさかまだ中に」

「そ、そんなあ……!」

「くそ……いるなら返事しろよ……シクル!!」

ナツが声を張り上げ、俯く。

「聞こえてるっつの……」

「「っ!!」」

ナツたちの背後から声が聞こえ……振り返ると、結ばれていない金の髪が風に揺られながら、しっかりと立ち、こちらを見据えているシクルの姿があった。

「全く……無駄に声がかいんだから……」

「無駄ってなんだよ無駄って!?!」

「シクル!!」

「シクルさん! 良かった、無事だったんですね!」

「シクルウー!」

「たく……心配かけやがって」

「ともかく、無事で何よりだ……」

例外なく飛びついてくるルージユを抱き留め、その場に座り込むシクル。

「シクル、大丈夫?」

心配そうに隣へ歩み寄り、シクルの身体を支えるルーシイ。

「うん、大丈夫……」

ニコツと微笑むシクルだが、その表情に力はない。

「とにかくこれで、一件落着だな!」

ニツ!と笑顔を浮かべ、ウエンデイを見つめるナツを見返し、ウエンデイもにっこりと微笑む。

「はい! ナツさん……本当に、ありがとうございます!」

ペこりと頭を下げるウエンデイにきよとんとした瞳を向け……フツと笑みを浮かべるナツ。

「みんなの力があつたからだろ? んじゃ、今度は元気に……ハイタッチだ!」

「つ……はいつ!!」

パンツ! と、ナツとウエンディは元気にハイタッチをした。

「とにかく、全員無事で何よりだね」

「皆、本当に良くやった」

「これにて、作戦終了ですな!」

「んで? あれは誰なんだ?」

と、グレイはジエラールを指した。

「あんな人いたっけ?」

「あれは、ジエラールだ」

グレイとルーシイの疑問にエルザが答えた。すると2人は目を見開き驚く。

「何!?!」

「この人が!?!」

「だが、私達の知っているジエラールではない……記憶を失っているようだしな」

「いや……そう言われてもよう」

エルザの言葉に納得のいかない様子のグレイ。そんな彼に苦笑を浮かべながら、ウエンディが声をかけてくる。

「大丈夫ですよ、ジエラールは本当はいい人ですから」

ウエンデイがそう言うのとグレイは渋々ながらも、納得したようだ。

その横ではエルザがジエラールに歩み寄り、何かを話している。その様子をちらりと見ながら、ふうとため息をつくシクル。

「あ、あの……やっぱり少し回復を……」

目を伏せるシクルを見て、心配そうに声をかけるウエンデイだが……

「ん？ ああ、大丈夫大丈夫……少し休めば回復するよ。それに、今日はもうウエンデイだつて魔法を使いすぎちゃったでしょう？」

無理しちゃダメだよと、シクルは微笑みながらやんわりと断つた。

そこに……

「メエーーン!!」

「っ、何？」

突然、変な奇声をあげ、鼻上を抑える一夜が……

「どうしたんだ、オッサン」

グレイが怪訝そうに問いかける。

「トイレのパルファムをと思つたら、何かにぶつかったのだア!!」

そう叫ぶ一夜を尻目に、ふと地面に目をやると……

「何……地面に文字が？」

「こ、これは」

「〔術式っ!?!〕」

グレイたちは声を上げる。そして……

コツツと、靴を鳴らす音が聞こえ、そちらを向くと……

「誰だコラア!?!」

「どうしてあたし達を閉じ込めるのよ!」

「漏れるうううう!!」

「やめてえ!?!」

「手荒な事をするつもりはありません……しばらくの間、そこを動かさないで頂きたいのです」

眼鏡をかけた男を中心に、数人の人間に囲まれていたシクルたち。

その服装と紋章を見てはっとシクルは息を呑む。

「あなたたち……もしかして」

「私は新生評議院、第四強行検束部隊隊長、　　“ラホール”　　と申します」

「新生評議院!?!」

「もう発足していたのか!!」

ラハールと名乗った男の言葉に驚くルーシイとグレイ。

「我々は法と正義を守る為に生まれ変わった……如何なる悪も、決して許さない」

ラハールのその言葉に、ビクツ! と身体を揺らすナツとハッピー。

「お、オイラたち何も悪いことしてないよ!?!」

「お、おう……!!」

「存じております……我々の目的は六魔將軍の捕縛……そこにいるコードネーム『ホットアイ』をこちらに渡してください」

その言葉に驚愕するナツたち。

その影で、シクルは暗い表情を浮かべる。

(……やっぱり)

「ま、待ってくれ! 彼は……」

「いいのデスネ、ジュラ」

説得を試みようとしたジュラを微笑みながら止めたホットアイこと、リチャード。

「例え善意に目覚めても、過去の悪行は消えませんでス……私は一からやり直したい」

そう告げたりリチャードに、ジュラは心が折れ、代わりにリチャードが探す弟を見つけ出そうと約束をした。

「弟の名は何というのだ？」

「弟の名はウォーリー……ウォーリー・ブキャナン」

リチャードの口から出たその名に、シクルやナツたちは目を丸くした。

「四角うー!？」

「その男なら知っている……私の友だ。今は元気に仲間と大陸中を旅している」

エルザのその言葉を聞き……リチャードは涙を流す。

「これが、光を信じるものだけに与えられた奇跡と言うものデスカ……ありがとう！

ありがとう……ありがとう」

リチャードは最後に、晴れ晴れとした表情で評議院の人たちに連れられ、去っていった。

「……なんか、可哀想ね」

「あい……」

ルーシイの言葉に同意し、気分が沈むルージュの頭をそつと撫でるシクル。

そんな彼女の表情は……未だ晴れない。

きつと彼らの目的は……

「も、もういいだろう！ 術式を解いてくれ！ 漏らすぞ!!」

「だからやめなさいっての!」

声を荒らげる一夜をハツ倒すシクル。

「いえ、私達の本当の目的は六魔將軍ごときではありません」

「へ？」

「それって……」

ラハールはある一点を睨み……告げた。

「評議員への潜入・破壊、エーテリオンの投下……もつととんでもない大悪党がそこに
いるでしょう……貴様だジエラール！ 来い！

抵抗する場合は抹殺許可も降りている!!」

「「っ!!」」

「そんなっ！」

ジエラールを指さし、告げたラハールに驚愕の眼差しを向けるナツたち。

「ちよつと待てよ！」

「その男は危険だ、2度とこの世界にはなつてはいけない……絶対に！」

そして、ナツたちが反対をする中……ラハールはジエラールを連れていこうとする
……。

そんな後ろ姿を見つめ、エルザはギュッと拳を握る。

(止めなければ……私が、止めなければジェラールが行ってしまう……)

折角、悪い夢から目覚めたジェラールをもう一度暗闇の中へなど行かせるものか……！)

「……エル」

「死刑か無期懲役は免れないぞ。2度と誰かと会うこともできんだろう」

「っ!？」

ジェラールとの会話の中でラハールの放ったその言葉にエルザは目を見開き、止めようと思った……その瞬間――

「行かせるかあー!!」

エルザよりも早く、声を荒らげ、ナツがラハールたちに突撃していた。

「何してるの!？」

「そいつは仲間だ！ 連れて帰るんだあ!!」

ナツのその言葉にグレイたちも動かされ……ラハールたちを相手に、反抗を始めた。

「お、お前たち……」

その光景を後ろから見つめ、身体が動かないエルザ……そんな彼女の横から声がする。

「どうするの……エル？ もし、エルがジエラールを行かせたくないなら……私もナツたちと一緒に止めるわ……」

さあ……どうする？

シクルがそう投げかけ、エルザはぐつと唇を噛み締める。

「全員捕えろオ！ 公務執行妨害及び逃亡幫助だあ!!」

「行くな!! ジエラアアアル!!」

「もういい!! そこまでだっ!」

エルザの止める声が響き……ナツたちは動きを止めた。

「騒がせてすまない……責任は全て私が取る……ジエラールを、連れて……いけ」

「エルザ!? なんで……」

エルザに突つかかろうとしたナツ……だが

「ナツ……分かってあげて」

ナツの肩に手を添え、それを止めたシクル。ナツはグツと苦々しい表情を浮かべ、エルザを見つめる。

ジエラールは抵抗もせず、連行される……その時、ふと足を止めエルザを振り返った。
「エルザ……お前の髪の色だった」

「っ!!」

その言葉を聞き、エルザは目を見開き、ジエラールを見つめる。

「……さようなら、エルザ」

「……ああ」

その会話を最後に……ジエラールは護送車へと乗り込み、姿は見えなくなった。

悲しそうに僅かに震えるエルザを、後ろから見つめ辛そうに表情を歪めるシクル
……。そんな彼女に、声が掛かる。

「あなたが、シクル・セレーネ様ですね？」

「え……？」

シクルに声をかけたのはラハールだった。

シクルが振り返るとラハールは手に何やら手紙のようなものを持っており……

「シクル様……あなたに、これを……」

「……これは」

ラハールから受け取った手紙を持ち、シクルは目でラハールに問いかける。

「そちらはアトスさんからの……文書です」

「っ！ アトス……からの？」

シクルからの確認の問いかけに頷くラハールを見て、「そう……」と、呟くシクル。

「……ありがとう、落ち着いた頃に読ませてもらうわ」

シクルはそう言い、手紙をポケットにしまい、ラハールから離れようとした……その時

パシッ

「んえ？」

シクルの手をラハールが掴む。

「シクル様……」

真剣な表情をするラハールに何かまだあるのか？ と思いき直った。

その瞬間……

チユーー

「……へ？」

「……は」

「はあああああっ!!?」

ラハールがシクルの額に口付けを落とした。

「……また、何処かでお会いしましょう」

「……は、はあ」

それを最後に去る、ラハール……その姿が見えなくなると……

「おいシクル!! 何普通にキスされてんだこの野郎!!」

「え、何? なんでそんな怒ってんのナツ?」

うがー! とシクルに詰め寄るナツに困惑するシクル。

そして……

ゴシゴシとラハールの唇が触れたシクルの額を擦り始めるナツ。

「ちよ! ちよちよちよ!! 痛い痛い! 痛いってば! やめっ!」

「あんのやろお!! 勝手にあんなことしやがってえ!!」

シクルが止めるもナツは抑えられず……次第にシクルの怒りが溜まっていく……。

「痛いってば! ちよ、もう……痛いって……言っでんではよおおがああ!!!」

「いっぴあ!!」

最後に、ナツはシクルに殴り飛ばされ……気絶した。

哀れ、ナツ……因みにグレイやルーシイ、ルージュやハッピーもラハールの行動に怒

り狂い、この後、その場を収めるのに苦労したとかしなかったとか……

51話 新しい仲間と共に……

ニルヴァーナの阻止が成功し、リチャードとジェラルドが評議院へと連行されてから数時間後……シクルたちはウエンディたちのギルド、化猫の宿で祝の宴を開催しながら、傷ついた体を癒していた。

集落の中心に位置する広場でナツやグレイを始めに、皆でわいわいと盛り上がっている中……1人、その席から外れているシクル……

彼女は今、化猫の宿のマスター、ローバウルと話をしていた。

「シクル殿……ギルドを守ってくれて本当にありがとう……」

「いえ、このギルドを守れたのは皆で力を合わせたからですよ……ウエンディも、頑張っていました」

クスリと微笑み言うシクルの言葉に、頷きながら「そうか……」と呟くローバウル。

「なぶら……皆さんに感謝せんとな」

ローバウルはそう言うのとふっと悲しそうな表情を浮かべ……

「もう、気づいておるやもしれぬが……シクル殿、我々は……」

そう言ったローバウルに、シクルは真剣な眼差しで見つめ、ゆっくりと頷いた。

「はい……六魔將軍の奴から、化猫の宿の人たちはニルビツト族の末裔であることを聞きました……ですが、そうではないんですよね？」

シクルの言葉にコクリと頷くローバウル。

「そうじゃ……我ら……否、わしは……」

「今じゃなくていいですよ……」

ローバウルの言葉をやんわりと遮るシクル。

「私は分かっていますから……2度もそのことを語るのは、あなたも辛いでしょう？

……7年とはいえ、成長を見守ってきたウエンデイやシャルルと別れるのは……」

愛したものの別れは……本当に……

そう呟き、目を伏せたシクルを見つめ、ローバウルはふうとため息をつき……

「なぶら、その言葉に甘えるところ……」

「では、私はみんなの所に戻りますね」

ニコリと微笑み、そう告げ、ローバウルに背を向けたシクル。

そこに……

「待たれよ……」

「……はい？」

ローバウルがシクルを呼び止めた。シクルは振り返り、ローバウルを見つめる。

ローバウルの瞳は何かを訴えかけている様子があった。

「……何ですか？」

「シクル殿……お主は、思い出せぬ記憶などがありますかな？」

ローバウルのその問いかけにシクルは首を傾げる。

「……いえ……特には」

考えるも思い当たることはなく……首を振り、否定する。

「そうか……シクル殿……主には、何やら……記憶の一部に封印がされているようじゃ」

ローバウルのその言葉に、シクルは目を見開き驚く。

「……封印、です……か？」

「なぶら……それがなんの記憶かはわしにも分からぬ……だが、その記憶は恐らく主にとってとても重要なものと感じる……いつか、思い出せると良いですな」

「はあ……」

最後に、一礼をし、部屋を出ていくシクル。

そして、みんなの元に戻る途中……シクルはふと、ローバウルの言った言葉を思い返す。

「……封印された……きお、く……」

何……何を封印されているっていうの……

分からない……思い出せない記憶？ そんなの……

「……そういえば……」

ふと、シクルの脳裏に浮かぶ光景……

それは、育ての親、セレーネと暮らしていた頃の記憶……

それはとても大事な記憶で、再会のできない今忘れられない記憶だが……所々、曖昧な部分があつた。

「……まあいいか」

封印された記憶が何なのか分からない……けど、今考えても検討もつかない……きつ

と、その時が来たら思い出すだろう……

そう考え、記憶についてのことは一度忘れることにしたシクル。

「おーい！ シクルー!! 早く来いよー」

はっと、目の前を見上げるとナツが手を大きく振り、シクルを呼んでいた。

「今行くっ!!」

「妖精の尻尾、青い天馬、蛇姫の鱗……そして、ウエンディにシャルル……」

よぞ六魔將軍を倒しニルヴァーナを止めてくれた。地方ギルド連盟を代表して、このローバウルが礼を言う……」

そう言い、一礼するローバウルは

「ありがとう……なぶら、ありがとう」

と、感謝の言葉を呟き続けるローバウル。

「どういたしましたしてマスター・ローバウル！ 六魔將軍との激闘に次ぐ激闘！ 楽な戦いではありませんでしたが、仲間との絆が我々を勝利に導いたのです!!」

「「さすが先生っ!!」」

「てかあなた何もしてないでしょうが」

「人決める一夜にピシヤリ!と冷たく言い放つシクル。

そんな彼女は今甘いケーキを頬張りながら、疲れた身体を癒していた。

「この流れは宴だろー!」

「あいさあー!」

ナツの叫びにハッピーとルージユが大声を上げ、飛び跳ね賛同する。

「一夜が!」

「「一夜が!!」」

「活躍!」

「「活躍!!」」

「それ」「ワツシヨイ! ワツシヨイ! ワツシヨイ!」

一夜とトライメンズのメンツが飛び跳ねながら奇妙な踊りを披露する……その時、一夜の足がもつれ、転ぶ。

その瞬間……

「お、おい一夜! そつちは……!」

エルザの慌てる声が響くが……その声も虚しく……

グシャツツツツ!

「つーー!!」

シクルの持っていたチョコレートケーキは……一夜の下敷きとなり、とても食べられないものになってしまった……。

「あ」

「げ……」

「え？ 何？」

「……見てれば分かるよお」

「はあ……」

潰れたチョコケーキを見つめ、俯くシクル……。

「す、すまない！ マイハニー……決してわざとでは……「……ねえ」……ん？」

一夜が黙り込み俯くシクルに慌てて謝罪を告げると……シクルから小さな声が聞こえ、一夜はシクルを見つめる。

「……あたしの……あたしの……チョコケーキをつ!!」

ズオッ！ と音を立て、シクルの体から疾風が巻き起こる。

「ぬおおおお!! こ、これは!？」

「まだ……一口も……食べてなかったのにいいいい!! 返せあたしのチョコケー

キiiiiiiiiiiii!!!
!!!!!!」

「メエー……ン!!」

一夜を殴り飛ばすシクル……殴り飛ばされた一夜はそのまま空彼方へと飛んでいき、見えなくなった……。

「……な、何……今の」

初めて見たそのシクルの様子に目を点にし、震えるルーシイ。

「シクルはねえ……極度の甘党で……エルザといい勝負なくらい大好物なんだあ」

「シクルがそーいうのを食ってたら……絶対に邪魔しちやいけねえルールができてんだよ……」

「そ、そう……なん、だ」

恐怖するナツたちを尻目に、シクルはしくしくと涙を流していた……。

「ううー……私の、私のチョコケーキがあ……」

「あ、あの……シクルさん、良かったら私の……食べますか?」

「ふえ……」

シクルの目の前には、にっこりと微笑むウエンデイと……チョコレートケーキ……

「……いいの?」

きよとりと首を傾げ、ウエンデイを見つめるシクル。
ウエンデイはフフツと微笑み、

「はい！ いいですよ」

と、言った。

その瞬間、シクルの顔はパアツ！ と輝き、頬を赤らめながらウエンデイに抱きつく。

「ありがとー!!」

シクルはウエンデイからチョコケーキを受け取ると美味しそうに頬張る。

「んー！ 美味しい……!!」

ふにやあんとした顔をして食べるシクルを見て、一部の男は鼻を抑え、その中でもナツは一番顔を真っ赤にし、悶えていた。

シクルの機嫌も治り、宴の音頭は再び最高潮へと上がる中……しいんと、黙り、シクルたちを見つめる化猫の宿の者達。

その様子にシクルやナツたちでさえ、しん……と、静まり返る。

「……皆さん、ニルビット族のこと……隠していて、本当に申し訳ない」

音がなくなると、見計らったかのように話を始めたローバウルに、ナツたちは苦笑を

浮かべローバウルを見つめる。

「そんなことで空気が壊すの?」

「そんなん、全然気にしてねえのになあ?」

「あいつ!」

ナツの言葉に頷くハッピーとルージユ。

「マスター、私も気にしてませんよ?」

につこりと微笑み、ウエンデイもローバウルにそう告げた。

だが、ローバウルの表情は晴れず……

「皆さん、ワシがこれからする話をよく聞いてくだされ……まずはじめに、ワシ等はニルビット族の末裔などではない」

「……え?」

首を傾げ、ローバウルを見つめるウエンデイを横目に、悲しそうな表情を浮かべるシクル。

「末裔などではない……ワシは、ニルビット族そのもの……400年前、ニルヴァーナを造ったのはこのワシじゃ」

「な!?!」

「何……!？」

「嘘……」

「400年前!？」

「はあ!？」

ローバウルの告げた事実になつたたちは目を見開き、驚く。

「400年前……世界中に広がった戦争を止めようと善悪反転の魔法、ニルヴァーナを造つた……ニルヴァーナはワシ等の国となり平和の象徴として一時代を築いた。

しかし、強大な力には必ず反する力が生まれる……闇を光に変えた分だけニルヴァーナはその「闇」を纏っていった

バランスをとっていたのだ……人間の人格を無制限に光に変えることはできなかつた

闇に対して光が生まれ、光に対して必ず闇が生まれる」

ローバウルの言葉に

「そう言われれば確かに……」

と、頷くグレイ。

「人々から失われた闇は我々ニルピット族に纏わりついた」

「そ、そんな……」

ローバウルは目を伏せ……言葉を告げていく。

「……あれは、地獄じゃ。ワシ等は共に殺し合い……そして、全滅した」

「「っ!!」」

殺し合い、全滅の言葉に驚愕が抑えられないナツたち。

「生き残ったのはワシ一人だけじゃ……」

否、今となつてはその表現も少し違うな。我が肉体はとうの昔に滅び、今は思念体に近い存在……ワシはその罪を償うため……また、力なきワシの代わりにニルヴァーナを破壊できるものが現れるまで、400年……見守ってきた。今、漸く役目が……終わつた」

そう言い、顔を上げたローバウルの表情は晴れ晴れとしていた……。そして

「そ、そんな話……!」

震えるウエンディ……そんな彼女の目の前から……次第に化猫の宿の者が消えていく……。

「っ! マグナ!? ペペル!! 何、これ……」

「ちよ……アンタ達!!」

次々と化猫の宿の者が消えていく……

「ど、どうなつてんだこりゃあ!」

「何なの……これえ」

訳が分からなくなつたルージユがシクルを見上げるも……シクルは首を横に振り、何も言わなかつた。

「ウエンデイ……シャルル……騙していてすまなかつたな……ギルドのメンバーは、皆

……ワシの作りだした幻じや」

「な、なんだとお!？」

「人格を持つ幻だと!？」

「何という魔力なのだ……!？」

あのジユラでら、ローバウルのその言葉に、目を向いた。

「ワシはニルヴァーナを見守るためにこの廃村に1人で住んでいた。長い長い時の中……」

7年前1人の少年がワシのところに来た」

「1人の……少年」

「少年のあまりにまつすぐな眼に、ワシはつい承諾してしまつた……1人でいようと決めていたのにな」

そう語つたローバウルだが、その表情には確かな愛情が現れていた……。

「……ウエンデイのために作られたギルド」

「そんな話っ！ 聞きたくない!! パスクもナオキも消えないでよ!!」

ローバウルの語る話に耐えきれず、耳を塞ぎ涙が溢れるウエンデイ。その隣では、シャルルも拳を握り震えていた。

「ウエンデイ……シャルル……もうお前達に、偽りの仲間はいらない」

そう呟くと、ローバウルはシクルやナツたちの方を見つめ指差す。

「本当の仲間がいるではないか……」

そして、ローバウルの身体も光だし……次第に、その姿が消えていく……

「マスターっ……!」

「ウエンデイ……シャルル……お主らと過ごした7年間……実に、幸せな日々であった……」

愛しておる……お主らの未来は、始まったばかりじゃ……」

そして……ローバウルはニツコリと微笑み……もうその姿はほとんど見えなくなっていた。

「マスター!」

消えゆくローバウルに駆け寄るウエンデイ。

「皆さん、本当にありがとう……ウエンデイとシャルルを……頼みます……」

そうウエンデイとシャルルを託すと……ローバウルの身体は完全に消え去ってしまつた。

光の粒となり、天に昇るローバウルの魂……

「マスタアアアアアッ!!!」

ローバウルの立っていたその場所で、ウエンデイは崩れ落ち、大声で泣き出す。

誰もがその姿に……悲痛な表情や、同じく悲しみの涙を流す中……

そつと、彼女に近寄る、緋色と金色……

「……愛するものとの別れは辛い……」

「でも、その辛さは……仲間が埋めてくれる」

「来い……妖精の尻尾へ」

「……おいで……私たちのところに……」

エルザとシクルのその言葉に、ウエンデイはポロリと最後の涙を流し……エルザとシクルに抱きつく。

ニルヴァーナ……それは、最後に、悲しい別れと、新たな仲間との絆の始まりを運び……

完全にこの世界から消え去った……。

残された少女達は、新たな仲間と共に……新しい道を歩むのだ……。

ニルヴァーナ篇 完結く

next story 日常と語られぬ過去篇 開幕

く予告く

今日は宴だー!!!

楽しいところですね！

え？ ……エマ？ ……わあ！！ 久しぶり！！

……アトス………ごめん

修行？ えー……私、氷の魔法なんて使わな……ああ、ちよつと待って？
確か書庫にあの魔法があったと思うんだけどなあ……

え………何でここにいるの？

またね………身体、気をつけてね？………ラクサス

虹の桜………ああ、もうそんな時期なんだ………

これ………シクルへのプレゼントにしよーぜ!!

なあ……まだ、話す気になれねえか？

ナツ……いつか、いつか話すから……今は、まだ……ごめん

第7章 日常篇

5 2話 ようこそ！ 妖精の尻尾へ！

「あゝ…… 船って潮風が気持ちいいんだなあ」

「良かったねー、ナツ」

「何その間の抜けた声……」

現在、シクルたち妖精の尻尾メンバーは、新たな仲間、ウエンデイとシャルルと共に、船でマグノリアへと帰還中だ。

ナツは船に乗る前にウエンデイからトロイアの魔法をかけてもらっていたため、乗り物酔いを起こすことなく、潮風を感じのんびりしていた。

「乗り物っていいもんだなあー!!」

……のんびりではなく、船の上を走り回っていた。

そんな時……

「あ」

と、ウエンデイの声が聞こえ……

「そろそろ、トロイアの効果が切れますよ」

と、ナツを見て告げた瞬間……

「おっふっ！ うぷう……」

バタリ、と崩れ落ち一瞬で乗り物酔いを起こすナツ。

ナツは床を這いながらウエンデイに近づき……

「も、もうい、つかい……かけ……て、うぷ」

と、懇願するが……

「そんなに掛けたら効くものも効かなくなるでしょ？ あと少しなんだから我慢しなさい」

「い」

ピシヤリとシクルにとめられ、ウエンデイも「すみません……」と、苦笑を浮かべ断つ

た。

「は、はくじよお……ものお……うっうぷ」

「放つとけよ、そんな奴」

「あつははははは！」

吐き気に耐えるナツを見て、グレイは呆れた様子でルーシイは笑いが止まらない様子

……

「それにしても、本当にシャルルたちも妖精の尻尾に来るんだね」

「私はウエンデイが行くって言うからついて行くだけよ」

「よろしくう、シャルル」

ふいっとそっぽを向くシャルルに二ヘラと微笑みながら声をかけるルージュ。

少し愛想が悪い印象を与えてる様子のシャルルに苦笑を浮かべながら、ウエンデイが少し哀れそうに、ナツを見ると……

「もうっ！ ほら、おいでナツ」

「お、おう……」

シクルがナツを呼び、ナツは身体を這いながら、シクルに近寄り……床に腰掛けたシクルの膝の上に頭を乗せ、寝始めた。

その様子に、いつも見ているグレイやエルザ、ハッピーにルーシイは何とも言わないが……ウエンデイは、少し頬を赤らめる。

「あ、あの……もしかして、ナツさんとシクルさんは……付き合っていたり、するんですか……？」

「……へ？」

首を傾げ、ウエンデイを見つめるシクル。

「膝枕って……好きな人同士でやるものなのかな……と、思っていたんですが……」

「……好、き……」

ウエンデイの告げたその単語が脳裏でリプレイされ……次第にその意味を理解すると、ナツを見下ろし、見つめる。

ナツを……好き……私……好……き……

「つーーーー／／!!!」

ゴツ!! と、ナツの頭を落とす。

「ぐびゃっ!」

そして、顔を真つ赤にしウエンデイを見ると……

「な、ななな……何いってんの、ウエンデイちゃん／／!? わ、私がナ、ナナ……ナツを……す、好きって……なわけないでしょ!? 付き合ってもないよ／／!? うん!! 勘違いしないでね!! ね!!」

言葉を何度も囁みながら言った。

「そ、そうですか……? お似合いだと思っうんですが……」

「そーです! そんなことありません!!」

顔を真つ赤にするシクルを見てルーシイやグレイ、ハッピーにルージュもニヤニヤと含み笑いを浮かべ、エルザもそうなのかと勝手に思い込んでいた。

「そこお!! ニヤニヤしないで！ あとエルは勘違いだからね!! お願いだからその幸せにオーラやめて!!」

そしてこの後……シクルがナツへ、膝枕をすることは無く……船はハルジオン港へ到着、そこから馬車でマグノリアへと帰り、無事妖精の尻尾へと帰還を果たした。

「と、言うわけで……ウエンデイとシャルルを妖精の尻尾へ招待した」

連合軍であった事などをマカロフに報告し、最後にウエンデイたちを紹介したエルザ。

その影からひよつこりと姿を現し、マカロフやギルドメンバーと対面するウエンデイとシャルル。

「よ、よろしくお願ひしますー!」

「ふん……」

少し恥ずかしそうに一礼するウエンデイとぷいっとそっぽを向くシャルル。

そんな新たな仲間にも、ぞろぞろと集まる人ばかり。

「かわいいー!」

「ハッピーのメスがいるぞー!」

「お嬢ちゃんいくつ?」

「ルーちゃん!! おかえりー!!」

「レビイちゃん!!」

ルーシイに抱きつくレビイ。

「グレイ様……ジュビアは心配で心配で……目から大雨がっ!!」

ダバー! とジュビアの目から涙が流れる。

「ぎゃー!! グレイ止めろお!」

「おぼぼぼっ! 溺れるう!!」

「ンで俺がっ!?!」

「あら、シクル……また無茶したの?」

グレイとジュビアのやりとりに苦笑を浮かべていたシクルの頬を掴み、しかめっ面を浮かべるミラ。

「ふえ? ああ……そんなに無茶はしてないよ?」

「嘘……またこんなやつれて……あまり魔力を使いすぎちゃダメよ?」

めっ! と言うミラに「はい……」と返事を返すシクル。

「わあ! 見てシャルル! 本物のミラジェーンさんだよ!! 綺麗だね!」

「こんにちわ、ウエンディ、シャルル……これからよろしくね?」

シクルから離れ、ウエンディとシャルルにっこりと笑みを向けるミラ。

「そういえば、シャルルの魔法は多分ハッピーやルージユと同じだと思うけど……」

「何ですって!? ちよつと、オスネコとメスネコと同じ扱い!」

「でも実際同じだよねえ」

二ヘラと微笑みを絶やさず、シャルルに告げるルージユ。シャルルは納得いかないようだ。

「わ、私……天空魔法使います。天空の滅竜魔導士です!」

ウエンデイがそう少し大きな声で言うのとギルド内はしいん……と、静まり返った。

誰も声を発さず、目を見開く一同を見てウエンデイはふつと暗い表情を浮かべる。

「つ……(信じて貰えない……かな)」

珍しい魔法だから……仕方ないか、と目を伏せるウエンデイ。

そんな彼女の肩をポンツと叩く人物が……

「ふえ……」

顔を上げるとウエンデイの隣にはシクルが立っており、ウエンデイと目が合うとつこりと微笑んだ。

「大丈夫だよ……ほら」

そう、シクルが呟いた次の瞬間……

「「うおおおおお!!」 すごい!!」
ギルド内から歓声が上がった。

ビクッ! 「ふ、ふえ!」

「滅竜魔導士だあー!!」

「すごい!! こんな可愛い子があんなすごい魔法使うなんて!!」

「ガジルやシクルもいるからこのギルドに4人も滅竜魔導士がいることになるぞ!!」
「すごいすごい!! 本当に珍しい魔法なのにな!」

ワラワラとウエンデイに群がるギルドメンバーたちにオドオドするウエンデイ。

そこへ……

「はいはい、そんなに大勢で群がったらウエンデイが潰れちゃうでしょ?」

はい離れた離れたーつとウエンデイを押し潰さんとする勢いで迫るメンバーを押しやるシクル。

それに1人の男がブスつとした顔で……

「えー、いーじゃんかよちよつとくら……」

と、反論をすると……

「なにか文句でもあるかなあ? ウエンデイが潰れちゃうてもいいと?」

ニッコリー……とした、笑みで凄むシクルを見て首を横へと勢いよく振り否定する。

「シ、シクルさん……怖い」

「そーかしら? 私はまともなほうだと思っけどね」

少し苦笑を浮かべ、シクルから無意識に距離が離れるウエンディにシャルルが首を傾げ告げる。

「よっしやー!! 今日飲むぞー!!」

「今日は宴だー!!!」

「「「おおおおおおおっ!!!」」」

宴の一声とメンバーからの歓声から始まった宴。既に出来上がっていたメンバーも新しく酒を飲み始める。

「ミラちゃん!! こっちにもビール!」

「はいはい!」

次々に飛び交う注文をせっせと受けるミラ。

「シャルルー、オイラのお魚いる?」

「いらないわよ!」

「好き嫌いダメだよお? シャルル」

ハッピーとルージュがシャルルに声かけるもシャルルからの反応は薄い……。

「うおおおおおっ!! 燃えてきたア!

「きやー!? あたしの服ー!!」

「ありや、ナツー……ルーシイが燃えちやうからやめなさい」

服が燃え始めたルーシイにカラカラと笑いながらナツを静めるシクル……
「笑つてないでこの火どうにかしてえ!!」

「グレイ様……浮気とかしてませんよね?」

「何だよそれ……」

「大丈夫だよ、ジュビア。グレイはずっとジュビアのことを考えてたよー」

「おいシクル!? 何言つて……」
「本当ですか!?」
「おいつ!」

シクルの言葉を聞き、ジュビアはキラキラとした瞳でシクルに迫る。

「はっはっはー、ほんとだよジュビア。いいねえ……愛されて」

「グレイ様……ジュビア感激っ!!」

そう叫び、グレイに抱きつくジュビア。

「シクルのバカヤロおおおおおっ!!」

最後に聞こえたのはグレイの絶叫だが……シクルは気にもせずケラケラと笑いながら1人質問攻めから解放され椅子に座っていたウエンデイの元へと向かう。

「どう？ ウエンディ……ここは」

ウエンディの隣に腰掛け、目の前を通ったミラに飲み物を注文しながら声かける。

「はい！ 楽しいところですね！ ここは……凄く、楽しいです！」

につこりと笑い、そう言ったウエンディの答えに「そっか」と満足げに微笑むシクル。

「私、ここにきて良かったです!!」

「ふふつ、そう言ってもらえて何よりよ」

ウエンディとシクル、2人で話をしてしていると……

ピクツーーー 「あれ……？」

シクルの嗅覚が珍しい匂いを嗅ぎとる。

「どうしました？」

「ん？ ううん、何でもないよ……ちよつとここ離れるね？」

ウエンディにそう告げ、シクルは暴れ回るメンバーたちの間を通り、ギルドの外へと出た。

コツツーーー

「やっぱり……帰ってたんだ、ミストガン」

「……シクルか」

シクルの嗅覚が感じた匂い……それは、ミストガンだった。

シクルの声に、背を向けていたミストガンは振り返る。

「顔出してかないの？ ……7年ぶりなんでしょ？」

首を傾げ、そう言ったシクルの言葉に目を見開くミストガン。

「何故……それを」

ミストガンからの問いかけにふっと目を伏せ、語り出す。

「そりゃあ……あのジェラールは7年前と言えばまだ楽園の塔を造り上げることにしか執着していなかった……だから、そんな彼がウエンデイと数ヶ月ともにするとは考えられない……」

シクルはそこで一度言葉を切り、目を開け……

「と、なると……同じ顔を持った貴方何じやないかなと……思つてね？ ミストガン

……ううん、ジェラール」

と告げた。

「……はあ、まったく……君のその勘の良さにはいつも参つてしまうな……その通りだよ、シクル」

ミストガンのその言葉を聞き、少し眉を下げ悲しい表情を浮かべる。

「……………言つて、あげない……………の？」

「……………私は彼女を、7年間も放つてしまった……………そしてまだ、私の任務は終わっていない
……………彼女と話をするのは、せめて……………全てが終わつてからだ」

ミストガンはそれだけ言うと、シクルに背を向け……………去つていった。

「……………待つてるよ？ ウエンディは……………」

姿の見えなくなつたその場所をずっと見つめるシクル……………そこへ

「おーい！ シクルー！！」

シクルを呼ぶ……………ナツの声が響いた。

「ナツ……………」

声の方を振り返ると……………

少し息を切らして駆け寄ってくるナツがいた。

「こんなところにいたのかよ！ すげえ探したのにいねえから……………てかこんな所で何して
……………」

ナツはそう言い、シクルの顔を見ると目を見開いた。

「……………どうした？ シクル……………」

「……………え？」

ナツのその言葉の意味がわからなかったシクルに……………ナツの伸ばした手が頬に触れた。

「なにか……………あったのか？ すげえ……………悲しそうな顔してる」

ナツのその言葉に少し目を見開き……………

ふっと、微笑むと

「……………うん、何でもないよ？ 大丈夫」

言った。

ナツは少し納得のいかない様子だったがあとため息をつき諦めると……………

「まあいいけどよ……………なんかあつたらちゃんと言えよ？ 俺に……………隠し事なんか、すんなよ」

「……………うん、分かった」

シクルの返事に満足したナツはニカッ！ と笑みを浮かべるとシクルの手を取り、「早く皆で騒ごうぜ！」と言い、ギルドへと戻っていった。

新たな仲間、ウエンディとシャルル。
妖精の尻尾はまた、賑やかとなった。

そして、宴の最中……シクルはふと、懐のポーチの中身を確認し……

「あ……薬切れそう……そろそろ、補充に行かないとな」と、ひとりでに呟いた。

元気かなあ………
《ジル婆》

宴で騒ぐメンバーを見つめながら、懐かしいある人物を思い浮かべ、ふふつと微笑んだ。

53話 懐かしい再会

ウエンデイとシャルルの歓迎の宴を開催してから2日後……

ギルドでは、ウエンデイとシャルルの住む場所を探している時、シクルはとある人を訪ねに、暗い森の奥深くを歩いていた。

「んー……久しぶりだなあ……元氣かな、ジル婆……」

そう呟き、シクルの脳裏に浮かぶは少し腰の曲がった白髪の女性……

「前回は……あの仕事の前だから……半年以上は会ってないんだなあ……怒られちゃうかな？」

苦笑を浮かべ、怒られたくないなあ……と呟きながら足を進めると……開けた場所に出た。そして……

小さな川と泉のあるところに建つ一件の大きく少し古びた建物が目に入る……。

「ついた……」
ふうと深呼吸をすると、コンコンツと扉をノックする。

そして中からは間を空けず、声がする。

「空いてるよ……」

「失礼します」

シクルが扉の中へ入ると……腰掛け椅子に腰掛け、何かの本を読んでいる白髪の左眼を包帯で覆った老婆がいた。

彼女の名は　「ジルリエ・ルメドウサン」。

親しいものからは　「ジル」　の愛称で呼ばれる。

ジルはシクルが入ってきたことに気がつくのと本から目を離し、シクルをじつと見つめる……。

「……シクルか」

「うん……久しぶりだね、ジル婆」

元気だった？　と首を傾げ、声をかけるシクル。だが、ジルははあとため息を一つつく。

「シクル……お主、また無理をしたな？」

「え……」

ジルは腰を上げ、シクルの横に椅子を持ってくると座るように首で指示する。

シクルはほんの少し、怖がりながら椅子に腰掛ける。

すると……

「……んの、バカ娘がああああつ!!!」

スパーン!!!

「いったああああいつ!!!」

突然シクルの頭にジルが持っていた分厚い本が振り落とされる。

シクルは叩かれたところを涙目で抑え、ジルの恨めしそうに睨む。

「な、何すんのさあ……!!　ジル婆!!　暴力反対だよ!?!」

「ふんっ……約束も守らん娘が何言つとるか……ほれ、診てやるから服脱ぎな」

ジルにそう告げられ、シクルは痛む頭を抑えながら服を脱ぎ、ジルに背を向け座った。

そして、シクルの背中にジルは右手を添えると淡い光を手から放つ。

「あーあ……ほれみろ……身体中ボロボロじゃないかい……」

しかめっ面でシクルを叱るジル。

「ううー……」

シクルは顔が上げられない様子でしょんぼりとしている。

「全く……またいくつか注射するよ?　いいね」

ジルの言葉にコクリとシクルが頷くとジルは数本の注射器を取り出す。

そして……

「じゃあ……ちと痛いぞ」

プスツと針をシクルの背に打つ。

その瞬間ビクツ！ と肩を揺らし、表情を歪めるシクル。

「いつ……つう」

「我慢しんさい……ほれ、あと4本じゃ」

「4本!? 4本も打つの!?!」

ジルの口から出たその言葉にぱつとジルの方を振り返るシクル。だが、その頭を再び分厚い本で叩かれ……

「動くんじやないよ!! 刺す場所を間違えるじゃろ!!」

「つうー! ごめんなさい……」

再び涙目になりながらジルに背を向ける。

そんなシクルの背にジルは深いため息をつき

「全く……半年に1度は来いといつも言つとるじゃろーに……8ヶ月も来んとは……注射も増えるに決まつとろう」

「だつてこここのところ忙しくて……ここまでめんどうだし……(ボソツ)」

「面倒言うんじやないバカタレ!」

シクルの小さな眩きを正確に聞き取ったジルに目を見開くシクル。

「なんで聞こえるの!？」

「当たり前じゃ……何年主の主治医をしていると思つとる?。」

「ううー……4年……くらい?。」

「5年じゃ」

ジルのその指摘に、「あれ? そうだっけ?。」と苦笑を浮かべ、呟き考え込むシクル。

その間に4本の注射も打ち込まれる。

「ほれ……終わつたよ」

「ふえ……あ、ありがとうジル婆」

シクルは脱いだ服をいそいそと着始める。

そこに……

「……シクル」

ジルの声が掛かる。

「なあに?。」

「あまり……無茶をするな……確かにお主は魔力も高い……一般と比べれば強いやもしれぬ……だが、お主も一人の人間じゃ……出来ることは限られ……」それでもやらなきや……」シクル……」

ジルの言葉を遮り、言葉を発したシクル……

シクルは弱く笑みを浮かべる。

「無茶でも……私に出来ることならやらなきや……それに、ジル婆……私は、普通の人間じゃないよ……私は……」

「バケモノ」 だよ……

「シクルつ!!!」

「つー!」

ジルの大声に肩を揺らし、驚くシクル。

「……お主は、ちゃんとした人間だよ……それは、この私が、保証しよう……お主は、人間じゃよ……」

「ジル婆……」

ジルはそつとシクルの頬に触れる……そして、ふつと優しい笑みを浮かべる。

「シクル……お前は優しい子だ……自信を持つんじゃよ?」

「……うん」

小さく笑みを浮かべ、「ありがとう……」と呟くシクルの頭を数度撫で、離れるジル。

「それと……ほれ、いつもの薬じゃ……今回は3ヶ月分とちと少ないがお」

ジルの手から放り投げられた袋をパシッと受け取るシクルは首を傾げる。

「え？ いつもは半年か10ヶ月分だよ？　なんで今回は……」

「お主以外にも、いたからのお……」

ジルの言葉に、「私以外……？」と、シクルが首を傾げた時……

ジルの腰掛ける椅子の奥に位置する扉がガチャと開き……

「ジルお婆ちゃん……お客様です……か？」

そこから出てきたのは……銀色の長髪に、碧い瞳をした少女……

少女はシクルを見つめ、目を見開き……シクルもまた、少女に気づくと目を見開き驚きを露わにする。

「……シクルちゃん？」

「……え」

少女はシクルの返事を待つことなく、駆け寄り、シクルに抱きついた。

「本物のシクルちゃんだあ！」

「え？　……エマ？　……わあ!!　久しぶり!!」

シクルはやつとその少女に抱きつかれ、我に返る。

少女の名は “エマ・ヴァレンティン”

シクルが各地を放浪してた頃に出会った昔馴染みだ。

「元気でした？ シクルちゃん」

「もちろん！ 元氣いっぱいだったよ！ エマも元氣そうで……良かった！」

にっこりと微笑み合う2人。ふと、シクルは先程のジルの言葉を思い出す……。

「もしかして……もう1人の子つて……エマのこと？」

「はい。私もお薬がなくなってしまう……ジルお婆ちゃんのところへ貰いに来たんです」

そつかと頷くシクル。

「エマ、このあと時間ある？ あつたらどこかでお茶しない？」

首を傾げ、問いかけるシクルだが……

「あ、ごめんなさい……今日はちよつと……」

ミラクルも置いてきちやつて……待たせてるので

と、エマはシクルからの誘いを断った。

シクルは気にしたふうもなく、そつかと呟き……

「じゃあまた今度……次は会う日を決めてお茶しましょ？」

と言った。

「はい！」

にっこりと微笑み、頷くとエマはジルを振り返り……

「それでは、ジルお婆ちゃん……私はそろそろ行きます……ありがとうございます」
「気にせんでええ……また顔を出しんさい……待つとるからのお」

ジルの言葉に頷くエマ。

「じゃあ……また会いましょう？ シクルちゃん」

「うん、またね」

最後に、シクルと二言三言会話をするとエマは去っていった。

「ふう……じゃあ、ジル婆……私もそろそろ」

「待つのじゃ」

荷物をまとめ、出ていこうとしたシクルを止めるジル。

「んえ？ 何……？」

「……お告げじゃ、どんな時も……自分を見失うでないぞ？ 先も言ったじゃろう……」

自信を持って……忘れるでない」

ジルの真つ直ぐとした真剣な眼差しに……シクルは数秒、瞬きもせずじつとジルを見つめ返し……不意に、ふつと笑みを浮かべた。

「分かった……ありがとう、ジル婆……」

じゃあ、また来ますと言い、シクルは扉を開け、出て行った……。

「……はあ……まったく、本当に……困った娘じゃの……」

ジルの家を出て、妖精の尻尾へと歩き帰る途中……

「……ふう（自信……ねえ）」

ふと、少し暗くなってきた空を見上げるシクル……

「……自信なんて、持てないよ……ジル婆」

私がバケモノなのには……変わりないんだ……

シクルは夜空から自身の両手へも目を落とした。そして……ギュツと手を握り締め、表情を歪める。

「……運命……か」

そつと眩き、深く長いため息をつく……そして
パンツ！ とシクルは自身の両頬を叩くと……

「……大丈夫……大丈夫、私はまだ……」

と自分に言い聞かせ、笑みを浮かべた。

それを何度か繰り返し……歪んでいたシクルの表情はのほほんとした表情に戻った。

「はあ……それにしても、酔い止め……3ヶ月分しかくれなかったなあ……」

エマの分と半々だったのも分かるけど……

ジルに渡された薬の袋を見つめ……再び小さくため息をつくシクル。

「多分……3ヶ月以内に來いって事なんだろうなあ」

行くのはいいけど……

「ジル婆の家まで遠いんだもんなあ……めんどくさくなっても仕方ないじゃん……」

そう呟き、私は悪くない！ と勝手に自己完結すると薬の袋を懐にしまった。

カサツ

「ん？」

袋をしまった手が何かに触れる。

それを取り出すと……

「あ、アトスからの手紙……（忘れてた……）」

苦笑を浮かべ、危ない危ないと呟きながら腰掛けられそうな切り株を見つけ、そこへ腰掛けると手紙の封を開けた。

「えつと……」

アトスからの手紙にはこう記してあった。

〃 シクル・セレーネ様へ

お久しぶりです、突然の手紙ですいません

一つご報告です……ああ、貴女はもうご存知かとは思いますが、私はあの楽園の塔の事件以降、評議会を辞めました。

今は知り合いの魔導士学校で子供たちに魔法を教えています。

……まあ、このことは隅に置きまして……

実は、近々私と会って頂きたいのです……

シクルさんのご都合が良い日を、教え頂けませんか？

手紙に同封した緑の紙に日付を書き込んでいただければその情報は直接私に届くようになっていますので……お願いします。

ではまた……お会いする日を楽しみにしております。

アトス・リヴァイアスより

”

「……そっか、やっぱり……辞めたんだ（辞めたというより……辞めさせられた……の方が強い気がするけど）というか……緑の紙って……」

手紙の入っていた封の中を探ると、確かに手のひらサイズの小さな紙が入っていた。

「これに書けばいいのかな？ 日付ね……」

シクルは今後の予定を考え……

「暫くは評議会からも依頼は来ないだろうし……うん、3日後でいいかな」

そう呟き、緑の紙へ “3日後の午後で” と記した。すると……

ポツ！ と紙が翠の炎を灯した。

「わっ！ これ書いたら燃える仕様なの？（手紙で記してくれてもいいじゃないのよ

！ もう……時折抜けてるんだから……」

はあと、ため息をつくと手紙をポケットへしまい、立ち上がる。

「さて……ルージュも待たせてるし……帰ろ」

思ったよりも時間がかかったと思い、ギルドまで光を纏い光速で帰ることにしたシクル。

そして、ギルドに戻ると……

「……何やってるの？」

ギルドのプールがあつた場所が爆発したかのように粉々になっており……ナツやグレイン……ほぼ、ギルドの男達はその体に傷を作り、渋い顔をしていた。

「あ、おかえりーシクルー」

シクルの帰還に気づいたルージュがその頭に飛び乗る。

「わっ、ただいまルージュ。どうしたのこれ？」

「うん、実はねえ……」

と、ルージュはシクルに昼間、起きたことを話した。

話を聞いたシクルは……

「あっははははははっ!! プールの底に覗き部屋があつて? マスターが作ったもので、そこで丁度泳いでたマスターの……ぶふう!! あはははははっ!!」

大笑いしていた。

「ぬぬぬぬっ!! 笑つてんじゃねーよ!!」

「があー!!とナツが怒鳴るも……」

「ぶはははははっ!!」

シクルの笑いは止まらない……。

「んなに笑わなくてもいいだろうが……」

むすつとしたグレイの言葉。

そして、数分後、やっと落ち着いたシクル……

「はあ………笑った笑った。で? それで皆ふくれっ面してたの?」

「ふくれっ面なんかしてねえっ!」

シクルの言葉に吠えるナツ。だが……

ピンッ! と、ナツの額にシクルからのデコピンが落ちる。

「つて!! 何すんだ!」

「その顔のどこがふくれっ面じゃないって? 全く………プールはまたみんなで作直せ

ばいいでしょ?」

マスターだって……ほんとは忙しい人だもん。たまにはお茶目っ気だつて出るよ

……

みんなの傷は私が治してあげるから……みんなはふくれっ面を治しなさい」

シクルはにつこりとナツに微笑み、他のメンバーにも顔を向け、そう告げた。

そのシクルの言葉におう……と、頷き、一応ふくれっ面は消えた面々。

「よし！ オツケーオツケー！ さてと……」

【我、月の加護の名の下に

愛する者の身を包み その身、回復させん】

歌魔法《ソングマジック》治癒（ヒール）」

シクルの両手から放たれた光は、その場の面々を包み込み……あつという間にその傷を治した。

「じゃあ……あとはこの片付け、ちゃんとやるのよー」

シクルはそう言うのとルージュを連れ、ギルドを出て行く。

「てえ……おい!? 手伝ってくれんじゃねーのかよお!? おいシクルー!!!」

「傷は治したんだからあとは頑張りなさいー」

「またねえー!」

シクルは呼び止めるナツにそう言い放しながら、片手を上げ手を振り、ルージュもま

た、ナツたちにバイバイと言った。

その後もナツは呼び止めるがシクルの足が止まることはなく……
「シクルの……薄情者おおおおおおお!!!!」

その夜……ナツの絶叫がマグノリア全体に響いた。

54話 約束の日

数年久りに昔の友人、エマと再会してから3日後……

「んー……ふああ……」

カーテンの隙間から入り込む陽の光に目が覚める……。

少し寝癖のついた髪がびよんぴよんと跳ねる頭を重く持ち上げ、ぼおつと一点を見つめるシクル。

そして、ふいつと顔を横へ向けカレンダーが目に入る。

「……あ（今日……アトスと会う日だ……）」

危ない……少し忘れてた……

ふう……と、一息つくと、隣で寝ているルージユへと視線をやる。

ルージユはシクルに気づかず、「んー……むにゃ」と小さくいびきをかき寝ていた。

そんなルージユを見てふつと、笑みを浮かべると起こさないように立ち上がり、カー

テンを開ける。

朝日を浴び、ぐつと背伸びをするシクル。

「んっ……んー！ はあ……アトス……話ってなんだろう？」

最後に会ったのは確か聖十の称号を貰った時だった……気がする。

「……何かやつちやつたっけ？」

やつてないと思うけどなあとかきながら、普段着に着替えると髪を結び、寝室を出ると台所へと向かう。

「さて……朝は何にしよっかなあ……」

冷蔵庫を開け、朝の献立を考え……

「お手軽なのでいつか？」

と、眩き調理が始まる。

まずスクランブルエッグを作り、お皿に盛ると、味付けには胡椒とケチャップをかけ、その横にソーセージを2本ずつ添える。

最後に豆腐とほうれん草を使ったお味噌汁を作り、ロールパンを用意。

それらをテーブルへと運び、一通り朝食の準備が出来た頃……

「ふあああ……おはよお、シクルウ」

目を擦り、ふよふよと飛びながらルージユが起きてきた。

「おはよ、ルージユ。ご飯、出来てるよ？」

シクルのその一声にルージユはもう一度大きく欠伸をすると、次の瞬間にはぱっちり
と目が開き

「朝ごはんだア！」

と、お気に入りの席へと座った。

「はい、ホットミルク」

ルージユは朝決まってホットミルクを飲むのが習慣となっている。

少し熱めのホットミルクをルージユの前に出すと「ありがとお！」とシクルに言い、一
口ゴクツと飲む。

「ふあ……おいしいー」

「フフツ、良かった……じゃあご飯、食べよっか」

「あいー」とルージユが答えると同時に手を合わせ……

「いただきます！」

と、朝食を食べ始める。

食べ始めてから数分……

「あ、そーだ。ルージュ、今日の午後はちよつとギルドでお留守番お願いしてもいい？」
「ええ……………？ いーけどお……………どうしたのお？」

唐突なシクルからのお願いにルージュはコテンと首を傾げ、問いかける。

「ちよつと人と会う約束があつてね……………人つて言つてもアトスなだけ……………」

「アトスつて……………評議院の？」

「そーそ。大事な話があるつてこの前手紙に書いてあつてね？ 会つて欲しいつて

……………だから今日会うんだ」

その間だけお留守番……………よろしくね？

と言つたシクルにルージュは目を見開く。

「ええ!! 大事な話つて……………シクルウ、何のことか分かつてるのお？」

「……………さあ？ よく分からないけど……………大事な話つて言うからまあ、重要な話なんじゃ

ない？」

ルージュからの問いかけに少し考えながら、んーと答えるシクルに……………

「そ、そつか……………（絶対告白だあ……………それに気づかないシクルつて……………）」

鈍感というより……………無知？

ため息をつくルージュであつた……………。

「ほら、早くご飯食べてギルド行こ？」

シクルのその言葉に、「あ……うん」と頷き、朝食を食べ進めるルージュ。

そして、朝食を食べ終え、洗い物が終わるとシクルとルージュは妖精の尻尾へと向かった。

「あ、ナツたちに今日は一緒に仕事行けないこと言わないとね」

ギルドにつくほんの少し前にそう呟いたシクル。

「え……ああ、うんそうだねえ……（アトスに会うことはナツに伝えない方がいいと思うけどお……）」

苦笑を浮かべ、その事を知った時のナツがどうなるか少し恐ろしく感じるルージュの目の前にはすでにギルドが見えていた。

ガチャーーー

「おはよー！」

「おはよお！」

シクルとルージュの声に気づいたメンバーが一斉にそちらへと目を向け、笑みを浮かべる。

「おはよう、シクル！ ルージュ！」

「おはよう、ミラ！　いつものちよーだい！」

カウンターへと一直線に駆け寄り、椅子に座るとミラに注文をするシクル。

「はいはい」と、笑いながら答えすぐに飲み物を持つてくるミラ。

「はい、甘めのココアよ」

シクルは暖かいココアに砂糖を入れた超甘いそれが大好きなのだ。

「わあ！　ありがと、ミラ」

にっこりと笑い、一口ココアを飲むと……

「ふああ……やっぱりミラのいれるのは美味しいねえ」

と、のほほんとした表情で呟く。

そこに……

「おーす！　シクル！　ルージユ！はよお!!」

「きやあ!」

ガバツ！　と突然現れ、腕を回し肩を組んできたナツに驚くシクル。

「おはよお、ナツ！」

「び、びつくりした……もお、ナツ……いきなり飛びついてこないでよ？」

「なっははっ！　わりいわりい！」

カラカラと笑い謝るナツを見て反省してないな……と感じるシクル。

「と、そーだ……シクル、今日一緒に仕事行かぬーか？ 丁度いい仕事があんだよ！」

「ん？ あー……ごめん今日は無理なんだ」

ナツからの誘いをやんわりと断ったシクル。すると、ナツはぶすつと膨れ面になり

……

「んだよお……まためんどくせえかよ？」

つれねえなあと不貞腐れるナツにため息を吐くシクル。

「違うって……今日は本当に用事があるの」

「用事い？ なんだよそりゃ」

シクルとナツの会話にまずいつ！ と予感するルージユがシクルを止めに入ろうと

口を開くが……

「まっ！ シク……」

「アトスからね、大事な話があるって言われて……今日会う約束してたのよ」

「……は……な、何だとおおおっ!？」

シクルの言葉にナツは叫び、ルージユはあとため息をついた。

「え？なに？ どーしたの？」

きよとんと首を傾げるシクルの肩をガシツ！ と掴むナツ。

「おい……アトスってまさか……あの評議院の……あいつか!? 茶毛の！」

「そーだけど……」

「つか大事な話つて……おい、シクル！ 行くんじゃねーよ！」

まさか受けるのか……!? と騒ぎながら大声を上げるナツ。

「ええ!? なんでよ……もう約束しちゃったもん……行かないやダメでしょ？」

そこからナツとシクルの「行くな！」と「行きます」の言い合いが始まった。

丁度その時ハッピーとルーシイがギルドに来た。

「おはよー！ て、どうしたのあの2人」

「ナツー置いてくなんてひどいよ……何やってるの？」

ギルドについて早々、言い合いをしているシクルとナツを見て不思議そうな表情を浮

かべるルーシイとハッピー。

「実はねえ……」

ルーシイとハッピーに今までのことを説明するルージュ。その話を聞くと……

「ええ!? それでシクルは気づいてないの？」

「みたいだよお？」

「うわあ……なんかアトスが少し哀れだね……」

ハッピーのその言葉に頷くルージュとルーシイ。

すると、ふとシクルを見つめていたルーシイが怪訝そうな表情を浮かべた。

「……………てか……………シクル!!」

「ふえ? あ、ルーシイ……………どうしたの?」

笑みを浮かべるシクルに駆け寄るルーシイ。

「ちよつとシクル! あなたもしかしてその格好で会うの?」

「……………え? 格好つて……………変かな? 普段通りなんだけど……………」

首を傾げ、自身の服装を見るシクルにルーシイはため息をつき、カウンターにいたミラも苦笑を浮かべる。

「そうねえ……………流石にそれじゃあちよつとまずいかもねえ?」

「ええ……………ミラまで」

「デートなんでしょ!? デート! もつとお洒落しなきゃ!!」

ルーシイの言葉に一瞬目を見開くシクル。

「え……………デートって……………恋人とか好きな人同士がするあのお出かけのことだよね? 違うよ? アトスとはそんなんじゃないし……………向こうもその気はないよお」

ケラケラと笑い言うシクルに、ポカーンとするルーシイとハッピー。

ちなみにナツはルーシイがシクルにお洒落を勧めた辺りでミラに抑えられていた。

「それでも久しぶりに会うんでしょ? 髪型くらいは変えてもいいと思うわよ? ルーシイ、頼めるかしら」

ミラのその言葉にルーシィは「ラジャー！」と答え、シクルの後ろに回る。

「じゃあ、ちよつと大人しくしててねー」

「別にいいのになあ……」

ルーシィが髪をいじり始めても泫々と言った様子で納得のいかない様子。

それでも、数分でシクルの髪は普段とは変わり、三つ編みで、頭の上でお団子を結つたものになった。

「はい！ かんせー!!」

「じゃーん！ とシクルに鏡でその姿を見せる。

「おおー……さすがルーシィ……綺麗だね」

「わあ、髪型だけで印象すごく変わるねえ……」

「あい……」

最初は乗り気ではなかったシクルだが、いざ髪型が変わるとふつと笑みを浮かべ……

「ありがとう！ ルーシィ！」

と、言った。

そして、まだ少し残っていたココアを飲み干すと……

「じゃあそろそろ時間だから……行ってきます！」

と、ギルドを出て行った。

「いつてらっしやーい」

シクルが出ていくとやつと解放されるナツ。

「ぶはっ！　ンにすんだよミラ!!　シクルのやつ行っちゃまったじゃねエか!!」
「あらあら、いいじゃないの？　別にナツはシクルの彼氏じゃないでしょ？」

ミラのその言葉にうつと気まずい表情を浮かべるナツ。

「た、しかに……ちげえけど俺は……!」

グツと拳を握りアトスと会うシクルを想像する……

“シクルさん……僕……あなたが好きです……”

付き合ってくださいませんか……?”

“嬉しい……私も、アトスが好き……”

そう応え、頬を赤らめ顔が近づく2人……

「っ！　うあああああっ!!!　やっぱ納得いかねえええええええ!!!」

うおおおおお!!!　と叫び、ギルドを飛び出していったナツ……。

その姿が見えなくなると……ルージュはふとミラを見上げる。

「……策士だねえ」

「ウフフ、何のことかしら？」

普段と変わらない笑みを浮かべるミラを見てブルツと震えるルージュ……
ミラだけは敵に回したくない……そう思った瞬間であった。

ナツが叫び、ギルドを飛び出した頃……

シクルは待ち合わせのマグノリアの広場に位置する噴水前でアトスを待っていた。

「んー……ちよつと早かったかなあ？（それにしても……やっぱり少し後ろがすうすうする……）」

髪上げてるからかなあと、髪型を気にするシクル。

そこへ……

「おや、もう来ていたんですか……早いですね」

「アトス!!」

アトスが現れた……シクルはその声に振り返る。

振り返ったシクルを見てアトスは少し頬を赤らめる。

「……今日は、髪型……違うんですね」

「あ、うん……ルーシイにいじられたんだあ……似合わないよね？」

コテリと首を傾げ聞いてくるシクルに……

ふつと笑みを浮かべるアトス。

「いいえ……とてもお似合いです」

アトスの言葉に「そう？」と問うシクルに、「はい」と答えるアトス。

「では……行きましょうか？」

そつと、シクルの手を取るアトス。

「え……いい、行くって……どこに？」

戸惑いのシクルを振り返り、ふつと笑みを見せるアトス。

「秘密です、着いてからのお楽しみです」

「ええ!? ちよ……わ、待ってよ!」

クイツとシクルを引つ張り、隣に立たせ並んで歩く2人。

アトスとシクルの向かう先は……

次回! に、続きます。

55話 アトスの告白そして…

「わあ!! すごおい……本がいっぱい!!」

「喜んで頂けているようで良かったです」

シクルの手を引き、アトスがやって来たのはマグノリアの中では恐らく2番目に大きい図書館だった。

「凄いね! 私こんな大きな図書館がマグノリア図書館以外にあったなんて知らなかったよ!」

「ここはそれなりに穴場の図書館ですから……僕も、最近ここを知ったんです」

シクルさんは読書が好きですよ? 気に入っていただけかと思っただけなのですが

……」

少し照れた様子でそう話すアトスを見つめ……ふつと笑みを浮かべると目を細め

「ありがとね、アトス!」

と言った。

「い、いえ……／＼／＼」

シクルのその笑みに鼻を抑えるアトス。そんなアトスを不思議そうに見つめるシクル。

そして……鼻を抑えたのは他にも……

「つゝゝゝ!!! ンだありや……反則だろお?」

「しっ! 声大きいわよ、ナツ!」

図書館に取り付けられている複数の窓の内の一ヶ所の外から中を覗く人影……それは、シクルを追いギルドを飛び出したナツとミラの命令でナツを抑えるためについてきたルーシイだった。

「つか、今のをあいつにしたんだろ……くそお! 腹立つっ!」

「もう! だからってそんなに殺気立たないでよ! (シクルに気づかれるでしょうよ!)」

ルーシイはシクルに尾行していることを気づかれるのを恐れているが……

「……(何やってるんだろ……あの2人)」

既にバレています。

「どうか致しましたか……?」

「ん？ ううん！ 何でもない何でもない！ じゃあ、ちょっと色んなの見てみよつか」

あははと笑いながらアトスにそう言い、図書館の奥へと入っていくシクル。

奥へと入る前にもう一度ナツとルーシイのいる窓の方をすつと見やる。

そこではナツとルーシイがワタワタとじゃれ合うかのように少し騒いでいた。

その姿にクスツと笑みが溢れる。

……ズキツ

「……ん？」

笑みが溢れた瞬間、胸に違和感を覚えるシクル。だがそれはすぐに治まり……

「……気のせい、かな？」

気にしないことにしたシクル。

そして、少し先を歩くアトスを追い足音を立てぬよう、駆け出す。

「あ！ シクルが奥に行っちゃった!!」

「んなにイ!! おいルーシイ！ 俺達も行くぞ!!」

ルーシイの言葉に立ち上がり、図書館の中へと駆け込むナツ。

「あ！ ちょっと!! 待ってよナツ!!」

バレても知らないわよ!! と声を上げながらルーシイも、ナツを追い図書館へと入っ

ていった。

「んー……あ、これ解毒の本だ……（覚えておいた方がいいかな？ あんまりアレは使えないし……）」

いくつか解毒についての魔法（応用編）などの本を手取るシクル。

「何か気に入る本はありませんか？」

本棚の間からひよつこりと顔を出すアトス。

「うん！ いっぱいあるわ」

につこりと微笑むシクルを見て「それは良かった」と笑うアトス。

「この図書館、併設のカフェテリアもあるんですよ。そこで少し休憩しませんか？」

読書も兼ねて……と、アトスが提案するとパアツと笑顔が輝き、

「ええ、行きましょー！」

と答えたシクル。

カフェテリアにてー

「んー……結構複雑な魔法……（出来なくはなさそうだけど……）めんどくさそう……」

カフェテリアを飲みながら先程選んだ魔法書や応用編の記された本を読み進めるシクル

ル。

その姿を目の前で静かに見つめるアトス……彼は、真剣に読書をするシクルを見てフツと笑みを浮かべた。

「ん？　今、笑った？　アトス……」

「ああ、すいません……読書に夢中なあなたがあまりにも可愛くてつい……」

「か、可愛いって……もう、そーいうのは本当に可愛い子に言わなきゃ！」

私に言ってももつたないよーと、カラカラと笑い言うシクルに苦笑が浮かぶアトス。

シクルのその言葉は備考を続けているナツとルーシイの耳にも入った。

「……シクルの奴、ほんとにあんなこと言ってるのか？　シクルが可愛いなんてとうぜ……」

「あーはいはい、あんたの惚気はいいから……でも確かに、シクルってちよつと鈍感すぎよねえ……警戒心もないし」

あたし少し心配だわ……と、言うルーシイ。そんな彼女を少し呆れた目で、ちらりと横目に映しナツはシクルへと視線をやる。

静かに読書の時間が過ぎていくシクルとアトス……

「静かだね……すごく」

「そうですね」

ふつと笑みを浮かべ、シクルの言葉に返すアトスを見つめ、ふとシクルは違和感を覚える。

……何でだろう……読書してる時に静かなのは凄く良いんだけど……

……物足りない……

どうして……

「シクルさん……？」

「っ！ あ、アトス……なに？」

アトスに呼ばれ、はつと我に返るシクル。

「ぼーっとしてましたよ？ どこか体調でも……」

悪いですか？ と問いてくるアトスに首を振り否定するシクル。

「そんな事ないよ。大丈夫……何でもない」

クスツと笑みを浮かべるシクルに「そうですね……」と、微笑み頷くアトス。

「そう言えば、アトス……今日何か大事な話があるんじゃないのかなかったの?」

「あ……え、ええ……そう、ですわ……」

シクルからの突然のその言葉にフツと頬を赤らめ、シクルから目を離すアトス。

「どうかした……?」

コテンと首を傾げ、アトスを見つめるシクル。アトスは「い、いえ……」とだけ答え暫く無言となり……

「……ふう……シクルさん、大事なお話が……あるのですが……あの……」

「なに?」

「……あの、……ここでは……少し話しにくいので……場所を……移してもよろしいですか?」

「ん? うん……いいけど……(ここじゃ話せないことって……なんだろ)」

頭の中でははてなマークが徐々に増えていくシクルだが、それを感じさせないような様子でアトスに答えるシクル。

「ありがとうございます……では、そろそろ行きましようか」

そう言い、ガタツと立ち上がるアトス。

「あ、うん!」

アトスに続き席を立ったシクルは、図書館を出る前に読んでいた本を元のところへと戻していく。

借りてもいいのだが、シクル曰く、また戻しに来るのがめんどくさい……という事のようにだ。

「お待たせ！　じゃあ、行こっか？　アトス」

入口前で待っていたアトスに、ごめんねーと謝りながら駆け寄るシクル。

「大丈夫ですよ。それでは……案内しますね」

につこりと微笑み、シクルの手を取り歩き出すアトス。

図書館を去る2人……その背後でコソコソと隠れているようで隠れていないナツとルーシイ。

「おい！　あいつどこいく気なんだよ!？」

「あたしが知るわけないでしょ!？　でもこの先は確か……」

ルーシイの脳裏に浮かぶのはある場所……

「んー……とにかく、追いかけるわよナツ！」

「おうっ!!」

「……（あれで尾行してるつもりなのかな……）バレバレ……フフツ」

尾行しているはずなのにそれが全くできていない似た者同士のナツとルーシーをチラリと見つめ、笑みが再び溢れるシクル。その時……

ズキツ……と、再び胸に痛みが走る。

「つ……（なに？ 胸が……また？）」

どうして……？ と少し考えながら、前を歩くアトスに遅れないよう、少し足取りの重くなっていたそれを早めた。

「わあ!! すぎ……きれえ!!」

アトスに連れられ、やって来たのは大きく、広く続く、花畑だった。

シクルの目の前には、赤、青、黄と色とりどりの花々が咲きほこっている。

「すごい……綺麗だね、アトス!!」

「そうですね……喜んで頂けているようで良かったです!」

頬を赤らめ、花々を見つめるシクルにふつと微笑み、愛おしそうに見つめるアトス。

「ありがとう、アトス!」

花々に囲まれ、アトスを振り返るシクル……その姿、光景にアトスは目を奪われる

……

そして……

「そういえば……アトス、話つてな、に……」

ギユツ……

シクルの問いかけが終わる前に……ゆつくりと、アトスがシクルを抱きしめた。

その光景を見ていた彼、ナツは……

「ンがあああああっ!!!」

……暴れていた。

「やめなさいっての!! 花畑が荒れるでしょ!？」

必死にナツを抑えるルーシィ……。

「……アト、ス？」

「……すいません……シクルさん、僕……僕は……」

ぎゅうつとシクルを抱きしめるアトス。シクルはそんなアトスに困惑気味……。

「……初めてあなたを見た時から……僕は、あなたが好きでした」

「……………え」

目を見開き、アトスを見つめるシクル。

「すいません……………どうしても、今のあなたが美しすぎて……………思わず抱きしめてしまいました……………ですが、僕の想いは本物です……………シクルさん……………」

「アト、ス……………」

「……………僕と、付き合って頂けませんか……………?」

その場にアトスの告白が静かに響いた……………その時……………

「うおおおおおおお!!!
やっぱ許せねええええええええ!!!」

「ちよ!!
ばっ、ナツっ!!!」

「!?!?」

茂みの影からルーシイに抑えられていたナツがそのルーシイの腕を振り払い、シクルとアトスの間に突っ走った。そして、ガバツ！ とシクルをアトスの腕から引き剥がす。

「な、あなたは……！」

「ナ、ナツ……！」

「シクルは渡さねえ！俺……俺だつて……」

シクルが好きなんだっ!! 誰にも譲らねえぞこのやろおっ!!!」

「えっ……」

ナツの口から出たその言葉に……シクルは目を見開き、アトスからの告白よりも驚愕の表情を浮かべた。

「あなたは……火竜の……」

ナツとアトスの間で静かな睨み合いが続く……そんな中で、ナツとアトスを交互に見やり、混乱が収まらないシクル。

え……え？ アトスが……私を、好きで……

ナツも？ え……冗談じゃなく？ ……私……

どうしたら………

ギユツと目を瞑りナツとアトスの言葉が脳裏でリピートされる……

そして……

………シクル！

「つ……！」

閉じた瞼の裏に浮かんだその顔……

………私………

「……………ナツ……………離して」

「え……………」

ナツとアトスの間で睨み合いが続いていた中、落ち着いた声音のシクルの声はナツに届いた。

その言葉に啞然とし、ナツはシクルを離し……………シクルはアトスの前へと歩み寄る。

「ちよ……………まさか、シクル」

その光景を離れたところから見ていたルーシイも焦り、困惑の表情が浮かぶ。

そして……………

「……………シクルさん」

見つめ合うシクルとアトス……………

すうっとシクルはゆっくりと深呼吸をし……………

「……………アトス……………ごめん」

「っ！」

シクルは悲しい笑みを浮かべ……

「私ね……妖精の尻尾に行くまで……」

友達とか……仲間とか、家族とか……信じてなかったの……」

「シク、ル……」

「でも……妖精の尻尾に入って、皆と過ごして……色んなこと、教わった……与えてくれた……それでも、私はまだ……好きとか恋とか……よく、分からないの……」

そこで一度言葉を切り、目を伏せるシクル。

そして……

「だから……好きってどういうものかは分からない……でも、……アトスの事をそういう目で……見れないんだ……ごめんなさい

私にとって……あなたは、信頼のおける友人なの」

だから……あなたとは、付き合えませんか

そう、はつきりと断ったシクル……

その言葉を聞き、アトスはふっと目を閉じ……

「そうですか……分かりました……」

と、いいシクルに背を向ける……。

「アトス……」

シクルがその背を呼び止める……が

「……また、会いましょうシクルさん」

にっこりとと笑みをシクルに見せると、ナツに目をやり……

「……いつか、必ず」

と、だけ呟くと……アトスは去っていった。

「アトス……」

……ごめんね……アトス……

目を伏せ、俯くシクル……そこに……

「シクル……」

と、ナツの声が聞こえ……

「俺……」

口ごもるナツ……ふっと目を開け、ナツを振り返るシクル……そして、少しアタフタとしているナツを見て……

「……フフツ」

笑った。

「ナツ……さっきの言葉……」

「あ？ さっき……さっき？」

さっきを思い返すナツ……そして……

「あつ！ あ、いあ、あれは……その！」

勢いで告白していたことに気づくナツ。

だが、今のシクルの言葉を聞いた限りだと……

(俺フラれるじゃねえかあー!!!)

顔色が徐々に青くなるナツ……

「……あのね、ナツ……」

「……あい」

「……少し、待ってほしいんだ」

「……え」

シクルのその言葉に目を見開くナツ……。

「まだ、恋とか分からないけど……でも、ナツの近くにいたい気持ちはあるんだ……」

だから、少し待って？ ……必ず、答えを出すから……その時は、私の想いを、聞いて

て?。」

少し頬を赤らめ、上目遣いでそう言うシクルに……ゴクツと喉を鳴らすナツ。

「……おう、分かった」

「……ありがとう」

その場には暫く、甘い空間が流れ……

「あーああ……やっぱりこうなるのね……」

やだやだ、妬けちやうわと呟きナツとシクルを置いて去るルーシイ……

そんな事気づきもせず、ナツとシクルは互いを見つめ……小さくふつと笑い合った。

56話 氷の魔法 瞬間氷結 《アブソリュート・ゼロ》

アトスとナツからの告白から一夜明け……

現在時刻お昼すぎ……普段ならば面倒くさがつても結局はギルドに顔を見せるシクルなのだが……

「……来ねえ」

「来ないねえ……」

「来ないわねえ……」

シクルがギルドに現れない……。

「んあー!! なんで来ねえんだよお!?!」

がぁー! と天上に向け、火を吹き叫ぶナツ。

「んー、シクルはあ……」

苦笑を浮かべ、ナツに説明しようとするルージュ……だが、

「きつとあれじゃない？ 昨日のでやっぱ嫌になっちゃったんじゃない？」

ルージュの言葉を遮り、ハッピーの声がナツに届く。

「んなにイ!!」

ハッピーの言葉にぐもお！ と顎が外れるくらい口をあけ、呆然とする。

「ちよつとハッピー？ ダメよ、そんな事言っちゃあ……」

「そんなことになったらナツが廃人になっちゃうわよ」と、冗談なのだろうがどこか冗談に聞こえないルーシイの言葉。

「そうだよハッピー……それにシクルもナツを嫌いになった訳では無いと思うよ？」

……多分」

ルージュのフォローに聞こえないフォロー。

「ルージュ、それフォローになってないよ……（それにしてもシクル……本当にどうしたのかしら……）……そういえば」

ギルドに姿を見せないシクルの事を考える片隅でふと、ギルドがあまり騒がしくないことに気づき……辺りを見渡す。

「……あれ？（グレイが……いない？）」

ギルドでナツがハッピーの言葉にここ一番という程に沈んでいた頃……

その元の原因、シクルは……

「んん……ギルドに行かないとなあ……でも行ったらナツに会うんだよね……んんんー
！」

自宅の玄関前でぶつぶつと呟き、扉の外に出れていなかった。

シクルの脳裏に蘇るは……

“俺だつてシクルが好きなんだっ!!”

「うううううっ／＼／＼／＼!!（あんな大声で言わなかったって……今思うと恥ずかし
がる）」

あの時の言葉とナツの顔がずっと繰り返し返されていた。

「はあ……昨日はまだそこまで気にしてなかったのに……」

昨日はまだそこまで意識をしていなかったシクル。だが、時間が経つにつれ徐々にそ
の事実を受け入れ始めた。

すると、ナツに会うのが恥ずかしく感じ始め、ギルドに未だ顔を出せずにいた。

「んー……（そろそろ行かないと……皆も気にしてるかもしれないし……）で、でもなあ……！」

頭を抱え、んー！ とシクルが唸っていると……

「……何やってんだ？」

「え……？」

よく知った声が目の前から聞こえ、顔を上げると……

「…… 그레이？」

「……おう」

普段通り、上半身裸の 그레이が頬を掻きながら目の前に気まずそうに立っていた。

「はい、コーヒーで良かった？」

「おう」

그레이をリビングへと案内し、飲み物を目の前に置くと、シクルも 그레이の反対側に腰掛ける。

そして一口、紅茶を飲むと目の前の 그레이を見据える。

「で？何でここにいたの……と言うか何でノックもなしに入ってきたのよ」

「俺、何度もノックしたぞ。声も掛けたけど……お前出てこなくてよ……気になって開けたら、鍵閉まってなかったから……」

肩を落とし、シクルを見れずにそう告げるグレイ。

「ふうん……そっか。気づかなくてごめんね？ ちょっと、考え事してたからさ」

苦笑を浮かべ、謝るシクル。そして、もう一度紅茶をコクツと飲み干すと、グレイを見つめ、本題に入る。

「で？ 〆〆〆まで来たってことは何か用事があつたんだよね？」

シクルの言葉に「ああ」と頷くグレイ。

「実は……少し、シクルに頼みがあつてよ」

「頼み？」

「おう……シクル……俺に、修行をつけて欲しい」

「……はい？」

グレイの言葉に目を点にし、啞然とするシクル。

数分後……

「つまり……あのニルヴァーナの時、グレイは自分の力不足を痛感したと？」

「正確にはB・O・Fの時からだ。あの時も俺はビッグスローにやられたからな」

グレイの話の聞き、んー、と腕を組むシクル。

「修行つて……私、月と光の魔法は使うけど氷は使わないんだよ？ 同じ氷の造形魔導士のリオンじゃダメなの？」

コテン、と首を傾げシクルが問いかけると……

「じょーだんじゃねえ！ 誰があんなやつの手なんかかりつかよ！ なあ頼む！ 何かねえか!? 俺に使える氷の魔法！ 修行を！」

「そんな事言われたって……」

困った表情を浮かべ、考えるシクル。

「修行ねえ？ えー……私、氷の魔法なんて使わな……ああ、ちよつと待つて？」

シクルはそこで一度言葉を切ると、立ち上がりリビングから飛び出していく。

そして、ガサゴソとグレイの耳に何かを漁る音が聴こえる。

「……シ、シクル？」

「んー……確か書庫にあの魔法があつたと思うんだけどなあ……」

グレイの言葉には答えず、何かを必死に探すシクル……そして……

「あつた!!!」

声を荒らげ、リビングに1冊の古びた本を持ち戻ってきたシクル。

「これこれ！ 多分これならグレイも使えると思うんだけど……」

そう言い、グレイの目の前にその本……魔法書を差し出すシクル。

「……これは？」

魔法書を受け取り、首を傾げ、シクルに問いかけるグレイ。

「それはね、氷の造形魔法の事を記した大昔の本なの。数年前に、評議院からの依頼をクリアした時の報酬で貰ったんだけど……」

使い道なくて書庫の奥の奥にしまっっちゃってたから見つけるのに苦労したよ……」

苦笑を浮かべ、そう告げたシクルはグレイの目の前で魔法書を開いていく。

「これはね、氷の造形魔法 《瞬間氷結》《アブソリュート・ゼロ》 を記した本なの」
「……アブソ……リユート、ゼロ？」

グレイのオウム返しをしたその言葉に頷いて見せるシクル。

「そう、瞬間氷結……これは、グレイのよく知る魔法、 《絶対氷結》《アイスドシエル》 の劣化版なの」

「アイスドシエル!？」

目を見開き、シクルの言葉に驚くグレイ。

「でもあの魔法は……使ったものの命を」

「だーから……これはその劣化版だって今言ったばかりでしょ？」

人の話は最後まで聞いて！　と言ったシクルの言葉に立ち上がりかけた腰を落とすグレイ。

「……その、アブソリュート・ゼロってのは……何なんだ？」

「さつきも言った通り、これは絶対氷結……悪魔の島でグレイが使おうとした、あの《アイストシエル》の劣化版だよ」

そこで一度言葉を切ると、人差し指を立て言葉を続ける。

「この魔法は1時間、かけたものを氷結に閉じ込め相手の動きを封じる魔法よ

但し、これにはデメリットもあってね？　魔法を発動すると大量の魔力がなくなってしまうために術者も1時間、動けなくなっちゃうの」

「へえ……相手を1時間……」

シクルの説明を聞き、魔法書を手に取り考えるグレイ。そして……

「シクル……この本、借りてもいいか？」

と、問いかけるとシクルはふつと笑みを浮かべ頷く。

「もちろん、むしろ私はその魔法使わないから……貰っちゃっても構わないよ」

シクルのその言葉を聞くとペア！　と笑顔を浮かべるグレイ。

「マジか！　サンキュー、シクル!!」

早速修行してくるぜ！ と声を上げ、帰り支度をするグレイ。そして、最後に……

「お、そうだ……あのよシクル」

「なに？」

先程まで笑顔だったグレイはどこか真剣味を帯びた表情でシクルを見つめる。

「今日まだギルド行ってねえだろ？」

シクル……お前とナツに何があったのかは知らねえけどよ……そろそろ顔だしてやんねえと、みんな心配すつぞ？

……それと、ナツの奴がシクルに会えないってうるせえからよ」

「っ！……ありがと、グレイ」

グレイの言葉に一瞬目を見張り、すぐに笑みを浮かべるシクル。

「じゃあ、私も行こうかな……ルージユも先に行ってるだろうし……」

と、呟きシクルも腰を上げグレイと共に家を出ると、グレイは一人修行に……シクルはギルドへと足を進めた。

この時何故か……シクルの中に恥ずかしさはなかった。

シクルがギルドに向かっている頃……ギルドでは……

「うがあああああつ!!! んで来ねえんだアああ!!」

ナツが限界を迎えていた……。

「ちよ! うるっさいナツ!!!」

「あらあら……ナツつたら、そんなに会いたいなら会いに行けばいいのに」

クスクスと笑いそう告げるミラ。

「それで振られたらこええ!!」

ガクガクと頭を抱え震えるナツ……

「ナツってこんなキャラだっけ?」

「……恋がナツを変えたのかもねえ」

「あんたたちそんな呑気にしてないであのナツの慰めに手を貸しなさいよ!!」

ハッピーとルージュに声を荒らげ、ぐてえとなっているナツを支えるルーシィ。

そこに……

「……何やってんの?」

「「「っ!!!」」」

その声がギルドに響いた時……一同が一斉にギルドの入口に視線を向ける。

そこには、にっこりと微笑むシクルの姿……

「シ……シクルっ!!!」

ガタツ！ と立ち上がり、飛びかかるナツ……

にっこりと微笑みナツを迎えるシクル……

が、ナツが目の前に来た瞬間スツと体を横へと避ける。

「なんで避けたよおお!? ギャぴっ!!」

勢いあまり、ナツは床をスッテーン！ と転がった。

「いつてて……」

床に強打した頭をさすりながら体を起こすナツ。そんな彼をぼおつと見つめシクルは、ふつと笑みを浮かべると座り込むナツの前にしやがむ。

「……ンだよ」

「ナツ……おはよっ！」

シクルのその言葉に目を見開くナツ。

そして、ニカツと笑みを浮かべるとガバツとシクルの肩に腕を回す。

「おせーよ!! もう昼過ぎだっつーの！」

「ごめんごめんお詫びに今日は一緒に仕事行つてあげるから！ 許して？」

「っ！ おう!!」 じゃれ合うナツとシクルを見つめるルーシイとハッピー、そしてルー

ジュは……

「……あれ、結構良い感じじゃない？」

「あい……でえきてるう！ だね！」

「でえきてるうう!! だよお！（シクル……少しはスッキリしたみたいだねえ）」

ニヤニヤと笑っていた。

1人と2匹は目の前の男女がくつつくのも遅くはない……と、考え始めていた。

「さっ！ じゃあ、皆で仕事行こ！」

「あ？ みんな、で？」

シクルの言葉に首を傾げるナツ。

「うん、そーだよ？」

にっこりと微笑み告げるシクルのその言葉に……

「つーー！（俺は2人で生きてえんだあつ!!）」

昨日の事もありその言葉は胸の奥にしまうも……ナツは、がっくりと落ち込んでしまった。

「……あれはまだだと思ふなあ」

「……あい」

「……そうね」

ナツとシクルを見て、苦笑を浮かべる1人と2匹であった。

57話 雷竜との再会

妖精の尻尾 ギルドにてー

今日も今日とて、騒ぎ賑わっているギルド……その中でも一際騒いでいるナツたちのところへと向かい、走ってくる女の影……

「みんなー!!」

ルーシイの姿があった。

「んア?」

「ルーシイ?」

「どーした?」

ナツたちの傍に駆け寄ってくると乱れた息を整え……

「あのねっ! さっき福引でリゾートのチケット当たったの!!
2泊3日のチケットよ
!」

みんなで行きましょう！ と笑顔で言ったルーシイにナツたちも興奮し、目を輝かせる。

「リゾートかあ！ いーなそれ！」

「あい！ 最近忙しかったもんね！」

「まあ、いい気分転換にはなるかもな」

「何人まで行けるんですか？」

ルーシイの持つチケットを見て、ウエンデイが問いかけると、

「6人よ！」

と、答えるルーシイ。

「最強チームのみんなとウエンデイも！ 一緒に行きましょう！」

「ええ!? わ、私もですか？」

ルーシイの言葉に驚くウエンデイ。

「い、いいのでしょうか……」

「良いではないか、1人での初仕事、成功祝いも含めてな」

ふつと、ウエンデイの肩を持ち微笑み言うエルザ。

「そう言えばウエンデイは一昨日まで1人で仕事行ってたんだっけ？」

首を傾げ問うルーシイ。

「1人じゃないわ、私もいつてたわよ」

「はい！ 妖精の尻尾に来て初めてシャルルと2人での仕事だったんですが、ちゃんと出来ましたよ！」

「ウエンデイとシャルルはしつかりしてるもんねえ、安心できるよお」

ホットミルクを飲みながら、のほほんとナツや、ルーシイたちの会話を聞いているルージュ。

「……なあ、そーいやシクルは？」

ふと、この場にはいないシクルのことが気になったナツ。

「そーいや見てねえな」

「また家で籠ってるの？」

ナツのその言葉でシクルがまだ来ていないことに気づいたグレイとハッピー……ルージュに視線をやり、問いかける。

と、ルージュはほんの少し不安そうな表情を浮かべる。

「シクルは……今朝評議院に呼ばれて……」

「え……それって」

目を見開くルーシィ……その後ろではあとため息をつくグレイ。

「またか……」

「俺なんも聞いてねえぞ?!」

「朝突然来たから……いう暇がなかったんだよ」

ナツの言葉に尻尾を垂らしながら答えるルージユを慰めようとその頭を撫でるハツピー。

「何なんですか? 評議院が……シクルさんはどこへ?」

「シクルは……」

唯一何も知らないウエンディとシャルルが首を傾げるとウエンディの肩に手を置いていたエルザが答えた。

「ええ!? そんな、危ない仕事を評議院から頼まれて1人で行ってるんですか!」

「大丈夫なの?」

不安そうに声を上げるウエンディと、素っ気なくも気にしているシャルル。

「大丈夫さ、あいつはここの最強魔導士だ……問題ねえよ」

「うむ、シクルがいらないのは残念だが……ルーシィからのせつかくの誘いなのだ。リゾートを満喫しようではないか」

グレイとエルザの言葉にナツたちは笑顔を浮かべ、頷いた。

「では、準備が出来次第、出発しよう！」

「「「「「おー!!」」」」」」

ナツたちが旅行の為、準備を進めていた頃……

評議院からの依頼を受けたシクルは、ある街に位置する、深い森の中を歩いていた。

「はぁー……こんな森の奥深くで魔物退治って……足場悪すぎるっつての」

グチグチと文句を言いながらも歩を進めるシクル。

その足元はぬかるんでおり、急斜面がさらにシクルの足元を不安定にしていた。

ふと……ピクツと何かに反応し、シクルはその足を止めた。

そして、はぁ……と長いため息をつく。

「ここってリゾート地もあるから……早めの対策をお願いされた方がいいけど……」

そう呟きながら、十六夜刀を換装する。

シクルが刀を手にした瞬間……ザアアツ!! と音を立て、上空から舞い降りる多くの

影……それは、シクルの目の前へと降り立ち……

「……はぁ、ほんと……評議院の奴らは私を殺したいのか……？」

シクルは苦笑を浮かべ、毒を吐く。

シクルの目の前に降り立った影の正体……それは、S級モンスターに指定されている、*「ワイバーン」*だ。

しかも数は目視だけでも800はいた……

その数に再び深いため息をつくシクルは、戦闘態勢に入る。

そして、シクルの殺気に気づくと、シクルよりも先にワイバーンが動き出した。

「んもおー……何でこんないの……こんな集団行動するヤツらだった？ てか……情報と違いすぎるってーのツ!!!」

何が500匹だばかぁー!!! と、怒声を叫びながらシクルは襲い来るワイバーンを斬り裂いていく。

「絶対……報酬上乘せさせてやるんだからっ！」

伍ノ太刀 鳴雷月!!!

刀から発した雷で数十のワイバーンの動きを止めるとその瞬間に、動きの止まったワイバーンを斬り捨てていく。

それを幾度も繰り返し……800近くいたワイバーンは100程に数を減らしてい

た……。

「はあ……はあ……もお！ほんつと……数だけ多いんだから……」

傷はないが疲労が溜まっていくシクル……。

そして、最後の100匹を倒そうと……足を踏み出した時——

グキッ！

「ふおっ!？」

ぬかるみに足を取られ、転んでしまう。

『ガアアアアツ!!』

そこを狙い、ワイバーンが一斉にシクルに襲いかかる。

はっと、シクルは目の前を見据え……十六夜刀をしまうと両手に魔力を込め……

「滅竜奥義 月華炎乱舞!!」

振り切った両手から放たれたその炎はワイバーンを残らず襲い、消した……。

炎が晴れ、最後に残ったのは息を荒らげるシクル……。

「つ……はあ！あ、危なかった……」

まさかあそこで転けるなんて……と、詰めた息を吐き出し肩の力を抜く。

そして、呼吸も整い、帰りますか……と、立ち上がろうとした時だ……

ズキツ!!

「つっ……っ!!」

右足に鋭い痛みが走った。思わずあげた腰を下ろし、右足を抑える。そして、靴を脱ぎ右足の具合を見てみると……

「うっわ……青」

見事に青く腫れ上がり、熱をもっていた。

所謂、捻挫を起こしてしまったのだ。

痛みで立ち上がれず、落ち込んでいた気持ちさがさらに沈むシクル。

「うっそでしょお……絶対あの転んだ時じゃない……はあ」

捻挫も歌魔法の、治療で治すことは出来るのだが……

「……魔法使うのめんどくさ……」

足以外はどこも怪我をしていない事で、シクルに歌魔法を使う意欲がないようだ……。

シクルは近くの大木に寄りかかり、空を見上げる。

今日の空模様は生憎の曇りで太陽の光はなかった。

「はあ……失敗したなあ、まさかあそこで転ぶなんて……」

ドジだなあと、眩き下を向く。そして、暫く目を瞑り、休んでいると……

ぽつり、と水滴が頭に落ちてくる。

「え……」

ふっと、シクルが顔を上げると……パラパラと雨が降り始めていた。

ほんの少し目を見張り、降り出した雨を見つめるシクル。

「……雨……（そういえば……あの時も……）」

雨が降ってたなあ……

“ シクル!! 早く逃げろっ! ”

“ で、でも……ーは!?”

“ 僕のことはいいから!! 早く! シクルだけでもっ!”

“ いや……嫌だよ!! 1人なんて……ーも一緒に!!”

“ いたぞ! 脱走者だあ!”

“ やばっ……早く! 行け、シクルっ!!”

ドンツーーー

“ つーーー!! いや……ー!!……”

シロオオオオオツ!!!

「つーーー!!! はっ……はあ……はあ……

……夢、か……」

シクルの脳裏に浮かんだのはまだ幼き頃の記憶……追っ手から自分を逃がすために、笑顔で囿になった彼……

「……シロ…… (あの後……シロは現れなかった……シロ……)」

……今、あなたはどこに……

震える瞳から次第に涙が溢れ始める……

シクルは膝を抱え、嗚咽を堪える。

「つ……………う……………ダメ、だなあ……………（ここが……………あまりにも、似ているから……………）」

思い出してしまふ……

溢れる涙は止まらず、堪えていた嗚咽が漏れそうになる……………その時……

ザツ……

「……………シクル？」

「つ……………ええ？」

自身を呼ぶその声……………暫く聞いていない、よく知ったその声に、シクルはバツと顔を上げた。

その目に映ったのは、予想と違わず……金の髪に背にはガウンのマントを羽織った大柄な男……

暫く前にギルドを破門された、マカロフの実孫……

「……え……ラク、サ……ス？」

“ラクサス・ドレアー” その人が、目の前に立っていた。

「え……何でここに、いるの？ ……ラクサス」

「俺がここに居るのはたまたまだ……」

少し視線を泳がせそう告げるラクサス……そんな彼を見て、シクルはふつと笑みを浮かべる。その表情に涙はなかった。

「もしかして……迷ったの？」

ニシシと笑うシクル。そんなシクルにプチンとキレるラクサス……拳を握り、その頭に振り下ろす。

「うるせえ、このチビ」

ガンッ!

「いつつつたああ!!」

暴力反対だア! と、叫ぶシクル。だが、ラクサスに気にした様子はない。

「ところでお前、いつからそこにいんだよ?」

「ふえ?」

ラクサスの言葉に、コテンと首を傾げるシクル。

意味が分からない、と言った様子のシクルにはあとため息をつくラクサス。

「だから……いつからそこにいりゃあ、そんなにずぶ濡れになるんだってきーてんだよ」

ラクサスのその言葉にシクルはやつと自身の体を見下ろし……

「うっわあ!! すっごい濡れてたっ!」

と、叫んだ。

「気づいてなかったのか……アホだな」

ふつと小馬鹿にした笑みを見せるラクサスに頬を膨らませ、怒るシクル。

「アホって言うな!」

気づかなかったんだからしょうがないでしょー! と、声を上げ、雨宿りのできそう

な所を探そう……と、立ち上がった時……

忘れていた、右足の痛みが再び走る。

「つつー！」

「おいっー！」

ガクツと右足を抑え、崩れるシクルを咄嗟に支えるラクサス。そして、やっとシクルが足に怪我を負っていることに気づいたラクサス……

彼は、怪訝そうな表情を浮かべる。

「シクル、お前……足怪我したのか？」

「あー……ちよつと、捻っちゃって」

苦笑を浮かべ、先程起きたことを説明するシクル。

「はあ……治療の魔法はどうしたんだよてめえ」

呆れた様子で問いかけるラクサス。

「めんどいからやってない」

真顔でラクサスの質問に返すシクルにさらに呆れたため息を吐くラクサス。

「こんな時まで面倒くさがるなアホ……」

「またアホって言ったー!! 私はアホじゃないってば……て、きゃあ!」

うがー! と、ラクサスに吠えていると突然、ラクサスがシクルの肩と膝裏に手を添えた。

そして、そのままシクルを横抱きに抱える。

「な、ななな……何すんの!」

おーろーしーてー!! と、抗議するシクル。

「うるせえ、黙つとけアホ。そんなんじや歩けねえだろ……だからってここにいるも冷えるだけだからな……場所移すぞ」

少し真剣な眼差しのラクサスを見上げ、シクルはふっと抗議の声を止め……はあ、とため息をひとつ吐き出すとラクサスに体を預けた。

抗議を止めたシクルにふっと、満足そうな笑みを浮かべるとラクサスは雨宿りできそうなのを探し、歩き出す。

その際、シクルに雨が直接当たらぬようマントをシクルにかけた。

シクルとラクサスが暫く久りの再会を果たしていた頃……リゾート地の、ホテルにて
……

「リゾートだあ!!」

「海だア!!」

「ご馳走だア!!」

「遊ぶぞお!!」

「思い出作るわよお!!」

うおおおー!! と、声を上げるナツ、ハッピー、グレイ、エルザ、ルーシィ。
だが、その背後から……

「でも皆さん? お外は生憎の雨ですけどね」

と、ウエンデイの苦笑を浮かべ、告げたその一言に……

ガーン! と固まる一同。

「……馬鹿ね」

「ハイ！……」

呆れた様子のシャルルと、はつと雨模様の外の景色を見渡すルージュ。

「どうかしたの？ ルージュ」

辺りを見渡すルージュに声をかけるウエンデイだが、ルージュは首を横に振り、「何でもないよお」と、答えた。

ウエンデイはあまり深く問いかけることはなく、「そつか」と笑みを浮かべると……

「雨が止むまでホテル内を探検するのはどうでしょうか？」

と、ナツたちに提案した。その案に、シャルルも乗る。

「そうね、ここにいろんな施設が完備されているみたいし……退屈はしないと思うわよ」

「おっしやー!! じゃあ早速行ってみようぜ！」

「あいー！」

先ほどの落ち込みはどこへやら……ナツとハッピーは先にホテル内を駆け回り始める。

「おい、待てクソ炎!!」

「ちよ、ナツ!? ハッピーも！ 待って!!」

「全く……世話の焼けるやつだ」

グレイと、ルーシイ、エルザもその後を追いかける。

「私たちも行こう！」

「そうね、あのメンバーだけじゃ何しでかすか心配なものね」

ため息をつき、そう言ったシャルルに頷くウエンデイ。

2人は同時に駆け出し、エルザたちを追う。

そして最後に……

「オイラ達も行こう！ ルージユ！」

「あ、あい！（……この島、シクルの受けた依頼と同じ場所……）」

どこかでシクルに会えるかなあ……

ナツたちを追いながら、心の中でシクルの事を考えていたルージユ……

シクルと合流するのか……そして、

ラクサスと再会したシクル……

続きのお話は次回へと、続きます

58話 一人で抱えるなよ？

ラクサスに抱えられ、雨粒を極力避けながら、辿り着いたのは小さいながらもラクサスも余裕で入れる大きさの小さな洞穴だった。

ラクサスはシクルを足に負担のかからぬよう、ゆっくりと地面に座らせると薪木を早く集め、火をつけた。

「寒くねえか？」

「うん、大丈夫……ありがとう」

ふんわりと微笑み、お礼を言うシクルにふつと笑みを浮かべ、「そうか」と満足気のラクサス。

少しの間、会話をせず、沈黙が続いていたがふと、シクルは目の前に座るラクサスを見つめ問いかける。

「……ねえ、ラクサスは今……何、してるの？」

「あ？ 俺は……まあ、あてのない旅をしてるってところだな……」

多くは語ろうとしないラクサスに「そっか……」とだけ、返すシクル。

「……そういうお前は、あんなどころで何してたんだよ？」

火を炊きながら、シクルを横目で見やい、問いかけるラクサス。

「私？ 私は……評議院からの依頼で大量発生したワイバーンの退治に……」

「ほお？ それでその途中に転けて怪我をしたと……は、とろいな」

「う、うるさいなあ！ 足場が悪かったんですう！」

クククと笑うラクサスに頬を赤らめ、怒るシクル。

「……で？」

「え……？」

ラクサスを見上げたその視界に入ったその表情は何かを探る瞳をしていた。

「どうした……お前……」

「どうしたって……なに、が？」

「……なんか、あったか？ いつもなら俺の気配くらい簡単に気づくだろう？」

「っ……」

ラクサスの言葉に目をほんの僅かに見開くシクル。そして、暫くラクサスと目を合わせる不意に、はあとため息をつき……

「何でもないよ……ただ、なんだか雨の日は調子でなくて」

膝を抱え、小さく笑みを浮かべ、告げた。

ラクサスを見つめるシクルの瞳は何かに怯え、震えている……が、これ以上は何も聞くな、とラクサスに訴えていた……。

「……はあ、そうか……」

ラクサスはそれだけ眩き、深くは聞かなかった……。

その一言を最後に会話が完全に途絶える……その場には焚き火の燃える音と雨音のみが響いていた……。

場所を変え、ナツたちの方では……

「いあー！ 探検楽しかったなあ!!」

ルームに戻りバフツ！ とベッドに飛び込むナツ。

「あのおっきいカジノはすごかったね！」

ナツの隣に転がり、ニコニコと笑い言うハッピー。

「クツソー、俺なんかカジノで大損しちゃったぞ」

ズーンと、効果音が聞こえるほど肩を落とし沈むグレイ。

「まあまあ……それにしても、やっぱりエルザは安定の負け無しのねえ」

沈むグレイを宥めながら、30勝したエルザを苦笑を浮かべた表情で見つめるルーシィ。

「ふん、当然だ!」

キラんと輝くエルザの瞳……その様子に一同は気難しい反応で、から笑いしか出せず……

「それにしても、雨止みませんね……」

「そうね……」

窓の外を眺め、ウエンディとシャルルが眩き、ナツたちも窓の外へと視線をやる。

「……雨」

「ルージユ? どうかしたの?」

様子のおかしいルージユに気づき、ルーシィがそつと声をかける。

ルージユはふつと顔を俯き……

「何でもないよお……ただ、雨の日は、シクルの……笑顔が見れないから……悲しいなあって」

と、眩いた。

その言葉に、首を傾げるルーシイや、ウエンデイ、シャルル……そして

「あー……」

「……そうだな」

何か事情の知っている様子のナツとグレイ、ハッピーとエルザも知っているようで顔を伏せる。

「シクルさんの笑顔が見れないって……」

「どういう事よ？」

ウエンデイとシャルルが首を傾げ、ナツたちに問いかける。ルーシイもその見つめる瞳で説明を訴えかけていた。

「そういえばルーシイたちは知らないんだな……」

「まあ、シクルも好き好んで話そうとはしねえだろうよ……」

「ルーシイたちは知らんだろうが……昔のシクルは全く笑わなかった……否、感情が欠落していた……と言った方がいいか」

エルザの語ったその言葉に、ルーシイたちは目を見張る。

「ギルドに着くまで、何をしてたのか……何があつたのかはオイラたちも知らないんだ

……」

「だが、昔のシクルは確かに……感情つつうのがなかったなあ……」

天上を見上げ、呟くグレイの脳裏に思い浮かぶのは暗い暗い瞳でギルドの端っこに座る幼き頃のシクル……そして、誰の手も取らなかつたあの頃……

「唯一、ナツだけがシクルの近くにいることが出来た……そして、ナツと触れ合ううちにシクルは感情を取り戻し……私たちとも交流を深め……今のシクルになった」

ナツを見つめ、ルーシイたちにそう語るエルザ。

「ギルドに入る前のシクルさん……」

「メスネコは何も知らないの？」

シャルルからの投げかけにルージユはふつとシャルルに顔を向け、首を振る。

「知らないよお……あたしがシクルと出会った時は今のシクルだったから……感情のない時のシクルは見たことがないんだア……ただ」

ルージユはそこで言葉を切ると、俯き、口を開かなくなってしまふ……。

「ど、どうしたんですか……？」

「ルージユ？」

ウエンデイとルーシイが声をかけるもルージユから返答はなく……代わりに、グレイがため息をつき、口を開いた。

「シクルは、雨の日になると笑顔が無くなるんだよ……」

「どうして……」

「……怖えんだとよ」

ルーシイの呟きにそつと答える声……ルージュを抱え、ナツが言った。

ルーシイは「え？」とナツを振り返る。

「雨の日は、昔を思い出すから怖いんだと……だから、雨の降る日にはシクルは笑わねえ

……」

「……そう、なんだ」

ふつと、ルーシイは目を閉じ俯き……ウエンデイやシャルル、グレイたちも暗い表情を浮かべる。

そこに、パンツパンツと手を叩く音が聞こえる。

「ほら、お前たち……そう暗くなるな、それでは更にシクルを苦しめてしまうだろう？

それに、折角の息抜きなのだ……楽しもうではないか！」

シクルの分までな、と微笑み言ったエルザ。

その言葉で、次第にナツたちの表情も晴れ、笑顔が浮かぶ。

「おう！」

「だな！」

「そーね！」

「あゝ!!」

「はー!」

「ま、いいかもね」

全員の、元気な返事を聞きふつと笑みを浮かべるエルザ。

「では、今日はもう遅い……明日もめいっばい遊ぶために今日は休もう」

「「あいさー!」」

その合図と共に、ナツたちは男と女に部屋を分かれ、寢床についた。

場面戻り、シクルとラクサスの方では……

「……はあ」

少し前から、ラクサスを枕に眠ってしまったシクル……そんな彼女を見下ろし、ため息をつくラクサス。

「たく……あれほど敵対してたやつを前に無警戒すぎんだろ、アホが……」

目下で眠りこけるシクルの鼻上を指で弾きながら、毒づくもその表情は柔らかく、笑

みを浮かべていた。

もう1度深くため息をつき、外を見やる。

「……まだ止まねえか」

大分小雨になったが未だ止まない雨を見つめる。

「……早く止んでくれよ」

何故そう思ったか、ラクサスには分からなかった……だが……

「……こいつに暗い顔は似合わねえんだよ」

こいつは……馬鹿みてえに笑って……あそこを輝かせる存在なんだよ……だから

……

あいつらの光を曇らせるなら……

「……早く、止んでくれよ」

——

……ん……は……は……？

……夢の中……なの、かな？ ……分からない

真つ白な世界で一人ぼつんと佇むシクル。

そこに……

『……ル……シクル』

っ！ 声……？ この、声……

後ろから聞こえた声に振り返ると……

……せ、レーネと……わた、し？

そこには、育ての親、セレーネソフィアと今より小さいシクルの姿があった。

『シクル……よく聞いて？』

『なあに？ セレーネ……何かあったの？』

セレーネを見上げるシクルの瞳には明らかな尊敬と信頼が溢れていた。

そんなシクルを悲しそうに見下ろすセレーネ。

『シクル……ごめんなさい……私はもう少しで、貴女とは一緒にいらなくなるの……』

その言葉に幼き頃のシクルは目を見開く。

『セ、レーネ…………どうして？ そんな…………冗談、笑えないよ？』

『ごめんなさい…………ごめんね、シクル…………』

嘘じゃないの…………本当に、もう…………』

そう言うのとセレーネの身体は次第に光の粒へと変わっていく…………。

『やだよ…………やだよセレーネ!! 行かないで!! お母さんつ!!!』

涙を流すシクル…………

『シクル…………ごめんなさい…………最後に…………』

あなたにこれを…………授けるわ…………』

そういい、セレーネが出したのは光の球体…………魔水晶とは少し変わったものだ。

『…………これ、は…………なに？』

『これはいつかあなたに力を与えてくれる…………あなたを守ってくれる…………お守りよ』

『おま…………も、り？』

セレーネがその言葉に頷くと光の球体は輝きを増し、そして……スウツとシクルの身に溶け込み……消えた瞬間、幼き頃のシクルはふっと倒れ込んだ。

その光景を見つめていた今のシクルは……

……これ……そうだ、この後目が覚めたら……

セレーネはいなくて……皆も……

あの光の球体……何だったんだろう

未だに……あれの正体が分からないんだけど……説明してくれても良かったのに
なあ……

肝心なところ、抜けてるよねえ……セレーネ

そう、ふっと笑みを浮かべた時……目の前の光景が変わる。

一瞬目の前が光り、目を開けると……

っー!! こ、こは……

シクルの目に映ったのは雨の降る深い森の中……そして、幼いシクルの目の前には歪んだ笑みを浮かべる男……

『……だ、れ?』

『見つけた……僕の可愛い……お姫様……』

さあ……おいで……愛しの………』

「シクルつ!!!」

「つ!? ……あ、っ?」

ラクサスの叫び声が耳に響き、はっと目が覚めるシクル。

そして、目が覚めた瞬間、自身が泣いていることに気づく。

「わ、た……し、ラ……ク、サス」

「お前……大丈夫か? 魔されてたぞ……」

ラクサスを見つめ、震えるシクル……その姿にラクサスは心が痛み……

そして、そんなシクルがとてつもなく弱く、儂く見え……思わずシクルをその大きな手で抱きしめた。

「つ……ラク、サ……ス？」

「……お前が、何に怯えているのか俺には分からねえ……俺は、今まで周りをちゃんと見ていなかったから……他の奴らよりお前のこと、分かってやれねえ……けどよ……」

お前がひとりで何か大きなものを抱えてるんだってことは俺にだって分かんだよ……だからよ……」

そこで、ラクサスはシクルの顔を覗き込むように見つめる。

「一人で抱えるなよ？」

「つ……!!」

「……お前は、一人じゃねえだろ？ 一人じゃできねえ事がある……それを言ったのは、

お前だろうがよ……お前は、アホ」

最後はふつといたずらっぽく笑ったラクサスに、シクルは次第に乱れた心が落ち着き

……

「ラクサス……アホって言うな、バカ」
と、笑った。

シクルに笑みが戻った時、外の天気も晴れ、雨が止んだ。

「雨が……」

「……止んだな」

洞穴から出ると晴れ渡る空を見上げるシクルとラクサス。

そして……ふと、シクルの嗅覚にスンツと知った匂いが届く。

「この匂い……ナツたち？」

はっと、シクルの告げたその言葉にふっとラクサスは1度シクルを見下ろし……そして、ポンツとシクルの頭に大きな手を置いた。

「う……？ なに……？」

「……俺はまだあいつらには会えねえからよ……お前とはイレギュラーだったけどな……だから、ここでお別れだ……シクル」

ラクサスのそう告げた言葉にシクルは少し寂しそうな表情を浮かべる。

「…………行くの？」

「ああ、まだ旅の途中だからな…………また、機会があったら…………そんな時は、話…………聞かせてくれや」

そう言い、ラクサスはシクルの頭から手を離し、去っていく。

最後に、シクルに後ろ手で手を振りながら…………

「…………またね…………身体、気をつけてね…………ラクサス」

その後ろ姿にそつと…………小さく呟くシクル。

ラクサスの姿が見えなくなると…………知った匂いが急激に近づく。

その前にシクルは足の怪我を治癒で治し…………治し終えた瞬間

ガサツ!!

「あぁー!! シクル!!」

「いたぁー!!」

「ほんとだー!!」

「シクル!」

「偶然だな…………シクル」

「シクルさん!」

「こんな所に仕事来てたのね」

「やっ与会えたア！」

知った声が次々に響く……その声にふつとシクルは微笑み……

「偶然だね！ みんな!! 仕事？」

と、声を上げた。

「ううん、福引のチケットが当たってね？ みんなで来てたの！」

「シクルの分も予約してあるんだよお？」

ルージュの言葉にえ？ と驚くシクル。

「私も？ 会えるかも分からなかったのに……」

どうして……とシクルが聞くと……ニツと、笑みを浮かべるナツが目映る。

「だって俺たち！ チームだろ？」

「……ナツ……うん!!」

「よっしゃー！ シクルも合流したんだ！ 残りの時間、楽しむぞお!!」

ナツの掛け声に、おおー！ と声を上げるシクルたち。

この後、宣言通りにめいっぱい遊んだシクルたちであった。

59話 虹の桜

リゾートを満喫し、妖精の尻尾に帰還してから数日後……最強チームの面々はシクルとルージユを除き、ウエンデイとシャルルを加えたメンバーでハコベ山にある依頼で来ていた。

「開け！ 時計座の扉 ホロロギウム!!」

リンゴーンと音を鳴らし、現れるルーシイの星霊。

ホロロギウムが現れるとすぐさまその中へと入り冷えた体を抱えるルーシイ。

「『ひいひい!! あたしつてばまたこんな薄着でこんなところ来ちゃったー!! 寒すぎるう!!』と、申しております」

「お前ほんと何しに来たんだよ」

前回ハコベ山に来た時と何ら変わらないルーシイをジト目で見るナツ。

「それにしてもほんとに寒いですね……」

ナツたちの歩く少し後ろの方で手を擦りながら寒さを堪えるウエンデイ。

その横ではシャルルが「だらしないわねえ」と、苦言していた。

『ウエンデイもこつちへ来たら……？ 風邪ひいちやうよ』と、申しております」

ホロロギウムの中で、ちよいちよいとウエンデイを手招きするルーシイ。

「そうですか……？ じゃあ、お言葉に甘えて……シャルルは？」

隣を飛ぶシャルルに声をかけるも「問題ないわ」と、拒否をした為、ウエンデイだけがホロロギウムの中へ入っていった。

「わあ、暖かーいー！」

ホロロギウムの中が思ったよりも暖かく、微笑むウエンデイ。

「腹減ったなあー」

「あー……」

ぐでーと歩き、腹を鳴らすナツ。その隣ではハッピーもお腹を鳴らしている。

「くつそ……こう雪が積もつてつと歩きにくいな……」

「その前にお前は服着ろ服を!!」

「うお!? いつの間に!」

ナツの指摘に、やっと服を着ていないことに気がついたグレイ。

「ねえ、ナツ？　ほんとにこんな所にそんな便利な薬草なんてあるのかなあ？」

飛ぶのが疲れたのか、ナツの頭に乗れ、聞いてくるハッピー。

ナツは首を傾げ口を開く。

「さあな？　けど、依頼にそう書いてあったんだし、あんだろ？」

「だってさあ……お茶に煎じて飲んだり、ケーキに練りこんで食べれば、魔導士の魔力を
一時的にパワーアップするなんて、オイラは眉唾ものだと思うんだよねえ……」

ほら、うまい　〃魚〃　には毒があるって言うでしょう？」

「それをいうなら、うまい　〃話〃　には裏がある、だ」

ハッピーの言葉に冷静にツツコミを入れたエルザに目を見開き驚くハッピー。

「わあ！　エルザに突っ込まれた!!」

「効果はともあれ、依頼はこの山の薬草の採取だ……ついでに、多めに採れたら明日のビ
ンゴの景品にしよう、皆喜ぶぞ」

「おおい、薬草！　いたら返事しろお!!」

声を荒らげ、返事も無い薬草を呼ぶナツ。

「するかよ、バーカ」

そんなナツにいつもの調子で軽口をふっかけるグレイ。

「んだとコラーアー!!」

そしてグレイの言葉にのっかり、いつも通り喧嘩が始まる2人。

そんな2人の喧嘩は、エルザの「やめんかつ！」という喝でピタリと止まるのだった。

「はあ……、早く仕事終わらせて帰りたいなあ……明日のお花見の準備したいのに！」

もう！ と膨れっ面になるルーシー。そんな彼女の隣でにつこりと笑みを浮かべるウエンディ。

「私もすごい楽しみです！」

「シクルがいれば葉草なんてすぐに見つかるのにねえ」

「ああ、あいつの葉草を嗅ぎ分ける嗅覚は凄まじいからな」

ハッピーとエルザの何気ないその会話に、ふと疑問を抱くルーシー……。

「『そういえば……どうして今回、シクルは一緒にやらないの？ ルージュも来てないし

……』と、申しております」

ルーシーのその言葉に一同はしいんと、静まり返る。その様子に、ルーシーはええ？ と困惑する。

「『ど、どうしたんですか……皆さん？』と、申しております」

ウエンディからのその問いかけにはあ、とため息をつき顔を上げるのはエルザ。

「シクルは、この時期……虹の桜の咲くこの時期は、家から1歩も出てこないのだ」

「……ええ」

「その年のシクルの調子にもよるけどなあ……短けりや1週間……長ければ1ヶ月は外に姿を現さねえよ」

エルザの言葉に続いたグレイの言葉にルーシイ、ウエンデイとシャルルは目を見開く。

「1ヶ月!?!」

「そ、そんなに長い期間、何をしているんですか……?」

(ホロロギウムは時間が終了し、星霊界へと帰っている)

「……この時期は、あいつにとつて……全てが変わったんだとよ」

それだけ呟き、グレイは口を開かなくなり、ナツたちも何かを言おうとはしなかった。そんな様子にルーシイやウエンデイたちも深くは聞かなかつた。

ナツたちがハコベ山に出向いていた頃、

シクル宅にて――

自室に備え付けてある椅子に腰掛け、何もせず、ただ……その虚無の瞳で窓の外をぼおつと、眺めているシクル。

コンコンツ――

「……シクル？」

「……ルージュ？ どうしたの？」

扉の向こうからする、ルージュの呼びかけに、シクルはふつと、扉の方へと顔を向ける。

「……ご飯、持ってきたんだあ……少し食べ「いらぬ、ルージュが食べていいよ」……シクル」

ルージュの言葉を遮りそう告げたシクル……

ルージュは悲しげに瞳を揺らす。

「シクル……わ、分かったよお……じゃあ、ここ……置いておくから……お腹すいたら、食べてねえ？」

じゃあ……と、眩き扉の前から去っていくルージュのその気配を感じ、シクルははあとため息をつき、目を瞑る。

「……ダメだな……ごめんね、ルージュ……」

寂しげに去っていったであろうルージュを考え、顔を歪ませるシクル。

そんな彼女の視界の隅に、ひらりと舞う桜の花びらが……

「虹の桜……ああ、もう……そんな時期なんだ……」

……この時期は……全てが変わった……最悪な時期……

この時期だけは……落ち着かない

ふうと、ため息をつき再び、虚無の瞳で窓の外を眺めるシクル。

場面戻り、ナツたちの方では……

丁度ナツの嗅覚が薬草の匂いを察知したところであった。

「相変わらず、すごい鼻だね」

流石ナツ！ と、嬉しそうにするハッピー。

「てかあんた、その薬草の匂い嗅いだことあるの？」

ふと疑問を持ったルーシーが首を傾げ聞くとナツはいあ、と首横に振った。

「嗅いだことはねえけど、なんかそれっぽい匂いがするから多分そーだと思う！」

「多分かよ」

「でも、確かに薬草のような匂いがしますよ」

ナツの言葉に同意する、ウエンディ。

「よっしゃあ！ 行くぞハッピー！」

「あいさー!!」

その大声と共にナツは全速力で走り出し、ハッピーもその後を追い疲れはどこへやら、飛んでいった。

「ちよ、ちよつとナツ!?!」

「あんのせつかち野郎!」

駆け出したナツとハッピーを追い、ルーシイとグレイも走り出す。

「……気のせいかしら? すごく嫌な予感がする……」

走り去るナツたちを見つめ、険しい表情で告げるシャルルの言葉にウエンデイは苦笑を浮かべる。

「シャルルの予感によく当たるからね……」

この会話の数分後、葉草を見つけたはいいものの、ワイバーンが現れ、撃退する際の余波で雪崩が発生……ナツやグレイ、ウエンデイたちは間一髪逃れるも……

「あれ? ルーシイさんは?」

「そーいやあ……」

「「あ」」

ルーシイだけが雪崩を回避できず……

「や……や……寒、い」

雪に埋もれ、震えていた……。

翌日——妖精の尻尾恒例 花見の日

「さあ皆、どんどん食べてね！」

ぞこ馳走をレジャーシートに広げ、告げるミラ。

「これは私のだからね！」

と、言いグビグビと樽ごと酒を飲むカナ。

「樽ごと持って来たんか！」

「誰も取りやあしねえつての」

そんなカナを見て、苦笑を浮かべる男達。

「花見は……漢だあー!!」

「意味分かんないよ」

「漢」を大声でいつも通り叫ぶエルフマンに苦笑を浮かべる一部のメンバー。

「レビイ、何食べる?」

「レビイ、何飲む?」

「わ、私……そんなにいらないよ?」

ジェットとドロイの持つてくる食べ物や飲み物を見てやんわりと断るレビイ。

ワイワイと賑わうメンバーたちの中で……ナツたちは……

「ゴホツゴホツ……」

「ルーシイ、大丈夫?」

咳をするルーシイを心配そうに見つめるハツピー。

「やっぱりお家でゆっくり休んでいた方が……」

ウエンデイがルーシイの背をさすりながら声をかける。

「だ、大丈夫よ! 咳がちよつとあるだけで熱とかはないの!」

にっこりと笑みを浮かべ、そう告げるルーシイ。

「それに、今朝ルージュが家に来てね?」

「……ルージュが?」

うん、と頷きルーシイは今朝あったことを話し出す。

「はあ……体重いい……これじゃあ花見行けないかなあ……」

ルーシイの体温を示す温度計は37.8℃をしめしており、この後も熱が上がりそうな状態だった。

はあと再びため息をつき、花見を諦めよう……そう思った時だった。

コンコンッ

窓を叩く音がする。

「ん？ 誰かしら……」

首を傾げ、カーテンを恐る恐るあけると……

「っ！ ルージュ？！」

窓の外には小さな小包を持ったルージュが手を元気に振っていた。

ルーシイは慌てて、窓を開けるとルージュを中へと招き入れる。

「どうしたの？ こんな朝早くに……」

「あのねえ、ハッピーからルーシイが風邪引いたって聞いてねえ？ これ、シクルから渡してきてって頼まれたんだア」

そう言い、ルーシイに差し出す小包の袋。

「……これは？」

「それはねえ、シクル特製の風邪薬だよお」

「シクルの!？」

ルージュのその言葉に驚き、小包を開けると2粒の薬が入っており、メツセージカードが添えられていた。

そこには……

〃ルーシイへ

今日花見でしょ？ これ、1日だけ風邪を強制的に軽くさせる薬。

ただ、これを飲んだ次の日はその副作用で熱とかがつちやうんだけど……効果は保証するから、もし良かったら……飲んで？

シクルより〃

と、書いてあった。

「わあ！ ありがとうルージュ！ シクルにもそう伝えておいて？」

笑顔でルージュにそう言うルーシイ。

「どういたしましてえ！ じゃあ、あたしはシクルが気になるから……帰るねえ」

ルージュはそう言うと、ルーシイの家を飛び立ち、シクルと住む家へと帰っていった。

そして、薬を飲み現在に至るといふ。

そして、ビンゴ大会が始まり数分後……

「ビンゴだアー!!」

「「うそお!?!」」

「エルザすごい!」

一番最初にビンゴが当たったのはエルザだった。

だが、景品は昨日ナツたちと共に持って帰ってきた薬草で、しかも枯れてしまっていた……。

「ううう、そんな……私の、ビンゴが……」

泣き崩れるエルザ……

「ド、ドンマイエルザ……」

「フアイト……」

そんなエルザを慰めるルーシィとレビィの姿があった。

そして、この後ワカバもビンゴを当て、段々とビンゴが当たるメンバーが増えてくる中で……

「125番!」

ミラの告げた番号……

「んお? 当たったぞおー!!」

「「「なにいいいいいつ?」「」」」

「すごおおい!! 流石ナツです!!」

ナツハハハツ!! と高笑いをし、喜び跳ねるのはナツだった。

「おめでとう、ナツ!」

「おう!! ンで? 景品は何だ?」

ワクワクとミラに迫るナツ。

はいはい、と苦笑を浮かべ、ミラがナツに渡したのは……

「……んだ、これ?」

赤と青の宝石が一つずつ埋め込まれたペンダントだった。

「それはね、想いのペンダントって言うまあ……大切な人を想う気持ちを表したペンダントってところかしらね」

ミラの説明にへえとペンダントを見下ろすナツ……。

……大切な……人、か……

その後、ビンゴ大会は大きなトラブルも無く、滞りなく終わり、最後のメインイベント、
“虹の桜”の鑑賞が始まった。

「わあ!!」

「きれえ!!」

「ほんとに虹色なのね……」

初めて見るその虹の桜にルーシィやウエンデイ、シャルルは感動の声を上げる。

そして他のメンバーも虹色に輝くその桜を見つめ声を上げていると……

「そーだ!! ハッピー!!!」

と、突然ナツが大きな声を上げた。

「あい?」

ナツは隣にいたハッピーを呼び、ニカツ! と笑みを浮かべると……

「これ……シクルへのプレゼントにしよーぜ!!」

と、告げた。

その言葉にハッピーは少し目を見開き……

「え? 今から行くの?」

と、ナツに問うと「おう!!」と答えた。

そして、少しナツを見つめ……、につこりと笑みを浮かべるとハッピーも「あいっ!!」

と、返事をしナツを掴んだ。

「んじゃ、ちょっと俺行ってくる!!」

「ちよ、ナツ!？」

ナツを呼び止めるルーシイの声が響くも、ナツは既にハッピーにより飛び立っており

……

「ほんとに……シクルの事になると……」

「超せっかちになるんだから……」

苦笑を浮かべながらも、この時期になると外に出たがらないシクル……彼女を思い、
ナツならきつとなんとか出来ると心の中でそう感じるギルドメンバーたち……

「……シクルを、頼むぞ……ナツ」

60話 俺が……守るからっ!!

花見の席を飛び出し、シクルの家へと向かったナツ……

「ねえ、ナツー?」

「あ?」

ナツを掴むハッピーが飛びながらナツに声をかける。

「シクルの家に行つて何をするの……? この時期のシクルは人と会うのも拒むんだよ……会つてくれるか……」

分からないよ? とハッピーが言おうとした時……

「ぜつてえ会つてくれんよ……シクルだからな!」

と、ナツが遮った。

「ナツ……」

「シクルは仲間思いだから……仲間を追い出したりなんかしねえよ! な?」

シクルに拒絶されることをミミリも疑っていないナツのその表情に……ハッピーも、
にっと笑い、「あい!」と返事をした。

そして、シクルの家が目視できるところまでに近づくと……

「そーだ、ハッピーはルージユのところに行ってくれねえか？」

「え？ どーして？」

ハッピーが首を傾げ、ナツに問う。

「……シクルと2人で……話がしてえんだ」

真剣な表情でそう告げ、「頼む……」と、言うナツを見下ろし……

「ナツ……分かった！」

と、答えたハッピー。ナツはニカッ！ と笑みを浮かべ、「サンキュー！」と言った。

ナツとハッピーがシクルの家に着く少し前……

眠れずにただぼうつと椅子に座り、自分の手を見下ろすシクル。

その瞳に光は差しておらず……

……私………何の為に、生きて……いるの？

私……私は……

キュツと目を閉じるシクル……その時

コンコンツ

「っ……あ」

窓を叩く音が聞こえ……外を見ると……

「……ナツ」

にっこりと微笑むナツの姿があつた。

そして、シクルと目が合うとちよいちよいと窓の鍵のところを指差す。

少しの間、ナツと鍵のところを交互に見やい……そして、はあとため息をつく……

立ち上がり窓に近寄る。

ガチャつと鍵を開け、窓を開ける。

「……なに？ ナツ」

素つ気なく聞いてくるシクルに嫌な表情もせず、にっこりと微笑むナツ。

「シクルに会いに来た!!」

「……花見は？ 丁度今虹の桜が……」それよりシクルに会いたかつたから！ だから

来た!!」……ナツ」

虹の桜が見ごろ、と言葉を告げようとするとその言葉を遮り、ナツが言った。

「花見も楽しいけどよ……シクルがいなきやなんか……楽しくねえんだよ」

だから、会いに来たと告げたナツを見て、ふっと小さく笑うシクル。

「楽しいけど楽しくないって……矛盾してるよ? ナツ」

変なの、と笑うシクルにナツは少し目を見開き……そして、スツと頬を赤らめ恥ずかしがり、「うつせえよ」と言う。

頬を赤らめるナツを見て、ふうと一息つくるとシクルは簡易的なキッチンに立ち、2つのカップにココアを注ぎ、テーブルに置く。

「……座って、ナツ」

「お? おう……」

シクルに声を掛けられ、テーブルを挟み、シクルの前に座るナツ。

目の前に置かれたカップを持ち、ゆつくりと口に運ぶナツ。チラツと目の前のシクルを見やうナツ。

シクルもゆつくりとカップに注がれたココアを飲んでいた。

その場に静かな時が流れ……時間が経つにつれ、少しずつソワソワし出すナツ……

キョロキョロとあつちを向いたりこつちを見たりと……視線が落ち着かないナツを

ふっと盗み見るシクル。

「……フフ」

「んあ？」

シクルの小さな笑い声が聞こえたナツ。

不思議そうにシクルを見つめると……

「何か話があつてきたんじゃないの？」

と、言われ、ナツは少しオドオドとします。

そして、シクルを見つめたと思つたら目を離し……再びシクルを見つめ、また目を逸

らしと繰り返し……

「つー……！ はあ……なあ、シクル……」

意を決したナツ……「ん？」と、首を傾げるシクルの前に……ナツは真剣な表情を浮

かべ口を開いた。

「シクル……この時期、昔……何があつたんだ？」

「っ!!」

「俺もハッピーも……グレイやエルザ……ギルドのヤツら全員……この時期になるとシ

クルが決まって何かに怯えてること……知ってる」

ナツのその言葉にシクルはふっと目を伏せ……「そっか……」と呟く。

「……なあ、シクル……」

ナツの呼びかけにふっと視線を向けるシクル……

「なあ……まだ、話す気になれねえか？」

じっと見つめる、真剣な眼差しのナツ……そんな彼を見つめ、シクルは……

「……ごめん」

と呟く。

「っ！」

「ナツ……いつか、いつか話すから……今は、まだ……ごめん」

再び顔を伏せ、告げるシクルを見つめ……ナツも悲しげに表情を歪める。

「シクル……なあ、シクル……俺はシクルの……力に……なれねえか？」

「ナツ……」

ナツはほんの少し、悲しそうに、そして辛そうに苦笑を浮かべ話し出す。

「俺……俺、もう……シクルの苦しむ姿見たくねえんだよ……」

「……ナツは、充分私の力になってるよ……いつも、ナツに助けてもらってる……でも」
シクルはそこで一度口を閉ざすと……ぎゅっと手を握りしめ、黙り込んでしまう……

「……なあ、シクル？ シクルを苦しめてるものは俺が……俺が全部ぶっ壊して……」「だめっ!!」っ!!」

ぶっ壊す、そう言おうとしたナツの言葉を遮り、突然シクルがガタツ！ と立ち上がり声を荒らげる。

「だめ……だめだよ……あいつは……あいつに手を出したら……ナツが消されちゃうよ……!!」

「な……なんだよ、それ？ やってみなきやわかんねえーだろ!!」 消されるって……消されねえかもしれねえだろ!!」

ナツも立ち上がり、少し大きな声を上げる。

「分かるよ……だって、消されたんだ……あいつに、逆らおうとした人……皆、私の……目の、前……で」

シクルの声は次第に震え始め、そして、涙が溢れ、ポロポロと流れる。

「っ……シクル」

「嫌だよ……私の、せいで……ナツが、皆が……消されたら……そう、考えたら……怖くて……苦しくて、ねえ……ナツ、私……」

いない方が……いいのかなあ……

「シクル!!!」

「っ……」

悲しげに笑みを浮かべ、涙を流しいなくなつた方がいいか? とシクルがそう、言ううとした時……その言葉を発する前に、ナツが声を荒らげ、そして……

震えるシクルの身体をぎゅつと抱きしめた。

「シクル……そんな事、言うな……」

「ナ、ツ……でも……でもっ」

「俺は……シクルがいなきやいいなんて……思つてねえ、ぜつてえ……思わねえ……」

言つたろ？ シクルがいなきや楽しくねえつて……他の奴らも、皆……そう、思つてる……俺達にはシクルが必要なんだよ……だから……」

ナツはソツと頬を流れる涙を指で拭い……ニカツと笑みを浮かべると

「ここにいろよ、シクル……誰がなんと言おうと、お前は妖精の尻尾の仲間だ……家族だ……ぜつてえ、守るから……ギルドが……仲間が……俺が……守るからっ!!」

「っ、ナツ……ナツっ」

「ここにいろよ……シクル、んでいつか……シクルの苦しみ、抱えてるもん……話してくれねえか？」

首を傾げ、そう聞いてくるナツに、顔を伏せ……コクコクと頷くシクル。

「うん……うん……ありがとう……ナツ……ありがとう……」

涙を流しながらも、頷くシクルを見下ろし、再びぎゅつと抱きしめるナツ……

「……約束な」

「うん……うん！ 約束……」

そう、眩くとふっと笑みを浮かべるシクル。そんなシクルの手に、シャラツと何かを
持たせるナツ。

渡された手元をシクルが見るとそれは、先ほどのビンゴ大会でナツが当てたペンダン
トの青い宝石が埋め込まれた方だった。

「ナツ……これは何？」

「ビンゴ大会で当たったんだ！ ミラが言うには想いのペンダントつつつて、大切なや
つを想う気持ちのペンダントなんだとよ」

ナツのその言葉にシクルはほんの少し目を見開く。

「大切な……？」

首を傾げ、ナツに問いかけるシクルを見下ろし、「おうー！」と頷くナツ。

「ついでにそれ、2つあったから1つは俺んなー」

変わらない笑みを浮かべ、既に首にかけられた赤い宝石の埋め込まれたペンダントを
持ち、そう告げるナツ。

そんなナツを見つめ、ふっと笑みを浮かべるとシクルは

「ありがとう……ナツ」

と、眩く。

「お、おう……それ、つけてやんよ、後ろ向いてくんねえか？」

「うん」

ナツの言葉に従い、ナツに背を向けるシクル。そして、ナツの手により、ペンダントがシクルの首にかけられる。

「わあ……綺麗」

首にかけられたそれを手に持ち、改めて眺めるシクル。

そんなシクルを見つめ……愛おしく感じたナツ……。

不意に、シクルを再び振り返らせ、くいと両の頬を両の手で包み、そしてシクルの顔をあげさせ、目を合わせる。

「……あ……」

目が合うシクルの瞳は涙のあとで未だ少し濡れ、赤くなっているがいつもの光が戻っており……そして、シクルの瞳に映るナツは……

とても、真剣な眼差しで……そして……

「シクル……やっぱり俺……お前が好きだ」

「ナツ……わた、し……（私……は……）」

「……シクル」

「……ナ、ツ」

目を瞑り、あと数センチ……その僅かな距離がゆつくりと縮まる……そして……重なり合う……その時

バタンツ!!!

大きな音を立て、シクルの部屋の扉が……開く。

「っ!?!」

驚き、そちらへ顔を向けると……

「な……なっ」

「お、お前ら……ンで、(っ)にっ!?!」

扉の外から崩れるように、倒れ込み入ってきたのは……最強チームの面々と、ウエンデイ、シャルルそして何故か……ガジル、レビイ他にカナやミラもいた。

「あらあら、だから押さないでって言ったのに……」

苦笑を浮かべ、告げるミラ。その手にはしっかりと撮影用の魔水晶が握られており

……

「誰だよ、後ろから押したやつ」

グレイのはあ、というため息が響く。

「俺じゃねえよ、お前じゃねえのか？」

「わ、私じゃないよ!？」

ガジルがレビイを指し、言うその言葉に首を振り、否定するレビイ。

「あわわわわ……ご、ごめんなさい!」

「全く……、これだからデリカシーのない奴らは嫌いなものよ」

オロオロとするウエンディと辛口でフンツと言い放つシャルル。

「いいじゃないかあ……青春青春……もっとやれえ〜」

完全に酔っ払いながらも素晴らしい、更に酒を飲むカナ。

「ご、ごめん、シクル! やっぱ少し気になって……」

苦笑を浮かべ、てへつとやってしまったと言った雰囲気を持つルーシー。

「す、すまん……じ、邪魔をする気は無かったのだが……つ、つい」

自分の事ではないのに頬を赤らめ、何故か照れているエルザ……

「ごめん、ナツ……止められなかった」

「あたしもお……ごめんねえ、シクル」

倒れ込むルーシイたちの後ろで、翼で飛びながら、頭を掻き、てへつと笑うハッピーとルージュ。

固まり、ルーシイたちを見つめるシクルとナツ。

ふと、我に返るシクルが……そつと目の前のナツを見やうと……

ナツとのその距離に今更ながら、自覚し……そして、先程まで何をしようとしていたか整理と理解が追いつくと……

「あ、う……き、きやあああああ／＼／！！」

「ぐもおおつ?!?!」

ナツを殴り飛ばした……。

吹っ飛ばされたナツは壁にぶつかり、きゆう……と気絶……はあはあと息を荒らげ、顔を真っ赤にするシクル。

「あらあら、もつとくつついていて良かったのに……」

頬に手を添え、もつたいない……と、呟くミラ。そしてその言葉にコクコクと頷くルーシイたち。

「だ、誰が……くつついてなんか……てか、いつから!？」

どこから見てたの!? と声を荒らげるシクル。

「あ? 火竜が告つた辺りじゃねえか?」

「そこから!? そこから聞いてたの!？」

嘘でしょ……と、更に顔を赤くするシクル。

「ほれほれ、あたしたちなんか気にせずさあ……ちゅーしちやえよ、ちゅーって……」

「しないわよっ!!」

カナの言葉を全力で否定するシクル……その言葉を聞き、ルーシイたちは……

「「「ええええええええっ!!」」」

不満な声を上げた。

「好きならやればいいだろー」

「というか2人って付き合っただの?」

「ん？ 付き合っているだろうか？」

「そ、そうなんですか!? やっぱり……」

わあわあとシクルとナツをほっぽり話が膨らむルーシイたちを前に……フルフルと身体の震えが強くなるシクル。

「でえきてるううう!!」

「う……うるさあああああいつ!!」

その夜、シクルの絶叫が辺りに響き渡った……。

日常篇 完結

next story エドラス篇 開幕

予告

もっと強くなりなさい！ 青少年!! そしたら、考えてあげなくもないわよー

何これ……ギルドが……街がつ、皆は!?

ここが……エドラス……ミストガンの、ルージュの……故郷

なにイ!? こっちの俺は……付き合つて、んのか!?

貴女も……私?

シクルになんかしてみろ……俺が、ただじゃ置かねえぞ!!このやろおつ!!

嘘だ!! あたしたちに……ううん、ハッピーたちにそんな任務、あたえてなんかいな
いでしょお!? ほんとは……!!

助けて……怖い……助けて……ナツっ!!!

カエ、せ……

こいつは私達に任せて……皆は先に行っって!!

2人でなら……きつと、ううん……絶対出来る！
人間なんだから!!
だって私達は……同じ力を持った

……自分の気持ちに、素直になっってくださいね？
後悔する前に……

バイバイ……エドラス……もう一人の私……またね、ミストガン

第8章 エドラス篇

61話 もう1人の最強、帰還

虹の桜、花見の日から2週間……

今回、ナツとの出来事もあり1週間で回復したシクル、既に通常運行に戻り、ギルドでのんびりと、時折ナツたちの依頼に着いていくを繰り返していた。

そして今は一時の休息でミラの作ったご飯を食べ、過ごしていた。

「ふぁー！ 美味しい!!」

頬に手を添え、身体をくねらせながらその美味さを全身で表すルーシイ。

「ほんと、美味しいです！ ね、シャルル!」

隣でご飯を食べ進めるシャルルに声をかけながらにつこりと言うウエンディ。

「まあ、なかなかね」

美味しいと感じるも変なプライドで素直には言わないシャルル。

そんな彼女たちの様子に頬を少し赤らめながら笑うミラ。

「ウフフ、ありがとう」

「んー！ やっぱりミラのご飯は美味しいなあ！」

最高！ と笑みを浮かべ告げるシクル。

「もお……そんなこと言って、シクルの方が私より料理上手なのに……」

苦笑を浮かべながら、洗い終わった食器を棚に戻すミラ。

「それにしても、よく寝るねえ……」

ちよいちよいと、ルージユがシクルの隣に腰掛け眠るナツのその桜色の髪を引っ張りながらクスクスと笑い、言う。

ナツの隣ではハッピーも眠っていた。

「ルージユ、そんなにやったらナツが起きるよ？」

苦笑を浮かべ、ルージユを止めるシクル。

チラツと眠るナツに視線をやる。

「……はあ（……好き、かあ）」

あの夜以降、ナツとの関係に進展はない。このままでいいのか……シクルは悩んでいた。

「……いい訳、ない……よね（ナツも待っていてくれるけど……ずっと待たせるわけにはいかないよね）」

早めに整理をつけよう……そう、そつと心に決めたシクル。

ふと、最近ギルドに来てから1ヶ月ほど経つウエンデイとシャルルに視線をやる。

「ウエンデイたちも、だいぶこのギルドに慣れてきたみたいね」

「はい！ 皆さん優しいので……色々教わっています！」

「女子寮がある所もいいわね、気に入ったわ」

ウエンデイとシャルルの言葉に「良かった」と微笑むミラ。

「そういえば、どうしてルーシイさんは寮じゃないんですか？」

ウエンデイがきよとん、と首を傾げ問うと……

「あー……あたし、女子寮の存在って最近知ったのよ……てか、寮の家賃って10万Jなのよね……」

ルーシイは深く溜息をつき、苦笑を浮かべる。

「もし入ってたら払えなかったわ……そうなら今頃……」

恐怖で震えるルーシイをウエンデイたちは苦笑を浮かべ見つめた。

そんな中、ふと食事に夢中なシクルを見て

「そういえば、シクルもあの寮で住んでないわよね？」

と、シャルルが問いかけた。

「んえ？ あー、うん……」

シクルは食事を中断しシャルルの方を振り返る。

「私の場合は寮より森での生活の方が好きだったから……それに自分で建てた家ならローンとか気にせず暮らせるでしょ?」

だから寮に住んでないのと、告げるシクルを見つめ啞然とするルーシイたち。

「ローンをいちいち気にするの面倒くさがりそうだもんねえ、シクルはあ」

「えー? そー見えるかなあ……そんなことないよ?」

ルージュとケラケラと笑いながら話をするシクルにはつと我に返るルーシイが声を上げる。

「……て、シクルってあの家自分で建てたの!? 1人で!」

「まっさかー、ちゃんと人手使ったよ? あ、あれは星霊手かな?」

タウロスの力とか借りたしねーと、言うシクルにふと、星霊の事で聞きたいことを思い出すルーシイ。

「そういえば、どうしてシクルは星霊が呼べるの?」

「ん? あー、それね……んー……私もよく分からないんだけど……セレーネが星霊王と友人だったというか……」

「セレーネって……シクルさんに魔法を教えた竜ですか?」

ウエンデイの質問にコクンと頷くシクル。

「そーそー、本名はセレーネソフィアなんだけど、彼女からセレーネでいいって言った

からそう呼んでるの」

少し話がずれたね、と眩き再び語り出すシクル。

「セレーネは竜であり、別名『月の女神』とも呼ばれていた……月と星……だからかな？

星霊王との相性が良かったのは……セレーネの歌う声に星霊王が魅了されて、その歌を受け継いだ私に特別な紋章をくれたの……

それがあの星霊の鍵なしに星霊を呼べたり、星霊界へ還したりする力よ

ちなみに私の歌魔法も滅竜魔法とは別に、セレーネから教わった魔法なの」

シクルの語ったその話にへえ……と興味津々のルーシイたち。

「へえ、シクルの歌魔法って竜から教わったんだ……」

「あ、竜と言え……シクルさん、前にグランディーネの事を教えてくれると……」

ウエンディイからの言葉にあつと今思い出したかのように声を漏らすシクル。

「あー、そういえばそうだった……んー、まずはグランディーネの居場所を1番聞きたいんだろうけど……」

シクルの眩きにココクと頷くウエンディイ。

そんなウエンディイに苦笑を浮かべ、申し訳なきようにシクルは告げる。

「ごめんね？ グランディーネとは昔会ったこともあるし、知り合いではあるんだけど

……今何処にいるかは分からないんだ……」

「そう、です……か」

シクルの言葉にしゅん……と、落ち込むウエンデイ。

「あわわわ……ご、ごめんね？　ほんと……」

頭を下げ、謝るシクルに首を振り、微笑むウエンデイ。

「大丈夫ですよ！　シクルさんは悪くありませんから」

と、言ったウエンデイの笑みを見て可愛いなあと、心の奥で感じるシクル。

グランディーネの話が途切れ、この後何をしようか、と話をしようとした時だ……

バーンツ!! と、大きな音を立てギルドの扉が開く。そして……

「た……大変だぁー!!!」

ウオーレンとマックスの声がギルド中に響き渡る。

なんだなんだと、ギルドメンバー全員がそちらに顔を向ける。

シクルたちも、同様にそちらへと顔を向けた。

すると……突然、

ゴーン　ゴゴーン

と、鐘の音がマグノリア全体に響き渡った。

「……何？」

「鐘の音？」

「何よこれ？」

最近入ったばかりのルーシイ、ウエンデイとシャルルはその音の意味が分からず首を傾げるも……他のメンバーはその音の正体が分かったようである……

鐘の音で眠りこけていたナツとハッピーも目が覚める。

「おい、この鳴らし方って……」

「あい!!」

「まさか……」

「あいつか!？」

「おお! ついに帰ってきたか!!」

ギルド全体がざわつく……その理由は……

「ギルダーツが帰ってきたあー!!」

「あいさー!!」

「「「ギルダーツだあ!!!」」」

最強の帰還——。

「……ギルダーツ、さん？」

「誰なの？」

「あたしも会ったことないわ」

唯一名前が出てても首を傾げるルーシイたちに、フフフと笑いながらミラが説明を始めた。

「ギルダーツは、妖精の尻尾最強の魔導士なのよ……あ、シクルを除けばかしらね？」
「ちよつとなんでそうなるのさ……」

ミラの説明にいちやもん付けるシクルだったが……

「だってシクル、ギルダーツに負けたことないでしょ？」

と、ルージユの言葉に嘘偽りはなく……

「そうだけど……」

と、肯定するしかなかった。

「て、シクルを抜いたら最強って……まさか、エルザよりも強いのだ!？」

ルーシイの投げかけに、2階から降りてきたエルザは笑みを浮かべ、ああと頷いた。

「私など、足元にも及ばんさ」

「ど、どんだけやばい人なのよ……」

カタカタと震えるルーシィ。

はあ、とため息をつき未だ興奮の冷めないギルドメンバーを見て呆れた表情を浮かべるシャルル。

「どうでもいいけど、この騒ぎようは何よ……」

「お祭りみたいだね、シャルル!」

にっこりと楽しみに騒ぐギルドを見つめるウエンデイ。

「本当、騒がしいギルドね」

ウエンデイとシャルルの会話にクスクスと笑うミラ。

「みんなが騒ぐのも無理ないわ……3年ぶりだもの、帰ってくるの」

「3年!? 3年も何してたんですか?」

ミラの言葉に目を見開き驚くルーシィ。

「ルーシィたちは、S級クエストの上にSS級クエストがあることは知ってるわね?」

ミラからの質問にコクリと頷くルーシィたち。

「その上に10年クエストって言うのがあるの」

「……10年クエスト?」

「10年間誰も達成したことのないクエストの事だよお」

シクルの頭に飛び乗り、口を開くルージュのその言葉に……

「10年間誰も!？」

「そんなすごいクエストがあるんですか!？」

と、驚くルーシイとウエンデイ。

純粋な反応をする2人を見てクスクスと笑うシクルたち。

「そして、ギルダーツはその更に上に100年クエストに行っていた」

と、エルザが告げると……

「100年って……まさか」

僅かに呆然とした様子で問いかけるルーシイに……ふっと笑みを浮かべ答えるのは

……

「100年間、誰も達成したことのないクエストの事だよ」

と、シクルが告げた。

「ええ!？」

そんなすごい人がいるなんて! と驚きを隠せないルーシイたちに……

「でも、100年クエストに行ったことのある人なら目の前にいるじゃない」

と、ミラが爆弾発言をした。

「……ええ」

「ちよ、ミラ……それは言わなくても」

啞然とするルーシイの隣で深いため息をつくシクル。

「ま、まさか……シクルも100年クエスト経験者!」

ルーシイからの問い詰めに……あーと苦笑を浮べるシクル。

「まあ……確かにそうだけど」

頷くシクルに凄まじいわ……と、眩くルーシイ。

そこに……

『マグノリアをギルダーツシフトに移行します! 町民の皆さん、速やかに所定の位置へ
!!』

マグノリア全体に流れるアナウンス。

「な、なにになに!」

「今度は何が始まるんですか!」

「人1人帰ってくるだけで大げさじゃないの……?」

「まあまあ、とりあえず外見してみなよ? 面白いのが見れるよ」

クスリと笑うシクルに首を傾げながらも、外へと出るルーシイたち……すると……

パツカリと、街が二つに割れた。

「えええええええつ!!」

「ま、街が割れちゃいましたよ!」

あわあわと狼狽える2人を笑いながら見つめるシクルとエルザ。

「ギルダーツは「クラツシユ」と言う魔法を使う……クラツシユとは触れたものを粉々にしてしまうすごい魔法なのだが……」

「ギルダーツは極度の方向音痴で……しかもぼおつとしてると民家の壁をクラツシユで壊して歩く癖があるから……」

「どんだけ馬鹿なの!? てか、それだけのために街を改造したの!」

ルーシィからの質問にコクコクと頷くシクルたち。

「すごいねー! シャルル!!」

「ええ……すごいバカね」

目を輝かせるウエンディと呆れてものも言えないシャルル……

そして、2つに割れた街の果てからギルドへと歩み寄る1つの影……

「来たア!!」

「あい!!」

飛び跳ね声を上げるナツとハッピー。

しいんと、その人がギルドに着くのを待つ一同……そして……

「ふう……」

深いため息をつく赤茶毛の男……彼こそ、今100年クエストから帰還した、妖精の尻尾最強の1人、SS級の資格を持つ「ギルダーツ」だ。

ギルダーツはカウンターにいるミラに近づくと……

「お嬢さん、この辺に確か妖精の尻尾つてギルドがあつたはずなんだが……」

そう、訊ねた。

ギルダーツの言葉にポカーンとする一同。

そして……

「ウフフ、妖精の尻尾はここよ？ それに私はミラジエーンよ」

にっこりと微笑むミラを見下ろしぱちくりと瞬きをするギルダーツ。

「な、なにいい!? お、おま……ミラなのか？ 随分変わったな!! てか、ギルド新しくなったのか!」

「外見で分らないんだ……」

「それがギルダーツですう」

「ギルダーツつ!!!」

があ！ と上がるナツの叫び声。

「おお！ ナツか！ 久しぶりだなあ！」

ニカツと笑うギルダーツに飛びかかるナツ……

「俺と勝負しろオ、ギルダーツ!!」

その姿に、あつとシクルが思った時は時既に遅く……飛びかかった次の瞬間には……
ダアン！

「また今度な」

ナツはギルダーツの軽い一振りでギルドの天上に投げ飛ばされた。

「ええええ!? あのナツが一撃で!?!」

「流石にギルダーツは無理だつてナツ……」

はははつと空笑いをするシクル……ふと、ギルダーツと目が合う。

「……シクルか？」

「うん、そーだよ？ おかえり、ギルダーツ」

ギルダーツからの投げかけににっこりと微笑み答えたシクル。

そんな2人を見て……

「や、やべえ！」

「おい、みんな離れろ!!」

「巻き添えくらうぞお!!」

「ぎやあああ、あれは恐怖だア!」

ギルドメンバーが一斉にギルドの奥へと逃げる。ウエンディとシャルルもミラとハッピーに連れられ逃げる。

「え? 何? なんなの」

……ルーシイを置いて……

「ルーシイ! 早くこっちに来い!!」

エルザの呼びかけには? と首を傾げるルーシイ……すると

「元気だったか? シクル……」

「もちろん、元気よ……ギルダーツも、相変わらずだね……」

にっこりと微笑みながら近づく2人……そして

……ダンッ! と、強く足を踏み鳴らし、同時に駆け出すと……

ドツツツツツ……!!!

「ぎやあああああああつ!!?」

ギルダーツとシクルの拳がぶつかりあった衝撃波でもものすごい爆風と爆音が轟き、逃げ遅れたルーシイも吹っ飛んだ。

「はっはあ！ 相変わらず女らしからぬ力だなあ!!」

「そういうそつちはバケモノ並みの力じゃないの……よー!」

2人のぶつかり合う蹴りの風圧で一部の壁が吹き飛ぶ……

「ひいひいひい！ ギルドが壊れるう!!」

誰かの悲鳴が響いた時……

「止めんか糞ガキ共おおおおおおお!!!!」

「あ」

マカロフの怒声でやっと事態に気づいたシクルとギルダーツ……

「またギルドを壊す気かバカタレ共!!」

「もう半分以上壊されてるよ……」

怒れるマカロフを前に……

「わりいわりい」

「ごめーん、マスター……やっちゃった」

ケラケラと笑うシクルとギルダーツ。

相変わらずの2人にため息をつくマカロフ……

「はあ……それより、ギルダーツ……仕事の方はどうじゃった？」

マカロフの問いかけを聞くとピタツとギルダーツは1度笑うのを止める……そして

「がっはははっ!!」

と、再び笑い出す。

その様子を見てマカロフとシクルの表情がやや険しくなる……。

「……ダメだ、俺には無理だわ」

「」「なにいいいい!?!」「」

「ギルダーツが……」

「依頼……失敗？」

「そうか……主でもダメか」

ふうと肩を落とすマカロフ。

「悪かったな……ギルドの名を汚しちまって」

「いや、無事に帰ってきただけで良いわ……わしの知る限り、このクエストから帰ってきたのは主が初めてじゃ」

ようやくた、と褒めるマカロフ。

「シクルなら行けるかも知れねーな」

がははっ！ と笑い、言うギルダーツに不満の表情を向けるシクル。

「じょーだん！ 私が行くわけないでしょ……」

「はは！ そらそーだ……はあ……疲れた疲れた……俺ア、休みてえから帰るわ」
そう言い、ギルドメンバーに背を向け、扉へと歩いていくギルダーツ……すると

「お、そーだ……ナツ、後でちよつと俺ん家来い……ああ、シクルもな」

「え？ あー……わかった」

ギルダーツの言葉に首を傾げるシクルと……

「土産かつ!？」

と、興奮するナツ。

「おー、土産だ土産ー」

と、手を振り去っていくギルダーツ……

ギルドの壁を破壊し……

「ギルド壊すなよ!？」

「扉から帰れよっ!？」

ギヤアギヤアと飛び交う言葉……

「よっしやー! 俺達も行くぞハッピー!!」

「あー!!」

うおおおっ! と叫びギルダーツを真似、壁を壊し飛び出していくナツ。

「あんたも壁壊すなあ!!」

ルーシイの怒声が響くもナツは既におらず……

「はあ……まあ、壁は後で二人に直させるとして……私も行くね」

「あ、うん」

じやつと手を振りギルドを出ていくシクル。

「あ、ルージュは……」

「あたしは此処で待つてるよお」

「分かった、後で迎えに来るね」

手を振り、いつてらっしやあい! というルージュに手を振り返しギルドを出る。

「話ってなんだろう……（それに……さつき感じた違和感……もしかして）」
ぼおっと、空を見上げながらふと、先程感じた違和感の正体を考えながら、ギルダ
ツの家へと向かい、歩き出す。

ギルダーツから語られる話とは……

そして、今……平和になった妖精の尻尾にまた新たな、事件が巻き起ころうとしてい
た……。

62話 白き竜との邂逅

ギルダーツと呼ばれ、ギルダーツの自宅へとゆつくりと向かうシクル。
ルージユはギルドで留守番を言ったため、今は一緒にはいない。

「んー……ギルダーツ、何のようかなあ」

「……着いたらわかるか」

そう呟き、ギルダーツの家へと向け足を進めるシクル。

そして、ギルダーツの自宅前に到着すると……

「やっとなついたア……方向音痴の割にはギルドから離れたところに家持つてるんだから……」

もつと近場にすればいいのに、と呟きながら扉をノックしようとする。

「ナツおめえ……リサーナとはどおなんだあ？ ああ、今はシクルだっけかあ？ がっははは、若いなあ」

「……は？」

中から聞こえてきた会話に……ピタッとノックしようとした手を止め、はあと深くため息をつく。

「地雷踏み抜くとか……荒れるな」

中から聞こえる「リサーナは死んだ」と言う、ナツの言葉を聞き再びため息を一つつき、扉を開けた。

「……え、なんだと？」

ナツの口から出た言葉に目を見開き、驚きを隠せないギルダーツ。

そこに……

「リサーナは、2年前……ミラの受けたS級クエストのサポートにエルフマンと行った時……テイクオーバーの魔法を使い、暴走したエルフマンの手により、死んだよ」

静かに入ってきたシクルの声が流れた。

その言葉にギルダーツはシクルを見つめ、顔を青ざめる。

「マ、マジかよ……そっか、それでミラの奴……うおお、スマン……スマネエ、ナツ」

何も事情は知らなかったとはいえナツにとって、ギルドメンバーにとつても深い傷となったであろうその出来事……

それを話題に出してしまったギルダーツは申し訳なさそうに苦しい表情を浮かべ、ナツに頭を下げる。

だが、ナツの中に湧いたその黒い感情は治まらず……

「ンだよ……そんな話なら俺は帰るぞ」

「ナツ!!」

ギルダーツに背を向けるナツの表情には苛立ちが見え隠れしており、シクルも辛そうにしている。

「……ナツ、シクル………仕事先でドラゴンに会った」

「っ!?!」

ギルダーツの告げたその言葉に背を向けたナツはギルダーツを振り返り、又シクルも驚愕でギルダーツを見つめる。

「ナツが探してる赤い奴じゃねえ……多分、シクルの言う奴でもねえと思うが……」

俺が見たのは、黒い竜だった」

「黒い………竜!?!」

「ど、どこで……どこで見たんだよ？」

ギルダーツに問い詰めるナツの隣で目を見開き、震えるシクル……

黒い……竜……まさ、か……

「霊峰ゾニア……お陰で仕事は失敗しちゃったよ」

「っ……!!」

「待て、ナツ……何処へ行く気だ？」

ギルダーツの話を聞き、ギルダーツの家を飛び出そうとするナツ。そんなナツを止める、ギルダーツの声。

「決まってるだろ!? イグニールの居場所を聞くんだ!!」

声を荒らげるナツ。だがそのナツの考えを、ギルダーツは真つ向から否定する。

「もういねえよ……あいつは、あの黒竜は大陸……あるいは世界中を飛び回っている」

「それでも……!! 何か手掛かりがあるかもしれねえ!!」

「ナツ……これを見ろ」

そう言い、ギルダーツはプチッと身体を覆っていたマントを外す……その下から露わ

になったのは……

「っ!？」

マントの下から現れたのは左半身がボロボロになった姿……

「ほとんど一瞬の出来事だった……左腕に左足……内蔵もやられた

お前のいうイグニールがどうかは知らねえが……あの黒竜は間違いなく、人類の敵だ

……そして、人間は勝てない」

「そ……それを倒すのが滅竜魔導士だろ!？俺の魔法があれば……その黒い竜だつて!」

「……本気でそう思うのなら、止めはしねえよ」

その言葉にグツと拳を強く握り、震えるナツ……そして

「っ……くっそおおお!!」

雄叫びを上げ、家を飛び出して行った。

「ナツ!!」

「ハッピー」

飛び出して行ったナツを追おうとするハッピーをギルダーツが止める。

「……お前が、ナツを支えてやれ……アレは人間じゃ勝てねえが、竜なら勝てるかもしれん」

ギルダーツの言葉に頷き、飛び出したナツを追いかけるハッピー……

「……ギルダーツ」

「んお？」

ハッピーの姿が見えなくなった頃、ここまで沈黙していたシクルが口を開き、ギルダーツの名を呼ぶ……そして、ギルダーツに近寄ると……

俯きながら、キュツとギルダーツの義手となった左腕を掴んだ。

「……どうした？」

「……違和感は、あつたんだ……それが、なんだかは……分からなかった……」
でも……

「っ、おい……」

「ギルダーツ……生きてて、本当に……よ、かつた……」
顔を上げたシクルは泣いていた……

「シクルお前……まさか、あの黒竜に会ったことがあるのか？」

「っ……」

震え、涙を流すシクルの様子に何かを感じ取ったギルダーツがそう、問いかける。

「……黒竜……多分、それは……黙示録にある黒き竜…… アクノログア」

「!? なん……だと、あれが……」

驚きに目を見開き、顔を伏せるギルダーツの視界の端でグツと拳を握りしめるシクルが映る。

そつと、シクルの顔を見つめると、ポンツと低い位置にあるシクルの頭に手を乗せる。

「ギル……」

「お前に何があったのか、俺はよく知らねえけどよ……何かあったら、俺に言えよ？ こんなオッサンでも色々と経験は豊富だ！ 力になってやんよ」

がははは！ と笑うギルダーツを見上げ……ふつと、笑みを浮かべるシクル。

「……ありがとう、ギルダーツ」

不安そうな表情は無くなった様子のシクルにほつと安心したギルダーツは手を離す。

「落ち着いたならお前も、早くナツを追ってやれ……あいつの気持ちが一番に分かんの

はお前だろ？」

「うん……行ってくる!!」

最後に、「今度なんかお礼するねー!」と声を上げ、ギルダーツの家を出ていくシクル。

「……元気だなあ」

ナツの匂いを辿り、足を走らせるシクル。そして……

バシャーン! という水飛沫の音が聞こえると……

「イグニール……父ちゃん、元気かなあ」

「ナツう……」

か細いナツの呟きが聞こえた。

ナツはギルダーツの家を飛び出した勢いに任せ、全力で走っていたら足を滑らせ川に

転げ落ちた様子だった。

そして、もう一つ聞こえた声……岸の上ではハッピーが瞳を揺らし、ナツを見つめる。どこかナツに声をかけるのを戸惑っている様子……

ふっと、シクルはハッピーの元へと歩み寄り、その小さな頭をそっと撫でる。

「ハッピー」

「シクル……」

「……行く？ ナツのところ！」

見上げたハッピーの視界に映ったのはハッピーの不安を全部消し去ってくれような綺麗に輝く笑みを浮かべたシクル。

彼女を見つめるとハッピーは自然とにっこりと微笑み、「あいつ!!」と返事をし、ナツの元へと向かった。

シクルとハッピーは未だ川に体を沈め、倒れるナツを見下ろす。

「ハッピー……シクル」

「ナツ、何やってるのー?」

「ナツ、風邪ひいちゃうよ?」

ほら、帰ろ? と、ナツに手を差し出したシクルの小さな手を見つめ……ナツは数度

瞬きをするにつと笑みを浮かべ、「おう!!」と答え、シクルの手を握る。

暖かな日差しがマグノリアを照らす中、2人と1匹は仲良く、ギルドへと帰っていった。

そして……ギルダーツ帰還から、数日後

「はぁー、疲れたぁー……」

もー暫く仕事行かない……と、ぐったりと呟き歩くシクルを苦笑を浮かべ見つめるルージユ。

「ついこの間まで休んでたでしょお？ あんまりサボつてると金欠になっちゃうよお」

「大丈夫大丈夫！ 評議院からがっぽり受け取った報酬金がまだ残ってるから！」

何を言っても仕事を休むという意志の変わらないシクルにはあと、諦めのため息をつくるルージユ。

「ん……？」

マグノリアへと帰る道すがら、ふと、騒がしい人集り……というより、小さな子供たちが一箇所に集まっている光景がシクルの目に入り込んだ。

「何あれ……？」

「んえ？ ……喧嘩かなあ？」

止める？ と聞いてくるルージユをチラリと見つめ、ふうと一息つく……

「うーん……早く戻って休みたいし……大丈夫でしょ」

と、答えると踵を返し、足を一歩前へと踏み出した……

「ステイング君っ!!」

「っ！」

子供たちの集団の中から聞こえた悲しい叫び声、その声の発した名前が耳に入ると、はつと子供たちの方を振り返るシクル。

そして、集団の中央に目を凝らす……そこには……

「くそっ……レクターを離せよっ！」

「ふんっ！ 返して欲しけりや、この間のこと謝れよ！」

「ばあさん虐めてた奴に誰が頭下げるかよ！」

「うっせえ！」

がつ！

「ぐっ！ くっそ……」

「ほら、早く謝んねえとこの猫が死ぬぞお？」

「や、やめろ!!」

金色のつんつん頭の男の子が口の端から血を流し、周りを囲む相手を睨みあげる姿

……

その周りを囲む子供たちの1人が茶色い子猫を抱え、つんつん頭の男の子を脅していた……。

そして……1人の子供が捕まっている子猫に木の棒の様なものを振り上げる。

「やめ……レクターっ!!」

「っ!!」

ギユツと目を瞑る茶毛の子猫……

「はい、ストローツプ」

パシツ---

「え……」

「は？」

「だ、誰だお前!？」

突然割り込んできたシクルに目を見開く子供たち。それはつんつん頭の男の子と子猫も同じで、目を見開き、突然の登場に驚いていた。

そして、シクルの登場と同時に捕まっていた子猫はルージュが助け出した。

「大丈夫う？」

「あ、ありがとうございます……」

「ダメでしょー? 動物虐待だよ、それ……」

チラツとルージュの方を振り返ってから子供たちを見下ろし、にっこりと微笑むシク

ル。

「な、何だよ……よそもんが口出すなよ!!」

「よそもんでも見過ごせない時があるでしょー? 集団リンチなんてかつこ悪いよー?」

ケラケラと笑いながら宥めるシクルの口調が癪に障った様子の子供が……今度は鉄パイプを握り、シクルに振り上げる。

「黙れクソババア!!」

「……ア?」

パシツ……グギャツ!!

「……………え」

鉄パイプを振り上げた子供は目を見開き、目の前の光景に驚愕した……何故なら……

女性の握力で、それも片手……それだけで鉄パイプがあらぬ方向にひしやげたからだった……

そして……ヒュオ、とシクルから殺気が漏れる。

「「ひいつ!」」

「糞ガキ共……誰が、ババアだつて? ん?」

あたしの事かなあ……? ふざけんな……これでもまだまだピツチピチの17歳
じゃくそがああああつ!!!」

がああああつ!!! と吠えるシクルに……ガクガクと体を震わせる子供たち……そ
して

「「(ぎ)……(ぎ)めんなさーい!!!」」

あまりの恐怖に、走り去っていった。

「あいやあー……(ぎ)愁傷様だねえ、あれはあ……(シクルにババア呼びはいけないね……
うん)」

見えなくなった子供たちに少し同情の心を向けるルージユ。

「あ、あの……!!」

「んえ？ なあに？」

不意に、ルージュが助け出した子猫が声をかけてきた。

「ぼ、僕……レクターって言います!!」

さつきはどうもありがとうございます!!」

頭を勢いよく下げる目の前の子猫、レクターを見下ろし……にっと微笑むルージュ。

「どういたしましてえ!! あたしはルージュだよお！」

仲良くなった様子のルージュとレクターの姿にふっと笑みを浮かべると、ふうとため息をつき、つんつん頭の男の子を振り返る。

シクルが振り返ると男の子はビクツと肩を揺らす。

「な、何だよ……俺は悪いことしてないぞ?」

先程までのシクルの様子に怒られるか……そう感じ、身構える男の子……そして、シクルはゆつくりと男の子に近づくと……

そつと腰を下ろし、男の子と視線を合わせる。

「…………ステイング」

「…………え？」

まだ名乗っていないはずなのに名前を知っているシクルに戸惑うステイングと呼ばれた男の子。

そして……

「ステイング…………白竜のステイング……」

…………バイスロギア」

「っ!？」

月竜と小さき白竜との出会い…………それは今後、どのようなことを巻き起こすのか…………
そして…………

「ついに……ついに時が来た……明日……」

「アニメ計画……を実行する……」

もうすぐだ……もうすぐ、永遠の魔力が!!

63話 1日限定の修行と予感

シクルの呟いたその言葉に目を見開き、驚きを隠せずにいるステイングを不思議そうに見上げるレクター。

「シクル、バイスロギアってえ？」

ちよいちよいと、シクルの服を引っ張り疑問をぶつけるルージユ。

「ん？ ああ……バイスロギア、白竜のバイスロギア……彼もセレーネソフィアと同じ、人に魔法を教え竜の1匹だよ」

懐かしいなあ……と、呟くシクルを見つめ、はっと我に返るステイング。

「あ、あんた誰なんだよ!? なんてバイスロギアを知ってる!？」

「え？ なんてでって……バイスロギアとは友達だったから」

「と、友達って……あんた、一体……」

目をぱちくりと瞬き、啞然とするステイングと同じく、ポカーンとシクルを見上げるレクター。

「ああ、私？ 私はシクル、シクル・セレーネ……あなたと同じ、滅竜魔導士よ」

「め、滅竜魔導士!?!」

「ちなみにシクルの魔法は月と光だよお！」

「ふ、2つの属性を扱えるんですか!?!」

何度も続く驚きの連続に、ステイングはぼおつとシクルを見つめている……

ふと、ステイングの脳裏に、昔バイスロギアから聞いた、ある話を思い出していた……

「ステイング……お前はきつといつか、出会うことになる……我等、竜を統一せし者に……その時は……」

「……まさか、お前……お前が竜を統一する……最強の滅竜魔導士?」

ステイングの言葉にはて、と首を傾げるシクル。

「んー……最強かどうかは知らない……興味無いし……でも、確かに私に魔法を教えてくださいました竜は、他の竜を統一させる程の力を持つていた竜よ」

ステイングの言葉にそう答えるとふつと笑みを浮かべるシクル。

「じゃ、またね？ 小さき白竜の子……」

ステイングに背を向けるシクルとその後を追うルージュ。

「ま……待ってくれ!!」

「ん？」

去り際にステイングがシクルを呼び止める。

シクルが振り返ると……ステイングは何かを決意した表情を浮かべていた。

そして……

「……お、俺に……魔法を教えてください!!」

「ス、ステイング君!!」

ステイングのその発言に、レクターは目を見開き、驚き、ルージュもシクルを見上げ、何と答えるのか、気になる様子。

「……おいで」

「え、シクル!?!」

「つーーー はい!!」

拒否をされなかったことに素直に喜んだステイキングはペア！ と笑顔を浮かべると再び歩き出したシクルの後を追った。

「シクル……魔法教えられるの？」

「ん？ ……さあ？」

面倒くさがりのシクルに魔法を教えられるのか、驚くルージユをチラツと見てからカラカラと笑うシクル。

シクルたちは街から場所を移動し、少し開けた場所に位置する森の中にいた。

「ルージユー？ レクター？ 味の方はどお？」

「んー！ おいしーよお!!」

「最高です！」

シクル特製の木の実スープを美味しいと食べ進めるルージユとレクター。

「……て……なんだこの状況はああああ!？」

「ん?」

鍋を温めながら大声を上げたステイキングを見やうシクル。

「俺は魔法を教えてくれって頼んだんだぞ!? なんでスープなんか作ってんだよ!」

「ええ……だって私魔法を教えるとは言ってないし……」

「ついて来いって言ったろ!」

「魔法を教えるとは言ってません」

シクルはそう言うのとステイングにもスープの入った器を渡す。

ステイングは渋々と渡された器を受け取るとスープを食べ始める。

「つ?! うつま?! 何これ何どうやって作ったんだあんた」

「こんなうめえの初めて食った!! と騒ぐステイングを騒がしい奴と呟き、特別なことは何もしていないと言うシクル。

「とりあえず、それ食べたなら魔法教えてあげるから……ちやちやつと食べなさい」

「……え?」

バクバクとスープを食べ進めながら!シクルの口から出た言葉に驚愕する。

「え……魔法、教えてくれんのか?」

「だからそう言ってるでしょ? さ、早く食べちゃって」

少し素っ気ない言葉だが嘘偽りはないその言葉に、「おう!!」と声を上げ、喜ぶと残りのスープをものの3分で食べ終わった。

食休めを少し挟み、いざ魔法を教えるという修行がスタート。ルージュとレクターはお腹が満腹になると近くの川に遊びに行った。

「じゃ、まずはその木、殴ってみて……ああ、魔法でね？」

「おう!!」

シクルの指示通り、ステイキングは指定された木と向かい合うと拳に魔力を込め……

「白竜の……鉄拳!!」

思いつきり、殴り飛ばす。

ステイキングの拳は大きな音を立て、木の幹を大きく凹まし、その威力を見せつけた。

「どーだ!!」

自信満々で、シクルを振り返るステイキング。

だが……

「んー……まあまあで言ったら、まだまだかな？ その歳でそれならいい方だけど」

首を傾げ、ちよつと威力がねえと呟くシクル。

「んだと!!? なら、あんたがやってみるよ!!」

「私が？ えーめんどいけど……仕方ないか」

はあ、とシクルはため息をつくと首を鳴らしながらステイキングと立ち位置を交代する。

そして……

「いいい？ ステイング……魔力を扱うことにおいて大切なのは己の限界値……そして、最大値を見極めること」

ステイングを振り返ると指を立て、シクルの講座が始まった。

「……魔力の、最大値？ それなら、さっきのだって、俺の魔力限界まで上げて放ったんだぞ?! 何が違うんだよ!」

「はあ……限界値と最大値じゃあ訳が違うのよ……いいい？」

魔力を限界値まで引き上げる訓練も確かにあるわ。それにより、術者の基本の魔力値が上がるから修行法としてはよく用いられる……

けど、実践でそれはダメよ」

「な、何でだ？」

首を傾げ、シクルを見上げるステイングを見つめながら両手の拳に魔力を込める。

「例えば、今私の左手は魔力の限界値まで引き上げた状態の力だとする……右は最大値
ね

「これの威力を比べてみると……!!」

まず限界値まで高めた魔力を纏った拳で殴った幹……それは、大きく凹み、いくつかの亀裂を作る程の威力だった。

そして……

「で、次が……最大値の魔力……これは」

最大値の魔力を纏った拳で幹を殴ると……

バキバキバキツ!! バギヤツ!!

「……え」

大きな音を立て、ドドオンと拳の命中した箇所から木は倒れた。

「………どう? 違いが分かった?」

拳に込めた魔力を消し、目の前で起きた出来事にポカーンと呆然と立ち尽くすステイングを振り返り、問いかける。

「なん……だよ、今の威力……全然ちげえ……」

どうして……? と疑問の眼差しでステイングはシクルを見つめる。

「まず、限界値まで魔力を上げてしまうと体内にある魔力の量が許容量を超えないように自然と集まりすぎた魔力を外に流そうとする現象が起きてしまう……」

それにより、折角の魔力も身体の外へと流出し、意味をなさず、魔導士の最大な力を発揮出来ずに魔法が発動してしまう

そして、最大値で魔力を留めるということは、魔力の流出なく、本来の力で魔法を発動することが出来るということ……どう?」

「な、なるほど……ようは魔力を上げすぎてもダメってことだな!」

「まあ、低すぎてもダメなんだけど……あとは感覚よ、やってみなさい」

「はいっ!!」

そこから数時間、ステイングの猛特訓が始まった。

初めは己にあった魔力の量が分からず、高すぎたり低すぎたりと……

安定していなかったが、1時間ほどすると殆ど最大値の感覚を覚え始め……そして、
ついに……

「うおおおおおつりやああああ!!!」

バキバキバキッ!! バギヤッ!!

「…………ふっ」

ステイングの拳は、大木を……叩き折った……

「…………や…………やったあああああつ!! 出来た!! 出来たぞおおお!!」

うおっしやああああ!! と騒ぐステイング。

よほど嬉しかったのだらう、飛び跳ねるステイングを見つめ、苦笑を浮かべるシクル。
「合格ね…………よくやったわ、ステイング…………」

苦笑を浮かべた表情から、ふわっと優しいげに微笑み、ステイングの頭を数度撫でるシクル。

そんな彼女を見上げ……

「っ!! お、おう…………／＼／＼」

ボツと顔を真つ赤に染めるステイング。

「? どうしたの?」

「な、何でもねえよっ! それより、次…………なんか教えてくれ!」

話を逸らすように、首を大きく横に振りシクルに懇願するも……

「あ…………教えてあげるのはいいけど…………」

「ならっ……!」

「その前にステイニング……」

「? なん、だ……よ?」

小さくため息をするシクルの目の前で、ステイニングはゆっくりと身体が傾き……倒れる。

「……少し、休憩だよ」

意識の飛ぶ中、倒れるステイニングの身体をそつと支えたシクルの呟いた言葉を最後に、完全にステイニングの意識は途絶えた。

意識を失ったステイニングの身体をそつと地面に横たわせるシクル。

「んー……やっぱりこれは少し身体に負担かけちゃったかな?」

すう、すうと寝息をたてるステイニングの前髪をサラツと撫で、苦笑を浮かべるシクル。

「……まあ、課題はクリアしたし……いっか」

問題はまだ少し残っていたがひとまずは休めるところを探そう……そう、シクルが思った時だ……

「んうー……あれえ? もう終わったのお?」

「ほへえ……え、え？ ステイング君、どうしたんですか……う？」

ルージュとレクターが目覚ました。

ルージュは目を擦りながらシクルの頭によじ登り、レクターは倒れ気を失うステイングを驚きの瞳で見据える。

「おはよ、ルージュ、レクター……ステイングはちよつと修行疲れて寝ちやつたの……ね？ どこか休めそうな所で今日は寝ましよう？」

「あい！」

「はい！」

元気に2匹が返事をする、この後、大きな大きな巨木の根元に空いた大きな空間を見つけ、そこを寝床とした。

「……………ん、っ？」

暗い意識の底から、ゆっくりと浮上するように意識を取り戻すステイング……そんな彼の小さな声に気づき、顔を覗き込むシクルたち。

「気が付いた？」

「おはよお！ ステイング！ 夜だけど」

「ステイング君！ 目が覚めたんですね、よかったですね！」

「……俺」

「魔力の使い過ぎであの後気を失ったのよ……あれから結構時間が経ってね、今はもう夜よ」

シクルの言葉にステイングが外を見ると確かにそこは星と月が空に浮かび輝く夜空が見えた。

「ほんとだ……」

「ね？ 今日はまだ遅いから、修行は終わり……ゆつくり休も？」

「……うん」

シクルの言葉に頷くと、ステイングは身体を起こし、ぼおつと何かを考えていた。

そして……

「……な、なあ……あんだ」

「何？」

ルージュとレクターの寝床を綺麗に用意しながらステイングの話聞くシクル。

「あんだ……バイスロギアの事、知ってん……だよな？ なら……バイスロギアを、俺が

……」

殺した事は……

そう……ステイングが、シクルに聞こうとすると……

「知ってる」

「っ！」

シクルはスツと下に向けていた視線をステイングに送ると……

「知ってるよ……その話は、バイスロギアからも相談されてたから……私は反対したんだけどね？ 滅竜魔導士の真の力を使えるようにするためには……て、バイスロギアが聞かなくて……」

説得、出来なかったの……と、呟いた。

「シクル……」

「ステイング君……」

シクルの語りを聞き、ステイングは一瞬目を見張ると、フツ……と俯き……

「……バイスロギア、は、俺に力を与えるため……俺の手で、バイスロギアを倒すように、仕向けた……俺……俺は……大好きな父親を、自分で……」

グツと拳を握り、体が震える……その時、

「もういい……ステイング、もういいよ」

「っ……」

そっと、シクルがステイングを抱きしめ、その頭をゆつくりと撫でる。

「……………辛かったよね？ 悲しかったよね？ 大好きな……………大切なお父さんを、自分の手で……………それは、どんな人でも、苦しくて辛くて……………」

それでも、お父さんの願いのために……………ステイング……………頑張ったね……………よく、耐えたね……………」

お父さんの……………バイスロギアの願いを、叶えてくれて……………ありがとう」

「お、れ……………」

シクルの言葉に……………堪えていた涙がホロホロと溢れ……………そして、耐えきれずシクルに抱きつき、泣き出した。

「う、ああああ……………！ ひつ、く」

「ステイングう……………シクルう……………」

「ステイング君う……………」

ステイングの、その姿にルージュとレクターも、涙を流した。

その夜、ステイングはバイスロギアが亡くなってから、初めて……………人の胸でいっぱい泣いた……………そして、涙が次から次へと溢れる中、シクルはただ静かに……………その背を抱き

しめ、撫で続けた。

翌日——

「ふっかーっ!!」

「わーい! やったあ!」

「元気になりましたよおー!!」

うっひよお!! と騒ぐステイングに……

「あっはは……元気だねえ」

苦笑を浮かべながらも、走り回るステイングを見てほっと一息つくシクル。

良かった……モヤは一応晴れたみたいで……

「じゃあ! シクルさん!! 今日もバシツバシ、魔法を教えてください!!」

「フフフ、はいはい……じゃあ次は……」

そう告げ、シクルが立ち上がった時……

ゾッ——

「っ!!! な、に……?」

シクルの身体を寒い何か走り抜ける……それはまるで、何か起きる、と告げているような……

「……シクルさん？」

「シクル？ どうしたのお？」

「シクルさん？」

名を呼ぶステイングたちの声に反応を見せず、ただ空を見上げ睨みつけるシクル……
そして

「この……感じ、まさか……（彼の言っていた……）」

アニマっ!?

「つ……まずい……ごめんね、ステイング？ ちょっと、一大事な事が起きて……」
シクルははっと、ステイングを見下ろし……

「修行はここまでだよ……ごめんね」

と、告げた。

「ええ!?! シクル、どうしたのさあ？」

「シクルさん……一体どうして!？」

「な、何でだよ!? なんで……」

シクルの言葉に驚くステイニングたち……シクルは眉を歪め、申し訳なさそうに言葉を告げる。

「ごめんね……次、会った時……また、教えてあげるから……私、ギルドに戻らないと……いけないんだ」

だから……と、言葉を一度止めるとステイニングの手首に青いリストバンドを着けた。

「これ……再会の約束のしるし……これを、持っていて……ね?」

「シクルさん……俺……」

何かを伝えようとするステイニング……そんな彼の頭をもう一度、撫でるとルージュを呼び、背を向けるシクル……レクターとも別れを告げ、立ち去ろうとする……その時……

「シクルさん!!」

ステイニングの声がシクルを止める……

「絶対……絶対にもた、会えるよな!？」

ステイングの言ったその言葉に、シクルは振り返り……

「会えるよ……絶対、会いに来る」

そう、告げた。

「つ……俺、待ってますから……だから、いつか俺が大きくなった時……俺、俺と……

結婚してください!!!!」

「……ええ」

「え、えええ!？」

「ステイング君!？」

ステイングの言葉に目を見張るシクルと、驚きの声を上げるルージュとレクター。

シクルは数度、瞬きをするとふっと笑みを浮かべ……

「本気……?？」

と、聞いた。ステイキングはその問いかけに、コクリと頷いてみせる。

「……（まあ、子供だし……その大きくなった時は忘れているかもしれないけど）ステイキング……」

シクルの言葉を待つステイキング。

「すう……」

もっと強くなりなさい！ 青少年！！ そしたら、考えてあげなくもないわよー」

そう、声を上げ、満面の笑みでステイキングに告げると……

「またね」

と、眩き、シクルはその場を立ち去った。

その心の中では……

まあ……まずはナツに勝てないとね……

クスツと楽しげに、笑っていた……。

だが、すぐに表情を引き締めると……

「ルージュ、スピード上げるから……掴まって」

「あい！（きつきの会話……ナツが知ったら怒るだろうなあ……黙つてこお）隣を飛んでいたルージュに告げ、身体にしがみついて貰うと……光を身体に纏い、光速でマグノリアへと、ギルドへと急ぐ……」

「つ……みんなっ！（お願い……何も起きないで！）」

一方、シクルの去っていったステイングとレクターの方では……

「レクター……」

「はい？」

ステイングはグツと拳を握りシクルの去っていった方を見つめると……

「俺……もつともつと強くなる……それで、絶対シクルさんに認めてもらうんだ……!!」
と、宣言を高らかに上げた。

「ステイング君……はい!! そうですね!」

ステイングの上げた宣言にっこりと笑い、「僕は応援しますよお!」と、レクターは

言った。

……シクルの事を諦める様子はない、ステイングであった……。

——マグノリア

「はあ……はあ……こ、れは……」

「な、なん……でえ？」

隣街から急いでマグノリアへと戻ったシクルたち……だが、目の前に広がる光景は

……

「ギルドが……街、が……消え、た？」

砂地となったマグノリアの跡地であった……。

始まる、もう一つの世界との戦い……

そこで待ち受ける試練とは……一体……。

64話 もう一つの世界 エドラスへ！

シクルは我が目を疑った。

あの大きな大きな、活気の満ちたあのマグノリアが……そして、妖精の尻尾が……

消えた……。

「何これ……ギルドが……街がつ、皆は?!」

「ここが本当にマグノリアなのお?」

啞然とするシクルを見上げ、問いかけるルージユ。

シクルはコクツと頷いてみせる。

「間違いない……微かだけど、皆の匂いが残ってる……（でも、何でこんな……どうして）」

辺りを見渡すシクル……そして、不意に空を見上げると……

「あれは……」

「え？」

空に大きな大きな穴が空いていた……。

「あれって……もしかして、あれが……」

「そう、あれがアニメだ」

「!!」

シクルとルージユの背後から聞こえた声に振り返ると……

「ミストガン!!」

少しふらつきながらも歩み寄ってくるミストガンがいた。

「アニメを閉じながらここまで来ていたのだが……すまない、間に合わない……くっ」

「ミストガンっ!!」

最後まで話せず、膝をつくミストガン。

彼の身体を支えると……

「あなた怪我して……！　ちよつと待つてね……」

【我、月の加護の名の下に

愛する者の身を包み

その身、回復させん】

ソングマジック
歌魔法　治癒ヒール】

シクルの手をかざしたところから徐々にミストガンの身体を淡い光が包み、光が消える頃には傷は癒えていた。

「すまない、ありがとう……シクル」

「どういたしまして……それより、もしかして……ギルドの皆や街の人たちは……」

クストとミストガンに笑みを見せるとすぐに表情を引き締め、険しい表情で問いかけてくるシクルにミストガンもコクツと頷き

「ああ、そうだ……皆アニマに吸い込まれてしまった……すまない、気づくのが遅れた私の責任だ……シクル……」

「なに？」

「私はまだこちらでやらなければならぬことが残っている……身勝手だと思いが……先に向こうへ行き、皆を救出してくれないか？」

頼む、と頭を下げるミストガンの前にじっと見つめるシクル……

「……分かった、どうすればいいの?」

ふっと、笑みを浮かべそう言ったシクル。

「ああ、まずはシクル……これを飲んでくれ」

ミストガンはそう言うのと懐から小瓶を取り出し、その中には小さな赤い薬がいくつも入っていた。

「これは……?」

「これは向こうで魔法を使えるようにする薬だ。向こうでは、エクシードという種族

しか魔法を使えないからな」

ミストガンの説明になるほど、と頷くと1錠飲み込む。

「飲んだな……なら、あとはあのアニマの残留した空を通り、そこからエドラスへ行ける
……ルージュの魔法で行けるはずだ」

「……そういい、ルージュに視線を向けると……ルージュは俯き、何かを考え込んでいた
……。」

「……どうした?」

「あ、の……ねえ、シクル……」

「あ……そっか……」

言いづらそうにしているルージュを見て、ミストガンは首を傾げ、シクルは合点がいったかのように頷くとルージュをそつと抱き上げた。

「……ミストガンは、知らないよね」

「ん？」

「あのね……ルージュは……この子は、向こうで生まれて、ある事故でこちらに来た子なの」

「え……」

目を見開くミストガン。そして、その視線はシクルの腕に抱かれるルージュに向けられる。

「それは……一体」

「……ルージュ」

「うん……あたしのお母さん達は例の計画を知ってあたしを奪われないように色んなと

の
 ころを旅してたんだあ……その結果あたしは例の計画の子供たちの中には入ってない

ただ……、あたしが生まれて2年くらい経った頃に……突然開いた人間の作り出した
 アニマの残留にお母さん達と一緒に吸い込まれて……」

「……こちらの世界に来た、と?」

ミストガンからの問いかけに頷くルージュ。

「まあ、国を逃げ出したつてことは裏切りとも同じだつてことで……こつちに飛ばされる
 前に怪我をしたみたいでね……」

傷ついて倒れてたところを私が見つけて今に至るつて感じかな……この子の両親は
 いなかったからこつちに飛ばされた時、離れ離れになつちやつたのかもしれないけど
 ……」

そう言い、ルージュを撫で続けるシクル。

「ルージュ……無理しなくてもいいよ……?」

私も飛べないわけじゃないから……こつちで待つてても……」

いいよ、とそうシクルが告げようとすると……

「ううん、あたしも行くよお……だって、あたしは……シクルの相棒だもん……一緒に行く

くよお！」

真つ直ぐとした瞳でシクルを見つめ、ニツ！ と笑みを浮かべるルージユ。

ルージユの覚悟した瞳を見つめ、シクルもふつと笑みを浮かべると……ミストガンを見やう。

「確認だけど……あのアニマの力が残留した穴に飛び込めば向こうの世界に行けるんだよね？」

「ああ、私も向こうにいたのは随分昔のことだ……今の詳しい現状を完璧に把握している訳では無いが……恐らく、厳しい現状だと思う……気をつけてくれ」

「分かった、ありがとう」

ミストガンの忠告ににっこりと微笑み、例をいうシクル。

「それと……向こうへ行ったら王都へ向かってくれ」

「王都へ？」

「ああ……王都のどこかに、巨大な魔水晶があるはずだ……それが、マグノリアの人たちだ……彼らはこちらの人間を魔水晶に変え、その魔力のみを抽出しようと企んでいる」

ミストガンから出たその言葉に目を見開くシクルとルージユ。

「魔力を……抽出って……」

「そんな事したら魔水晶になったみんなはどうなっちゃうのお?」

魔力は魔導士にとって、命と同じ……それを奪われるということは……それ即ち……

死……。

「そんなこと……!! 絶対させない!」

ギリツと拳を握り、苦しい表情を浮かべるシクル。そして、ルージユも……シクルの背を掴むと浮かび上がり……

「行くよお! みんなを助けに!!」

と、声を上げる。

「待て、シクル! 最後に……その魔水晶は滅竜魔導士の魔法で元に戻すことが出来る……シクル、覚えておいてくれ」

ミストガンからのアドバイスにふっと笑顔を浮かべ、「ありがとう!」と告げるとシクルは……

「じゃあ……行つてくる！」

と、ルージュと共にアニメマへと吸い込まれていった。

「シクル……ルージュ……頼んだぞ」

アニメマに突入する時、眩い光に包まれ、うっと目を細めるシクルとルージュ。

そして……アニメマを通り、エドラスへと辿り着いた時、目の前に広がる光景は……

「ここが……エドラス……ミストガンの、ルージュの……故郷」

アニメマを通り、エドラスの上空に出たシクルとルージュ。

目の前に広がる光景に、目を見張り……

「とりあえず……地上に降りよう……お願い出来る？ ルージュ」

「任せてえ！」

シクルの指示でルージュは地上にゆっくりと、降り、シクルを離す。

「ありがとう、ルージュ」

「うん！ ねえ、シクル？ これからどうやって王都まで行くのお？」

「んー……とりあえず、まずはこっちの情報集めて……それから王都へ向かおう？ 何

も知識もなしに行つてもダメでしょ？」

そう言い、まずはとこの世界に暮らす人を探し始めるシクルとルージユ。

ちなみに2人が降り立った所は……少し岩肌がゴツゴツとしている土地だった。

降り立つまでに人の姿は確認していない……

「……人いるかなあ?」

「さあ? とりあえず探そ?」

笑みを浮かべ、ルージユを肩に乗せると搜索開始。

……それから、歩き始めて30分……

「ねえー……シクルう?」

「……なに?」

「……人、いないねえ……」

「……いないね」

歩きながら人を探し始め、30分……未だに誰とも会わないシクルたち……そして

……

「ギョオオオオオオオツ!!!」

「エドラスってどーしてこー生き物がでかいのおおおおお!?」

「知らないよおおおおお!!!」

不気味な生物に追いかけられる始末……

しかも……

「シクル何とかしてえええええ!!!」

「アレはいやあああああつ!!!」

超巨大な蜘蛛の化け物に追いかけられていた。

(シクルは蜘蛛が大の苦手である)

結果、超速度で逃走劇を繰り広げるシクルとルージュ……だが……

ガッ!

小石に足を取られ……

「あ……っ!?!」

ズサア!!

「あうっ!」

「ぶぎや!」

シクルは転び、その反動でシクルの肩にしがみついていたルージュも落ち、顔面から地面に激突。

「いったた……」

「は、鼻打ったア……」

痛みに耐えるシクルたち……

そして、頭上に……影が指す……

「……あ、はは……ああ」

「……あ、たし……いやあな予感がア……」

互いに顔を見合わせ……そつと背後を振り返ると……

大きな口をいっばいに開き、シクルとルージュを食べようとする、巨大蜘蛛の姿が目いっばいに広がっていた。

「きやああああああつ!!?」

絶叫を上げ、固まる……目を瞑り、

あ……おわった……

そう、シクルが思った、その時だった。

「掴まれっ!!!」

「っ!？」

突然響いた声に、はっと目を見開くシクル……すると、目の前から砂を巻き上げ突っ込んでくる何かと……己に伸ばされる手に気づく。

咄嗟に、ルージユを抱き上げその手に掴まる。

「っ……!!」

パシッ!

伸ばされた手に掴まると、グンッ! と引っ張られる感覚がする。

「わあ!？」

「っ……!」

「とっ……間一髪だったな」

……ええ?

耳元で聞こえた声に、驚き、目を見張るシクル。先程は気づかなかったが……今、目の前にいるのは……

「……ナ、ツ……?」

「え?」

「あ? ……え? お、前……」

目の前にいるのは乗り物酔いが酷い彼のはず……なのに、車を運転する見慣れた彼……

シクルを見て、驚いた表情を浮かべる、ナツだった。

ナツはキキイイツ!! と九ブレーキをかけ、車を止める。

「きゃつ!」

「わあ!」

ガクン! と首が揺れ、いたた……と首を抑えていると突然、目の前のナツにギユ! と抱き締められる。

「え!?! ナ、ナツ!?! ど、どうした……の?」

「……シクルか？ 本当に……シクル、なの……か？」

抱き締めてくるナツは震え、その声はどこか涙声に聴こえた……。

「ナツ……？ ……うん、そう……私は、シクルだよ」

どうしたの？ とナツの顔を覗き込むと……

「え……ど、どうしたの!？ ナツ……泣いて……」

「う……っ……！ だって……だって！ シクル……が、生きてた……から……あの時、王都の兵隊に捕まって……もう、ダメかと……」

泣きながらそう、言葉を告げるナツを見て、シクルとルージユははて？ と顔を見合
わせる……そして

「あ……」

「シクル？」

ナツの言葉……そして、ミストガンに聞いたある話を思い出す……

——あちらは、もう一人の自分がある世界……そして、こちらの人間とは少し違う

……

もしかして……

「ナツ……ナツ、ごめんね……多分、私はナツの知ってるシクルじゃないの……」
「つ……ええ? ど、どういう……」

シクルはここまで来た経緯をナツに話す。そして、その話を聞くとナツは……

「そ、そんな……じゃあ、君はそのもう一つの世界の……シクルなんだね……そっか」
しゅん……と、明らかに落ち込むナツ。

「あ、ご、ごめんね? ほんと……」

「う、ううん! 勝手に勘違いしたのは俺の方だし……大丈夫だよ」

ニツと笑みを浮かべるとナツはあつと声を上げ

「そっか、じゃあ君がさっきルーシイの言っていた……もう一人のルーシイたちの仲間
なんだな?」

と、確信を持った様子で告げた。

「もう一人の……ルーシイって……もしかして、皆の居場所知ってるの!」

「そっかあ! ナツたちも滅竜魔導士だから無事だったんだア! あれ? じゃ何で
ルーシイも?」

「きつとホロロギウムが助けたんじゃない?」

ルージュの疑問にシクルが答えると、「なるほどお!」と、納得するルージュ。

「うん、ルーシイに頼まれて、もう一人のルーシイたちの所へ向かう途中だったんだ」
ナツの言葉に、合流のチャンス、と考えたシクル。

「お願い！ 私たちも一緒に連れて行って！」

「ああ、もちろん！ そのつもりさ……しつかり掴まつてろよ？ 飛ばすぜ」

ニカツとシクルの知るその笑みで、告げるナツに、ああ……やっぱりナツだなあと、思
いながら「うんっ！」と頷くとしつかりとシートベルトをつけ、ルージユを抱きかかえ
る。

「おっけーよー！」

「おし……行くぜ、GO ファイヤー!!」

その掛け声と共に、ナツの運転する車は猛スピードで、走り出す。

あちらの世界…… “アースランド” のナツたちの元へと……

「……うっ!?」

「え、シクル!?!」

車が走り出し、数秒後……シクルは口元を抑え、呻く……そして、重大な問題に今更

ながら、気づく……。

薬飲むの忘れてたああああああっ
!!!!

「ま……う……よ、ううう……」

「シクルうー!!」

ルージユの呼びかけにも答えられず、ひたすらに吐き気に耐えるシクル。

「ま、ナ、ツウ……と、とめ……」

「時間を食っちゃまったんだ……もつと飛ばすぜ!!」

「っ!? (あ……これは、おわった……)」

シクルの言葉も届かず……こちらのナツ（以降、エドナツ）は車の速度を上げる。

果たして……無事にシクルたちの知るナツ達とは合流出来るのか……

合流までにシクルは耐えられるのか……

「シクルう、しっかりいー!!」

「む、りい……うぷっ！ は、やくう……止まっでえ」

65話 王都到着!

ひよんなことからエドナツに助けられ、こちらの世界にアースランドのナツたちもいる情報を得たシクルとルージュ……

シクルたちは、エドナツの運転する魔導四輪車に乗せてもらい、ナツたちとの合流を指していた。

「うつぶ……ま、まだ酔いが残つ、て……う」

「シクル、大丈夫う？」

「まさかそこまで向こうのシクルが乗り物に弱いなんてな……」

シクルの必死な説得(?)により、なんとか1度車を止めてもらい酔い止め薬を飲んだシクル。

「私だって……うぶ、まさかこっちのナツが車から降りたらああなるなんて……フフ、思

わなかったなあ……うつぷ」

「う！　そ、それはもういいだろ!?　てか、あっちのお前があんなに怖いなんて……俺、考えもしなかった」

「止めたのに聞かなかったナツが悪い!!」

10分前——

「止めろって……言ってるでしょおおおおお!!!」

バチイン!!

「ぐもお!!」

先程、あまりにも酔いが回りすぎ、止めて欲しいと懇願したにも関わらず、ナツは運転を止めなかった為に我慢の出来なかったシクルがナツを叩き飛ばし、強制的に止めたのだが……

その際、ナツは車の外へ吹き飛び……

「ひいひい！　ぐ、ぐめんなさいいひい!!」

「……え」

車から降りると、両手で顔を覆い、涙を流し震えるエドナツがいた……。

シクルとルージユは目を点にし、啞然とエドナツを見下ろす。

「……ナツ?」

「……うそお」

「ぼ、僕! 車に乗ると……周りとか、見えなくなつ……ちや、つて……! ほ、ほんとに、ごめんなさいっ!」

ビクビクと震え、シクルに謝るエドナツ。

「……もしかして、ミストガンの言つてた少し違う自分つて……」

「……こういうことお?」

明らかにシクルたちの知るナツではありえない光景に、苦笑を浮かべたため息をついてしまう。

そのため息にすら、エドナツは「ひっ!」と声を上げ、身体を強ばらせる様子を見つめ……ふつと優しい笑みを浮かべるとぼんつとエドナツの肩に手を置く。

「ひい!」

「ナツ……ほら、早く行きましょ? こうしている間にも状況が悪化しちやつてたら大変だよ」

「え……」

はつと、エドナツは伏せていた顔を上げ、シクルを見上げる……

そして、シクルのその微笑む表情を見つめエドナツも、につこりと笑みを浮かべるとシクルの手を握る。

「うん!!」

これが10分ほど前の出来事だ……

エドナツは車に乗り込むと再びシクルの知るような雰囲気の中に戻った。

「はあ……それより、ナツ……今はどこに向かっているの?」

「あ? あー、今はシツカの街の方へ向かっている。ルーシイからの話だとお前の仲間たちはその街の宿に昨日泊まったみてえだからな……」

今頃は徒歩で王都に向かってんじゃねえの?」

「徒歩ってえ……王都までその街からだどれくらいなの?」

ルージュからの問いかけにんー、と少し考え……

「……3日……くらいじゃねえか?」

「3日!?!」

エドナツの答えにシクルとルージュは驚く。

「3日って……あー、でもナツたちなら歩くかもなあ……」

「歩く姿が想像できるよお……あれ?」

「ん? どしたの、ルージュ……?」

シクルの膝の上で抱かれていたルージュが、何かに気づき声を上げ……そちらにゆつくりと指を差す……

その先を、シクルとエドナツも見やうと、そこには……

「……え」

「あれは……!」

大きな大きな飛空船と、大勢の王国軍の兵隊……そして、それらに囲まれ逃げ場のない……

「っ!! ナツ!! みんなっ!!」

「あ、おいっ!!」

「シクル……!?!」

ナツ、ルーシイ、ウエンデイ、ハッピーとシャルルがいた……。

「くそ！ 船が行っちゃもう!!」

王国兵に囲まれながら、上空へと浮かび上がる飛空船を見上げるナツ。

「そんな……あれに乗らないと間に合わないのにつ!!」

「しかもこの状況……まずいわね」

「ど、どうしましょう……!」

「ナツウー!!」

魔法の使えないナツたち……唯一魔法の使えるルーシイだが、今の現状を打開出来る

星霊は今おらず……万事休す……

「くっそお……!!」

ぐつと拳を握りしめ、苦々しく唇を噛み締めるナツ……

「皆、伏せてっ!!!!」

「!!!!っ?!」

突然響いた女の声……驚きながらも、そのよく聞いたことのある声の言葉に従い、
バツッ! と頭を下げるナツたち。そして……

「はああああつ……月竜の……翼撃!!!」

ズゴオオオオオオオン
!!!!

ナツたちの頭上を銀色の光が迸り、ナツたちを囲っていた王国兵を全て、薙ぎ払った。

「んなっ!」

「この、魔法は……!」

「もしかして……」

目を見開くナツたち。そして……

スタツ……

「つ……みんな、無事!」

ナツたちの目の前に金色の髪を靡かせ、降り立つ女、シクル……彼女はナツたちを振り返し、声を上げる。

「っ! シクルっ!!!」

「シクルだあ!!」

「シクルさん!!」

「わあ!」

「あんた……どうして」

突然現れたシクルにナツたちはパアツと笑顔を浮かべ、ほつと強ばらせていた体の力を抜く。

「説明は後で……今は!」

シクルがそう言うのと、ギヤギヤギヤツ! と音を立て、1台の魔導四輪車がナツたちの目の前に止まる。

「な、なんだア!」

「え、これって……」

「妖精の尻尾のマークがありますよ……!」

「話はルーシイから聞いた、乗れ」

運転席からする声にナツたちは目を見開き、驚く中……シクルはすぐにその助手席へと乗り込む。そして、窓から顔を出し

「早く!! っここから逃げるよ!!」

と、ナツたちに喝を入れる。

その声にはつと我に返るナツたちは急いで後部座席に乗り込み、全員が乗り込んだのを確認すると……

「飛ばすぜ……落ちんなよ GO……ファイヤー!!」

その掛け声の瞬間、魔導四輪車は物凄いスピードで走り出し、一瞬で王国兵を振り切る。

「すっごーい!! あっという間に逃げきっちゃった!!」

「助かったわ」

「ありがとうっ!!」

「お……おお……うぷ」

「ナツさん……大丈夫ですか?」

走り出した瞬間に乗り物酔いを起こしたナツの背を、ウエンデイが擦りながら、助け出してくれた人物に礼を言うルーシイたち。

「よかった、皆と無事に合流できて!」

「あたし達、探してたんだよお!」

「王都へ行くんだろ？ あんなおんぼろ船より、こっちの方が早えぞ」

運転している人物、エドナツの声にナツたちは、ん？ と首を傾げる。

「あれ…………？」

「この、声…………」

「ふふふ…………」

ナツたちの様子に小さく笑い声を漏らしながら…………目を合わせるシクルとルージユ。

「妖精の尻尾、最速の男…………」

「…………あつ…………!?」

ナツたちを振り返ったエドナツの姿に、口を大きく開き、呆然と見つめるナツたち。

「ファイヤーボールのナツとは、俺のことだぜ！」

「「ナツ（さん）っ!?」」

「お、お…………れ？」

「あつははははっ!! 予想を裏切らない反応…………!」

「ぶくくくう! やっぱりそおなるよねえ!」

予想を裏切らないナツたちの反応に笑いが止まらないシクルとルージユ。

「ナツ? え……もし、かして……こっちの……エドラスの、ナツ?」

「ルーシイが言つてた通り、そっくりだな……で? あれがそっちの俺かよ……情ねえ」
乗り物酔いを起こすナツに呆れたため息をつくエドナツ。

ナツはそんな事に気づきもせず、ただただ乗り物酔いに苦しんでいた。

「こっちのナツさんは乗り物が苦手なんです」

「乗り物乗つた瞬間にこれだもんね……私もだけど」

ウエンデイとシクルの言葉に呆れた様子を強く見せるエドナツ。

「それでも俺かよ? こっちじゃ俺は、ファイヤーボールって名前の、運び屋専門の魔導士なんだぜ」

「へえー……」

エドナツの言葉を聞き、その横顔を見つめるシクル。すると、後ろから「あれ?」と言うつぶやきが耳に届く。

「ん?」

「今気づいたんだけど……この魔導四輪、SEプラグついてないわ!」

「SEプラグ?」

「あーSELF ENERGYプラグって言ってね、運転手の魔力を燃料に変換する装置の事よ」

ルーシイの口から出たその単語に、疑問を持ったウエンデイ。

そんな彼女の疑問にシクルは答えると、ルーシイと同じように車内を見てみる……

「確かに……そう言われてみると、ないね」

「あ、そつかあ……こつちじゃ人が魔力をもつてないから、SEプラグが必要ないんだねえ」

ぽんつと手を叩き、合点がいったという様子のルージユの言葉になるほど、とシクルやルーシイたちは頷く。

「完全に魔法だけで走ってるってことだね」

「何よ。車に関しては、アースランドよりもこつちの方が全然進んでるじゃないの」

シクルたちがそう会話を続けていると……

突然エドナツは急ブレーキをかけ、車を止める。

「うっわっ!!? ちよ、どうしたの、ナツ?」

「ちよつと!?!何よ急に……」

心配し、エドナツの顔を覗き込むシクルと、抗議の声を上げようとするシャルル……

だが、その声が上がりがきる前に、エドナツが口を開く。

「いや……、そうとも言えねえな」

魔力が有限である以上、燃料となる魔力もまた有限……今じゃ手に入れるのも困難

だから……俺が連れてってやるのはここまでだ、降りろ」

「「「「「なっ……?!」「」」」」

エドナツのその言葉に驚愕し、目を見開くシクルたち。

「これ以上走ったら、ギルドに戻れなくなるんだ。あいつら……また勝手に場所を移動したからな」

「おお!! 生き返ったあ!!」

そこに、乗り物酔いから復活したナツの叫び声が響き、1人、車から飛び降りていた。

「もう1人の俺は物分かりがいいじゃねえか……さあ、降りた降りた!」

「ちよ、ちよつと……!」

シクルが止めるのも聞かず、エドナツはシクルたちを車から降ろした。

「王国とやり合うのは勝手だけだよお……俺たちを巻き込むじゃねえよ

今回はルーシイの……お前じゃねえぞ? 俺の知ってるルーシイの頼みだから、仕方なく手を貸してやった……だが、面倒はごめんだ。

俺は……ただ走り続けてえ……

それに……走ってれば、あの時のことを忘れられる……」

「つ……ナ、ツ?」

「おい!」

どこか遠い目をし、そう呟くエドナツに、何かを感じ取るシクル。と、乗り物酔いから復活したナツがエドナツに突然話しかける。

そして……

「お前も降りろ!!」

と、ナツはエドナツを魔導四輪車から引きずり降りそうとする。

当然、エドナツは必死に抵抗する。

「バツ！ てめえ……何しやがる!!」

「あ、ちよ、ナツ!! 待って……」

「同じ俺として、一言言わしてもらおうぞ」

「よせ!! やめろ!! 俺を……俺を下ろすなあ!!」

「あ……」

エドナツの必死とシクルの静止の言葉も虚しく、エドナツは魔導四輪車から引きずり降りされた。

「あーあ……」

「お前……なんで乗り物に強え？」

「そんなことかい!?!」

ものすごい形相でエドナツを引きずり降りすから怒っているのかと思えば、ナツのまま

さかの質問にシクルとルーシイが突っ込む。

「ひっ……」

「ん?」

顔を近づけ、すごい迫力で詰め寄せられたエドナツは身体を固め、顔を隠し……そして
「ご……ご、ごめんなさい……僕にも……わ、わかりません」

「……は?」

エドナツは泣きながらそう言う。その隣ではシクルとルージュがあーあと、ため息を
ついていた。

「やっちゃったね……」

「だねえ」

「お……お前……本当に、さっきの……俺?」

嘩然とエドナツを指差し、そう問いかけるナツ。それですら、体を揺らしビクビクと
怯えるエドナツ。

「は、はい! よ……よく言われます! 車に乗ると性格変わるって……!」

「……こつちが本当のエドナツだあ!!」

「ひいひいひいっ！　大きな声出さないでえ……！　怖いよ……」

ハッピーの声に更に体を震わせ、怯えるエドナツ……。そんな彼の様子に開いた口が塞がらない様子のナツ……

「ニシシ……鏡の物真似芸でもする？」

頭を抱えて怯えるエドナツを見て固まるナツにルーシイは楽しげな、何かを企んだ様子を伺わせた顔をしている。

「ごめんなさい！　ごめんなさい！！　でも……僕には無理ですう！！」

「ああ？」

「あー、エドナツの性格分かったでしょ……なら、そんな睨まないであげてねー」

最終的に身体にしがみつくとエドナツの頭を撫で、慰めながらナツをどーどーと抑えるシクル。

「ル、ルーシイさんの頼みだからここまでできただけなんですう……」

エドナツは怯えながらそう言う。

「いえいえ、無理しなくていいですよ」

「そーよ？　それに、ここまで送ってくれただけで十分だよ」

ウエンデイとシクルが笑みを浮かべ、そう言うときエドナツは少し落ち着いた様子で、笑みを浮かべた。

そんな様子にほっとシクルも息をつく。

だが……

「こんなのいても、役に立ちそうにないしね」

「シャルル!!」

シャルルがそう言うのとエドナツは再び、顔を下ろしてしまい、周りが見れなくなる。

だが、すぐに顔を上げウエンデイを見つめる。

「そ、そういえば……もしかして、もしかして、ウ……ウエンデイさんですか？ あちらの……」

「はい！ そうですよ」

エドナツの質問に嫌な表情をせず、頷くウエンデイ。そんな彼女にほんの少し、頬を緩ませるエドナツ。

「うわお……小さくて可愛いね」

そして、次にエドナツはナツへと視線を向ける。

「それで……そっちが、アースランドの僕さんだよね？」

「どこにさんづけしてんだよ」

「だから、そーいう言葉使いたくない!」

まだ少し表情の険しいナツの頭に1つ、拳を落とすシクル。

「オイラはハッピー。こつちがシャルルだよ！」

「ふん！」

ハッピーが自己紹介をすると、シャルルは顔を背けてしまう。

そして……

「あたしは、もう知つてると思うけど」

「ひいひいひい!!! ご、ごめんなさい!!なんでもしますからあ……!!」

ルーシイに声をかけられた瞬間に震え上がるエドナツ。

「……」

「お前さ、もっと俺に優しくしてやれよ」

魔導四輪車の影に隠れ、怯えているエドナツ。

「こつちのルーシイさんは……皆さんをここまで運ぶだけでいいって……だから、ぼく

……」

エドナツの言葉でやっと、シクルたちは自分たちが今、何処にいるのか気づき……辺りを見る。

そして、崖の下に広がる、大きな大きな都市に目がいく。

「大きい!!」

「すげえ……」

「これが……王都」

目の前に広がる王都……それを見て、ナツはエドナツと肩をガツ！ と組む。

「なんだよお！ 着いてんならそう言えよ！」

「うわあ!! ご、ごめんなさい!？」

「怒ってないんだからそーやって震えないの」

「ううう……だつてえ」

「……」

目元にたくさんさんの涙を溜め、シクルに慰められながらゆつくりと落ち着くエドナツに苦笑を浮かべる一同。

そして、ふつとナツはエドナツから離れ、目下に広がる王都を見下ろす。

「いいぞ……こんなに早く着くとは思わなかった！」

「あのどこかに、魔水晶に変えられたみんなが……」

「さっさと行くわよ」

ぼそつと呟き、先に王都へと向かって降りていくシャルル。

「あ、待ってよお!!」

「さ、行(っ)!!」

「はい!!」

「んじや、ありがとな」

「あたしによろしく！」

エドナツに礼を言い、王都へ向かうシクルたち……

そこに……

「まつ、待つて!! シクル!!」

「ん？」

シクルを呼び止めるエドナツ。エドナツを振り返り、見上げると……

「ほ、ほんとに……行くんですか？ シクル……ほ、僕は……」

「……ナツ……」

エドナツは不安そうにシクルを見つめていた。

「シクル……僕は、僕は……君に行つて欲しくないんです！ あいつらは……王都の、人たちは……君を」

「ごめん、ナツ……それは聞けないよ」

エドナツの言葉を遮り、そう告げたシクル。

はつと目を見開き、シクルを見つめるエドナツ。

「例え、この先に……何が待ち受けていようと……私は、行くよ……助けに、皆を……私にとって、妖精の尻尾の皆は、大切な……それこそ、1人も欠けてはならない……大切な家族だから!!」

だから、私は行くよ……

そう言い、シクルはにつこりと微笑み、先に行ったルーシイたちを追った。

ふと、背後で会話をしている2人のナツをチラッと見やう……

その先では、ナツの言葉に、何かを感じたのか、目を見開き固まるエドナツの姿が……

「……（何、言ったのかな……）」

何を話したのか、シクルは気になったがすぐにナツもシクルたちを追い、走り出し、会話が終わった様子であった為、聞くのはやめた。

この先……シクルたちの進むその先に待ち受けるものは……そして、この世界の未来は……

仲間たちの運命は……

はあ……と、シクルが後ろを振り返ると……

シクルたちの歩く、少し後ろの方で何故かただ1人、何かを考え込み、唸るナツがいた……

「ちよつとナツ？ 何やってんのよ……」

「むむむ……んぬあー!! なんでこつちではなってるのに俺はまだなんだよおー!!」

「……はあー」

「ちよつと、アレ……何やってんの？」

深いため息を吐くシクルを見て、不思議に思つたルーシイが声をかけ、問いかけると

……

「ああー……何かね？ さつき……」

そう、それは王都に着いた時に発覚したのだ……

ナツの言葉を聞き、何か思うところがあつたのだろう、考え込むエドナツ……

「……んじや、俺は行くぞ！ ここまでサンキューな！」

「ま、待って!!」

「んあ……?」

先に行ったシクルたちを追い、ナツが走り出そうとすると……突然、エドナツがそれを止めた。

不思議に思い、ナツは振り返ると……先ほどでの不安と恐怖の入り混じった表情から変わり、首を傾げ先にいるシクルとナツを交互に見やつているエドナツがいた。

「……1つ、いいですか?」

「……何だよ?」

「ずっと気になってたんですけど……そちらの僕さんとシクルはどんな関係なんですか……?」

「……は?」

エドナツのその言葉に、目を点にし放心するナツ。

そして、その言葉の意味をやつと理解すると……

「んなつ……な! ど、どんな関係つて……そりやあ……ただの、仲間だけ……よお(まだ返事もらえてねえし……仲間止まりだよ……な)」

自分でいい、ずーんと沈むナツ。そこに、追い打ちをかける話がエドナツの口から出てくる……。

「あれ? そーなんですか? そつか……そーいうところも少し違ってくるんですね」

「あ？ なんだ……そっちはちげえのか？」

「僕達は……恋人、です……大切な」

少し顔を俯き、寂しげに笑みを浮かべ告げたエドナツ……その口から出た言葉に……

ナツはポカーンと固まる。

そして……

「んな……なっ！」

なにイ!? こっちの俺は……付き合つて、んのかああああ!!」

「ひいひいひいっ!? ぐ、ごめんさいいいいいっ!!」

……これが、エドナツと別れる最後に話した内容だ。

それから、ナツは頭を抱え、俺は……まだ……俺は……と、延々と繰り返しているのだった。

「……てな訳よ」

「ああ……なるほど……そーいうことね……」

「まさかこっちのナツとシクルは付き合ってるなんてねーオイラもびつくりだよ!」

「あたしもお! こっちはまだまだなのになえ」

ハッピーとルージュの言葉にむうと頬を膨らませるシクル。

「悪かったわねえ……まだまだで……あ、そーだルーシイ」
「ん？ なあに？」

1番前を歩いていったシクルから呼びかけられ、首を傾げるルーシイ。シクルはルーシイを振り返り……

「あのね……これが終わったら、ちよつと聞きたいことがあるんだけど……いいかな？」
「聞きたいこと？ いいけど……今じゃダメなの？」

ルーシイからの問いかけに苦笑を浮かべ、「今はね……」と、告げるシクル。

「今は皆を助ける方が優先だと思うし……そんなに、急ぎの話じゃないから……」

いいかな？ と質問をするシクルを見つめ、フツツと笑みを浮かべるとルーシイはコクツと頷き

「もちろん!! いいわよ」

と、答えた。

「ありがとう」

につこりと微笑み、礼を告げるシクルにつこりと微笑み返すルーシイ。すると……

わあああああつ!!

「ん?」

大きな歓声が聞こえ、シクルたちはそちらへと、視線を向けると……

「なんだか……向こうの方が騒がしいですね」

首を傾げながら、シクルたちを見やい呟くウエンデイ。

「パレードでもやってるんじゃないの？」

「んー？ ……ちよつと見てくつか!!」

「あいー!!」

賑やかな集団を見つけ、沈んでいたナツはピクツとその声に反応し、興味津々で走り出した。その後を追ひ、ハツピーもついていく。

「て、ナツ!? ハツピー! 勝手に行かないでよー」

「あんたさつきまで落ち込んでたじゃない!」

「やっぱ単純だねえ……」

シクルの静止も聞かず、走り出したナツ。

そんなナツに反応し、ルーシイも走り出し、はあとため息をつき、シクルもナツの後を追う。

その後ろにはルージュやウエンデイたちもついてきていた。

そして、集まる群衆の中をかき分け、中央の様子を伺おうとした時だ……

「いたつ……ちよつと、ナツ急に止まんないでよ！」

「ん？ ルーシィ……」

シクルの前の方を進んでいたルーシィから、ナツへの抗議の声が響いたのだ。

だが、ナツはその声に反応を示さず……ただただ目の前を見つめ、目を見開き驚きを隠せずにいる様子だった。

そんなナツの様子に不思議に思ったシクルたち……だが、次に目に映った光景にシクルたちも驚愕を露わにする。

「……え？」

「魔水晶……!？」

「まさか……」

「これってえ……」

「マグノリアの皆……?」

「しかも、一部切り取られた跡があるわね……」

「他の皆は……別のところってことね……（あれに滅竜魔法を当てれば……皆は元に戻るってこと、ね……）」

目の前にある魔水晶を見つめ、呆然とシクルたちは立ち尽くしていると……広場の中央で王座の椅子に腰掛けていた老人……恐らく、この国の王であろう男が立ち上がる。

そして、前に出てくると一斉に民からの歓声上がる。

「陛下だあー!!」

「陛下バンザーイ!」

「バンザーイ!!」

王は民を見下ろし、声を張り上げる。

「エドラスの子らよ……我が神聖なるエドラス国はアニマにより、10年分の魔力を生みだした!」

その言葉にシクルたちの表情は険しくなる。

「生み出したって……あいつ!」

「オイラ達の世界から奪ったくせに……!」

「エドラスの子らよ……共に笑い……共に歌い、この喜びを分かち合おう!!」

王の宣言に大きな大歓声が巻き起こる。

「っ……!!」

ギリツと拳を握り、耐えるシクル……そんな彼女を不安げに見上げるルージユ。

「エドラスの民には、この魔力を共有する権利があり、また……エドラスの民のみが未来へと続く、神聖なる民族！」

我が国からは誰も魔力を奪えない!!

そして我はさらなる魔力を手に入れると約束しよう！」

ピキンツッ！ と王の振り下ろした杖が魔水晶に叩きつけられ、魔水晶の一部が砕かれる……。

「これしきの魔力がゴミに思えるほどのなア!!」

「っ!!!」

「っ、ナツ!!」

王と民の様子に我慢の限界に達したナツが拳を握り、足を1歩、前に進めるとそれをシクルが後ろから抱きつき、止める。

「っ、離せシクル!! 俺は……!!」

「分かる……気持ち分かるよ！ でも……」

でも今は……、その時じゃない……まだ、皆を助けるには力がない……今はまだ……今のままじゃ、王国軍に捕まるのが落ちだよ……」

「そんなん……！ やつてみなきやわかんねえだろ!？」

シクルの言葉に声をさらに上げるナツだった。が……

「お願いッ!!」

「っ……!」

「……お願い、ナツ……今は、耐えて……」

私も……ハッピーもルージユも……ルーシイたちも、同じ気持ちなの……でも、今はまだ……皆を助けられない……

今のままじゃあ……ダメなの……だから、お願い……」

そう言い、顔を上げたシクルの瞳は揺れ、辛そうに、悲しそうに……そしてその感情を覆い尽くす程の怒りが入り混じっていた……。

ナツはルーシイたちにも視線をやり……その場の全員が耐えてることに気づくと……身体からそつと力を抜いた……。

その後、群衆から離れたシクルたちは城下町のある一角にあるホテルへと泊まり、今

後について話し合いをしていた。

「これからどうする……? なんとかあの魔水晶にされた皆をなんとかしたいけど……」

「どうすればいいんでしょうか……」

「大丈夫だよ」

俯きながら対策の浮かばない自身に溜息をつきウエンデイ。そんな彼女の頭にポツと手を置き、撫でるシクル。

「大丈夫、あの魔水晶を元に戻す方法は分かってるわ」

「え!?!」

「はあ!?!」

「シ、シクル……それ、ほんと!?!」

シクルの言葉に驚き見つめるルーシイたちに、コクリと頷いて見せるとミストガンから聞いた話を説明するシクル。

「……つまり、シクルの魔法でみんなを元に戻せるって訳なのね……」

「正確には、ナツとウエンデイも出来るはずなんだけど……（多分ミストガンから薬もらってないんだろなあ）」

「でも、元に戻す方法がわかってても他の魔水晶がどこにあるか分からないよお？」

シクルの膝の上に座り、シクルを見上げ呟くルージユの言葉に「そーなんだよねえ」と苦笑を浮かべるシクル。

「探せるところは探しましたけど……、魔水晶らしきものはなかったですもんね……」

「やっぱりお城かなあ……」

んー、とシクルたちが首を傾げ何かないか、と考えていると……

「んがー!! やっぱり我慢できねえ!! 俺ア城に乗り込むぞおおっ!!!」

「ちょ、うるつき……っ!」

うがぁー!! と怒声を上げ、吠えるナツ。

「もう少し待ってちょうだい。」

吠えるナツさんに唯一、ここまで一言も喋らず、何かを紙に記していたシャルルがそう言った。

もちろん、ナツがそれに黙って従うはずもなく……

「何でだよ!?!」

「ちゃんと作戦を立てなきや、みんなは元に戻せないわよ」

「そうよ、ナツ……闇雲に行つてさらに状況を悪化させたら大変でしょ？」
「っ……」

シャルルの言葉と、その言葉に続いたシクルの言葉を聞き、口を閉ざすナツ。

「皆……一体何処にいるのかなあ……」

「……それを知るには……」

「王に直接聞くしかないわね」

ウエンデイの言葉を遮り、シャルルがそう言う。

「でも……きつと、教えてくれる訳……」

「ンなもん、殴つてやればいいんだ!!」

「それは違うと思うけど?」

「ねえ……王が知つてるのは確かだと思ふけどさあ? どうやって王のところまで行く

のお?」

「それは……」

ルージュの疑問にシクルはふつとルーシイに視線を向ける……。

ルーシイもシクルの視線に気づき、少し首を傾げるも……はつとなにかに気付く。

「そつか……いけるかもしれない、王様に近づく事事が……できるかもしれない!」

「本当か!」

「それは……」

「どういう事……?」

ルーシイがシクルを見つめるとシクルもコクリと頷く。ニツと笑みを浮かべ、ルーシイはナツたちを振り返り、告げた。

「ジェミニよ!!」

「ジェミニ……確か、黄道12門の?」

「そう! ジェミニは触れた人に変身できるんだけど、その間、その人の考えてる事まで分かるのよ」

「つまり……、ジェミニの力を使い王様に変身することが出来れば、皆の居場所が分かるかもしれないって事よ」

ルーシイとシクルの説明におお!! と声を上げるナツたち。

「おお!!」

「なるほどお……!!」

「問題はどうかやって王様に近づくか……ね」

「さすがに護衛が多すぎて簡単には……」

1つ、問題が解決したのにも関わらず、再び新たな問題にぶつかり、唸るシクルたち。

そこへ……

「王に近づく方法なら……あるわ」

シャルルの言葉が響く。

シクルたちがシャルルに顔を向けると、シャルルはこの部屋についてからずっと何かを書いていた紙をシクルたちへと見せた。

「それは？」

「城から外への脱出の通路よ……町外れの坑道から城の地下へと繋がってるはずだわ」

「え……！」

「すごい！シャルル、何で知ってるの!？」

ウエンデイが目を輝かせ、シャルルに問いかけると……

「情報よ……断片的に浮かんでくるの」

「じょう……ほう？」

シャルルの言葉に首を傾げるルージュ。

「ええ、エドラスに来てから少しずつ地理の情報が追加されるようになったわ」

「オイラぜんぜんだよ……ルージュは？」

「え……」

ハッピーからの問いかけにルージユは目を見開く……そして、シャルルに視線を向け、次にシクルを見上げた。

「どうやらルージユはハッピーの質問に、どう答えればいいか……分からないようだ。『あー……情報って、何かな?』」

困惑するルージユに代わり、シクルがシャルルへと質問をすると、シャルルはここへ来る前にハッピーやナツたちに話したことをシクルとルージユにも説明をした。

そして、その話を聞いた後……

「……え」

「それは……」

驚愕を隠せないシクルとルージユ。

「その様子じゃあ、あんたも何も知らないみたいね? はあ……どうして、あんたたちは

任務のことを知らないのかしら……」

「に、任務って……そんな」

そんなの……なかったはず……と、言おうとルージユは口を開くも……

「とにかく、そこから城に潜入できればなんとかなるかもしれないわ」

シャルルのその言葉に遮られ、この話は終わった。

「おっしや! 皆を元に戻すぞ!!」

「おおーっ!!」

「出発は夜よ、今は少しでも休みましょ」

シャルルの言葉に頷き、部屋の電気を消し、各々割り当てられた部屋へと入っていった。

1度解散をしてから十数分後……

ルージユは窓の近くに座り、空を見上げていた。

「……なんで……なんでえ? (シャルルの話していたあの話……お母さん達の言ってたことと……違う)」

何がどうなっているのか、分からず混乱するルージユ……そして、ふっと考えること……

「お母さん……お父さん……会いたいよお」

アースランドへ飛ばされた時、離れ離れとなった両親……今、どこで何をしているのかルージユに知る手はなく、会いたい気持ちと寂しい気持ちに顔を俯いている……。

「ルージユ……」

「あ……」

俯いていた頭にそっと、温かい手が触れ、その声に顔を上げると……そこには、予想と違わず、シクルがふつと柔らかい笑みを浮かべ、ルージユを見下ろしていた。

「シクル……」

「ルージユ……さっきの話、気にしているの？」

「……ん」

シャルルの口から語られた任務……それは、シクルたち、滅竜魔導士の
// 抹殺 //

……

「そんな任務……ないって……お母さんとお父さんは、話してたのになあ……」

どういふことかなあ……と、シクルを見上げ声を震わせるルージユ。

「ごめんね、そこまでは私も分からない……でも、きつと……ルージユのお母さんたちは間違つてないよ、だから……一緒に真実を見つけよう？」

本当のことを……ね？

「……うん」

「それと、今回のことが落ち着いたら……また、お母さん達を探そ？」

「シクル……うんっ!!」

シクルの微笑みに、混乱していた思考も落ち着いた様子のルージユはほわつと笑みを浮かべ、頷いた。

「さて……作戦に支障が起きないように……もう休もう?」

「あい!!」

シクルの言葉に元の元気を取り戻したルージユはシクルに抱き着くと、その肩に乗り、一緒にベッドへと横になった。

城への侵入まで残り数時間……

そして、シャルルやハッピー……ルージユにとって、辛い事実が語られるまで……残り1日……

その時は……近い……

67話 衝撃的な事実

ホテルで一時の休息が終え、ついに城への侵入を決行に移したシクルたち……
現在シクルたちはシャルルの道案内で城の地下へと続く坑道を松明で照らしながら歩いていた。

「シクル、……壊せる？」

「ん？ ……？ おっけ、任せて」

シャルルの示した岩場を前に立ち、拳を握ると一振りて岩を砕く。すると、砕かれた岩場の奥から新たな道が繋がる。

再びシャルルを先頭に坑道を進む。

先頭を歩くシャルルを見つめ、ふとシクルは疑問に感じていたことを思い浮かべる。
「……（シャルルの話……信じていない訳では無いけど……何かおかしい……本当に

……本当にルージュたちは……私たちの抹殺任務を与えられていた……の?」
そうじゃなければ……或いは……

「もう!! いーかげんやめなさいっ!!」

「んんんっー!!!」

考え込んでいた思考の端で大声で怒鳴るルーシイの声と何かを唸るナツの音が聞こえ、そちらを振り返ると……

「……何やってんの?」

ルーシイが松明をナツの口に突っ込み、ナツはそれを全力で抵抗していた。

「ナツがふぎけるのよっ!!」

全く……と、眉を寄せぶくうと頬を膨らませるルーシイを見て、ぷふつと笑ってしま
うシクル。

「まあまあ、そー怒らないのルーシイ……シワ寄ってるよ? それとナツはこんな時に
ふぎけない……分かった?」

「はーい／おう……」

暫く歩き続けるとシクルたちは狭い道から広い空間へと出た。

「ここから城の地下に続いているはずよ」

「にしてもすつげえな……その情報ってのはよお」

「ほんとねえ……シヤルルがいてくれて助かったわ」

先頭を進むシヤルルを見て、笑みを浮かべ、そう呟くナツとルーシイ。

だが、その後ろでは……

険しい表情を浮かべるシクルがぼんやりと、考え事をしていた。

「つ……（やつぱり、何か……ひっかかる）」

「……シクルう？」

難しい表情を浮かべるシクルを不安そうに見上げるルージュに気づき、安心させようとシクルが笑みを浮かべた時……

「つーー!! 皆、避けてッ!!!」

切迫したシクルの叫び声。驚くナツたち。

その次に響くのは……

「え……きゃああッ!!!」

「つ……ルーシイ!!!」

ルーシイの悲鳴が聞こえ、そちらを振り返ると粘着質のなにかに身体を拘束され、動けないルーシイ。

何かに捕まってしまったルーシイに続き、ナツとウエンデイもそれに縛られ、拘束されてしまう。

「きゃあ!!」

「ンだこりやあ!!」

「ウエンデイ!!」

「ナツ!! ルーシイ!!」

「っ……皆!!」

ただ一人、謎の粘着物から回避出来たシクルは空中で一回転し、地へと足をつくると抱いていたルージユをその場に降ろす。

そして、身動きの取れないナツたちを救出すべく、すぐに行動を起こす。

「ダンツ!! と地を蹴り、一番近くにいたルーシイの拘束を解こうとするも……」

「っ!!」

シクルの先を一本の槍が投げられる。

咄嗟に飛び退き、避けるが……次の瞬間、ドオオオント!! と、音を立て槍の刺さった地が爆発。

「う、わあ!!」

「!!」「シクルっ!!」「!!」

ダメージ自体、負っていないものの爆風により態勢を崩され……その隙に、シクルの首と手首、そして、左足に粘着物が絡まり、動きを封じられてしまう。

「!・ちいっ……!」（油断したっ……!）」

いつの間にかシクルたちの周りは軍が囲っており、逃げ場は塞がれている……。

それでも、何とか拘束から逃れようと、粘着物を何とかしようとしていると……

コツツコツツ……という足音と共に、少し違うがシクルにとって、とても馴染みの深い匂いがその嗅覚に届き、動きを止める。

そして、足音の発信他をじっと驚愕の瞳で見つめる……。

「ほお……今のを完全とは言わずとも避け……ダメージはなし……か、なかなかやるよ
うだな」

暗闇から響く声にナツたちも目を見開く。

「…………え」

「お、おい……」

「う、うそ……」

「まさ、か……」

「あんた……」

「そんなあ……」

「つ……エル……エドラスの……エルザ」

王国軍に仕える、こちらの世界のエルザが目の前に現れた。

「そして……こいつらが、例のアースランドの魔導士か……確かに、そっくりだな……」

ナツ・ドラギオン、ルーシー・アツシユレイ……そして、貴様が……」

エドラスのエルザはそこで一度言葉をきくと、コツツと地に膝をつき、ずっとエルザをキツと睨みつけていたシクルに近づき……

ガシッ！

「いっ……!!」

いきなりシクルの前髪をわし掴み、少し俯いていた顔を無理に上げさせる。

「シクルっ！ てめ……！」

「ちよ……離してっ! (これで禿げたらエルを恨むっ!!)」

緊迫した状況のはずが、シクルの心中は目の前のエルザではなく、今ここにはいないエルザを思い浮かべ、愚痴をはなっていた。

「……貴様が、アースランドのシクル……歌姫か……なるほど、確かに同じだな……顔も……声も……そしてその、反抗的な瞳も……」

「はあ……? 何言ってるの……つか、いーかげん離してくんない!? 本気で禿げちゃうっての!!」

拘束され、動けない今も反抗的な態度が崩れないシクルに、ふんつとエドエルザは鼻で笑うと(今鼻で笑った!?) 笑ったわよね!? はっ倒す!! b.y. シクル)シクルから手を離す。

「わっ!」

いきなり掴みあげていた手から解放され、身体のバランスが保てず、額から地面につかるシクル。

そして、地味に痛む額を抑えながら、恨めしそうに顔を上げ、エドエルザを睨みつける……

「……ええ?」

シクルの見た先ではなんと、エドエルザはシャルル、ハッピーそしてルージュを前に、膝をつき、頭を下げていた……。

「……エクシード」

「……エク、シー……ド？」

エドエルザの眩きの後に後方に控えていた王国軍の兵士達もシャルルたちに頭を下げ始める。

そして……

『お帰りなさいませ、エクシード』

一斉に声を揃え、告げられるその言葉に……

シクルやナツたちはもちろん……声をかけられるシャルルたちも驚愕で目を見開き、身動きが取れないでいた。

「エクシード……？」

「っ!？」

「シャルル……ハッピー、ルージュ……あなた達、いったい……」

「っ……ルージュ！」

「侵入者の連行、ご苦労さまでした」

エドエルザのその言葉に震えを強くし、呆然と立ち尽くすシャルル。

「っ……………」

「……………シャル、ル？」

「なん……………でえ？（分からない……………分からないよお……………）」

明らかに混乱しているルージュたちと、ナツたちに声をかけようとするシクルだが……………途中でぶつり、と意識は途絶え……………気絶してしまった。

……………？……………の……………ぶ、で……………か？

「……………だ、れ……………？」

暗い意識の中、誰かの声が聞こえ、ゆっくりと沈んでいた意識が浮上する。

重たい瞼を押し上げ、目を開くと……………目の前には心配そうに顔を覗き込む一人の女

……………

「……………ええ？」

その姿にシクルは目を見開き、ぼうっとした意識も一瞬で覚醒……

「良かった、目が覚めましたね……」

にっこりと微笑む目の前の女を驚愕の眼差しで見つめる……

「初めまして……私はシクル……この世界の、貴女です」

「貴女も……私？」

シクルがこちらの自分と出会っていた頃、ナツとウエンディは別の地下牢に入れられた。

その中にシャルルとハッピー、ルージュそしてルーシイの姿はなかった……。

「ほーいつ」

「んぎゃー！」

「きゃー！」

王国軍の1人、〃ビューズ〃 という奴に牢への放り投げられ、ナツは1度柱へと頭突きをするも牢はびくともせず……

「ンのやろっ……皆は何処だア!!!」

「ああ？ 皆？」

ナツの言葉に意味がわからないと言った様子で首を傾げるヒューズ。

「シャルルやハッピー、ルージュ……ルーシイさんやシクルさんのことです!!」

ウエンデイの声でようやつと理解の出来たヒューズはケラケラと笑うと言った。

「ああ、あの女か……悪いけど、ルーシイって女には用はないんだ……処刑されるんじゃない？」

「そんなんっ！」

「てめえ!! ルーシイに少しでも傷をつけてみる……許さねえかな!!」

ナツの怒声を受けても笑みを絶やさないうヒューズ。

「おお! スツゲエ怖えな、アースランドの魔導士は皆こんな凶暴なのかよ」

「なんでルーシイさんだけ……シャルルとハッピーとルージュは!？」

ウエンデイのその声にヒューズは、ふっとウエンデイに視線を向けるとニヤツと笑
い、

「エクシードの事か？」

と、言う。

「ハッピーはそんな名前じゃねえ!!」

「任務を完遂したエクシードは母国へお連れしたよ……今頃、褒美でももらっていいモン食ってんじゃないの?」

「任務を……完遂?」

ヒューズの言ったその言葉に、ウエンデイは疑問を感じる……確かに、シャルルたちには任務を与えられていたが……それは、*“放棄する”*と、シャルル自身が言っていたのだ。

だからこそ、目の前のヒューズの言葉を信じられなかった。

「そんな事ありえない……その任務、シャルルたちは放棄したはず!」

「いいや、見事に完遂したよ……」

ウエンデイの言葉に尚もニヤつくヒューズはそう言った。

「……な、何なの? シャルル達の任務って……」

「ん? まだ気がつかねえのか?」

そして、ナツとウエンデイに語られた内容は……衝撃的な話だった。

まず、ルージュたち *“エクシード”* はその種の女王の命令により、6年前アース

ランドへと1000のエクシードの卵が送られたこと。

卵から孵ると滅竜魔導士を搜索し “抹殺” するように情報を持たせているという。

だが、それはアニマの登場で “抹殺” ではなく、“利用” という形に任務内容が変わり、エクシードたちの情報は滅竜魔導士の抹殺から滅竜魔導士を “連行” せよに変わったということらしい。

「そ……んな……そんなっ！」

「うそだ……ハッピーたちがそんな!!」

「カカカツ、つまり……俺たちが本当に欲しかったのは竜の魔力……そして、エクシードは見事に任務を果たした……という事だよ」

そして……

「エクシードにはその更に上の任務が与えられていたのさ……」

「はっ。」

「更に……う、え？」

呆然とするナツとウエンデイを見て、カカカツと笑うと……

「そーさ……更に上級の任務……それは、もう1人の歌姫をこちらの世界に連行……そして、俺たち王国に引き渡すことだ」

「っ!？」

「歌姫の魔力は強大なのさ……そして、その歌声は傷や疲労、体力を回復させることが出来ると言うんだろ？」

その力を持つ奴が2人……こいつらは半永久的に俺達の奴隷とすんのさ、カハツ！」

ヒューズの語ったその内容に……ウエンデイは顔を顰め、ナツも額に青筋をいくつも作り、ガアンツ!! とナツたちを閉じ込める柱を殴り……ギリツと歯を食いしばる。

「おーおー、ほんつとにこええなあ……カカカツ！」

「黙れツ!! てめえ……許さねえ!!」

シクルになんかしてみる……俺が、ただじゃ置かねえぞ!! このやろおっ!!」

ナツの怒声が響き、ヒューズを睨むその目にもさらに強い怒りが現れるが……ヒュー

ズはものともせず、笑いながら立ち去っていった。

「くそ！ 待ててめえ!! おい!!」

「っ……シクルさん、ルーシイさん……シャルルっ……!」

「くそ……っ!! シクルっ」

ヒューズの去った後、その場には悔しそうに顔を歪めるナツとウエンデイだけが残っていた。

その頃……ナツたちに語られたその話をまた、シクルも告げられ、目を見開き驚きを隠せずにいた。

「そんな……まさか、奴らの一番の狙いは……わた、し?」

「正確には私、*“達”*です。奴らは私たちの持つ歌の魔法、その不思議な力を利用しこの国を治めようとしているのです……」

顔を伏せ、告げるエドシクルにシクルはギリツ……と、拳を握り……

「どうして……そんな、私の……私の力は……この力は、そんな為の力じゃないのに!!」

何故……皆……あいつも、この国の王も……

脳裏に浮かぶのは忌々しい男の嫌な笑顔……それを振り払うかのように頭を横に振るとキツと目の前のエドシクルを見つめる。

「とにかく……私たちの力を利用なんてそんな事させない！ だから……ここを抜け出そう？」

シクルの言葉に、はっと顔を上げるエドシクル。

「で、ですが……ここから抜け出すなんて……第一、この牢の鍵が……」

鍵がない……そう、エドシクルが言おうとした時……ニヤツとシクルの表情に笑みが浮かぶ。

そして、シクルはおもむろに懐から何かを取り出し……

「これで……この牢を脱出しちゃおっ！」

シクルの取り出したものとは……そして、ナツとウエンデイの運命は……シャルル、ハッピー、ルージュとは無事合流出来るのか……

そして、魔水晶にされたマグノリアの街人は……一体どうなってしまうのか……

(次回に続きます)

68話 エクスタリアからの逃走

前回から、時を少し遡り……ナツたちが、ヒューズからシャルルたちの任務の内容を聞かされていた頃……

ルージュ、ハッピー、シャルル side

ルージュたちは、シクルたちとは違う場所へと移され、現在大きなベッドの上で横たわっていた。

「……っ、ん……？ あ、れ……ここ、は？」

かすれた声を小さくもらし、体を起こすのはハッピーだ。

ハッピーは少しの間ぼうつと辺りを見渡し、ここがどこかの部屋であることを認識すると、隣で未だに意識の戻らないルージュとシャルルに気が付く。

「…シャルル！ ルージュ！ ねえ、起きて、起きてよ!!」

「……んっ……、ハッピー？」

「……オス、ネコ」

ハッピーがユサユサと体を揺るとシャルルとルージユの意識も戻り、ほっとハッピーは息をつく。

「良かった！ 気がついたんだね」

「ハッピー……あたし達、一体……」

「……眠らされてここに連れてこられたのは確かだね」

「（どこどこだろお……？）」

「……」

ハッピーとルージユが部屋を見渡していると顔を伏せるシャルル。

「……シャルル？」

「どうしたのお……？」

シャルルの様子に心配になり、ハッピーとルージユが声をかけると……シャルルは悲しげに、そして悔しそうに苦い笑みを浮かべる。

「ごめん……私の『情報』が罠だった……」

「そ、それは……オイラたちはたまたま見ただけだよ！ シャルルのせいじゃな

いよよ！」

「シャルル……」

「私……誓ったのに……ウエンディを、絶対に……守るって……」

ぽつりぽつりと眩き、拳を硬く握るシャルルの表情は辛く、ハッピーやルージュも苦しい気持ちになった。

そこへ……ガチャッと音を立て、開かれる扉

「!!」

驚き、扉の方をルージュたちが振り返ると……そこにいたのは

「お前達がアースランドで任務を完遂した者達か? ……うむ、いい香りだね」

バルファム

「え……」

「……」

「「一夜つ!」」

扉を開け、入ってきたのはルージュたちもよく知っているアースランド、青い天馬のエースの1人、一夜そっくりな人(猫)物だった。

「……てか、猫?」

「何を驚く? 同じエクシードではないか!!」

「エクシード……(そっかあ……こつちの一夜は……)」

何のことか分からない、と首を傾げるハッピーとシャルルの隣で唯一その言葉の意味を理解し、目の前の一夜を見つめるルージュ。

すると、猫の一夜の後ろからもう一匹、黒く少し背の高い猫が現れた。

「ニチャさん、彼らは初めてエドラスに来たんですよ？ きつと、エクシードを見るのも初めてなんでしよう」

「おお！ そうであつたか……私はここ、エクスタリアの近衛師団隊長を務めるニチャだ」

一夜だと思っていた猫、エクシードの名前は “ニチャ” というようだ。

そして、後に入ってきた黒いエクシードは

「ぼきゅはナデイ、任務お疲れ様」

と、名乗り、目の前のルージュたちを誇らしげに見つめた。

「任務？」

「……」

「あたしは……」

首を傾げるハッピーと、顔を俯けるシャルル……そして、何かを言いたげそうなルージュ

「早速であるが、女王様がお待ちである……ついて来たまえ」

「女王様だって!？」

そう言いニチャは外へ出る。

ナデイは扉の前でハッピー達が来るのを少し待っていた。

「シャルル、オイラに任せて」

「シャルル……とりあえず、ここにいても何も情報もないしさあ……彼らについてい

「お？」

「……」

なおも俯くシャルル……

「オイラが絶対を守るからね!」

「あたしも……だから、そんな顔しないでえ?」

「……そうね」

ハッピーとルージュの言葉を聞き、やっと顔を上げ少し気持ちの落ち着いた様子のシャルル。

3匹は顔を見合わせ、頷くとナデイとニチャの後を追い、部屋を出ると案内されるがまさに女王の元へと向かう。

女王の元へと向かう最中、ルージュたちの目に入ったその光景は……たくさんの猫が

歩き、会話をし生活をしている姿だった。

「猫の国だ……」

ぼそつと呟いたハッピーの声を聞き取ったナデイが前を歩きながら少し、後ろのルージユたちを振り返り口を開く。

「ぼきゆ達は猫じゃない……エクシードき」

人間の上に立ち、人間を導くエクシードだよ」

「エクシード……」

「そしてここはエドラスの王国、エクスタリア」

ナデイの話を聞きながらも、歩く足は止めず、そのままルージユ達は城の中へ入って行く。

「人間は酷く愚かで劣等種だからね……ぼきゆ達がきちんと管理してあげないと」

「っ……（そんなこと……）」

「その上、人間共は酷い香りだ」

ナデイに続き、顔を歪めニチャはそう言う。

「そして、女王様はここで人間の管理をしているんだ」

「女王様は素敵な香りさ」

先程までの嫌な表情が消え、誇らしげな表情を浮かべたニチャがまたそう続く。

「勝手に増え過ぎると厄介だからねいらない……人間を女王様が決めて殺しちゃうんだ」

「!!」

「……」

ナデイの言葉に驚くハッピーとただじつとナデイを見つめるルージュ。

「な……何でそんな事……」

ハッピーは気になり、ナデイに問いかける。

すると、ナデイはどこか誇らしげに……語り出す。

「失われつつある魔力を正常化する為だ……と、女王様は仰った

女王様はこの世界だけではなく、アースランドの人間も管理しておられるのだよ」

「なら……その女王様はどうして人間の死を決めれるのお?」

ハッピーに続き、どこか怪訝そうな表情を浮かべ、ルージュがナデイに問いかける。

だが、その問いにはナデイではなく、ニチャが答えた。

「女王様にはその権限がある……なぜなら、あの方は神なのだから」

ナデイの代わりにニチャが説明をした。

「神!?!」

「神って……」

ニチャの言葉に驚くハッピーとルージュ。

「私達の任務って何？」

「！」

「私には生まれた時から任務がすり込まれていた……女王の人間管理によって選ばれた、滅竜魔導士 ウエンディの抹殺……」

「え……？」

「シャルル……それはっ」

シャルルのその言葉にハッピーは驚き、ルージュはまさかと目を見張る。

「ど……どういふ事なの？ シャルル！」

ウエンディの抹殺って一体どういう事……なの……っ!？」

シャルルに問いかけながら、ハッピーはある事に気が付く……

シャルルにはウエンディの抹殺という任務がある……なら、自分は……？ と……

「あれ……それ、じゃ……オイラの、任務……て」

そして気がついてしまう……

ガクツと座り込むハッピーを横目に、シャルルは悲しそうに見つめる。

「……アンタは知らなくて幸せだったわね……ルージュも」

「ナツを……抹殺する任務に……!」

「ちがつ……!」

あまりのショックで体が震えるハッピーと何かを言いたげなルージユ。

「落ちつきなさい、オスネコ!!　メスネコも……私達は任務を遂行してないし、遂行するつもりもなかった!!」

……なのに、どうして完遂した事になっている訳!？」

このシャルルの言葉に目の前のニチャとナデイは驚いた表情を浮かべ、顔を見合わせた。

「記憶障害か?」

ニチャはナデイに問いかけ、ナデイも首を傾げる。そして、ふうとため息をつくとき苦笑を浮かべる。

「仕方ありませんよ…… “上書き” による副作用は未知数なのですから」

「つ……答えなさい!!」

ちゃんとした返答が戻ってこず、我慢の効かなかったシャルルがさらに声を張り上げ、疑念を投げかけると、ナデイがシャルルたちを見やう。

「ほきゅが説明するよ……」

女王様の人間管理に従い、6年前に100人のエクシードをアースランドへ送ったんだ……卵から孵ると滅竜魔導士を捜索し、抹殺するように“情報”を持たせてね

しかし状況が変わったんだ……

人間の作り出した“アニマ”が別の可能性を導き出したからね……それは、アースランドの人間を殺すのではなく……魔力として利用するというものだったんだ

中でも滅竜魔導士は別格の魔力になるみたいなんだよ

なので急遽、君達の任務を変更したんだ……

『滅竜魔導士を……連行せよ』と、ね」

「っ……!？」

「……う、そ……そんな」

ナデイの語る話によるあまりのショックに目を見開き、放心するハッピーとシャルル。

そして、嘘だそんな訳ない、本当は……とぶつぶつと呟き、俯くルージュ……。

そんな3匹の前に、やれやれと言った様子でため息をつくとなデイ。

「やはり、遠隔での命令上書きはうまく伝わらなかったようですね」

「しかし、お前達は滅竜魔導士を連れて来たのだから……魔力化は人間共に任せてある

そういうのは人間どもの方が得意だからな

そして、君たちは一番重要な任務も遂行したのさ」

「一番……重、要……な？」

「なに……それ」

「君たちは……彼女しか持ちえない歌魔法を使う、最強の滅竜魔導士を連行してきたのさ」

「「っーっー!?!」」

「……え、っ?」

身体を大きく震わせ、驚愕の表情を顔にするルージュたちの様子に気づかないのか、ニチャはさらに話を続ける。

「女王様の命令でもある……歌魔法を使いし最強の滅竜魔導士……その魔力は他の滅竜魔導士の何倍もの魔力を持つ……それを我々は人間共の持つ魔力化の力で半永久的な魔力供給源とするのさ!」

「そんな、なっ! それじゃあ……シクルは、シクルはっ!」

その力さえあれば他の魔導士に興味はない……そう言う、ニチャを前に……震えが止

まらないシャルルとハッピー、ルージュ。

「違う……私、は……自分の意志で……エドラ、スに……」

「ううん……君たちは命令を実行しただけだよ」

俯き眩くシャルルの言葉にナデイはそう言い放つ。

「皆を、助ける……為に、坑道へ……」

「気づいていなかったのかい？ ほきゆ達は誘導したんだよ……」

「私は……私はっ……ウエンデイが大好きだから……だから、守りたいって……」

「それは一種の錯覚だね、命令が『抹殺』から『連行』に……すなわち『殺してはいけない』と変更された事による……」

「うそだあああああああああつ!!!」

ナデイの言葉にシャルルは大粒の涙を流し泣きながら大きな声で叫ぶ。

そんなシャルルを見て、ハッピーとルージュの目からも涙が……だが、ルージュは身体のを抑えながらキツと目の前のニチャとナデイを睨むと……

「嘘だ!! あたしたちに……ううん、ハッピーたちにそんな任務、与えてなんかいないでしょお!! ほんとは……!!」

本当の……目的はっ……!!

「何を言っているんだい？ お前達の行動全ては私達の命令によるものだ……それは嘘偽りのない事実だ」

ニチャはシャルルとルージュを見て、そう言う。だが、ルージュはさらに声を上げる。「命令なんてないよお！ だって……だって、本当はっ！ この女王様にだって……そんな力、ない……（だって……ハッピーたちが向こうに送られた理由は……）」

「まったく……何度言ったら分かるんだい？ 君たちは女王様の命令により任務を……」

「そんなの……あたしは、信じないよお！」

ニチャの言葉を遮り、声を張り上げたルージュ。そして、ここまで一言も声を出さなかったハッピーが……立ち上がる。

「オイラ達は……オイラ達は、操り人形なんかじゃないぞっ!!!」

「っ……」

「オ……オス……」

「オイラ達は……妖精の尻尾の魔導士だああああっ!!!」

雄叫びを叫ぶハッピー見つめ、シャルルはただただ涙を流し……そして、ルージユはグツと拳を握ると……ハッピー同様立ち上がる。

「そうだよねえ……あたしたちは、妖精の尻尾の魔導士……お前達の命令には従わないよ!!」

「ハッピー……ルージユ……」

ハッピーとルージユは顔を見合わせ、頷くと片手ずつシャルルの手を握る。

「行くよ、シャルルっ!!」

「え……」

「!?!」

ハッピーとルージユはシャルルを立ち上がらせると、走り出す。

「ちよ……!?!」

「およよよよ……!!」

突然のハッピーとルージユの行動に驚くナデイとニチャ。

「絶対に……助けるんだ!!」

ハッピーは大声でそう言った。

「うん……絶対、今度こそ、離れたりなんかしないんだあ!!」

ルージユも力強い瞳をし、そう叫ぶ。

「こ……こ……これは……」

「墮天……地上の汚れに毒されてしまったエクシードは、墮天となる……っ！」

「おおおおおっ!!」

メエー……ン!!!!

墮天が3匹脱走!! 近衛師団!! 出撃いいいいいい!!」

逃げ出し、墮天となったルージユとハツピー、シャルル……シクルたちの救出を胸に誓うルージユたちだが……その心は、まだ……

69話 飛べ! 友の元へ!!

城から逃走したハッピー、シャルル、ルージュの3匹はエクシードの兵隊に追われながら街を駆けていた。

「はあ……はあ……!」

「ど、どいてどいてえー!!」

「お、追ってくるよお……!」

シャルルの手をハッピーとルージュが引つ張りながら街を駆け抜ける。

「あ……あれに隠れよう!!」

街を駆け抜ける中、視界の隅に映った藁の積まれた荷車に気づいたハッピーの思いつきで咄嗟にその中へと潜り込み、隠れる3匹。

3匹が隠れた瞬間、ドドドドドツ……!! と追手が通り過ぎる音が響く。

「……い、行つたみたいだよお」

暫く息を潜め、音が聞こえなくなるとそっと辺りを伺うルージュ。

「っ! あ……………」

「シャルルっ!!!」

一際大きな揺れで手が荷車から離れてしまうシャルル。

その体が浮き、荷車から投げ出されてしまう……

パシツーーー

「っ! あんたたち……………」

荷車から投げ出されたシャルルの手を咄嗟に掴むハッピーとルージユ。

「シャルルー!!」

「絶対! 離しちやダメだよお!」

シャルルの手を握り、必死に荷車から身体が放り投げ出されないよう踏ん張るハッピーとルージユ。

だが……

ガコツーーー

「えっ」

「っ!？」

「きゃあっ!」

荷車は岩にぶつかり、宙を舞う……そして

その勢いでハッピーたちの体は荷車から離れ、吹き飛ばされる。

「「うわあああああっ……!!」」

吹き飛ばされた勢いが消せず、地面をゴロゴロと転がるハッピーたちは丘となってい

た場所を超えたところでやつと止まる。

「うーん……」

「いったあ……」

「目が回ったよお……」

頭や体を抑えながら体を起こすハッピーたち。

そこでふと、シャルルは顔を上げ、目の前の光景に目を見張る。

「ちよ……ちよつと! ハッピー! ルージュ! あれを見て!!」

「あれ? 今……名前で……っ!」

「え……?」

ハッピーたちの目の前にあったもの……それは巨大な魔水晶が中に浮いている光景だった。

「魔水晶が浮いてる……!!」

「王都のより大きいよお!!」

「ええ……これが、ギルドのみんなね」

「あんな所にあつたんだ……」

ハッピーたちはただ驚くしかなかった。

「ね、ねえ！ 見て、ここに浮いてるよお!!」

魔水晶が浮いているのを見て、もしやと感じたルージユが自分たちのいる島をよく見るとこの島も宙に浮く島であることに気づいた。

ハッピーたちは島の端から下を見下ろす。

「王都があんな下にあるなんて……」

「つまり、こんな位置関係なのね」

自分たちのいる島よりずっと下に王都の国があることを知り、シャルルは近くにあった木の棒で簡単な図を描いた。

王都の上にエクスタリア、その横に巨大な魔水晶が浮いている、そんな感じであった。

「問題は……どうやって “王都” まで降りよう……」

「今の私達の “翼” が使えないし……」

「んー……」

翼の使えない自分達に悩むハッピーたち。

すると……

「おめえ達、オイラの畑で何しとるだ」

「!!」

後ろから誰かに声をかけられ、ハッピー達はすぐに振り向いた。

「しまった!!」

「っ……（あれ……この、エクシード……）」

「ははーん……兵隊共が探し回つとる “墮天” とはおめえらの事だな」

その声の主は毛は白く、田舎にいる様な格好をし、鍬を持った猫、いやエクシードであつた。

「……」

「……かーっ!!!」

目の前のエクシードはそう叫ぶと突然、鍬を振り回した。

「ひいひいっ!!」

「うひゃあっ!!」

そのエクシードの怒鳴りと行動にハッピーとルージユは驚き、怯む。

「出てけ出てけえええいっ!!!」

「あいいいいいっ!! ごめんなさい!!」

怒り爆発なそのエクシードに条件反射の如く、謝るハッピー。

そこに……

——荷車が転がっていったのはこの辺りか！

——探せっ！

——はっ。

ハッピーたちを追い、エクシードの兵たちがここまでやって来てしまったのだ。

「もう追ってきたの!?!」

「そんなぁ……」

「どうしよう……」

どう逃げ切るか……模索していると、再び……

「……かー……かー……っ!!!」

白いエクシードの叫び声が響いた。

「うぎやあつ!?!」

「ひやあああつ!?!」

「畑から出てけえええっ!!!」

「あいいいいい! すぐ出て行きます!!」

身体をビクビクと震わせ、冷や汗を流しながらそう返すハッピー。

「そしてウチへ来いっ!!!」

だが、目の前のエクシードはそう告げた。

その言葉にハッピーたちは目を点にし……驚き、啞然とする。

「え……?」

「……どゆことお？」

「……」

結局、あれよこれよとそのエクシードの家に連れてこられたハッピーたち……

ハッピーたちはひとまず落ち着くと、追われている訳を話した。

「あらあら、それは大変だったわね。」

そこに、そのエクシードの妻が現れた。

濃い緑色の頭巾をかぶり、白の服を着た青い毛のエクシードであった。

そのエクシードはふんわりとした笑みを浮かべながら、皿に盛った魚をハッピーたちに出してあげた。

「おじさん、おばさん……匿ってくれてありがとうございます」

「ありがとうおー!」

ハッピーとルージュはエクシードのおじさんとおばさんにお礼を言った。
が……

「かーーーーーっ!! 飯を食え!! めしっ!!」

「あいい!!」

「……ありがとう」

エクシードのおじさんの言葉に少し怯えながらも返事をするハッピーとルージユ。
そして、シャルルも小さくお礼を言う。

「まったく……フフ、ウチの人つてばね？」

王国の彼らとの考え方とソリが合わなくてね、昔追い出されちゃって……こんな所で暮らしているのよ」

「へえ……」

エクシードのおばさんの言葉に興味を持つハッピーたち。

「かーーーーーっ!! いらん事言わんでええわ!!」

「ふふふ、はいはい」

「そっか……それでオイラたちを……」

「助けてくれたんだねえ」

「ケツ、そんなんじやねえやい!! めし食ったらフロ入れー! かーーーーーっ!!」

「あ……あ……」

「や……やっぱり怖いよお……」

声は大きく怒っているのかと一瞬錯覚してしまうが……

その後、風呂から出たあとも……

「かーーーーっ!! これを着ろ!!!」

と、服を貸してあげたり……

「かーーーーっ!! この辺で勝手に休め!! かーーーーっ!!!」

と、エクシードのおじさんは怒鳴りながらも、ハッピーたちを休ませてくれた。

そして、ようやく落ち着きを見せ始め少し経った頃……

「ハッピーとシャルル、それにルージユって言うのね……素敵な名前ね

……アースランド生まれなんですよ？ 誰が名前つけてくれたの？」

エクシードのおばさんはハッピーたちのこれまでの事を聞いてきた。

「……ナツ……オイラの友達」

「私も、そう……友達（ウエンデイ……）」

「あたしは……」

一匹だけ、事情の違うルージユは口をもごもごと濁らせるが……おばさんはそれに気づかないのか、話をすすめ……

「そうなのね……」

と、呟いた。

「でも……その友達が、王都に捕まってるんだ……オイラ達、助けに行かないと」

ぐつと拳を握り、苦しそうに顔を歪めぽつりと零すハッピー……その姿にルージユやシャルルも苦しそうに俯く。

「……人間を、助けるのね」

「ええ……でも、エクスタリアではその考え方は間違っているのよね……」
悲観的になり始めているシャルルはそう呟くが……

「そんな事はないわ、素敵な事よ……とつても」

シャルルの言葉にエクシードのおばさんは違うと言った。
その言葉に少し顔を上げるハッピーたち。

「友達にエクシードも人間も関係ない……」

だつて見た目が違つても “大好き” っていう心の形は皆同じなのよ?」

「心の……形?」

「そう、大好きの中の形は……みんな一緒」

「……おばさん」

おばさんの言葉に少し肩の力が抜けてくるハッピーとルージユ。

だが……シャルルはそれでも辛そうな様子で

「私の心は……私じゃない、誰かによつて操られている……」

今……こうして話してる言葉さえ、私のものなのかどう……」

と、言った。

その言葉に反応をし、

「それはシャルルの言葉だよ！　シャルルの心だよ!!」

ハッピーがその声を上げた。

「オイラ達がみんなを助けたって心はオイラ達のものだ!!」

「……………そうだね……………みんなを助けたい……………この思いは、誰かに植え付けられた感情なんかじゃないよお……………あたしたちの心だよ、シャルル」

ハッピーとルージュはシャルルに向かいそう言う。

「ふふふ、そうね……………今はちよつと迷っているみたいだけど、きつと大丈夫よ……………こんな素敵な友達とナイト様が近くにいるじゃない？　ね？」

「え……………!!　ナイトさま……………／／／／／」

おばさんの言葉に顔が赤くなるハッピー。

「あなたは自分の心を見つけられる……………ううん、本当はもう持っているの……………

あとは気づけばいいだけなのよ？　“大好き”の気持ち……………信じて」

その言葉にシャルルは漸く顔を上げ、口を開く。

「おばさん……変わってるのね」

「そうかしら?」

悲しそうな笑みを浮かべながらシャルルは告げる。

「だって……エクシードはみんな、自分達を“天使”か何かのように思ってる……人間は劣等種だつて言つてた」

シャルルはニチャとナデイの言葉を思い出す。

「……昔はね、そういう考えだったわ……でも、子供を女王様にとられて……ね」

「!!」

「……子供」

その言葉にハッピーとシャルルは驚きを隠さなかった。

そして、ルージューはハッピーたちと違い、何か別のことを考えている様子を見せる。

「ドラゴンスレイヤー抹殺の計画とかで100人もの子供……卵を集められた

そして、自分の子供の顔も知らないまま……アースランドに送られてしまったの」

「「……」」

その言葉にハッピーとシャルルは啞然となる。

その100人の中に自分達もいる事と思えると……

「その頃からね、私達は神でも天使でもない……私達はただの『親』なんだって、気づいたの」

そしたら、人間だとかエクシードだとかどうでもよくなってきたわ……ウチの人も、

口は悪いけど私と同じ考えなのよ」

「か……っ！ くだらねえ世話してんじゃねーよ!!!」

おめえらも……いつまでいやがる!!!」

「アナタ……」

お婆さんの言葉におじさんが後ろから声を出してきた。

「辛気くせえ顔しやがってえ!! 生きてるだけで幸せだろーが!!!」

か……っ!! 甘えてんじゃねえぞおお!!

お役出てけ……っ!!!」

「アナタ……そんな急に……」

あまりに急な夫の言葉にお婆さんは止めようとするが……

「ううん……おじさんの言う通りだよ」

オイラ達早くみんなを助けにいかないと!

「うん……!!」

ハッピーの言葉に頷くルージユとシャルル。

「怯えたままじゃできる事もできねえんだ!! 最近の若えのはそんな事もわからねえのか!!」

「!」

おじさんの言葉を聞き……ハッピーの顔つきは少し変わる。

そして……

「ありがとう!! おじさん!! おばさん!!」

「か……っ!!」

二度と来んな……っ!!!
「」

「気をつけておいきー」

ハッピーたちは助けてもらったエクシードの二匹に別れを告げ、仲間を助けに行くとした。

「シャルル、ルージュ!! さっきのおじさんの言ってた言葉の意味……わかる?」
「うん……わかったよお」

「私も……私、エドラスに来て……物凄く、不安だった」

「うん……あたしも」

「あい!」

「でも……今は違う!!」

「進まなきゃいけないから……飛ばなきゃいけないから!!」

そう叫び、覚悟を胸にハッピーたちは崖の下から飛び降りた。

——私達はエクシード……この世界において唯一、体内に魔力を持つ者……魔法を使えなかったのは、心が不安定だったから……!

シャルルは心の中でそう呟いた。

そして、ハッピーたちは翼を出せた。

「行こう!! みんなを助けなきゃ!!!」

「あいっ!!」

シャルルの言葉に返事をするルージュとハッピー。

翼で前へと……王都へと飛び立つ中……ふと、

ルージュが後ろを振り返った……。

それは、ただただなんとなく……

その視線の先では……——

「っ……（やっぱり……やっぱり、おじさんとおばさんは……ハッピーの……）」

——そして……お母さんたちの……

元気だったんだ……良かった……

涙を流す二匹のエクシード……

その目には深い深い愛情がみてとれる……

——…いつか、あたしも……お母さんとお父さんに……会えるかな……

この騒動が解決したら……と、ある決意を一つ増やし、ルージュは力強く、翼を羽ばたかせる。

「か————っ!! ちゃんと飛べるじゃねーか……!」

「飛び方がアナタそっくりね」

おじさんとおばさんはハッピーの姿を見つめ、そう言った。

「バカ言うんじゃない!! 飛び方なんかじゃねえ……一目見りやア気がつくだろ!!!」

「そうね……あの白い娘、彼女かしら?」

おばさんは涙を出し、そう言った。

「かーーーーっ、女連れてくるなんて100年早エんだヨ!!」

「友達想いの優しい子に育ったね……」

「かーーーーっ、グスツ……あい……」

我が子を見て、嬉し泣きをする二匹の親が……そして

「それに……あの子……あの子も……元気だったのね」

オレンジの毛を持った女の子……

「ルージュちゃん……ルビィとラージュの……大きくなって……!」

「あい……っ!」

二匹の脳裏に蘇りしは、親友であった二匹のエクシード……そして、その腕に抱かれ

る……一匹の赤ん坊……

「また会いたいわね……」

「かーーーーーっ！ 会えるに決まったらア！ 必ず……!!!」

ハッピーたちが、心の迷いを消し去り、王都へと向かっている頃……王都地下のある所では……

「……あ、あの……セレーネさん？」

「んー？ なーに？」

地下牢に幽閉されていたダブルシクルたちであったが……今はその牢を抜け出し、地上への道を探し、王都の地下を移動していた。

その牢を抜け出した方法が……

「何故、そんなことが出来るのですか……?」

「ああ、これ?」

歩きながらシクルはポケットにしまった例のもの……長い針を取り出す。

牢の鍵をピッキングで開け、抜け出したのだ。

「昔ちよつとこれに縁があつてね! 何かの時のためにと思つて持つてたんだけど……役に立つてよかつたあ」

あははと、笑いながら言うシクルにエドシクルは少し呆れ気味の様子……

「つ……そ、それよりセレーネさん……本当に地上に出られるのですか?」

エドシクルの問いにシクルはんーつと少し首を傾げ

「分かんないけど……でもこつちから外の匂いがするの……多分、道は間違ってるはずよ」

と、告げた。

「そうですか……」

シクルの言葉に少し安心した様子のエドシクル。

その姿にシクルもほっと少し胸を撫で落とし……完全に、気を抜いていた……。

道を歩き続け、曲がり角の少し手前まで足を進めた時……

ピシッーードオオオオオオンッ
!!!!

「っ!? な……」

「ぎゃっ……!!」

突然、目の前の道が塞がれてしまう……そして

「これはこれは……お二人の歌姫様……」

どちらに……行かれるのですか？」

……え……

シクルたちの背後から聞こえたその声……

その声を聞いた瞬間……シクルは驚愕で目を見開き……ゆつくりと振り返る。

そして……

「つーー!!? (な、んで……まさか……コイツも、この世界に……!!?)」

それは……出来れば二度と、会いたくはない存在……

「ひっ……フオ……ンゼ、様……」

「ふふふ……いけませんねえ……脱獄なんて……さあ……もう一度、牢に戻っていただ
きましようか……囚われのお姫様……」

その声……その姿……その目を見た時……

シクルは、震えと恐怖で、周りが見えていなかった……

次の瞬間――

トンツ! と、強い衝撃が走り、シクルは意識が飛んでしまった……そして、最後には……隣にいたエドシクルも、倒れる光景が映っていた。

どうして……なんで……ここでも、私は……

弱い……私は……

……ナ、ツ……

70話 今……行くから!

エクシードの夫婦から元気を貰い魔法が使えるようになったハッピー達は王都へ向
け翼を広げ飛び続ける。

「んー! 飛べるっていいね! 気持ちいいよお」

「だねー! やっぱりこれでこそオイラ達! って感じだね!」

「あんた達……そんな呑気な事言ってる場合なのかしら……う?」

久しぶりに空を飛ぶ感覚を楽しむハッピーとルージュに呆れ顔ではあるが満更でも
ない様子のシャルルも翼^{エーラ}を羽ばたかせる。

そんな3匹の目線の先には既に城の様子が見え始めていた。

ルージュ達が城へと向かっている頃……城の塔の開けた窓からルーシイがエドラス
のエルザによって外へと吊るされていた。

「ちよ……!? ちよつとお!!」

「お前は……ここで死ぬんだ」

冷徹な表情でルーシイに告げるエドラスのエルザを見てルーシイはキツと睨むと
「エルザは無抵抗な人にそんな事しない!!」

エルザは優しいんだ!! そんな事……するもんか!!」
と叫ぶ。

だがエドエルザはそれを聞いても冷たく笑う。

「フツ……おめでたい奴だな貴様は……私は、人の不幸等は大好物だ

妖精狩りの異名の通り、妖精フェアリーテイルの尻尾の魔導士を何人も殺してやった……」

そう淡々と告げるエドエルザにルーシイは涙を溜め

「エルザの顔で……エルザの声で……そんな事、言うなっ……!」

先ほどより強く睨みつける。

ククツとエドエルザは笑うと

「じゃあな……ルーシイ」

そう告げ、ルーシイを城の窓から突き落とした。

「きゃあああああっ!!!」

ルーシイは恐怖でギユツと目を瞑る。

「ルーシイ……!!」

「!？」

大きな声が自分の名を叫ぶのが聞こえ目を開けると……

「ハッピー! ルージュ! シャルル!」

ハッピー達がいた。彼らを見てルーシイは笑顔を浮かべる。

「エクシード……」

「もう大丈夫! オイラが助けに来たから!!」

そう言いながらルーシイをキャッチしようとしたハッピーは勢い余りルーシイを通り過ぎ……

「にびやあ!？」

壁に激突した。

「ハッピー……大丈夫う？」

「ありがと………てか、あれ? あんた達羽が……」

ハッピーがキャッチしそこなつたルーシイはルージュとシャルルが無事掴み上げていた。

こちらに来てから一度も使えなかった翼を広げて飛んでいるハッピー達を見て首を傾げるルーシィにシャルルが照れたような表情で

「心の問題だったみたい」

と説明した。

「久しぶりで勢いつけすぎちゃったあ」

「ハッピーらしいねえ」

ハッピーも加わりルーシィを掴みエドエルザの元まで上昇する。

「……これは一体……その女は女王様の命令で抹殺せよと……」

困惑した様子でエドエルザはエクシードとルーシィを見る。

「命令撤回よ」

エドエルザを見下ろすシャルルが告げる。

「し……しかし、いくらエクシードの直命でも女王様の命令……覆す権限はないはずで
は。」

そう言うときシャルルをギロツと睨むエドエルザは

「その女をコチラにお渡し下さい」

と命令するように告げる。

その眼光にハッピーやルージユは少し体を強ばらせる。

だがシャルルは冷静な表情でエドエルザを見下ろすと

「頭が高いぞ、人間」

「私を誰と心得る? 私は女王^{クイーン}シヤゴツトの娘、「エクスタリア王女」シャルルであるぞ」

と威厳あるオーラを出し告げた。

「ええ!」

「シャルルが……王女様?」

「なっ……」

シャルルの突然の告白にルーシィとハッピーは驚きの声を上げルージユはシャルルを見つめ目を見開く。

そしてエドエルザは驚愕に目を丸くすると……

ザツ!と素早くシャルルの前で膝をつく。

「はっ! 申し訳ありません!!」

「答えなさい、ウエン……3人の滅竜^{ドラゴンスレイヤー}魔導士はどこ?」

危うくウエンデイの名前を言いかけたシャルルは呼び方を言い直しエドエルザに問う。

「はっ……2人は西塔の地下に、1人は……歌姫は恐らく北塔の拷問部屋に……」

「拷問部屋!?なんでそんなところに!?!」

歌姫の単語にシャルル達の脳裏に浮かぶのは綺麗な歌声で皆を癒す力を持つシクルだ……

「はい……牢獄を脱獄した為地下にある拷問部屋に連行されました……」

「今すぐ全員を解放しなさい」

「そ、それだけは……私だけの権限ではなんともなりません」

シャルルの命令にエドエルザは冷や汗を浮かべそう伝えた。

思った通りの返答がないことにシャルルはギョツと手を強く握り

「言うことが聞けないの? いいから今すぐ!解放しなさい!!」

と怒声を上げる。

「はっ!しかし……」

「エルザ!!!」

あと少しでエドエルザは完全にシャルルの威圧に負け命令に従う……その瞬間だった。

体の大きいエクシード……王国軍所属部隊長であるリリーがエドエルザに駆け寄る。

「その3匹のエクシード達は墮天だ!!エクスタリアを追放された者共だ!!」

「何!?!」

「何あいつ!!あんた達の仲間!?!」

リリーの姿を見てハッピー達に問いかけるルーシイだが

「ええ!?!よ、よく分かんないけど……多分違うと思う!あんなゴツイエクシードにいなかった!!」

「絶対いなかったよお!」

首を振り見たことないことを強調させるハッピーとルージュに悔しそうに表情を歪め

「早く逃げるわよ!!」

とルーシイを掴みながらその場を逃げる。

暫くして王国軍の目から隠れられる様な場所を見つけ身を潜めていると

「ありがとう……3人共」

とルーシイが言った。

「……怒つてないの？」

お礼を言われたシャルルがそう聞くと

「え……何を？」

と首を傾げるルーシイ。

「だって……捕まっちゃったのは私達の、せいだし……」

耳を垂らしそう言うシャルルに苦笑を浮かべながらも優しい表情で

「でもこうやって助けに来てくれたじゃない……ね？ハッピー、シャルル、ルージュも」

とルーシイは笑う。

そんなルーシイを見てもハッピーとルージュの表情も晴れる様子はなく

「ごめんね、ルーシイ……」

「ごめんなさい……」

と謝る。

「だからそんなに怒つてないってば！ね？」

とルーシイは言ったところでシャルルを見ると

「それよりあんた……女王様の娘って事の方が驚きなんですけど……」
と言った。

「オイラもーびつくりしたよ」

とハッピーが同調していると

「え? 気づいてなかったのお? あれ、シャルルのはったりだよ、ねー?」

とにつこりと笑いシャルルを見てそう言ったルージュにシャルルはふんつとそつぽを向くと

「当たり前でしょ」

と言った。

「ええ!」

ルーシイとハッピーはさらに驚きの声を上げる。

そしてハッピーもルージュと同じ様にこーつと笑顔を見せる。

「何よその顔は? ハッピー」

「いやあいつもものシャルルだなあって、思ってね」

「さすがシャルルって感じだねえ」

ハッピーに便乗してシャルルにそう言うルージュ

「ちよつと何よ、ルージュまでそんな顔で……変なの」

「……（あれ？今……）」

仲良さげに会話をするハッピー達の言葉の中で何か引つかかったルーシイは首を傾げた後……

（名前……ハッピーとルージュって……）

シャルルの変化に気づき、3匹に気づかれないようにつこりと笑顔を浮かべた。

「そんなことより早くウエンディ達を助けに行つた方がいいんじゃないかしら？」

気を引き締めるように言つたシャルルの言葉にルーシイ達も真剣な表情を浮かべる。

「1人は拷問部屋にいて言つてたわね……それって」

エドエルザの言葉を思い出すルーシイ。

「多分シクルの事だよ……歌姫って言つてたよあのエルザ」

ハッピーの言葉にルーシイとシャルルが頷く。

すると……

「……あたし、助けに行つてくるよ」

とルージュが言つた。

「まさか……ルージュ1人で行く気!?危ないわ!」

ルージュの言葉に驚き止めるルーシイ。

そしてハッピーもまた

「そうだよ!何かあるかわからないんだよ!?!みんなで行ったほうがいいよ!」
とルージュを止める。

だが……

「ううん……あたし一人で行くよ、その方が隠密に動けると思うの
それに……」

ルージュはそう言うときクルがいるであろう方向を見つめ……

「シクルが呼んでる気がするんだ……」

と呟いた。

ルージュはそう言うとき「ナツ達の方は任せたよ!」と言って2人が止めるのも聞かず
飛び立ってしまった。

「ルージュ待って!!……もう!」

「1人じゃ心配だよ……」

ルーシイとハッピーが不安そうにルージュを見つめる。

そんな2人に

「大丈夫よ……ルージュは」

と、ただ1人止めなかったシャルルが言った。

「あの子……語尾が伸びてなかった……きっと大丈夫」

シャルルは自分にも言い聞かせるようにハッピーとルーシイにそう言う。

「私達も早くウエンデイとナツの所へ行きましょ！」

「……大丈夫……大丈夫だよね？……シクル……」

「……待っててね、今……行くから！」

ー
……ルージユ……

ー
……ナツ……

助けて……

71話

黒いシクル

……暗い……暗い……私……

北の塔へとルージユが向かう頃……シクルは自分の意識が暗く落ち混濁している感覚を感じていた。

何をしていたのか……考える。

そんなシクルに……激痛が走った。

「!? ぐうああああああアアアア!!?」

身体に走る電流と高熱の痛みに悲鳴を上げる。

そして……

「うああああっ……………（あ……………思い……………出し、た）」

—— 私……………あいつに捕まって……………

「……………つつ!!はっ……………はぁ!」

痛みが止んだシクルは乱れた呼吸を繰り返す。

そんなシクルの身体にはいくつもの管と頭にはよく分からない機械が被せられていた。

被せられている機械でシクルの視界は遮られ何も見えていない状態だった。

そんなシクルが今頼りになるのは……………嗅覚と聴覚

「フェツフェツ……………アナタも馬鹿な人ですねぇ……………あのまま牢獄にいればまだこれほどまでの苦痛を味わうこともなかったであろうに……………」

「つ……………（この声……………）何……………が、目的?もう一人の……………私は、どこ……………?」

シクルは聞こえてきた声に途切れ途切れの声で問う。

「はて……………もう一人……………アア、彼女なら別の部屋で罰を受けとるよ……………まったく……………同

じ人間は同じ思考なのですかねえ……」

年老いた老人の声……シクル達を捕えた男が言ったことにシクルはギリツと歯ぎしりを鳴らす。

「なんで……なんで、私達に……そこまで拘るの……？お願い……私は、どうなつてもいいから……こつちの世界の私を、解放してっ！」

「それはなりませんあ……あなたがたの他者を癒しそして力を高めるその力、その力を手放すなど……」

シクルの願いは聞き入れられず男……フオンゼはそう言い嗤う。

その言葉にシクルは悔しそうに表情を歪め

「どうして……なんで……いつも……こつちの、お前も……なんでいつも……！」

私の力を利用しようとするんだっ……！」

シクルの悲痛な声を聞いても何も感じないのかそれどころか可笑しそうに更に嗤うフオンゼは

「フェツフェ……うるさい小娘ですな……その口がいつまで続くでしょうかねえ……」
と言うと再びシクルに繋がれた機械に手を伸ばし……

「次与える苦痛に……貴方は耐えられるか？耐えられぬか……見物ですな」

「!?ま……待って！やめ……！」

先程までの力が次流れては……流石に回復も間に合わずどうなるか分からない……シクルは必死に止めるよう訴える。
だが、その言葉は届かず……

シクルの身体に再び電流が流れる。

「うああああアアああアッ?!?!」

「更に出力を上げた物です……これに耐えられる力を持っているか……」

悲鳴をあげるシクルを見て愉しそうに嗤うフォンゼ……その姿が薄れゆく意識の中嫌に鮮明に見えた……

……なんで……どうして……

私は……私の力は……こんな……

こんな事の為に……あるんじゃない……

私の力……私の力は……!

ワタシ……ダケノモノ……ワタサナイ

「うゝあゝあゝアアアあゝあゝアアア!!!」

シクルの悲鳴が変化し始め……突然、シクルの体から強大な力が溢れ始める。

それを見てフォンゼは目を見開き

「な……なんじゃ!?何が……!?」

驚きの声を上げるがシクルへの攻撃は止めずそれどころか……さらに出力を上げ始める。

バチバチバチツーーー!!

「ぐああアゝアゝああアツアゝアゝアゝアゝアアツ」

怖い……私……私は……何、か……

助けて……怖い……助けて……ナツっ!!!

皮膚が焼け焦げたような臭いが漂い始める……そしてシクルにも更なる変化を与え
……

一瞬……シクルから溢れ出ていた力がふつと静まる。
それを見てフォンゼはニヤツと笑みを深めた……だが

カッーカッー

シクルの体から今まで以上の力が放出された瞬間、シクルを拘束していた機械は一瞬
で吹き飛ぶ。

その力は近くにいたフォンゼをも吹き飛ばす。

「ぬおおおあつ!? な、なん……!?」

突然の衝撃に驚き顔を上げる。

その目には……

「……………カえ、セ……………」

黒髪へと変化し目は虚ろな少女……そして更に……

「なん……じゃ？その顔のアザは……」

シクルの顔には左目を中心に黒い何かの模様のよう広がっていた。

フォンゼの問いにシクルは全く反応した様子を見せず、ただ一点を虚ろな瞳で見つめ続ける。

そして……ゆつくり……フォンゼへとその目を向ける。

「……カエ、せ……」

ゾクツーーー

「ヒツ……」

シクルに異変が起きる少し前……シクルを助けに向かったルージュは

「ううー……見張りが多いよお……」

小さな身体を使い警備兵の目を掻い潜り北の塔の地下に繋ぐ階段であろう所までは近づいていた。

が……

「むう……（さつきより兵が多い……やっぱりこの下にシクルがいるのかも……）」

兵隊の数は増えておりまた異様な空気をルージュも感じていた。

どうすれば進めるか……考えていると

ゾワツーー

「な……なに……」

突然感じる、巨大な魔力の放出……ふと、その発生場所とその感覚に覚えを感じる。

「……シクル？」

暴走した時に……似てる？

「怖い、けど……うん！迷ってる暇はないねえ！」

自分を奮い立たせるように頬を1度バチツ！と叩くとルージュは翼エーラをめいっばい使いトツプスピードを出す。

「なんだ!？」

「侵入者だ！捕らえろ！」

飛び出したことにより見張りの兵に気づかれるが……

「強行突破アーーーーー!!!」

「「うわあ!!」」

MAXスピードのルージュに見張りはついていけず……ルージュは勢いのまま地下深くへと飛ぶ。

そして、見つけた……

大きく少し古びた扉を。

「シクルーーーーー!!」

バーン！と扉を体当たりで突破する。

ルージュの視界に入った光景それは……

「……………シ、クル……………」

ボロボロで壁に埋まる男、フォンゼの姿と少し俯き顔は見えないが様子が普段と違うシクルだった。

ルージュは様子のおかしいシクルを見て一瞬息を呑む。

だがやっと会えた事が嬉しく小さく笑みを浮かべ声をかける。

「シクル……アタシ、ルージユだよオ？助けに来たんだ……大丈夫？……シクル？」
そう言いシクルに近づくとルージユはシクルの手に触れようと手を伸ばす。

その時——

ドンツ——!!!

「きゃあつ!？」

シクルに触れようとしたルージユはシクルから放たれた衝撃で身体が吹き飛ぶ。
壁に身体を打ち付け痛む身体を起こしシクルを見ると

「シ……シクル?」

顔の左半分には黒い模様が浮かび普段とは全く違う表情で自分を見つめるシクルがいた。
た。

「ど……どうしたのオ？それ……顔、何があったの……シクル?……アタシの事……分かる?」

ルージユが話しかけるがシクルは全く表情を変えずただルージユを冷たく見つめていた。

そして

ゆっくりとシクルは左手を上げルージュユに向ける。

黒い光がシクルの手に集まり……

「……カえ、セ……………に、ゲて…………」

「え…………」

シクルの手から放たれた黒い光は真っ直ぐルージュユへと向けられ…………爆発した…………。

爆発の煙が晴れるとルージュユがいた所はボロボロに崩れていた。

シクルは冷たい瞳で崩れた壁を見つめる。

そんなシクルの耳に小さな呻き声が届く。

声のした方にゆっくりと顔を向けると……

「……………う……………」

「…………大丈夫か？」

「…………え？」

消し飛んだと思われたルージユを抱え助けたのは……ニツと笑みを浮かべる桜髪の男……ナツだった。